鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（68）

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ

上　野　城　跡

川内市百次町上野

２００４年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

上野城跡全景と川内市街地を臨む

遺構全景（真上から）

序　文

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う発掘調査は，西鹿児島駅緊急整備事業に伴う調査として平成５年に開始しましたが，諸般の事情で中断し，平成８年度から再開しました。

建設計画内の遺跡は鹿児島市から出水市まで２１か所があり，関係機関との協議の結果，事前の記録保存調査を実施し，平成１３年５月に全ての発掘調査が終了しました。

本報告書は２１か所の遺跡のうち川内市に所在する上野城跡の発掘調査結果の記録です。

上野城跡は，別名「百次城」と呼ばれる中世の城ですが，調査の結果，旧石器・縄文・古墳・古代・中世・近世の各時代が複合された遺跡であることが判明しました。中でも中世の遺跡は，１２～１３世紀の掘立柱建物跡３２棟，溝７条等が発見されたほか，大量の白磁等の遺物も出土し，ここが中世期の拠点であったことが分かりました。

そして，当センターはここに「上野城跡」として旧石器時代から近世までの調査結果をまとめました。この報告書が県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただく一助となれば幸いです。

発刊にあたり，鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局をはじめ，ご協力をいただいた川内市の関係部局，関係機関，そして，調査に携わった方々に対し，厚くお礼申し上げます。

平成１６年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　木　原　俊　孝

報　告　書　抄　録

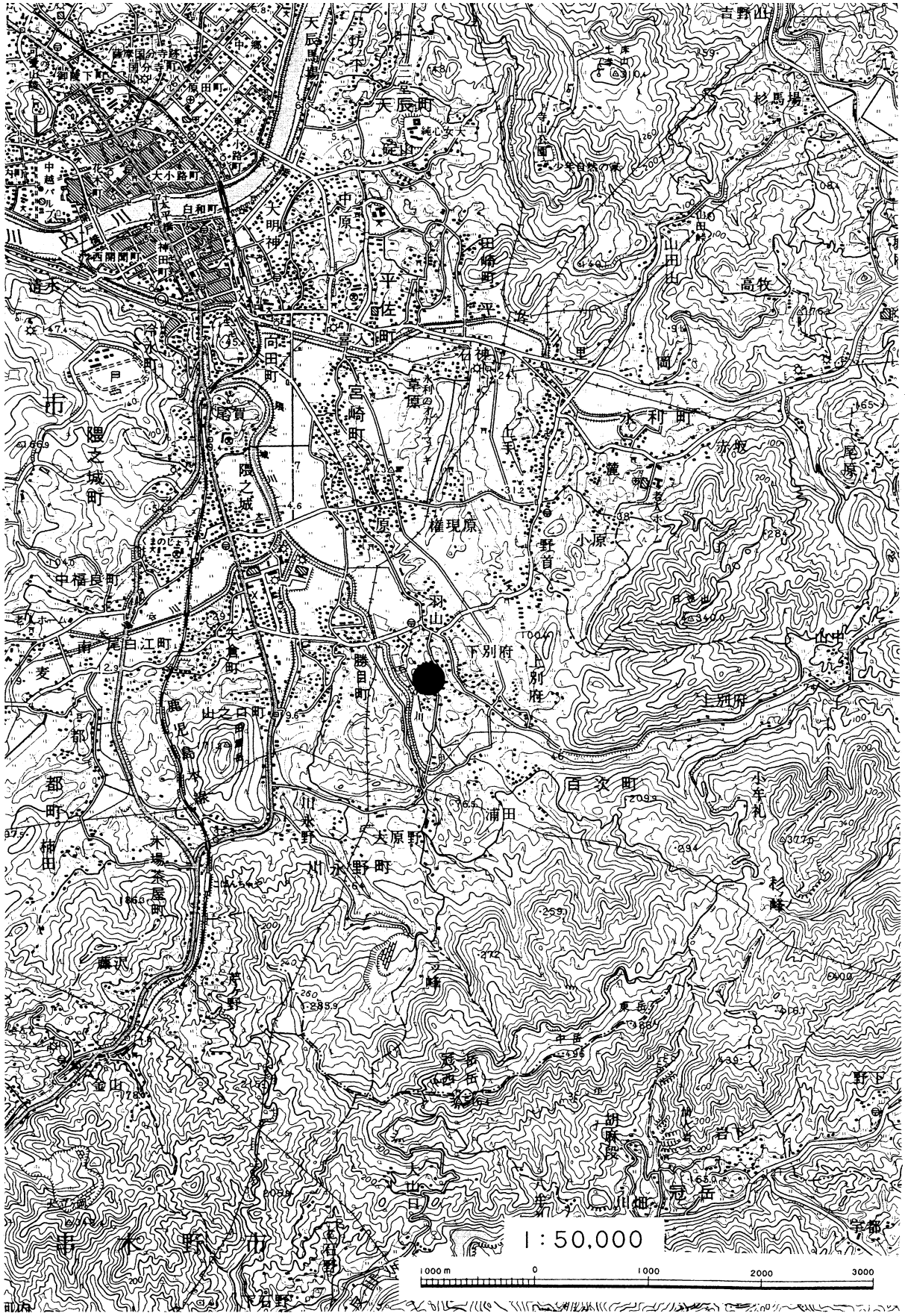
ふりがな	うえのじょうあと
書　　名 副　書　名	上野城跡 九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	Ⅸ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	６８
編著者名	彌榮久志
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4661 鹿児島県国分市上之段 1175 番地１　℡0995-48-5811
発行年月日	２００４年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村	遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
上野城跡 うえのじょうあと	鹿児島県 かごしまけん 川内市 せんだいし 百次町 ももつぎちょう 上野 うえの			31° 46′ 45″	130° 19′ 50″	H11.12.1 ～ H12.3.24 H12.5.1 ～ H13.3.29	19,400	九州新幹線鹿児島ルート

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	
上野城跡	集落 散布地	旧石器時代 縄文時代 古墳時代 古代 中世 近世	落とし穴 掘立柱建物跡 方形竪穴状遺構 土壙墓 土坑 溝 古道	剥片尖頭器 ナイフ形石器 押型文土器 石坂式土器 阿高式土器 黒川式土器 石鏃・石匙 磨製石斧 石皿・磨石 土師器 白磁・青磁 中世須恵器・瓦器 中国陶器 短剣・鉄鏃・釘・鈴 その他鉄製品 青銅製鈴・その他青銅製品	

例　　言

1　本報告書は，九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2　本報告書に掲載した遺跡は，上野城跡の記録である。
3　本遺跡は，鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局の委託を受けて調査したものである。
4　本報告書は，平成１５年度の報告書作成として実施したものである。
5　遺物番号は通して付してある。
6　挿図と図版の遺物番号は一致する。
7　挿図の縮尺は，各図ごとに示している。
8　本遺跡に記載した高さは，海抜絶対高である。
9　本遺跡の執筆及び編集は彌榮が行った。
10　自然科学分析調査は，（株）古環境研究所に依頼した。
11　出土遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示活用する計画である。


天辰町
中原
平佐
喜入町
宮崎町
隠之城町
中福良町
南都町
都町
柿田
麦
白江町
矢倉町
勝目町
鹿児島本線
川内川
川内市
川内駅
永利町
赤牧
尾原
高牧
山田
下別府
上別府
百次町
浦田
川永野町
木場茶屋町
金山
大世日
冠岳
1:50,000
1000 m
0
1000
2000
3000

上野城跡の位置図

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査の経過　1
　第１節　調査に至るまでの調査　1
　第２節　調査の組織　1
　第３節　調査の経過　2
　　１　平成 11 年度の調査　2
　　２　平成 12 年度の調査　3
　　３　整理作業　5
　　４　発掘調査全体の経過と成果　6
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境　9
　第１節　遺跡の位置及び立地　9
　第２節　周辺遺跡　9
第Ⅲ章　調査の概要　13
　第１節　調査の基本計画　13
　第２節　遺跡の層序　14
　第３節　遺構と遺物　19
　　１　旧石器時代　19
　　（１）経過及び遺構と遺物の出土状況　19
　　（２）出土遺物　20
　　２　縄文時代　23
　　（１）　遺構　23
　　（２）　出土遺物　23
　　３　古墳時代　30
　　（１）遺構　30
　　（２）出土遺物　30
　　ア　甕形土器　30
　　イ　壺形土器　35
　　ウ　高坏・手づくね製品　35
　　４　古代　36
　　（１）　遺構　36
　　（２）　遺物　36
　　ア　甕形土器　36
　　イ　坏　36
　　ウ　埦　38
　　エ　須恵器　38
　　５　中世　40
　　（１）遺構　40
　　ア　掘立柱建物跡　45
　　①　掘立柱建物跡１　45
　　②　掘立柱建物跡２　47
　　③　掘立柱建物跡３　48
　　④　掘立柱建物跡４　49
　　⑤　掘立柱建物跡５　50
　　⑥　掘立柱建物跡６　52
　　⑦　掘立柱建物跡７　53
　　⑧　掘立柱建物跡８　54
　　⑨　掘立柱建物跡９　55
　　⑩　掘立柱建物跡 10　56
　　⑪　掘立柱建物跡 11　58
　　⑫　掘立柱建物跡 12　59
　　⑬　掘立柱建物跡 13　60
　　⑭　掘立柱建物跡 14　61
　　⑮　掘立柱建物跡 15　63
　　⑯　掘立柱建物跡 16　64
　　⑰　掘立柱建物跡 17　66
　　⑱　掘立柱建物跡 18　67
　　⑲　掘立柱建物跡 19　67
　　⑳　掘立柱建物跡 20　69
　　㉑　掘立柱建物跡 21　70
　　㉒　掘立柱建物跡 22　71
　　㉓　掘立柱建物跡 23　73
　　㉔　掘立柱建物跡 24　74
　　㉕　掘立柱建物跡 25　75
　　㉖　掘立柱建物跡 26　77
　　㉗　掘立柱建物跡 27　78
　　㉘　掘立柱建物跡 28　79
　　㉙　掘立柱建物跡 29　80
　　㉚　掘立柱建物跡 30　81
　　㉛　掘立柱建物跡 31　82
　　㉜　掘立柱建物跡 32　84
　　イ　方形竪穴遺構　85
　　①　方形竪穴遺構１　85
　　②　方形竪穴遺構２　87

③　方形竪穴遺構３　87
④　方形竪穴遺構４　89
⑤　方形竪穴遺構５　93
ウ　土坑　93
①　土坑Ⅰ　93
②　土坑ⅡＡ類　101
③　土坑ⅡＢ類　102
④　土坑ⅡＣ類　102
エ　焼土　108
オ　畠跡　112
カ　溝　113
キ　柱穴遺構　121
（２）遺物　125
ア　白磁　125
①　白磁（１）　125
②　白磁（２）　125
③　白磁（３）　125
④　白磁（４）　125
⑤　白磁（５）　129
⑥　白磁（６）　129
⑦　白磁（７）　130
⑧　白磁（８）　130
⑨　白磁（９）　131
⑩　墨書磁器　131
イ　青磁　131
①　青磁（１）　131
②　青磁（２）　131
③　青磁（３）　134
④　青磁（４）　134
⑤　青磁（５）　135
⑥　青磁（６）　135
⑦　青磁（７）　136
⑧　青磁（８）　136
⑨　青磁（９）　136
⑩　青磁（10）　137
⑪　青磁（11）　137
ウ　染付　138
①　碗　138
②　皿　139
③　小碗・蓋・二次加工品　141
エ　陶器　141
①　貿易陶器　141
②　常滑　143
オ　中世須恵器　143
カ　瓦器質土器　145
キ　土師器　148
①　土師器埦　148
②　黒色土器Ａ埦　148
③　坏　153
④　小皿　156
⑤　黒色土器Ｂ　156
⑥　土師特殊品　159
ク　石鍋　160
ケ　滑石製品　162
コ　砥石　162
サ　石製品　164
シ　金属製品　164
６　近世　168
（１）遺構　168
（２）遺物　169
ア　磁器　169
イ　陶器　169
第Ⅳ章　科学分析等の結果　200
第１節　川内市上野城跡出土のウマ遺体　200
第２節　上野城跡出土種実の同定　204
第３節　上野城跡における自然科学分析　208
１　放射性炭素年代測定　208
２　植物珪酸体分析　209
３　花粉分析　217
４　種実同定　222
５　リン・カルシウム分析　223
第Ⅴ章　まとめ　225

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置及び周辺遺跡　12
第２図　上野城跡の地形と調査範囲　13
第３図　上野城跡の基本的層序　14
第４図　上野城跡の南北断面１　15
（D―２～５区，C―８～９区）
第５図　上野城跡の南北断面２　16
（C―10～13 区）
第６図　上野城跡の東西断面　17
（C～F-8 区，B-3･4 区，B～C-5 区）
第７図　上野城跡の山部断面図　18
（G―16～18 区，F～G-17・18 区，第 6 トレンチ）
第８図　旧石器時代の出土分布　19
第９図　Ｅ・Ｆ－３区の出土状況　19
第 10 図　旧石器時代の土坑　20
第 11 図　旧石器時代の出土遺物（１）　21
第 12 図　旧石器時代の出土遺物（２）　22
第 13 図　縄文時代の土坑（落とし穴）　23
第 14 図　縄文時代の出土遺物（１）土器　25
第 15 図　縄文時代の出土遺物（２）石器１　26
第 16 図　縄文時代の出土遺物（３）石器２　27
第 17 図　縄文時代の出土遺物（４）石器３　27
第 18 図　縄文時代の出土遺物（５）石器４　28
第 19 図　縄文時代の出土遺物（６）石器５　29
第 20 図　古墳時代・古代の土坑　31
第 21 図　古墳時代の出土遺物（１）甕１　32
第 22 図　古墳時代の出土遺物（２）甕２　33
第 23 図　古墳時代の出土遺物（３）壺１　34
第 24 図　古墳時代の出土遺物（４）壺２　35
第 25 図　古墳時代の出土遺物(5)高坏・手づくね　36
第 26 図　古代の出土遺物（１）甕　37
第 27 図　古代の出土遺物（２）坏・埦　38
第 28 図　古代の出土遺物（３）須恵器　39
第 29 図　中世遺構全体配置　41
第 30 図　掘立柱建物跡１と出土遺物（１）　46
第 31 図　掘立柱建物跡１の出土遺物（２）　47
第 32 図　掘立柱建物跡２　48
第 33 図　掘立柱建物跡３　49
第 34 図　掘立柱建物跡４　50
第 35 図　掘立柱建物跡５　51
第 36 図　掘立柱建物跡６と出土遺物　52
第 37 図　掘立柱建物跡７　54
第 38 図　掘立柱建物跡８と出土遺物　55
第 39 図　掘立柱建物跡９　56
第 40 図　掘立柱建物跡 10 と出土遺物　57
第 41 図　掘立柱建物跡 11 と出土遺物　58
第 42 図　掘立柱建物跡 12　59
第 43 図　掘立柱建物跡 13 と出土遺物　61
第 44 図　掘立柱建物跡 14　62
第 45 図　掘立柱建物跡 15　63
第 46 図　掘立柱建物跡 16　64
第 47 図　掘立柱建物跡 16 の出土遺物　65
第 48 図　掘立柱建物跡 17 と出土遺物　66
第 49 図　掘立柱建物跡 18 と出土遺物　67
第 50 図　掘立柱建物跡 19 と出土遺物　68
第 51 図　掘立柱建物跡 20 と出土遺物　69
第 52 図　掘立柱建物跡 21 と出土遺物　71
第 53 図　掘立柱建物跡 22 と出土遺物　72
第 54 図　掘立柱建物跡 23　73
第 55 図　掘立柱建物跡 24 と出土遺物　75
第 56 図　掘立柱建物跡 25 と出土遺物　76
第 57 図　掘立柱建物跡 26　77
第 58 図　掘立柱建物跡 26 の出土遺物　78
第 59 図　掘立柱建物跡 27　79
第 60 図　掘立柱建物跡 28　80
第 61 図　掘立柱建物跡 29　81
第 62 図　掘立柱建物跡 30 と出土遺物　82
第 63 図　掘立柱建物跡 31 と出土遺物　83
第 64 図　掘立柱建物跡 32　84
第 65 図　方形竪穴遺構１と出土遺物（１）　86
第 66 図　方形竪穴遺構１の出土遺物（２）　87
第 67 図　方形竪穴遺構２と出土遺物　88
第 68 図　方形竪穴遺構３と出土遺物　89

第69図　方形竪穴遺構４　90
第70図　方形竪穴遺構４の出土遺物　91
第71図　方形竪穴遺構５と出土遺物（１）　92
第72図　方形竪穴遺構５の出土遺物（２）　93
第73図　土坑配置　94
第74図　Ⅰ区Ⅰ類の土坑（１）　96
第75図　Ⅰ区Ⅰ類の土坑（２）　97
第76図　Ⅱ区Ⅰ類の土坑　98
第77図　Ⅲ区Ⅰ類の土坑　99
第78図　Ⅳ区Ⅰ類の土坑　100
第79図　土坑Ⅱ類Ａ　103
第80図　土坑Ⅱ類Ｂ・Ｃ　104
第81図　土坑Ⅱ類Ｃ　105
第82図　土坑Ⅰ・Ⅱ類の出土遺物（１）　106
第83図　土坑Ⅰ・Ⅱ類の出土遺物（２）　107
第84図　焼土（１）　109
第85図　焼土（２）　110
第86図　焼土の出土遺物　111
第87図　畠跡Ⅰの全体図　112
第88図　畠跡の出土遺物　113
第89図　畠跡Ⅰ－２（第２畝間）　114
第90図　畠跡Ⅰ－２（第１畝間）　115
第91図　畠跡Ⅱ　116
第92図　溝１　117
第93図　溝２・３　118
第94図　溝４・５　119
第95図　溝１～６の出土遺物　120
第96図　同一遺構柱穴内の出土遺物　121
第97図　柱穴内出土遺物　（１）磁器　122
第98図　柱穴内出土遺物　（２）陶器　122
第99図　柱穴内出土遺物　（３）土師器埦　123
第100図　柱穴内出土遺物（4）土師器坏小皿　124
第101図　柱穴内出土遺物（5）中世須恵器瓦古銭　124
第102図　白磁（１）　125
第103図　白磁（２）－１　126
第104図　白磁（２）－２　127
第105図　白磁（２）－３　128
第106図　白磁（３）　128
第107図　白磁（４）　129
第108図　白磁（５）　129
第109図　白磁（６）　129
第110図　白磁（７）　130
第111図　白磁（８）　130
第112図　白磁（９）　131
第113図　墨書磁器　131
第114図　青磁（１）　132
第115図　青磁（２）　133
第116図　青磁（３）　134
第117図　青磁（４）　134
第118図　青磁（５）　135
第119図　青磁（６）　135
第120図　青磁（７）　136
第121図　青磁（８）　136
第122図　青磁（９）　136
第123図　青磁（10）　137
第124図　青磁（11）　138
第125図　染付碗　139
第126図　染付皿　140
第127図　染付碗・蓋・メンコ　140
第128図　貿易陶器　142
第129図　常滑　143
第130図　中世須恵器（１）　144
第131図　中世須恵器（２）　145
第132図　瓦器質土器（１）　146
第133図　瓦器質土器（２）　147
第134図　瓦器質土器（３）　148
第135図　土師器埦　149
第136図　黒色土器Ａ埦（１）　150
第137図　黒色土器Ａ埦（２）　151
第138図　黒色土器Ａ埦（３）　152
第139図　土師器坏（１）　153
第140図　土師器坏（２）　154
第141図　土師器坏（３）　155
第142図　土師器坏（４）　156

第143図　土師器小皿（1）　157
第144図　土師器小皿（2）　158
第145図　黒色土器B坏・小皿　159
第146図　土師特殊品　160
第147図　石鍋　161
第148図　滑石製品　162
第149図　砥石　163
第150図　石製品　165
第151図　鉄製品（1）　166
第152図　鉄製品（2）　167
第153図　鉄製品(3)と銅･鉛製品　168
第154図　近世白磁　169
第155図　近世陶器　170
第156図　中世遺構第A期想定配置　231
第157図　中世遺構第B期想定配置　232
第158図　中世遺構第C期想定配置　233

表　目　次

第1表　周辺遺跡一覧　10
第2表　古墳時代・古代の土坑　30
第3表　掘立柱建物跡1の計測　45
第4表　掘立柱建物跡2の計測　48
第5表　掘立柱建物跡3の計測　49
第6表　掘立柱建物跡4の計測　50
第7表　掘立柱建物跡5の計測　51
第8表　掘立柱建物跡6の計測　53
第9表　掘立柱建物跡7の計測　53
第10表　掘立柱建物跡8の計測　54
第11表　掘立柱建物跡9の計測　56
第12表　掘立柱建物跡10の計測　57
第13表　掘立柱建物跡11の計測　59
第14表　掘立柱建物跡12の計測　60
第15表　掘立柱建物跡13の計測　60
第16表　掘立柱建物跡14の計測　62
第17表　掘立柱建物跡15の計測　63
第18表　掘立柱建物跡16の計測　65
第19表　掘立柱建物跡17の計測　66
第20表　掘立柱建物跡18の計測　67
第21表　掘立柱建物跡19の計測　68
第22表　掘立柱建物跡20の計測　70
第23表　掘立柱建物跡21の計測　70
第24表　掘立柱建物跡22の計測　73
第25表　掘立柱建物跡23の計測　74
第26表　掘立柱建物跡24の計測　74
第27表　掘立柱建物跡25の計測　76
第28表　掘立柱建物跡26の計測　78
第29表　掘立柱建物跡27の計測　78
第30表　掘立柱建物跡28の計測　79
第31表　掘立柱建物跡29の計測　81
第32表　掘立柱建物跡30の計測　82
第33表　掘立柱建物跡31の計測　85
第34表　掘立柱建物跡32の計測　85
第35表　土坑Ⅰ類の計測　95
第36表　土坑Ⅰ類の計測　97
第37表　土坑Ⅰ類の計測　99
第38表　土坑Ⅰ類の計測　100
第39表　土坑Ⅰ類の計測　101
第40表　焼土計測等一覧　108
第41表　石器一覧　171
第42表　縄文時代出土遺物一覧　172
第43表　古墳・古代出土遺物一覧　173
第44表　中世・近世出土遺物一覧　176
第45表　金属器出土一覧　199

図　版　目　次

巻頭図版１　上野城跡全景と川内市街地を臨む

巻頭図版２　遺構全景(真上から)

図版１　地層断面　237

図版２　地層断面・旧石器時代の出土状況　238

図版３　縄文時代の落とし穴　239

図版４　山部調査状況・山部出土状況　240

図版５　縄文土器出土状況・山部調査　241

図版６　南北部の遺構　242

図版７　掘立柱建物跡１・26・27　243

図版８　建物跡 12・13・14 方形竪穴遺構　244

図版９　方形竪穴遺構１・２　245

図版 10　方形竪穴遺構３・４　246

図版 11　方形竪穴遺構５　土坑Ⅱ　247

図版 12　土坑Ⅱ－７・６　248

図版 13　土坑Ⅱ－８・17　249

図版 14　土坑Ⅰ・Ⅱ　250

図版 15　溝・古道　251

図版 16　畠跡Ⅰ・Ⅱ　252

図版 17　柱穴・土器出土状況　253

図版 18　遺物出土状況　254

図版 19　旧石器時代の出土遺物　255

図版 20　縄文時代の出土遺物（土器）　256

図版 21　縄文時代の出土遺物（石器１）　257

図版 22　縄文時代の出土遺物（石器２）　258

図版 23　古墳時代の出土遺物　259

図版 24　古代の出土遺物　260

図版 25　古代の須恵器・中世陶器　261

図版 26　白磁・土師器合子　262

図版 27　白磁（１）　263

図版 28　白磁（２）　264

図版 29　青磁（１）　265

図版 30　青磁（２）　266

図版 31　染付　267

図版 32　貿易陶器　268

図版 33　中世須恵器　269

図版 34　瓦器質土器　270

図版 35　土師器埦・皿　271

図版 36　軽石製品・石製品　272

図版 37　石鍋・滑石製品　273

図版 38　金属製品　274

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの調査

日本鉄道公団九州新幹線建設局は九州新幹線鹿児島ルート建設を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について，平成４年６月 16 日鹿児島県教育委員会文化課（当時，平成８年４月以降文化財課）に照会した。平成４年 12 月，建設用地内の分布調査が実施され計２１か所の遺跡を確認した。

日本鉄道建設公団九州建設局と文化財課との協議の結果，平成５年度に鹿児島市の武遺跡，平成８年度に出水市の鳥越平遺跡をはじめ川内市の大原野遺跡，平成９年度に川内市の前畑遺跡，平成 10 年度に出水市の茶屋ノ元遺跡をはじめ東市来町の東下原遺跡など１２遺跡の確認・全面調査を実施した。

上野城跡は平成 11 年度に川内市楠元遺跡や城下遺跡の全面調査とともに確認・全面調査を平成 11 年 12 月１日から実施することになった。

第２節　調査の組織

事業主体者　独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局
調査主体者　鹿児島県教育委員会
企画調整　　鹿児島県教育庁文化財課

平成 11 年度の発掘調査体制

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉永和人
調査企画	〃	次長兼総務課長	黒木友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸﨑勝洋
	〃	課長補佐兼第一調査係長	新東晃一
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	立神次郎
	〃	主任文化財主事	彌榮久志
調査担当	〃	文化財主事	前田　誠
	〃	文化財調査員	川口雅之
事務担当	〃	総務係長	有村　貢
	〃	主査	今村孝一郎
	〃	主事	溜池佳子

平成 12 年度の発掘調査体制

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	井上明文
調査企画	〃	次長兼総務課長	黒木友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東晃一
	〃	課長補佐	立神次郎
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮久志

	〃	主任文化財主事	長野眞一
調査担当	〃	文化財主事	前野潤一郎
	〃	文化財研究員	川口雅之
	〃	〃	切通雅子
	〃	文化財調査員	徳田有希乃
事務担当	〃	総務係長	有村　貢
	〃	主査	今村孝一郎
	〃	主事	溜池佳子
調査指導	鹿児島国際短期大学	学長	三木　靖

平成15年度の整理体制

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	木原俊孝
調査企画	〃	次長兼総務課長	田中文雄
	〃	調査課長	新東晃一
	〃	課長補佐	立神次郎
調査企画及び担当	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮久志
整理担当	〃	文化財調査員	相美伊久雄
事務担当	〃	総務係長	平野浩二
	〃	主査	脇田清幸
	〃	主査	池　珠美
報告書作成検討委員会	〃		所長他10名
企画担当者	〃		中村和美・八木澤一郎

第３節　調査の経過

１　平成11年度の調査（第１次）

上野城跡の調査は平成 10 年度楠元遺跡調査の中で水の汲み上げ時間を利用してトレンチを２本入れ確認調査を実施したのが最初であった。この調査は楠元遺跡の一環として実施したが短時間のため，確認調査は全体の把握ができず次年度に引き継いだ。そして，平成11年12月１日から対象面積19,400㎡に対し，平坦畑地部に４本，山林山部に３本トレンチを設定して本格的な確認調査を実施した。その結果，台地部は旧石器時代から中世までの包含層を確認した。山部は岩山で，遺跡の立地が良くなく，第６トレンチの岩石の間に土器片や剥片が出土した。

これらのことを踏まえ，日本鉄道公団九州新幹線建設局と協議し，平成11年度の全面調査は台地部のＢ～Ｆ―７～16区約3,000㎡を実施した。

なお，平成10年度の組織と日誌抄は楠元遺跡・城下遺跡を参照のこと。

日誌抄

平成11年９月９日から10月14日は楠元・城下遺跡の調査と同時並行での確認調査を実施した。

実施した日は，９／９，９／17，９／20，９／27・28，10／１・４～８・12～14で計13日であ

った。調査は第１～４トレンチを設定しての確認で，ＩからⅦ層のシラスまで掘り下げる。その結果，中世，旧石器時代の包含層を確認する。

平成11年12月６日～22日

本月から全面調査に入る。Ｃ～Ｆ－９・10区Ｉａｂ層掘り下げ。Ｃ～Ｅ－11～14区のⅡ・Ⅲａ層上面地形コンタ図作成。Ｃ・Ｄ－12～14区の土坑，ピットの半裁。

平成12年１月５日～28日

Ｃ～Ｆ－７～10区Ｉｂ・Ⅱ・Ⅲ層上面掘り下げ後遺物取り上げ。同区溝２及び道跡検出掘り下げ。Ｃ－13，Ｄ－10区土坑完掘写真撮影後実測。Ｉｂ層Ｃ・Ｄ－11区Ⅲ層上面まで掘り下げ。Ｄ－９区Ⅱ層内に畠跡検出。

２月１日～25日

Ｃ～Ｆ－７・８区Ⅱ層掘り下げ。同区Ⅱ層上面コンタ図作成。Ｃ－12 区東西ベルト断面図作成。Ｃ－12・13 区溝１平面図作成。Ｃ－９・10 区畠跡の精査後写真撮影及び実測。Ｃ－12 区石組み焼土跡の調査。山部にトレンチ設定。

３月

山部の３トレンチ掘り下げ。Ｃ・Ｄ－10・11区ピット土坑の平面断面図作成。溝２・３・４の掘り下げ後遺物取り上げ，実測。Ｃ・Ｄ－９区Ⅲａ層まで掘り下げ。掘立柱建物跡１の柱穴掘り下げ後写真撮影及び実測。東壁と中央ベルトの土層図作成。Ｂ～Ｆ－10・16区終了。

２　平成12年度の調査（第２次）

平成11年度はＢ～Ｆ－10～16区について遺構の調査が終了していたので，平成12年度は残りの部分16,400㎡を調査した。

平坦畑地部は，中世の遺構が主体をしめる包含層の調査を行い，その層の若干下部にある縄文包含層までを調査し，さらに下層にある旧石器時代の包含層まで調査した。

山部は，Ｆ・Ｇ－16～19区の調査を対象とした。さらに周囲に５本のトレンチを入れて，拡がりの確認を実施した。その結果，遺物の拡がりは確認されなかった。

日誌抄

平成12年５月１・８日～26日

道具搬入，環境整備，重機で調査区北側の掘り下げ。Ｂ～Ｆ－３～５区のＩｂ層掘り下げ。10ｍグリッドの基準杭打ち。ＳＫ37半裁後写真撮影後掘り下げ，実測。Ｂ～Ｄ－２～７区Ｉａｂｃ層掘り下げ，遺物取り上げ。Ｂ・Ｃ－３～８区にＩｂ層掘り下げ，遺物取り上げ。Ｂ～Ｅ－６・７区の地形コンタ図作成。石列Ｉ実測。Ｄ～Ｆ－２～５区のＩｂ層掘り下げ，遺物取り上げ。掘立柱建物跡検出作業。Ｂ～Ｄ－２～７区地形コンタ図作成。Ｄ～Ｆ－４・５区Ｉｂ層掘り下げ。

６月５日～23日

Ｅ～Ｇ－２～７区のＩｃ・Ⅱ層掘り下げ。同区Ⅲ層上面まで掘り下げて遺構検出作業，同区Ｉｃ・Ⅱ層遺物取り上げ。Ｅ・Ｆ－３～７区の遺構検出作業。Ｂ～Ｄ－３～７区のＩｃ層掘り下げ。同区地層図作成。Ｂ～Ｆ－２～６区の清掃・掘り下げ・遺物取り上げ。Ｅ・Ｆ－５・６区地層断面図作成，ベルト崩し。Ｅ・Ｆ－３・４区ピット平板実測。Ｅ・Ｆ－２～６区の清掃後掘立柱建物跡検出

状況。同区写真撮影。同区土層断面図作成。山部に傾斜確認トレンチ５本設定。Ｄ・Ｅ－２・３区の遺構検出後配置図作成。Ｅ－３区の焼土跡掘り下げ，写真撮影，実測。Ｄ～Ｆ－３・４区のピット及び土坑掘り下げ。Ｅ・Ｆ－３～５区のピット及び土坑掘り下げ。Ｅ・Ｆ－７・８区のⅢａ層上面遺構図配置図作成。山部先行トレンチ掘り下げ。掘立柱建物跡４・６半裁実測。

７月３日～28 日

掘立柱建物跡４・６・７半裁実測。Ｅ・Ｆ－３～７区の土坑群，半裁，実測，写真撮影。山部確認トレンチの掘り下げ。Ｅ・Ｆ－６・７区のピット及び土坑掘り下げ。Ｅ・Ｆ－２区の下層トレンチ掘り下げ開始。山部拡張区の表土剥ぎ。Ｅ・Ｆ－７・８区のピット及び土坑掘り下げ，実測。Ｅ・Ｆ－２・３区の下層トレンチ掘り下げ。山部拡張区の表土剥ぎ。Ｆ－８・９区Ⅲ層以下全面調査，シラス上面に剥片先頭器出土。Ｅ・Ｆ－３・４区畠畝検出。Ｅ・Ｆ－３区の下層トレンチ掘り下げ。山部拡張区の表土剥ぎ。Ｅ・Ｆ－３・４区畠畝検出後実測。Ｅ・Ｆ－６・７区畠畝検出。

８月１日～28 日

掘立柱建物跡７・８・９・10・11 ピット実測，掘り下げ。Ｅ・Ｆ－７・８区，Ｅ－４・５・７区Ⅷ・Ⅸ層掘り下げ。同区掘り下げ終了後写真撮影，土層断面図作成。Ｅ・Ｆ－３～５区Ⅷ・Ⅸ層掘り下げ。Ｅ―５・６区，Ｄ・Ｅ－５・６区の重機によるⅣ・Ⅴ層掘り下げ。Ｄ・Ｅ－４・５区ピット，土坑実測，掘り下げ。Ｄ・Ｅ－２～４区のⅨ層掘り下げ。Ｄ・Ｅ－２・３区土坑写真撮影後実測。Ｅ・Ｆ－３～８区調査終了。山部表土剥ぎ後，コンタ図作成。

９月１日～29 日

今月から本格的に山部の調査に入る。６トレンチの掘り下げ，北側面の断面図作成。Ｆ・Ｇ－17～19 区のⅡ層掘り下げ，出土状況の写真撮影後平板実測。Ｇ・Ｈ－16・17 区掘り下げ，出土状況の写真撮影後平板実測。Ｆ・Ｇ－16・17 区，Ｇ－17・18・19 区のベルト土層断面図作成。

10 月３日～27 日

Ｇ・Ｈ－16・18 区掘り下げ，出土状況の写真撮影後平板実測，遺物取り上げ。４日で山部終了。Ｅ－11 区の下層確認トレンチ設定後Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。Ｃ・Ｄ－３～７区のⅢ層検出後，遺構平板実測。Ｄ・Ｅ－11 区下層確認トレンチ掘り下げ。Ｃ～Ｅ－５・６区ベルト土層断面図作成後ベルト崩し，精査遺構検出。Ｂ－５・４区ミニトレンチ掘り下げ。方形竪穴遺構①②検出状況写真撮影後掘り下げ。

Ｄ－４・５区焼土精査後写真撮影。Ｃ・Ｄ－５～７区遺構の平板実測。Ｂ～Ｄ－６区の遺構検出状況後写真撮影，掘り下げ。Ｄ－６区ベルト土層断面実測，ベルト崩し。

11 月１日～28 日

掘立柱建物跡 12～19 のピット検出写真撮影，実測，掘り下げ。方形竪穴遺構②の掘り下げ，写真撮影，実測。Ｂ－２～６区東側拡張区のⅡ層まで掘り下げ。

12 月１日～22 日

掘立柱建物跡 22・23・25～27 のピット検出写真撮影，実測，掘り下げ。Ｂ－２～６区東側拡張区の掘り下げ。Ｃ－９区焼土①②の掘り下げ写真撮影後実測。Ｄ－８区の畝跡掘り下げ，断面実測。Ｃ・Ｄ－７・８区及びＤ・Ｅ－８～10 区境ベルト土層断面実測後掘り下げ。Ｂ～Ｅ－９区のピット掘り下げ。Ｃ・Ｄ－７・８区の溝跡掘り下げ。Ｂ～Ｅ－６区の溝跡掘り下げ。Ｂ・Ｅ－８区以降の

空中写真撮影。Ｃ・Ｄ－９区以降の下層確認トレンチ掘り下げ。

平成13年１月５日～29日

掘立柱建物跡21・24・28のピット検出写真撮影，実測，掘り下げ。方形竪穴遺構①②③④⑤検出状況写真撮影後掘り下げ。Ｃ・Ｄ－９区以降の下層確認トレンチ掘り下げ。Ｄ－７区ピット・土坑掘り下げ。

２月１日～27日

Ｃ・Ｄ－９区以降のⅤ層掘り下げ。方形竪穴遺構②③④⑤の写真撮影及び実測，ベルト崩し。Ｃ・Ｄ－７・８区ピット掘り下げ，実測。同区下層確認トレンチ掘り下げ。土坑 74・76・77 掘り下げ実測。空中写真撮影。８区トレンチ(東西)掘り下げ。Ｂ－２～５区Ⅲ層検出硬化面実測。

３月１日～19日

Ｃ－３区のⅤ層掘り下げ。Ｃ・Ｄ－３・４・７・８区のⅤ～Ⅶ層掘り下げ。Ｂ－４～６区，Ｂ・Ｃ－４区土層断面図作成。Ｃ～Ｅ－５～７区のⅤ～Ⅶ層掘り下げ。Ｃ・Ｄ－５～８区の掘り下げ後写真撮影と土層断面図作成。Ｂ・Ｃ－５・６区の傾斜部トレンチ掘り下げ。Ｃ～Ｅ－８区下層確認トレンチ土層断面図作成。今月で発掘調査終了。

３　整理作業

整理作業は，新幹線建設工事が優先したため発掘調査が22遺跡全て終了した平成13年度から開始した。

計画は,日本鉄道建設公団九州新幹線建設局と協議した結果,全遺跡を計画的に３年間で整理し,随時報告書を刊行することとした。なお，最終年度は，上野城跡，大原野遺跡，上ノ平遺跡を刊行し，大坪遺跡，京田遺跡，大島遺跡は整理を終了させ平成16年度当初に刊行することとした。

上野城跡の整理作業は作業員８名で下記の通り実施した。

作業員名　笑喜ミチ子，竹ノ内礼子，坂元真由美，谷村志乃恵，山元順子，井出康代，堂籠久代，郷田千秋

４月　土器洗い，注記，接合
５月　接合，遺物選別・分類，遺構図作成
６月　遺物選別・分類，遺物実側，遺構図作成
７月　遺物実測，遺構図作成
８月　遺物実測
９月　遺物実測，トレース，原稿執筆
10月　トレース，レイアウト，原稿執筆
11月　レイアウト，拓本，復元，原稿執筆
12月　写真撮影，写真レイアウト，原稿執筆
１月　入札，収納整理
２月　校正，収納整理
３月　校正，受け取り

４　発掘調査全体の経過と成果

九州新幹線鹿児島ルートの発掘調査は，西鹿児島駅整備事業に伴う武遺跡の調査を平成５年５月１２日より開始し，平成１３年５月３０日に川内市の京田遺跡を調査して全てを終了した。

平成５年度後の発掘調査は，北陸新幹線の一部である長野行新幹線建設が優先され九州新幹線鹿児島ルートの発掘調査は２年間中断となった。再開したのは，平成８年８月の鳥越平遺跡・松ヶ迫遺跡であった。しかも，その調査は短期間であった。

平成９年度は１１月から大原野遺跡の調査を開始し，前畑遺跡の一部全面調査を実施した。平成１１年度からは，調査体制を充実し，２年２か月間で対象遺跡全２１ヵ所の内，１４ヵ所の発掘調査を終了した。なお，その成果は次の表で示した通りである。

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物　備考
1	茶屋ノ元	出水市境町	H10.7.2～3 H11.3.2～4 計５日	240㎡	彌榮久志 前田　誠	縄文早・前期	塞ノ神式，轟式 磨製石斧，黒曜石
2	鳥越平	出水市境町	H8.8.5 計１日	55㎡	池畑耕一 中原一成	時期不明	包含層は確認されず。
3	鐙・安原	出水市安原町	H11.2.17・18 H11.2.24・25 H11.3.9 計５日	60㎡	彌榮久志 前田　誠	縄文晩期 平安時代	研磨土器，黒曜石 土師器
4	榎木田 見入来 大坪	出水市美原町	H11.1.5～3.9 H11.5.6～ 12.3.31 H12.5.1～ 13.3.27 計４２０日	27,247㎡	彌榮久志 前田　誠 濱﨑一富 東　和幸 高岡和也 上床　真 森田裕之	縄文晩期 平安・鎌倉時代	縄文晩期埋設土器38基，平安期竈付竪穴住居跡1基，掘立柱建物跡９棟，焼土遺構3基，溝状遺構30条，波板状遺構27条，上加世田式，入佐式，黒川式，土師器，須恵器，玉縁白磁，滑石製石鍋，刻書土器，鉄製品，石鏃，磨製石斧，打製土掘り具，石匙，石皿，磨石，凹石，玉類(勾玉6，管玉25，丸玉5，平玉3，垂飾品1，剥片46，未製品30)，異形石器。
5	宮野脇	出水市上鯖淵	H11.2.19 H12.2 計２日間	48㎡	彌榮久志 前田　誠 東　和幸	時代不明	包含層確認されず。
6	松ヶ迫	出水市武本	H8.8.6 計１日間	12,5㎡	池畑耕一 中原一成	時期不明	包含層確認されず。
7	小松	出水市武本	H10.7.8～10 計３日間	108㎡	彌榮久志 前田　誠	縄文早期	土器，黒曜石
8	前畑	川内市城上町	H9.11.1～ H10.3.31 H10.5.6～ H12.12.24 H11.12.13～ H12.2.24 計１９５日	11,800㎡	長野眞一 上床　真 彌榮久志 前田　誠 宮田栄二 平木場秀夫	旧石器時代 縄文早・前・後期，中近世	土坑(陥し穴含)25基，集石４基，竪穴状遺構１基，五輪塔，大型掘立建物跡７棟。 ナイフ形石器，細石刃核，吉田・石坂・轟式，石鏃，石斧，石皿，磨石，敲石。 土師器，青磁，白磁，染付，薩摩焼。

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物　備考
9	計志加里	川内市中郷町	H11.7.1～8.27 H12.5.23～ H13.3.26 計２１８日	5,900㎡	宮田栄二 平木場秀夫 樋渡将太郎	縄文早・後・晩期，弥生時代，古墳時代，平安時代，中世。	竪穴住居１軒，掘立柱建物跡５棟，土壙墓３基，円形周溝状遺構１基，土坑５基，中世掘立柱建物跡２棟，古道，溝状遺構。早期押型文土器，後期の土器，磨製石鏃，打製石斧，錐，ピエスエスキュウ，スクレイパー，磨石，石皿，石匙，石鏃，砥石，土師器，須恵器，瓦，青磁，白磁，滑石製品，刀子，青銅製品，紡錘車。
１０	京田 （薩摩国分寺下）	川内市中郷町	H11.6.1～20 H12.5.8～６.６ H12.9.4～ H13.3.24 H13.4.9～5.31 計１９１日	5,900㎡	宮田栄二 平木場秀夫 川口雅之 徳田有希乃 樋渡将太郎	弥生中期，平安時代，中・近世	弥生期水田跡，土留め状遺構，杭列，ウケ跡，ドングリピット，古代水田跡。 弥生土器，三又鍬，二又鍬，大足，一本梯子，横架材，網枠，土師器，須恵器，瓦，曲物。
１１	原田・大島	川内市東大小路町	H10.11.26 H11.5.6～ H12.3.24 H12.5.7～ H13.3.19 計２７５日	1,960㎡	宮田栄二 平木場秀夫 樋渡将太郎	縄文晩期 弥生中期 古墳時代 平安時代 中世	弥生期竪穴住居跡４軒，土坑１基 古墳期竪穴住居跡１軒 平安期竪穴住居跡３１軒（竈付２軒），掘立建物跡２棟，土壙墓１ 中世竪穴建物跡１軒，掘立柱建物跡１棟，畠跡。 弥生期甕・壷，石包丁，磨製石鏃。 古墳期成川式，須恵器，大刀，剣，鉄鏃。 平安期土師器，須恵器瓦，越州窯青磁，緑釉陶器，転用硯，帯金具石製丸鞆，玉類，土錘，金環，青銅製鈴，鉄製品。
１２	鍛冶屋馬場 春田	川内市平佐町	H10.11.25 H11.9.1～9.27 H12.5.9～6.15 H12.9.1～12.27 計１０３日	2,850㎡	彌榮久志 前田　誠 宮田栄二 平木場秀夫 川口雅之 徳田有希乃	古代 中世 近世	古代鍛冶炉６基，土坑２基，竪穴住居跡１軒，掘立柱建物跡４棟，炉跡７基，畠跡。 越州窯系青磁，陶器壷，土師器，鉄滓，鉄製品（鎌，鋤先，紡錘車，鉄鏃） 中世青磁，古銭 近世薩摩焼，平佐焼，伊万里焼，土師器，羽口，鉄滓。
１３	楠元 城下	川内市百次町	H10.9.17～30 H10.11.4～24 H11.9.2～12.6 H11.5.6～11.8 計２０９日	1,800㎡	彌榮久志 前田　誠 川口雅之	縄文後期 弥生～古墳	弥生～古墳期竪穴住居跡２軒，炉跡２基，土坑１２基，溝７条（杭列を伴う溝１条）。 縄文期押形文・市来式・西平式・北久根山式，

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物　備考
							弥生～古墳期土器，木製平鍬，又鍬，横鍬，鍬の柄，掘り棒，丸木弓，容器（未製品），櫂状木製品 。
１４	上野城跡	川内市百次町	H11.12.1～3.24 H12.5.1～ H13.3.29 計３１６日	19,400㎡	前田　誠 川口雅之 前野潤一郎 切通雅子 徳田有希乃 彌榮久志	旧石器 縄文 古墳 中世	中世掘立柱建物跡32棟，土壙墓４基，方形竪穴建物跡５軒，溝７条，古道１条，畠跡。 剥片先頭器，ナイフ形石器，押形文，石坂式，阿高式，土師器，石皿，敲石，凹石，石鏃，土師器，須恵器，白磁，青磁，短刀，古銭，滑石製石鍋，中世陶器，鉄鏃。
１５	大原野	川内市百次町 浦田	H8.10.1～29 H9.11.1～ H10.3.31 計１７１日	2,815㎡	青崎和憲 中原一成 長野眞一 国生　誠 上床　真	旧石器 縄文早・前期	ナイフ形石器，細石器，吉田式，石坂式，条痕土器，轟式，石鏃，石皿，磨石，敲石，石斧。
１６	東下原	日置郡東市来町養母	H10.10.27～29 H10.12.1～18 H11.3.12 計２０日	248㎡	彌榮久志 前田　誠	旧石器 縄文早期 古墳 古代	古代焼土付土坑 細石刃核 成川式，土師器。
１７	上ノ平	日置郡伊集院町下神殿４区	H11.2.26 H11.10.1～25 H12.11.14～ H13.3.29 計９２日	2,328㎡	彌榮久志 前田　誠 上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道	旧石器 縄文後期 中世	縄文竪穴住居跡５軒，集石４基，中世溝１条，細石刃核，指宿式，磨製石斧，石鏃。
１８	山ノ脇 石坂 西原	日置郡伊集院町郡	H11.5.6～24 H11.6.4～30 H11.11.1～ H12.3.24 H12.5.1～11.13 計１８４日	15,900㎡	上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文草創・早・中期 古墳，中世	集石（早期３基，中期３基） 中世溝，農具埋納土坑，掘立柱建物跡１２棟，縄文早期土器，船元式，成川式，土師器，陶磁器（中国南部），滑石製石鍋。
１９	梅落	日置郡伊集院町郡	H11.5.19～21 H11.6.14～17 H12.6.19～7.14 計２４日	340㎡	上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文早期	集石，塞之神式，スクレーパー。
２０	尾崎	鹿児島市	発掘調査せず				遺跡は工事に触れず残
２１	武ＡＢＣＤ	鹿児島市	H5.4.12～5.25 H5.5.21～7.2 H5.12.6～ H6.2.21 H６.３.９～30 H11.5.24～6.11 H11.7.1～9.28 H12.5.8～6.13 計１７５日	9,104㎡	彌榮久志 倉元良文 鶴田靜彦 上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文前・中期，弥生中期，近世	古墳竪穴住居跡２３基，大型土坑１１基，土坑３７，溝４条，近世溝９条，轟式，深浦式，春日式，船元式，山之口式，成川式，陶器・磁器，瓦，木製品，金属製品，寿国寺跡のはん池（門前池）跡。
２２	前市野原	串木野市	H10.12.15 計１日	22㎡	彌榮久志 前田　誠	時期不明	追加調査で挿入。 包含層は確認されず。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　　遺跡の位置及び立地

上野城跡は鹿児島県川内市百次町上野に所在している。

上野城跡が所在する川内市は鹿児島県の北西部に位置し，九州でも大河川の範疇に入る川内川が市内を東西に流れている。川内川は源が熊本県の白髪山に発し，宮崎県えびの市，鹿児島県大口市を経由して川内市の中央部を横切り，東シナ海へ注いでいる。その川内川は，奔流とそれに注ぐ隈之城川等の支流の河川によって川内平野や川内盆地と呼ばれる沖積平野を形成している。川内盆地の南側は標高 516mの冠岳がそびえ立ち隣接市の串木野市に繋がっている。上野城跡の南側には新幹線建設関係で平成８・９年度に調査した大原野遺跡が，その冠岳の麓で北斜面に立地している。北側には，平成 10・11 年度に発掘調査した楠元遺跡・城下遺跡が低地に立地している。

上野城跡のある丘陵は，川内盆地の中の南部にある隈之城地区の低地から山地に上がる冠岳の裾部から水田を挟み北へ３㎞離れた標高約 40～50ｍの独立丘にあたる。周りは水田を形成し，西側が永利地区の台地に接している。水田を形成する河川は，川内川の支流隈之城川に流入する百次川が東側に，山崎川が西側に北へ流れている。上野城跡が所在する独立丘は，同市永利地区の凝結凝灰岩台地の西端にあたり，上述の百次川が浸食して分離した台地である。なお，浸食された所は一部シラス台地となっている。シラス台地は独立丘の東側にあり平坦部を形成し，溶結凝灰岩は西側にあたり，一段高い山部を形成している。

第２節　周辺遺跡

川内川から南部に所在する遺跡群の発掘調査は，隈之城バイパス建設関係，新幹線建設関係，現在行われている南九州自動車道建設関係がある。

隈之城バイパス関係は昭和 55～59 年度に発掘調査され，上ノ原遺跡，西ノ平遺跡，成岡遺跡がこれにあたる。この中で特に西ノ平遺跡では中世の大型建物跡が発見され，鹿児島におけるこの地域の先進性が認められた。また，細石器時代の石器をはじめ，縄文時代晩期の完形土器が土坑内から出土している。

新幹線建設関係では川内川南側の鍛冶屋馬場遺跡をはじめ，楠元遺跡，城下遺跡，上野城跡が平成 10 年度から 12 年度にかけて発掘調査が実施された。この中で特に楠元遺跡では，弥生終末から古墳初頭における大量の木製品が発見され，南九州ではじめて本格的な低地の遺跡の存在を確認した。さらに，縄文時代後期の包含層もあり当時の海岸線を考える上で良い遺跡である。また，上野城跡では，旧石器時代の遺物をはじめ，12 世紀頃の掘立柱建物跡群とそれに伴う白磁が多く出土し，西ノ平遺跡同様鹿児島におけるこの地域の先進性が裏付けられている。

南九州自動車道建設関係では，現在調査中である霜月田遺跡は掘立柱建物跡が発見され，中世の遺跡の拡がりがとらえられる。

これらのほか，川内純心女子高等学校の台地縁辺部に縄文時代の貝塚がある尾賀台遺跡があり，隈之城川を中心とした水田地帯の北側は海水が入り込んでいた入江と考えられる。それを裏付ける船着き場の意味と考えられる「津」の付く赤澤津もある。また，そこは遺跡に登録されている。

今回の調査対象になった上野城跡は，百次城とも言われている中世の城である。地形は，前に述べた河川や低地で囲まれた独立丘を利用し，生活はシラス台地の平坦部を利用している。平坦部には，３つの郭を形成し，その間は空掘を設けた防備をしている。この郭から北側を眺めると隈之城川一帯の水田が一望に見えて，本地が統治しやすい所であったことが裏付けられる。また，台地の下段には上野氏三代の墓があり，拠点としての証となっている。

以上のように，現在の隈之城川の両岸地帯は旧石器時代から縄文時代，弥生時代，古墳時代，古代，中世，近世と長期にわたり生活の拠点が多かったことがわかる。このことはこの地域が弥生時代後期から中世にかけて鹿児島県でも先進的な地域であったことがわかる。

第１表　周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺構・遺物	備考
1	原口	田原町原口・外園	台地	縄文～江戸	土器・須恵器・染付	
2	大明原	田崎町大明原	台地	縄文～江戸	土器・染付・石鏃	
3	喜入原	平佐町喜入	台地	縄文～江戸	土器・須恵器・染付	
4	平佐城	平佐町藤崎ほか	丘陵	鎌倉～戦国		空堀跡
5	田中原	陽成町田中原	河岸段丘	鎌倉～室町	土器・青磁・白磁	
6	石神城	永利町石神	丘陵	不詳		堀切跡
7	石神原Ａ	永利町石神原	台地	古墳～室町	土器・須恵器・青磁	
8	石神原Ｂ	永利町石神原	台地	古墳～室町	土器・須恵器・青磁	
9	若宮北	永利町西永崎ほか	台地	縄文～室町	土器･須恵器･青磁･石鏃	
10	若宮南	永利町若宮前ほか	台地	縄文～室町	土器･須恵器･青磁･石鏃	
11	宮崎北原	宮崎町出居原ほか	台地	古墳～室町	土器・須恵器・陶器	
12	瀬戸口	宮崎町瀬戸口	台地下	縄文～平安	土器・土師器・石鏃	
13	赤殿原	宮崎町赤殿原	微高地	古墳～室町	土器・土師器	
14	赤沢津	宮崎町赤沢津	微高地	縄文～平安	並木式土器･須恵器･石斧	
15	日暮丘	向田町鉢本ほか	丘陵	古墳～江戸	土器・須恵器・染付	
16	尾賀台	隈之城町尾賀原外	丘陵	縄文～室町	土器･須恵器･染付･石鏃	一部貝塚
17	栫城	隈之城町尾賀	丘陵	不詳		堀切跡
18	池尻	隈之城町池尻	丘陵	古墳	須恵器	
19	西ノ口	隈之城町西ノ口	台地	古墳		
20	湯之谷	隈之城町湯之谷	丘陵	平安	土師器	
21	上ノ原	中福良町上ノ原	台地	縄文～戦国	土器･須恵器･青磁･染付	S55 発掘
22	西ノ平	中福良町西ノ平	台地	旧石器～江戸	土師器･青磁･細石刃核	S55~59 発
23	成岡	中福良町成岡	台地	旧石器～江戸	須恵器･青磁･細石刃	S55~59 発
24	金剛院跡	中福良町石原		鎌倉	層塔・宝塔	
25	立石Ａ	中福良町立石	丘陵	縄文～室町	土器･土師器・青磁	
26	立石Ｂ	中福良町立石	丘陵	縄文～室町	土器・石鏃・黒曜石	

27	集	中福良町集	丘陵	縄文～室町	土器・陶器・黒曜石	
28	上中原	永利町上中原	台地	古墳～室町	土器・土師器	
29	権現原	永利町権現原	台地	古墳～室町	土器・青磁・染付	
30	鎮守原	宮崎町鎮守原	台地	古墳～室町	土器・青磁・須恵器	
31	宮崎南原	宮崎町大堀	台地	古墳～室町	土器・青磁・須恵器	
32	三本松	宮崎町三本松	台地	古墳～室町	土器・土師器・陶器	
33	百次原	百次町六反ほか	台地	古墳～室町	土器・内黒土師器	
34	別府原	百次町別府原	台地	古墳～室町	須恵器・青磁・染付	
35	楠元	百次町楠元	平野	縄文～近世	土器・木製品・石鏃	H10~11
36	城下	百次町城下	台地下	縄文～近世	土器・須恵器・陶器	H10~11
37	上野	百次町上野	台地	旧石器～江戸	尖頭器・土器・白磁	H10~11
38	上野氏三代墓	百次町 2383 番地	台地下	鎌倉	宝塔・五輪塔	
39	大畠	百次町大畠	台地端	古墳～江戸	土器・青磁・染付	H3 発掘
40	小城	勝目町小城	平地	不詳		消滅
41	栫城	勝目町栫	丘陵	不詳		東ノ丸字
42	勝目原	勝目町栫・集ほか	台地	古墳～江戸	須恵器・青磁・染付	
43	二福城	隈之城町城	丘陵	鎌倉～戦国		曲輪跡
44	矢倉城	矢倉町矢倉城	平地	不詳		消滅
45	山口原	山之口町山口原	台地	古墳～江戸	土器・青磁・染付	
46	四反畑	尾白江町四反畑	微高地	平安～江戸	土師器・青磁・染付	
47	瀬戸山	木場茶屋町瀬戸山	丘陵	古墳～江戸	土器・須恵器・青磁	
48	都城	都町都原	台地	不詳		空堀跡
49	都原	都町都原	台地	平安～室町	土師器・青磁・染付	
50	総徳城	都町麦・屋敷田ほか	丘陵	不詳		堀切跡
51	霜月田	都町霜月田	台地	古墳～室町	土器・青磁・染付	H14・15

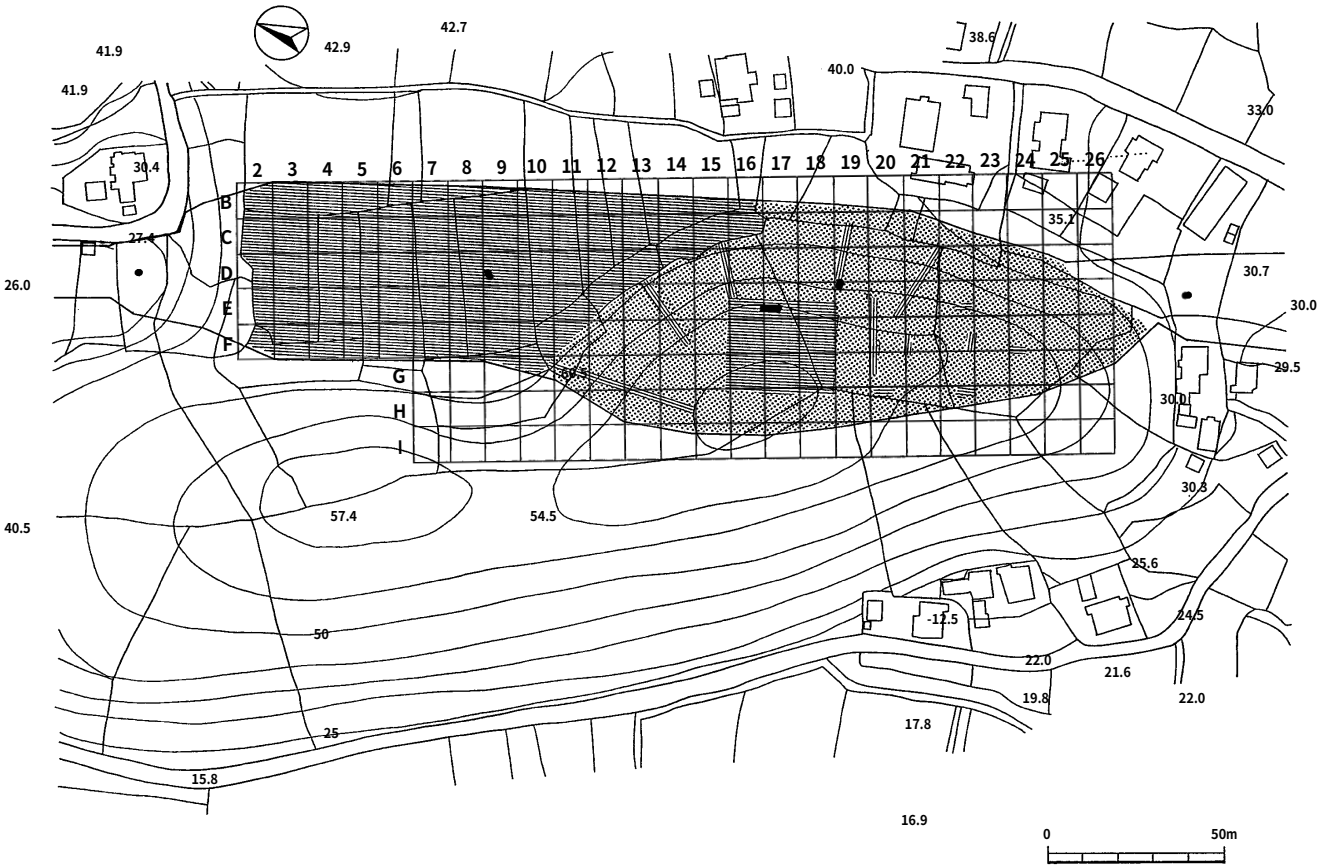
第１図　遺跡の位置及び周辺遺跡

第Ⅲ章　調査の概要

第１節 調査の基本計画

本遺跡は，現在，地形が畑地となっている平坦地と雑木林になっている山部に大きく分けられているため両方に網がかけられるように新幹線建設の新八代起点からの 41.6 km杭を起点として，平坦部の東端がＡ列に，北端が第１列に入るように 10mグリッドを設定して発掘調査を実施した。

本遺跡の調査方法は，中世城のため，平坦部を生活拠点の館跡，山部を有事の時の山城と想定して進めた。平坦部における調査は，建物跡遺構等の精密な検出，山部における段々に造られた帯曲輪類似のものと頂上部における建物遺構等の検出に力を注ぐ方法をとった。よって，調査の進め方としては，山部の帯曲輪調査時の土落とし場として，７～16 区の地域を最初に調査した。

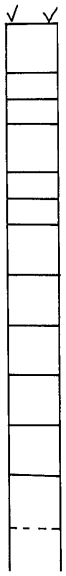


第２図　上野城跡の地形と調査範囲

第２節　遺跡の層序

調査の結果，畑地の平坦部と岩山の山部に分けて下記の層序が設定された。

平坦部

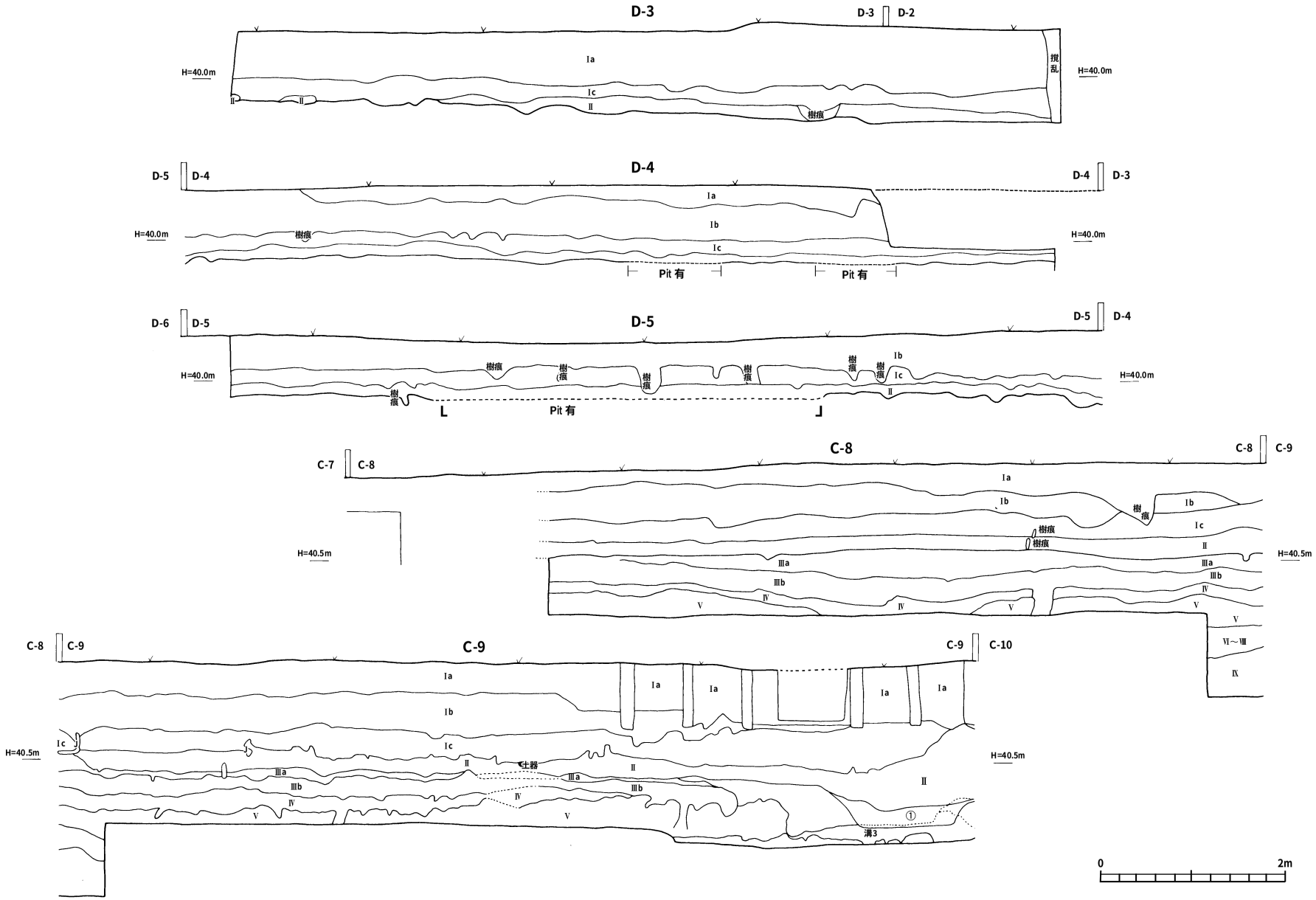


Ⅰa	Ⅰa	表土	(現耕作土)
Ⅰb	Ⅰb	暗褐色砂質土層	(13 世紀～15 世紀頃)
Ⅰc	Ⅰc	黒褐色砂質土層	(10 世紀～13 世紀頃)
Ⅱ	Ⅱ	黒色砂質土層	(10 世紀～13 世紀頃)
Ⅲa	Ⅲa	淡黄褐色砂質土層	(古墳時代～縄文時代中期)
Ⅲb	Ⅲb	黄褐色砂質土層	
Ⅳ	Ⅳ	にぶい黄褐色砂質土層	
Ⅴ	Ⅴ	黒褐色土層	
Ⅵ	Ⅵ	暗褐色粘質土層	
Ⅶ	Ⅶ	褐色粘質土層	(旧石器時代)
Ⅷ	Ⅷ	シラス二次堆積層	(旧石器時代)
Ⅸ	Ⅸ	シラス層	

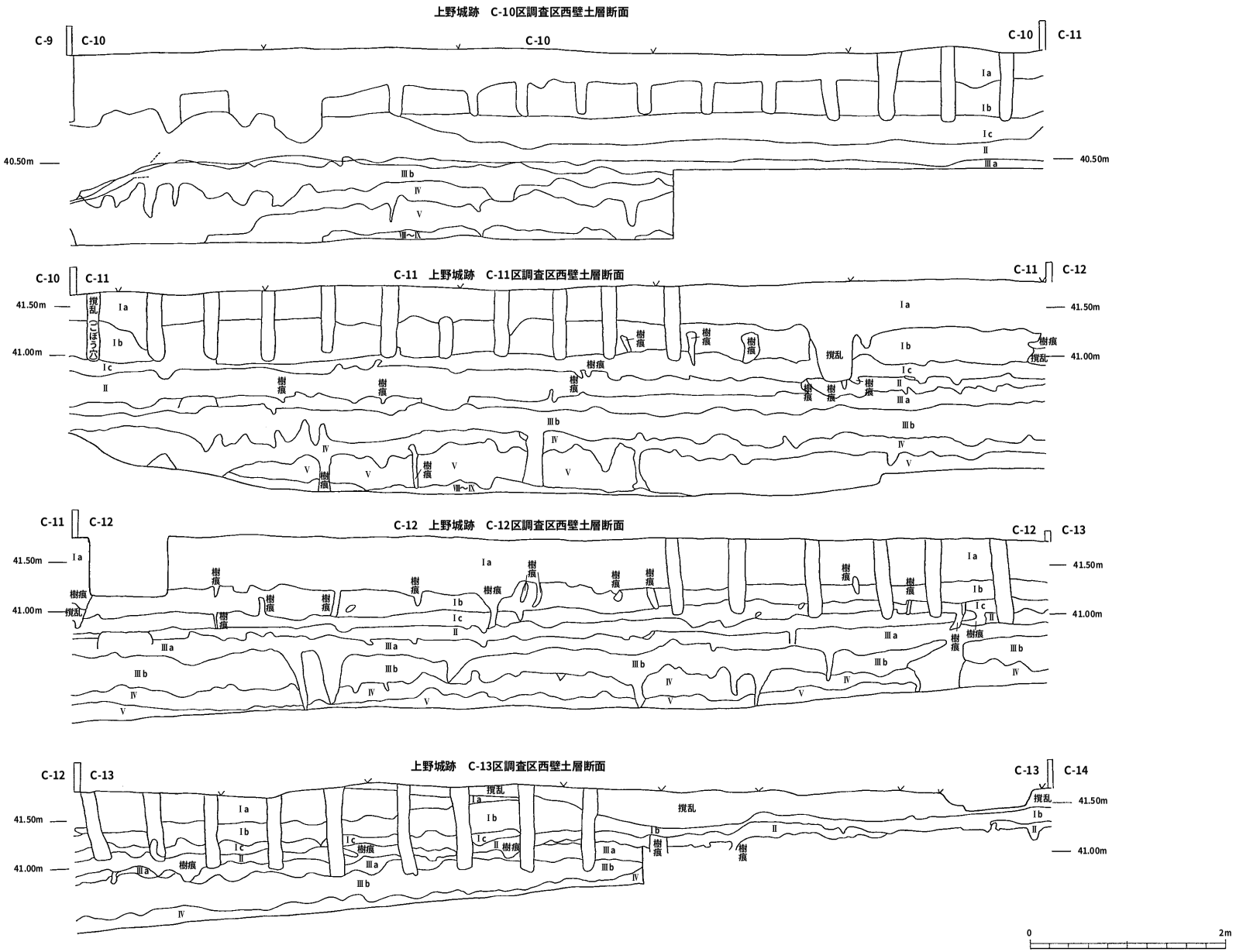
山部

Ⅰ	Ⅰ	表土	(開墾土)
Ⅱ	Ⅱ	暗褐色土	(縄文時代～旧石器時代)
Ⅲ	Ⅲ	下部に溶結凝灰岩礫を含む褐色土	(　　〃　　)
		Ⅲ層直下は溶結凝灰岩の岩盤	(加久藤溶結凝灰岩？)

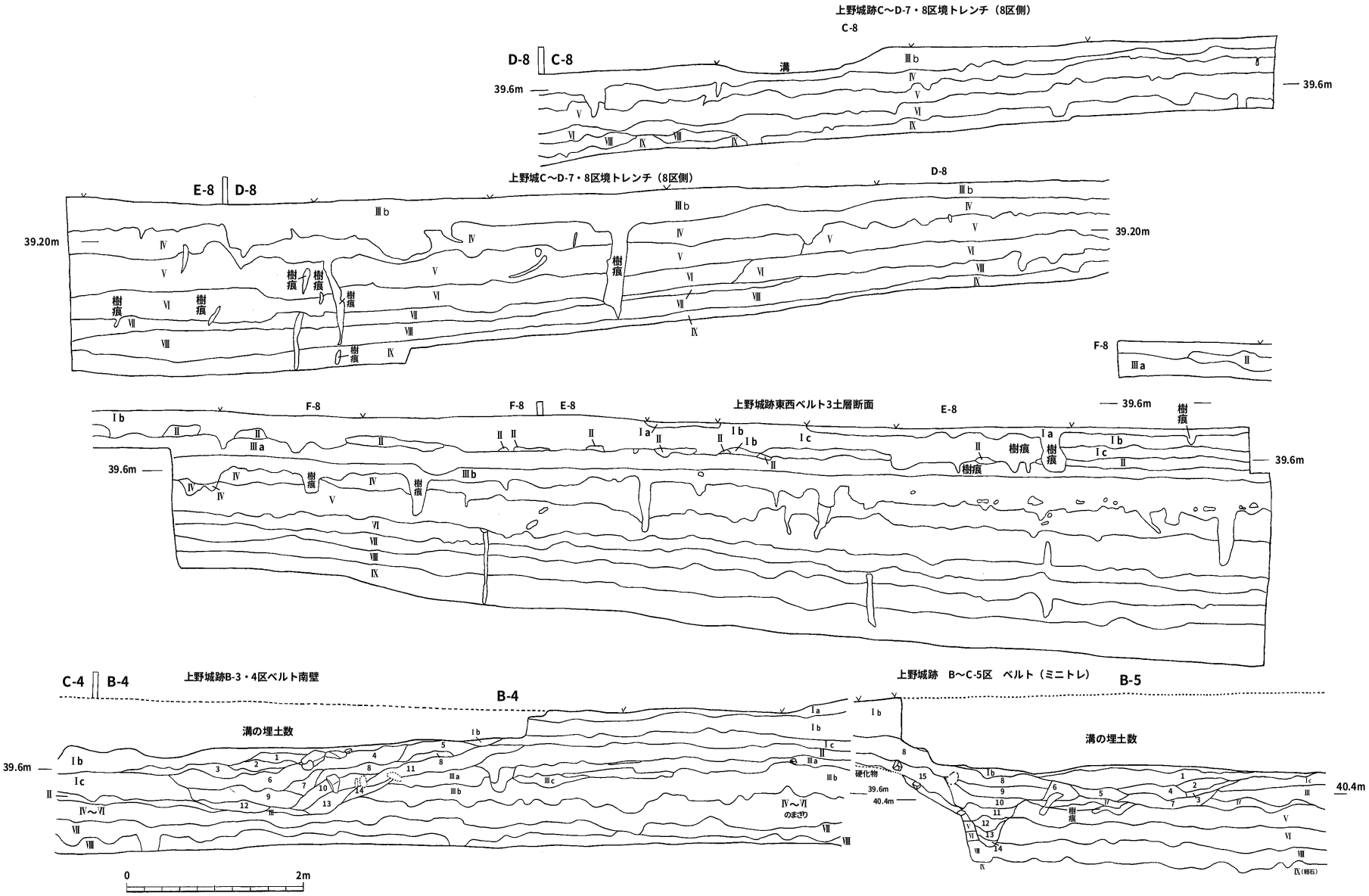
第3図　上野城跡の基本的層序



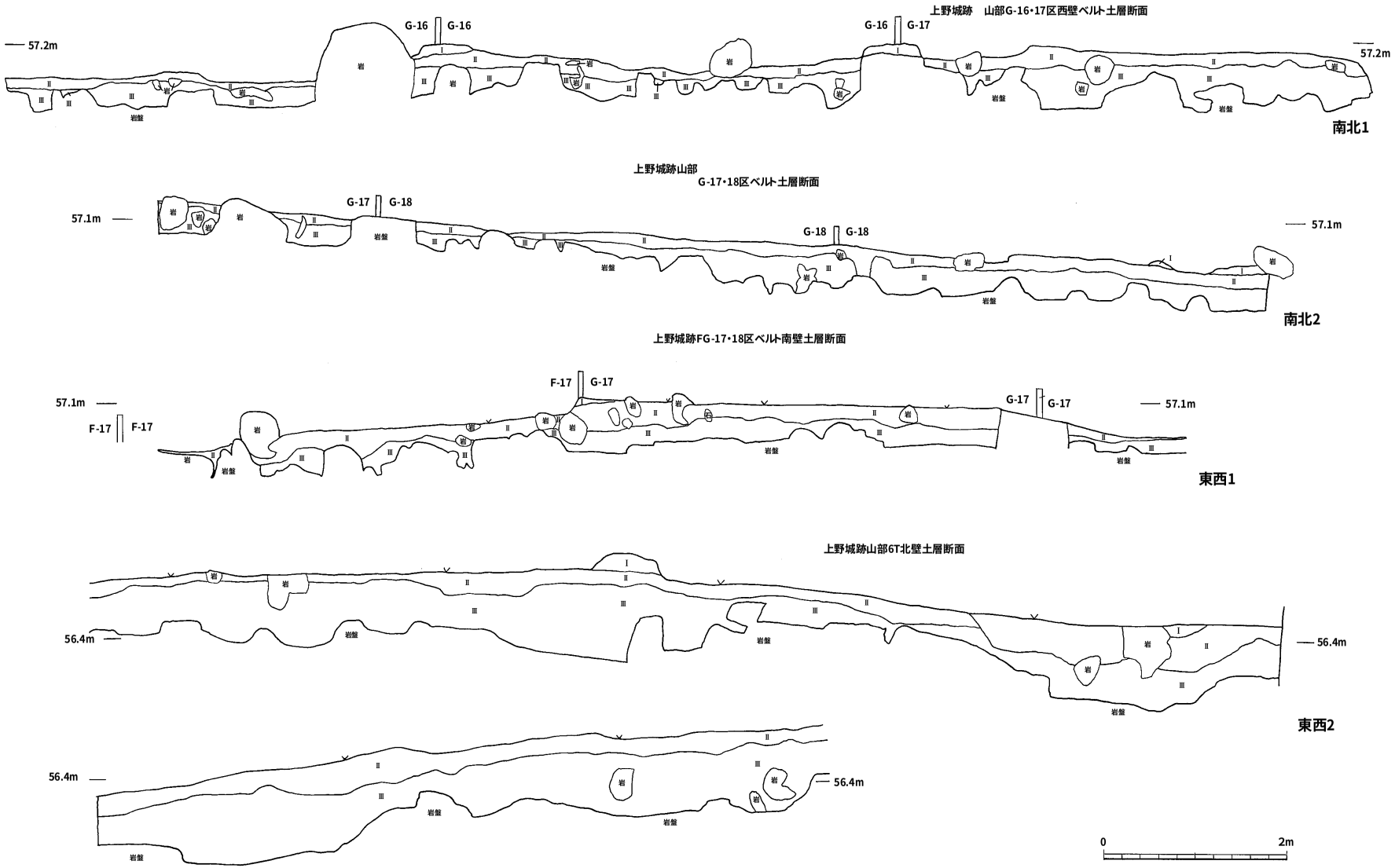
第４図　上野城跡の南北断面１（D－２～５区・C－８～９区）



第５図　上野城跡の南北断面2（C－10～13区）



第６図　上野城跡の東西断面（C～F－８区、B－３・４区、B～C－５区）



第７図　上野城跡の山部断面　（G－16～18区、F～G－17・18区、第6トレンチ）

第３節　遺構と遺物

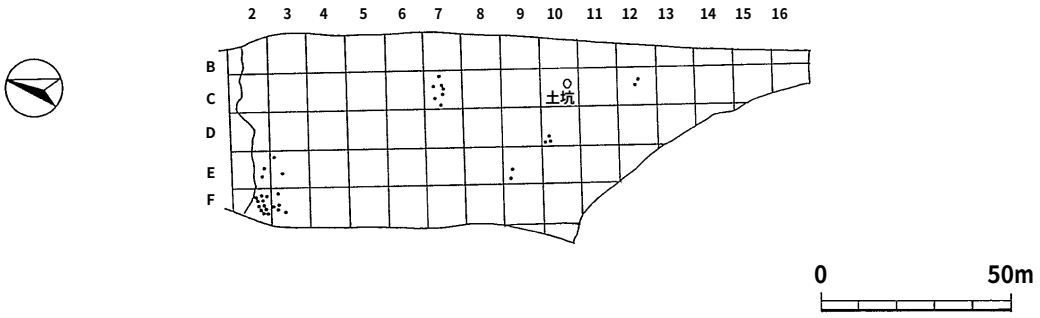
１　旧石器時代

（１）経過及び遺構と遺物の出土状況

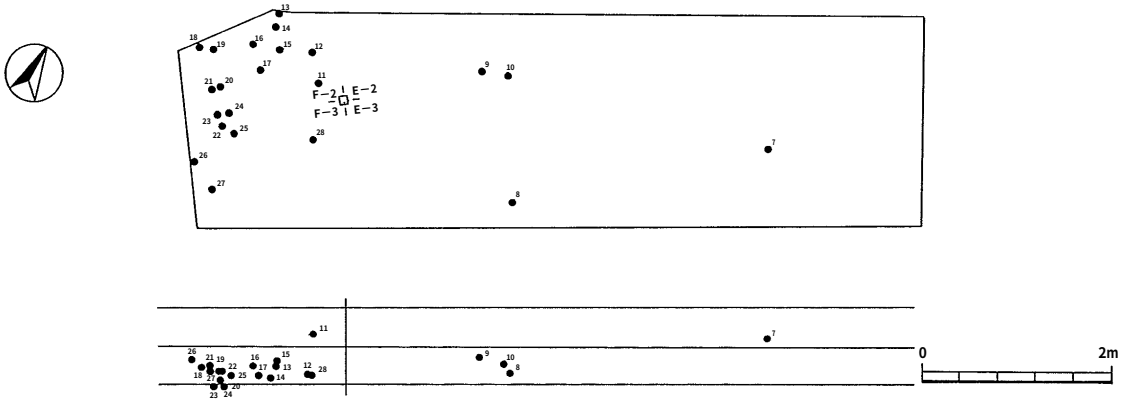
旧石器時代の遺物は確認調査でＥ－６区のⅥからⅦ層にかけて黒曜石と玉髄の剥片が出土し，旧石器時代の本格的な遺跡と想定して調査を実施した。その結果，トレンチ周辺に遺物が散布した状態で出土し，そこは本格的な遺跡にはならなかった。

次に，Ⅲ層調査終了後下層確認のトレンチを入れ調査した結果，Ｅ・Ｆ－３・４区のⅧ層にナイフ形石器１点，剥片先頭器１点のほかフレーク・チップが 20 点，Ｅ－９区のⅧ層にフレーク３点，Ｃ－12，Ｄ－10 区のⅧ層にフレーク・チップが５点，Ｃ－７区のⅧ層にフレーク・チップが７点出土している。第９図はＥ・Ｆ－３・４区の出土状況図である。

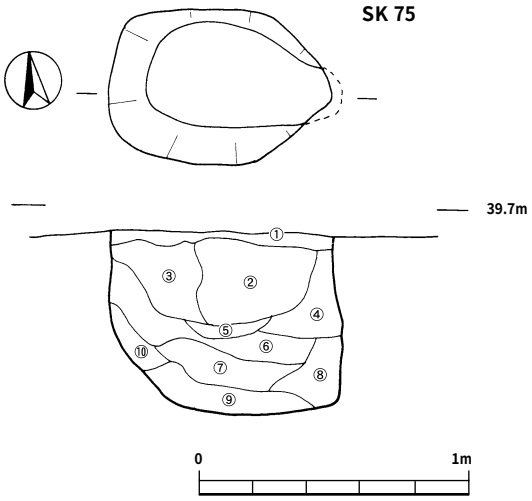
また，下層確認トレンチ調査でＣ－10 区に土坑（第 10 図）がⅦ層に検出した。形は長軸 70 ㎝，短軸 58 ㎝の略五角形で片方が床面より鋭角に，片方が丸味をもって立ち上がっている。埋土は基本的にレンズ状堆積を保ち次のように観察された。最下層の⑨は褐色土でぬれシラスを多く含み，⑥⑦⑧はにぶい黄褐色土層であった。これらの層は⑥がⅧ層に大きい軽石や白色粒子を少量含み，⑦は⑥に大きな軽石は含まず，⑧は⑦より明るい。⑤は褐色土層でⅧ層主体の層である。④はにぶい褐色土で３㎜大の黄色軽石を多量に含んでいる。③は暗褐色土層で黄色軽石と白色粒子を含んだ砂質層である。②は黒褐色土で白色粒子を少量含んでいる。①は暗褐色土で非常に小さい白色粒子とシラスの黄色軽石を含んでいる。なお，拡張の結果，周囲には検出しなかった。



第８図　旧石器時代の出土分布



第９図　Ｅ・Ｆ－3区の出土状況



第10図　旧石器時代の土坑

（２）出土遺物（第11・12図１～18）

旧石器時代の遺物は，前述で示したように３か所に検出した。１～５・８・９までがＥ・Ｆ－３区のⅧ層に出土した一群のものである。１は剥片尖頭器であるが，背面調整と基部調整がおこなわれ，主要剥離面と組み合わして刃部を作っている。丁寧な背面調整は先端部と基部にみられ，先端部は欠損している。なお，石材は頁岩である。２はナイフ形石器である。形は彫刻刀型で背面調整が全体にみられ刃部は主要剥離面と組み合わしている。刃部は横位に近い斜位であり先端部は欠損している。石材は玉髄である。３は主要剥離面が縦長であるフレイクで，下縁に若干のブランティングがみられる。原石の自然面が多くみられるもので石材は黒曜石である。４は一次剥片を加工したもので縁を刃部に利用したスクレイパーと思われる。石材は黒曜石である。５は両面加工されたものでグレイバーの要素をもつ石器である。石材は黒曜石である。８は自然面が残ったフレイクで，上半分が欠損している。剥離面は少なく主要剥離面がみられる。下縁には使用によったと思われる剥離痕がみられる。石材は黒曜石である。９は自然面を残した剥片で，斜方に剥がれたものである。この剥片を剥ぐ段階の前に２面の剥離面がみられる。使用痕は確認できない。石材は黒曜石である。

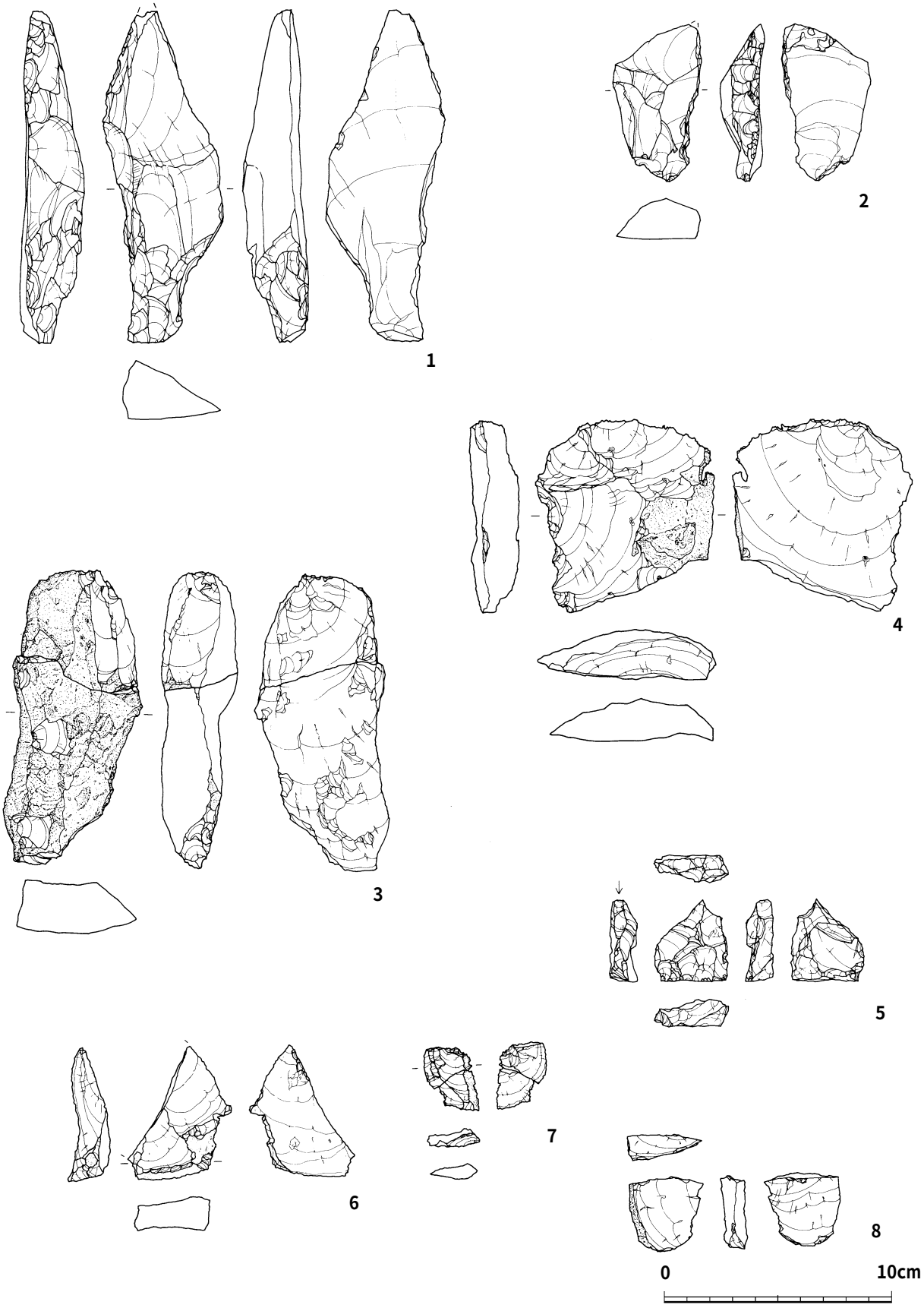
６・７・10はＣ－12, Ｄ－10区のⅧ層に出土した一群のものである。６は自然面が残ったフレイクである。主要剥離面の上位に使用による剥離痕がみられる。石材は黒曜石である。７は小さめの自然面が残るフレイクである。二つに割れた状態である。石材は黒曜石である。10は厚みをもち先端を剥離調整したドリルと思われる。石材は黒曜石である。

以上が旧石器時代の包含層から出土した遺物である。

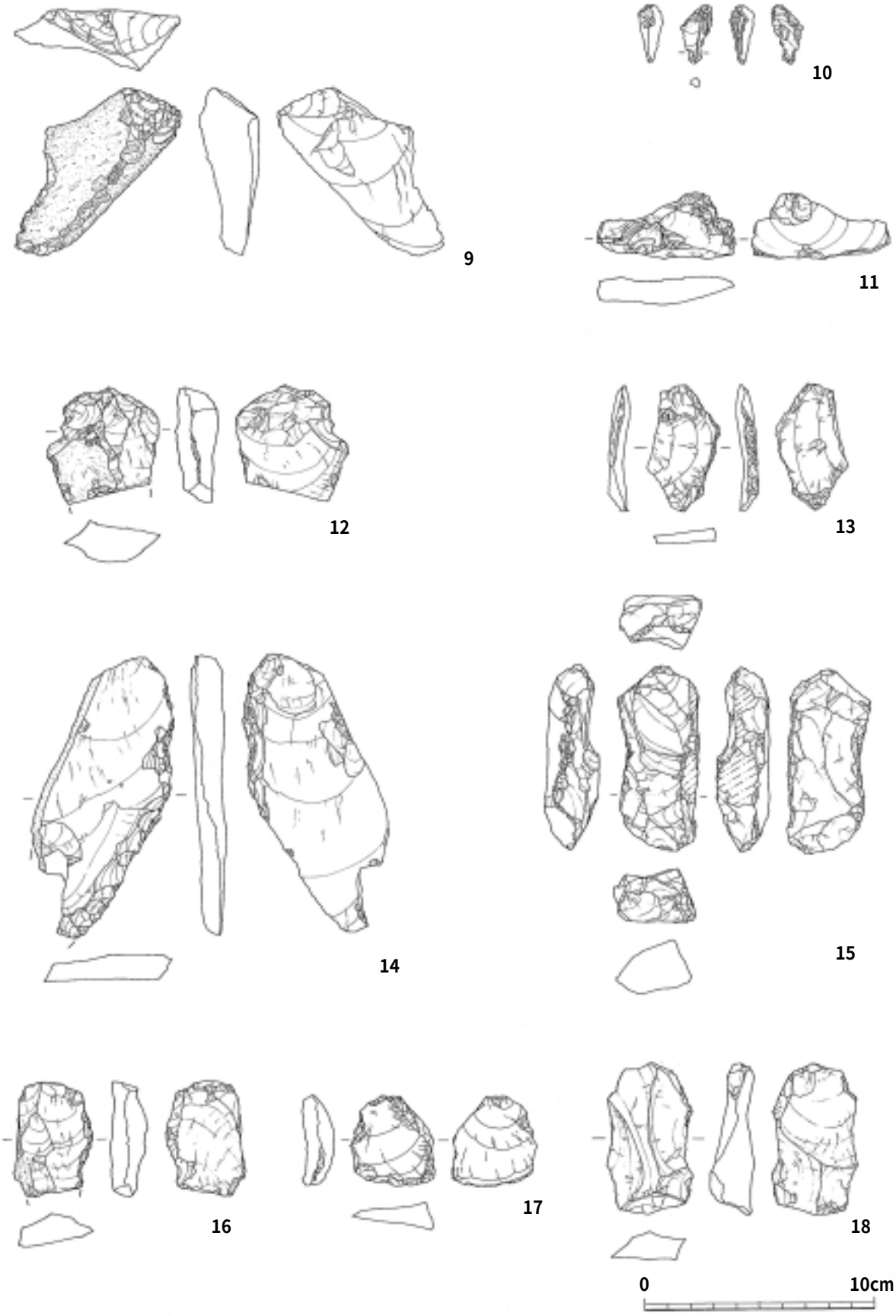
なお，Ｃ－７区から出土した遺物は小フレイクやチップのため搭載しなかった。

11～18は表面採集，Ⅰ・Ⅱ層の出土遺物である。形態や調整痕で旧石器時代の層から遺物がなんらかの作用で上がってきたと考えられる。

11は横剥ぎのフレイクである。断面が三角形を示しているが背面調整はみられない。石材は黒曜石である。12は剥離面に自然面が残る縦長剥片で，半分欠損したスクレイパーである。刃部は両縁と思われる。石材は玉髄である。13は横剥ぎのフレイクを背面調整した石器である。用途はスクレイパー的であるが形としてはナイフ形石器である。石材は黒曜石である。14は縦長剥片を利用したスクレイパーである。刃部は片方の縁をブランティングして作っている。石材は頁岩である。15は厚い剥片の両縁を加工したものである。用途はスクレイパー的なものが考えられる。石材は玉髄である。16は厚手自然面が残る剥片を加工したもので，スクレイパー的用途が考えられる。石材は玉髄である。17 は薄手の第一次剥片を利用したスクレイパーと思われる。石材は玉髄である。18は使用痕のある剥片である。石材は玉髄である。



第 11 図　旧石器時代の出土遺物（1）



第12図　旧石器時代の出土遺物（2）

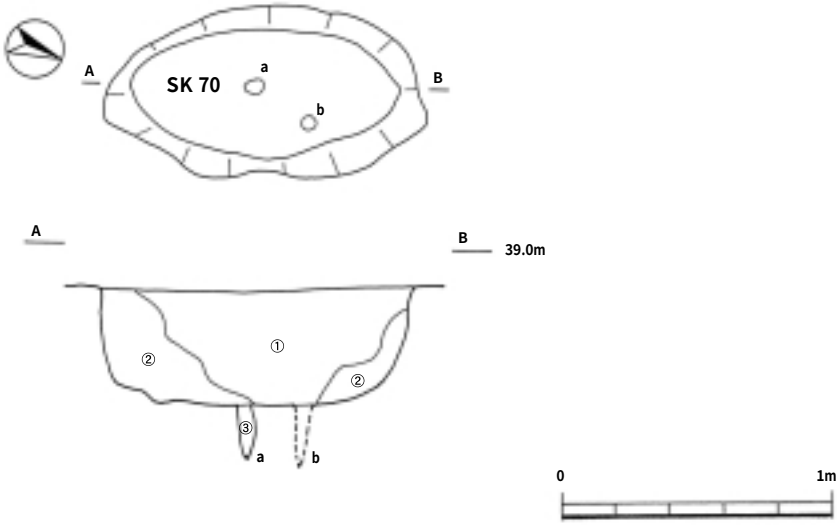
２　縄文時代

（１）　遺構

遺構はＥ－４区のＶ層上面に楕円形の土坑が検出した。規模は長径１ｍ15 ㎝短径 65 ㎝深さ 48 ㎝で，半裁した結果，径 5 ㎝深さ 20 ㎝の円錐形をした逆茂木用と考えられる細穴が２穴確認された。よって，この遺構は落とし穴の遺構と考えられる。

遺構内の埋土②は埋まる最初の埋土はにぶい褐色シルトが流れ込んだ状態で，その後，埋土①の明褐色シルト層が埋まってきている。明褐色シルト層はアカホヤ火山灰に比定されるもので，軽石も含まれている。逆茂木穴③は褐色シルト層でしまりがよい。

現在の深さは浅いが，アカホヤ層堆積後の生活面と考えると，まだ深さがあると考えられる。床面は平坦に作られ凹凸が少なく，壁の立ち上がりも床面に対して直に立ち上がり，全体に丁寧につくられた土坑である。遺物の出土はなかった。



第 13 図　縄文時代の土坑（落とし穴）

（２）　出土遺物

土器（第 14 図 19～39）

19～28 は早期の土器である。19 は円筒形の土器で器面に貝殻条痕を横位に施し，口縁部には貝殻刺突がみられる。内面はヘラ掻き調整である。20 は外反する口縁部で断面が鋭角を呈する。外面の文様は短い貝殻条痕を鋸歯状に施している。21・22 は円筒土器の底部近くの部分である。外面はヘラ掻き上げを縦位に施している。23 は平底の底部である。外面の文様は短い貝殻条痕を組み合わしている。24～27 は外開きする厚手で胴部の器面に山形押型文を横位・斜位に施している。

29～35 は中期の土器である。29 は口唇部の平坦面に刻みを施した薄手の直行する口縁部である。30～33 は直行する器形で太い凹線文の文様を施している薄手の土器である。内面はヘラ掻き撫でで横位・斜位に施している。文様は 30・31 にみられるように直線のみの部分や 32・33 にみられように直線を基本に組み合わせた三角形がある。34 は凹線文を渦巻き状に施し，口縁部は蒲鉾状の突起がみられ，口唇部に竹管文の刺突がみられる。35 は薄手の土器で突帯の上下に刺突を横位に施して

いる。胎土は 29～33・35 は滑石が少々混ざり，焼成は硬質である。34 の胎土は滑石がなく焼成も柔い。

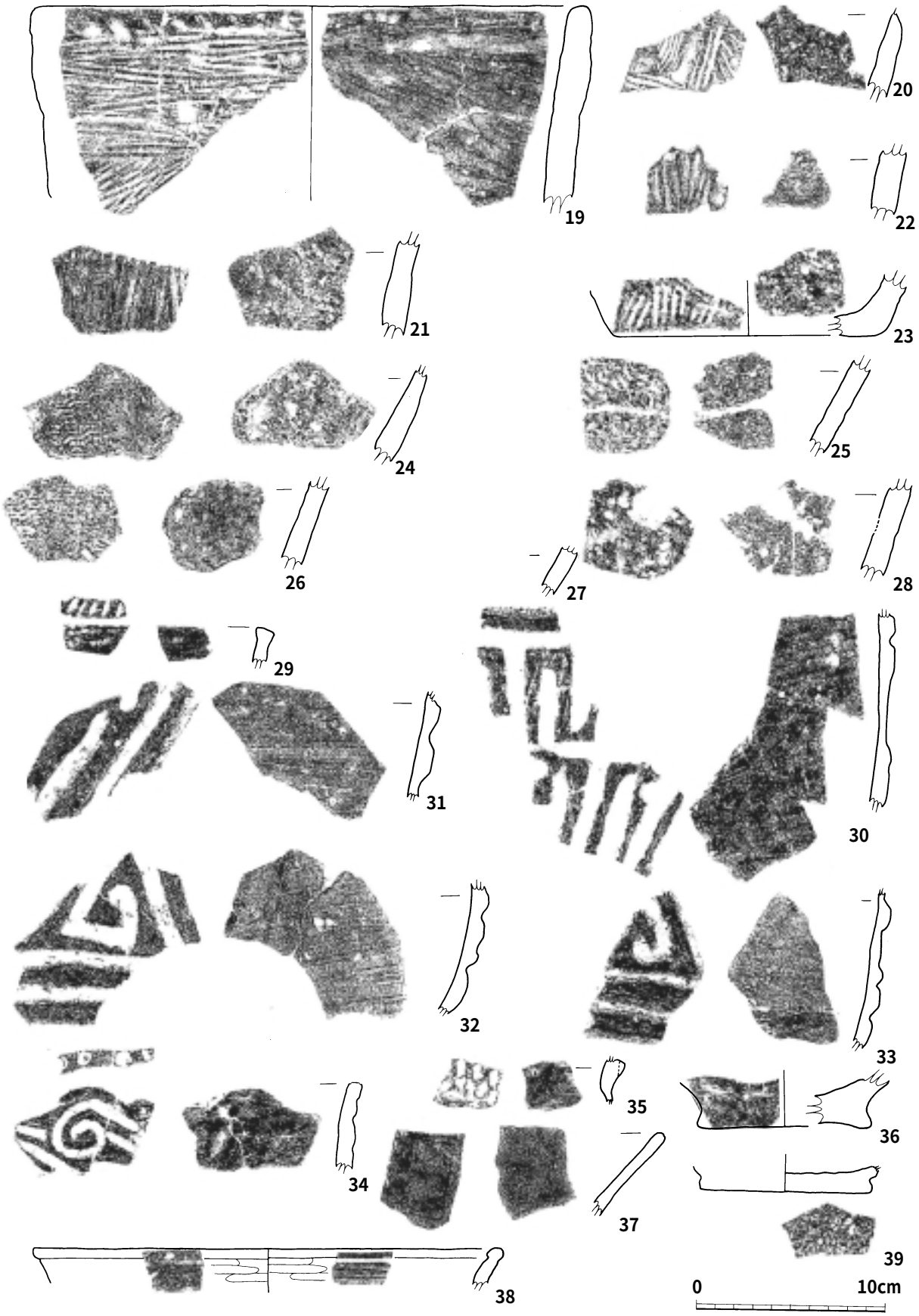
36～39 は晩期の土器である。36 は深鉢の底部である。器形は平底で張り出しがみられるものである。37 は浅鉢で，直線的に外開する口縁部の黒色研磨土器である。38 は浅鉢で，口縁部の内外面に段差がみられる玉縁を呈するものである。器面は黒色研磨が施されている。39 は浅鉢の底部である。内面は少し剥落しているが黒色研磨土器である。

石器（第 15～19 図 40～76）

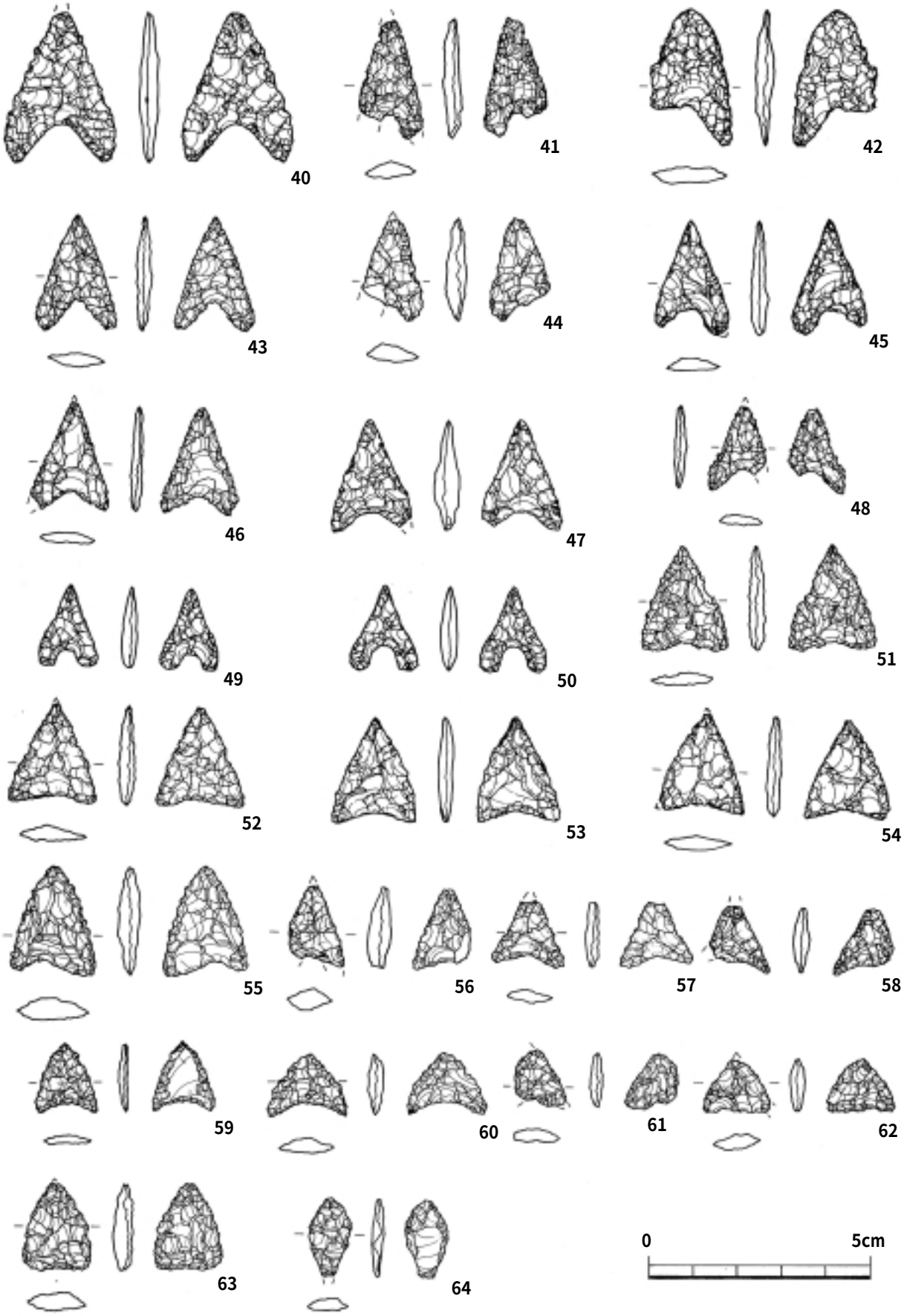
40～64 は石鏃である。40 は溝２から出土し，大型の２等辺三角形で抉りが深いタイプである。石材は黒曜石である。41 は畠内から出土し，抉りの深い長目の二等辺三角形タイプである。石材は黒曜石である。42 はⅤ層から出土し，深い抉りを持つもので幅広タイプである。石材は黒曜石である。43 は溝３から出土し，抉りの深い長めの二等辺三角形タイプである。石材は黒曜石である。44 は柱穴から出土し，前タイプと同じである。石材は黒曜石である。45 は４ＴⅢ層から出土し，抉りの深い前タイプと同じである。石材は黒曜石である。46 はD－10 区Ⅲ層から出土し，前タイプと同じである。石材は頁岩である。47 は方形竪穴１から出土し，前タイプと同じである。石材は黒曜石である。48 はD－５区Ⅲ層から出土し，抉りの深い二段脚タイプである。石材は黒曜石である。50 はG－17 区Ⅲ層から出土し，抉りの深い二段脚タイプである。石材は玉髄である。51 はD－８区Ⅱ層から出土し，抉りの浅い正三角形タイプである。石材は黒曜石である。52 はF－４区Ⅲａ層から出土したもので，抉りの浅い正三角形タイプである。石材は頁岩である。53 はF－18 区Ⅱ層から出土し，前タイプと同じである。石材は頁岩である。54 は溝３－Ⅰ層から出土し，前タイプと同じである。石材は玉髄である。55 はE－６区Ⅰ層に出土し，丸みを持つ抉りの浅いタイプである。石材は頁岩である。56 はC－11 区Ⅴ層から出土し，前タイプと同じである。石材は玉髄である。57 はF－７区Ⅰａ層から出土し，前タイプと同じである。石材は頁岩である。58 はG－16 区Ⅱ層から出土し，前タイプと同じである。石材は黒曜石である。59 はC－９区Ⅱ層から出土し，前タイプと同じである。石材は黒曜石である。60 は５Ｔ－Ⅱｂ層から出土し，抉りの浅い幅広三角形タイプである。石材は頁岩である。61 はE－７区Ⅰｂ層から出土し，抉りの浅い幅広三角形タイプである。石材は黒曜石である。62 はE－４区Ⅴ層に出土し，前タイプと同じである。石材は黒曜石である。63 はD－３区Ⅰｂ層から出土し，抉りの浅い丸みを持つタイプである。石材は黒曜石である。64 はE－８区Ⅰｂ層から出土し，木の葉状を呈する。石材は黒曜石である。

65～67 はスクレイパーの類である。65 はC－７区Ⅰｂ層から出土した横形の両面剥離調整をした石匙と思われる。石材は頁岩である。66 はE－８区Ⅴ層から出土したもので親指状に調整したものである。石材は黒曜石である。67 はF－９区Ⅶ層に出土したもので，縦長剥片に片歯調整をしたものである。石材は頁岩である。これらは旧石器時代の可能性もある。

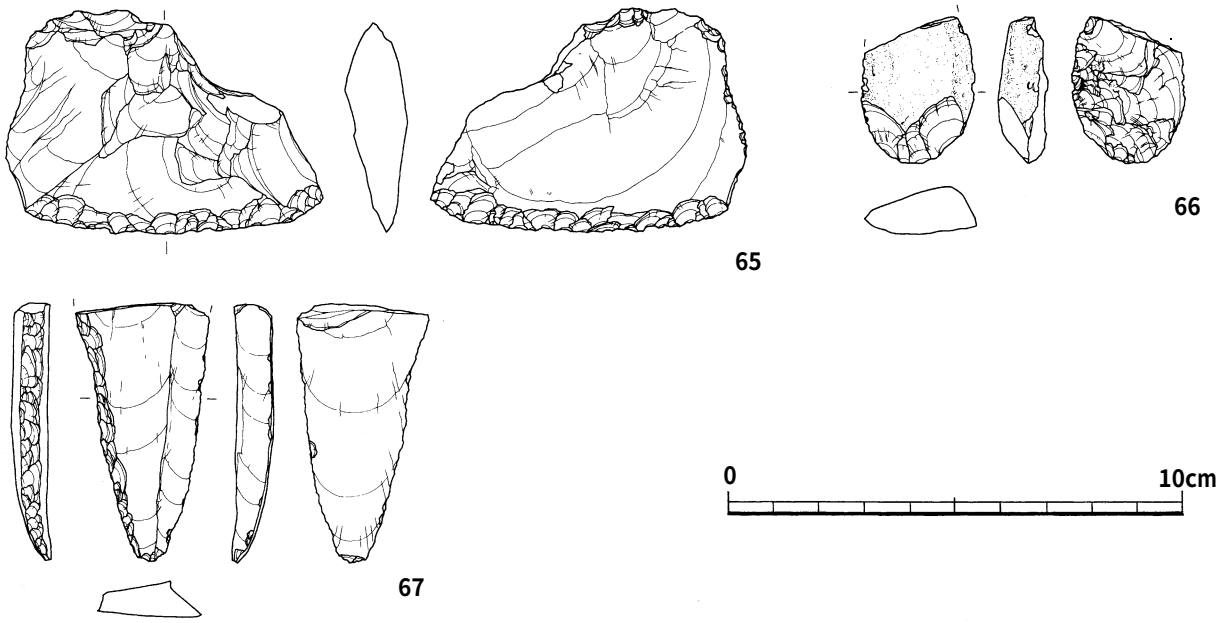
68～71 は石斧類である。68 はD－６区Ⅱ層に出土したもので，全面を両面から磨いた磨製石斧である。石材は金雲母が混入したホルンフェルス（花崗岩質）である。69 は山部の表採で，磨製石斧の刃部である。石材は頁岩である。70 は山部６Ｔから出土したもので，自然面を利用した打製石斧である。石材は頁岩である。71 はB－６区Ⅱ層に出土したもので，自然面を利用した打製石斧である。石材は安山岩である。



第 14 図　縄文時代の出土遺物（1）　土器



第 15 図　縄文時代の出土遺物（2）　石器1



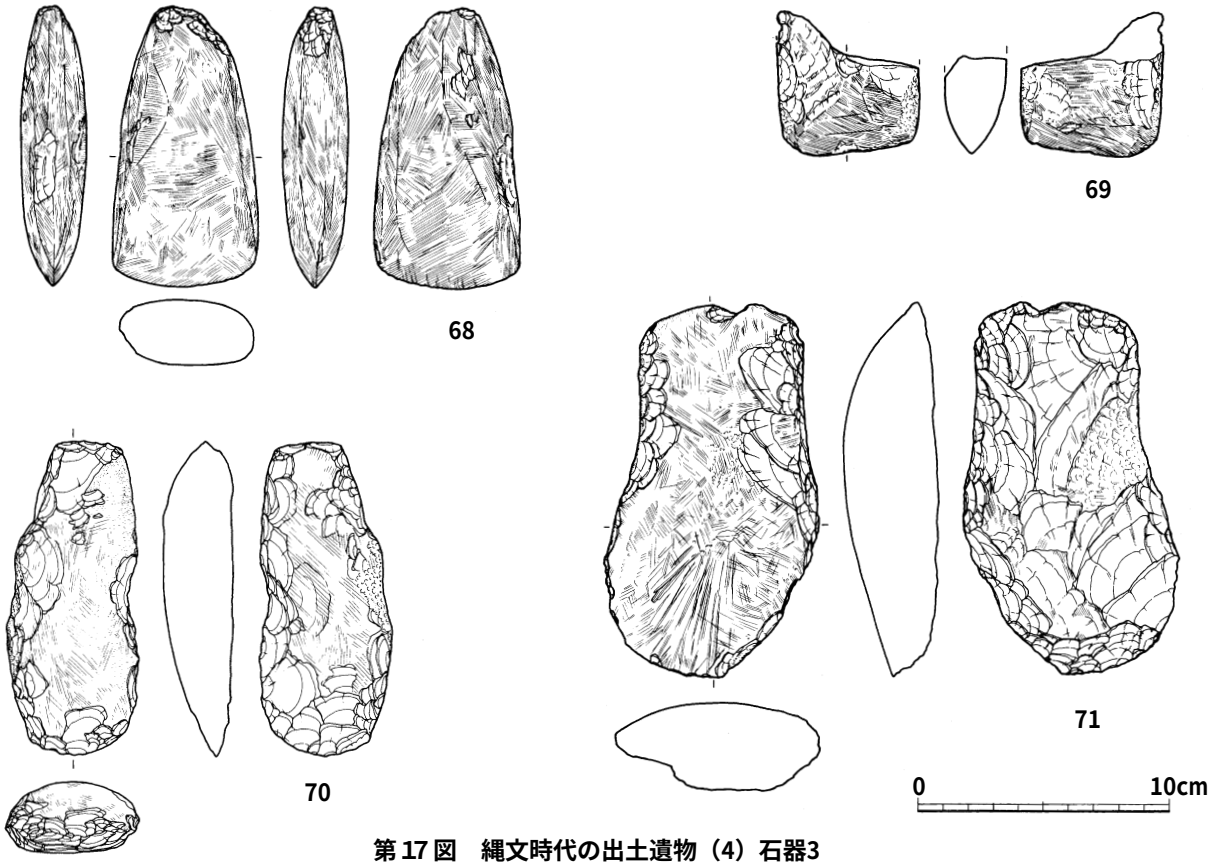
第 16 図　縄文時代の出土遺物（3）　石器2

72～75 は磨石・凹石・敲石である。

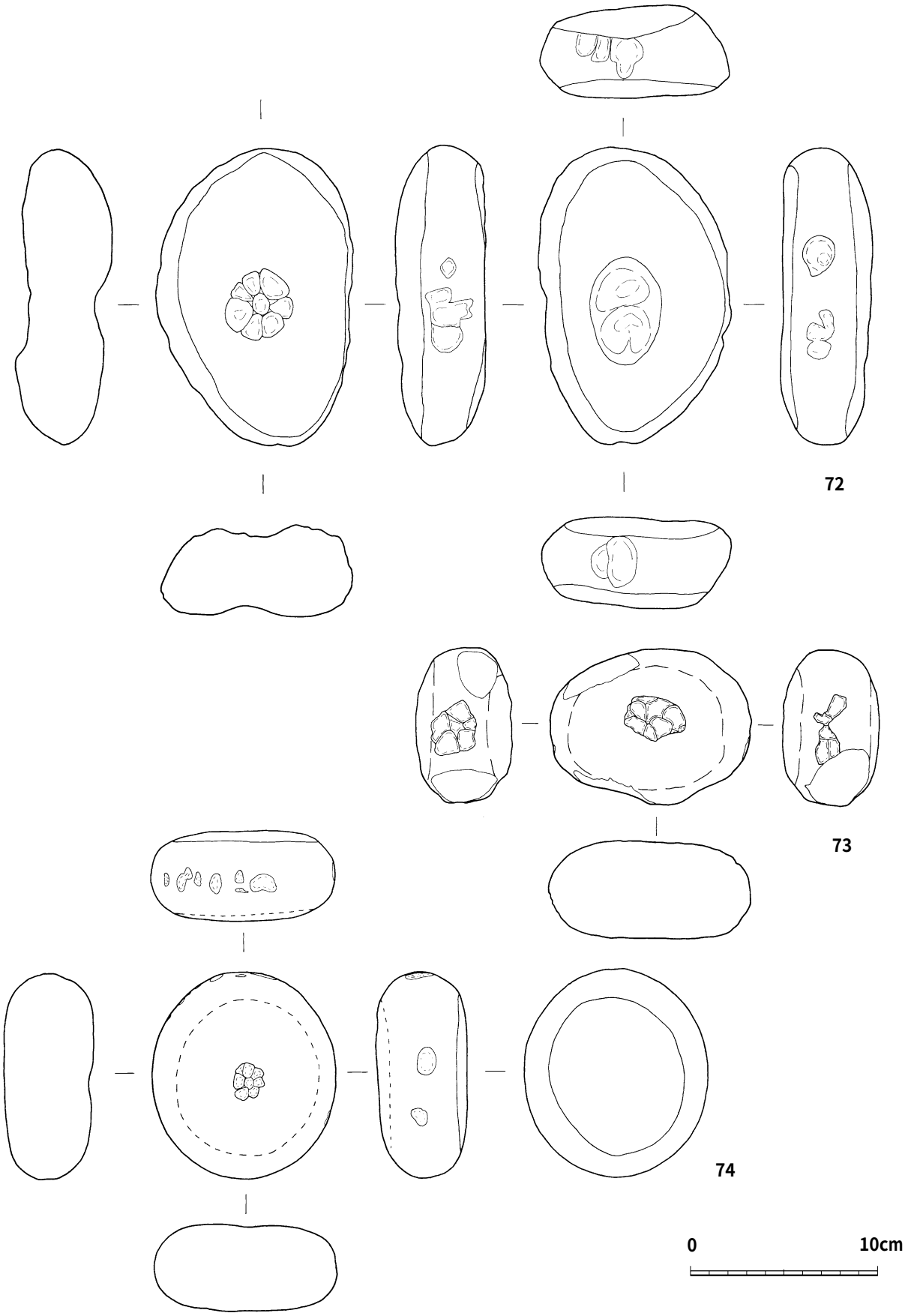
72～74 は凹石と敲石使用である。石材は 72・73 が安山岩 74 が砂岩である。石材の粒子は 72 が粗く他は細かい。

76～78 は片面を使用された石皿である。石材は 76 が安山岩，77・78 が頁岩である。

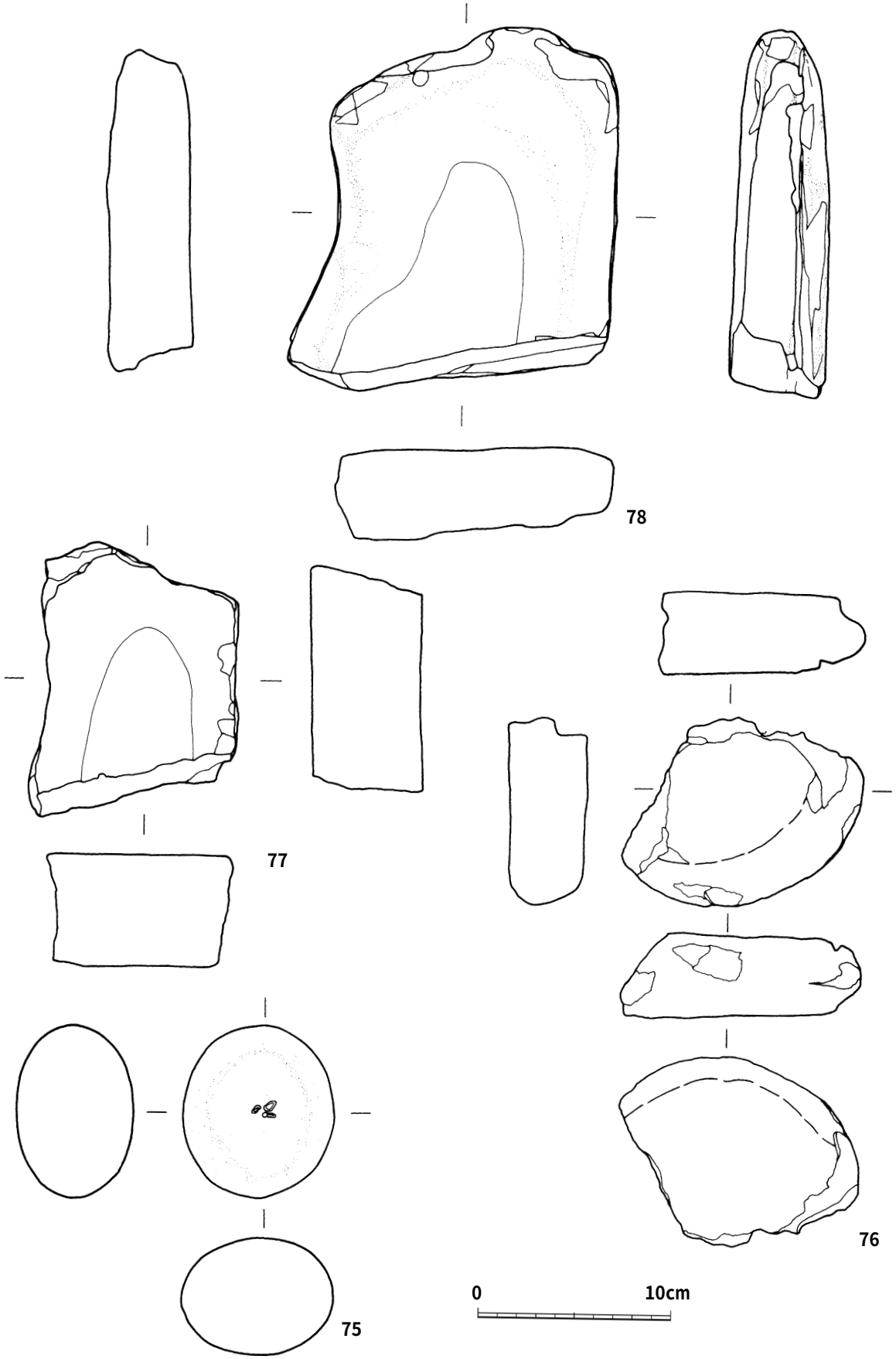
76 は火を受けたようにボロボロと割れる　他は半欠である



第 17 図　縄文時代の出土遺物（4）石器3



第 18 図　縄文時代の出土遺物（5）　石器4



第19図　縄文時代の出土遺物（6）　石器5

３　古墳時代

（１）　遺構（第20図　古墳時代・古代土坑１～25）

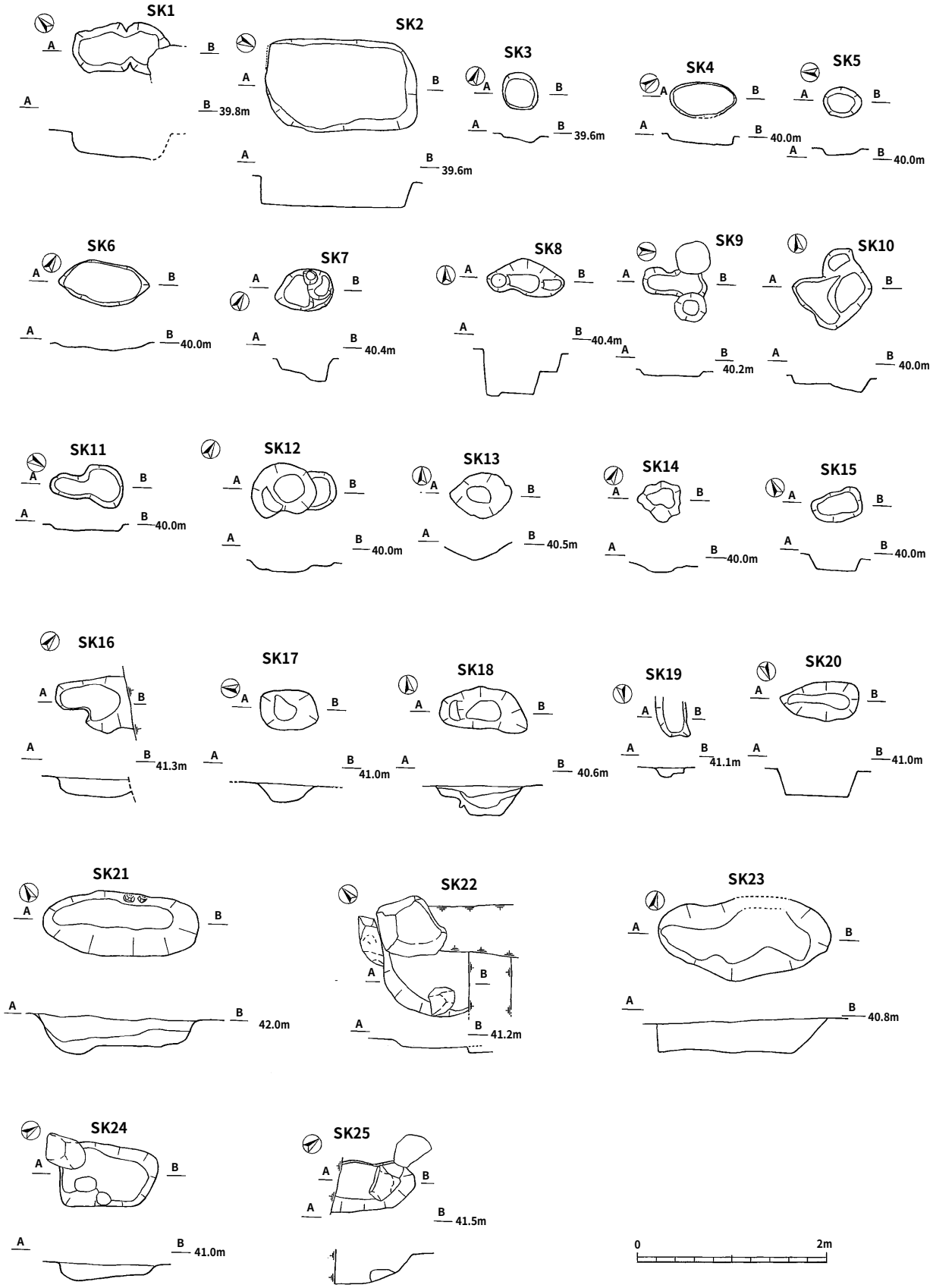
この時代の遺構と次の古代の遺構は検出状況の判断では中世の遺物が混入しているものの埋土と違いⅢ層上面の埋土がみられるものである。形状は円形，楕円形，方形のほか変則形のものが 25 基検出されている。これらの土抗は規則性やまとまりが見あたらない。

第２表　古墳時代・古代の土抗

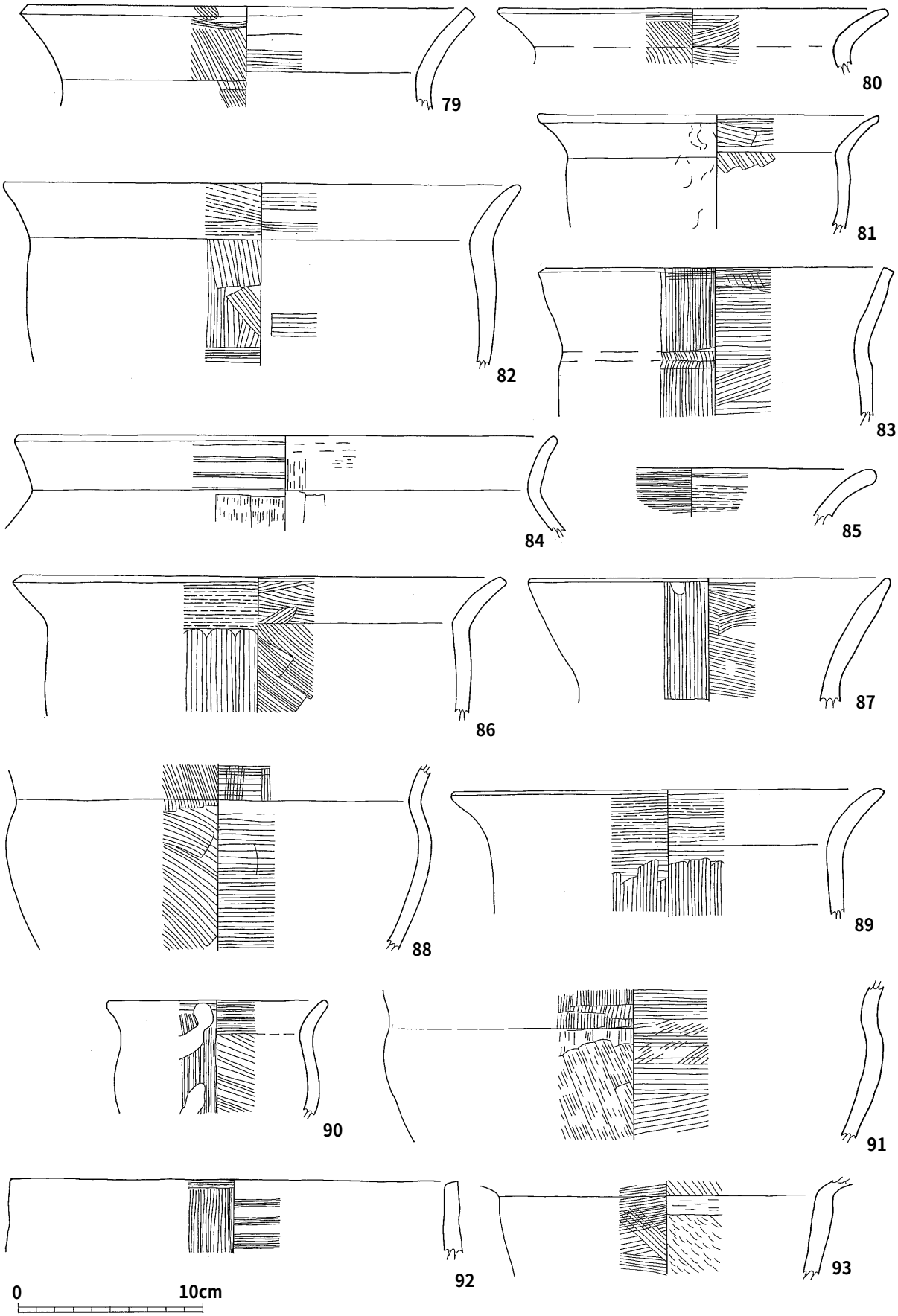
No.	検出区	検出番号	長　軸 (cm)	短　軸 (cm)	深　さ (cm)	形態	規模・特徴
1	Ｄ－２	P453/455	108	50	20	長方形	小が２連結
2	Ｄ－２	Sk51	158	98	30	長方形	大
3	Ｅ－４	P132	40	35	8	長方形	小
4	Ｅ－７	P298	70	60	10	楕円形	小
5	Ｅ－８	P477	40	30	10	円形	小
6	Ｅ－７	P306	95	45	8	楕円形	小
7	Ｃ－６	P852	60	45	35	円形	小
8	Ｃ－５	P660～662	80	35	50	変則楕円形	小が３連結
9	Ｃ－６	P353	65	30	6	長方形	小が２連結
10	Ｄ－７	P1576	88	80	15	変則方形	中が３連結
11	Ｄ－６	P1561/1562	75	40	7	円形	小が２連結
12	Ｄ－６	P1152/1153	88	60	10	円形	小が３連結
13	Ｅ－９	P510	65	50	15	円形	小で尖り底
14	Ｅ－８	P449	43	43	7	変則円形	小
15	Ｃ－９	P968	55	30	12	長方形	小
16	Ｃ－14	Sk16	78α	55	20	変則長方形	小
17	Ｄ－11	Sk32	60	40	16	変則長方形	小
18	Ｃ－11	Sk21	90	40	30	変則長方形	小
19	Ｄ－13	P10	40α	30	8	長方形	小
20	Ｄ－12	Sk30	75	30	25	変則楕円形	小
21	Ｄ－11	Sk22	168	67	40	楕円形	大，底に窪み有
22	Ｃ－14	Sk15	88α	70α	8	円形	溝で切られる
23	Ｄ－12	Sk36	180	85	40	楕円形	大
24	Ｄ－19	Sk17	105	67	18	長方形	中，石有り
25	Ｃ－13	Sk2	70α	50	30	楕円形	小，石有り

（２）　出土遺物（第21～25図　79～144）

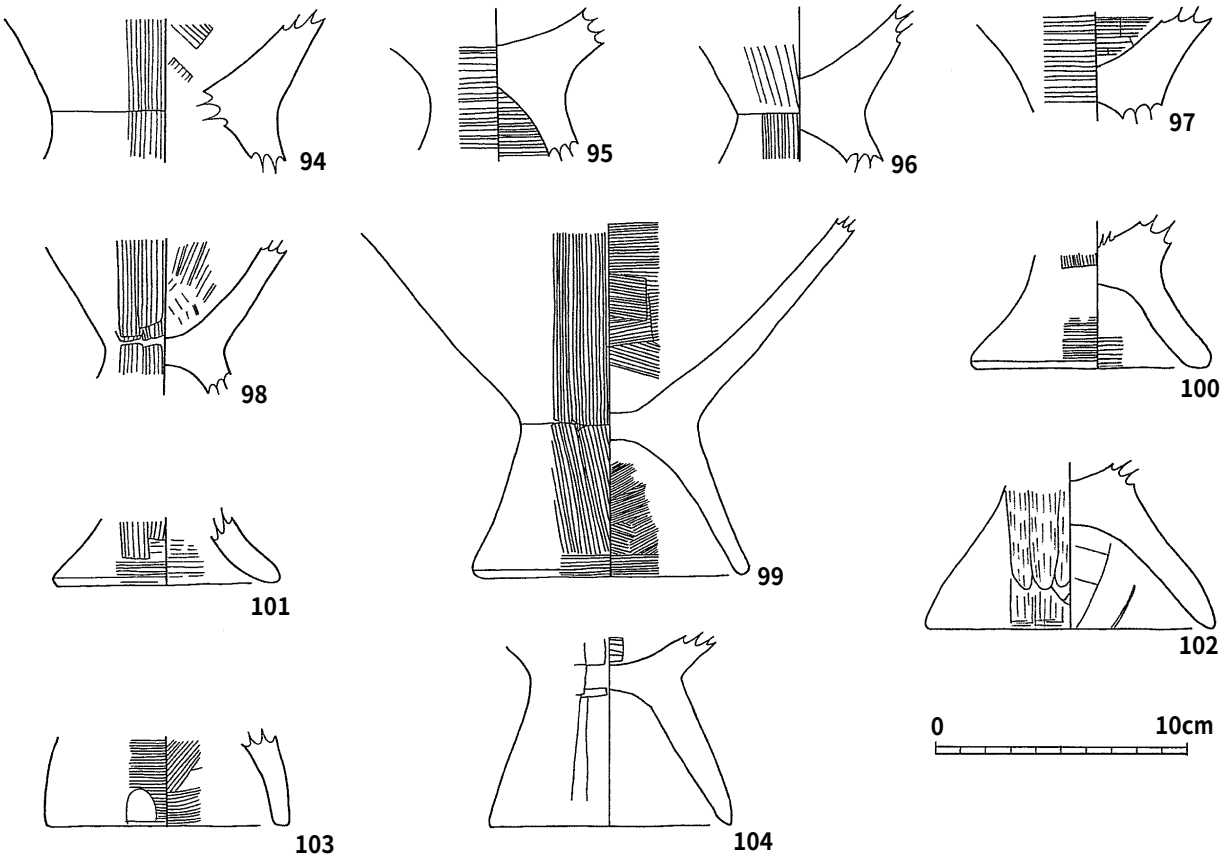
ア　甕形土器（第21・22図　79～104）



第20図　古墳時代・古代の土坑

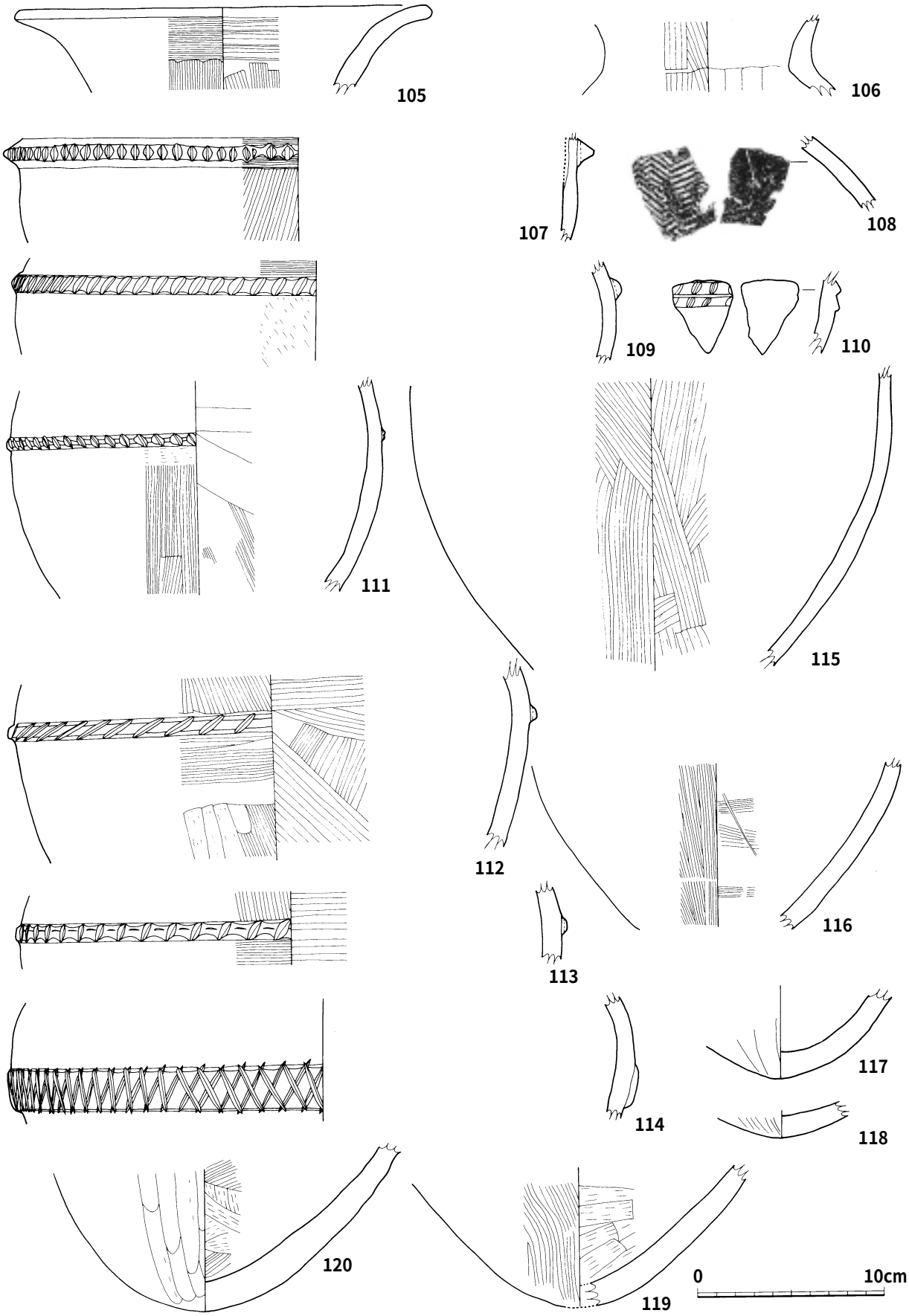


第21図　古墳時代の出土遺物（1）甕１

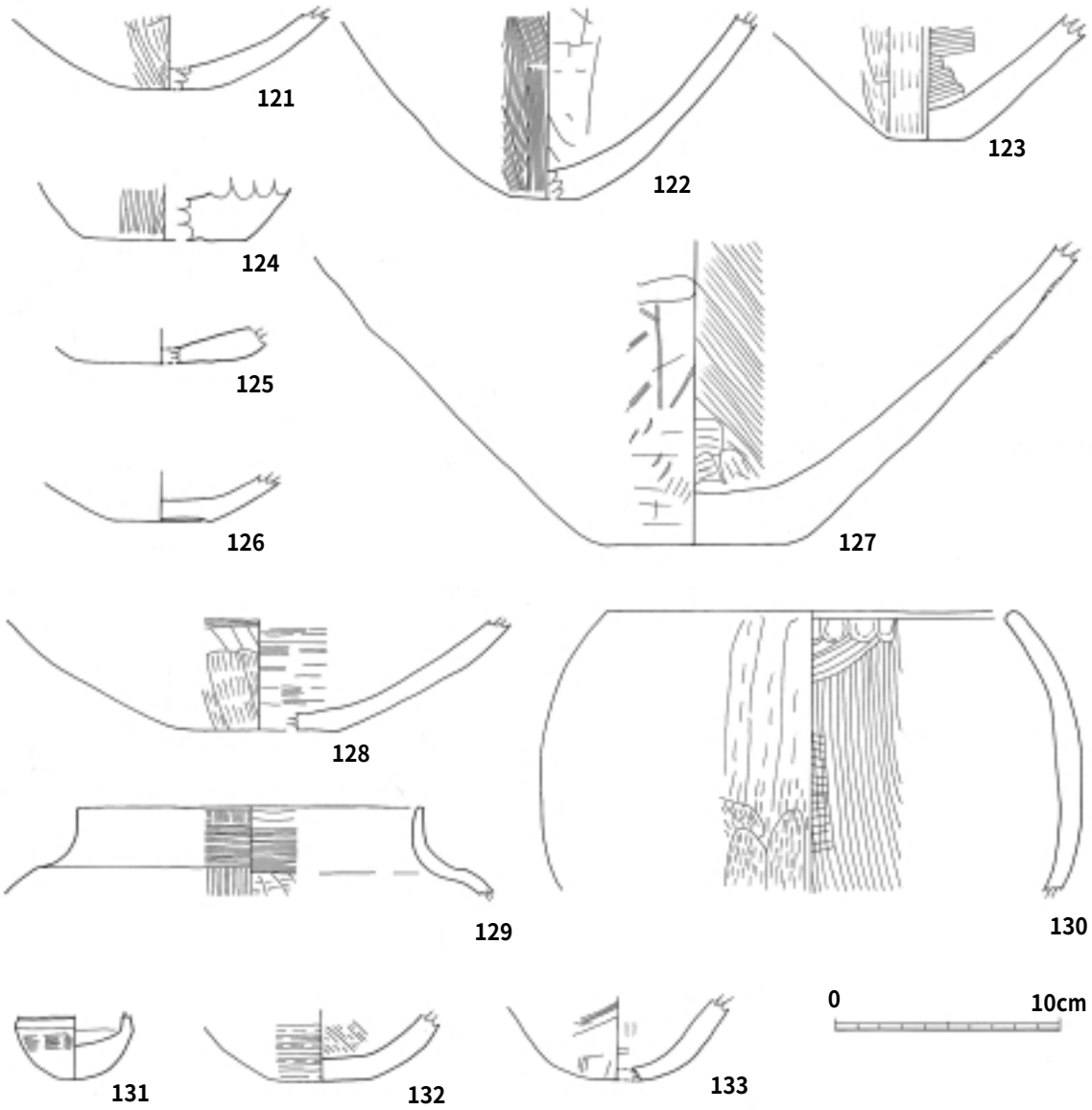


第22図　古墳時代の出土遺物（2）甕2

79 は頸部で「く」の字状に外反する口縁部である。器面は刷毛目調整を斜位に施している。80 は頸部で「く」の字状に大きく外反する口縁部である。器面は刷毛目調整を斜位に施している。81 は頸部で「く」の字状に外反する口縁部である。内器面は刷毛目調整を短く斜位に施している。外面は手撫で気味である。82 は頸部で「く」の字状に外反する口縁部をもち胴部は若干張る器形である。器面は刷毛目調整を斜位に施している。83 は頸部で「く」の字状に外反する口縁部である。器面は刷毛目調整を縦位と横位に施している。84 は頸部で「く」の字状に大きく外反する口縁部で，肩部は大きく張る器形である。器面は刷毛目調整を横位と縦位に施している。85 は頸部で「く」の字状に外反する口縁部である。器面は刷毛目調整を横位に施している。86 は頸部で「く」の字状に外反する口縁部で，胴部は若干張る器形である。器面は刷毛目調整を縦位と斜位に施している。87 は頸部で「く」の字状に外反する長めの口縁部である。器面は刷毛目調整を縦位と斜位に施している。なお，頸部の折れ線部は明瞭でない。88 は頸部で「く」の字状に外反する口縁部からやや膨らみを持つ胴部である。器面は刷毛目調整を斜位と横位に施している。なお，口唇部は欠損している。89 は頸部で「く」の字状に外反する口縁部である。器面は刷毛目調整を縦位に施している。なお，頸部の折れ線は明瞭でない。90 は頸部で「く」の字状に外反する口縁部である。器面は刷毛目調整を縦位と斜位に施している。なお，頸部の折れ線は明瞭でない。91 は頸部で「く」の字状に外反する口縁部からやや張る胴部である。器面は刷毛目調整を斜位と横位に施している。92 は直行する口縁部で，縦位と横位に刷毛目調整を施している。93 は頸部で折れ，直行する胴部である。器面は刷毛目と掻き撫で調整である。



第23図　古墳時代の出土遺物（3）壺1



第 24 図　古墳時代の出土遺物（4）　壺2

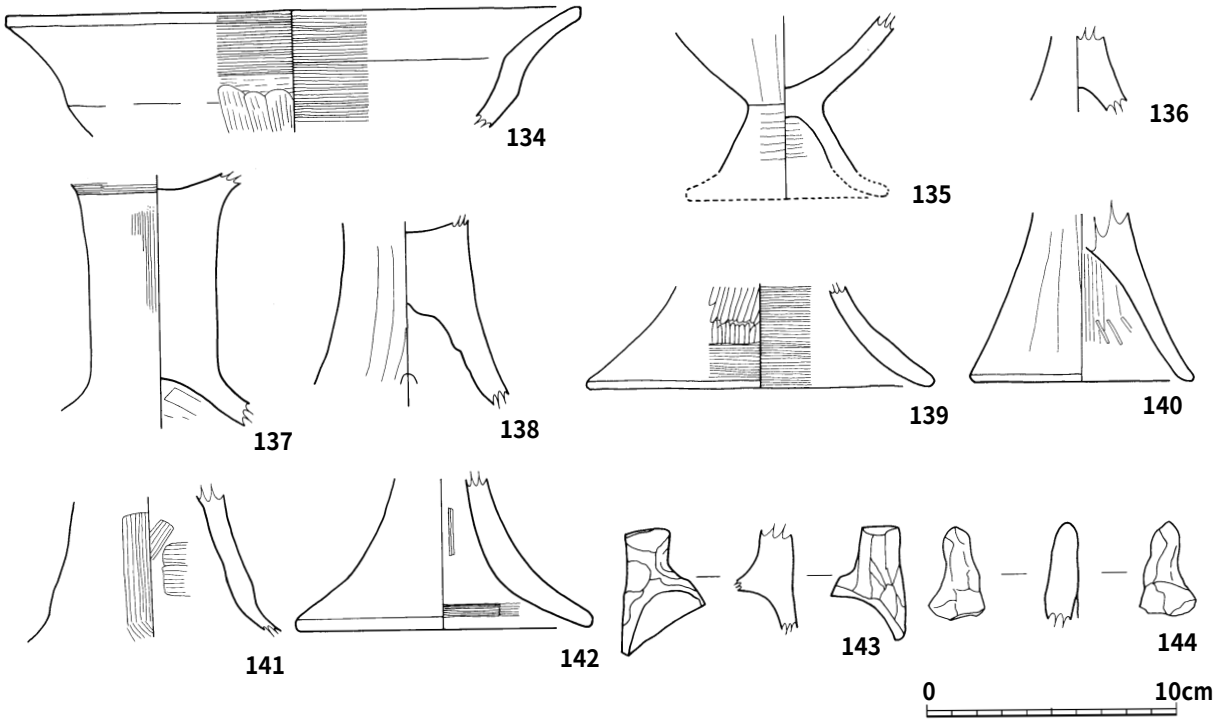
94～104 は脚部をもつ底部である。100・101 は外反し，99・102・104 は直行し，103 は内反する。器面は刷毛目調整である。

イ　壺形土器（第 23・24 図　105～133）

105 は外反する口縁部で，器面は刷毛目調整である。106 は直行する頸部で，器面は刷毛目調整である。108 は鋸歯状の文様をもつ胴部である。傾きと文様からみれば長頸壺の可能性が高い。107・109～114 は肩部ないし胴部にある突帯部である。突帯の刻みは箆で縦位・斜位・格子状に施している。115・116 は胴部から底部で，刷毛目調整がみられる。117～128 は底部である。117～120 は尖り気味の丸底で，121・122 は平底気味の丸底，123～128 は平底である。なお，器面調整は刷毛目である。129 は口縁部が直行する肩部の張る薄手のものである。器面調整は刷毛目である。130 は無頸壺とおもわれる。器面調整は刷毛目と箆削りと指つかみ調整である。131～133 は坩の類である。

ウ　高坏・手づくね製品（第 25 図　134～144）

134 は段を持ちながら外反する坏部である。器面調整は刷毛目である。135 は脚の低いもので



第 25 図　古墳時代の出土遺物（5）　高坏・手づくね

坏の開きが狭く深い器形をしている。136 は小型のものである。137 は脚に筒部をもつもので，脚は大きく外開きする。138 は短い筒部をもつものである。139 は大きく開いた脚部である。器面調整は外面が研磨で内面が刷毛目である。140 は狭く開いた脚部である。141 は広幅の脚部である。142 は大きく開いた脚部で，内面に刷毛目がみられる。143・144 は匙の手づくねの一部である。

４　古代

（１）　遺構

遺構は第 20 図の古墳時代と区別ができなかった。

（２）　遺物（第 26～28 図　145～196）

ア　甕形土器（第 26 図　145～161）

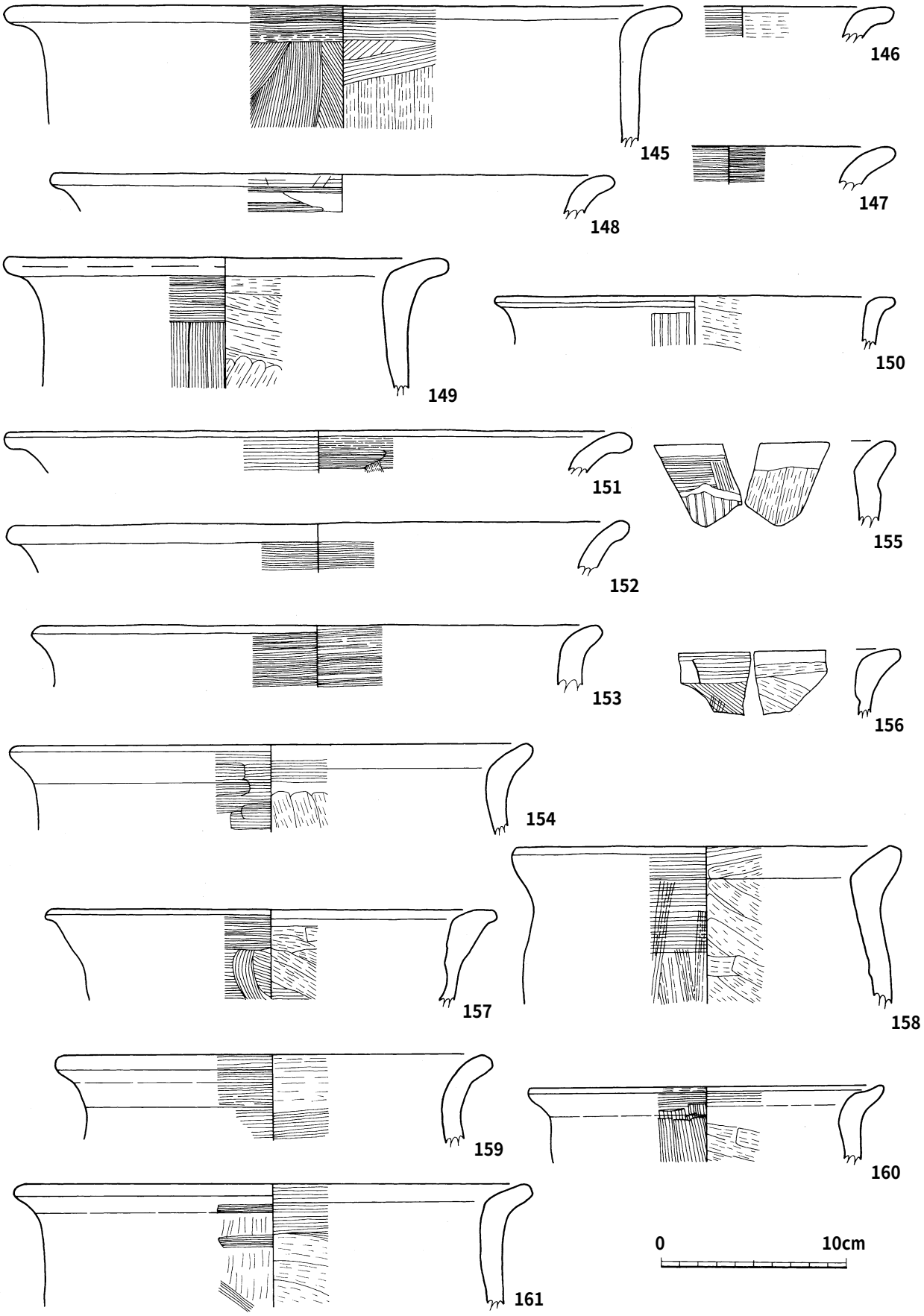
器形は口縁部が「L」字状になるものと，「く」字状になるものと，「C」字状になるものとに分けられる。器面調整は外面が刷毛目で，内面は篦削りである。

「L」字状のものは 145・146・149・150・153・156・157・160 である。「く」字状のものは 154・155・158・161 である。「C」字状のものは，147・148・151・152・159 である。

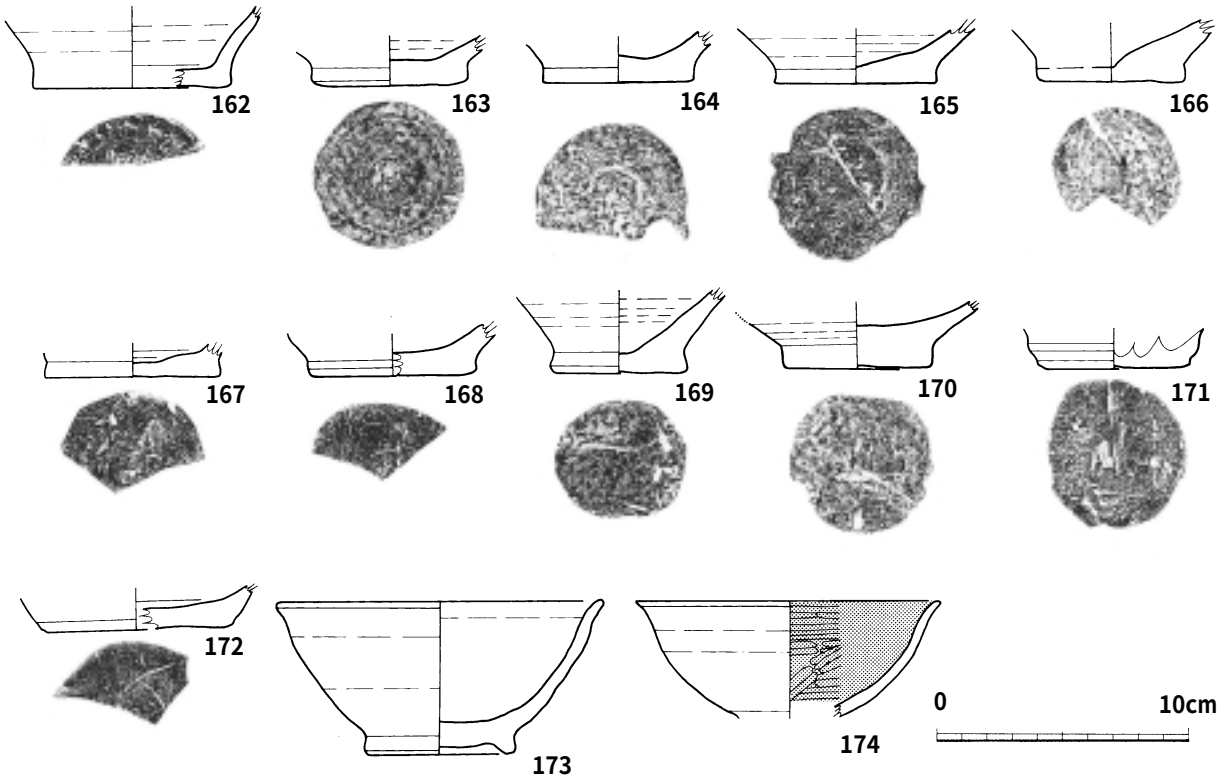
器面の外面調整は口縁部が横位で頸部は縦位が多い。

イ　坏（第 27 図　162～172）

162 は薄手の底部で外反する器形である。底部の切り離しは篦である。163 は厚手の底部で外反する器形である。底部の切り離しは篦である。164 は厚手の底部で外反する器形である。見込みの中央部は盛り上がりがみられる。底部の切り離しは篦である。165・166 は厚手の底部で外反する器形である。見込みの中央部は薄くなっている。底部の切り離しは篦である。167・168 はやや厚手の底部で，底部の切り離しは篦である。169・170 は厚手の底部で，底部の切り離しは篦である。



第26図　古代の出土遺物（1）　甕



第 27 図　古代の出土遺物（2）　坏・椀

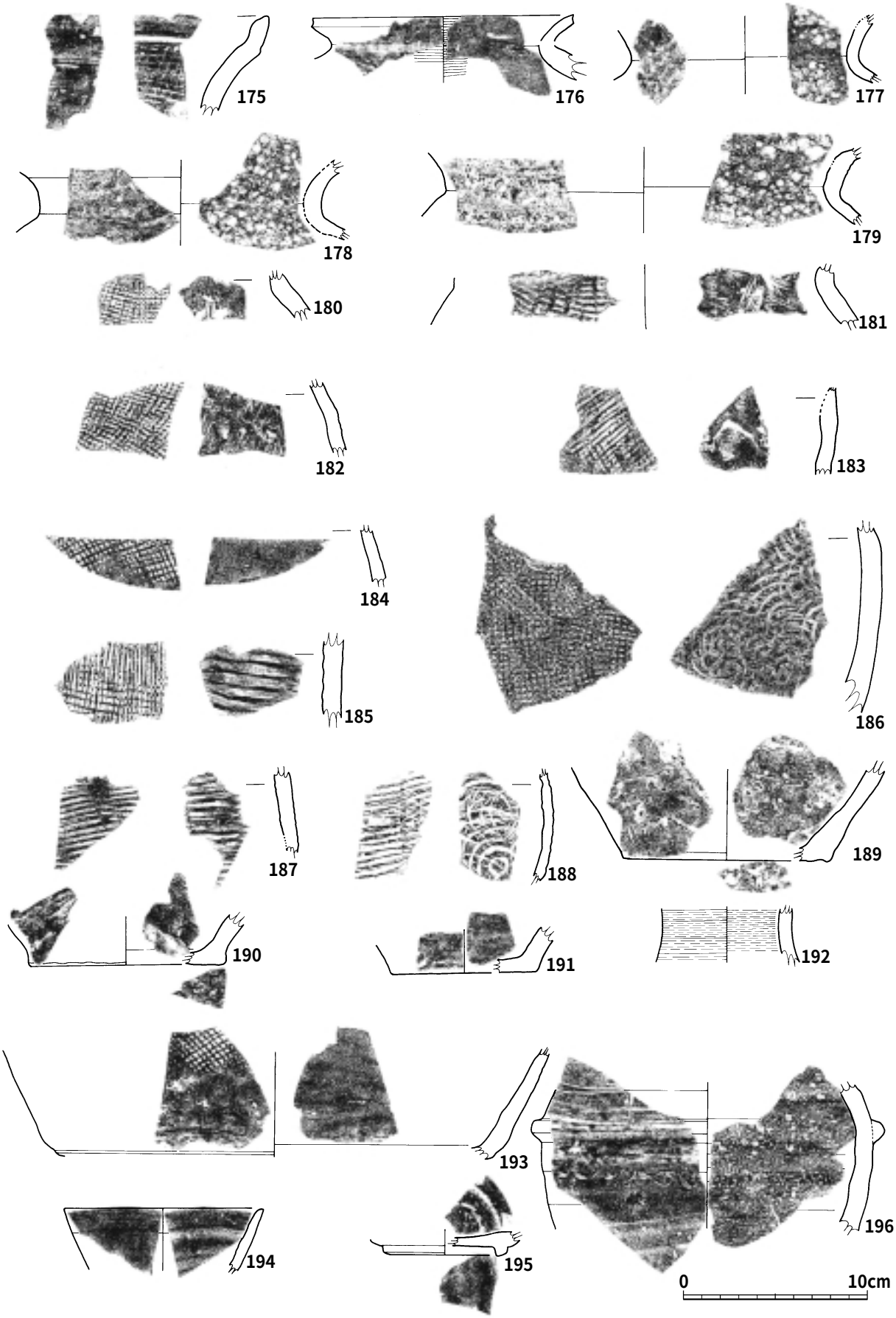
171・172 は底部の外縁が斜めに削られている。底部の切り離しは篦である。

ウ　椀（第 27 図　173・174）

173 は口縁部が外反し，体部は丸みをもちながら湾曲している。底部の高台は低く若干外開き気味で幅が広い。174 は口縁部が外反し，体部は湾曲している。これは内黒土師器で黒色土器Ａである。

エ　須恵器（第 28 図　175～196）

175 は外反する甕の口縁部である。176・177・178・179 は「く」の字に外反する甕の短い口縁部である。180・181 は甕の頸部である。182～188 は甕の胴部で敲き目がみられる。189～19 1 は壺の底部である。192 は壺の頸部でロクロ調整痕がみられる。193 は盤の可能性がある。194 は直行する坏である。195 は椀の底部で低い幅広い高台が若干外開き気味にみられる。196 は肩部から胴部にかけての部位である。肩部に突帯がみられる。器形は蔵骨器に類似している。192 の頸部や 190 の底部は同一個体の可能性もある。



第28図　古代の出土遺物（3）須恵器

５　中世

（１）　遺構

中世遺構は平坦部であるＢ～Ｆ－２～16 区のⅢ層上面に検出した。

調査区は標高 57ｍの山地より西側に拡がる平坦地形で標高約 40m である。調査の結果，山手側が一段低くなっており，北側が高く南側に向かってなだらかに低くなっている。また，Ｂ－２～６区より東側が約 50 ㎝一段高く直線状に造成されている。

遺構は全面に検出し，ピット・土坑・方形竪穴遺構・溝・畠跡・焼土等が 1400 以上にも及ぶ数であった。第 29 図はその全体図である。北側の崖より約 10m から掘立柱建物跡がみられる。この北側の崖はシラス台地の端で崖下は湿地や水田となっているため崩壊がくり返していた可能性が高く，当時はまだ崖との距離があったと考えられる。

遺構は第 29 図で示したように，掘立柱建物跡 32 棟，方形竪穴遺構５基，溝７本，土壙墓と思われる土坑４基，炉跡と思われる土坑５基，廃棄用と思われる土坑 145 基，焼土 20 基，古道１条と多数のピットが確認された。

遺構の配置としては，Ｃ・Ｄ－５・６区に方形竪穴遺構がまとまり，それらを取り囲むようにＣ～Ｆ－４区，Ｆ－４～９区，Ｂ～Ｄ－７・８区と半円状にみられる。溝は溝４と溝５そして大溝である溝３がほぼ東西に掘られている。また，大溝である溝２が溝３の上から掘り返された形で東西と南北にＬ字状に掘られ，大溝である溝１が山裾に沿って南北に掘られている。そして，溝６がＢ－３・４区の段下にみられる。畠跡はＣ・Ｄ－９・10 区に東西と南北に畝が検出されている。焼土はまばらに 20 か所確認されている。土壙墓と思われる群も焼土同様まばらに検出され，まとまりが無い。貯蔵穴と思われる土坑はＤ～Ｆ－３～６区とＤ・Ｆ－７・８区，Ｂ～Ｄ－２～７区，Ｂ～Ｆ－８・９区，Ｂ～Ｄ－11～14 区の地区別位しか分けられない。古道は，Ｂ－３～６区の一段高い所にみられる。

これらの遺構は切り合い状態で検出されている所がある。この切り合いで３時期に確認できる地区の遺構はＣ・Ｄ－３・４区の掘立柱建物跡 12・13・14 である。掘立柱建物跡 14 は梁２間と桁３間の上屋を東西方向に建て，北側と西側に半間の下屋を造っている。掘立柱建物跡 13 は梁２間と桁３間を南北方向に建て，東側と南・北側に下屋を造っている。掘立柱建物跡 12 は梁２間と桁３間を東西に建て北側と西側に下屋を造っている。掘立柱建物跡 14 と異なる点は下屋の角部の柱が半尺内側に建てていることである。

次にＣ・Ｄ－８区の掘立柱建物跡 26 と掘立柱建物跡 31 と掘立柱建物跡 32 の切り合いである。ここも，梁２間桁３間を東西に建てた柱穴が３重に検出されている３間の柱列があり３時期に確認できる。これらの掘立柱建物跡の下屋は掘立柱建物跡 31 が西側と南側に，掘立柱建物跡 32 が東側と南側に，掘立柱建物跡 26 が東西南北の四面に造られ，東側の角部の柱が半尺内側に建てている。

また，Ｅ・Ｆ－５・６区にある掘立柱建物跡３，掘立柱建物跡 29，掘立柱建物跡 30 が３重に検出されている。

他，２時期重なっている掘立柱建物跡はＣ－４区にある掘立柱建物跡 16 と掘立柱建物跡 20，Ｄ・Ｅ－７区の掘立柱建物跡 23 と掘立柱建物跡 25 である。

掘立柱建物跡の特徴は，上屋下屋があるものが掘立柱建物跡 12・13・14・16・20・19・26・31・

第 29 図　中世遺構全体配置

32 で，総柱が掘立柱建物跡 15・５・23 で，下屋がない梁２間桁３間のものが掘立柱建物跡 11・９・８・24・28・21・22・７で，梁桁２間のものが掘立柱建物跡 10・18・17・３・29・25・27 で，２間の小規模で上屋と下屋がある掘立柱建物跡６・４・２である。

方形竪穴遺構は５基検出している。これらは自体の重なりは無いが，方形竪穴遺構１が掘立柱建物跡 16・20 と，方形竪穴遺構５が溝４と重なり合っている。

溝は大溝３本が９～14 区に小溝４本が６区，８区に２本，Ｂ－３～４区に２本，計７本が検出されている。溝自体の重なりは，溝２と溝３である。溝２を再び掘り上げている。他の遺構との重なり合いは，溝２と畠跡，溝４と方形竪穴遺構５，溝５と掘立柱建物跡 26 がある。

土坑は大きく分けて，焼土を伴う炉跡と，磁器や鉄器を伴う土壙墓と，食物残渣用に用いた廃棄用土坑の３類に分けられる。前２つの類はまばらにみられ，後の類は重なりや列に作られた所があるが，これらの作られた詳細は不明である。よって，ここでは説明を省き，傾向は土坑の項目で説明をするが，他の遺構との重なりとしては，掘立柱建物跡１と炉跡とみられる土坑Ⅱ類，掘立柱建物跡 11 と土坑Ⅰ類，掘立柱建物跡８と土坑Ⅰ類がみられる。

焼土は 20 基確認されている。他の遺構との重なり関係は，焼土５が掘立柱建物跡 16・20，焼土６が掘立柱建物跡 15，焼土４が掘立柱建物跡４，焼土 10～14 が掘立柱建物跡 24，焼土 15～17 が掘立柱建物跡 28 となっている。

畠跡はＣ・Ｄ－９・10 区に南北の畝跡の後に東西の畝が検出されている。この遺構は溝２よりも上に検出されている。

古道はＢ－３～６区の一段高い所に犬走り的な部分として検出されている。

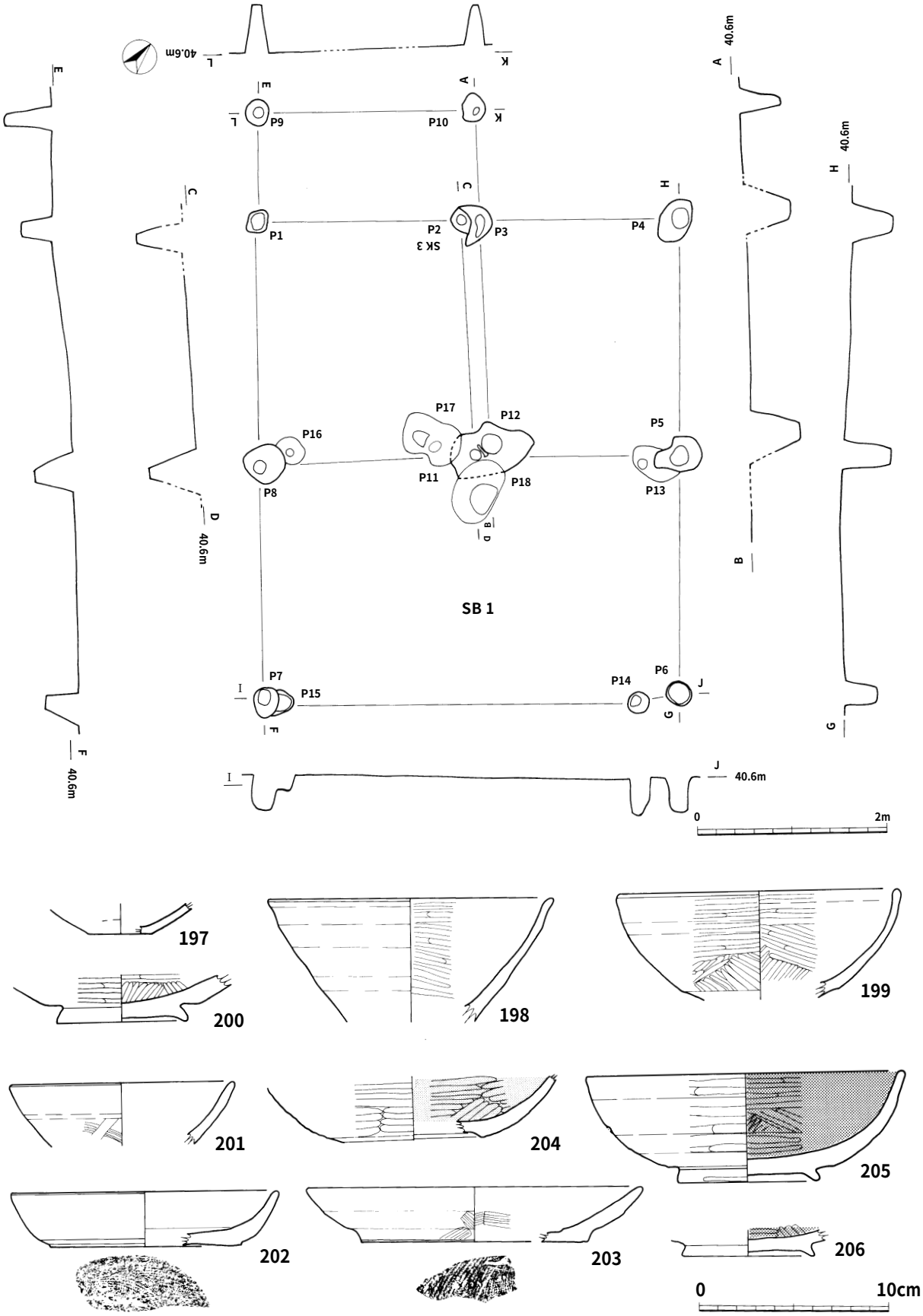
ア　掘立柱建物跡

①　掘立柱建物跡１（ＳＢ１）

掘立柱建物跡１は本調査区の南部Ｃ－12 区に検出した梁・桁行２間の基本構造の建物跡である。南北の桁行には間柱跡があるが，梁間の南梁間は間柱跡が無く間口が広い。また，北側の梁間には半間の造りだしと考えられる柱穴がみられる。中央に炉跡と考えられる焼石列と土坑があり火を使う作業小屋が考えられる。なお，南側半分の柱穴Ｐ14・Ｐ15 は建てかえたと考えられる２柱穴である。

第３表　掘立柱建物跡1の計測

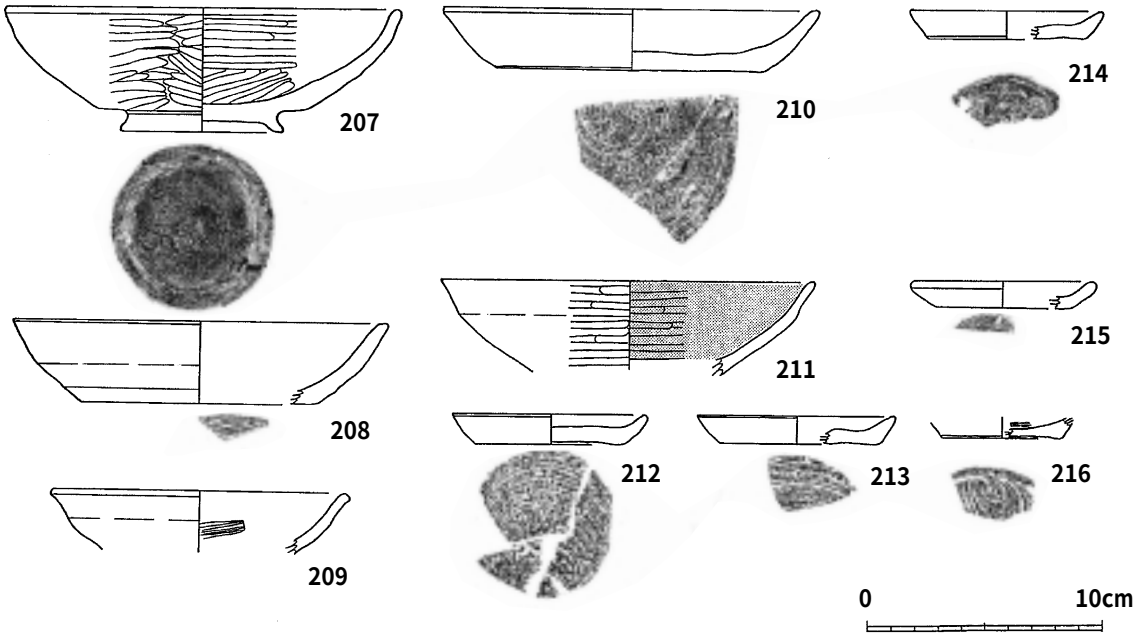
建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB　1	上屋２間	上屋１間	4.45 m	2.30 m	5.03 m	1.15 m	C-11･12	Ｐ　1．　23 × 22 × 32
	下屋１間	下屋１間	m	m	m	m	方位W43°	2．　29 × 22 × 48
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3．　41 × 22 × 50
Ｐ1～2	2.15 m	Ｐ９～10	2.30 m	Ｐ１～８	2.60 m	Ｐ１～９	1.15 m	4．　43 × 34 × 44
3～4	2.10			7～8	2.45	2～10	1.15	5．　50 × 37 × 50
6～7	4.40			4～5	2.50			6．　27 × 26 × 35
5～12	1.95			5～6	2.50			7．　32 × 24 × 35
8～11	2.27							8．　44 × 40 × 41
								9．　29 × 24 × 50
								10．　30 × 24 × 43
								11．　84 × 55 × 53
								12．　84 × 55 × 53



第30図　掘立柱建物跡1と出土遺物（1）

出土遺物（第30・31図　197～216）

197は白磁の皿である。198は土師器埦の体部・口縁部である。器形は深めのもので直線状に立ち上がっている。器面調整は見込みが横位の研磨で，外面は水挽き痕がみられる。199 は半球状をした土師器埦で，内外面研磨が施されている。口縁部は横位で見込み中央は縦と横の研磨を組み合わせている。200 は外側に拡がった高台の低い土師器埦の底部である。見込み中央は縦と横の研磨を組み合わせている。201は土師器埦の体部・口縁部である。202は土師器の坏である。底部は糸切り離しであり，体部・口縁部は直に立ち上がっている。203 は土師器の坏である。体部・口縁部は外反して立ち上がっている。204は内側が黒色で両面とも研磨を施し，いわゆる黒色土器Ａである。205は内赤の土師器で半球状の器形で外に拡がる低い高台をもつ埦である。見込み中央の研磨は縦と横の組み合わせで，口縁部は横位の研磨である。206は黒色土器Ａの埦底部である。204と同類である。207は土師器埦である。器形は半球状で，低く拡がる高台をもつ。両面研磨が強く，口縁部は横位，見込み中央部は縦と横の組む合わせで施している。208 は坏である。平底から丸味をもって立ち上がる体部・口縁部をもつ。底部は糸切り離しである。209は体部・口縁部が外反する坏である。210は平底から丸味をもって立ち上がる体部・口縁部をもつ。211 は黒色土器Ａの埦である。器形は口縁部で直になるものである。両面とも横位の研磨がみられる。212 は少し上げ底に底部から丸味をもって体部・口縁部へ立ち上がる皿である。213 は平底に底部から直に体部・口縁部へ立ち上がる皿である。214・216は少し上げ底に底部から丸味をもって体部・口縁部へ立ち上がる皿である。底面は糸切り離しである。215 は平底に底部から直に体部・口縁部へ立ち上がる皿である。口唇部は厚みがあり全体的に丸味がある。



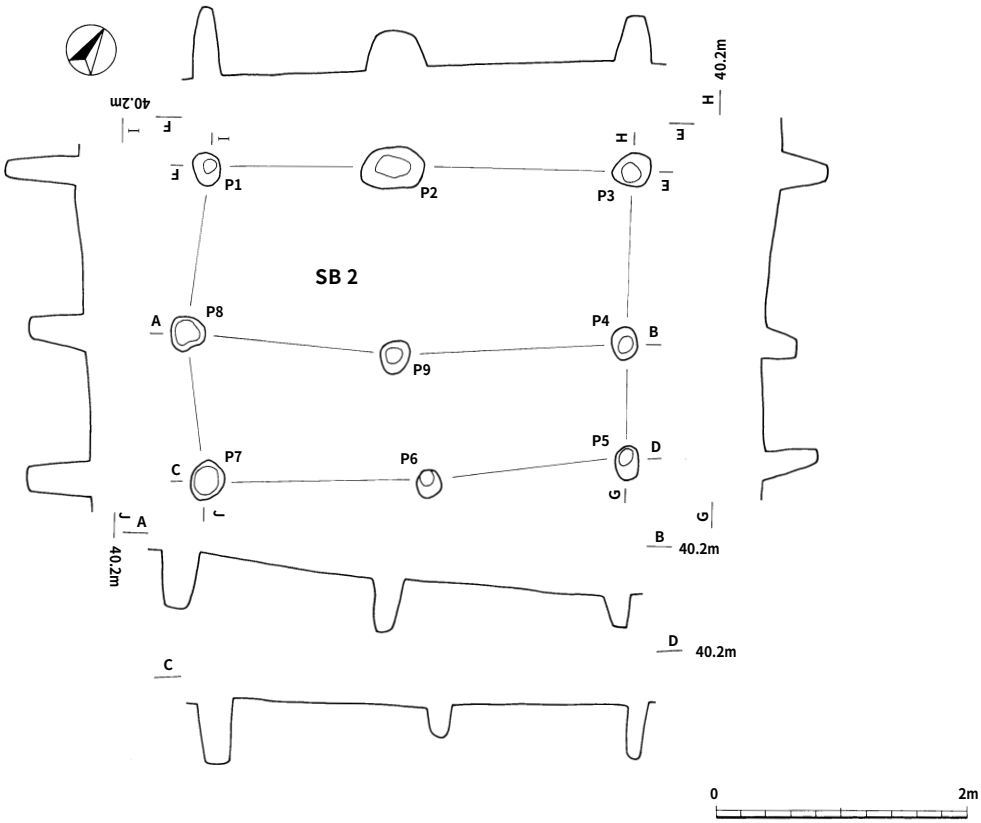
第31図　掘立柱建物跡1の出土遺物（2）

②　掘立柱建物跡２（ＳＢ２）

掘立柱建物跡２はＥ・Ｆ－６区に検出した。この建物跡は東西に長い梁２間，桁行２間で，間柱穴がみられ北側の部分が広い。また，南側の桁行よりも北側の桁行が長く，台形様変則的な建物跡であると考えられる。

第４表　掘立柱建物跡2の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB　2	上屋２間	上屋２間	2.50 m	m	3.35 m	m	E・F－6	P　1．　28 × 21 × 56
			m	m	m	m	方位Ｅ56°	2．　48 × 32 × 31
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3．　30 × 35 × 37
								4．　26 × 20 × 27
P１～8	1.35 m	P	m	P１～2	1.45 m	P	m	5．　20 × 18 × 43
3～4	1.36			2～3	1.90			6．　23 × 19 × 25
4～5	0.90			5～6	1.57			7．　32 × 27 × 50
7～8	1.20			6～7	1.75			8．　28 × 27 × 45
				4～9	1.85			9．　26 × 22 × 42
				8～9	1.65			

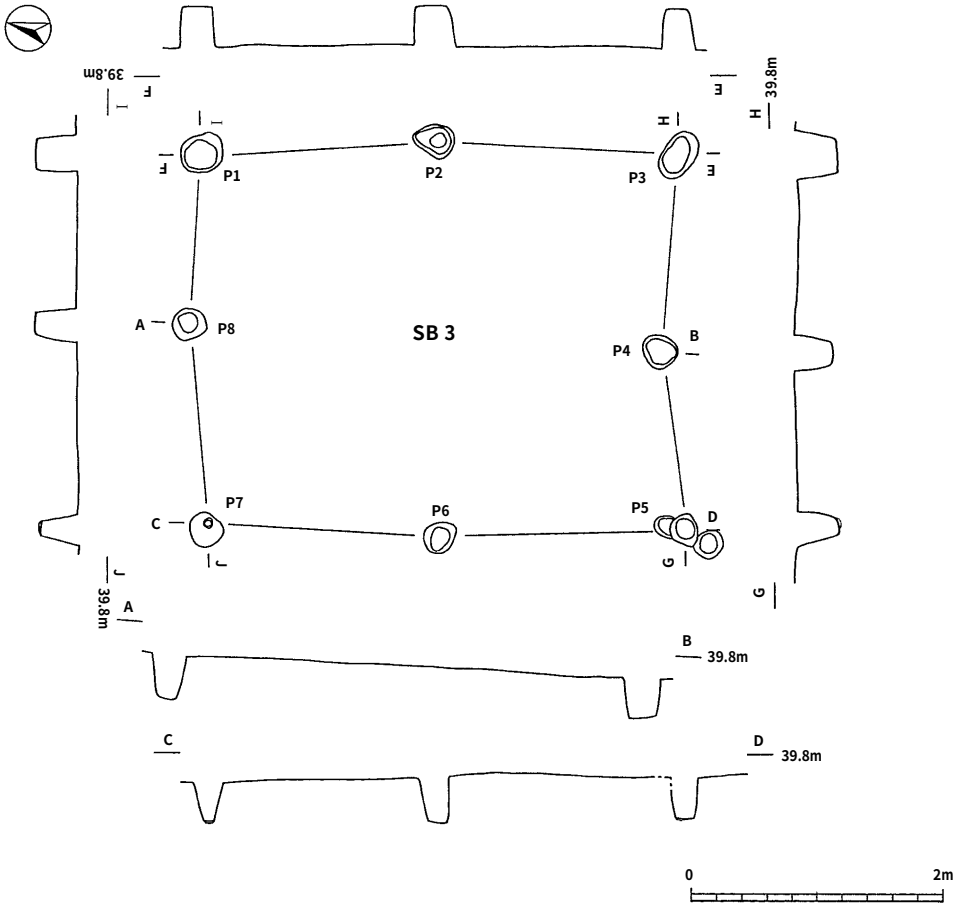


第32図　掘立柱建物跡2

③　掘立柱建物跡３（ＳＢ３）

掘立柱建物跡３はＥ－５・６区に検出された。検出状況は掘立柱建物跡 29 と東西に重なっているが，掘立柱建物跡 30 とは少しずれた形で南北に接して柱穴が掘られている。周囲には土坑が検出していない。

本遺構は梁間２間，桁行２間であるが南北の桁行が長い建物跡である。この建物跡は建物跡としては小規模にあたる。



第33図　掘立柱建物跡3

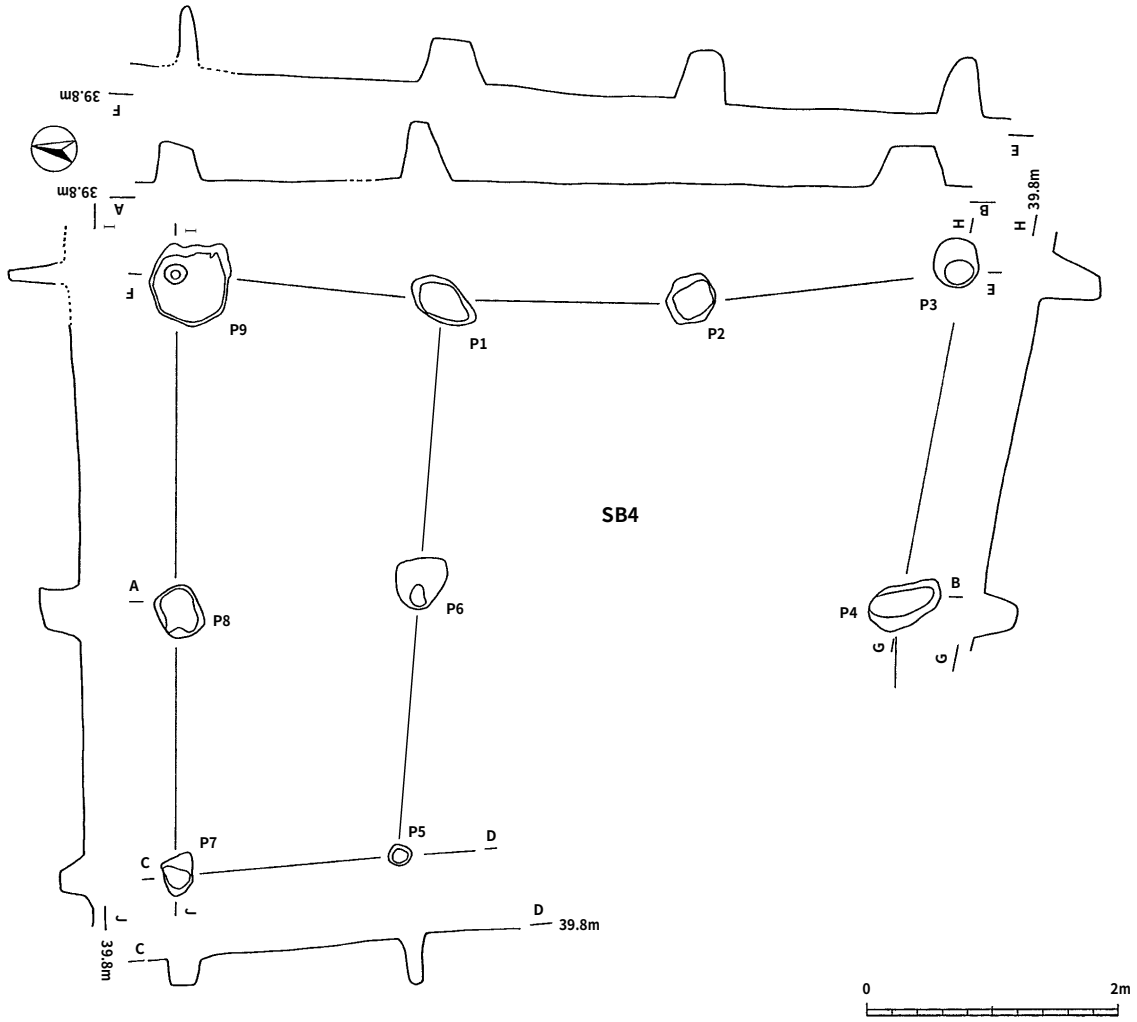
第５表　掘立柱建物跡3の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB　3	上屋２間	上屋２間	2.92 m	m	3.82 m	m	E-5・6	P　1．　34 × 29 × 32
			m	m	m	m	方位W13°	2．　30 × 27 × 32
								3．　34 × 28 × 32
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		4．　28 × 27 × 30
P１～８	1.33 m	P	m	P１～２	1.87 m	P	m	5．　25 × 21 × 34
７～８	1.60			２～３	1.87			6．　28 × 24 × 36
３～４	1.57			５～６	1.95			7．　27 × 24 × 30
４～５	1.42			６～７	1.85			8．　25 × 25 × 34

④　掘立柱建物跡４（ＳＢ４）

掘立柱建物跡４は本調査区の東部にあたるＦ－５に検出した。東西梁間は上屋２間で南北は桁行２間に北側に下屋半間を合わせた建物跡で，やや小型の建物跡に附属する。この建物跡の特徴は南東角のＰ３が広くとられ，鋭角に角張っている。また，下屋の梁間は広めにとっている。

この掘立柱建物跡４と重なっている遺構は土坑，焼土４がある。２つとも建物跡以前のものと考えられる。



第34図　掘立柱建物跡4

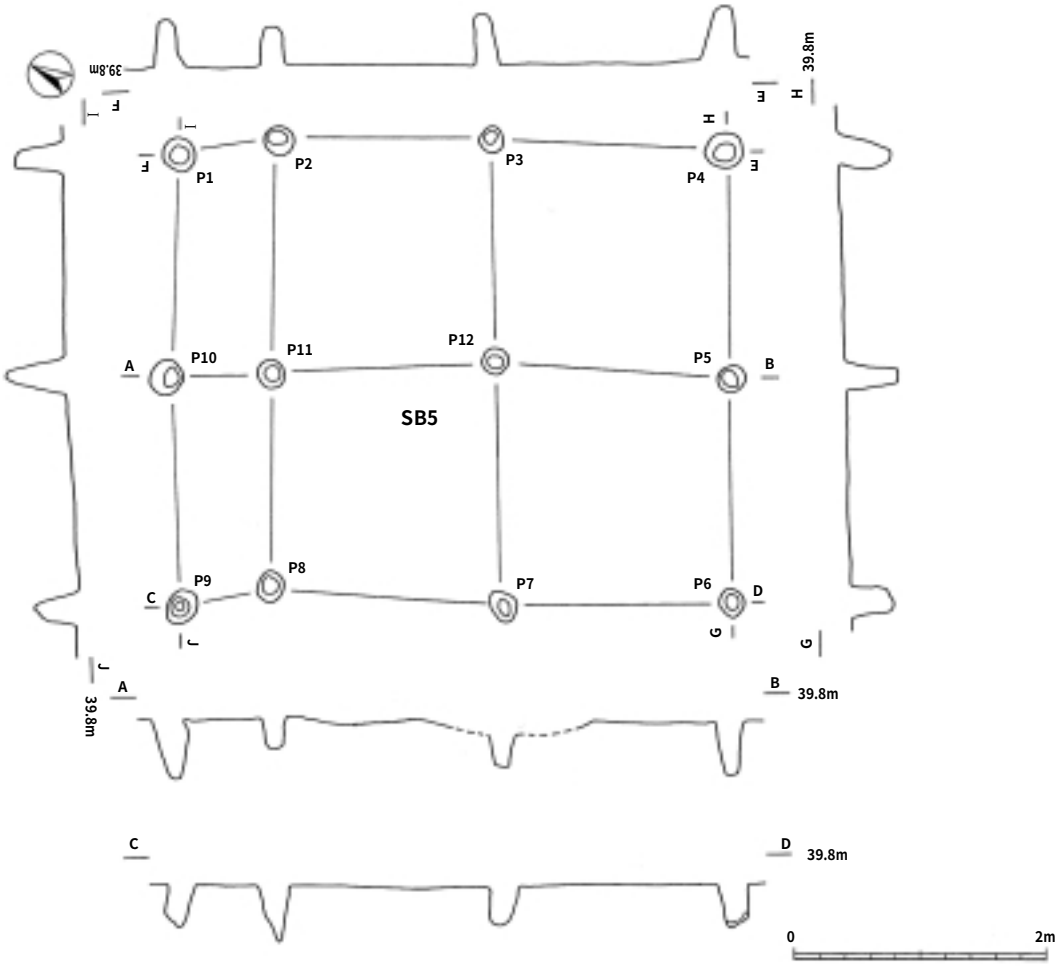
第６表　掘立柱建物跡4の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
ＳＢ　４	上屋２間	上屋２間	4.10 m	2.12 m	4.37 m	4.77 m	Ｆ－５	Ｐ　１．　58 × 35 × 37 ２．　45 × 38 × 42 ３．　29 × 20 × 47 ４．　61 × 35 × 32 ５．　19 × 16 × 39 ６．　47 × 31 × 47 ７．　37 × 22 × 20 ８．　43 × 32 × 22 ９．　74 × 61 × 46
	下屋半間	下屋２間	m	m	m	m	方位Ｗ12°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
Ｐ１～２ ２～３	2.00 m 2.14	Ｐ１～９ ５～７	2.10 m 1.77	Ｐ１～６ ５～６ ３～４	2.35 m 2.06 2.62	Ｐ７～８ ８～９	2.10 m 2.67	

⑤　掘立柱建物跡５（ＳＢ５）

本遺構はＥ－５区に検出した総柱建物跡である。建物跡は梁間２間桁行２間半のもので半間は北側に設けてある。

この建物跡の東側には土坑列が重なり合って，北側には列になって検出している。この土坑は本建物との並びが沿っているので関係があると思われる。また，南東側の土坑群の一部は建物の範囲に重なり別時期と考えられる。



第35図　掘立柱建物跡5

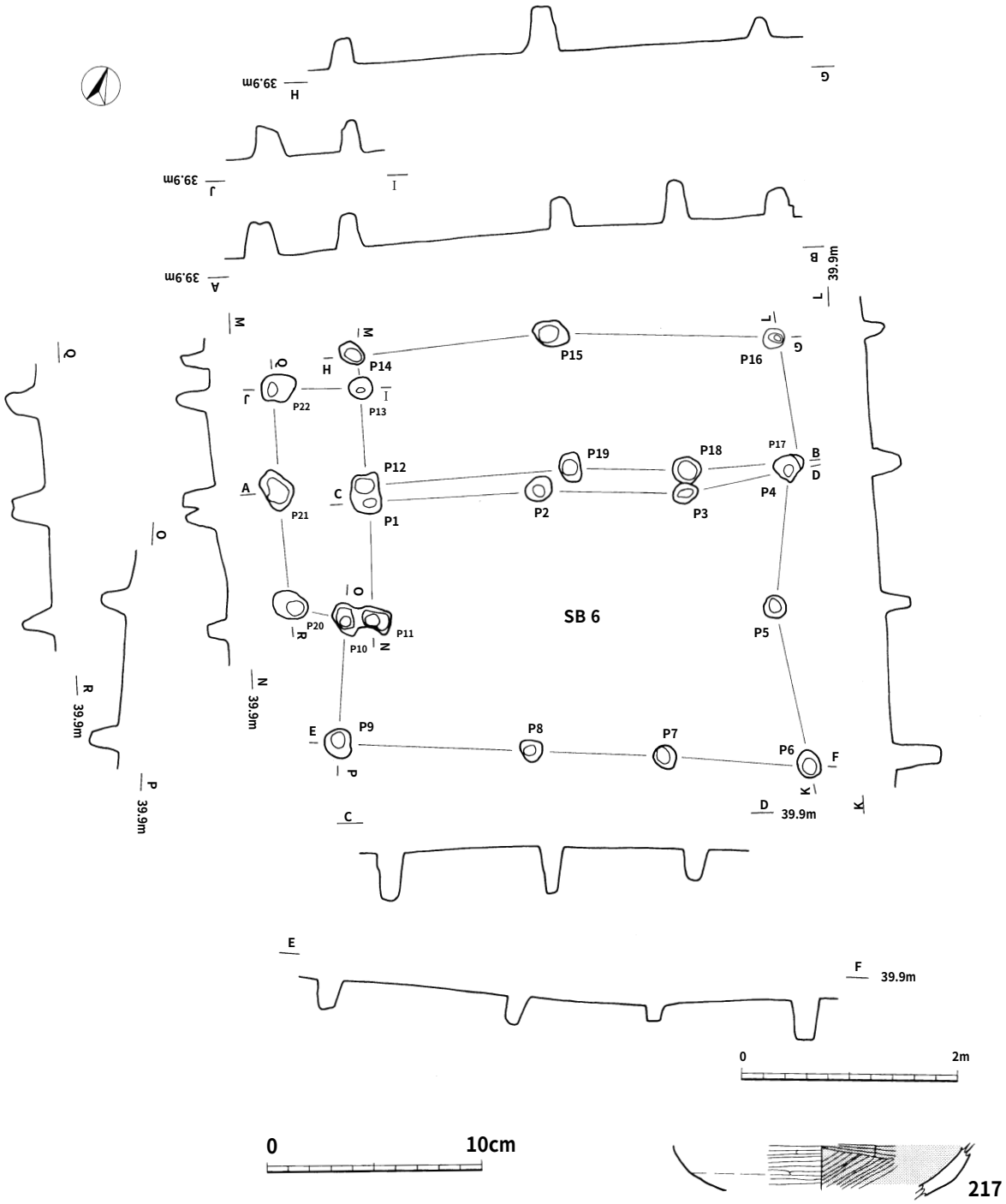
第７表　掘立柱建物跡5の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB　5	上屋２間	上屋２間半	3.57 m	m	4.32 m	m	E−4・5	P　1．　27 × 25 × 38
			m	m	m	m	方位W27°	2．　24 × 22 × 31
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3．　22 × 19 × 41
								4．　32 × 28 × 43
P１～10	1.76 m	P	m	P１～２	0.80 m	P	m	5．　23 × 20 × 43
9～10	1.87			２～３	1.68			6．　29 × 21 × 34
２～11	1.88			３～４	1.85			7．　28 × 20 × 31
８～11	1.68			６～７	1.82			8．　26 × 20 × 45
３～12	1.77			７～８	1.85			9．　30 × 24 × 34
７～12	1.92			８～９	0.75			10．　27 × 26 × 48
４～５	1.88			10～11	0.80			11．　23 × 21 × 25
５～６	1.78			11～12	1.78			12．　22 × 21 × 25
				５～12	1.86			

⑥　掘立柱建物跡６（ＳＢ６）

本遺構はＦ－４区に検出した。梁２間，桁行３間を基本に北に半間と２間の下屋，西に四半間と２間の狭い下屋を組んでいる建物跡である。東南角の柱穴は少しはみ出し鋭角になり，広さが違う２つ下屋が付き変則建物跡と考えられる。この類と同型は掘立柱建物跡４と掘立柱建物跡２が考えられる。なお，この建物跡は，単独で他の遺構との切り合いが無い。

出土遺物は第 36 図の 217 で黒色土器Ａ埦である。



第 36 図　掘立柱建物跡6と出土遺物

第８表　掘立柱建物跡6の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB　6	上屋２間	上屋３間	2.75 m	2.05 m	4.47 m	3.90 m	E・F－4	P　1．　39 × 24 × 32
	下屋１間	下屋２間半	m	m	m	m	方位Ｅ66°	2．　27 × 20 × 43
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3．　25 × 20 × 29
P１～11	1.05 m	P12～13	0.90 m	P１～２	1.55 m	P14～15	1.82 m	4．　30 × 19 × 26
9～10	1.12	13～14	0.33	2～3	1.35	15～16	2.10	5．　21 × 21 × 26
4～5	1.25	16～17	1.22	3～4	1.00	17～18	1.03	6．　27 × 21 × 43
5～6	1.54	20～21	1.10	6～7	1.34	18～19	1.05	7．　22 × 22 × 15
		21～22	0.95	7～8	1.25	12～19	1.90	8．　23 × 21 × 26
				8～9	1.78	13～22	0.82	9．　28 × 24 × 28
						10～20	0.46	10．　34 × 20 × 43
								11．　33 × 18 × 43
								12．　39 × 24 × 32
								13．　22 × 20 × 30
								14．　26 × 21 × 31
								15．　35 × 24 × 43
								16．　21 × 18 × 19
								17．　30 × 19 × 26
								18．　27 × 23 × 38
								19．　28 × 20 × 30
								20．　35 × 25 × 29
								21．　40 × 25 × 34
								22．　34 × 25 × 27

⑦　掘立柱建物跡７（ＳＢ７）

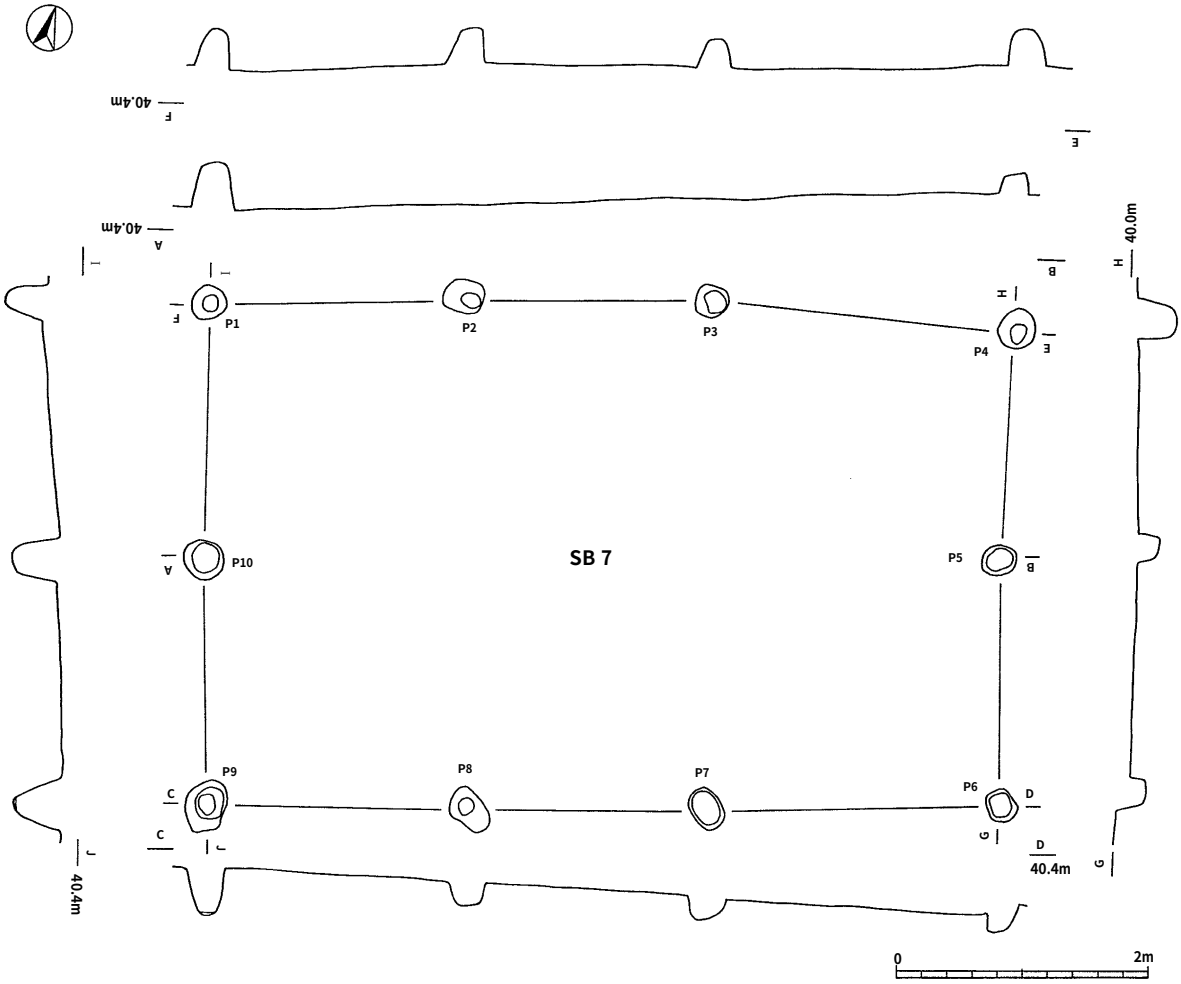
この遺構は建物跡全体でみると南部に位置する。検出はＥ－８・９区で，この建物跡の位置としては建物群内の西側の南部にあたる。

この建物跡は桁行を東西に，梁２間，桁行３間で造られている。この建物の特徴は東北角のＰ４柱穴が少し内側に掘られている部分がある。

この遺構の重なりは，土坑だけで周りの建物跡との関係はない。

第９表　掘立柱建物跡7の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB　7	上屋２間	上屋３間	3.95 m	m	6.40 m	m	E－8・9	P　1．　28 × 26 × 32
			m	m	m	m	方位Ｅ74°	2．　34 × 22 × 28
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3．　27 × 21 × 23
P１～10	2.00 m	P	m	P１～２	2.05 m	P	m	4．　33 × 22 × 30
9～10	1.96			2～3	1.95			5．　30 × 24 × 18
4～5	1.75			3～4	2.40			6．　27 × 24 × 21
5～6	1.97			6～7	2.33			7．　34 × 24 × 18
				7～8	1.90			8．　38 × 22 × 19
				8～9	2.05			9．　45 × 31 × 39
								10．　33 × 31 × 38



第 37 図　掘立柱建物跡7

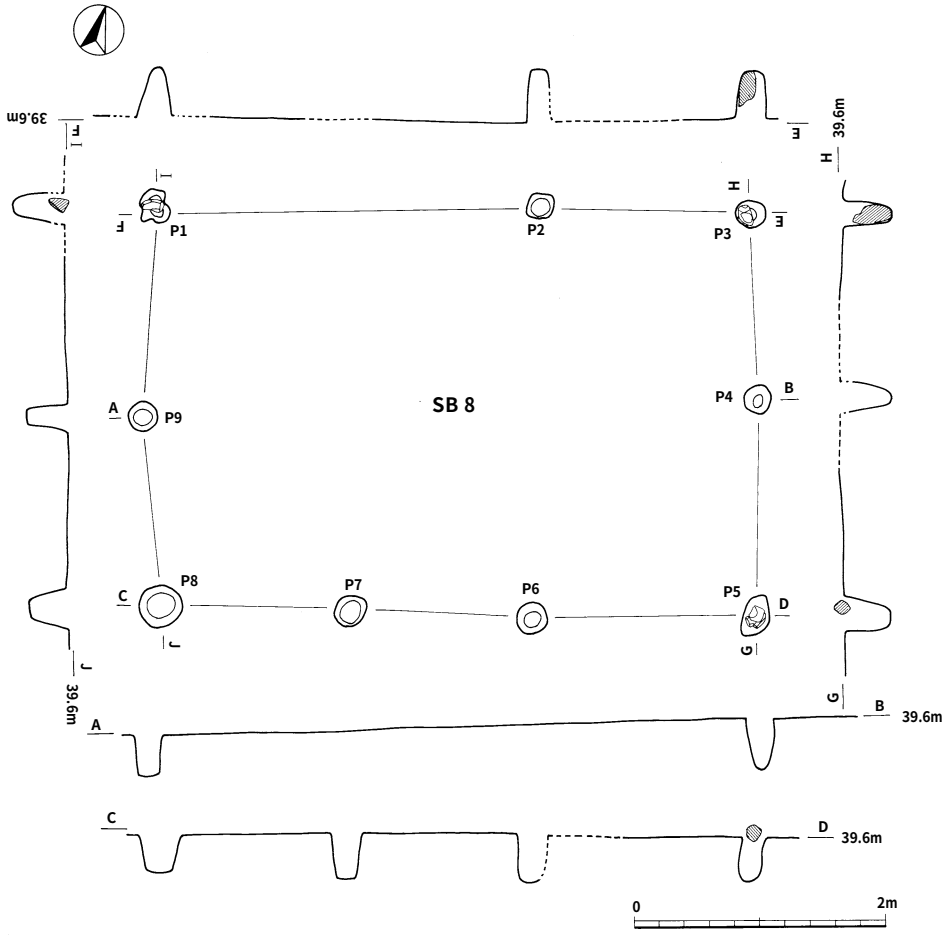
⑧　掘立柱建物跡８（ＳＢ８）

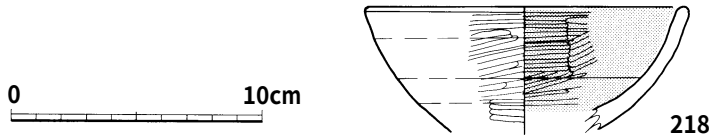
本遺構は調査区では北部にあたるＥ－４区に桁行が東西で検出した。建物跡は梁２間，桁行３間の規模でやや小型に属する。

他の遺構との重なりは，柱穴と土坑の外，列になっている土坑がある。また，重なりではないが，掘立柱建物跡９・10 とは近接の位置にある。

第 10 表　掘立柱建物跡8の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 8	上屋２間	上屋３間	3.20 m	m	4.70 m	m	E-4	P 1. 29 × 19 × 40
			m	m	m	m	方位 E 72°	2. 22 × 21 × 44
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 24 × 22 × 39
								4. 23 × 20 × 42
P 1～9	1.68 m	P	m	P 1～2	3.05 m	P	m	5. 37 × 21 × 36
8～9	1.52			2～3	1.63			6. 26 × 23 × 39
3～4	1.47			5～6	1.77			7. 39 × 23 × 38
4～5	1.70			6～7	1.45			8. 34 × 34 × 30
				7～8	1.50			9. 24 × 23 × 33





第38図　掘立柱建物跡8と出土遺物

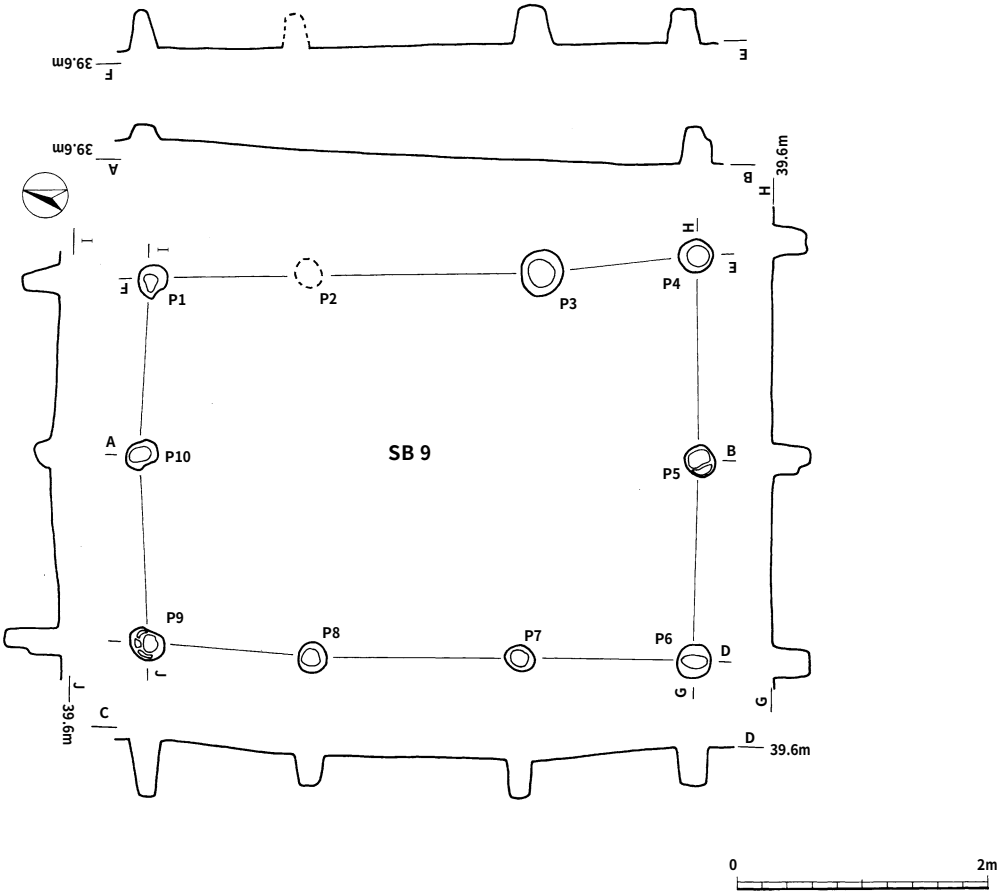
出土遺物（第38図218）

218 はＰ４から出土している。器形は半球状の椀で内側に黒色を施し，内外面は横位に研磨されているが，水挽き痕は残っている。

⑨　掘立柱建物跡９（ＳＢ９）

本遺構は，調査区の北部にあたるＥ－３・４に検出した。建物跡自体は桁行が南北にあり，梁２間，桁行３間のもので，規模的には小型に属する。構造的には桁行の中間間が一間取っているが，南北の桁行間は狭く建てている。さらに北面の梁は南面よりも狭く棟柱は外側にはみ出していない。これは近接している掘立柱建物跡８・10・11 にみられる棟柱のはみ出しと異なるため，近接しているがこれらと使用目的が異なると考えられる。

他の遺構との重なりはないが，北西部と西部に土坑列がみられ，何らかの関係遺構と思われる。



第39図　掘立柱建物跡9

第11表　掘立柱建物跡9の計測

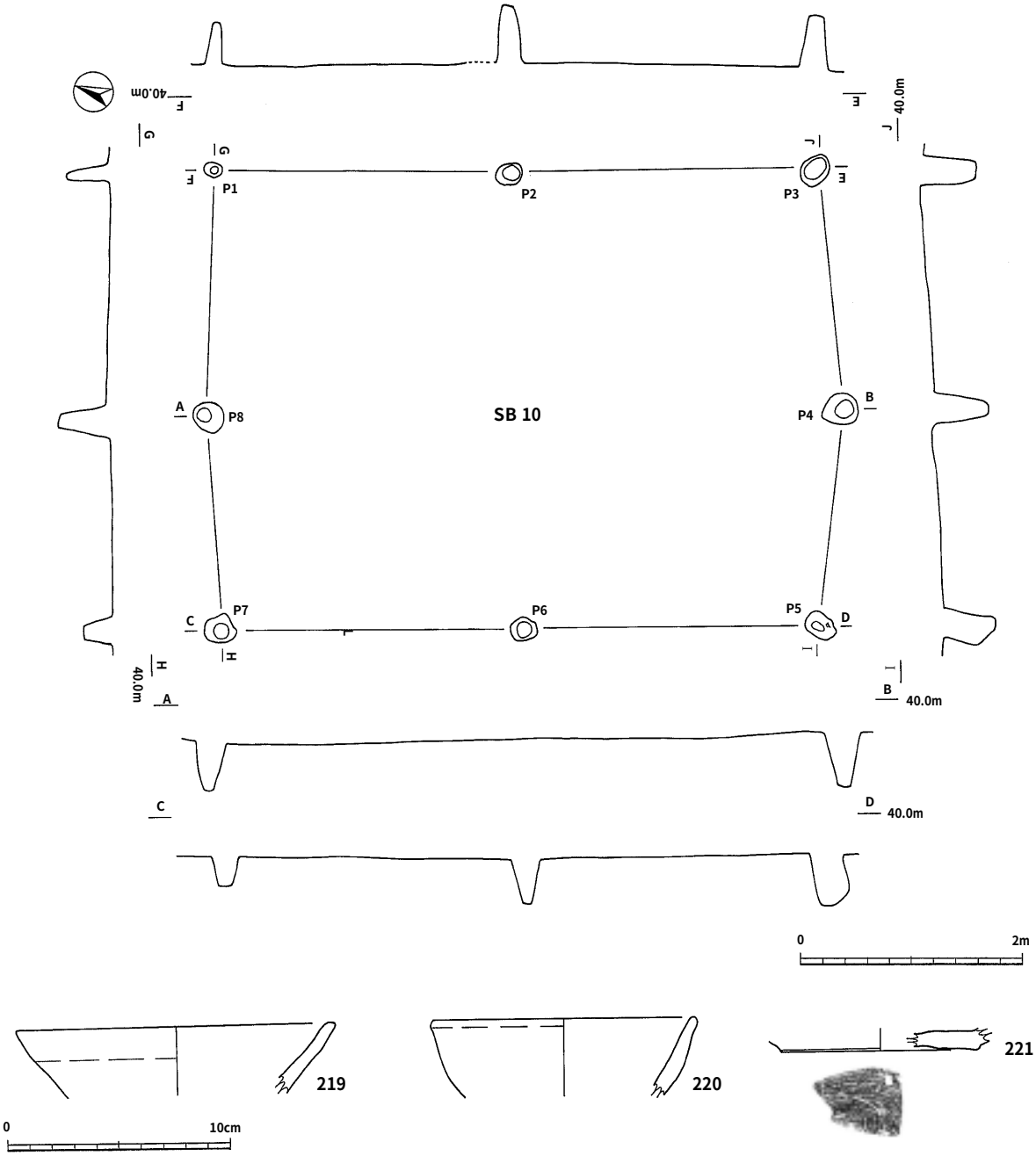
建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 9	上屋２間	上屋３間	2.90 m	m	4.35 m	m	E-3・4	P 1. 24 × 23 × 31
			m	m	m	m	方位W17°	2. 23 × 21 × 27
								3. 47 × 34 × 30
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		4. 29 × 17 × 28
P1～10	1.35 m	P	m	P 1～2	1.25 m	P	m	5. 16 × 15 × 30
9～10	1.50			2～3	1.85			6. 27 × 27 × 31
4～5	1.60			3～4	1.25			7. 27 × 21 × 30
5～6	1.60			6～7	1.40			8. 25 × 23 × 25
				7～8	1.67			9. 25 × 23 × 45
				8～9	1.26			10. 26 × 24 × 15

⑩　掘立柱建物跡10（ＳＢ10）

本遺構はD・Ｅ－４区に検出した。位置的には調査区の北部にあたる。建物としては間の広い梁２間，桁行２間で造られている。特に桁行は広い。また，南梁面の棟柱が外側にはみ出している型の建物である。遺構との重なりは，掘立柱建物跡11と東側で接しているほか，土坑がみられる。

出土遺物（第40図219～221）

219はＰ５より出土している土師器坏である。220はＰ８より出土している土師器坏である。221はＰ２より出土している坏の底部である。



第40図　掘立柱建物跡10と出土遺物

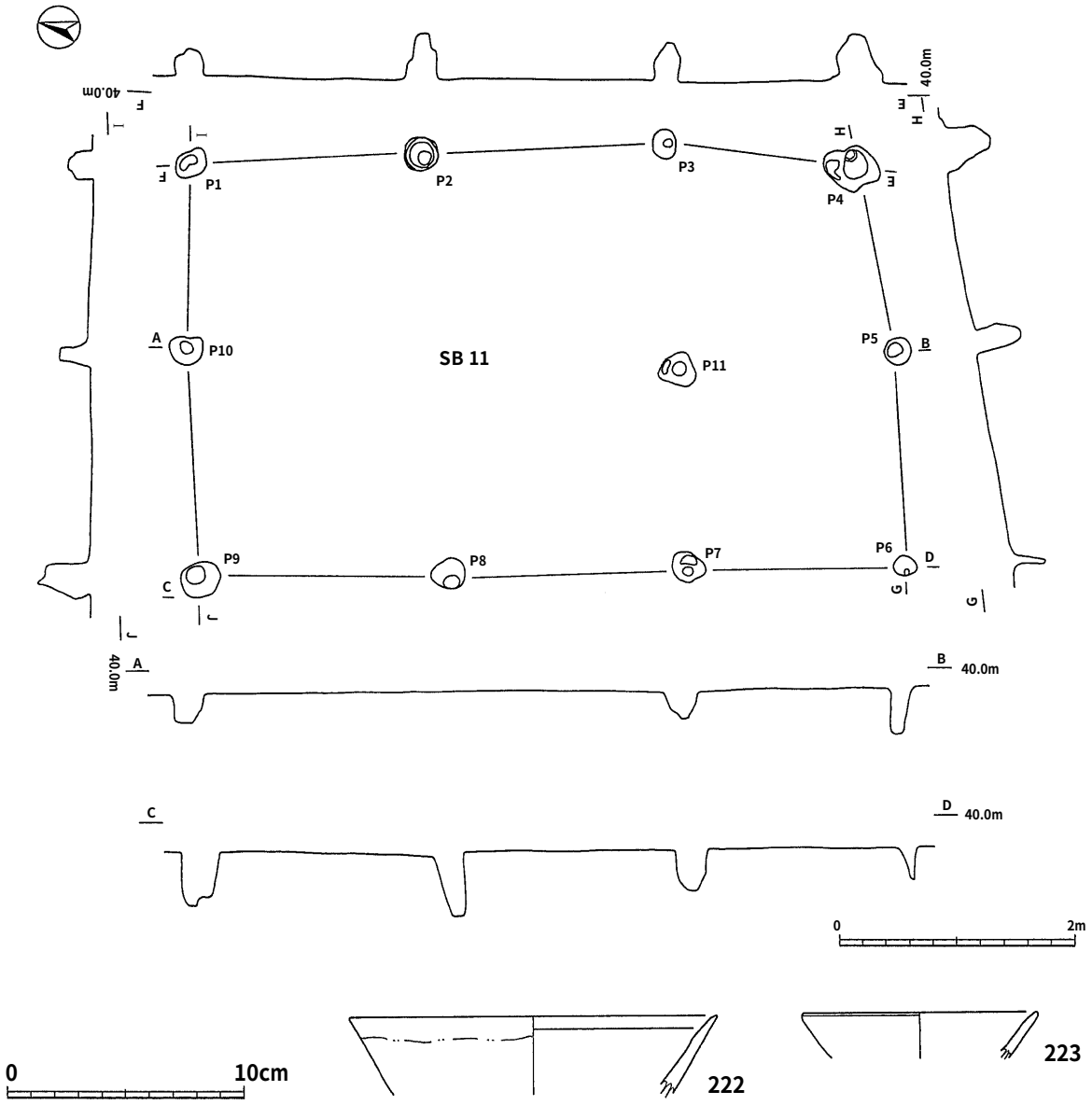
第12表　掘立柱建物跡10の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 10	上屋２間	上屋２間	4.17 m	m	5.40 m	m	D・E－4	P 1. 17 × 13 × 49
			m	m	m	m	方位W18°	2. 24 × 19 × 53
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 25 × 17 × 49
								4. 31 × 23 × 50
P 1～8	2.20 m	P	m	P 1～2	2.68 m	P	m	5. 25 × 23 × 48
7～8	1.96			2～3	2.71			6. 25 × 12 × 40
3～4	2.20			5～6	2.65			7. 29 × 26 × 28
4～5	1.97			6～7	2.71			8. 28 × 28 × 44

⑪　掘立柱建物跡 11（ＳＢ11）

本遺構はＤ－３・４区に桁行が南北で検出した。位置的には調査区の北部にあたる。建物跡は梁２間，桁行３間で，南西角の柱穴が若干内側に入っている。

他の遺構との重なりは，掘立柱建物跡 10・12 と南西側並びに北東側で切り合っている。また，土坑列が２列重なっている。



第 41 図　掘立柱建物跡11と出土遺物

出土遺物（第 41 図 222・223）

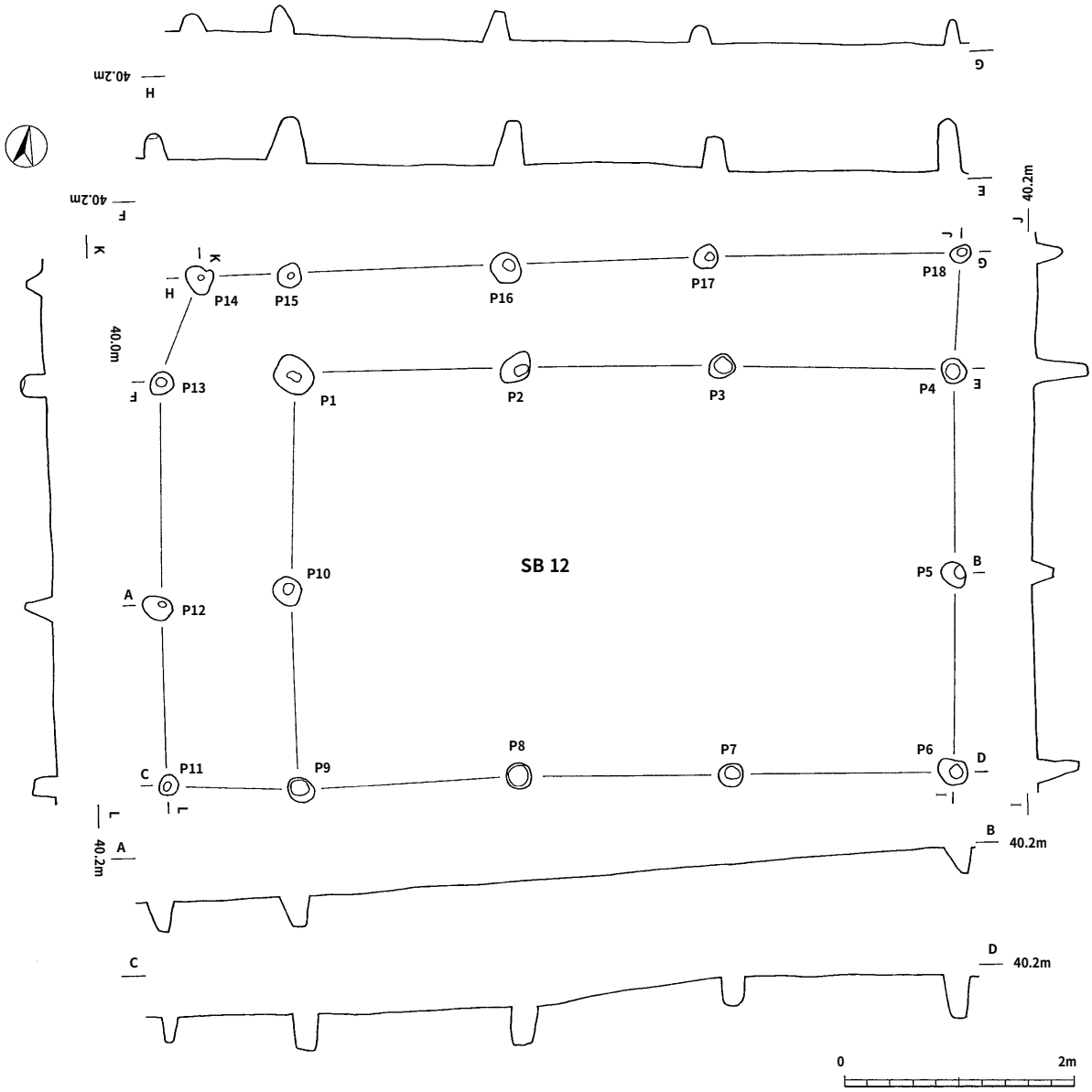
222 はＰ1 に出土している。これは体部・口縁部が直線状に立ち上がる器形をもつ青磁碗である。器面は，口縁部内側に稜がかすかにみられ，外面に釉垂れがみられる。223 はＰ３に出土している。これは土師器の坏の体部～口縁部である。

第13表　掘立柱建物跡11の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 11	上屋２間	上屋３間	3.50 m	m	5.62 m	m	D-３・４	P 1. 31 × 22 × 22
			m	m	m	m	方位W13°	2. 31 × 28 × 40
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 25 × 19 × 33
								4. 49 × 32 × 41
P１～10	1.56 m	P	m	P１～２	2.00 m	P	m	5. 24 × 22 × 38
9～10	1.95			2～３	2.05			6. 21 × 17 × 29
4～5	1.58			3～４	1.63			7. 28 × 25 × 35
5～6	1.85			6～７	1.85			8. 29 × 26 × 54
				7～８	2.00			9. 35 × 29 × 46
				8～９	2.15			10. 29 × 23 × 26

⑫　掘立柱建物跡 12（ＳＢ12）

Ｃ・Ｄ－３区に検出した。調査区では最も北側の建物である。桁行が東西で上屋と下屋からなって



第42図　掘立柱建物跡12

いる。建物は上屋の梁が２間，桁行が３間で，北側と西側に「L」字状の半間の下屋をもち，下屋の北西角が内側に入り込んでいる。遺構の切り合いは，掘立柱建物跡 11・13・14 が重なっている。

第 14 表　掘立柱建物跡12の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 12	上屋２間	上屋３間	3.55 m	4.40 m	5.73 m	6.45 m	C・D－3	P 1. 35 × 30 × 39
	下屋２間半	下屋３間半	m	m	m	m	方位 E 76°	2. 32 × 22 × 39
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 24 × 19 × 28
P１～10	1.85 m	P11～12	1.57 m	P １～２	1.96 m	P14～15	0.77 m	4. 22 × 22 × 46
9～10	1.73	12～13	1.92	２～３	1.75	15～16	1.90	5. 25 × 21 × 19
４～５	1.75	13～14	0.98	３～４	2.00	16～17	1.75	6. 28 × 21 × 35
５～６	1.73	４～18	1.02	６～７	1.95	17～18	2.20	7. 22 × 20 × 26
				７～８	1.85	９～11	1.15	8. 22 × 22 × 33
				８～９	1.90			9. 25 × 22 × 32
								10. 25 × 25 × 27
								11. 18 × 16 × 22
								12. 26 × 21 × 25
								13. 23 × 19 × 23
								14. 24 × 21 × 15
								15. 21 × 19 × 24
								16. 28 × 26 × 27
								17. 22 × 19 × 15
								18. 18 × 15 × 22

⑬　掘立柱建物跡 13（ＳＢ13）

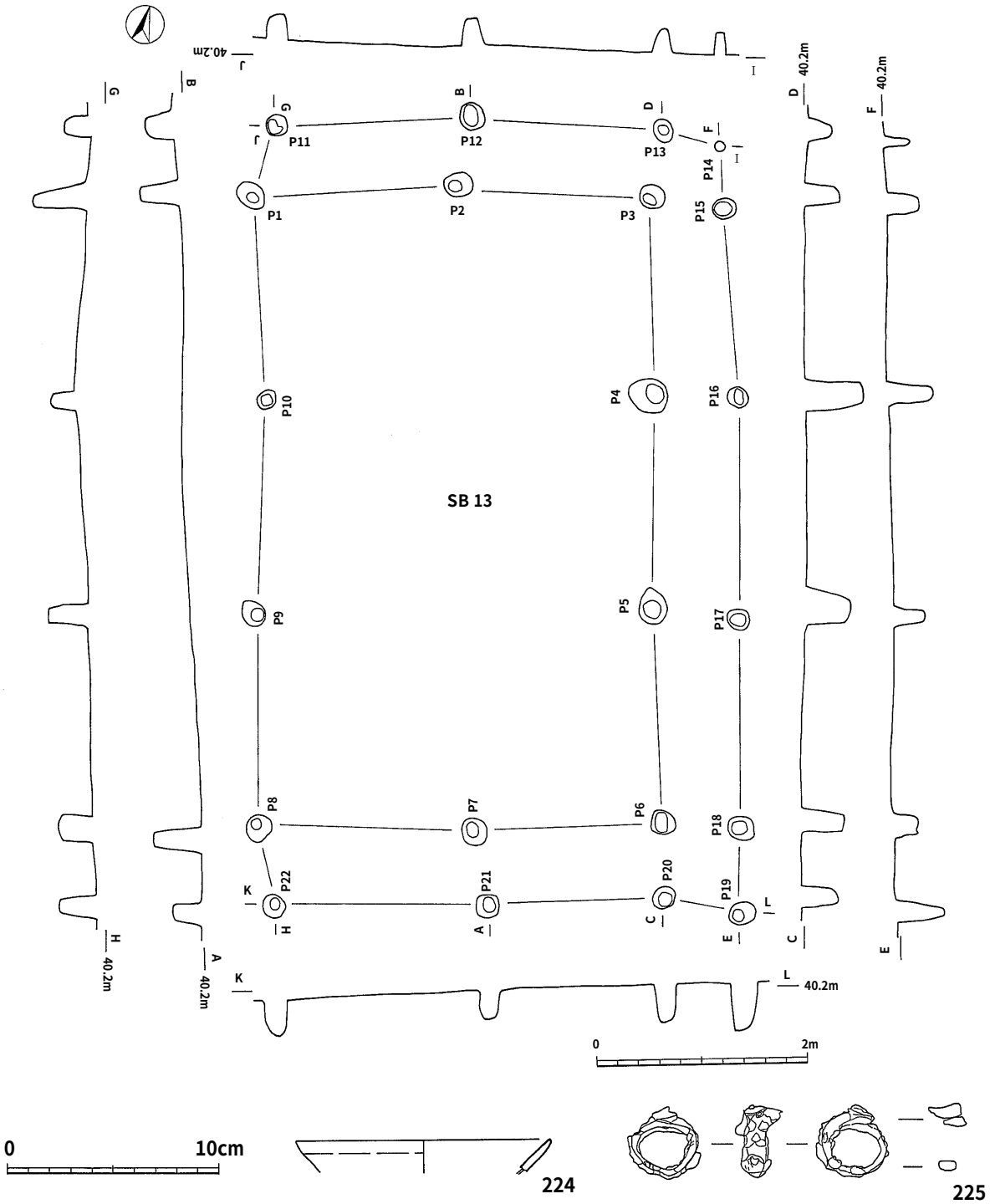
本遺構はＣ－３・４区に検出した。桁行が南北方向で上屋と下屋がある建物である。上屋は梁２間，桁行３間で南北と西側に半間の下屋を「コ」の字にもつ特徴がある。また，北西角の下屋の柱穴は若干内側に入り込んでいる。遺構の切り合いは，掘立柱建物跡 12・14 が重なっている。

出土遺物（第 43 図 224・225）

224 はＰ21 から出土している。口縁部が直線に外向する青磁碗である。225 はＰ５から出土した鉄製品である。用途は道具の柄部を絞めた金具の可能性がある。

第 15 表　掘立柱建物跡13の計測

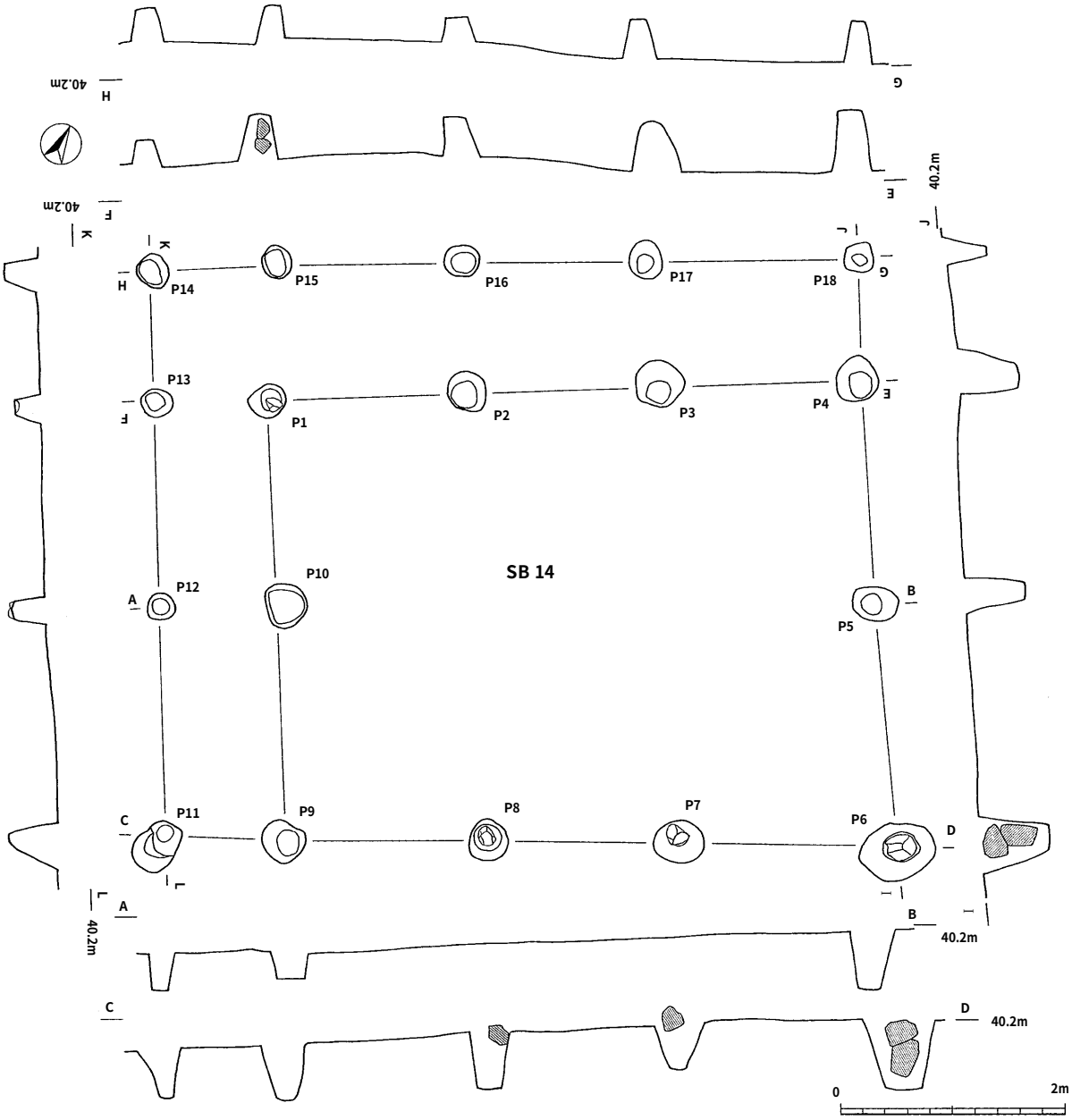
建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 13	上屋２間	上屋３間	3.73 m	4.20 m	5.90 m	7.30 m	C－3・4	P 1. 30 × 22 × 52
	下屋２間半	下屋４間	m	m	m	m	方位 W16°	2. 28 × 22 × 36
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 25 × 22 × 33
P１～２	1.92 m	P11～12	1.85 m	P ３～４	1.85 m	P １～11	0.70 m	4. 38 × 33 × 54
２～３	1.84	12～13	1.80	４～５	2.05	14～15	0.60	5. 34 × 27 × 42
６～７	1.78	13～14	0.55	５～６	2.03	15～16	1.78	6. 26 × 22 × 40
７～８	2.04	19～20	0.70	８～９	2.00	16～17	2.12	7. 27 × 24 × 45
		20～21	1.65	９～10	2.05	17～18	1.98	8. 27 × 24 × 33
		21～22	2.00	１～10	1.93	18～19	0.85	9. 27 × 22 × 37
						８～22	0.77	10. 20 × 17 × 22
								11. 21 × 20 × 24
								12. 27 × 24 × 25
								13. 23 × 17 × 24
								14. 11 × 9 × 22
								15. 23 × 19 × 31
								16. 21 × 19 × 45
								17. 21 × 20 × 30
								18. 28 × 22 × 24
								19. 27 × 20 × 45
								20. 24 × 21 × 34
								21. 25 × 21 × 27
								22. 24 × 21 × 36



第 43 図　掘立柱建物跡13と出土遺物

⑭　掘立柱建物跡 14（ＳＢ14）

この遺構はＣ・Ｄ－３・４区に検出した。桁行が東西の方向にある上屋と下屋をもつ建物である。上屋は梁２間，桁行３間で，北側と西側に半間の下屋が「Ｌ」字に付いている。他の遺構の重なりは，掘立柱建物跡 12・13 がある。



第 44 図　掘立柱建物跡14

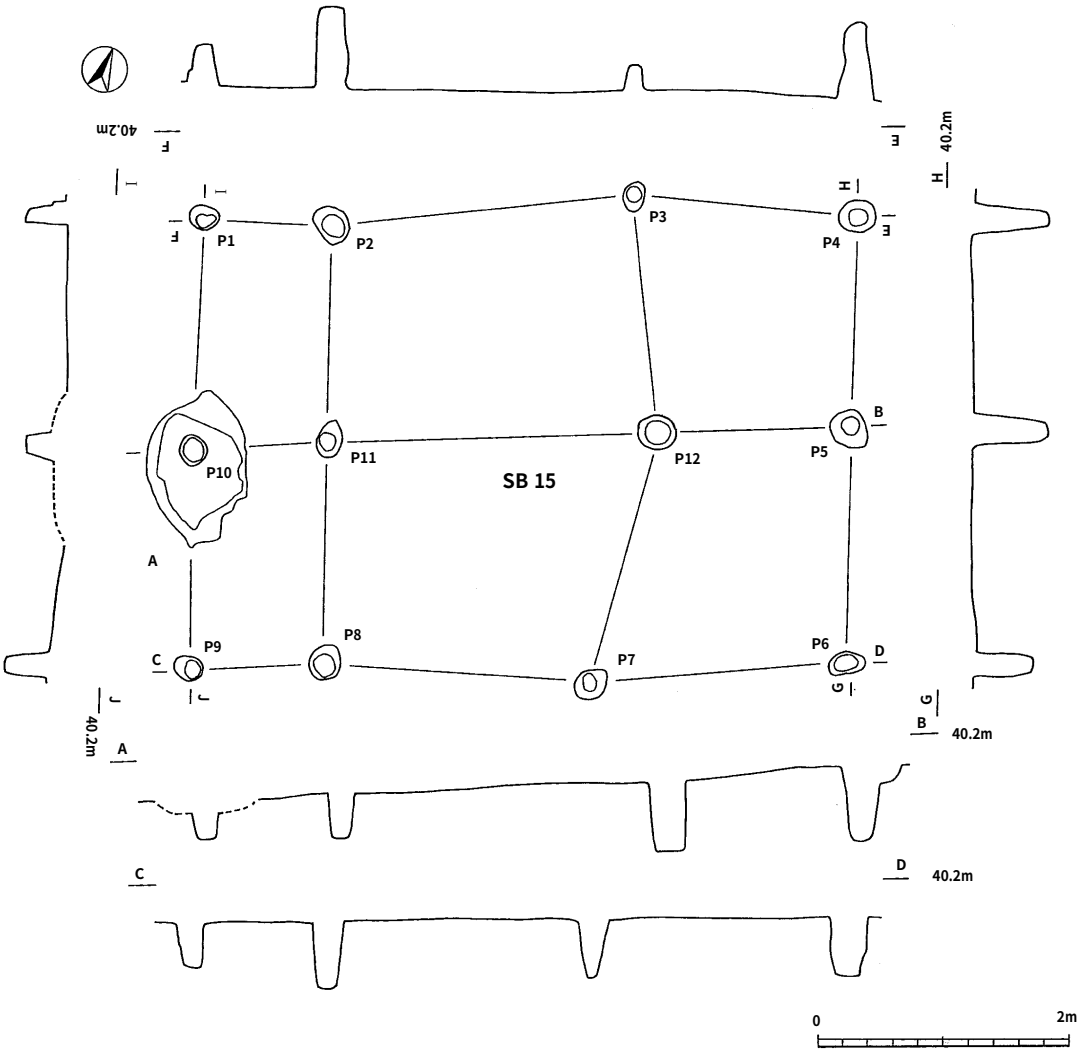
第 16 表　掘立柱建物跡14の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 14	上屋２間	上屋３間	3.92 m	4.97 m	6.28 m	6.30 m	C･D-3･4	P 1. 34 × 28 × 41
	下屋２間半	下屋３間半	m	m	m	m	方位 E 67°	2. 39 × 33 × 35
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 42 × 41 × 45
P 1 ～10	1.85 m	P 11～12	2.00 m	P 1 ～ 2	1.75 m	P 9 ～11	1.07 m	4. 41 × 38 × 54
9 ～10	2.10	12～13	1.83	2 ～ 3	1.70	14～15	1.12	5. 42 × 30 × 53
4 ～ 5	1.96	13～14	1.15	3 ～ 4	1.78	15～16	1.65	6. 70 × 50 × 62
5 ～ 6	2.15	4 ～18	1.07	6 ～ 7	1.95	16～17	1.60	7. 45 × 38 × 41
				7 ～ 8	1.70	17～18	1.90	8. 37 × 35 × 52
				8 ～ 9	1.80			9. 40 × 33 × 50
								10. 40 × 36 × 24
								11. 50 × 35 × 44
								12. 25 × 23 × 31
								13. 28 × 25 × 24
								14. 31 × 29 × 28
								15. 31 × 26 × 32
								16. 32 × 28 × 22
								17. 35 × 30 × 35
								18. 27 × 25 × 37

⑮　掘立柱建物跡 15（ＳＢ15）

本遺構はＤ－４・５区に検出した。建物跡は桁行が東西方向にあり，梁間２間，桁行間２間半の総柱である。中央部は１間を田の字状に組み，西側は半間間である。

他の遺構との重なりは土坑Ｉ類と焼土６である。なお，周囲にも同じ遺構がみられる。



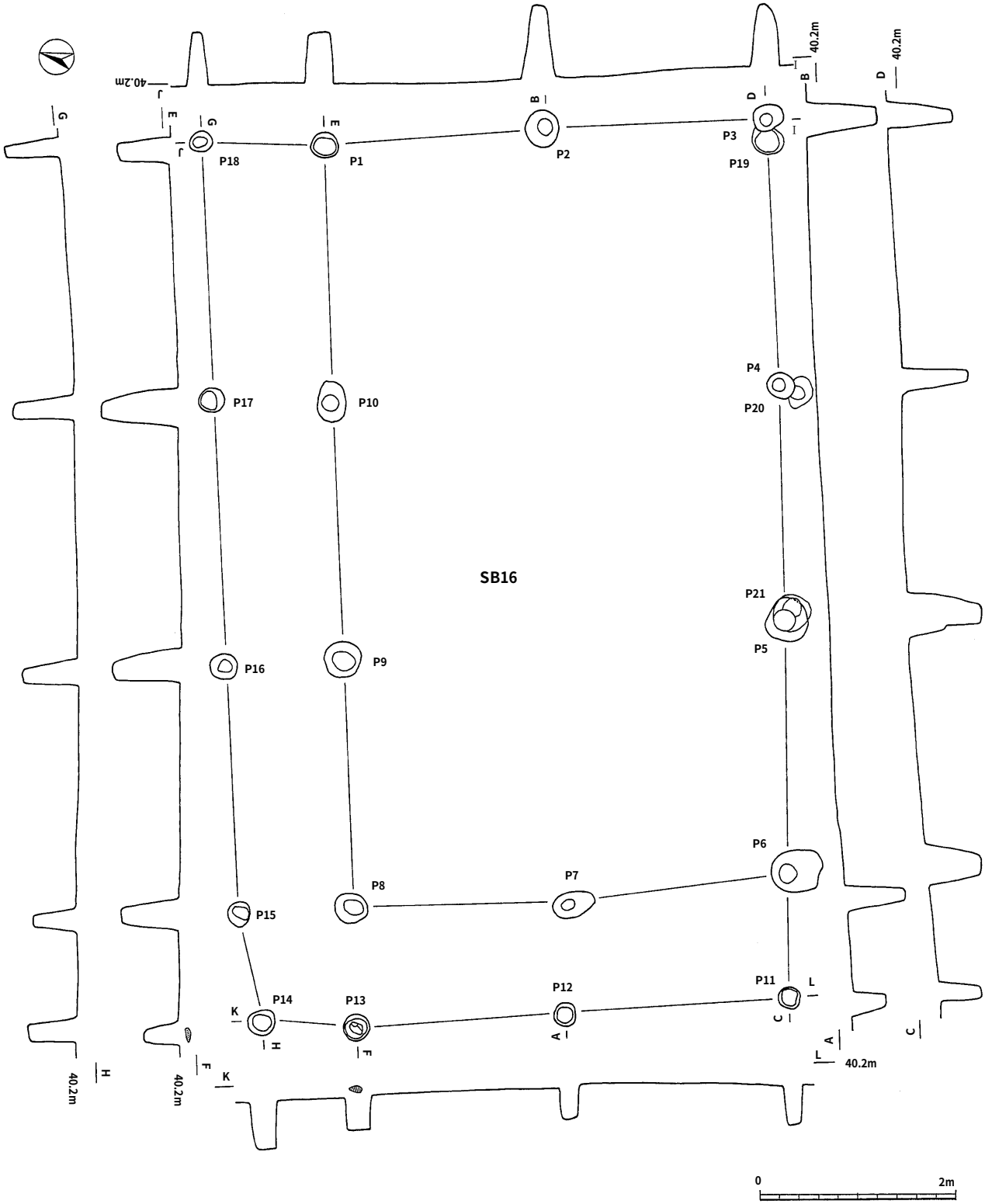
第 45 図　掘立柱建物跡15

第 17 表　掘立柱建物跡15の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
ＳＢ 15	上屋２間	上屋３間	3.55 m	m	5.21 m	m	D-4・5	Ｐ 1．24 × 19 × 31
			m	m	m	m	方位Ｅ69°	2．32 × 25 × 65
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3．23 × 17 × 20
Ｐ１～10	1.80 m	Ｐ	m	Ｐ１～２	1.05 m	Ｐ	m	4．30 × 25 × 61
9～10	1.74			2～3	2.40			5．33 × 29 × 59
2～11	1.70			3～4	1.80			6．30 × 18 × 46
8～11	1.75			6～7	2.03			7．30 × 24 × 46
3～12	1.83			7～8	2.13			8．30 × 26 × 54
7～12	2.05			8～9	1.05			9．24 × 20 × 45
4～5	1.65			5～12	1.53			10．25 × 21 × 32
5～6	1.85			11～12	2.62			11．31 × 20 × 36
				10～11	1.06			12．32 × 28 × 56

⑯　掘立柱建物跡 16（ＳＢ16）

本遺構はＣ－４・５区に検出した。建物跡は桁行が東西方向にあり，梁間２間，桁行３間の上屋に北側と西側に半間の下屋を付けている。遺構の重なりは，掘立柱建物跡 20 と方形竪穴遺構１と焼土５がみられる。柱穴の範囲を比較すると掘立柱建物跡 20 とは建て替え的建物と考えられる。

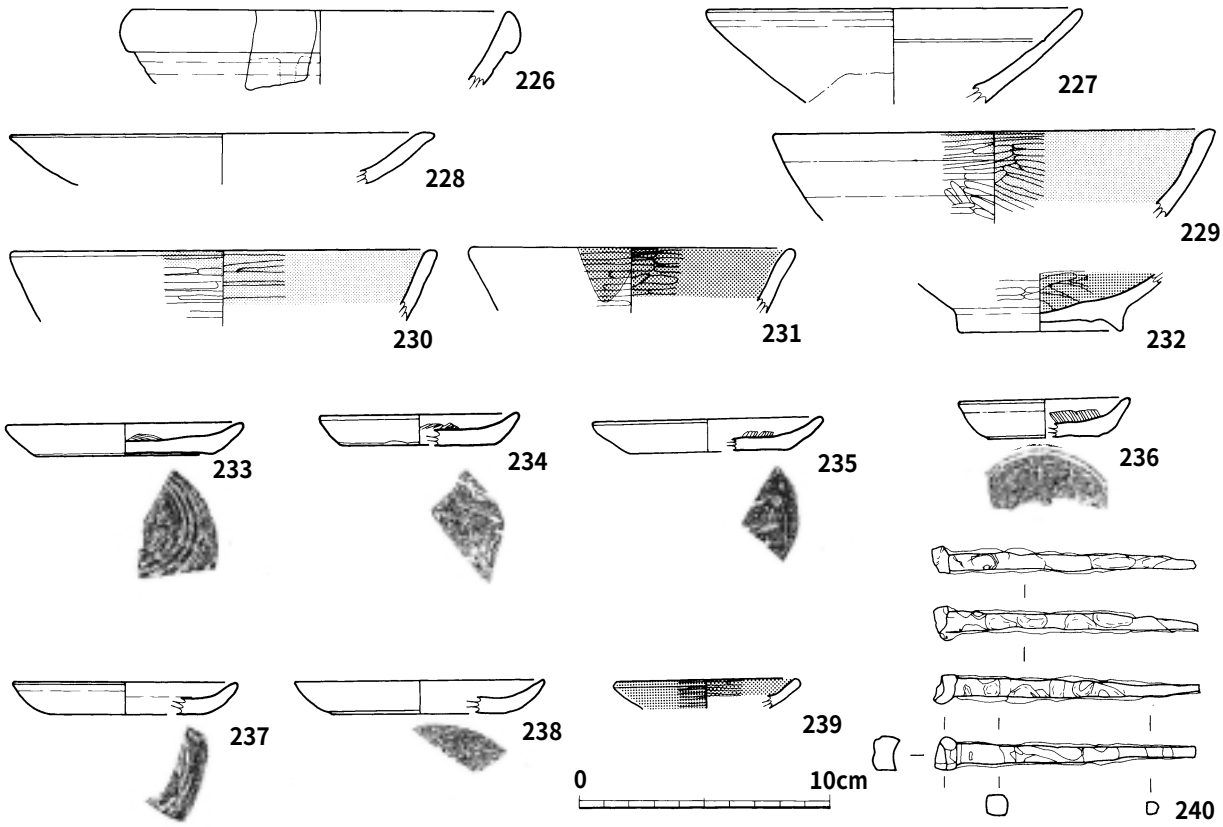


第 46 図　掘立柱建物跡16

方形竪穴遺構は建物跡の東南部にあり，降り口の段等から考えると時期差があると思われる。焼土５も同じと考えて良いが，掘立柱建物跡のどちらかが建ててない時期の遺構と思われる。

第 18 表　掘立柱建物跡16の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 16	上屋２間	上屋３間	4.50 m	5.38 m	7.70 m	8.95 m	C･D-4･5	P 1. 28 × 26 × 54
	下屋２間半	下屋３間半	m	m	m	m	方位 E 79°	2. 38 × 35 × 74
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 32 × 27 × 66
P１～２	2.25 m	P １～18	1.25 m	P １～10	2.65 m	P ６～11	1.25 m	4. 29 × 25 × 68
２～３	2.25	11～12	2.29	９～10	2.65	14～15	1.15	5. 45 × 40 × 75
６～７	2.25	12～13	2.15	８～９	2.50	15～16	2.53	6. 54 × 43 × 56
７～８	2.20	13～14	0.95	５～６	2.60	16～17	2.70	7. 44 × 26 × 61
				４～５	2.40	17～18	2.65	8. 34 × 32 × 58
				３～４	2.72			9. 39 × 36 × 70
								10. 42 × 29 × 78
								11. 23 × 23 × 43
								12. 24 × 21 × 33
								13. 27 × 27 × 34
								14. 27 × 25 × 48
								15. 25 × 23 × 44
								16. 28 × 26 × 57
								17. 27 × 25 × 63
								18. 24 × 20 × 55



第 47 図　掘立柱建物跡16の出土遺物

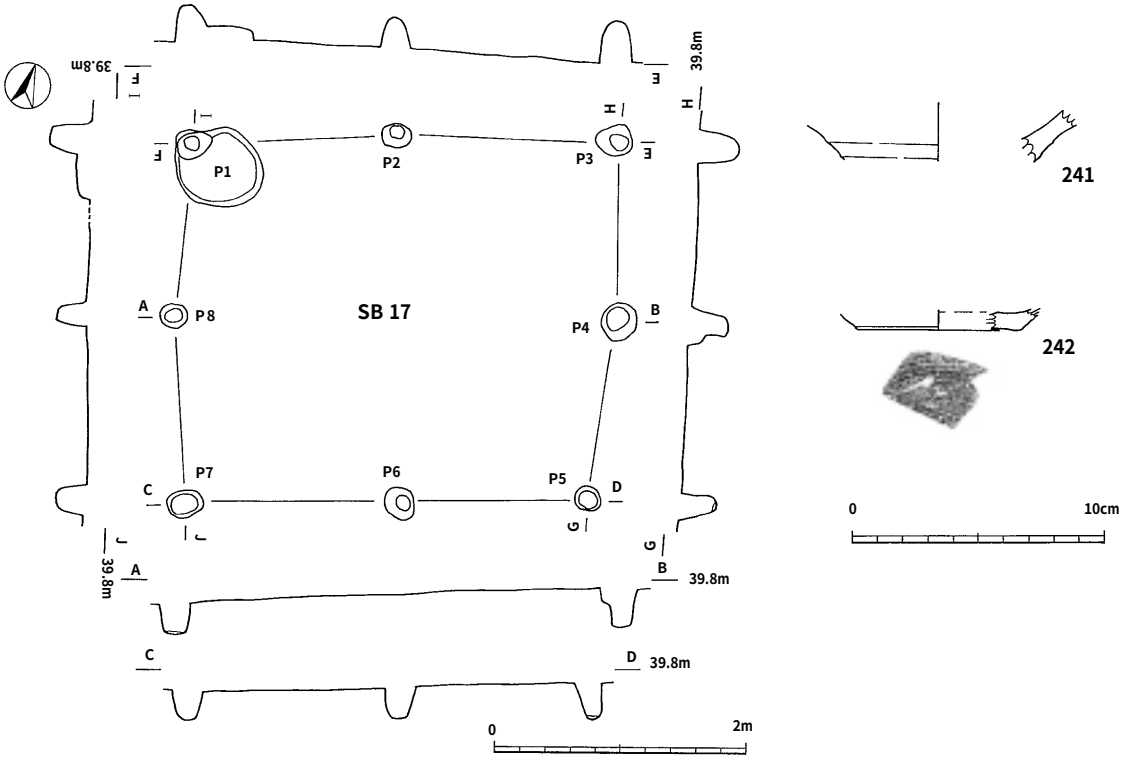
出土遺物（第 47 図 226～240）

226 はＰ５出土で，白磁Ⅳ類にあたる玉縁口縁部をもつ碗である。227 はＰ９出土で，口縁部が直に開く白磁の碗である。228 はＰ16 に出土した土師器の坏である。229 はＰ14 に出土した黒色土器Ａの埦である。230 はＰ17 に出土した黒色土器Ａの埦である。231 はＰ９から出土した黒色土器Ａの埦である。 232 はＰ５から出土した黒色土器Ａの埦の底部である。233・234 はＰ９出土，235 が

Ｐ８出土，236 がＰ１出土，238 はＰ７から出土した土師器の小皿である。これらの底は糸切り離しである。 239 はＰ９から出土した黒色土器Ｂの小皿である。底面は糸切り離しである。240 はＰ６に出土した輝製品の鉄釘である。

⑰　掘立柱建物跡 17（ＳＢ17）

本遺構はＤ・Ｅ－５区に検出した。この建物跡は桁行が東西と考えられる方向で，梁２間，桁行２間である。特徴は東梁間の棟柱が若干出ている。また、掘立柱建物跡 18 と重なっている。



第 48 図　掘立柱建物跡17と出土遺物

出土遺物（第 48 図 241・242）

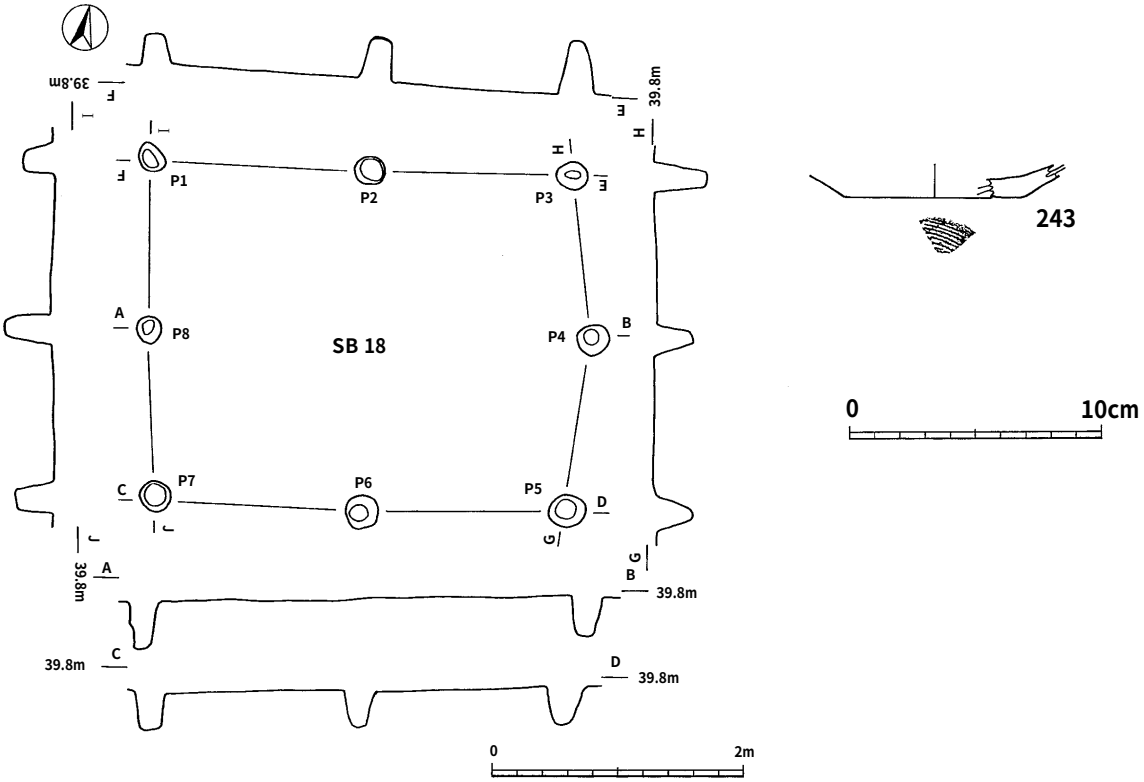
241 はＰ７から出土した土師器の坏である。242 はＰ７から出土した土師器の小皿である。底面は糸切り離しである。

第 19 表　掘立柱建物跡17の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 17	上屋２間	上屋２間	2.82 m	m	3.40 m	m	D・E－5	Ｐ 1． 18 × 20 × 30
			m	m	m	m	方位Ｅ69°	2． 24 × 19 × 25
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3． 35 × 25 × 33
								4． 31 × 28 × 30
Ｐ1～8	1.38 m	Ｐ	m	Ｐ 1～2	1.64 m	Ｐ	m	5． 20 × 20 × 27
3～4	1.42			2～3	1.79			6． 25 × 24 × 25
4～5	1.45			5～6	1.48			7． 30 × 23 × 23
7～8	1.48			6～7	1.75			8． 23 × 20 × 23

⑱　掘立柱建物跡 18（ＳＢ18）

本遺構はＤ・Ｅ－５区に検出した。この建物跡は桁行が東西と考えられる方向で，梁２間，桁行２間である。特徴は東梁間の棟柱が若干出ている。また，掘立柱建物跡 17 と重なっている。



第 49 図　掘立柱建物跡18と出土遺物

出土遺物（第 49 図 243）

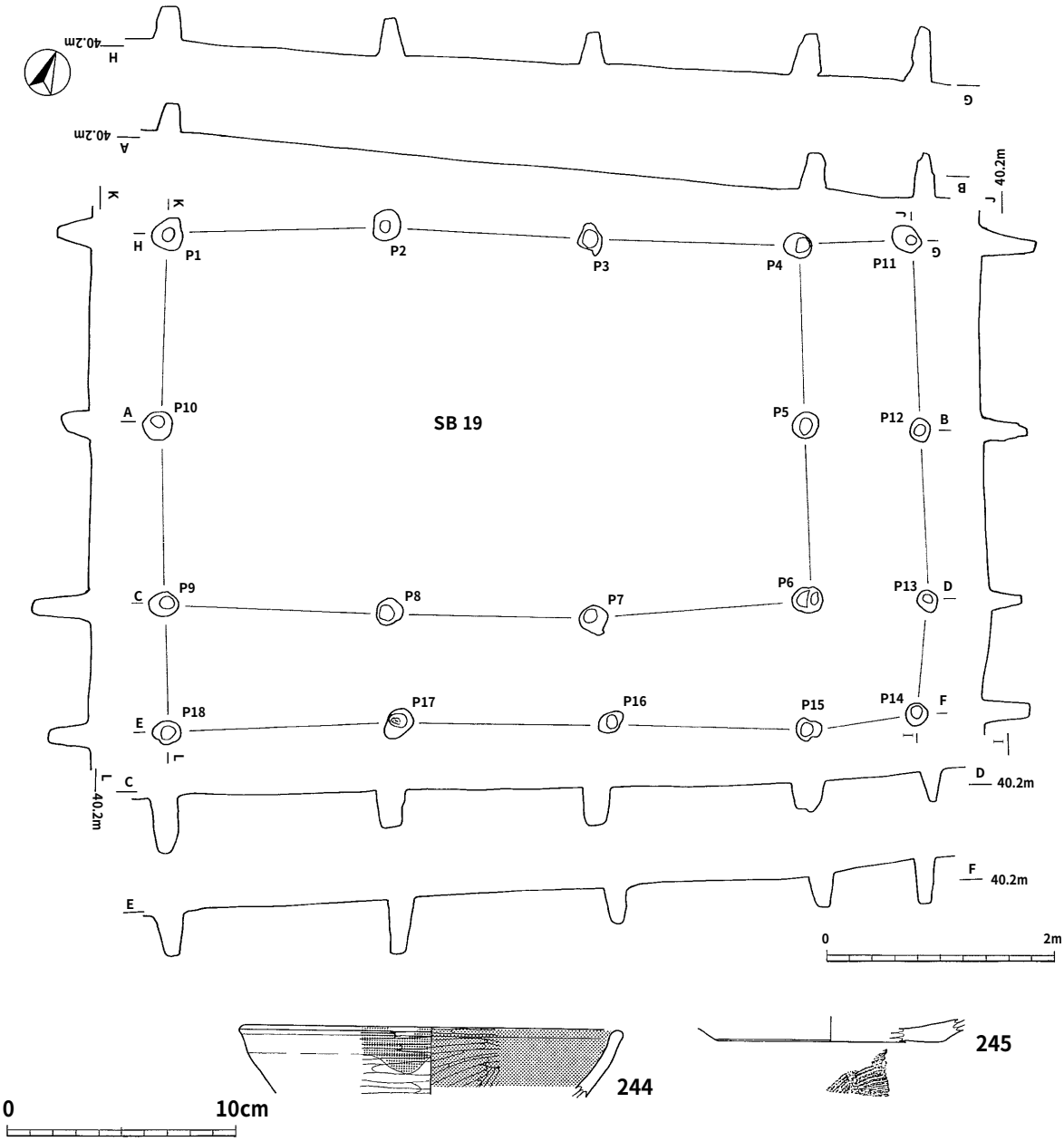
243 はＰ８に出土している。これは土師器の坏の底部である。

第 20 表　掘立柱建物跡18の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 18	上屋２間	上屋２間	2.63 m	m	3.35 m	m	D・E－5	P 1．24 × 19 × 23
			m	m	m	m	方位 E 80°	2．25 × 12 × 35
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3．26 × 24 × 43
								4．25 × 24 × 28
P 1～8	1.35 m	P	m	P 1～2	1.75 m	P	m	5．29 × 25 × 22
3～4	1.30			2～3	1.61			6．27 × 24 × 29
4～5	1.47			5～6	1.63			7．25 × 25 × 30
7～8	1.33			6～7	1.65			8．23 × 18 × 47

⑲　掘立柱建物跡 19（ＳＢ19）

本遺構はＢ・Ｃ－７区に検出した。建物跡の桁行方向は東西で，上屋と下屋からなる。上屋は梁２間，桁行３間で，下屋は半間間で南側と東側に付いている。他との重なりは，掘立柱建物跡 21 があり，掘立柱建物跡 22 とは接している。出土遺物は 244 がＰ４に出土している。これは黒色土器Ａの碗である。245 もＰ４に出土している。糸切り離しの坏底部である。

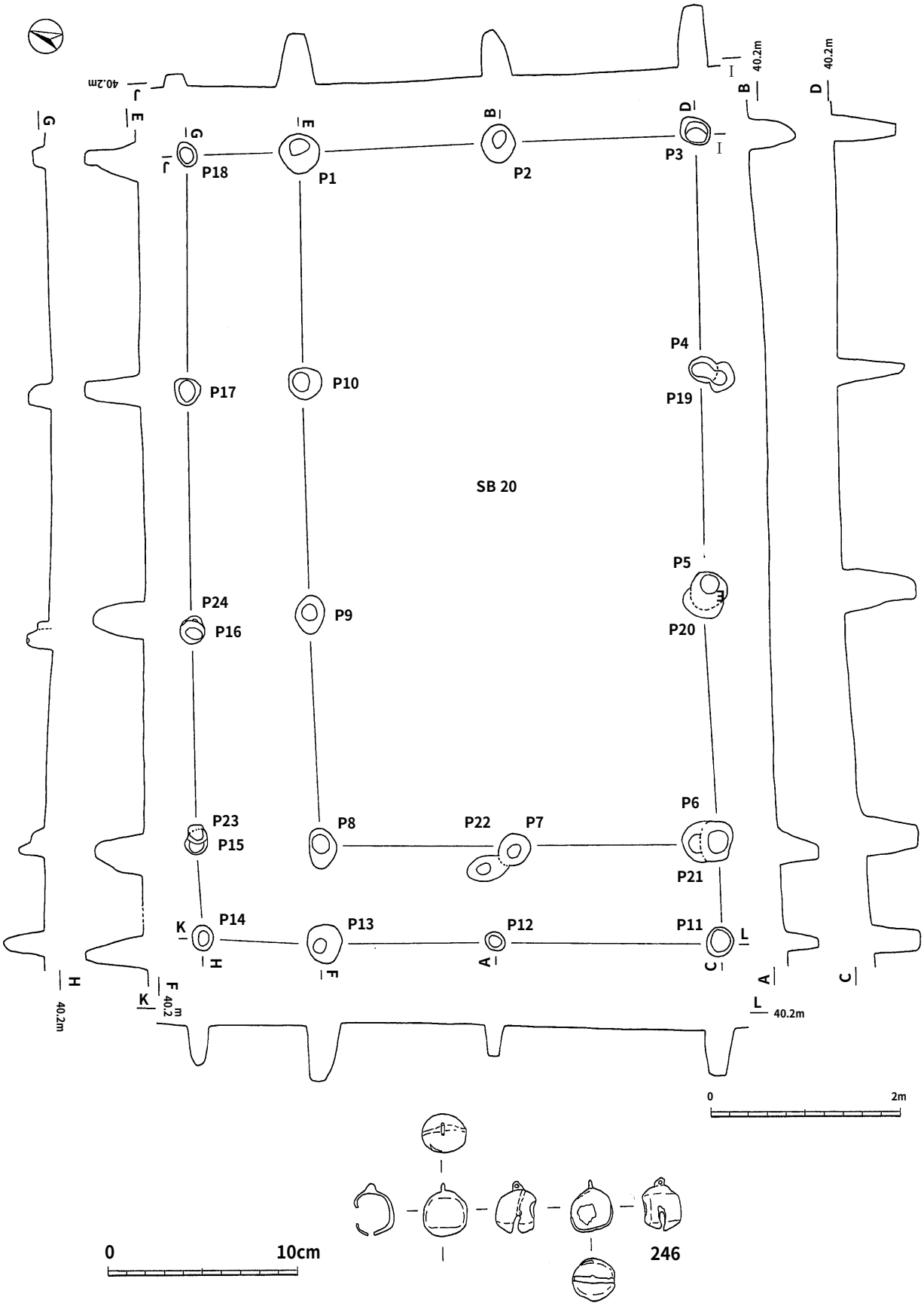


第50図　掘立柱建物跡19と出土遺物

第21表　掘立柱建物跡19の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 19	上屋２間	上屋３間	3.20 m	4.13 m	5.55 m	6.50 m	B・C－7	P 1. 31 × 28 × 29
	下屋２間半	下屋３間半	m	m	m	m	方位 E 68°	2. 28 × 26 × 33
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 30 × 21 × 27
P 1 ～10	1.62 m	P 9 ～18	1.13 m	P 1 ～ 2	1.90 m	P 4 ～11	0.95 m	4. 25 × 21 × 36
9 ～10	1.58	11～12	1.65	2 ～ 3	1.80	14～15	0.98	5. 25 × 23 × 32
4 ～ 5	1.56	12～13	1.48	3 ～ 4	1.85	15～16	1.70	6. 28 × 22 × 27
5 ～ 6	1.53	13～14	1.00	6 ～ 7	1.85	16～17	1.86	7. 27 × 24 × 34
				7 ～ 8	1.80	17～18	2.02	8. 25 × 22 × 34
				8 ～ 9	1.95			9. 26 × 22 × 50
								10. 26 × 24 × 23
								11. 27 × 21 × 49
								12. 22 × 17 × 39
								13. 20 × 16 × 28
								14. 20 × 19 × 42
								15. 22 × 14 × 30
								16. 25 × 17 × 32
								17. 29 × 22 × 49
								18. 25 × 21 × 36

⑳　掘立柱建物跡 20（ＳＢ20）



第 51 図　掘立柱建物跡20と出土遺物

本遺構はC－４・５区に検出した。建物跡の桁行は東西方向で，上屋と下屋からなる。下屋は梁２間，桁行３間で，下屋が北側と西側に付いている。そして，掘立柱建物跡 16 と重なり合って検出している。掘立柱建物跡 16 との違いは掘立柱建物跡 16 の北西角が内側に柱穴を掘っているが，本遺構はそれがない。他の切り合いは掘立柱建物跡 16 と同じである。

出土遺物はＰ８に 246 の青銅製鈴が出土している。

第 22 表　掘立柱建物跡20の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 20	上屋２間	上屋３間	4.20 m	5.40 m	7.50 m	8.50 m	C･D-4･5	Ｐ １．44 × 42 × 54
	下屋３間半	下屋２間半	m	m	m	m	方位Ｅ66°	２．40 × 36 × 50
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		３．36 × 30 × 66
Ｐ１～２	2.13 m	Ｐ１～18	1.17 m	Ｐ３～４	2.45 m	Ｐ６～11	1.05 m	４．30 × 28 × 70
２～３	2.08	11～12	2.35	４～５	2.50	14～15	0.97	５．40 × 36 × 76
６～７	2.50	12～13	1.85	５～６	2.25	15～16	2.25	６．45 × 32 × 56
７～８	2.04	13～14	1.25	８～９	2.70	16～17	2.55	７．36 × 34 × 32
				９～10	2.45	17～18	2.50	８．43 × 30 × 61
				１～10	2.47			９．40 × 30 × 55
								10．34 × 33 × 60
								11．31 × 29 × 34
								12．22 × 20 × 33
								13．40 × 38 × 61
								14．27 × 22 × 64
								15．26 × 25 × 52
								16．26 × 25 × 54
								17．30 × 28 × 59
								18．27 × 21 × 54

㉑　掘立柱建物跡 21（ＳＢ21）

本遺構はC－６・７区に検出している。建物跡の桁行は南北方向で，梁２間，桁行３間である。南梁面の棟柱跡が少し外側に掘られている。建物跡としては大型に属する。

他の遺構との重なりは，掘立柱建物跡 19 と土坑Ⅱ－８と用途不明の土坑がみられる。また，掘立

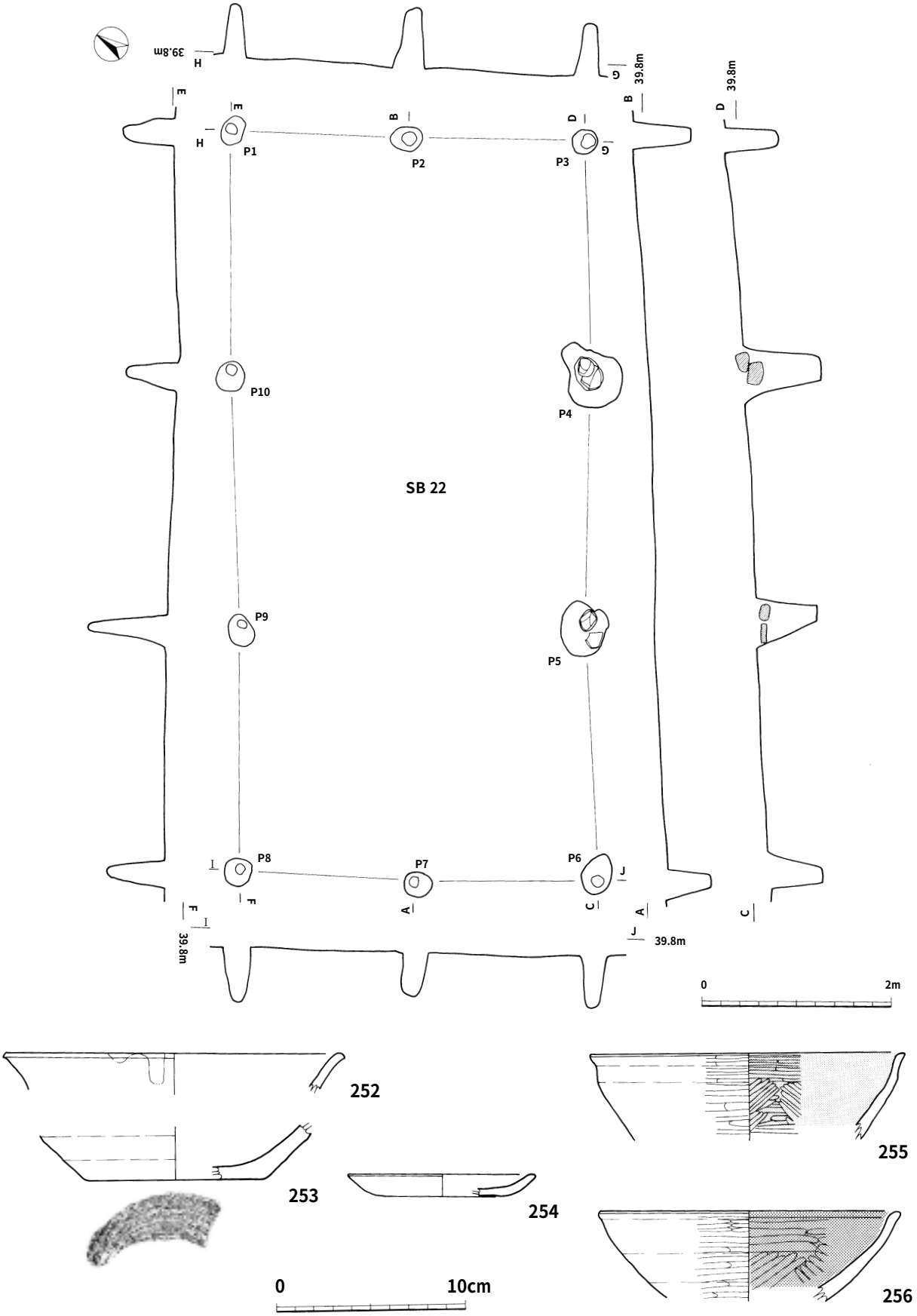
第 23 表　掘立柱建物跡21の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 21	上屋２間	上屋３間	3.65 m	m	6.10 m	m	C-６・７	Ｐ １．49 × 40 × 35
			m	m	m	m	方位Ｗ25°	２．39 × 35 × 50
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		３．43 × 36 × 58
Ｐ１～10	1.80 m	Ｐ	m	Ｐ１～２	2.10 m	Ｐ	m	４．45 × 33 × 46
４～５	1.70			２～３	1.97			５．55 × 38 × 57
５～６	1.83			３～４	2.05			６．40 × 31 × 51
９～10	1.82			６～７	2.15			７．55 × 50 × 62
				７～８	2.05			８．64 × 48 × 60
				８～９	2.10			９．80 × 64 × 60
								10．40 × 18 × 42

柱建物跡 24 とは隣接し平行している。

出土遺物（第 52 図 247～251）

247 はＰ９から出土している。口縁部が少し外反する半球状の黒色土器Ａの埦である。248 はＰ６から出土した半球状の黒色土器Ａの埦である。249 はＰ７から出土した黒色土器Ａの埦である。これら 247～249 は両面に丁寧な研磨がされている。250 はＰ７から出土した土師器の坏である。251 は，Ｐ２から出土したものである。器形は平底で体部から口縁部は直に立ち上がっている。



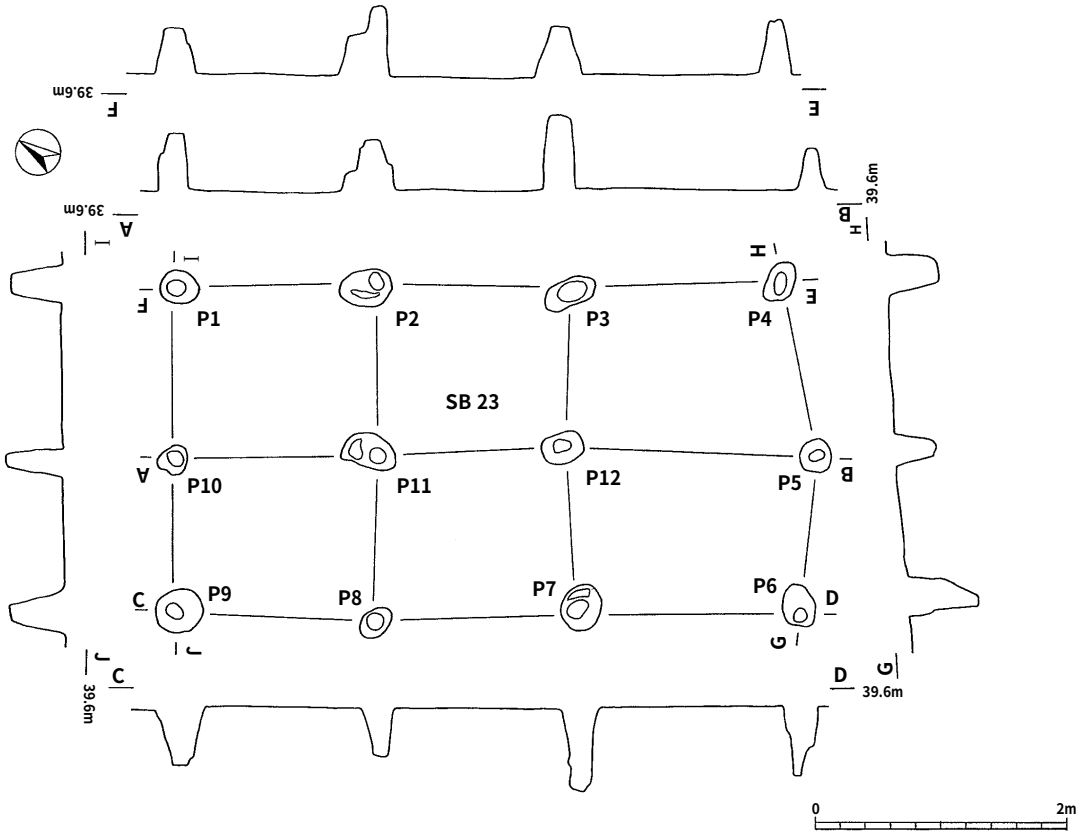
第 53 図　掘立柱建物跡22と出土遺物

第 24 表　掘立柱建物跡22の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 22	上屋２間	上屋３間	3.75 m	m	7.85 m	m	C・D－7	P 1． 32 × 23 × 55
			m	m	m	m	方位 E 55°	2． 35 × 27 × 65
								3． 30 × 28 × 57
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		4． 78 × 56 × 83
P 1 ～ 2	1.87 m	P	m	P 3 ～ 4	2.50 m	P	m	5． 59 × 51 × 67
2 ～ 3	1.90			4 ～ 5	2.75			6． 45 × 30 × 56
6 ～ 7	1.90			5 ～ 6	2.70			7． 30 × 27 × 48
7 ～ 8	1.86			8 ～ 9	2.55			8． 31 × 30 × 58
				9 ～10	2.70			9． 36 × 27 × 85
				1 ～10	2.60			10． 35 × 30 × 56

㉓　掘立柱建物跡 23（ＳＢ23）

Ｄ・Ｅ－７区に検出している。建物跡は桁行が南北方向で，梁２間，桁行３間の総柱である。この建物跡は，梁間の１間が狭く，南面の棟柱の位置が若干外側にはみ出している。さらに，桁行においては南側の１間が広く掘られている。よって，南側の部屋は広く取っていたと考えられる。



第 54 図　掘立柱建物跡23

他の遺構との重なり合いは，掘立柱建物跡 25 が直角にみられる。また，用途不明の土坑とも重なり合っている。

第25表　掘立柱建物跡23の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 23	上屋２間	上屋２間	2.25 m	m	4.80 m	m	D・E－7	P 1. 32 × 28 × 38
			m	m	m	m	方位W34°	2. 43 × 30 × 57
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 43 × 22 × 40
								4. 32 × 24 × 45
P１～10	1.35 m	P	m	P１～２	1.54 m	P	m	5. 27 × 26 × 33
10～９	1.17			２～３	1.56			6. 34 × 24 × 56
４～５	1.40			３～４	1.55			7. 37 × 34 × 67
５～６	1.27			６～７	1.77			8. 30 × 21 × 40
２～11	1.36			７～８	1.55			9. 38 × 35 × 47
８～11	1.31			８～９	1.60			10. 25 × 23 × 47
３～12	1.22			10～12	1.60			11. 43 × 29 × 42
７～12	1.29			11～12	1.46			12. 33 × 25 × 60
				５～12	2.01			

㉔ 掘立柱建物跡 24（ＳＢ24）

本遺構はＣ・Ｄ－６・７区に検出している。建物跡は，桁行が南北方向にみられ，広い１間を使用した梁間２間，桁行３間である。よつて，大型の建物に属する。

他の遺構との重なりは，焼土 11・12・13 のほか，土坑がみられる。また，溝４とは切り合いがみ

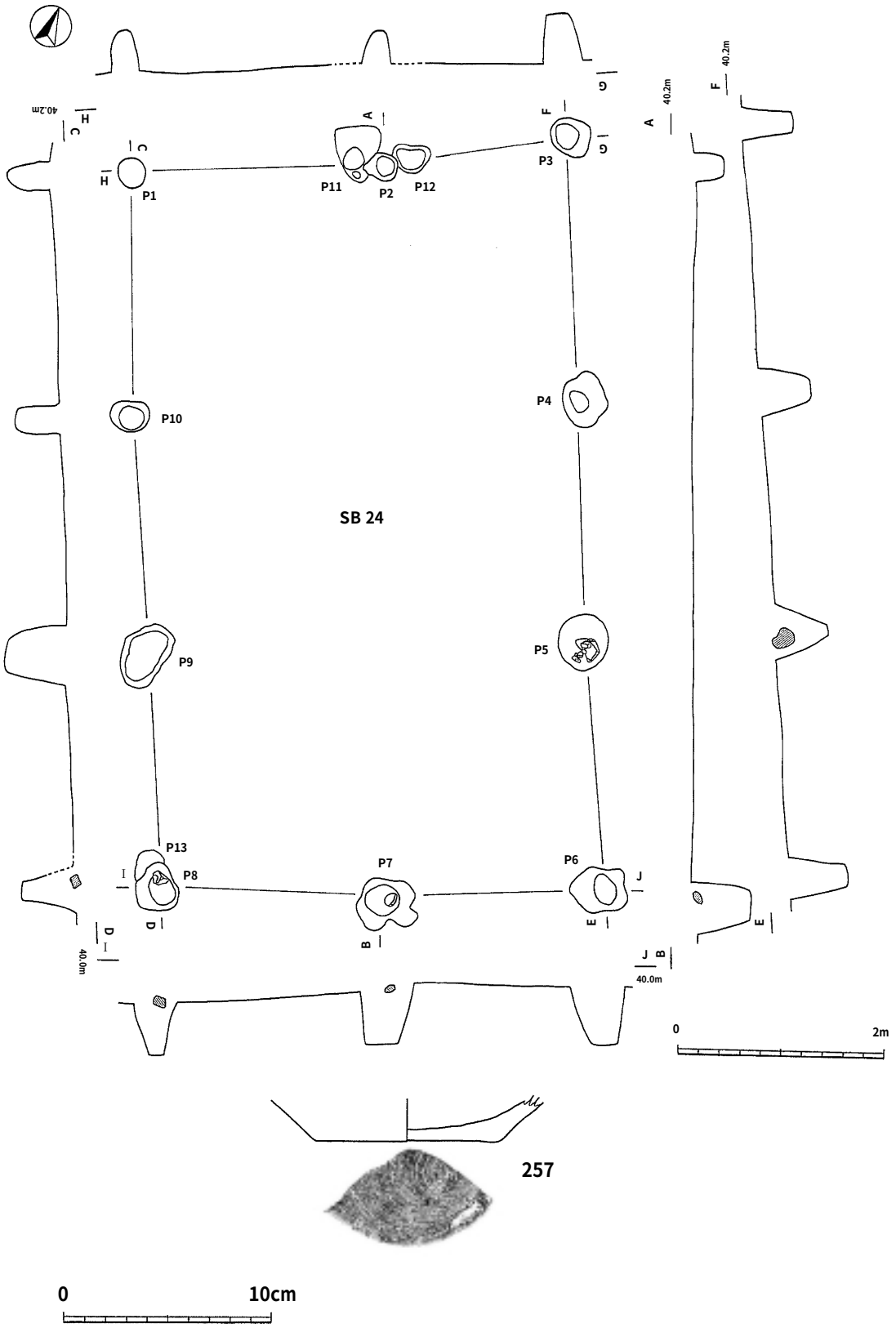
第26表　掘立柱建物跡24の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 24	上屋２間	上屋３間	4.30 m	m	7.30 m	m	C・D-6・7	P 1. 30 × 28 × 42
			m	m	m	m	方位W26°	2. 33 × 29 × 33
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 42 × 40 × 48
								4. 50 × 43 × 50
P１～２	2.45 m	P	m	P１～10	2.40 m	P	m	5. 55 × 49 × 53
２～３	1.80			10～９	2.30			6. 40 × 53 × 58
６～７	2.15			９～８	2.30			7. 53 × 48 × 55
７～８	2.15			６～５	2.42			8. 56 × 42 × 52
				５～４	2.32			9. 57 × 46 × 60
				４～３	2.58			10. 38 × 30 × 45

られ，時期差が認められる。さらに，方形竪穴遺構５，掘立柱建物跡 21・22 とは近接関係にあると考えられる。これらの遺構とは同時共存在の可能性はない。

出土遺物（第 55 図 257）

257 はＰ９から出土したやや大形の坏である。平底で体部・口縁部は外向する。底面は糸切り離しである。

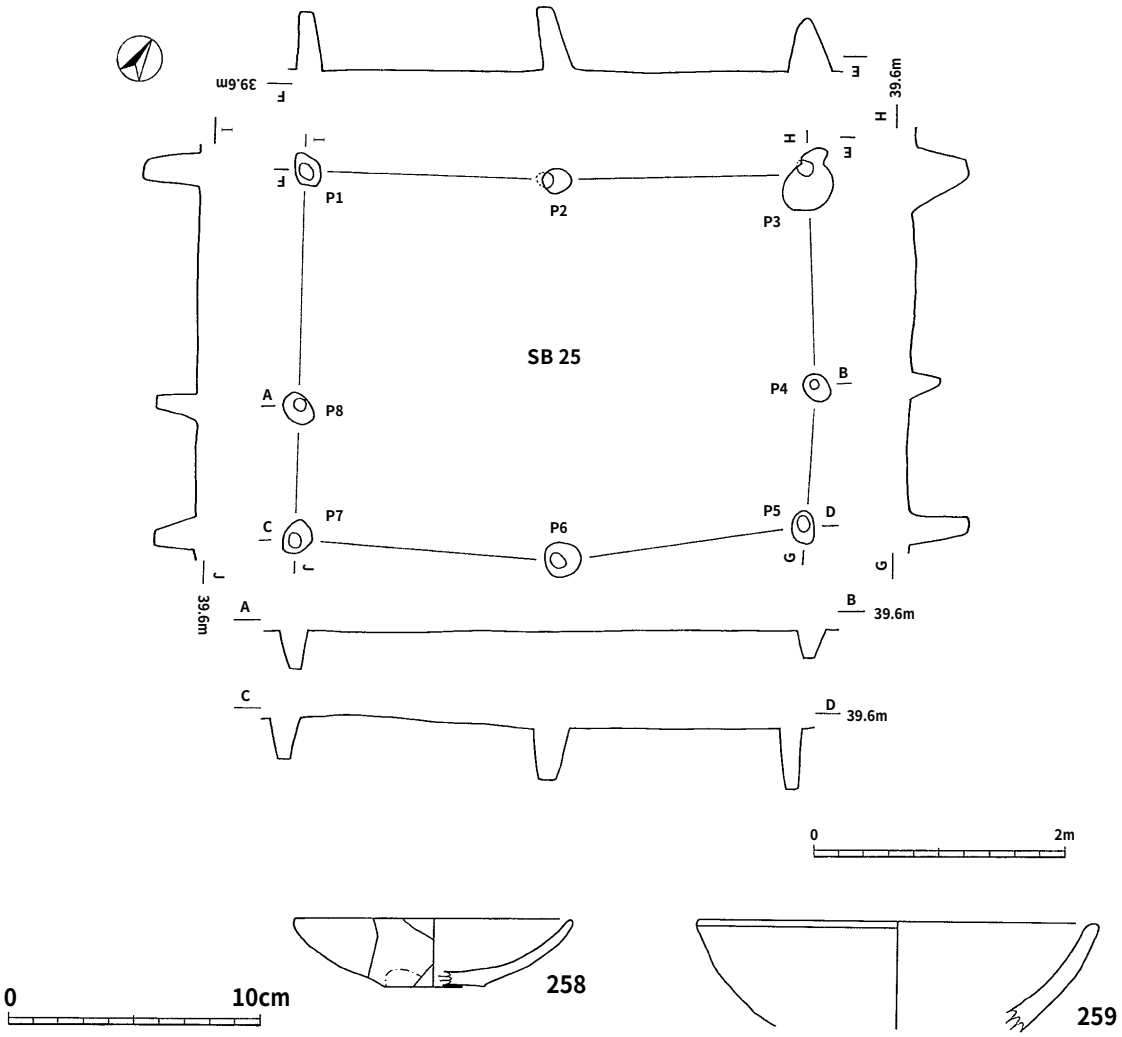


第 55 図　掘立柱建物跡24と出土遺物

㉕　掘立柱建物跡 25（ＳＢ25）

Ｄ・Ｅ－７区に検出した。建物跡の桁行は東西方向で，梁２間（１間半），桁行２間である。

他の遺構との重なりは，掘立柱建物跡 23 が直角にみられるほか，土坑がある。



第 56 図　掘立柱建物跡25と出土遺物

出土遺物(第 56 図 258・259)

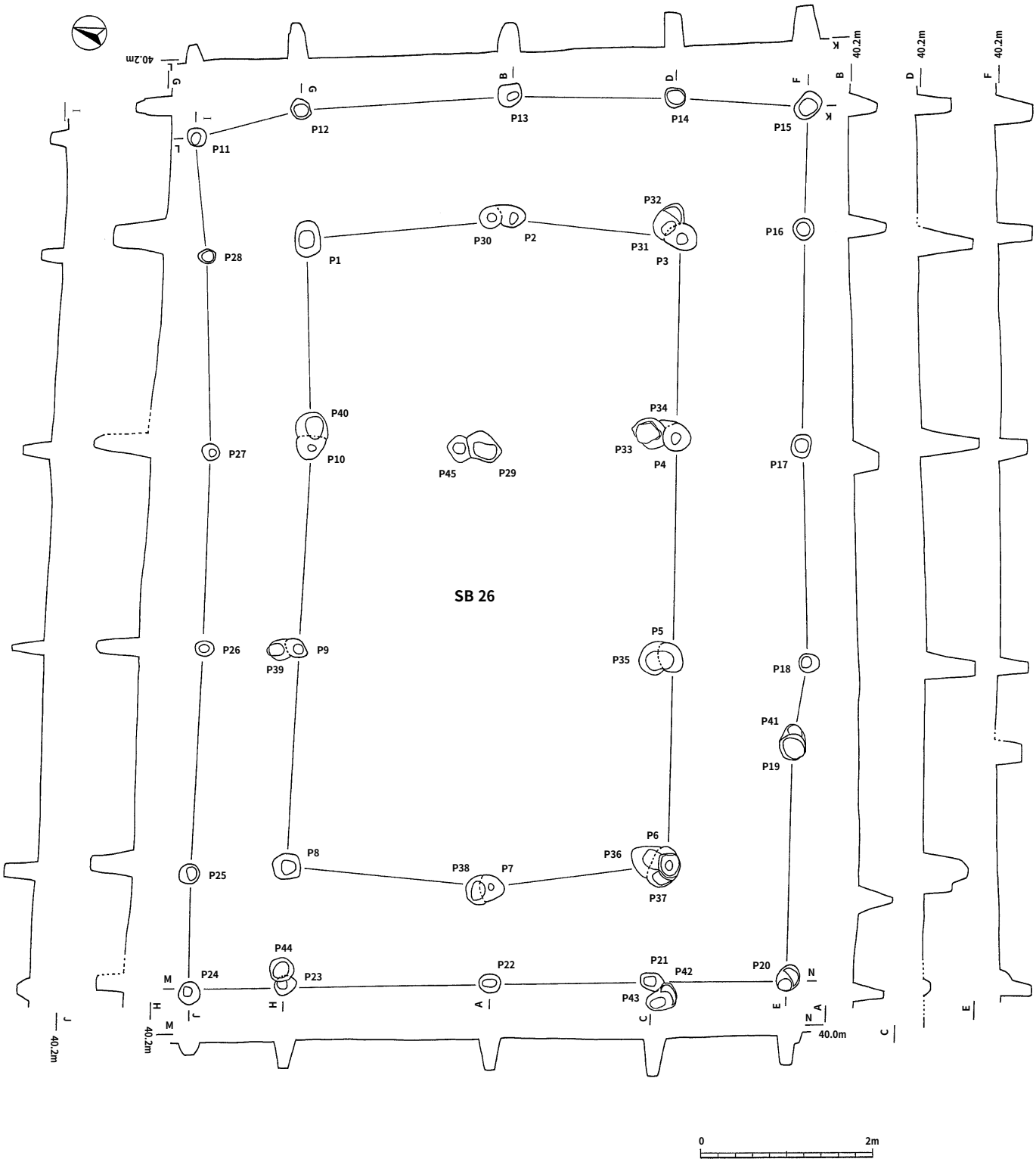
白磁皿の 258 と土師器椀の 259 が出土している。

第 27 表　掘立柱建物跡25の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 25	上屋２間	上屋２間	2.95 m	m	4.00 m	m	D・E－7	P 1． 32 × 21 × 46
			m	m	m	m	方位 E 58°	2． 24 × 20 × 50
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3． 53 × 33 × 48
P３～４	1.70 m	P	m	P１～２	1.92 m	P	m	4． 25 × 20 × 24
４～５	1.10			２～３	2.00			5． 28 × 18 × 48
７～８	1.10			５～６	2.00			6． 30 × 28 × 42
８～１	1.85			６～７	2.10			7． 30 × 23 × 34
								8． 28 × 21 × 34

㉖　掘立柱建物跡 26（ＳＢ26）

本遺構はＣ－８区に検出した。この建物跡の桁行方向は東西で，上屋と下屋からなり上屋は梁２間，桁行３間で，下屋は半間を廻らしている。下屋の北東角の柱穴は少し狭めている位置にある。



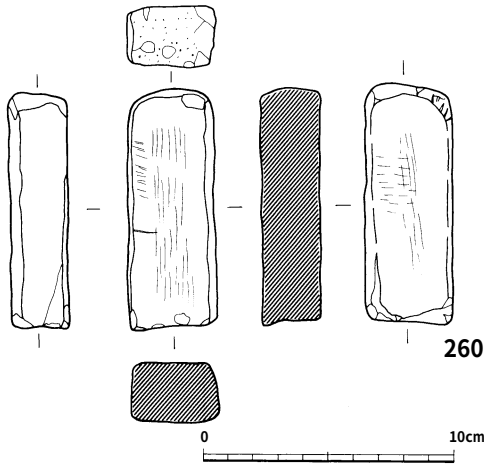
第 57 図　掘立柱建物跡26

この建物跡は，掘立柱建物跡31・32と重なり検出している。それは，下屋の桁行南面の柱穴が３重に検出している。このことは３回同じ所に建てなおしたことを物語っている。また，掘立柱建物跡27も重なり，土坑も周囲にみられる。

出土遺物(第58図260)

260はＰ５に砥石が出土している。

石材は砂岩質である。２面の中央部を使用している。また，頂部は敲石に使用されている。



第58図　掘立柱建物跡26の出土遺物

第28表　掘立柱建物跡26の計測

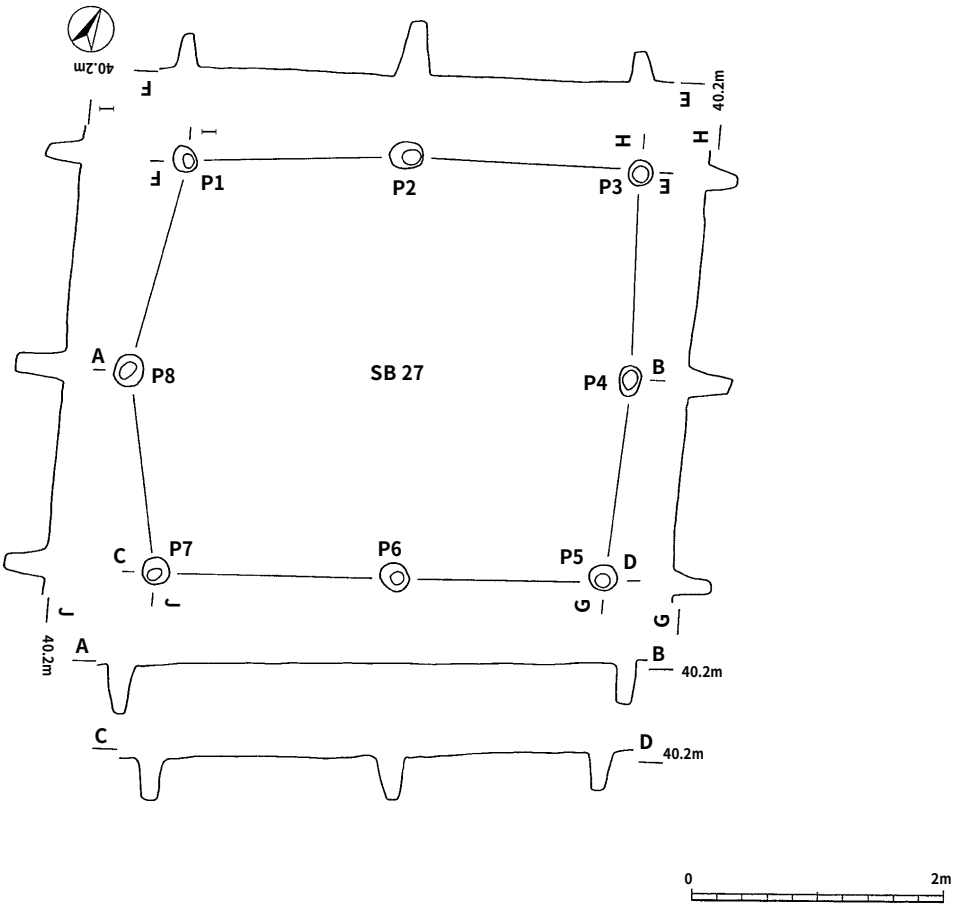
建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 26	上屋２間	上屋３間	4.37 m	7.15 m	7.30 m	10.24 m	C・D−8	P 1. 44 × 30 × 61
	下屋４間	下屋５間	m	m	m	m	方位 E72°	2. 28 × 27 × 44
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 40 × 33 × 62
P1～2	2.40 m	P11～12	1.27 m	P 3～4	2.33 m	P15～16	1.45 m	4. 33 × 32 × 68
2～3	2.00	12～13	2.45	4～5	2.60	16～17	2.50	5. 35 × 28 × 57
6～7	2.07	13～14	1.90	5～6	2.40	17～18	2.53	6. 46 × 35 × 52
7～8	2.37	14～15	1.53	8～9	2.55	18～19	1.00	7. 31 × 27 × 40
		20～21	1.60	9～10	2.35	19～20	2.78	8. 36 × 30 × 49
		21～22	1.87	10～1	2.45	24～25	1.37	9. 30 × 23 × 50
		22～23	2.45			25～26	2.65	10. 37 × 30 × 67
		23～24	1.12			26～27	2.29	11. 26 × 22 × 20
						27～28	2.30	12. 31 × 26 × 41
						28～11	1.40	13. 27 × 23 × 34
								14. 35 × 26 × 40
								15. 26 × 25 × 40
								16. 28 × 23 × 40
								17. 26 × 21 × 32
								18. 33 × 30 × 35
								19. 33 × 26 × 31
								20. 30 × 22 × 37
								21. 30 × 22 × 44
								22. 26 × 23 × 38
								23. 27 × 23 × 32
								24. 27 × 25 × 15
								25. 26 × 24 × 37
								26. 24 × 18 × 37
								27. 22 × 20 × 32
								28. 22 × 17 × 25

㉗　掘立柱建物跡27（ＳＢ27）

本遺構はＣ－８区に検出した。東西の桁行で梁間２間，桁行２間の建物跡である。

第29表　掘立柱建物跡27の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 27	上屋２間	上屋２間	3.23 m	m	3.60 m	m	B・C−8	P 1. 22 × 18 × 30
			m	m	m	m	方位 E63°	2. 27 × 12 × 45
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 22 × 20 × 27
P3～4	1.65 m	P	m	P 1～2	1.68 m	P	m	4. 26 × 18 × 36
4～5	1.55			2～3	1.82			5. 23 × 21 × 32
7～8	1.62			5～6	1.63			6. 25 × 21 × 35
8～1	1.74			6～7	1.92			7. 23 × 21 × 42
								8. 27 × 23 × 40



第59図　掘立柱建物跡27

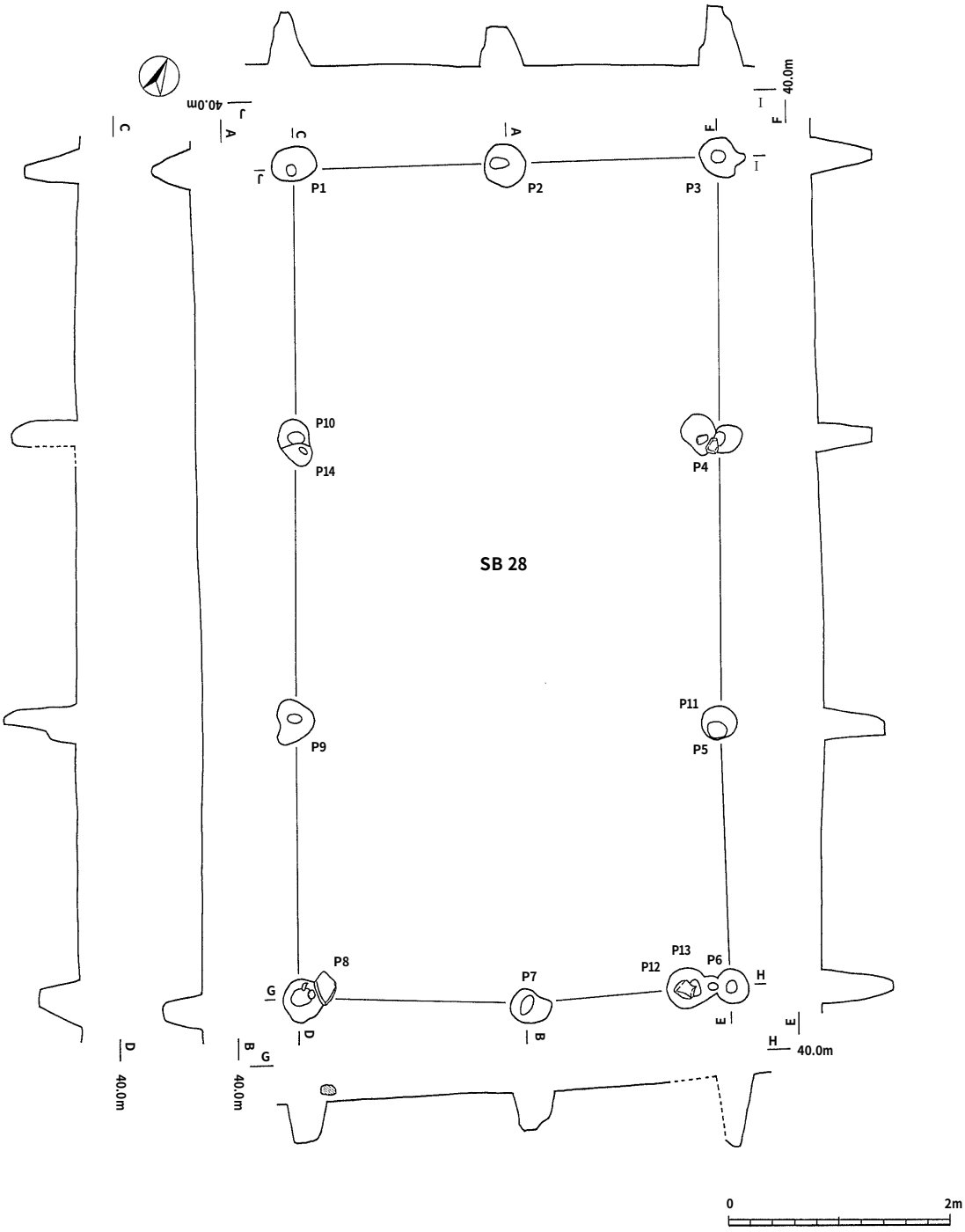
㉘　掘立柱建物跡28（ＳＢ28）

本遺構はＤ－７区に検出した。建物跡の桁行は南北で，梁間２間，桁行３間である。この建物の１間は広いため，大型の建物跡の類に属する。

本建物跡に重なっている遺構は焼土15・16・17と土坑がある。また，近接している建物は掘立柱建物跡22・23がある。

第30表　掘立柱建物跡28の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 28	上屋２間	上屋３間	3.85 m	m	7.45 m	m	D-7	P 1. 40 × 30 × 47
			m	m	m	m	方位W27°	2. 40 × 35 × 37
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 42 × 32 × 45
P1～2	1.87 m	P	m	P 1～10	2.42 m	P	m	4. 30 × 24 × 49
2～3	1.95			9～10	2.53			5. 32 × 27 × 56
6～7	1.85			8～9	2.50			6. 32 × 28 × 66
7～8	2.04			3～4	2.52			7. 37 × 30 × 37
				4～5	2.62			8. 40 × 35 × 40
				5～6	2.32			9. 42 × 34 × 68
								10. 30 × 25 × 60

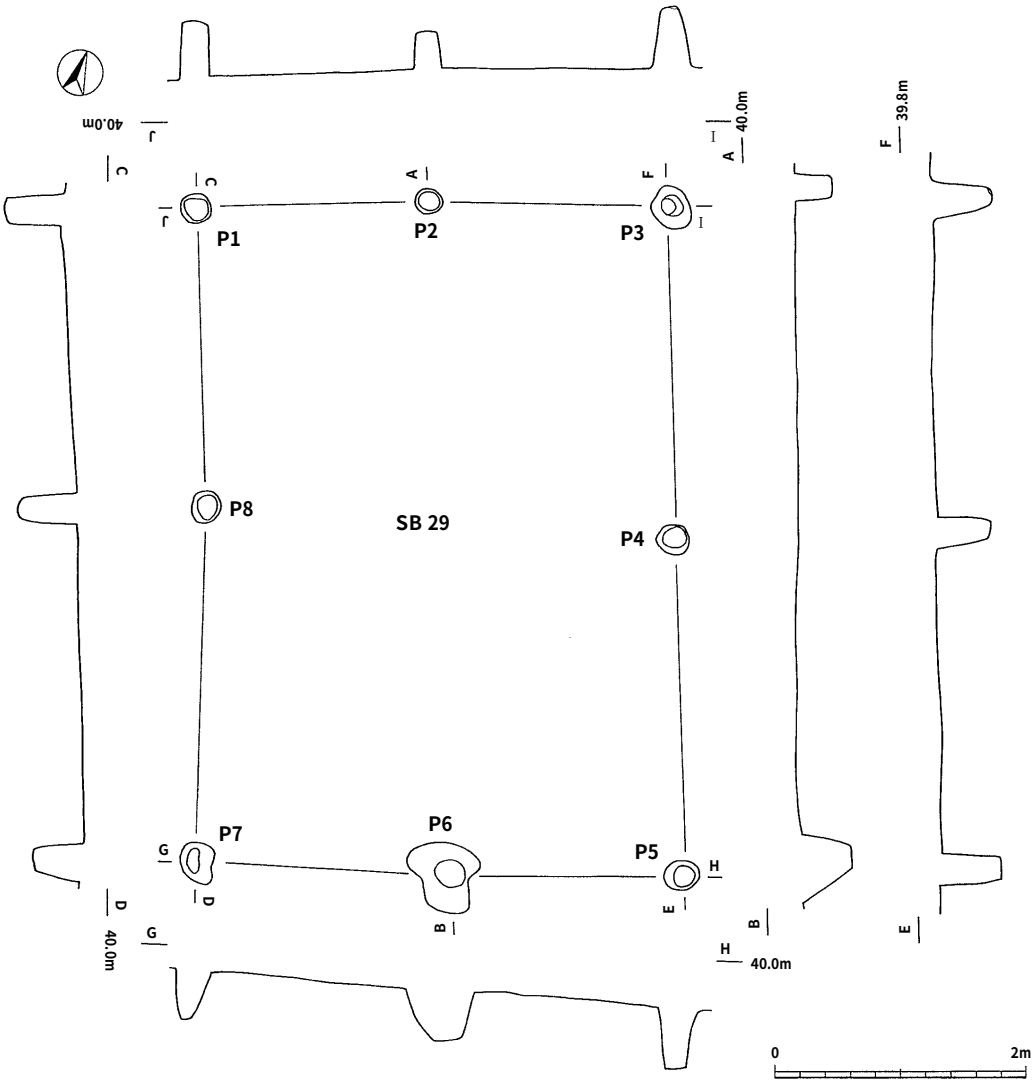


第60図　掘立柱建物跡28

㉙　掘立柱建物跡29（ＳＢ29）

本遺構はＥ・Ｆ－５・６区に検出した。建物跡の桁行は南北方向で，梁間２間，桁行３間である。その梁南面の棟柱跡は南側に出ている。なお，この建物跡は１間が広いため大型の建物に属する。

この建物跡と重なる遺構は，掘立柱建物跡３・30である。なお，周囲には土坑が東西にみられる。



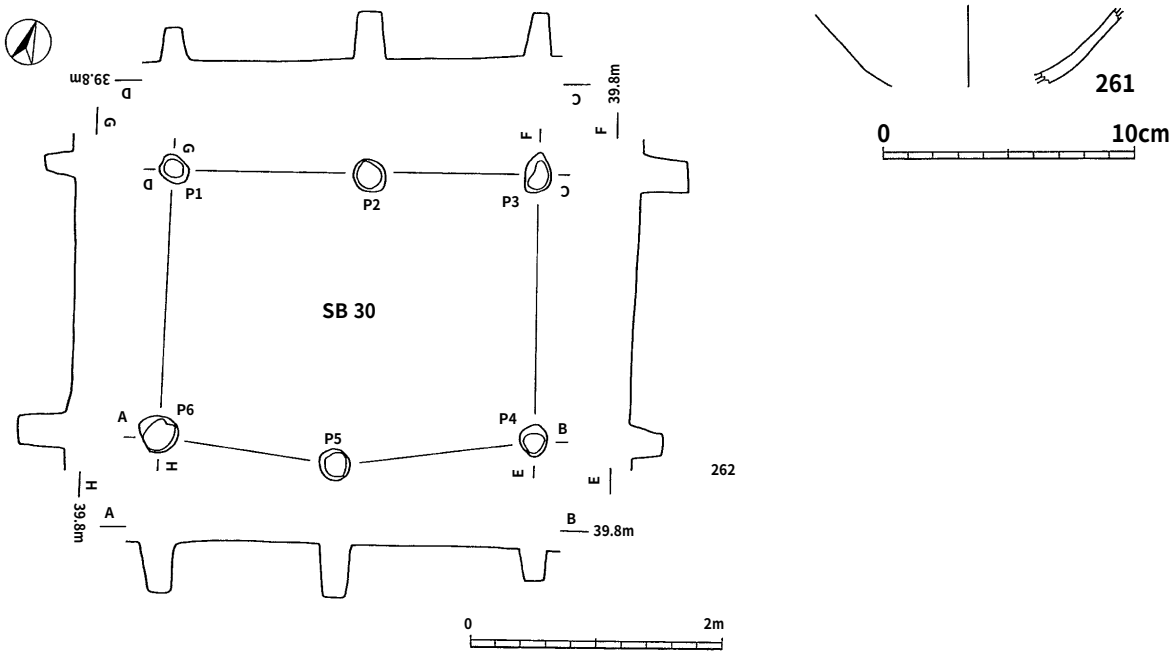
第61図　掘立柱建物跡29

第31表　掘立柱建物跡29の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 29	上屋２間	上屋２間	3.75 m	m	5.32 m	m	E･F-5･6	P 1. 27 × 24 × 47
			m	m	m	m	方位W20°	2. 23 × 20 × 31
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 37 × 30 × 50
								4. 28 × 24 × 44
P1～2	1.85 m	P	m	P 3～4	2.63 m	P	m	5. 30 × 22 × 50
2～3	1.90			4～5	2.68			6. 61 × 50 × 42
5～6	1.85			7～8	2.80			7. 35 × 25 × 40
6～7	2.05			8～1	2.38			8. 28 × 23 × 48

㉚　掘立柱建物跡30（ＳＢ30）

本遺構はＥ－６区に検出した。桁行方向は東西で，梁１間，桁行２間である。重なりの遺構は掘立柱建物跡３・29である。



第 62 図　掘立柱建物跡30と出土遺物

第 32 表　掘立柱建物跡30の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 30	上屋１間	上屋２間	2.12 m	m	2.90 m	m	E－6	P 1. 26 × 20 × 28
			m	m	m	m	方位 E 70°	2. 28 × 22 × 39
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 33 × 20 × 35
P１～6	2.15 m	P	m	P１～2	1.56 m	P	m	4. 26 × 22 × 25
3～4	2.12			2～3	1.45			5. 26 × 24 × 43
				4～5	1.58			6. 33 × 30 × 40
				5～6	1.40			

出土遺物（第 62 図 261）

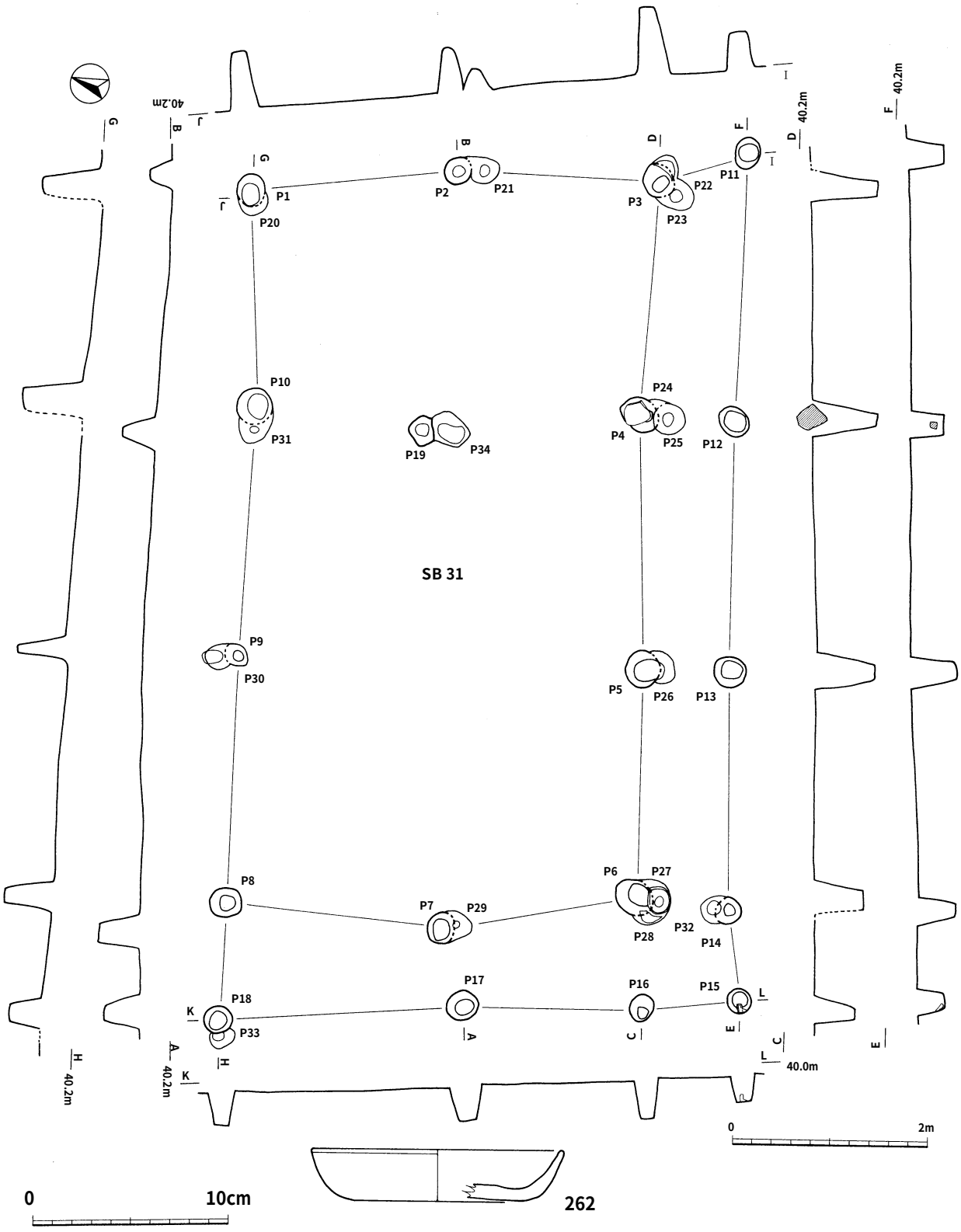
261 は白磁の碗の体部である。口縁部や底部がないため分類は不明である。

㉛ 掘立柱建物跡 31（ＳＢ31）

本遺構はＣ－８区に検出した。この建物跡の桁行方向は東西で，上屋と下屋からなる。上屋は梁２間，桁行３間で，下屋は西面と南面に半間で付く柱穴がみられる。他の遺構の重なりは，掘立柱建物跡 26・32 がある。この遺構の３重は上屋の南桁行の柱穴が３重に検出していることから考えられる。また，掘立柱建物跡 27 も変則的に重なっている。なお，周囲は近接して土坑やピットがみられるが量は少ない。

出土遺物（第 63 図 262）

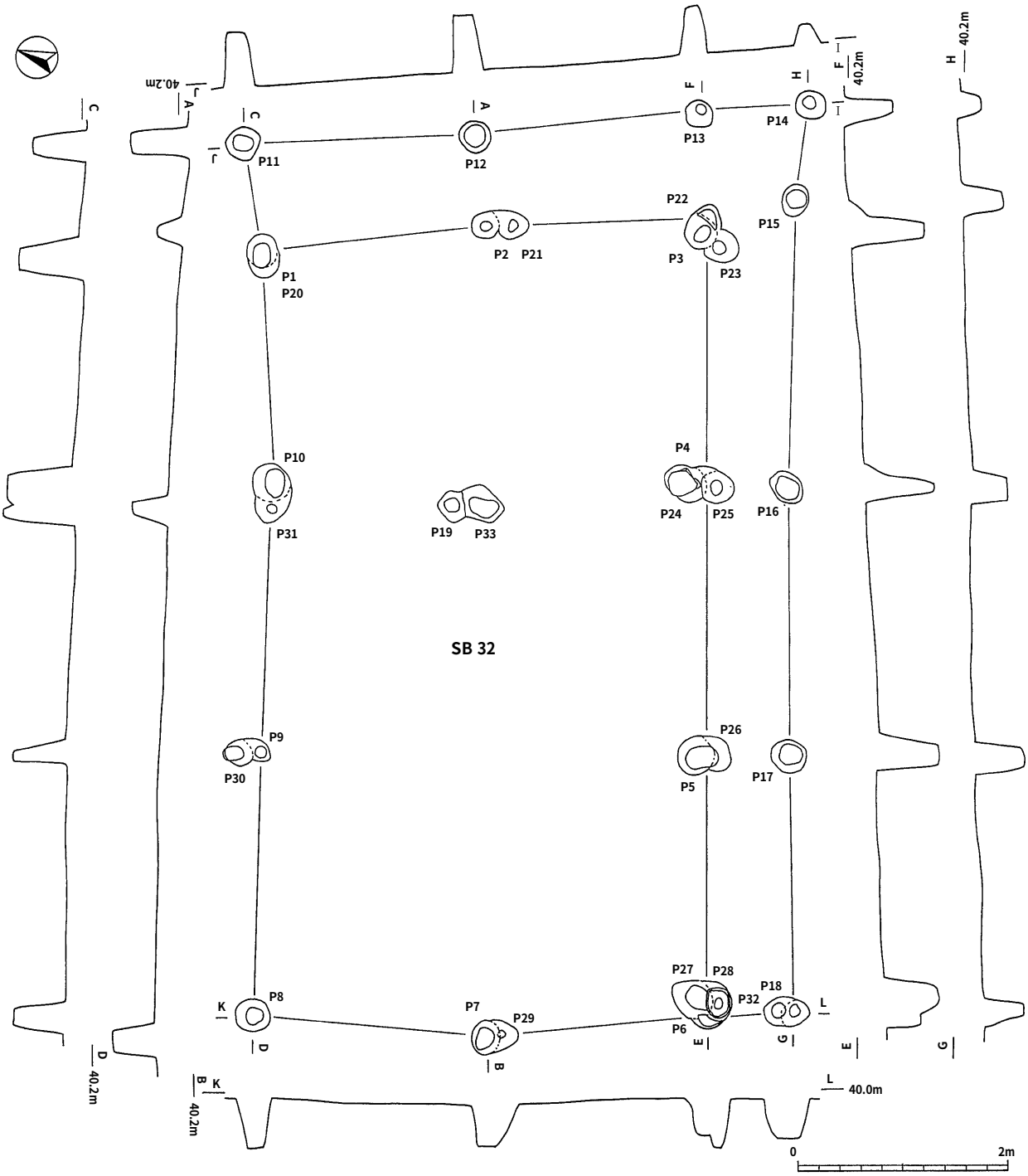
262 はＰ15 から出土している土師器の坏である。底部から体部・口縁部への立ち上がりは丸味があり，底部の中央は上がっている。底面は糸切り離しである。



第63図　掘立柱建物跡31と出土遺物

㉜　掘立柱建物跡 32（ＳＢ32）

本遺構はＣ－８区に検出した。この建物跡の桁行方向は東西で，上屋と下屋からなる。上屋は梁２間，桁行３間で，下屋は東面と南面に半間で付く柱穴がみられる。他の遺構の重なりは，掘立柱建物跡 26・31 がある。この遺構の３重は上屋の南桁行の柱穴が３重に検出していることから考えられる。また，掘立柱建物跡 27 も変則的に重なっている。なお，周囲は近接して土坑やピットがみられるが量は少ない。



第 64 図　掘立柱建物跡32

第33表　掘立柱建物跡31の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 31	上屋２間	上屋３間	4.20 m	5.30 m	7.28 m	8.70 m	C・D－8	P 1. 33 × 30 × 60
	下屋２間半	下屋３間半	m	m	m	m	方位 E 72°	2. 28 × 30 × 46
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 35 × 32 × 70
P1～2	2.15 m	P 3～11	0.98 m	P 3～4	2.37 m	P 11～12	2.75 m	4. 41 × 33 × 68
2～3	2.09	15～16	1.00	4～5	2.65	12～13	2.55	5. 39 × 37 × 60
6～7	2.12	16～17	1.83	5～6	2.30	13～14	2.45	6. 40 × 37 × 50
7～8	2.20	17～18	2.53	1～10	2.15	14～15	0.93	7. 33 × 28 × 43
				10～9	2.56	8～18	1.18	8. 34 × 30 × 52
				9～8	2.51			9. － × 23 × 53
								10. － × 39 × 62
								11. 34 × 26 × 39
								12. 35 × 28 × 25
								13. 34 × 32 × 50
								14. － × 29 × 40
								15. 26 × 25 × 29
								16. 29 × 25 × 43
								17. 35 × 29 × 37
								18. 30 × 27 × 35

第34表　掘立柱建物跡32の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 32	上屋２間	上屋３間	4.25 m	5.40 m	7.70 m	8.70 m	C・D－8	P 1. 34 × 30 × 63
	下屋２間半	下屋３間半	m	m	m	m	方位 E 70°	2. 27 × 25 × 25
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 36 × 32 × 70
P1～2	2.15 m	P 11～12	2.23 m	P 1～10	2.23 m	P 14～15	0.93 m	4. 32 × － × 67
2～3	2.08	12～13	2.18	10～9	2.60	15～16	2.80	5. － × 39 × 59
8～7	2.23	13～14	1.05	9～8	2.55	16～17	2.53	6. 47 × － × 53
7～6	2.15	6～18	0.90	3～4	2.45	17～18	2.48	7. 34 × 26 × 40
				4～5	2.60	1～11	1.09	8. 35 × 31 × 50
				5～6	2.50			9. 23 × 20 × 52
								10. 38 × 35 × 64
								11. 35 × 30 × 56
								12. 33 × 30 × 56
								13. 28 × 25 × 47
								14. 32 × 28 × 22
								15. 32 × 25 × 40
								16. 36 × 28 × 34
								17. 37 × 33 × 47
								18. 28 × 22 × 28

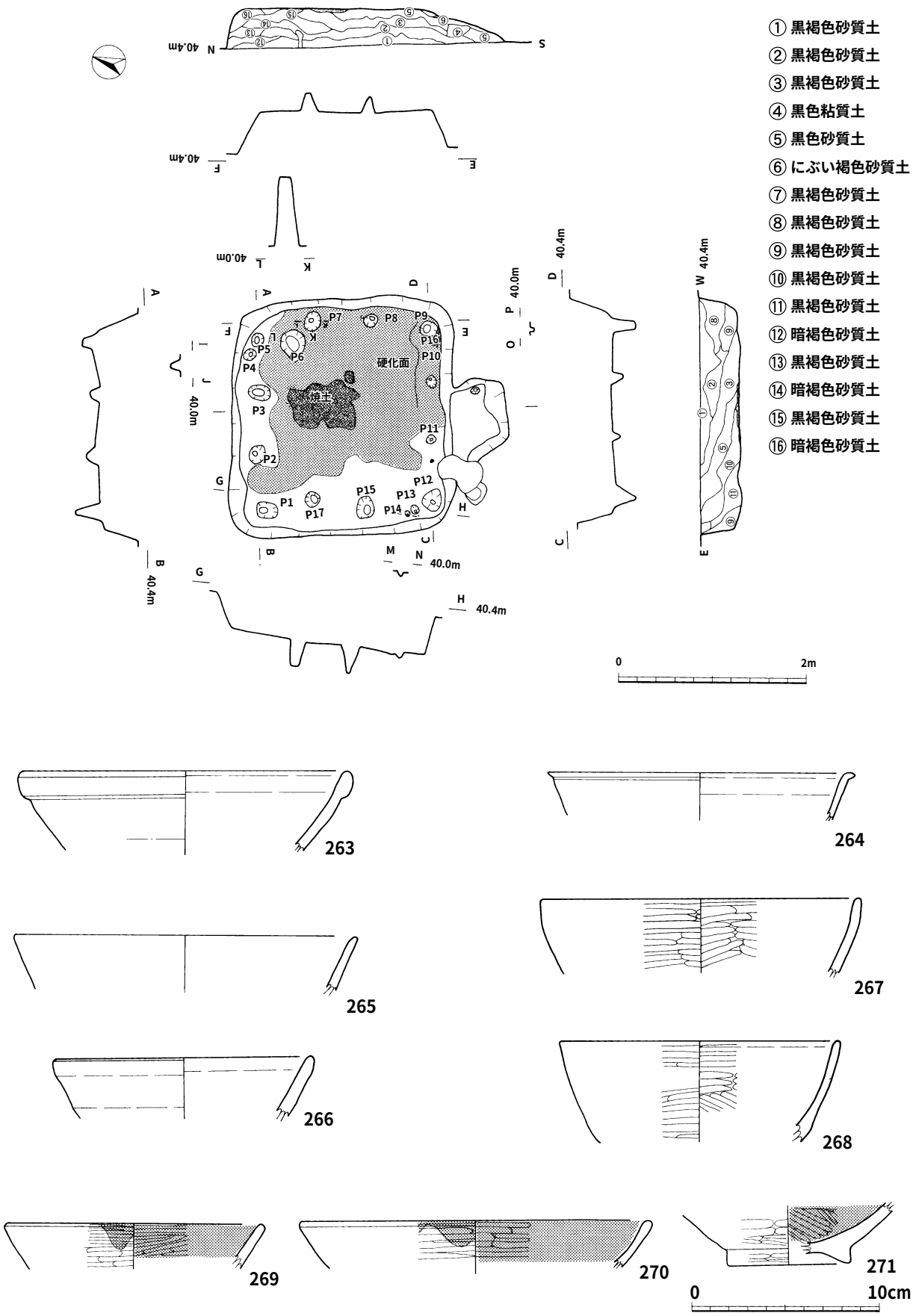
イ　方形竪穴遺構

①　方形竪穴遺構１

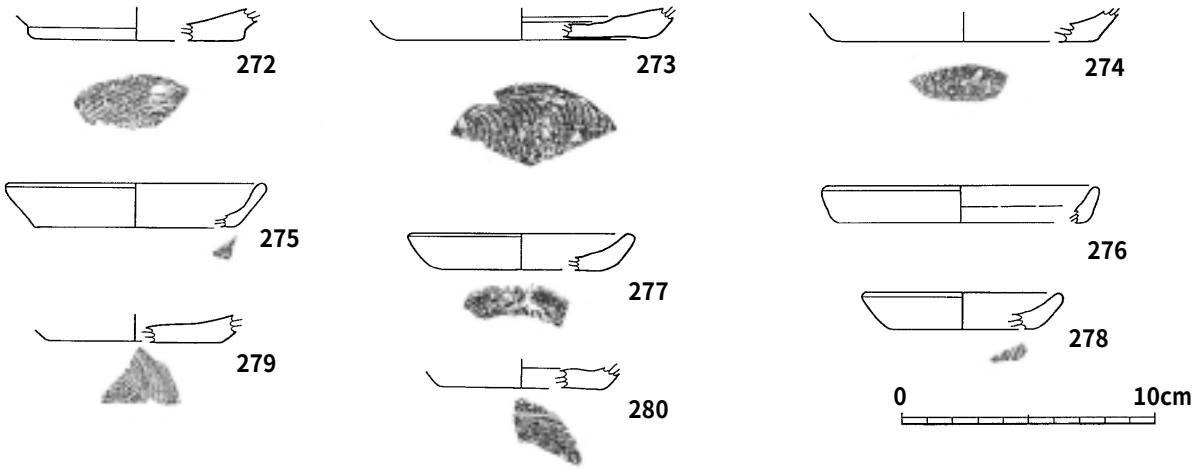
本遺構はＣ－４区に検出した。規模は東西２m50 cm，南北２m40 cm，深さ 40 cmの竪穴遺構である。南側には１段の段差があり，入り口の可能性が高い。竪穴内には 17 か所の柱穴が壁に沿って廻っている。柱穴の径は 20 cm前後のものと，8 cm前後のものとある。後者はＰ10・11 で深さは 10 cmと浅く梯子設置のピットの可能性もある。他は 20 cm前後である。

遺構の中央には何度かの使用により形成されたと思われる硬化面があり，その上に炭化物が４cmほど集積している。しかし，炉として何度も焚いたにしては床が赤化しておらず焼土もわずかに分布する程度であるため，炭を置いたかもしくは弱火で燃やすといった作業を行った可能性が指摘できる。

埋土は西側からの堆積が観察できる。各層とも色調・土質に大差はなく，同形のブロック（アカ



第65図　方形竪穴遺構1と出土遺物（1）



第66図　方形竪穴遺構1の出土遺物（2）

ホヤ・Ⅴ層・シラス）が混入することから，人為的に西側から埋めたと考えられる。

出土遺物は，白磁の玉縁(263)，端反り(264)，青磁(265)，土師器の椀(267・268)，坏(266・272～274)，黒色土器Ａの椀(269～271)，小皿(275～280)等が出土している。

② 方形竪穴遺構２

本遺構はＣ－５区に検出した。規模は東西２m50 ㎝，南北２m，深さ 70 ㎝の竪穴遺構である。竪穴内には 14 か所の柱穴が東西壁と南壁に沿って廻っている。柱穴の径は 20 ㎝前後のものと，10 ㎝前後のものとある。この内Ｐ５・６は支え柱跡であるが，Ｐ12・13 は梯子設置のピットと想定される。深さは 20 ㎝前後と 10 ㎝前後がある。

遺構の中央には何度かの使用により形成されたと思われる硬化面があり，その上に炭化物が３㎝ほど集積している。しかし，炉として何度も焚いたにしては床が赤化しておらず焼土もわずかに分布する程度であるため，炭をおいたかもしくは弱火で燃やすといった作業を行った可能性が指摘できる。

埋土は総じてＩｃ層を主体にアカホヤブロック，黒褐色（Ⅴ層）ブロック，シラスブロックがまだらに混ざっている。よって人為的に埋められた可能性が高い。

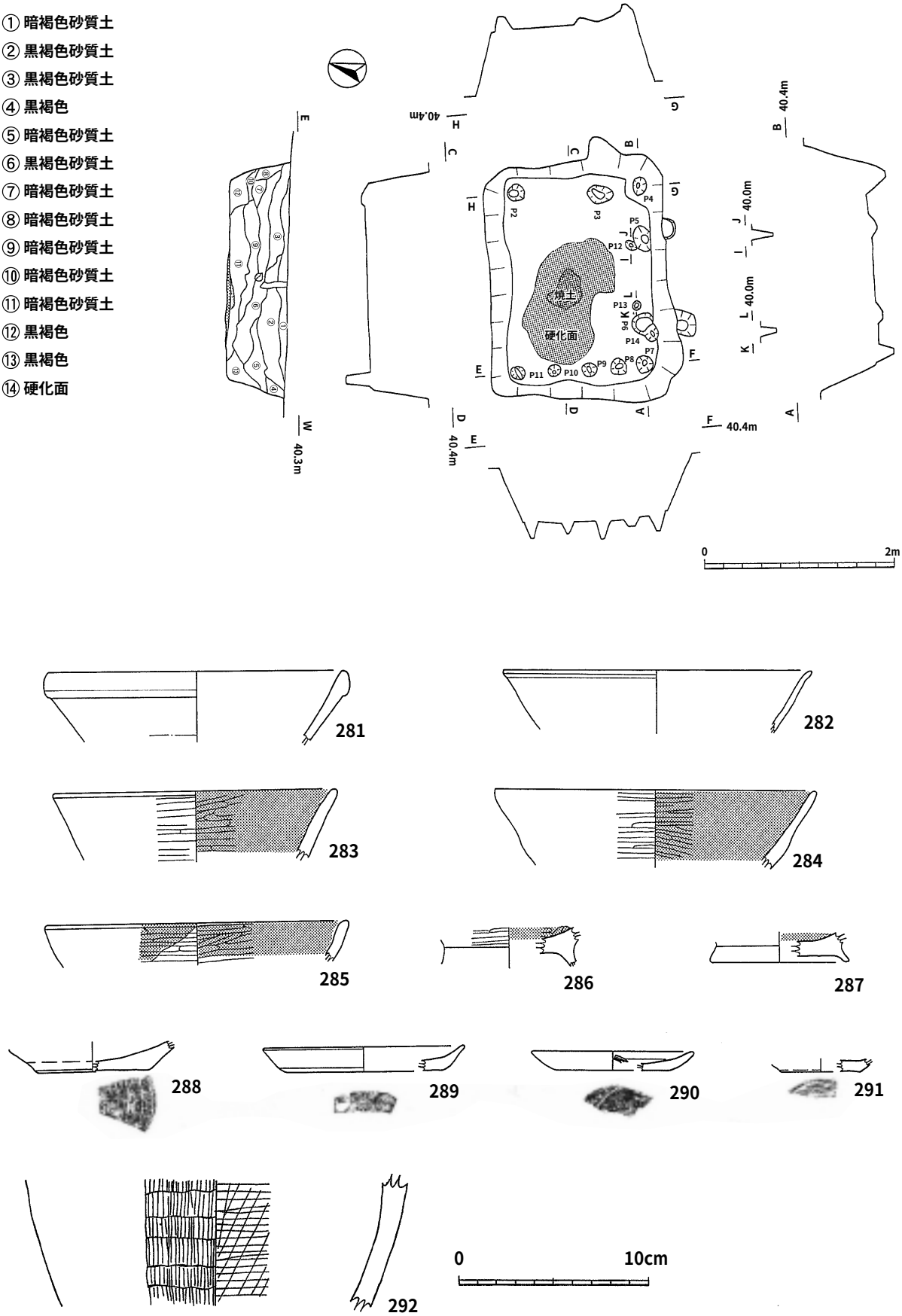
出土遺物は，白磁の玉縁(281)，端反り(282)，黒色土器Ａの椀(283～287)，土師器の坏(288)，小皿(289～291)，滑石製石鍋(292)等が出土している。

③ 方形竪穴遺構３

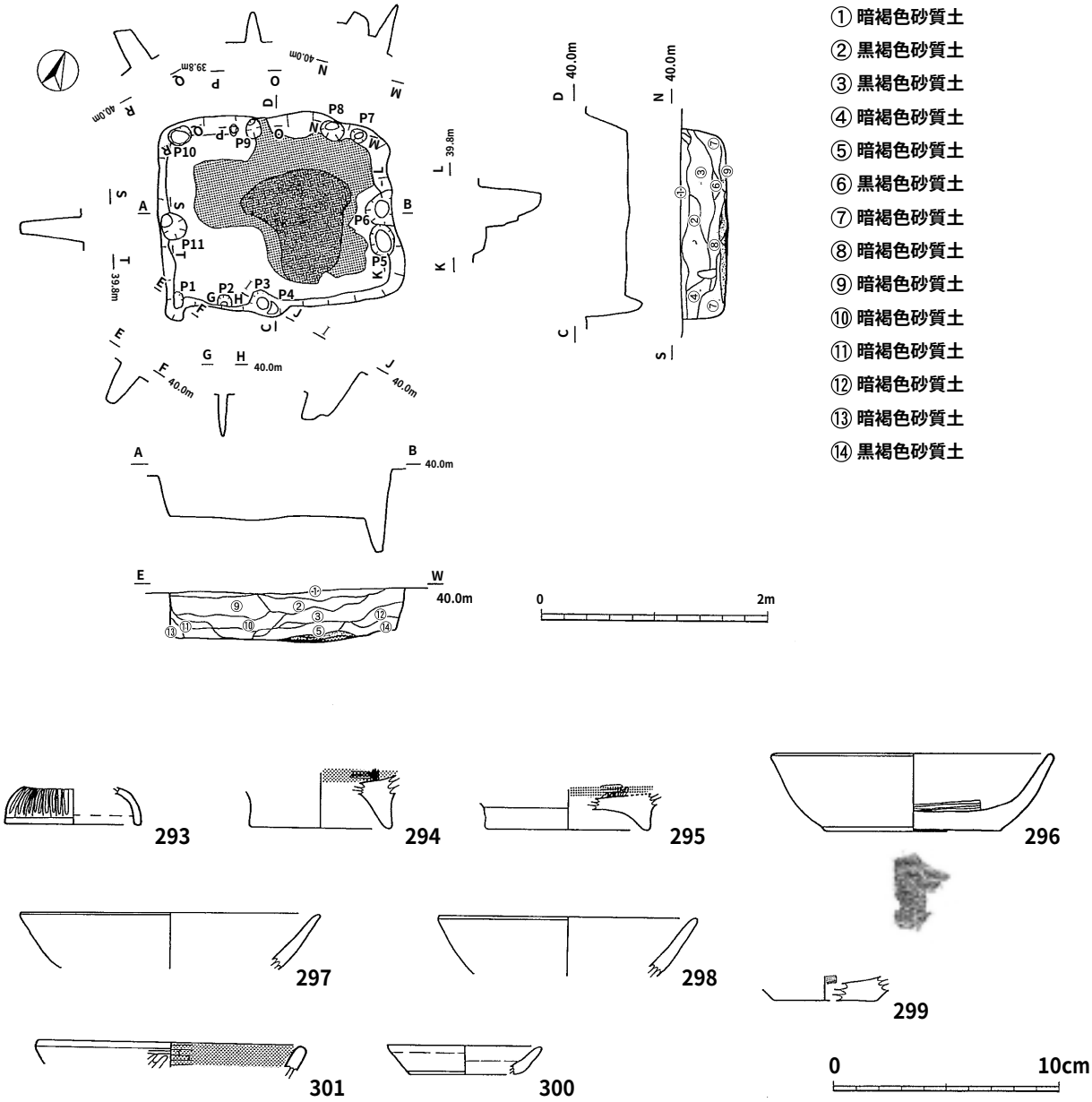
本遺構はＣ－５区に検出した。規模は東西２m10 ㎝，南北 1m70 ㎝，深さ 45 ㎝の竪穴遺構である。竪穴内には 11 か所の柱穴が壁に沿って廻っている。柱穴の径は 20 ㎝前後のものと，10 ㎝前後のものとあり，深さは 30 ㎝前後で深い。

遺構の中央には何度かの使用により形成されたと思われる硬化面があり，その上に炭化物が３㎝ほど集積している。しかし，炉として何度も焚いたにしては床が赤化しておらず焼土もわずかに分布する程度であるため，炭を置いたかもしくは弱火で燃やすといった作業を行った可能性が指摘できる。

① 暗褐色砂質土
② 黒褐色砂質土
③ 黒褐色砂質土
④ 黒褐色
⑤ 暗褐色砂質土
⑥ 黒褐色砂質土
⑦ 暗褐色砂質土
⑧ 暗褐色砂質土
⑨ 暗褐色砂質土
⑩ 暗褐色砂質土
⑪ 暗褐色砂質土
⑫ 黒褐色
⑬ 黒褐色
⑭ 硬化面



第 67 図　方形竪穴遺構2と出土遺物



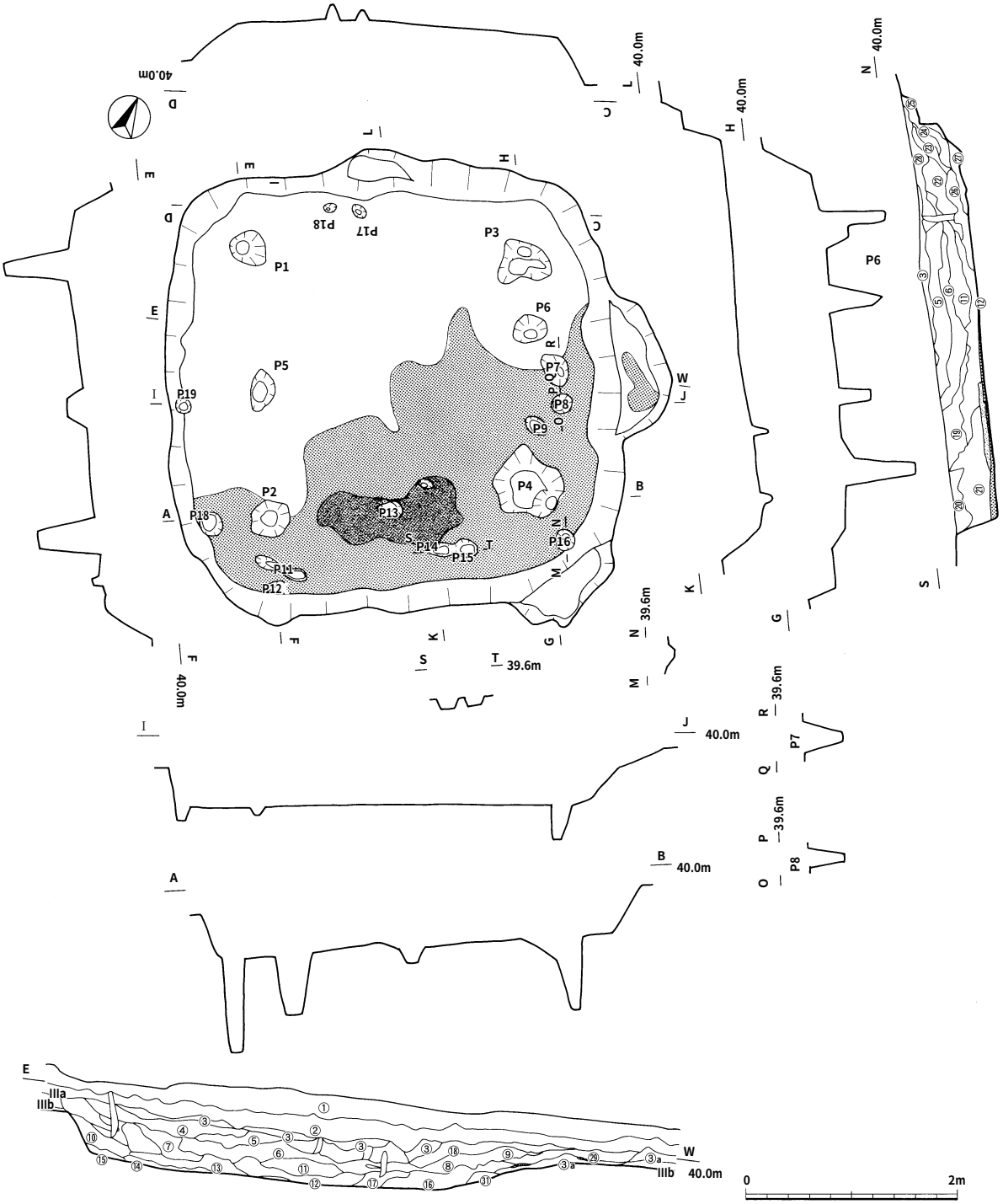
第68図　方形竪穴遺構3と出土遺物

埋土は総じてＩｃ層を主体にアカホヤブロック，黒褐色（Ｖ層）ブロック，シラスブロックがまだらに混ざっている。よって人為的に埋められた可能性が高い。

出土遺物は，青白磁(293)，黒色土器Ａの埦(294・295・301)，土師器の坏(296～299)，小皿(300)等が出土している。

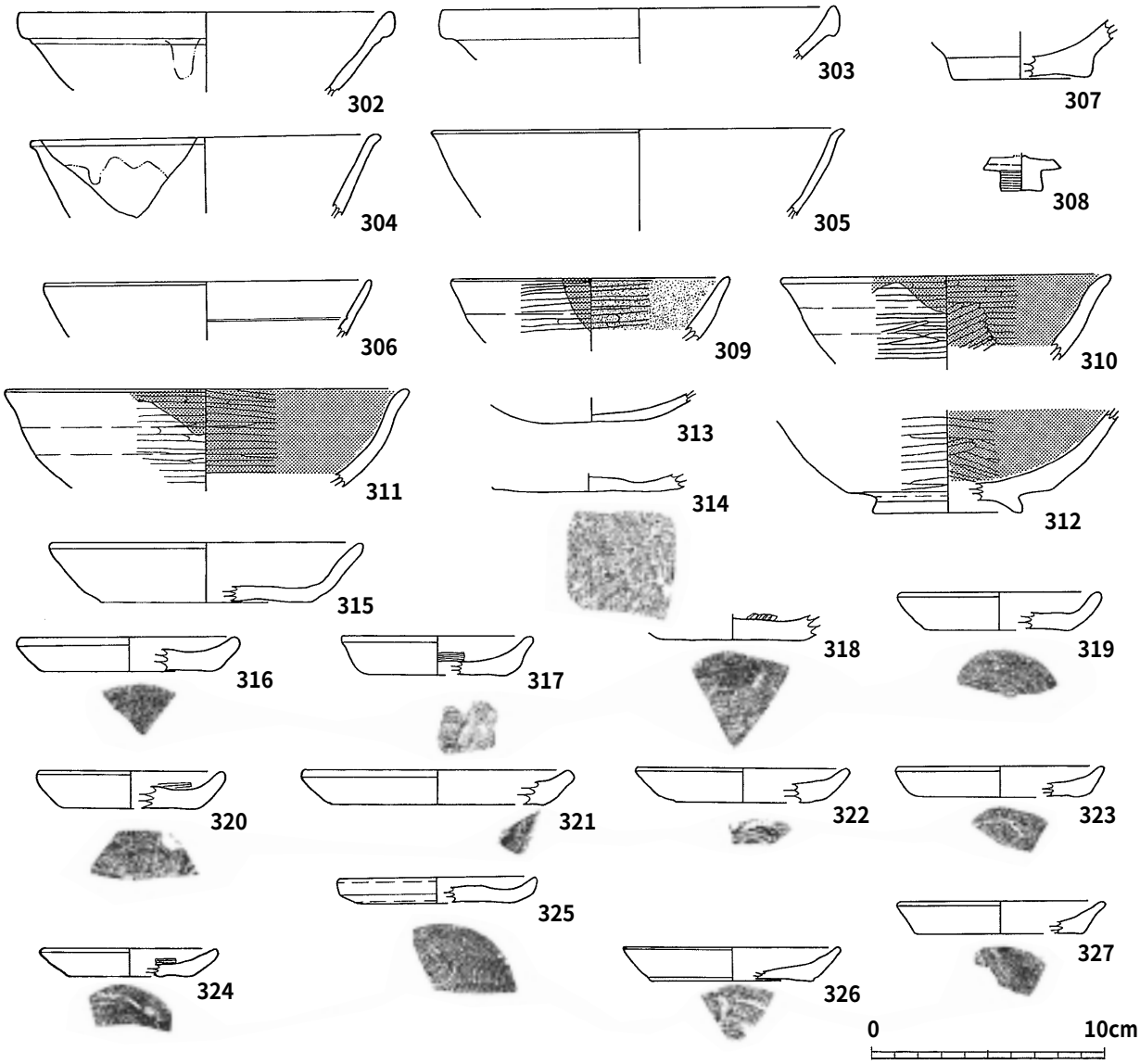
④　方形竪穴遺構４

本遺構はＤ－５・６区に検出した。規模は東西４m25 cm，南北４m20 cm，深さ 45 cmの竪穴遺構である。竪穴内には 18 か所の柱穴がある。柱穴はＰ１～４の四隅が主柱跡と考えられ，径が 30～40 cm，深さが 60～70 cmである。他の柱穴の径は 25 cm前後のものと，10 cm前後のものとある。この内Ｐ６・９は支え柱跡であるが，Ｐ７・８とＰ17・18 は梯子施設の設置のピットとして想定され



① にぶい黄褐色土	⑦ 暗褐色土	⑬ 暗褐色土	⑲ 暗褐色土	㉕ 黒褐色土
② 暗褐色土	⑧ 暗褐色土	⑭ 褐色土	⑳ 暗褐色土	㉖ 暗褐色土
③ 暗褐色土	⑨ 暗褐色土	⑮ 暗褐色土	㉑ 暗褐色土	㉗ 暗褐色土
④ 暗褐色土	⑩ 暗褐色土	⑯ 暗褐色土	㉒ 黒褐色土	㉘ 暗褐色土
⑤ 暗褐色土	⑪ 暗褐色土	⑰ にぶい黄褐色土	㉓ 暗褐色土	㉙ 暗褐色土
⑥ 暗褐色土	⑫ 褐色土	⑱ 暗褐色土	㉔ 黒褐色土	㉚ 暗褐色土

第69図　方形竪穴遺構4

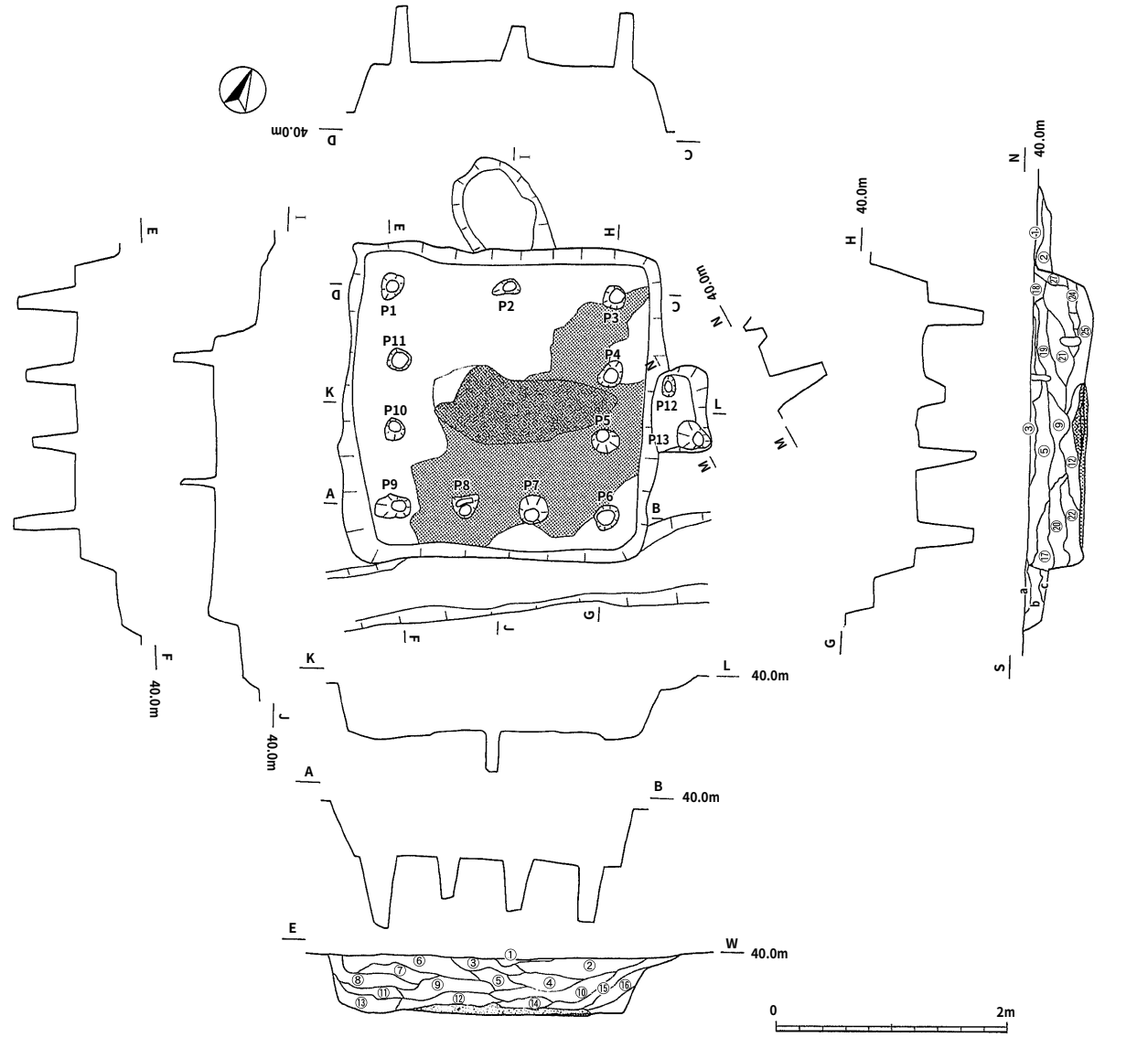


第70図　方形竪穴遺構4の出土遺物

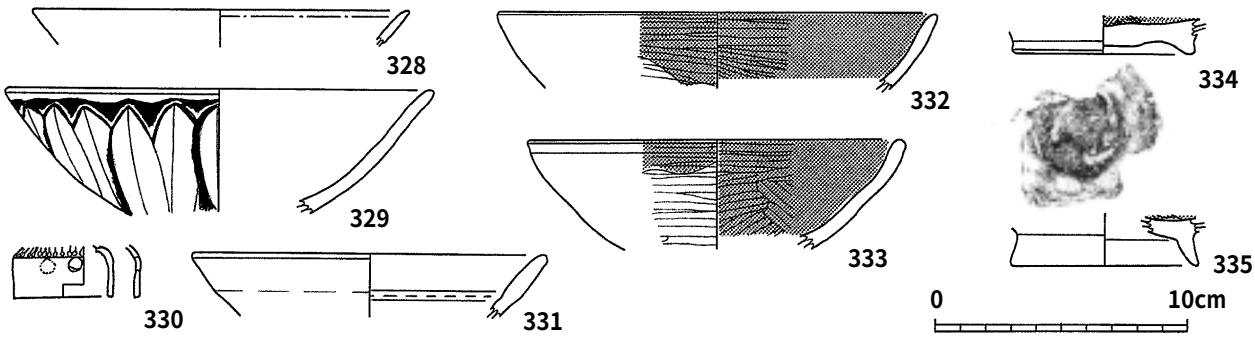
る。深さは前者が40 cm前後と後者が10 cm前後である。この梯子施設跡と思われる西側と北側に一段の段差施設があり，硬化面がみられる。

遺構の南側床面には何度かの使用により形成されたと思われる硬化面があり，その上に炭化物が５cmほど集積している。しかし，炉として何度も焚いたにしては床が赤化しておらず焼土もわずかに分布する程度であるため，炭をおいたかもしくは弱火で燃やすといった作業を行った可能性が指摘できる。

埋土は総じてＩｃ層を主体にアカホヤブロック，黒褐色（Ｖ層）ブロック，シラスブロックがま



① 暗褐色土　⑥ にぶい黄褐色土　⑪ 暗褐色土　⑯ 暗褐色土　㉑ 暗褐色土　㉖ 暗褐色土
② 暗褐色土　⑦ 暗褐色土　⑫ 暗褐色土　⑰ 暗褐色土　㉒ 暗褐色土　㉗ 暗褐色土
③ 暗褐色土　⑧ 暗褐色土　⑬ 暗褐色土　⑱ 暗褐色土　㉓ にぶい黄褐色土
④ 褐色土　⑨ にぶい黄褐色土　⑭ にぶい黄褐色土　⑲ 暗褐色土　㉔ にぶい黄褐色土
⑤ 暗褐色土　⑩ 暗褐色土　⑮ 暗褐色土　⑳ にぶい黄褐色土　㉕ にぶい黄褐色土



第 71 図　方形竪穴遺構5と出土遺物（1）

だらに混ざっている。よって人為的に埋められた可能性が高い。

出土遺物は，白磁の玉縁(302・303)，端反り(304・305)，その底部(307)と蓋(308)，青磁(306)，赤色土器の埦(309)，黒色土器Aの埦(310～312)，土師器の坏(315)，小皿(313・314・316～327)等が出土している。

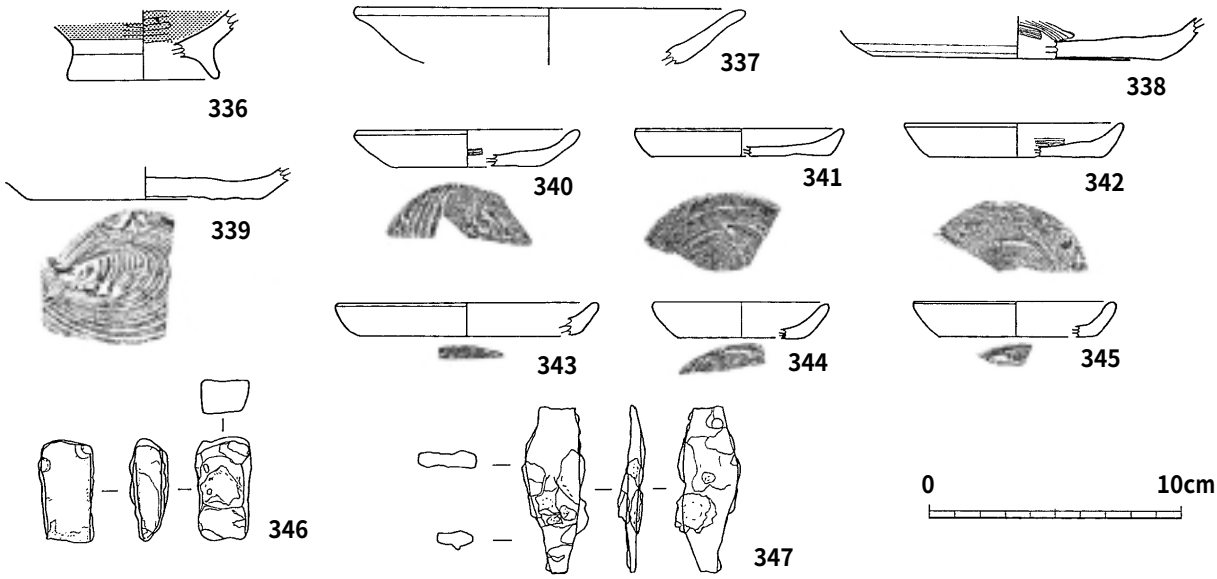
⑤　方形竪穴遺構５

本遺構はD－６区に検出した。規模は東西２m70 cm，南北２m70 cm，深さ 50 cmの竪穴遺構である。竪穴内には 14 か所の柱穴が壁に沿って廻っている。柱穴の径は 20 cm前後で深さは深いもので 50 cm，浅いもので 30 cmである。また，東側に深さ 15 cmで 70 cm方形の段差がある。この中にはP 12 の浅い柱穴と深い柱穴P13 がある。P12・13 は深さで他の遺構と比較すると梯子設置のピットと想定されない。

遺構の中央には何度かの使用により形成されたと思われる硬化面があり，その上に炭化物が 11 cmほど集積している。しかし，炉として何度も焚いたにしては床が赤化しておらず焼土もわずかに分布する程度であるため，炭をおいたかもしくは弱火で燃やすといった作業を行った可能性が指摘できる。

埋土は総じてⅠｃ層を主体にアカホヤブロック，黒褐色（Ⅴ層）ブロック，シラスブロックがまだらに混ざっている。よって人為的に埋められた可能性が高い。

出土遺物は，白磁の口剥げ(328)，鎬蓮弁青磁(329)，青白磁の合子(330)，黒色土器Aの埦(332～336)，土師器の坏(331・337～339)，小皿(340～345)，鉄製品(346・347)等が出土している。347は鉄鏃と思われる。



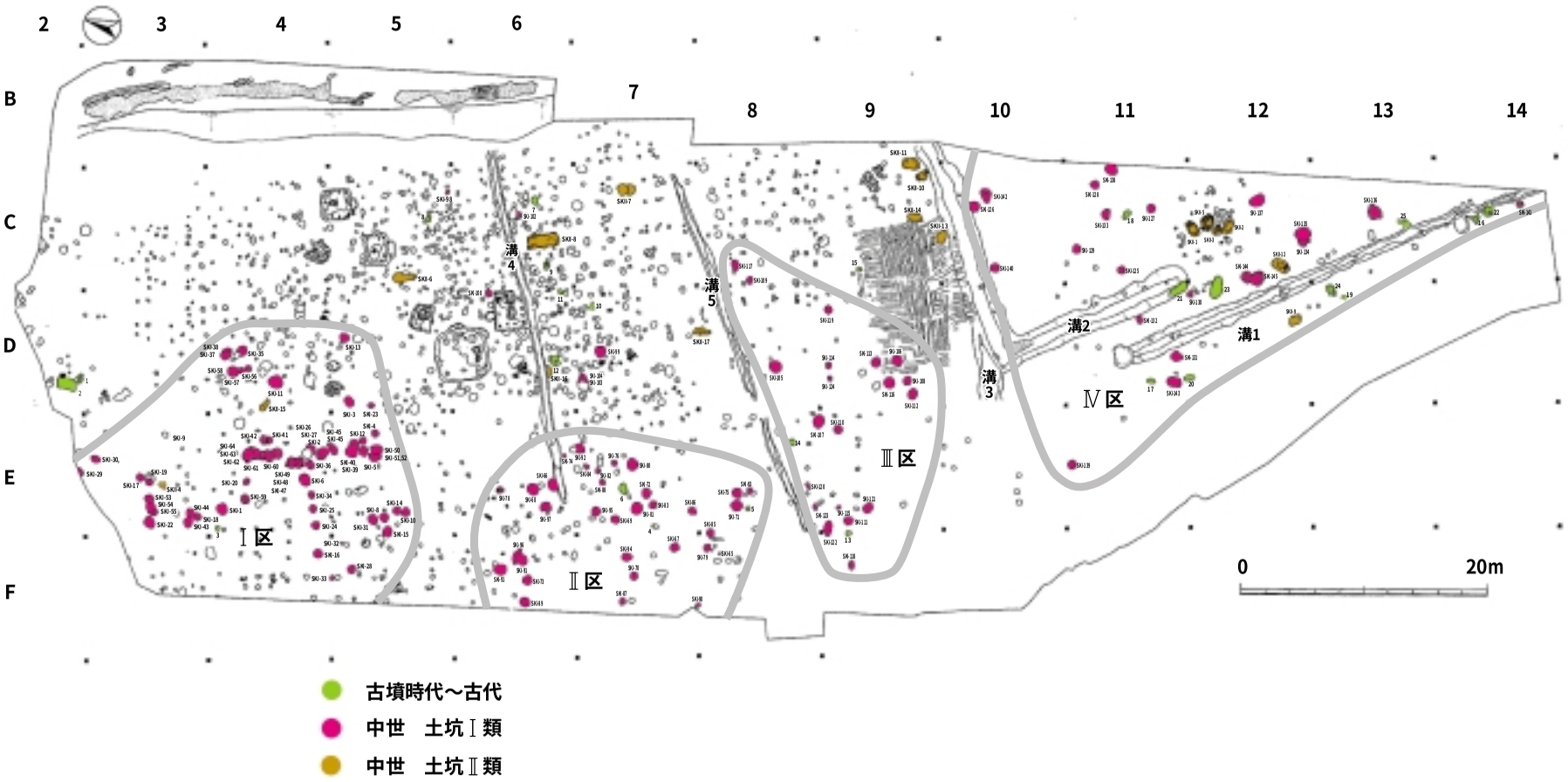
第 72 図　方形竪穴遺構5の出土遺物（2）

ウ　土坑

Ⅲ層上面の土坑と考えられるものは，古墳時代・古代の土坑が 25 基，中世Ⅰ類が 145 基，中世Ⅱ類が 17 基検出している。第 73 図はそれを示すもので，緑色の土坑が古墳・古代で，朱色が中世土坑Ⅰ類，茶色が中世土坑Ⅱ類とした。

①　土坑Ⅰ

中世土坑Ⅰ類は 145 基検出している。この土坑はドングリや穀物の種子類が埋土に混入していたものとそれに形態が類するものである。形態は，円形・楕円形・方形とがみられる。


2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
B
C
D
E
F
溝4
溝5
溝3
溝2
溝1
Ⅰ区
Ⅱ区
Ⅲ区
Ⅳ区
0
20m
古墳時代～古代
中世　土坑Ⅰ類
中世　土坑Ⅱ類

第 73 図　土坑配置

この土坑の分布は第 73 図に示した通りで，山部の裾側に集中してみられる。そして，この 145 基はある程度まとまりがみられる。それを４つの区に分けた。

Ⅰ区は北部に集中し，Ｄ～Ｆ－５区の建物跡と関係して列にみられるのが特徴である。掘立柱建物跡との関係は掘立柱建物跡に記載している。

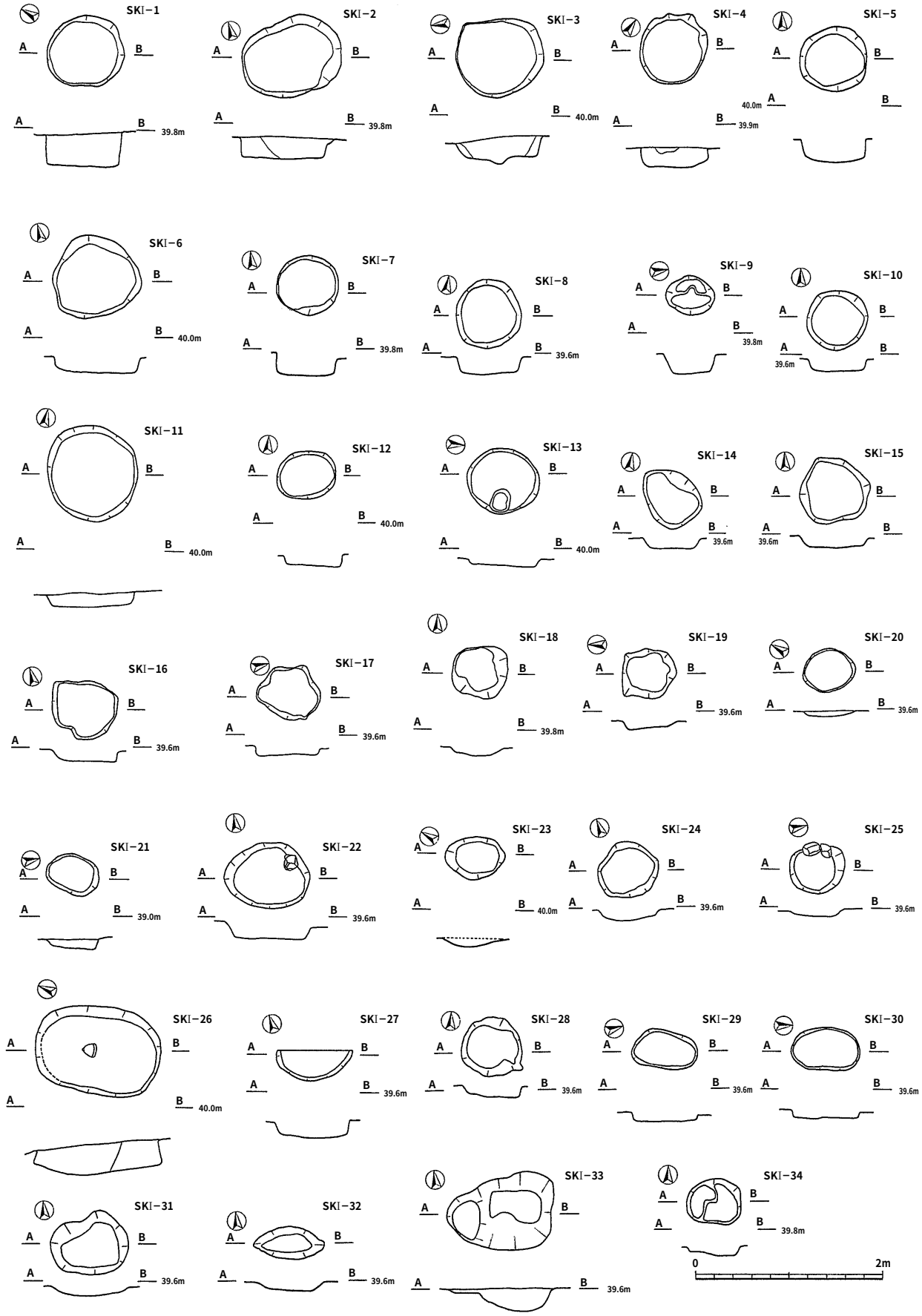
Ⅱ区はD～Ｆ－６～８区にまとまっているものである。この地域の土坑は列を組む等の規則性はない。この地域には掘立柱建物跡がなく，溝４の先端地域になる。なおB～D－６・７に散在するものはこの区に入れた。

Ⅲ区はC～Ｆ－８・９区で溝５の南側に位置する。遺構との重なりと掘立柱建物跡７と畠跡である。

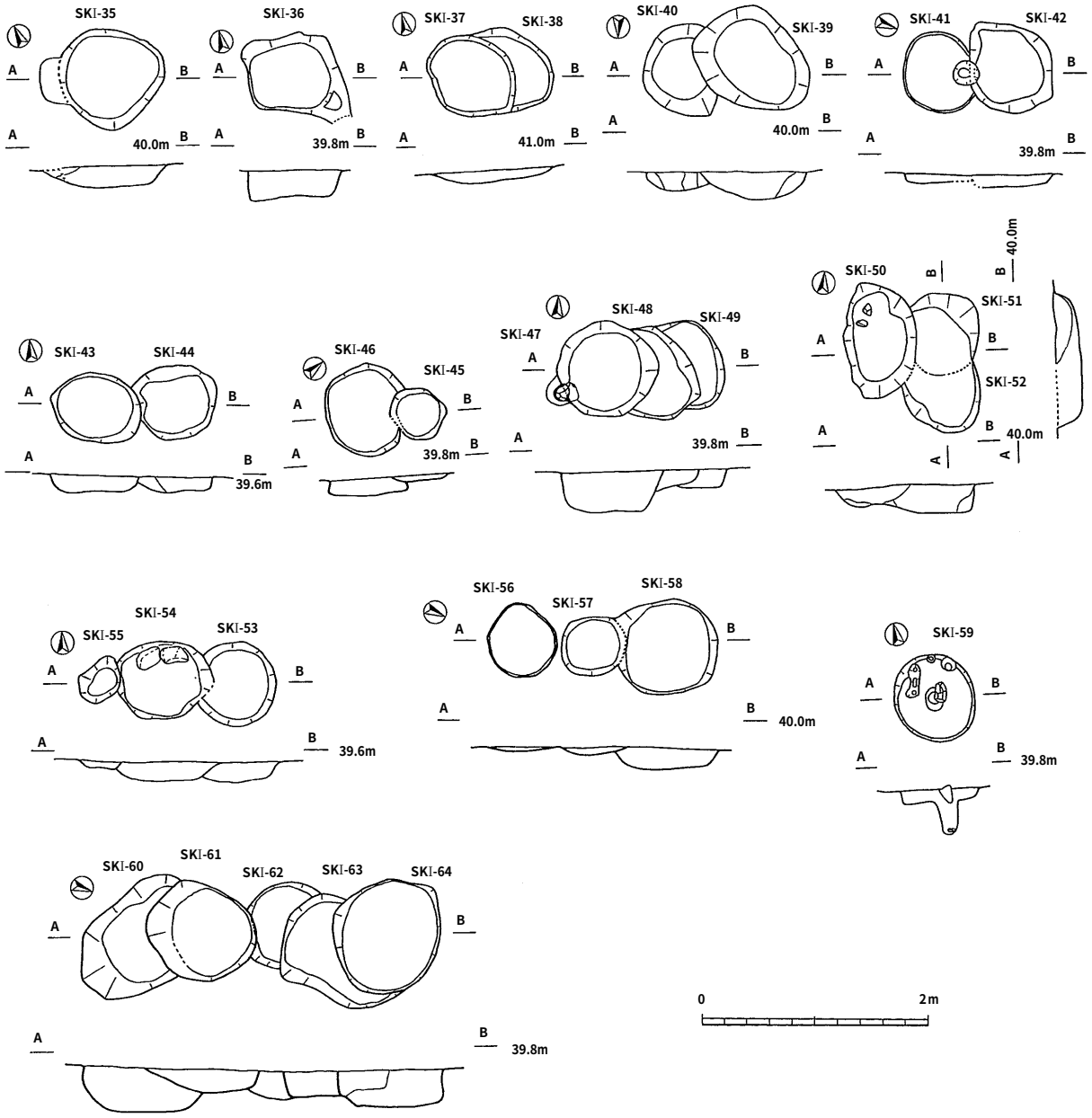
Ⅳ区はC～Ｅ－10～14 区にあたる。この地域は溝１・２の東西に分布する。列を組むような規則性はない。

第 35 表　土坑Ⅰ類の計測（cm）

番号	区	長径	短径	深さ	形態	番号	区	長径	短径	深さ	形態
1	Ⅰ	83	75	35	円形	24	Ⅰ	65	60	9	円形
2	Ⅰ	105	87	24	円形	25	Ⅰ	58	48	6	円形
3	Ⅰ	94	84	29	円形	26	Ⅰ	134	95	22	円形
4	Ⅰ	75	72	21	円形	27	Ⅰ	81	33	17	円形
5	Ⅰ	72	69	25	円形	28	Ⅰ	65	63	13	円形
6	Ⅰ	96	89	18	円形	29	Ⅰ	70	42	10	楕円形
7	Ⅰ	66	64	21	円形	30	Ⅰ	74	45	9	楕円形
8	Ⅰ	74	70	16	円形	31	Ⅰ	84	69	9	円形
9	Ⅰ	52	42	20	円形	32	Ⅰ	76	36	14	楕円形
10	Ⅰ	65	64	13	円形	33	Ⅰ	112	83	25	楕円形
11	Ⅰ	103	96	16	円形	34	Ⅰ	58	48	12	円形
12	Ⅰ	63	52	15	円形	35	Ⅰ	94	89	18	円形
13	Ⅰ	77	71	10	円形	36	Ⅰ	85	74	26	方形
14	Ⅰ	64	60	16	円形	37	Ⅰ	74	71	11	円形
15	Ⅰ	73	70	12	円形	38	Ⅰ	71	34α	8	円形
16	Ⅰ	69	63	12	方形	39	Ⅰ	95	90	24	円形
17	Ⅰ	69	56	11	円形	40	Ⅰ	81	53α	16	円形
18	Ⅰ	59	54	9	円形	41	Ⅰ	72	58α	7	円形
19	Ⅰ	58	54	11	円形	42	Ⅰ	80	72	10	円形
20	Ⅰ	56	48	6	円形	43	Ⅰ	78	60	16	円形
21	Ⅰ	55	43	10	円形	44	Ⅰ	66α	65	14	円形
22	Ⅰ	92	70	18	円形	45	Ⅰ	51	45	5	円形
23	Ⅰ	64	47	9	円形	46	Ⅰ	56α	83	15	円形



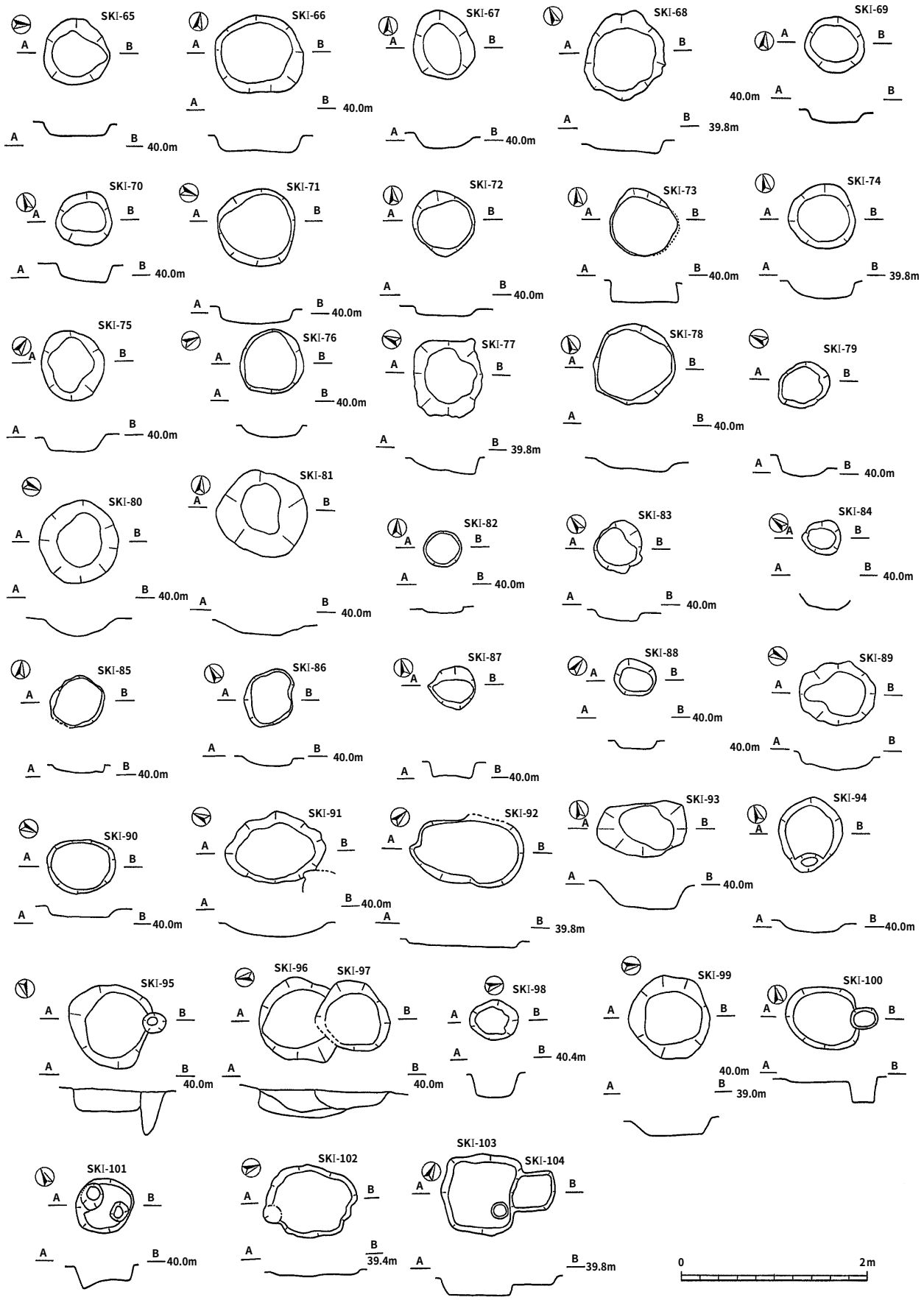
第74図　Ⅰ区Ⅰ類の土坑（1）



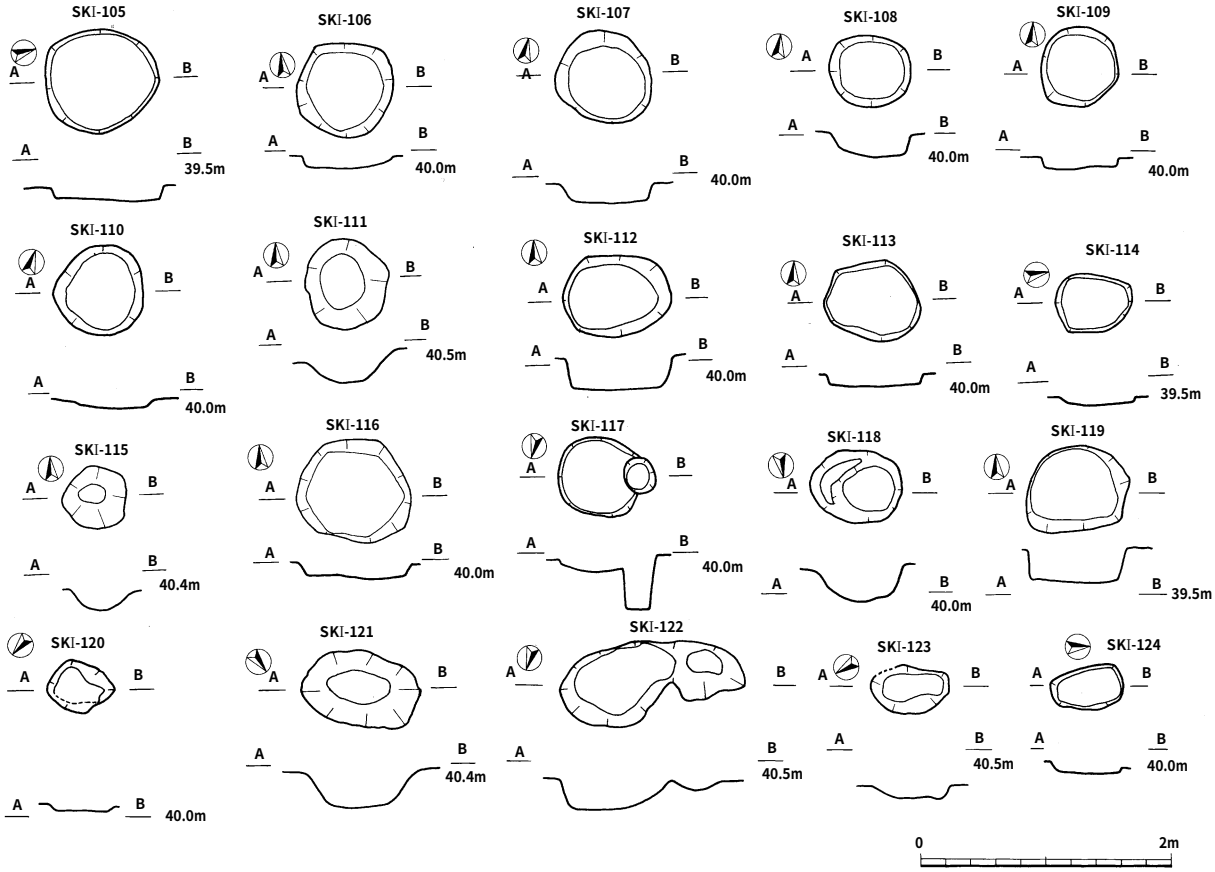
第 75 図　Ⅰ区Ⅰ類の土坑（2）

第 36 表　土坑Ⅰ類の計測（cm）

番号	区	長径	短径	深さ	形態	番号	区	長径	短径	深さ	形態
47	Ⅰ	90	84	35	円形	53	Ⅰ	75	54 α	17	円形
48	Ⅰ	81	31 α	19	円形	54	Ⅰ	82	69	18	円形
49	Ⅰ	78	27 α	16	円形	55	Ⅰ	37	37	6	円形
50	Ⅰ	102	64	16	楕円形	56	Ⅰ	66	62	4	円形
51	Ⅰ	72	55 α	25	円形	57	Ⅰ	58	52	6	円形
52	Ⅰ	67	52 α	25	円形	58	Ⅰ	84	81	20	円形



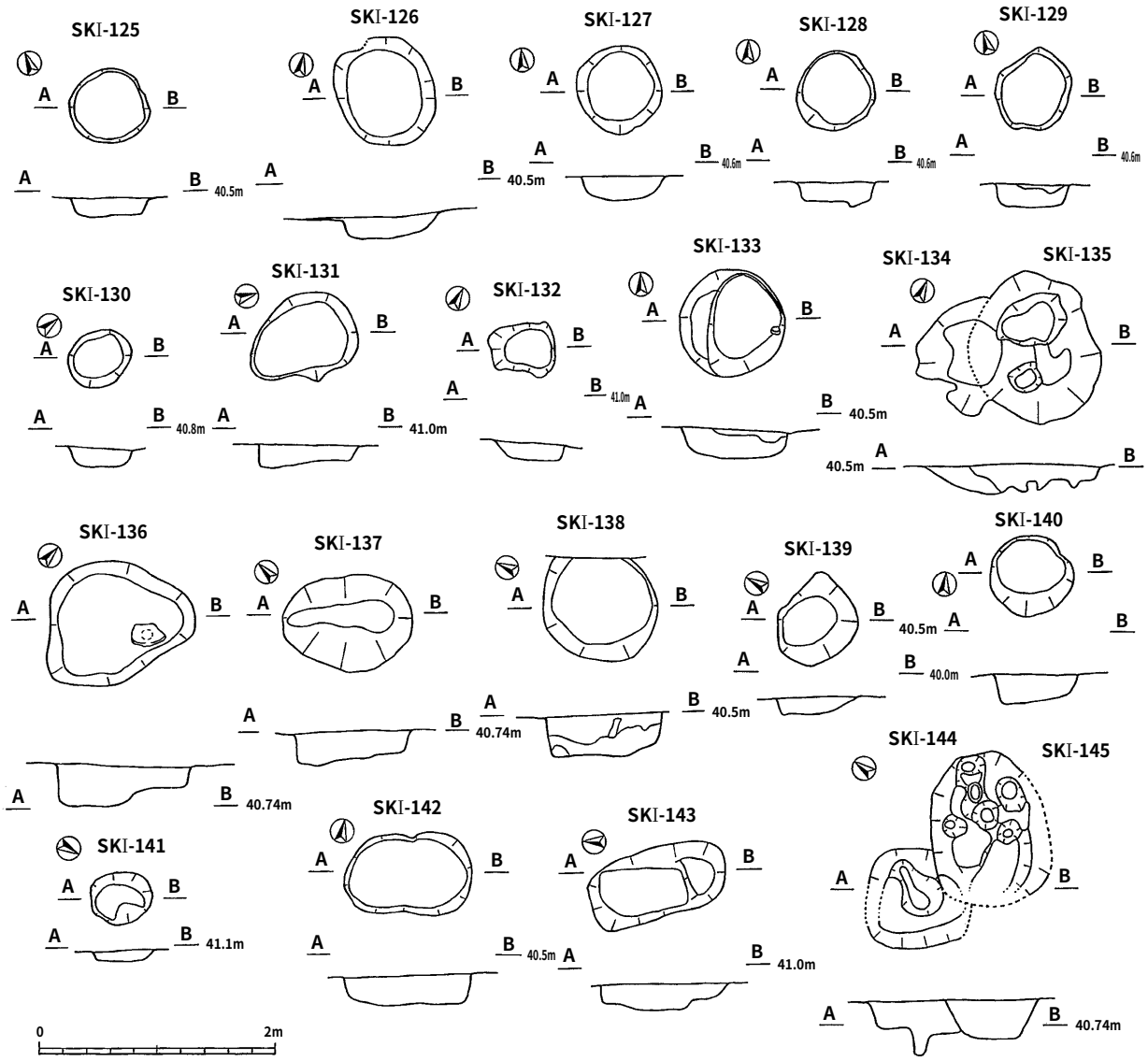
第 76 図　Ⅱ区Ⅰ類の土坑



第 77 図　Ⅲ区Ⅰ類の土坑

第 37 表　土坑Ⅰ類の計測（cm）

番号	区	長径	短径	深さ	形態	番号	区	長径	短径	深さ	形態
59	Ⅰ	77	71	40	円形	74	Ⅱ	72	70	18	円形
60	Ⅰ	95	95	32	円形	75	Ⅱ	75	68	17	円形
61	Ⅰ	92	43α	22	円形	76	Ⅱ	69	68	13	円形
62	Ⅰ	74	24α	22	円形	77	Ⅱ	82	74	19	方形
63	Ⅰ	88	86	20	円形	78	Ⅱ	89	86	11	円形
64	Ⅰ	96	57α	39	円形	79	Ⅱ	55	50	16	円形
65	Ⅱ	71	71	15	円形	80	Ⅱ	88	85	20	円形
66	Ⅱ	95	83	19	円形	81	Ⅱ	98	91	12	円形
67	Ⅱ	74	66	14	円形	82	Ⅱ	44	41	5	円形
68	Ⅱ	94	82	15	円形	83	Ⅱ	57	51	10	円形
69	Ⅱ	64	61	11	円形	84	Ⅱ	47	42	13	円形
70	Ⅱ	60	59	18	円形	85	Ⅱ	57	55	8	円形
71	Ⅱ	84	83	17	円形	86	Ⅱ	59	52	10	円形
72	Ⅱ	70	67	9	円形	87	Ⅱ	51	47	18	円形
73	Ⅱ	73	73	23	円形	88	Ⅱ	45	40	10	円形



第78図　Ⅳ区Ⅰ類の土坑

第38表　土坑Ⅰ類の計測（cm）

番号	区	長径	短径	深さ	形態	番号	区	長径	短径	深さ	形態
89	Ⅱ	82	68	17	円形	99	Ⅱ	90	87	18	円形
90	Ⅱ	73	57	11	円形	100	Ⅱ	80	67	5	円形
91	Ⅱ	108	77	15	楕円形	101	Ⅱ	62	59	25	円形
92	Ⅱ	123	75	6	楕円形	102	Ⅱ	98	80	5	円形
93	Ⅱ	97	58	26	楕円形	103	Ⅱ	87	84α	19	方形
94	Ⅱ	80	69	12	円形	104	Ⅱ	45α	43	8	方形
95	Ⅱ	90	90	24	円形	105	Ⅲ	90	84	13	円形
96	Ⅱ	89	60α	30	円形	106	Ⅲ	77	75	11	円形
97	Ⅱ	80	75	19	円形	107	Ⅲ	76	73	16	円形
98	Ⅱ	53	44	25	円形	108	Ⅲ	64	57	20	円形

第39表　土坑Ⅰ類の計測（cm）

番号	区	長径	短径	深さ	形態	番号	区	長径	短径	深さ	形態
109	Ⅲ	64	63	10	円形	128	Ⅳ	68	67	21	円形
110	Ⅲ	71	71	8	円形	129	Ⅳ	70	63	20	円形
111	Ⅲ	72	66	20	円形	130	Ⅳ	54	49	16	円形
112	Ⅲ	87	65	26	円形	131	Ⅳ	85	76	20	円形
113	Ⅲ	75	65	9	円形	132	Ⅳ	54	46	15	円形
114	Ⅲ	62	48	7	円形	133	Ⅳ	91	89	25	円形
115	Ⅲ	50	50	16	円形	134	Ⅳ	96	44α	25	円形
116	Ⅲ	92	82	13	円形	135	Ⅳ	126	108	24	円形
117	Ⅲ	62	53α	12	円形	136	Ⅳ	123	105	25	円形
118	Ⅲ	73	58	28	円形	137	Ⅳ	110	82	29	円形
119	Ⅲ	79	67	27	円形	138	Ⅳ	98	87	36	円形
120	Ⅲ	53	42	5	円形	139	Ⅳ	76	69	14	円形
121	Ⅲ	95	61	30	楕円形	140	Ⅳ	71	69	25	円形
122	Ⅲ	147	66	23	楕円形	141	Ⅳ	52	45	10	円形
123	Ⅲ	62	40	11	楕円形	142	Ⅳ	107	70	25	円形
124	Ⅲ	59	36	7	楕円形	143	Ⅳ	110	62	22	円形
125	Ⅳ	64	58	15	円形	144	Ⅳ	85	63α	46	円形
126	Ⅳ	92	84	19	円形	145	Ⅳ	130	100	33	円形
127	Ⅳ	75	73	20	円形						

中世土坑Ⅱ類は平坦地の東側に 17 基検出している。この中で集中地域はC－９区，C・D－12 区である。また，建物遺構との重なりは，掘立柱建物跡１・21 に土坑Ⅱ１・２・３・５・８が，畠跡に土坑Ⅱ13 がみられる。

この土坑はA・B・Cに分別できる。Aは土坑Ⅱの１～５で焼土及び灰と焼け石があるもの，Bは土坑Ⅱの６～９で副葬品があるもの，Cは土坑Ⅱの 10～17 で土坑の中に深い柱穴が１か所あるものである。

②　土坑ⅡA類（土坑Ⅱ類A）

土坑Ⅱ－１はC・D－12 区に検出している。形態は長軸 135 ㎝，短軸 85 ㎝，深さ 33 ㎝の長方形で，両端に深さ 20 ㎝のピットがある。埋土は黒褐色層が２層に分かれ，なお，上部には焼土や礫がみられる。

土坑Ⅱ－２はC・D－12 区に検出している。形態は長軸 60 ㎝，短軸 40 ㎝，深さ 21 ㎝の楕円形で，両端が深くなっている。埋土は黒褐色層が２層になり，上部に礫がみられる。遺物は 380～382 で土師器の坏が出土している。

土坑Ⅱ－３はC・D－12 区に検出している。形態は長軸 85 ㎝，短軸 75 ㎝，深さ 18 ㎝の円形で，

両端に深さ 20 cmのピットがある。埋土は黒褐色層の中に一部焼土がみられる。

土坑Ⅱ－４はＥ－３区に検出している。形態は長軸 125 cm，短軸 80 cm，深さ 38 cmのだるま形で，北側は深さ 13 cmの段がある。埋土は黒褐色層が３層に分かれ，上部には焼土がみられる。なお，埋土上部の南には礫がみられる。約 50 cmと 25 cmの礫がある。

土坑Ⅱ－５はＣ・Ｄ－12 区に検出している。形態は長軸 95 cm，短軸 83 cm，深さ 25 cmの長方形である。埋土は茶褐色層がブロック状に分かれ，焼土と灰が多くみられる。なお，東南部には 10～40 cmの焼けた円弧状の礫列がみられ，この中には土師器等の遺物も含まれている。この２つの遺構は炉跡と焼土・灰原の関係と考えられる。出土遺物は 383～386 で、土師器の坏と土師器の小皿である。

③　土坑ⅡＢ類（土坑Ⅱ類Ｂ）

土坑Ⅱ－６はＣ－５区に検出している。形態は長軸 165 cm，短軸 80 cm，深さ 20 cmのだるま形で，南の円形が大きい土坑である。この土坑の方位軸は北東と南西である。遺物は，南側の一段上がった円形部の床面に白磁が完全な形で出土している。床面であるため副葬関係に近いと思われる。

土坑Ⅱ－７はＣ－７区に検出している。形態は長軸 135 cm，短軸 86 cm，深さ 20 cmの楕円形で，北の円部が大きい土坑である。この土坑の方位軸は北東と南西である。遺物は，北側の円形部の床面に白磁が完全な形で出土している。床面であるため副葬関係に近いと思われる。

土坑Ⅱ－８はＣ－６区に検出している。形態は長軸 250 cm，短軸 100 cm，深さ 30 cmの長方形で，南の円形が大きい土坑である。この土坑の方位軸は北東と南西である。遺物は，北側の中央部の床面に白磁・土師器等が完全な形で出土している。床面であるため副葬関係に近いと思われる。出土遺物は 348～364 である。348 は白磁の玉縁，349 は白磁の端反りである。350・351 が土師器の坏で，352～363 が土師器小皿である。この中で 363 は黒色土器Ｂである。364 は鉄製品で鏃の柄部と思われる。

土坑Ⅱ－９はＤ－12 区に検出している。形態は長軸 105 cm，短軸 65 cm，深さ 14 cmの略長方形である。この土坑の方位軸は北東と南西である。遺物は，中央部南側の床面に礫と古銭が出土した。これらは床面で検出したため副葬関係に近いと思われる。出土遺物は 387～394 で古銭である。古銭は，394 が２枚であるため全部で９枚である。古銭の字は洪武通寶，永楽通寶等が読みとれる。

④　土坑ⅡＣ類（土坑Ⅱ類Ｃ）

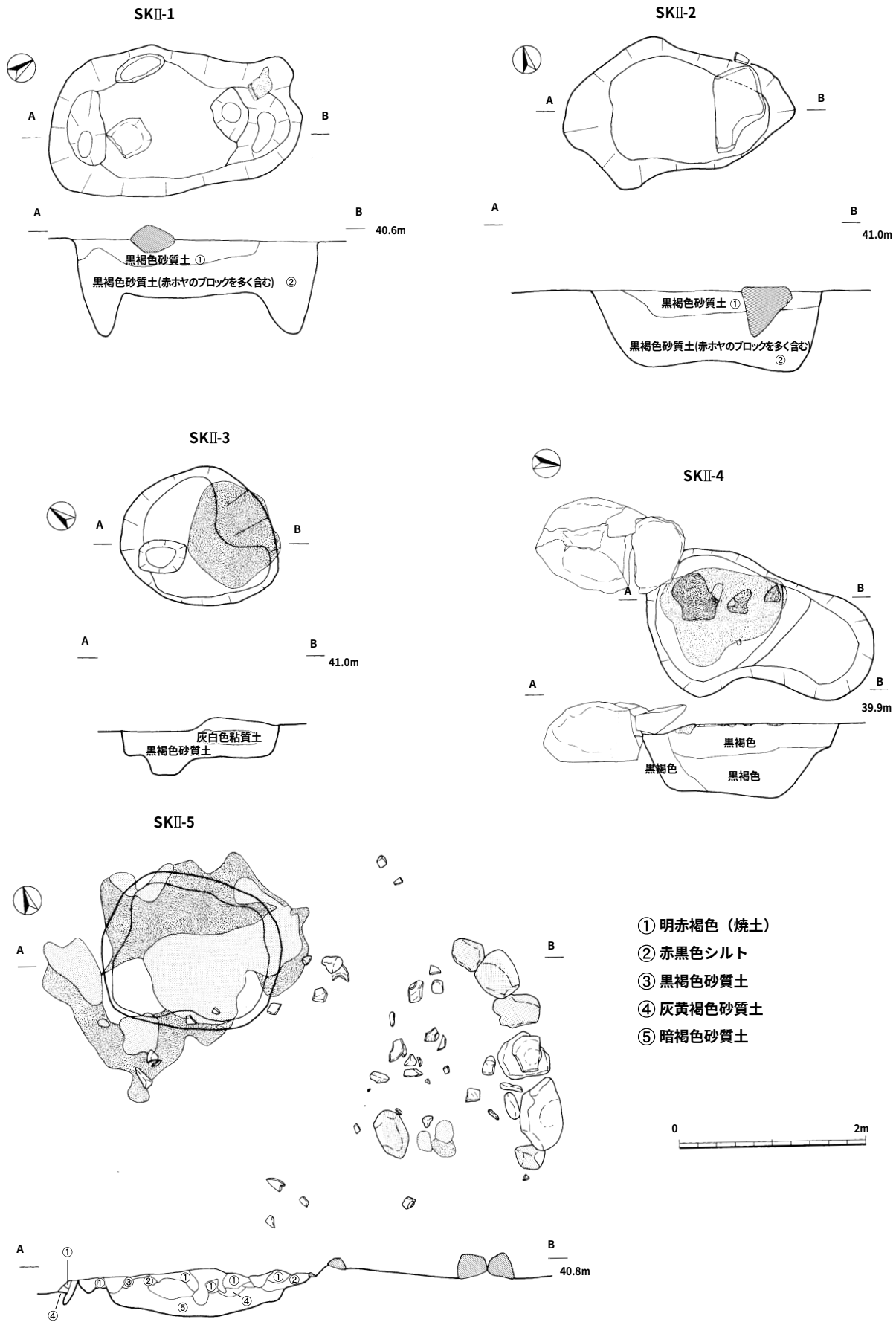
この類はＣ－９区の畠東側に 10・11・13・14 がまとまっている状態が特徴である。12 はＣ－12 区，15 がＤ－４区，16 がＤ－６区，17 がＤ－８区に一基ずつ散発的に検出している。

土坑Ⅱ－10 の形態は長軸 110 cm，短軸 70 cm，深さ 30 cmの楕円形である。この土坑の方位軸は北東と南西である。この土坑の南側には径 15 cm深さ 45 cmのピットがある。出土遺物は白磁の碗が土坑上面に出土しているが，上面であるためこの遺構とは関係が薄いと思われる。

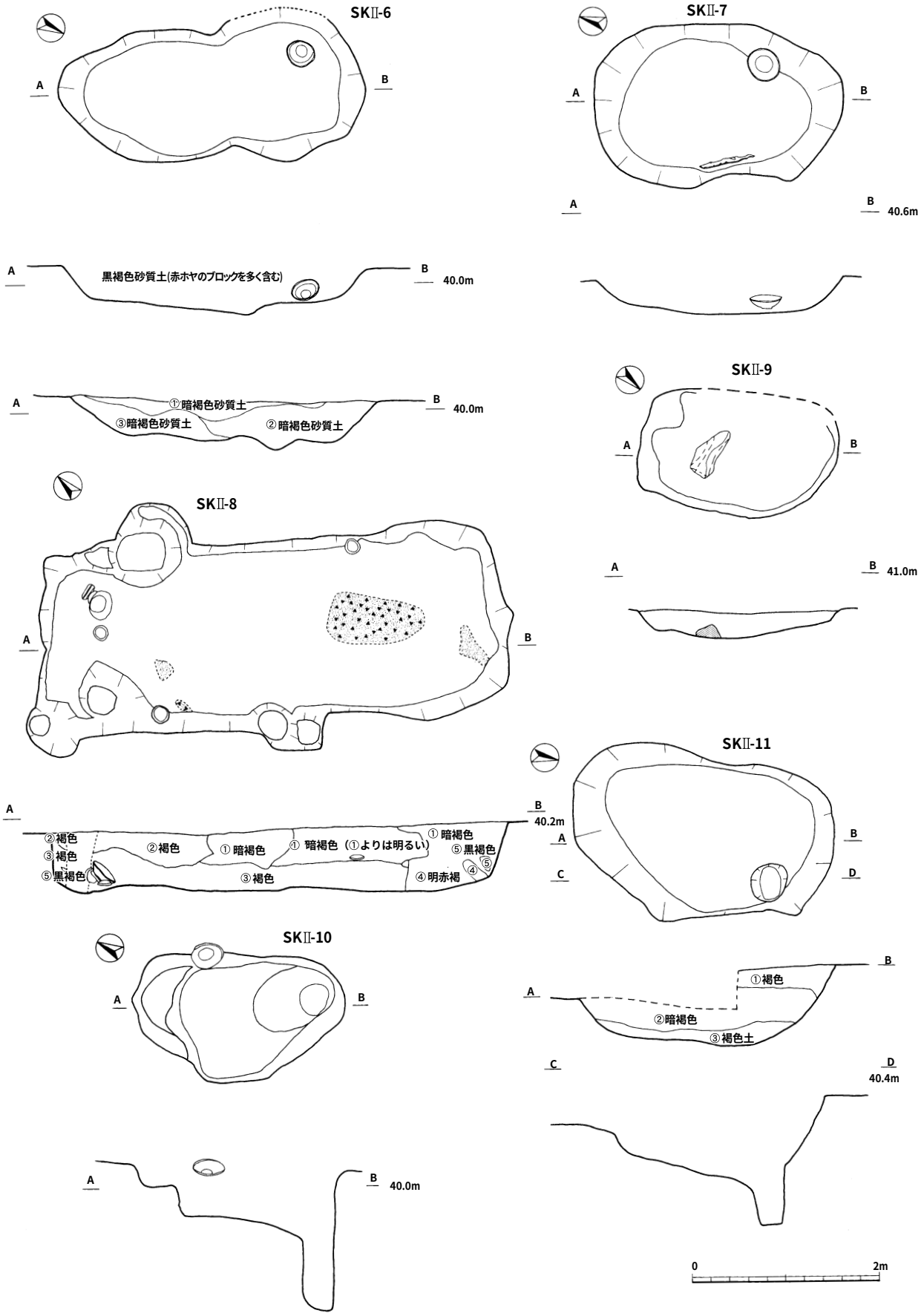
土坑Ⅱ－11 の形態は長軸 140 cm，短軸 90 cm，深さ 40 cmの楕円形である。この土坑の方位軸は南北である。この土坑の北側には径 18 cm深さ 30 cmのピットがある。遺物の出土はない。

土坑Ⅱ－12 の形態は長軸 150 cm，短軸 90 cm，深さ 55 cmの楕円形である。この土坑の方位軸は南北である。この土坑の北側には径 30 cm深さ 45 cmのピットがある。遺物の出土はない。

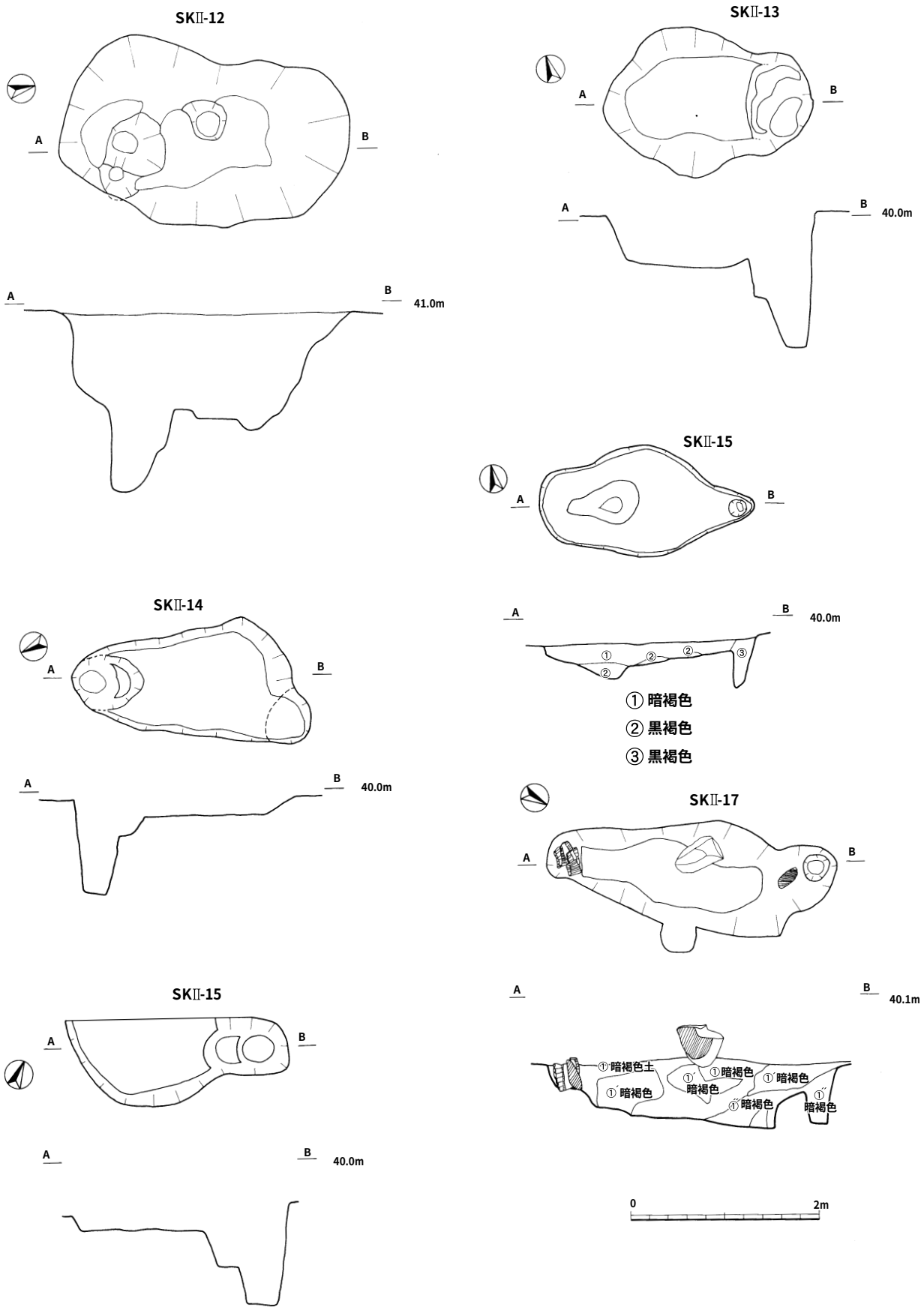
土坑Ⅱ－13 の形態は長軸 110 cm，短軸 80 cm，深さ 30 cmの楕円形である。この土坑の方位軸は


SKⅡ-1
A
B
40.6m
黒褐色砂質土 ①
黒褐色砂質土(赤ホヤのブロックを多く含む) ②
SKⅡ-2
41.0m
黒褐色砂質土 ①
黒褐色砂質土(赤ホヤのブロックを多く含む) ②
SKⅡ-3
41.0m
灰白色粘質土
黒褐色砂質土
SKⅡ-4
39.9m
黒褐色
黒褐色
黒褐色
SKⅡ-5
40.8m
① 明赤褐色（焼土）
② 赤黒色シルト
③ 黒褐色砂質土
④ 灰黄褐色砂質土
⑤ 暗褐色砂質土
0
2m

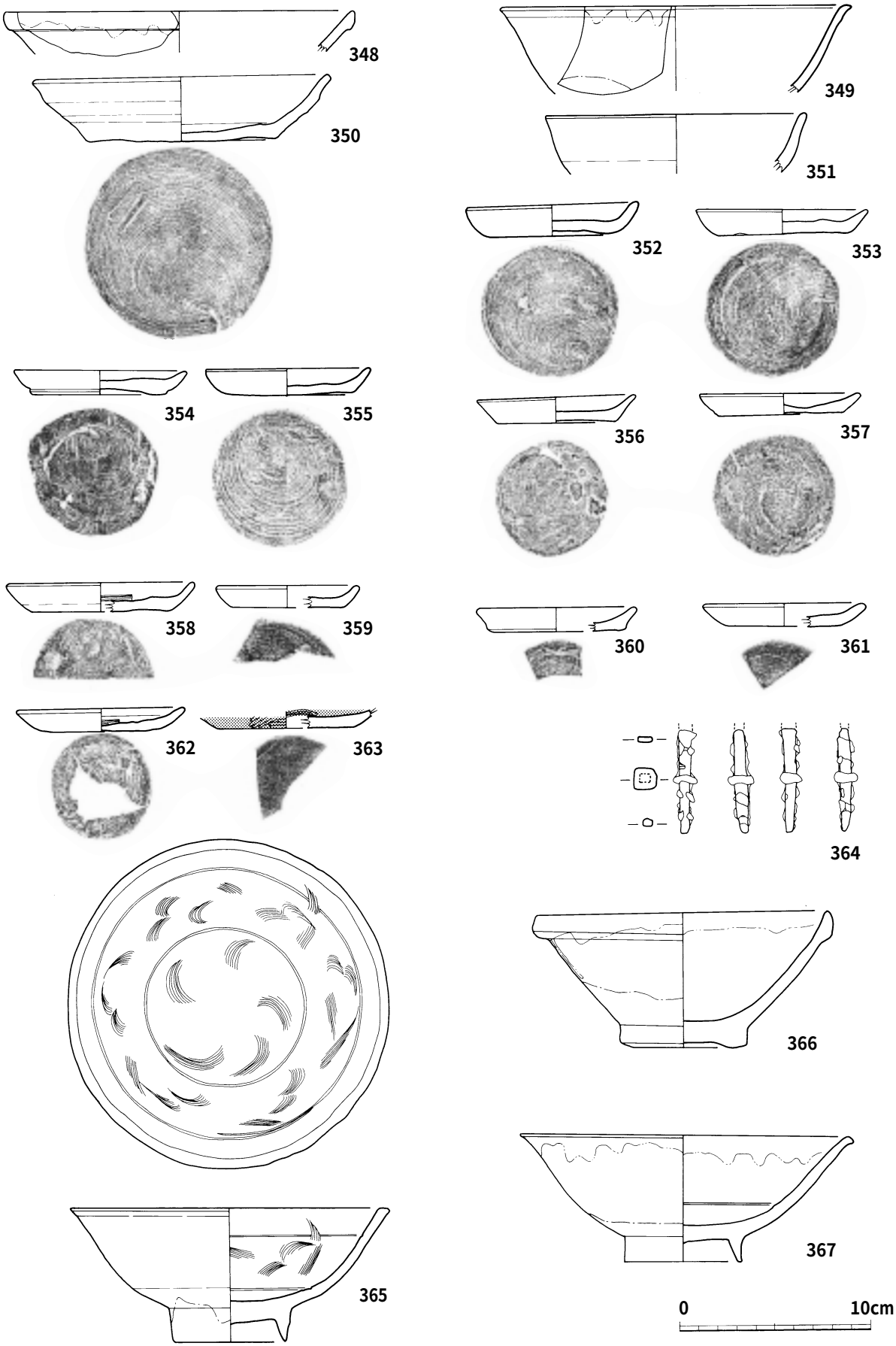
第79図　土坑Ⅱ類A



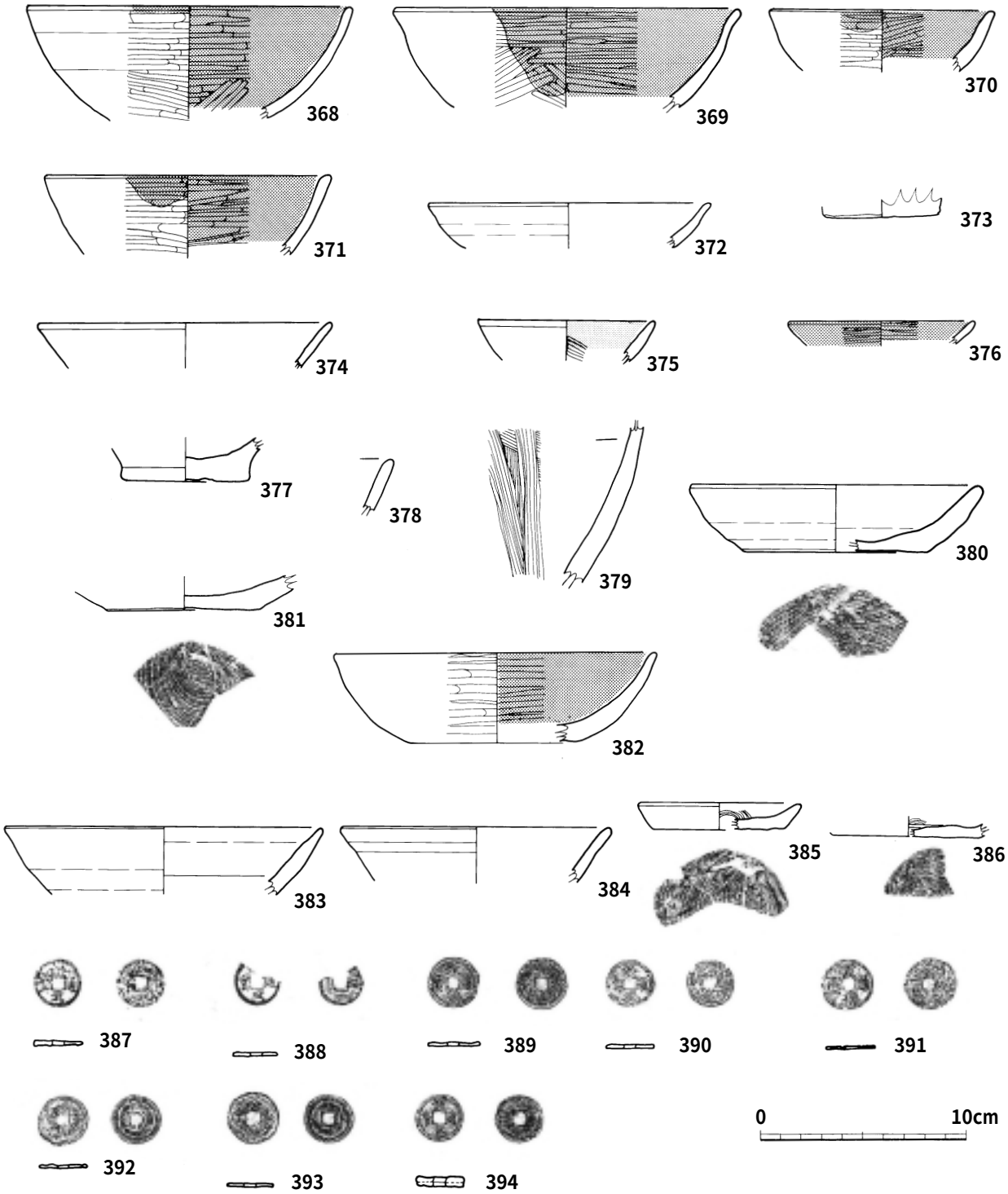
第80図　土坑Ⅱ類B（6～9）、C（10～11）


SKⅡ-12
A
B
A
B
41.0m
SKⅡ-13
A
B
A
B
40.0m
SKⅡ-15
A
B
A
B
40.0m
① 暗褐色
② 黒褐色
③ 黒褐色
SKⅡ-14
A
B
A
B
40.0m
SKⅡ-17
A
B
A
B
40.1m
①´暗褐色土
①´暗褐色
0
2m
SKⅡ-15
A
B
A
B
40.0m

第81図　土坑Ⅱ類C



第82図　土坑Ⅰ・Ⅱ類の出土遺物（1）



第83図　土坑Ⅰ・Ⅱ類の出土遺物（2）

東西である。この土坑の東側には径32 cm深さ50 cmのピットがある。遺物の出土はない。

土坑Ⅱ－14の形態は長軸120 cm，短軸65 cm，深さ20 cmの楕円形である。この土坑の方位軸は南北である。この土坑の北側には径20 cm深さ45 cmのピットがある。遺物の出土はない。

土坑Ⅱ－15の形態は長軸115 cm，短軸60 cm，深さ20 cmの楕円形である。この土坑の方位軸は東西である。この土坑の東側には径10 cm深さ20 cmのピットがある。遺物の出土はない。

土坑Ⅱ－16 の形態は長軸 115 ㎝，短軸 50 ㎝，深さ 15 ㎝の楕円形である。この土坑の方位軸は南北である。この土坑の東側には径 40 ㎝深さ 40 ㎝のピットがある。遺物の出土はない。

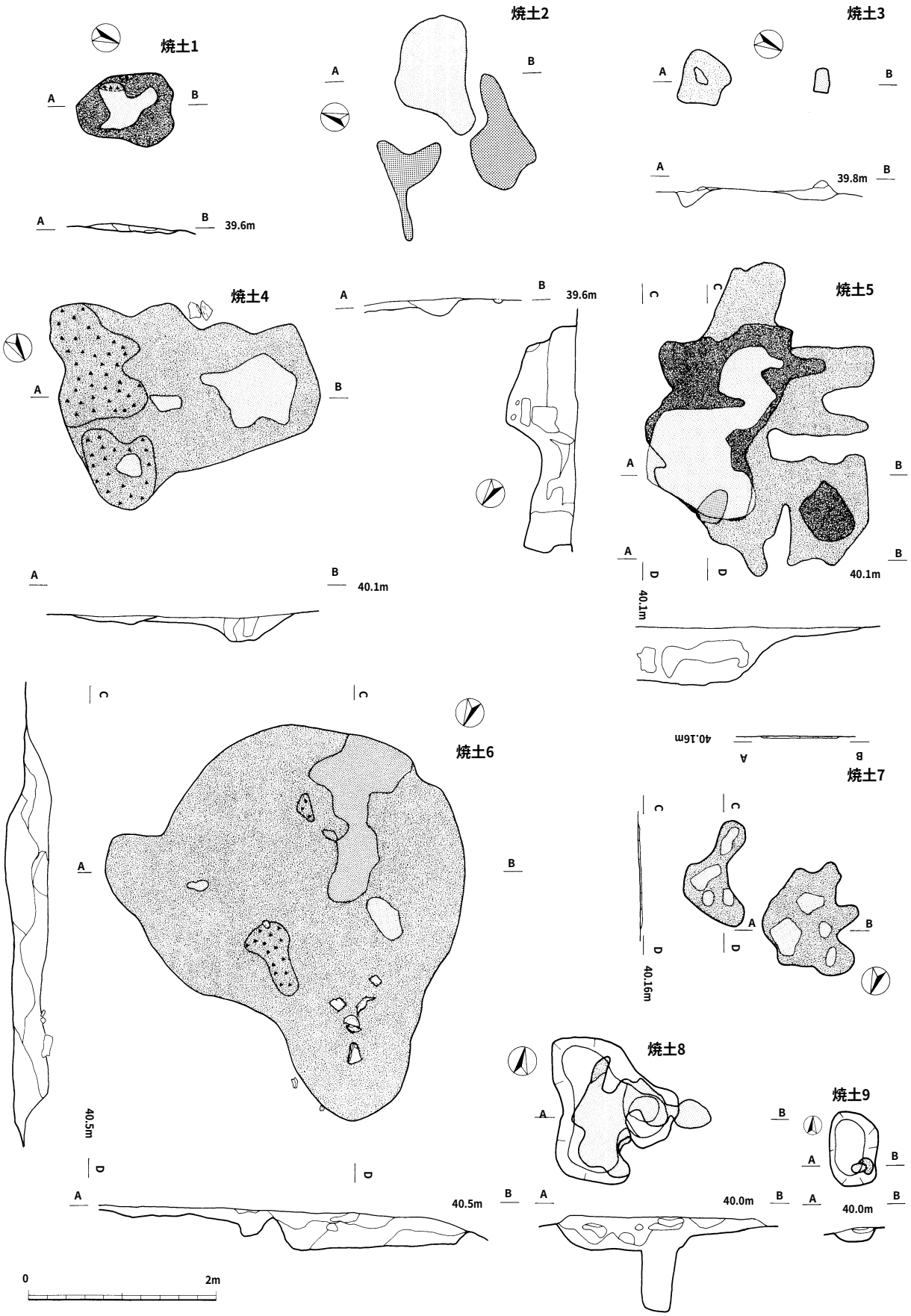
土坑Ⅱ－17 の形態は長軸 155 ㎝，短軸 60 ㎝，深さ 35 ㎝の楕円形である。この土坑の方位軸は南北である。この土坑の北側には径 15 ㎝深さ 18 ㎝のピットがある。遺物は南側に馬の歯が出土している。

エ　焼土（第 29 図全体配置図内に位置は示す）

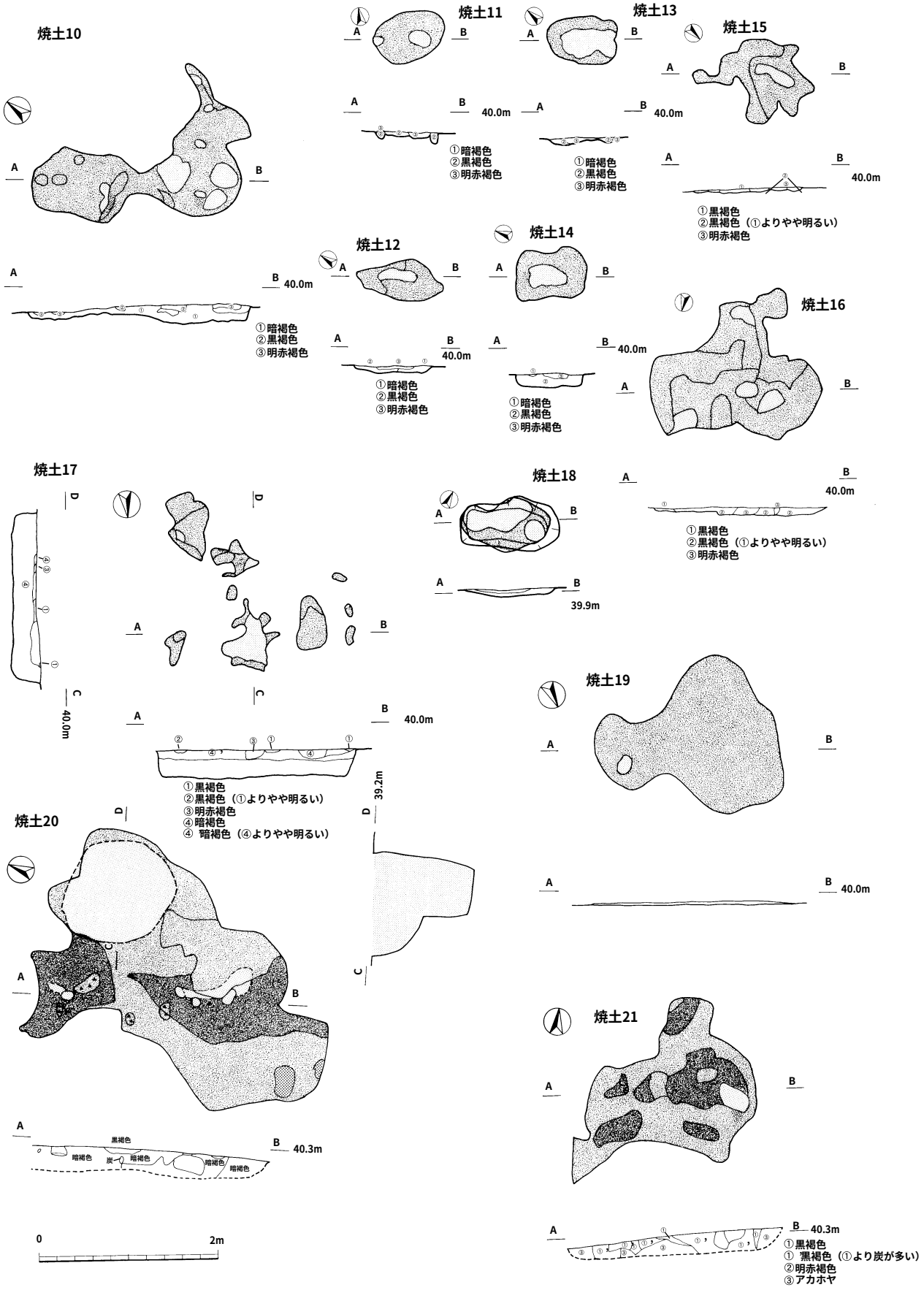
焼土は 21 か所を確認できた。この内，掘立柱建物跡との重なりが認められるものは，焼土４が掘立柱建物跡４，焼土５が掘立柱建物跡 16・20，焼土６が掘立柱建物跡 15，焼土 11・12・13・14 が掘立柱建物跡 24，焼土 15・16・17 が掘立柱建物跡 17，焼土 19 が掘立柱建物跡 22 である。建物跡と近接するものは焼土３・７・９で，離れているものは焼土１・２・20・21 である。調査時は建物と関係がみられるのではないかとの目で実施したが，遺構との関係においてばらつきがあり，確証は得られなかった。なお，報告書作成時でも遺跡の中の分類はできなかった。

第 40 表　焼土計測等一覧（cm）

No.	検出区	長軸	短軸	厚深	灰混入	炭混入	その他
1	Ｄ－２	44	37	3	有	有	
2	Ｄ－３	120	80	9	有	無	３か所有り
3	Ｆ－３	80	30	8	有	無	２か所有り
4	Ｆ－５	140	110	12	有	有	
5	Ｃ－４	170	110	30	有	無	土坑有り
6	Ｄ－４	200	190	22	有	有	土師器出土
7	Ｄ－４・５	90	70	2	有	無	
8	Ｄ－６	80	70	16	有	無	ピットと重なる。
9	Ｄ－６	40	20	70	有	無	
10	Ｄ－６	120	80	10	有	無	
11	Ｄ－６	40	30	3	有	無	
12	Ｄ－６	40	24	4	有	無	
13	Ｄ－７	37	28	4	有	無	
14	Ｄ－７	40	30	7	有	無	
15	Ｄ－７	60	45	2	有	無	
16	Ｄ－７	95	82	6	有	無	
17	Ｄ－７	100	90	5	有	無	９か所に分散
18	Ｅ－７	60	30	4	有	無	
19	Ｃ－７	100	80	2	有	無	
20	Ｃ－９	170	150	10	有	有	土坑有り
21	Ｃ－９	100	90	12	有	無	


焼土1
焼土2
焼土3
焼土4
焼土5
焼土6
焼土7
焼土8
焼土9
39.6m
39.8m
40.1m
40.16m
40.5m
40.0m
0
2m

第84図　焼土（1）


焼土10
焼土11
焼土12
焼土13
焼土14
焼土15
焼土16
焼土17
焼土18
焼土19
焼土20
焼土21
40.0m
39.9m
39.2m
40.3m
①暗褐色
②黒褐色
③明赤褐色
①黒褐色
②黒褐色（①よりやや明るい）
③明赤褐色
①黒褐色
②黒褐色（①よりやや明るい）
③明赤褐色
④暗褐色
④暗褐色（④よりやや明るい）
黒褐色
暗褐色
炭
①黒褐色
①黒褐色（①より炭が多い）
②明赤褐色
③アカホヤ
0
2m

第85図　焼土（2）

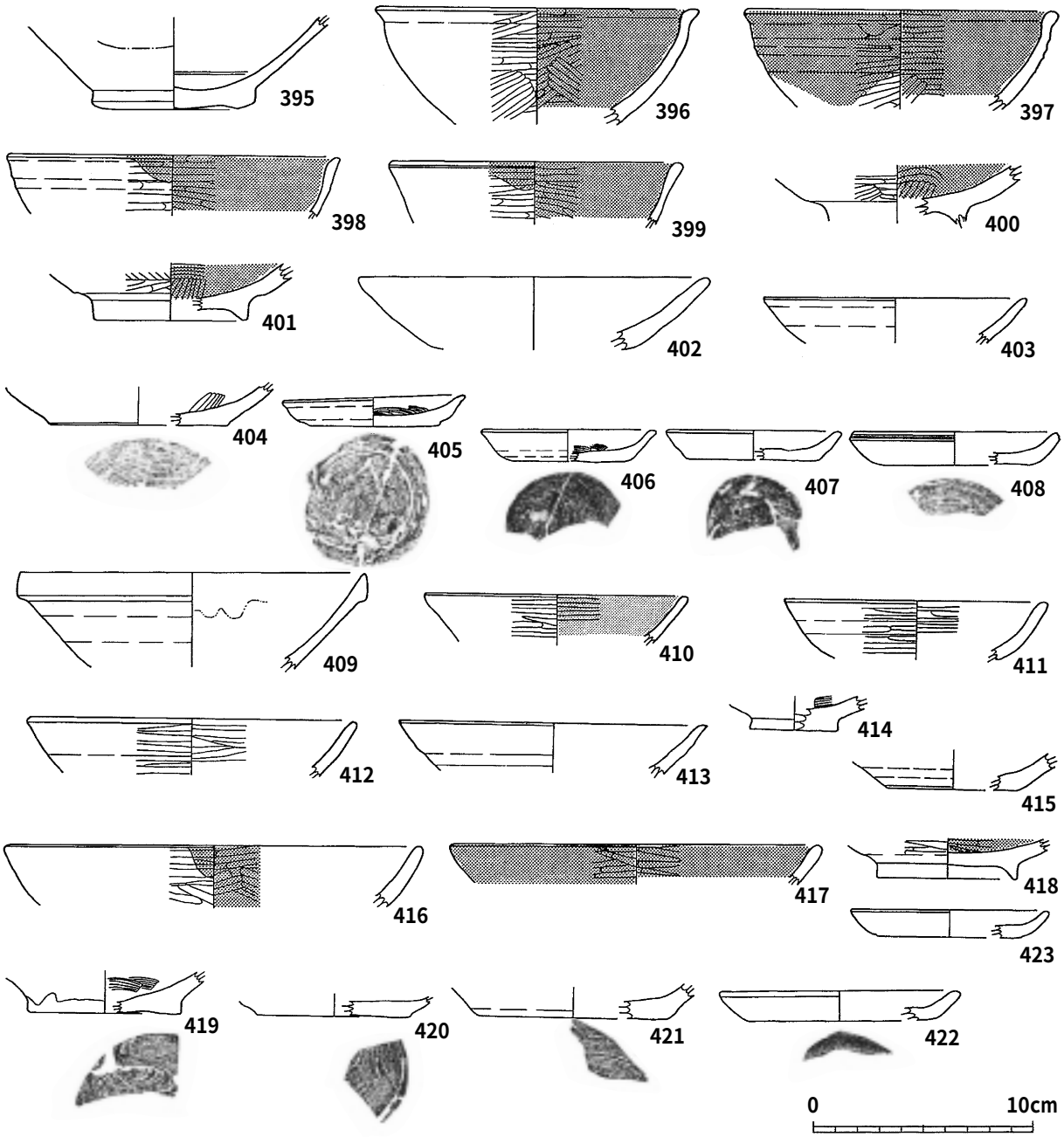
出土遺物（395～422）

焼土で遺物を出土したのは焼土４，焼土５，焼土８，焼土 17 であった。

焼土４は 404 の土師器坏が出土している。

焼土５は 395～403，405～408 である。395 は白磁Ⅴ類の底部で，396～401 は黒色土器Ａ類の埦にあたる。402・403 は土師器の坏にあたる。405～408 は土師器小皿にあたる。

焼土８は 410・411・413～415 である。410 は黒色土器Ａ類の埦にあたる。411・413～415 は土師器の坏である。焼土 17 は 409・412・416～423 である。409 は白磁Ⅴ類にあたる。412・419～421 は土師器の坏である。416・418 は黒色土器Ａ類の埦, 417 は黒色土器Ｂ類の埦である。422・423 は土師器の小皿である。



第 86 図　焼土の出土遺物

オ　畠跡

畠跡は大きく２面に検出した。第１面は中世遺構と同面でC・D－９・10区に検出し，第２面はその面を少々掘り下げた面である。第１面は第87図が全体で，東西12m，南北８ｍである。第89・90図は第１畝と第２畝を分けた図である。

第１畝間は東西方向に走り，東西11m，南北４ｍである。畝間は10～30㎝で平均20 ㎝である。畝の長さは東部が４ｍと中央部が３ｍと西部が２m80㎝である。畝間の深さは５～10㎝である。

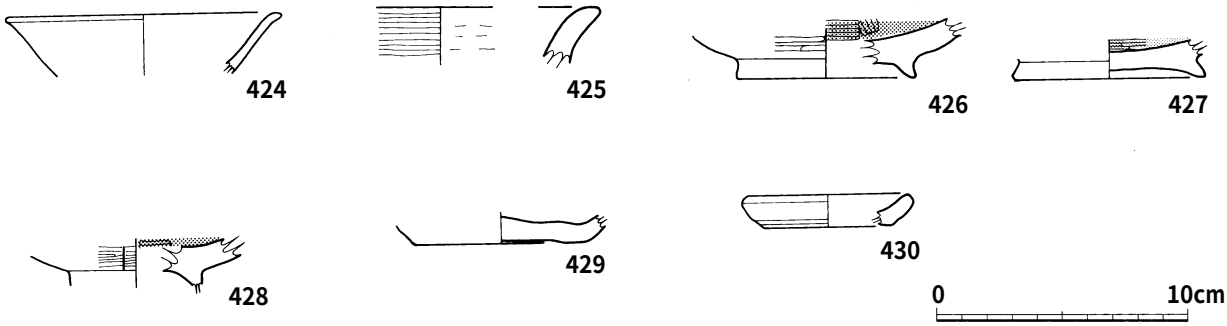
第２畝間は南北に走り，東西12m，南北８ｍである。畝間は10～30㎝で平均20 ㎝である。この畝間は第１畝の下から検出し，畝の途切れが少ないのが特徴である。

第87図　畠跡Ⅰの全体図

畠Ⅰの第２畝間は溝２・３の上から検出した。第29図ではその重なりを示している。よって，畠Ⅰは溝２・３が埋まってからの時期と考えられる。

畠跡Ⅰの出土遺物（第88図424～430）

424は畝間から検出したもので，白磁の端反りである。425は，古代土師器の甕，旧生活面から掘り上がったと思われる。426は土師器の埦である。427・428は黒色土器Ａの埦である。429は土師器の坏である。430は土師器の小皿である。



第88図　畠跡の出土遺物

畠跡Ⅱ（第91図）

畠ⅡはＥ・Ｆ－３区からＤ－10区にかけて中世面より少し下に検出した。畝間は東西方向に３区が９ｍ，４区が５ｍ，５区が７ｍ，６区が７ｍ，７区が９ｍ，８区が12ｍ，９区が15ｍ，10区が４ｍである。これをみると９区付近が長く４区付近が短い。畝間の幅は10～50㎝で平均20㎝である。

この畝間は出土遺物で特定できず，時期が確定しない。ただ，溝４・５，土坑Ⅱ類17等が畝間を切っているため，中世遺構より少し古いことが言える。

カ　溝

溝は第29図の全体図で示しているように，全域にかけて７本が検出している。溝１はＤ－11区より，Ｃ－14区にかけて直線的である。溝２はＣ・Ｄ－９・10・11区にあり，Ｌ字形に掘られている。溝３はＢ～Ｄ－９～10区に溝２と重なっている。溝４はＣ～Ｅ－６区に直線状に検出した。溝５はＣ～Ｅ－７・８区に直線状に検出した。溝６・７はＢ－３・４区に途切れ状態で検出した。

これらの他の遺構との新旧関係は，溝３の跡に溝２が掘り返された状態で検出し，溝４は方形竪穴５より古い状態で検出し，溝５は掘立柱建物跡26との同時期が比定できる状態で検出している。

溝１は長さ35ｍ最大幅190㎝，最大底幅60㎝，最大深さ80㎝である（第92図）。北端は大石から始まり，南は細くなっている。この溝は山裾と平行に造られ，掘立柱建物跡１とも平行である。

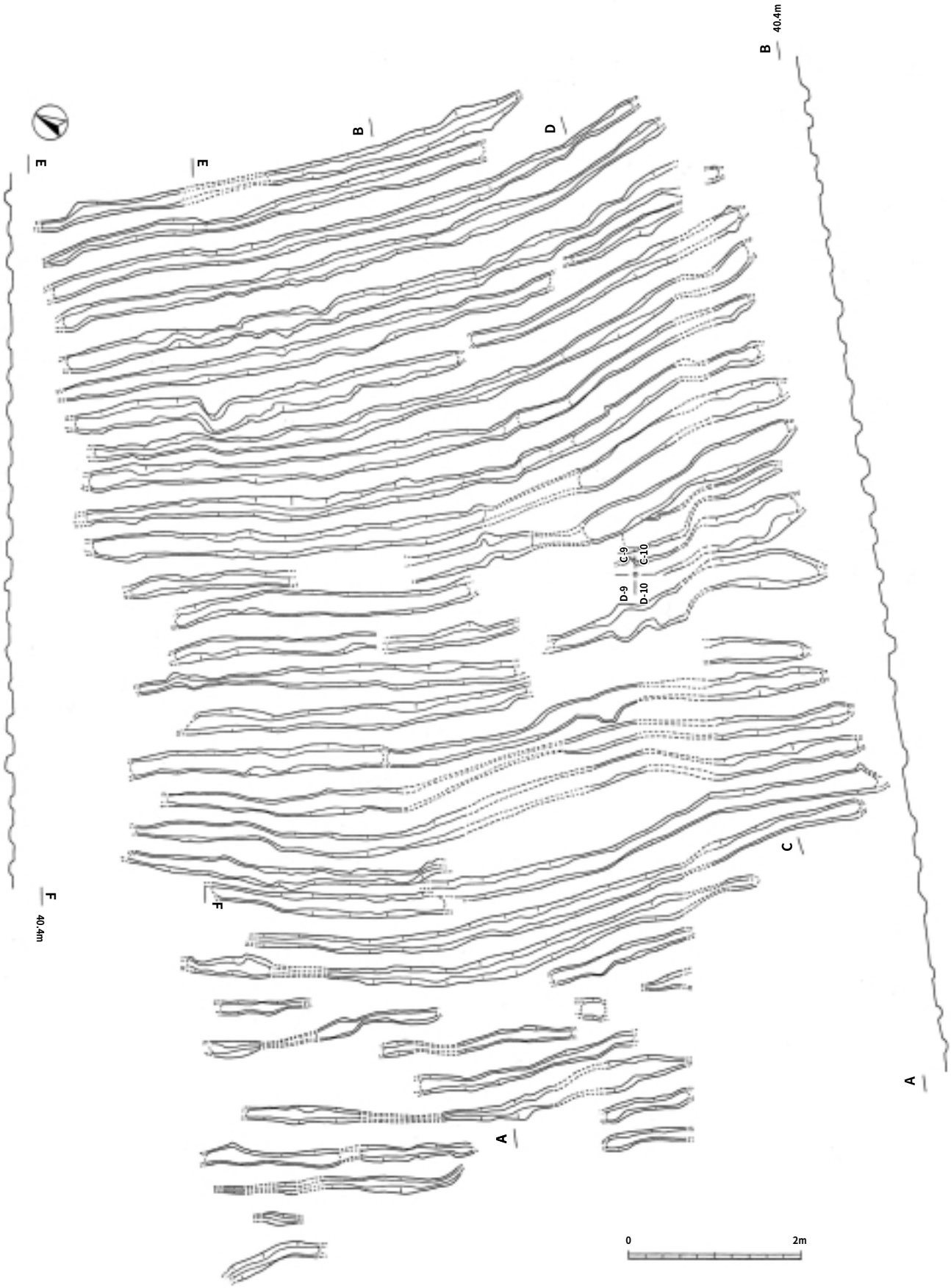
溝２は南北15ｍ，東西17.5ｍ，最大幅２ｍ40㎝，最大底幅120㎝，最大深さ80㎝である。形態は，山部の裾に平行に走り，平坦部が広くなった所で，直角に折れている。

溝３は溝２の折れた溝とかさなり，幅は広くなっている。溝２がある所は溝２の計測でしかできないが，重なっていないＤ－10区は溝３そのものである。長さは21ｍの内５ｍが確認できる。最大幅は190㎝で，最大深さは30㎝である。溝２との違いは深さである。

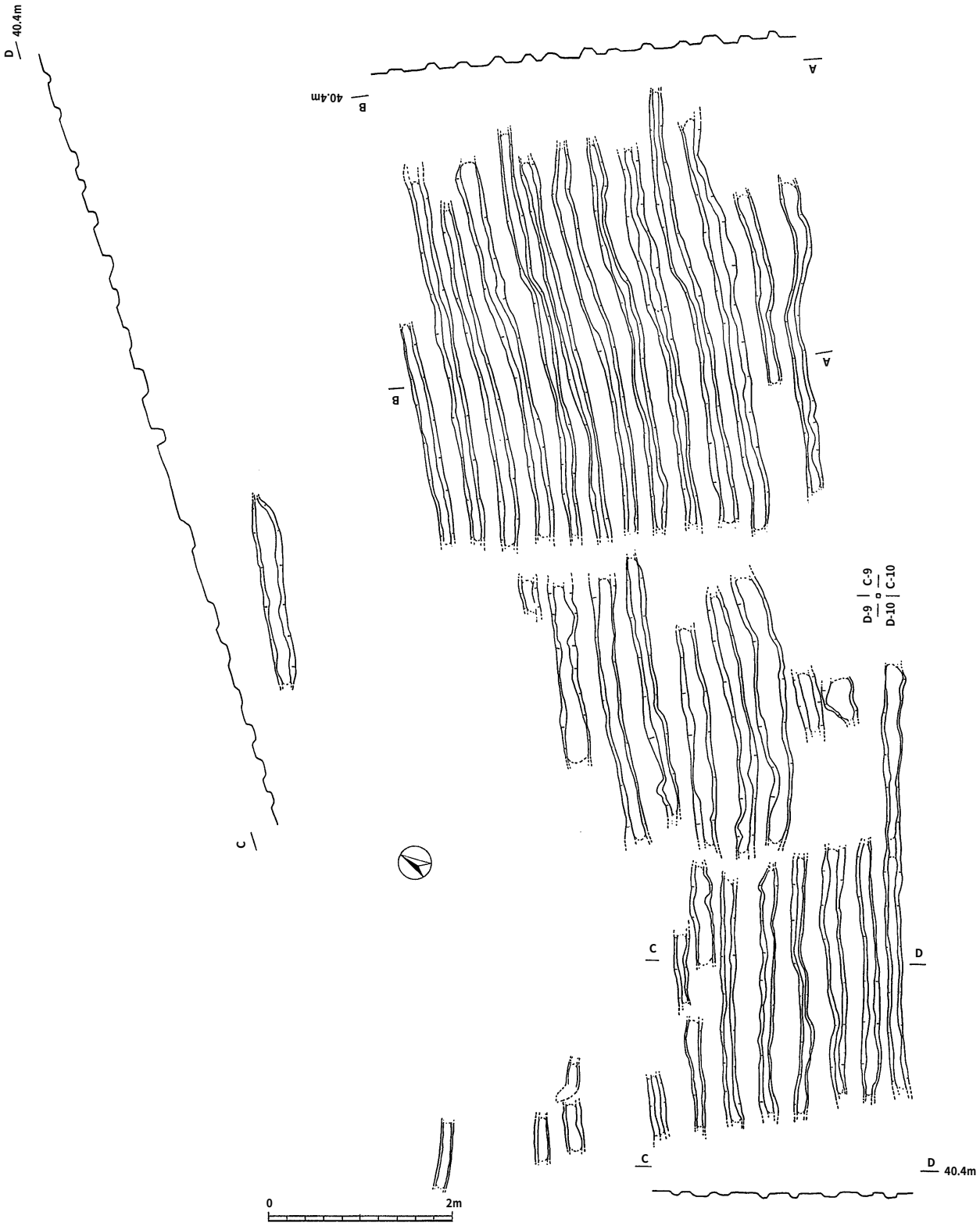
溝４は浅い溝で，長さは29ｍ，最大幅80㎝，深さ15㎝である。部分的に硬化面はみられる。

溝５は浅い溝で，長さは31ｍ，最大幅80㎝，深さ15㎝である。部分的に硬化面はみられる。

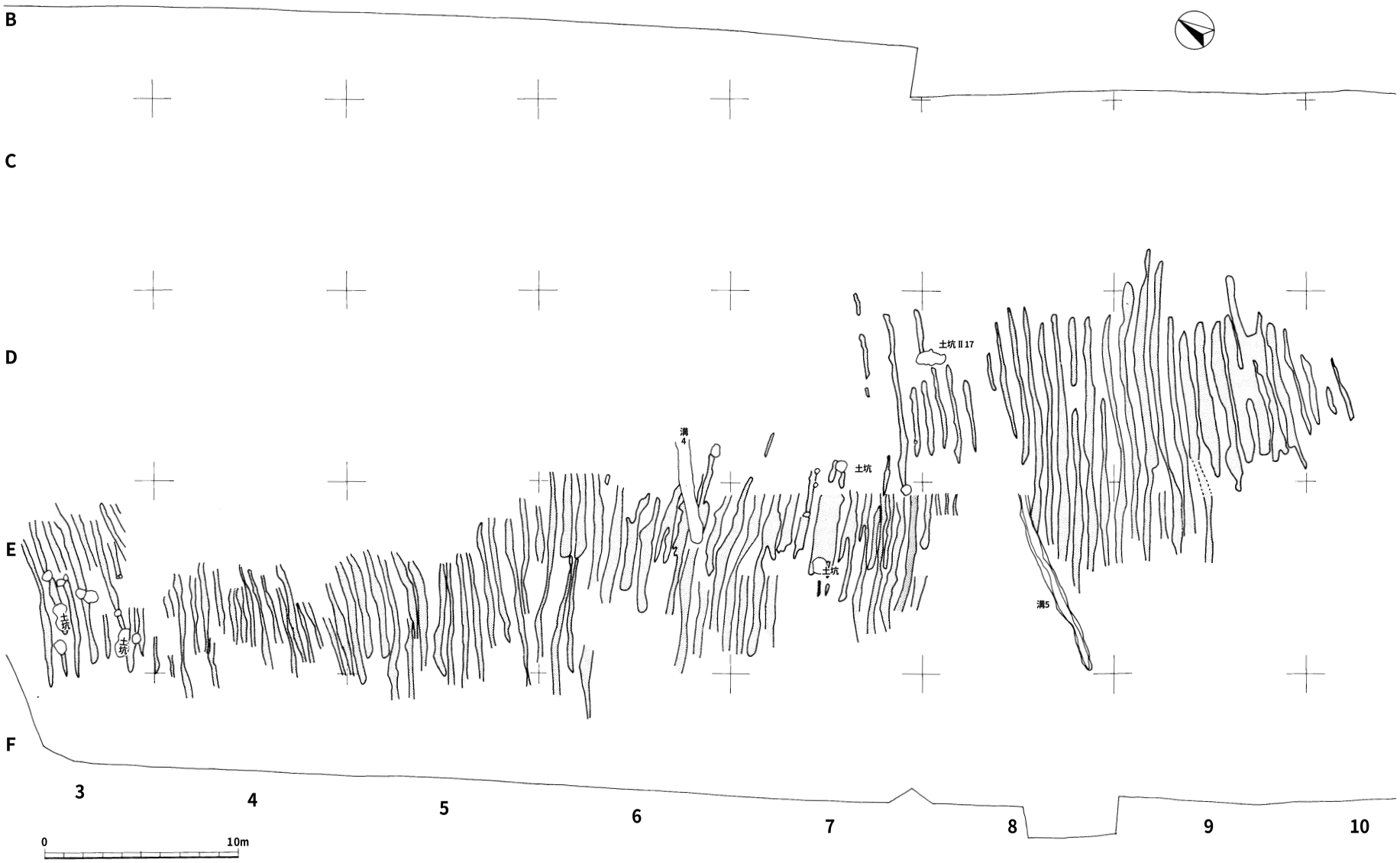
溝６は浅い溝で，長さ６ｍ，幅60㎝，深さ15㎝である。溝７は長さ２ｍで溝６と同じである。



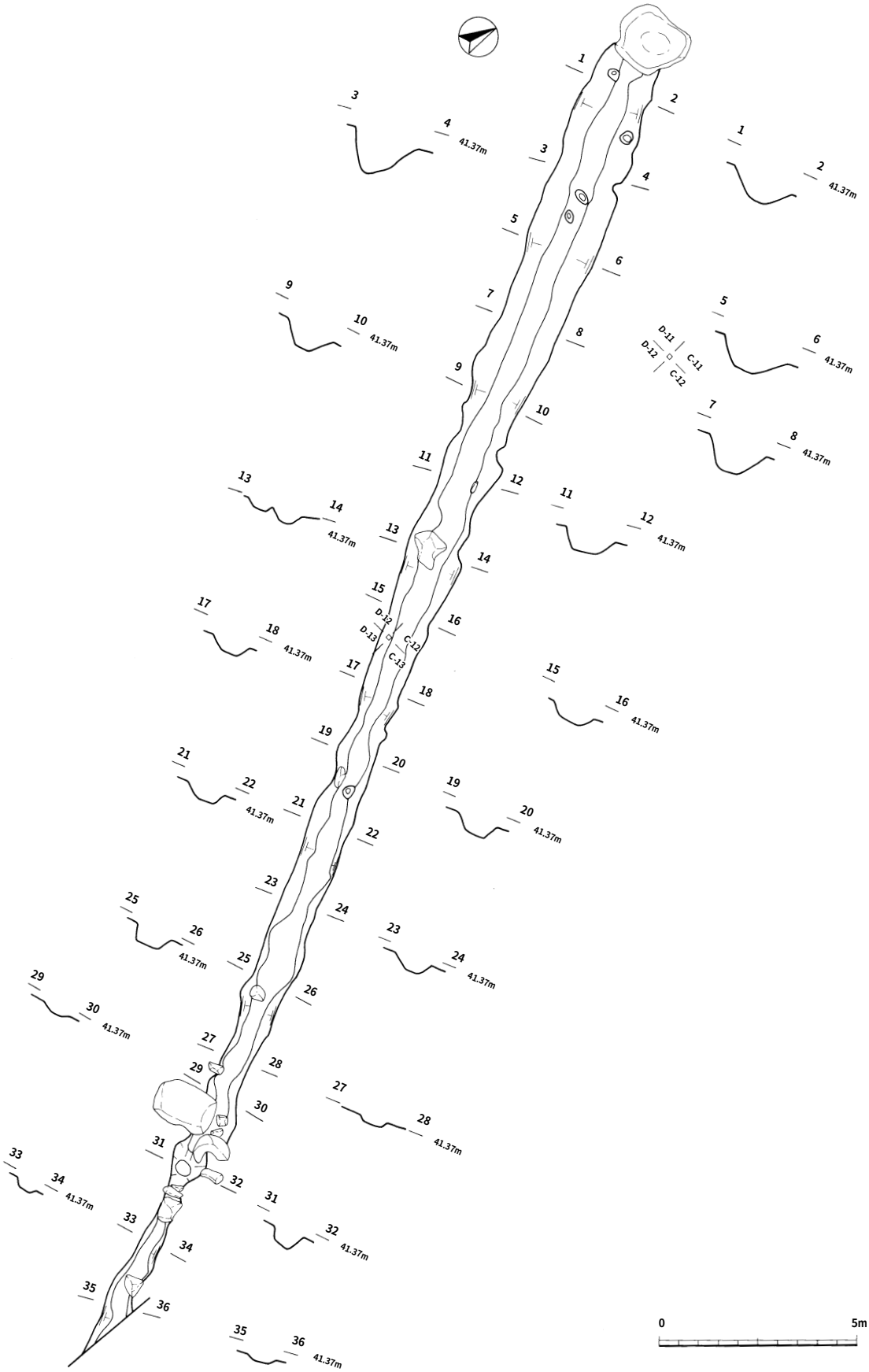
第89図　畠跡Ⅰ－1（第2畝間）



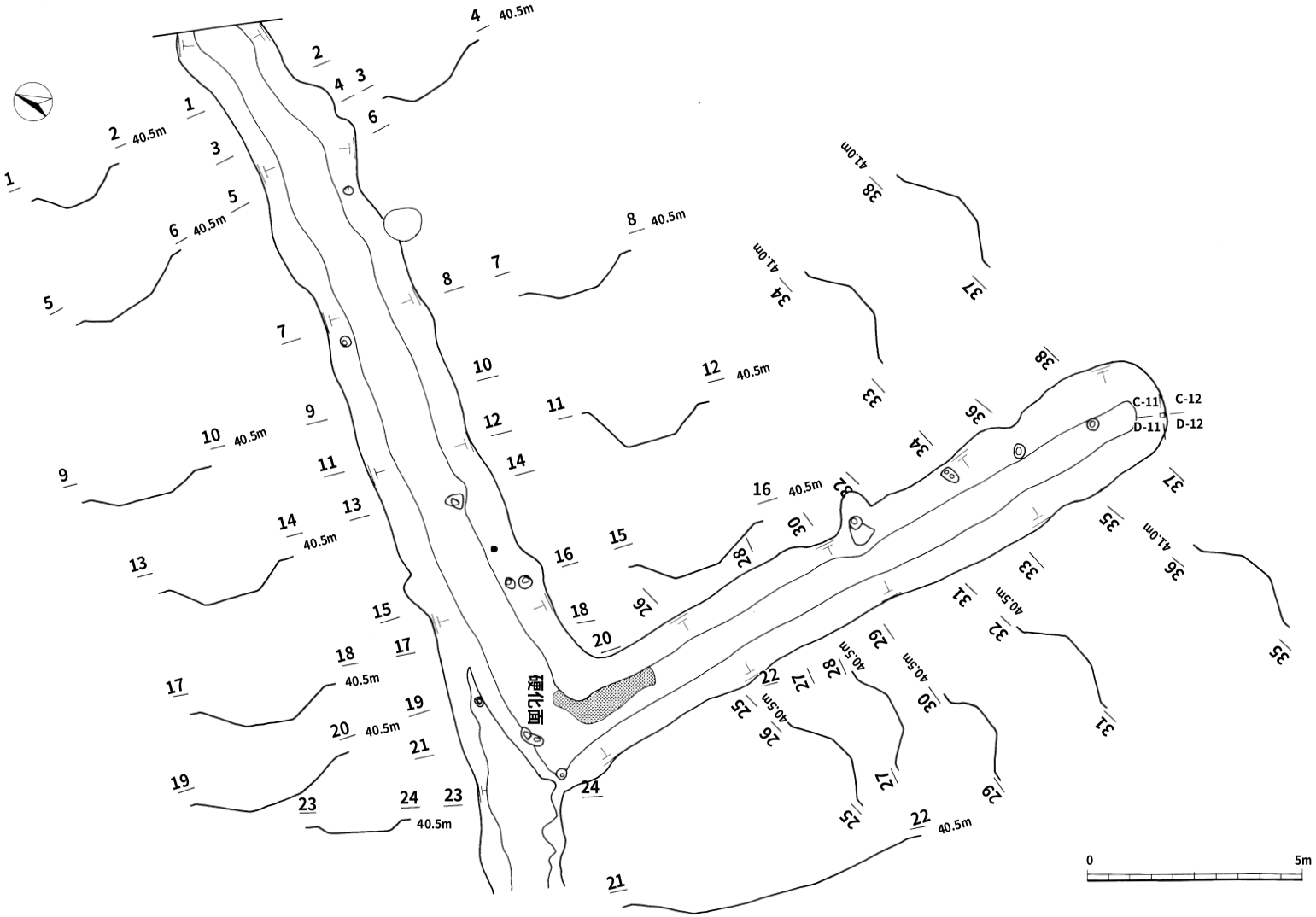
第90図　畠跡Ⅰ－2(第1畝間)



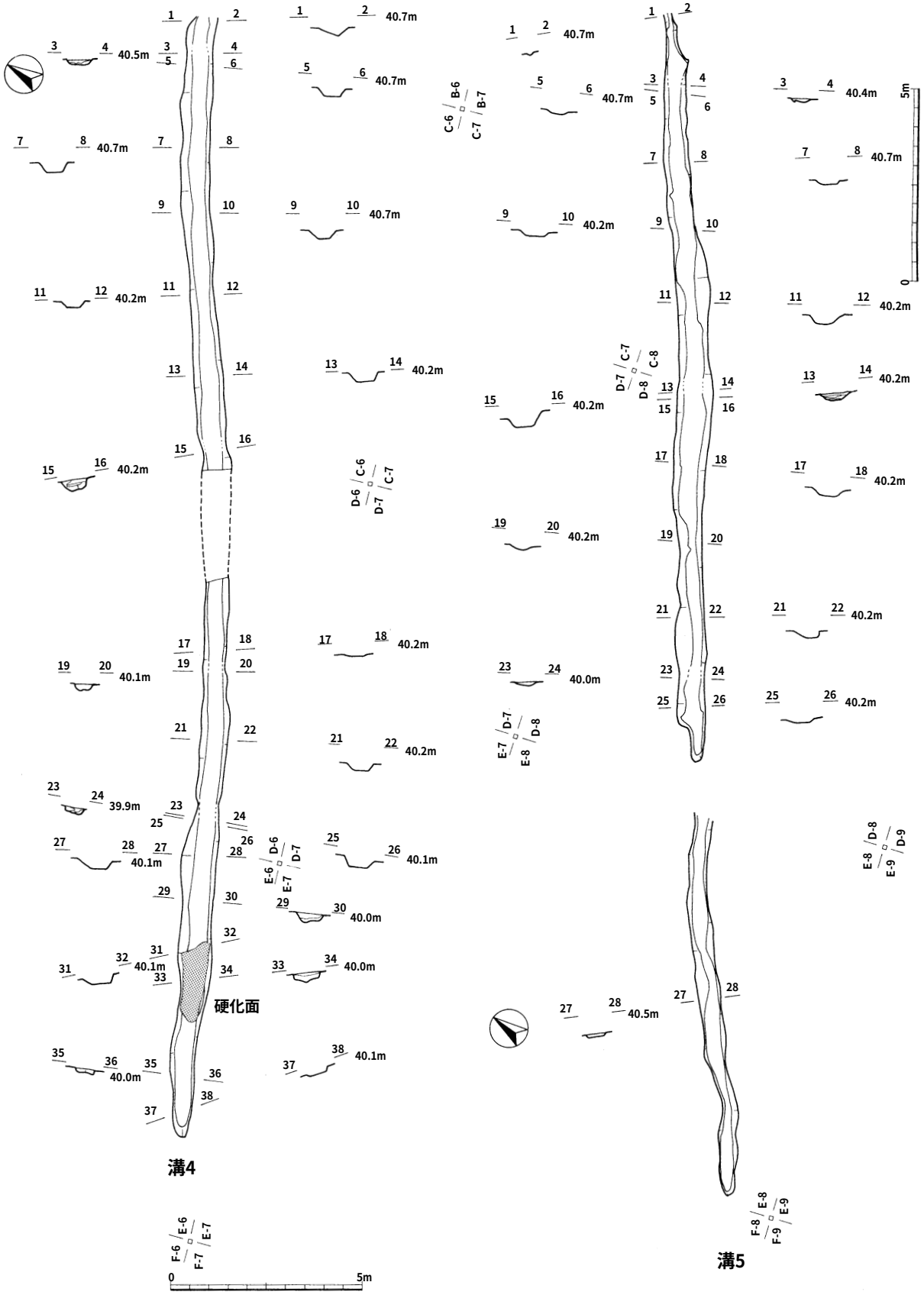
第91図　畠跡Ⅱ



第92図　溝1



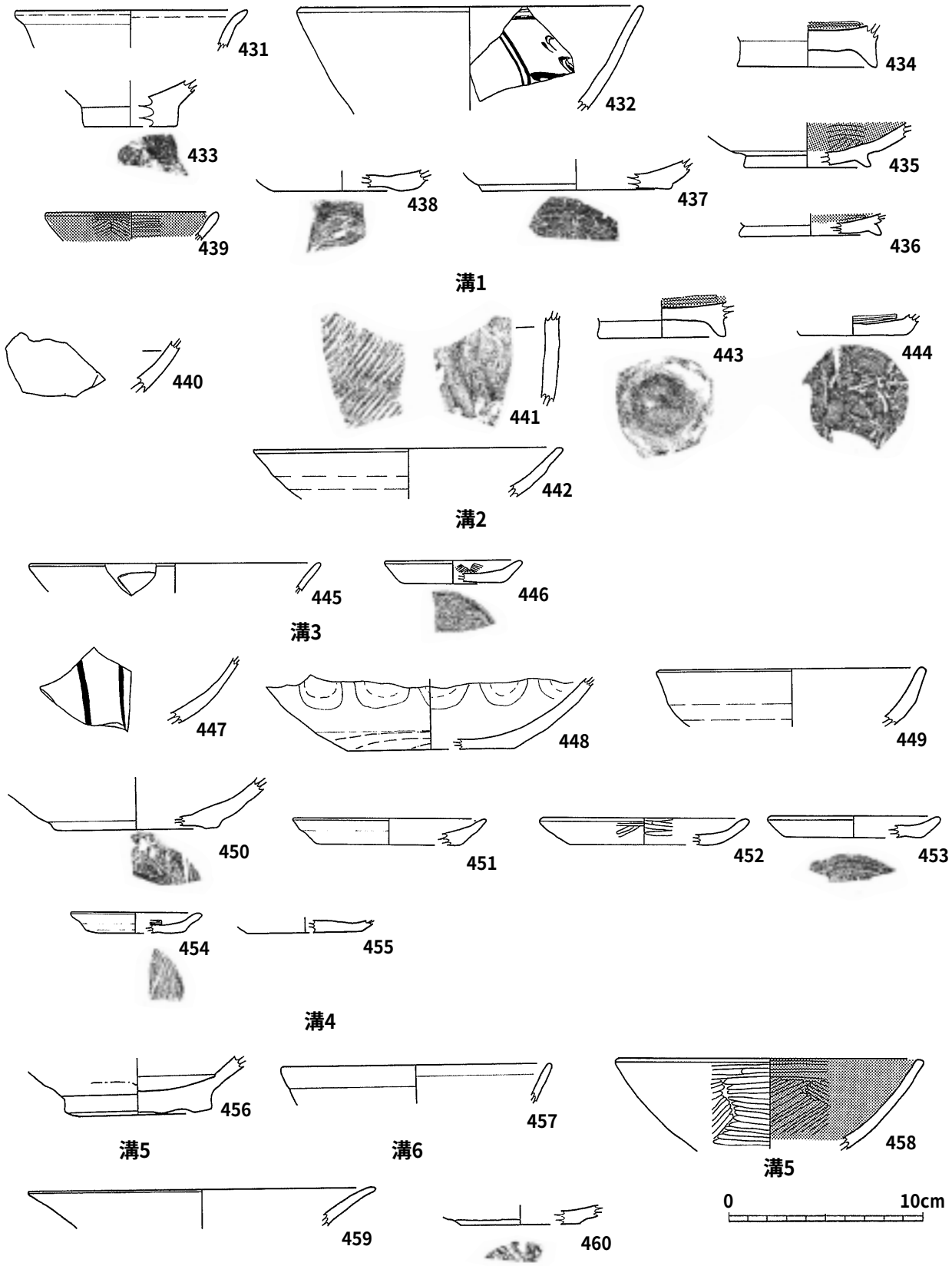
第93図　溝2・3



第94図　溝4・5

溝１～６の出土遺物（第 95 図 431～460）

溝１は 431～439 である。431 は白磁の端反りの碗である。432 は青磁Ｉの碗である。



第 95 図　溝1～6の出土遺物

433・437・438 は土師器の埦，坏，小皿である。434～436 は黒色土器Ａの埦で 439 は同Ｂの小皿である。

溝２は 440～444 である。440 は青磁碗で鎬蓮弁文がある。441 は中世須恵器である。442 は土師器の坏で，443 は黒色土器Ａの埦, 444 は土師器の小皿である。

溝３は 445 の白磁碗，446 の土師器小皿が出土している。

溝４は 447～455 が出土している。447 は鎬蓮弁文の青磁碗で，448 は中国陶器の壺底部である。449～451・453～455 は土師器で，449・450 は坏ほか小皿である。452 は黒色土器Ｂの小皿である。

溝５は 456 の白磁碗の底部，黒色土器Ａの埦が出土している。

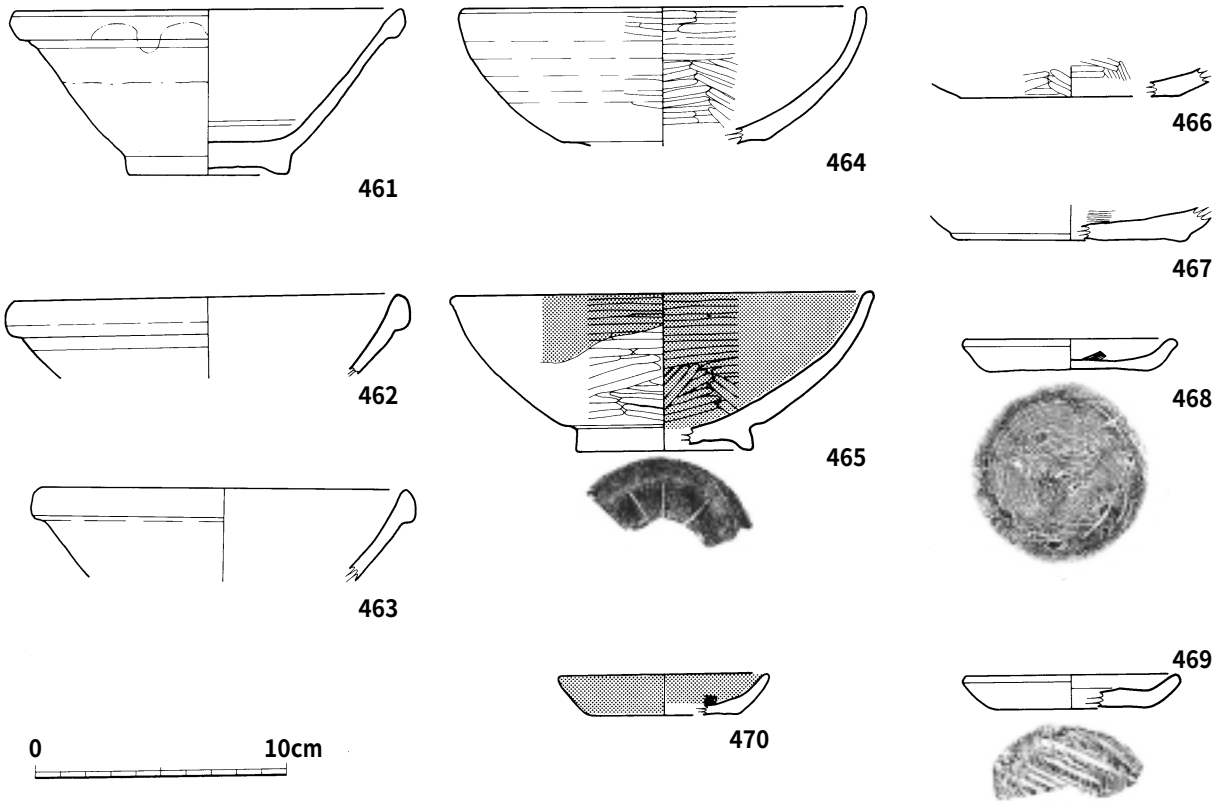
溝６は 457 の青磁とほか土師器が出土している。

キ　柱穴遺構（第 96～101 図 461～525）

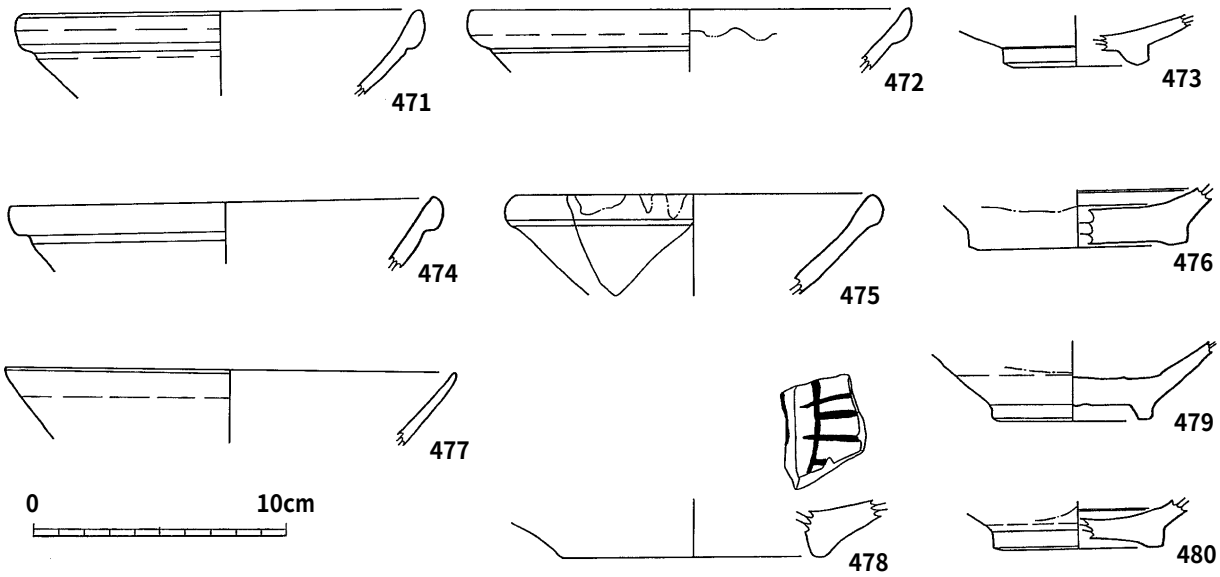
この柱穴遺構は，掘立柱建物跡１内で建物に組み込めなかったものである。位置は第 29 図の全体図で参照のこと。

同一柱穴遺構から出土したものは，461～463 が白磁Ⅳ類，464 が土師器埦，465 が黒色土器Ａ，466・467 が土師器坏，468・469 が土師器小皿，470 が黒色土器Ｂの小皿である。

これらの遺物は同一遺構ととらえられたために掲載した。磁器と土師器のセット関係ととらえたい。

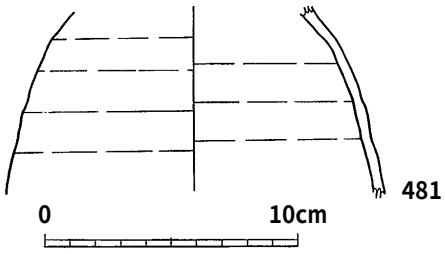


第 96 図　同一遺構柱穴内の出土遺物



第 97 図　柱穴内の出土遺物（1）磁器

471 は白磁Ⅳ類で玉縁口縁の幅が太い。器形は体部が若干彎曲している。472 は白磁Ⅳ類で玉縁口縁の幅が太い。器形は体部が直線状である。内面に垂釉がみられる。473 は白磁Ⅳ類の底部である。474 は白磁Ⅳ類で玉縁口縁の幅が太い。器形は体部が直線状である。475 は白磁Ⅳ類で玉縁口縁の幅が太い。器形は体部が直線状である。476 は白磁Ⅳ類の底部で，低い高台である。477 は青磁の碗である。478 は青磁の盤の底部である。479 は高台のある白磁Ⅷ類の底部である。480 は低い高台の底部である。



第 98 図　柱穴内の出土遺物（2）陶器

陶器（481）

陶器は中国陶器が出土している。第 98 図の 481 である。薄手の陶器で褐釉がかかったものである。形態は四耳壺の胴部と思われる。

土師器(482～521)

土師器は埦（482～499）と坏（500～508）と小皿（509～521）が出土している。

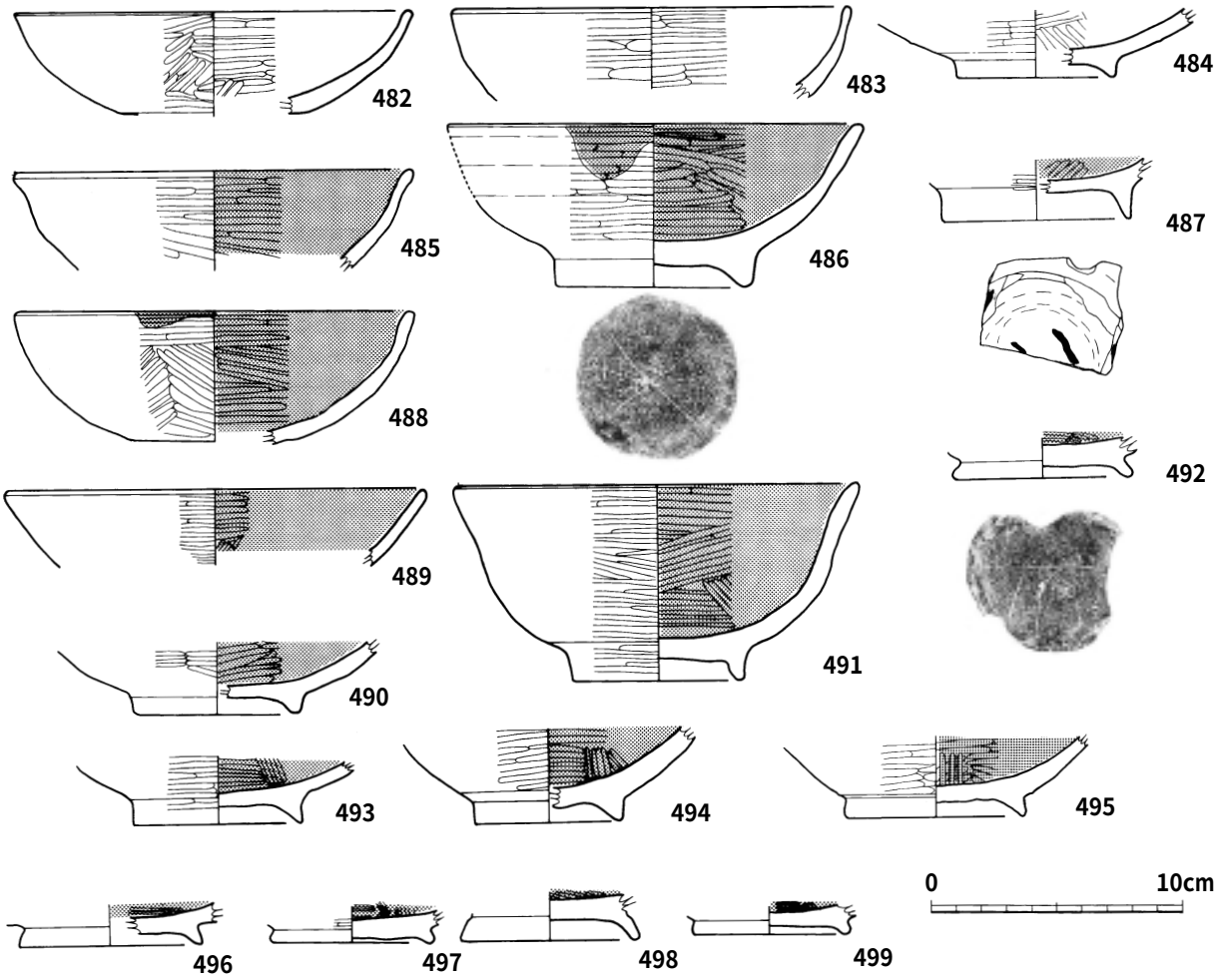
埦は482～484 が土師器で，485～499 が黒色土器Ａである。本来内側だけ黒色を施すものであるが，486・488 は外面の一部にもみられる。

この中で，高台の低いものは 484・492・495・496・497・499 である。高台の高いものは 486・487・490・491・493・494・495・498 である。

口縁部は内湾するものが 482・483・488 で，直線状は 489，外反が 485・486・491 である。

これらは，全面に丁寧な研磨痕があり，水漏れ防止が良くおこなわれている。特に見込みの中央部は縦位と横位にみられる。

特徴のある土師器は，487 に墨書がみられる。また，486 の底部外面に×と－を重ねた線刻がみられる。492 には－と三の組み合わせの線刻がみられる。



第 99 図　柱穴内の出土遺物（3）土師器の椀

坏は 500・501 が口縁から底部まであるもので，底部からの立ち上がりは斜位に直線状である。502 はやや厚みがあり，内湾ぎみである。503～508 は底部である。503・504・505 は底部が角張っているものである。506 は底部の角が丸味をもっているものである。507 は充実高台ぎみにつくっている。508 も充実高台ぎみにつくっているが上げ底である。

製作は糸切り離しである。

小皿は 509・510・511 が深めの皿で，512～519 浅めの皿である。小皿の立ち上がりは 509・510・511・519 が上に，512～518 が斜めにみられる。この中で，512～516 の底面は上げ底ぎみになっている。また，520 は底部である。

製作は糸切り離しである。

521 は黒色土器Aの皿である。内外面は研磨がみられ，口縁部が外反している。全体的に薄手に作られている。

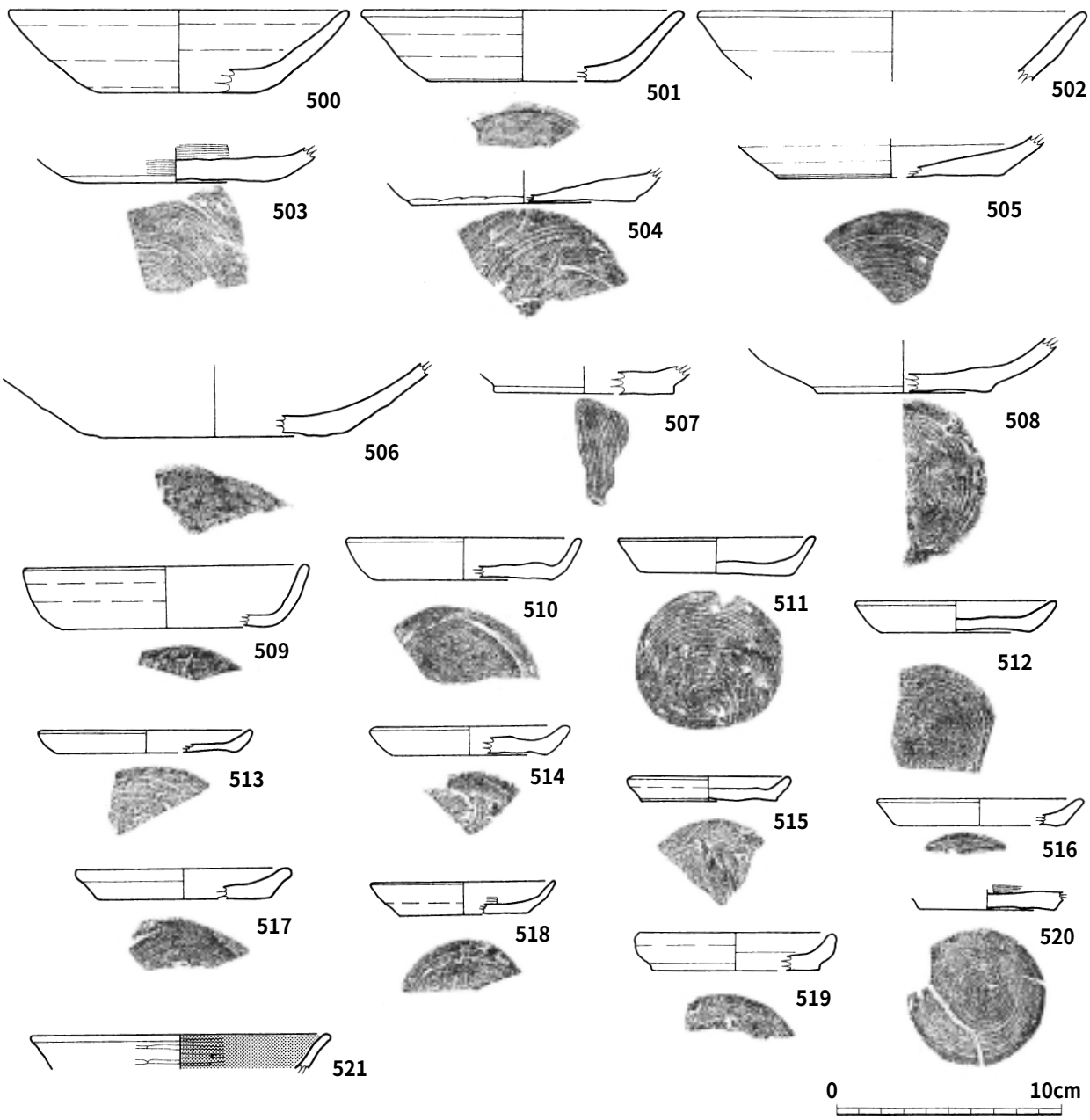
522 は捏鉢である。中世須恵器で東播磨系と思われる。

523 は小刀の柄部である。

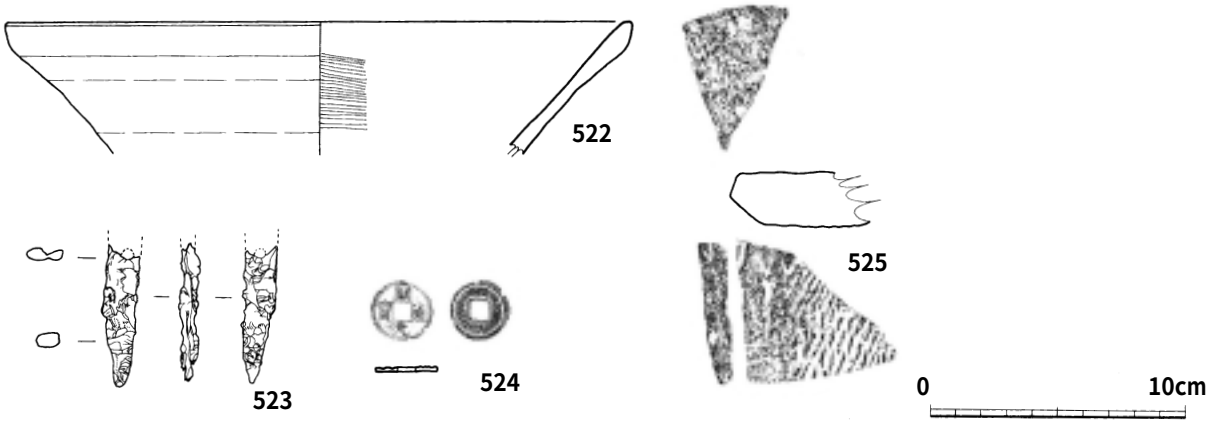
524 は古銭で開元通寶である。

525 は布目瓦である。平瓦と思われる。

以上が柱穴内出土遺物で，包含層出土と区別した。



第 100 図　柱穴内の出土遺物（4）土師器の坏・小皿



第 101 図　柱穴内の出土遺物（5）中世須恵器・瓦・鉄器・古銭

（２）遺物

ア　白磁

①　白磁（１）（第 102 図　526～528）

この類は，幅が狭い玉縁口縁をもつ白磁Ⅲ類である。

526 は幅の狭い玉縁をもつ白磁の碗である。器形は内湾するものである。527 は幅の狭い玉縁をもつ白磁の皿である。器形は外反するものである。528 は幅の広い玉縁をもつ白磁の皿である。器形は内湾するものである。

②　白磁（２）（第 103～105 図　529～589）

この類は，幅が広い玉縁口縁をもつ白磁Ⅳ類である。また，それとセットになる皿である。碗は 529～586 で，皿は 587～589 である。碗は口縁部から体部にかけてのものが 529～572 で，底部が 573～586 である。

この玉縁口縁は厚みのないものが 529・530・532・536・539・553・565・572 で，他は厚手の玉縁を口縁外面に廻らしている。

器形は直行の外反で，口縁内側の口唇部近くが内湾するのが多い。

口径は，最も狭径が 530 で 13.8 cm，広径が 557 で 22 cm，大方は 15～18 cmである。器高は 6.5～7.5 cmが想定される。

施釉は，内面が全面施釉で外面が口縁から体部にかけて行われている。この中で 534・540 等にみられるように釉を厚手にかけたため垂れている垂釉があるものもある。

底部は削り込みが浅く高台が低い。そして，畳付けは外側を多く削り断面が斜めになっている。

器面調整は見込みが全面施柚で，外面は体部に施釉があるが底面にはない。

これらで見込みに沈線ないし段がみられるものは 529・573・574・577・578・582・583・584・585・586 である。

587 は小皿である。底部は平底で体部は直線状に口縁部まで外反している。口唇部は外側に斜傾している。588 は外反する口縁体部である。589 は若干上げ底の底部で，体部は外反する器形である。見込みに線がみられる。

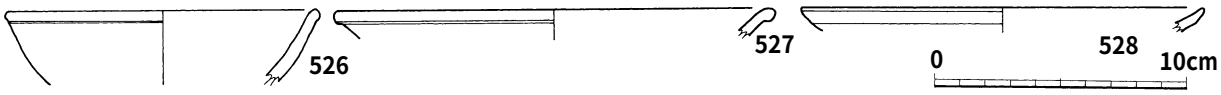
③　白磁（３）（第 106 図 590～602）

この類は，口縁部が外側に反る端反りで白磁Ⅴ類にあたる。

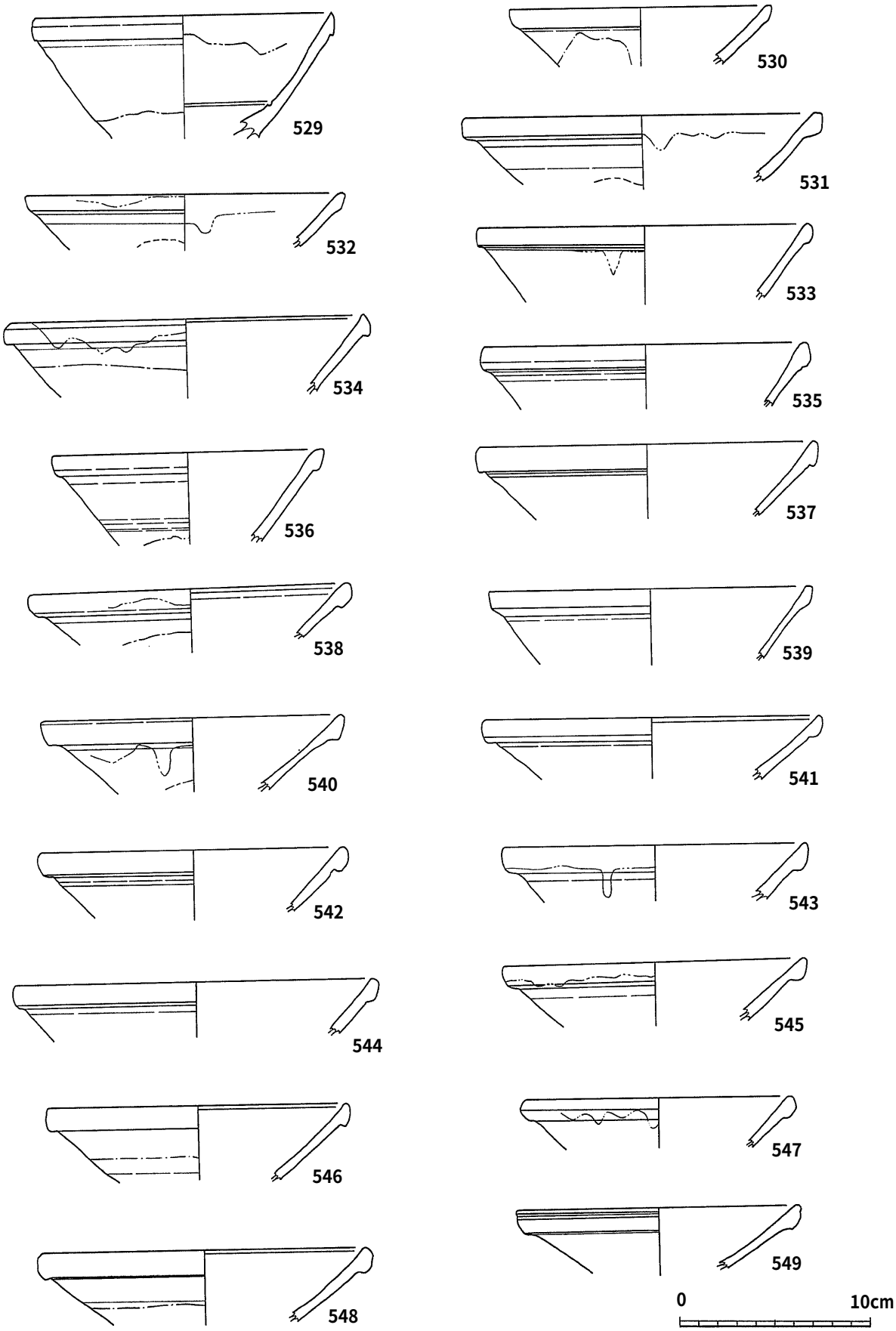
590 は見込みに櫛書文がみられるものである。器形は丸味をもつ体部から口縁部にかけて外反している。591～595 は無紋である。596 は見込みに櫛書文がある底部である。597～599 は底部で高台が高く，畳付は尖っている。施釉は見込みが全面施釉で段があり，外面は体部までの施釉である。

600～602 は皿である。600・601 は底部から直接外反するタイプであるが 602 は見込みに段がある。また，線書の文様もみられる。

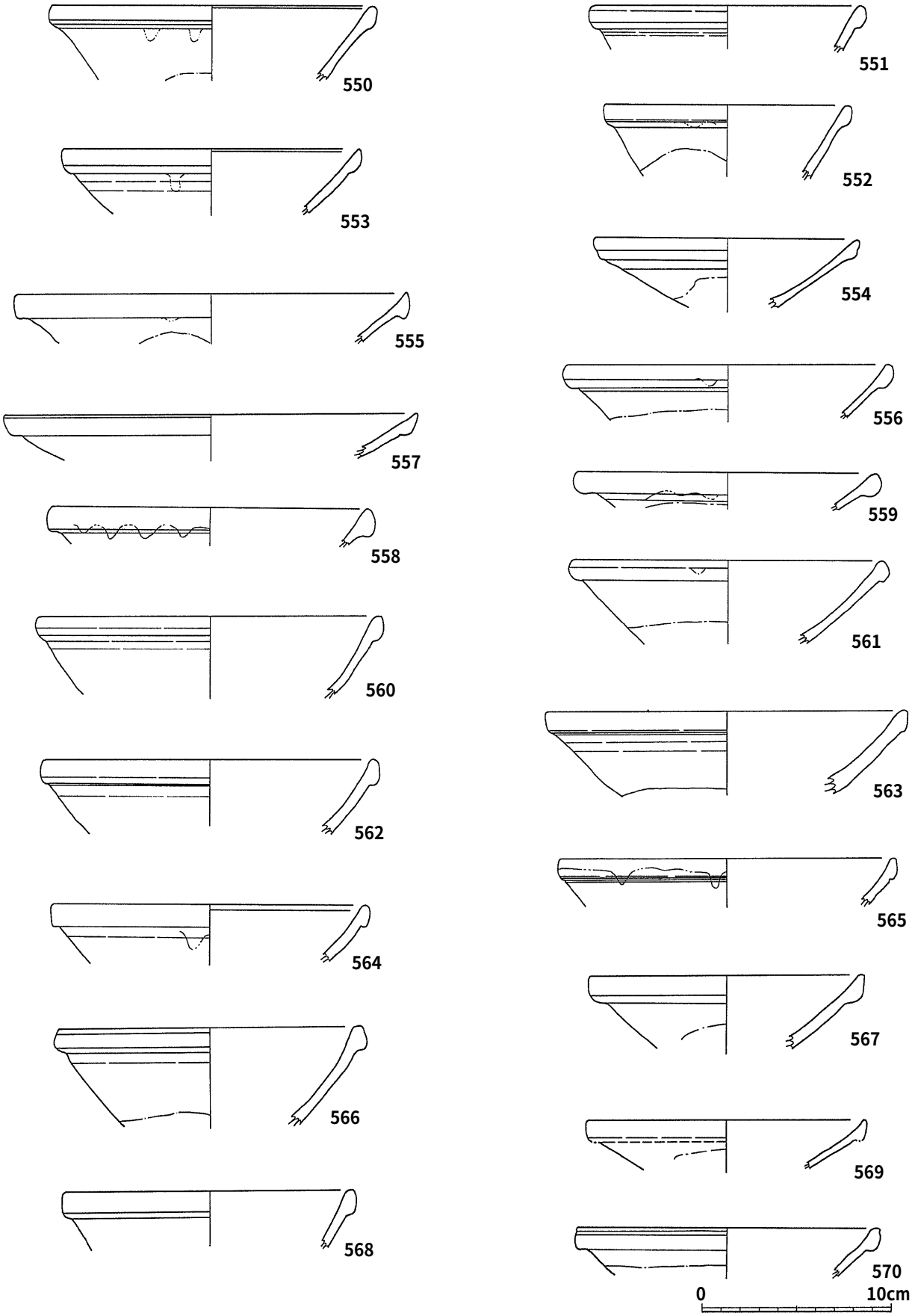
④　白磁（４）（第 107 図 603～606）



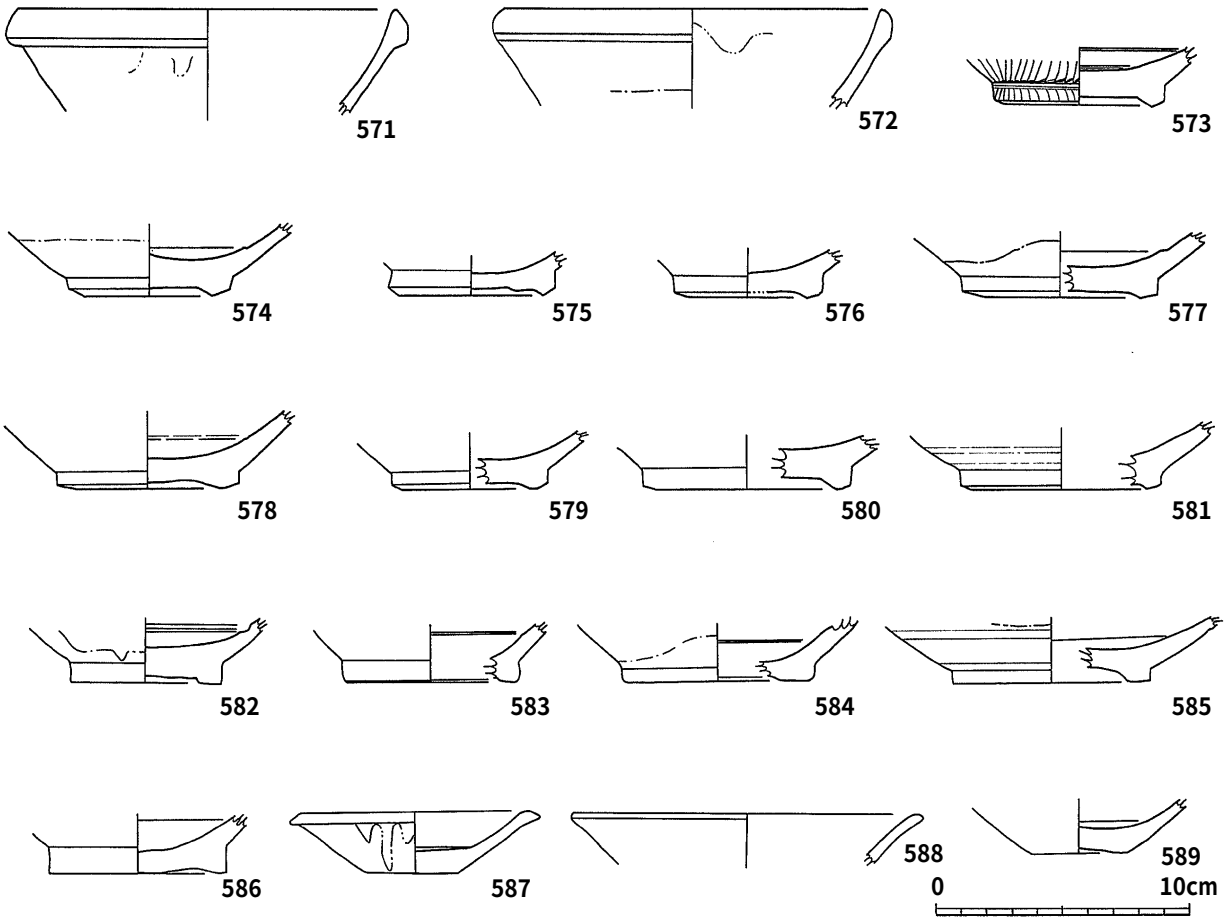
第 102 図　白磁（１）


529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
0
10cm

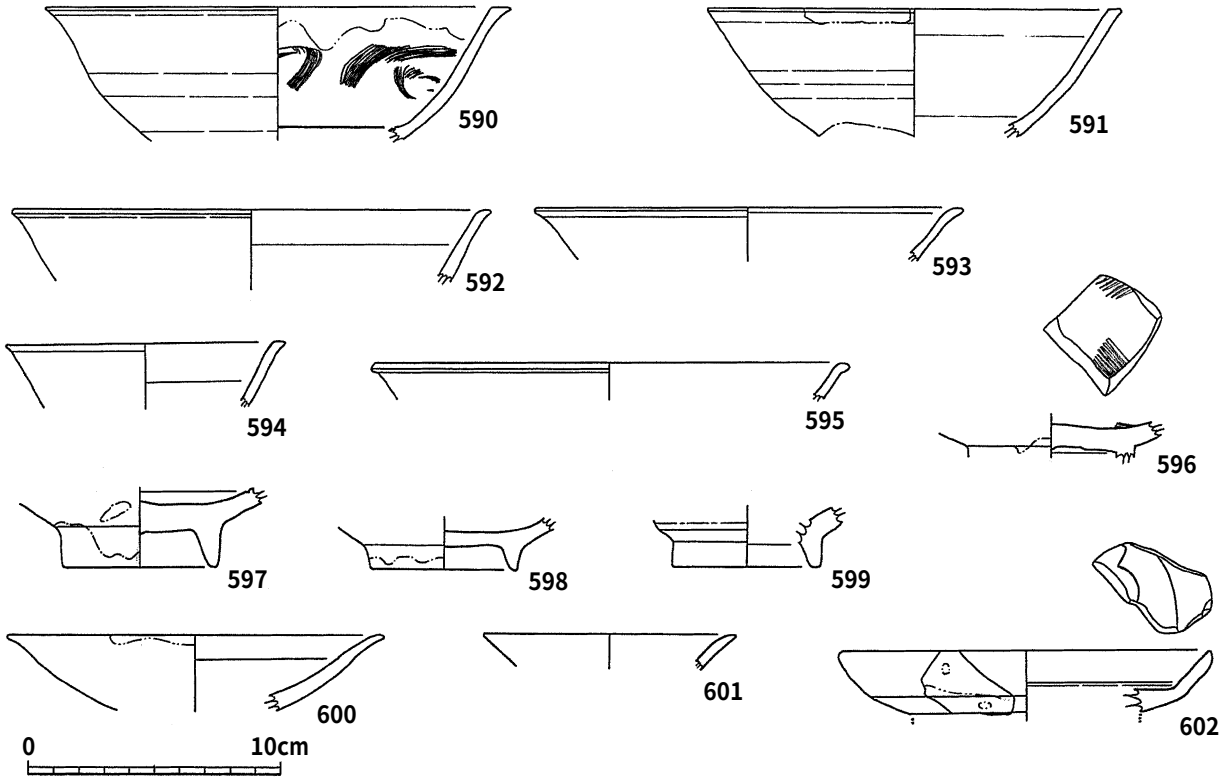
第103図　白磁（2）－1


550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
0
10cm

第104図　白磁（2）－2



第105図　白磁（2）－3



第106図　白磁（3）

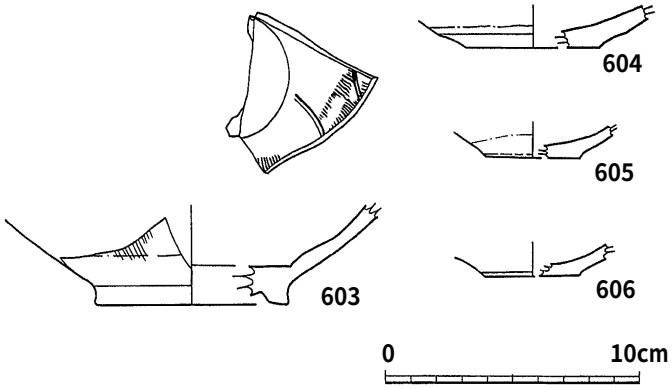
この類は白磁Ⅶ類に比定する。603は高台の低い碗である。見込みに櫛書文がみられる。604～606は小皿である。

⑤　白磁（５）（第108図607～620）

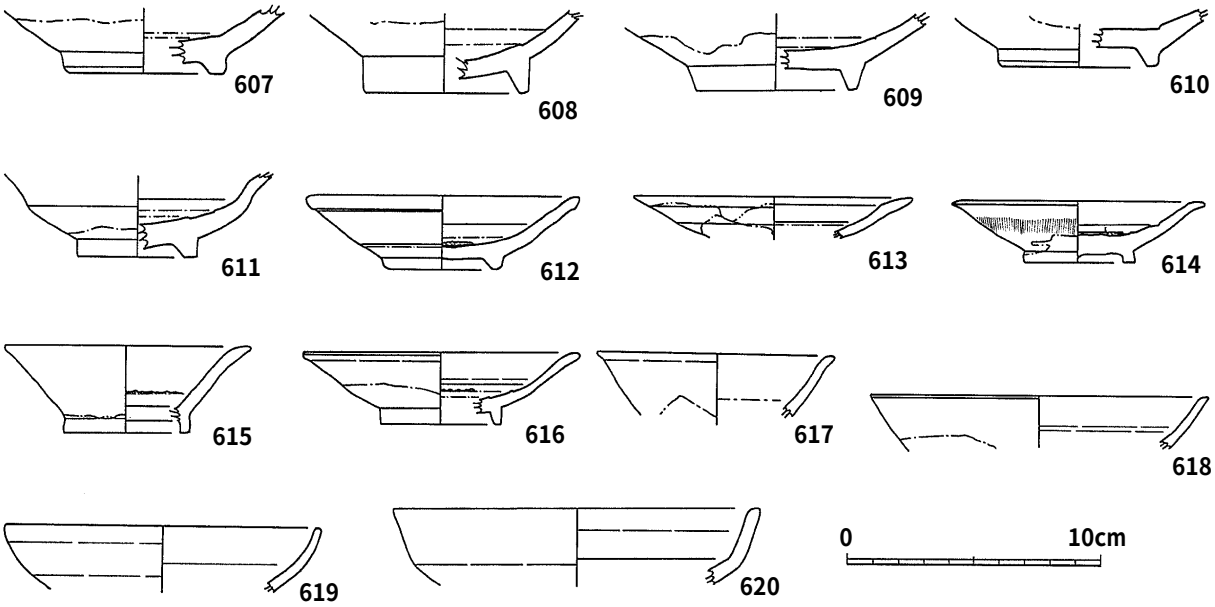
この類は見込みに釉剥が蛇の目状にある白磁Ⅷ類に比定する。この中で607～611は高台が少し高い碗である。612～620は皿である。

⑥　白磁（６）（第109図621～639）

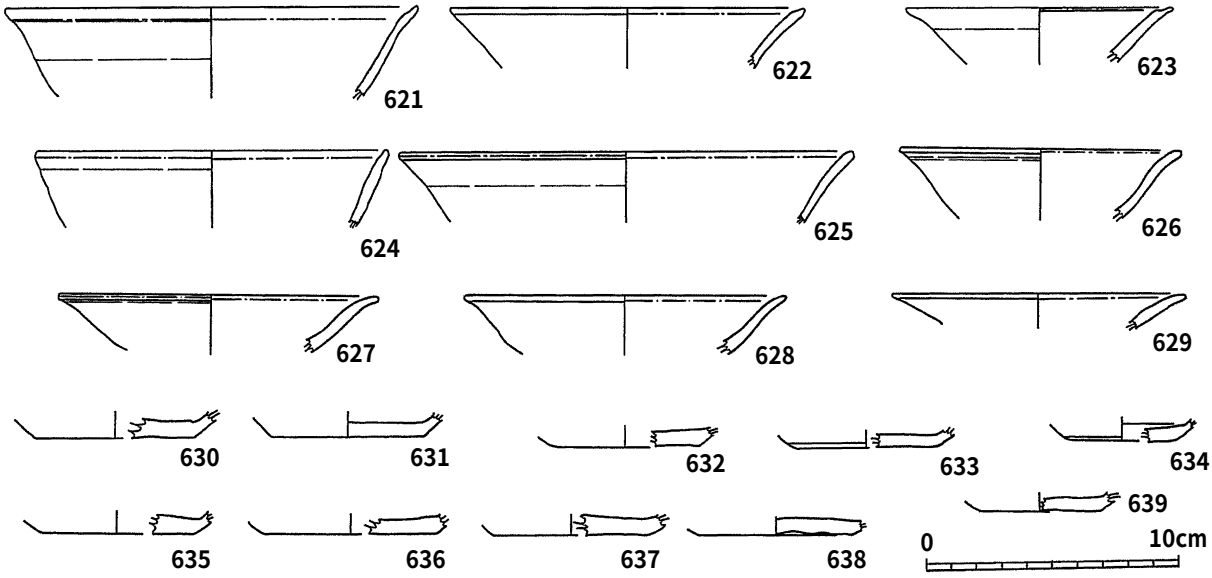
この類は口縁部の釉を掻いている口剥に比定する。



第107図　白磁（4）



第108図　白磁（5）



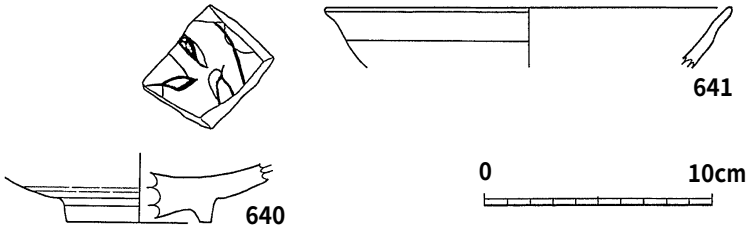
第109図　白磁（6）

621～629 は口縁部から体部である。口縁部は大きく外反する。この中で，623 は口縁部の釉を掻いた時に削り痕で段になっている。630～639 は底部である。底部は平底の薄手で，釉は表裏とも全面施釉である。

これらは皿である。

⑦　白磁（７）（第 110 図 640・641）

この類は白磁B・C類にあたる。



640 は白磁B類である。これは厚い碗の底部である。高台はそれほど高くなく畳付は平坦である。見込みには草花文がみられる。

第 110 図　白磁（7）

641 はC類の碗である。口縁部は直線状に外反し，体部で少し「S」字状に曲がっている。口縁部は薄い。施釉は全面である。

⑧　白磁（８）（第 111 図 642～649）

この類は，白磁D類に比定する。

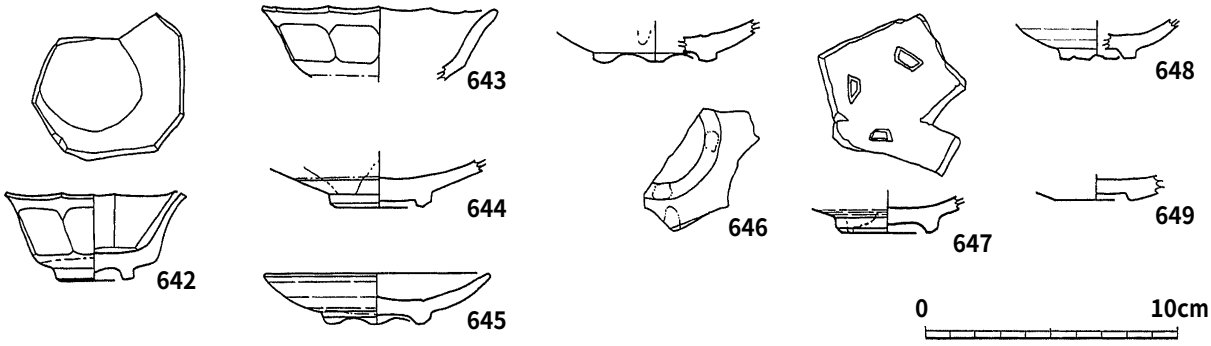
642 は八角の小碗である。口唇部は平坦面を作り山形に波状している。体部から口縁部は外反し，８面の四角面を作っている。底部は横に張り高台を設けている。見込みは円形に近く稜がみえている。施釉は底部の外面以外に施されている。643 は 642 の少し大形版である。644 はこれらのタイプの底部である。畳付は外側が上がっている。

645 は高台を削り４本の脚を作っている底部を持つ小皿である。施釉は底以外に施されている。見込みには線がみられる。646 は同じ底のタイプで，脚端に砂目跡がみられる。

647 は見込みに砂目跡がみられる小皿である。見込みには施釉があるが，底外面にはない。

648 は高台に４か所切り込みを入れた小碗の底部である。見込みには施釉があるが，底外面にはない。

649 は凹んだ底部で碁笥底と言われるタイプである。器形は丸味のある小皿である。施釉は底以外に施されている。

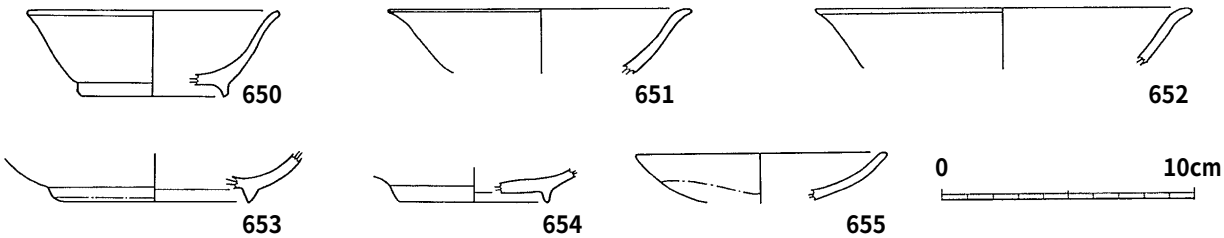


第 111 図　白磁（8）

⑨　白磁（９）（第 112 図 650～655）

この類は白磁E類である。

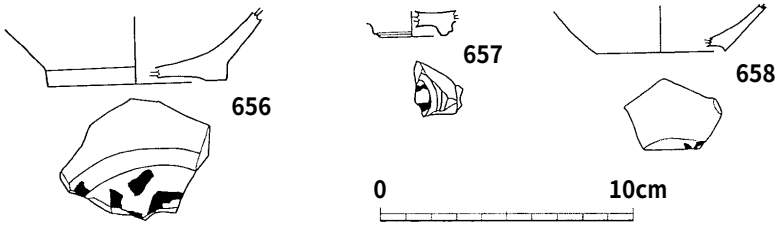
650 は高台の畳付が尖り，体部は口縁部にかけて外反している。底径は広めである。651 は体部から口縁部にかけて外反している。652 も体部は口縁部にかけて外反している。653 は高台の畳付が尖り，体部が張っている。654 も高台の畳付が尖り，体部が張っている。655 は丸味をもった器形の小皿である。施釉は見込みが全面で，外面が体部までである。



第 112 図　白磁（9）

⑩　墨書磁器（第 113 図 656～658）

656 は白磁Ⅳ類の底部の外面に書かれたもので，内容は不明である。657 は小皿か小碗の底部の外面に書かれたもので，内容は不明である。658 は碁笥底様の底部の外面に書かれたもので，内容は不明である。



第 113 図　墨書磁器

イ　青磁

①　青磁（１）（第 114 図 659～684）

この類は龍泉Ⅰに比定している。器形は張る底部から口縁部に立ち上がり体部は直線状で外向し，底部は低い高台をもつ碗である。ここでは659～673の見込み有文と674～684の無文の二種類ある。

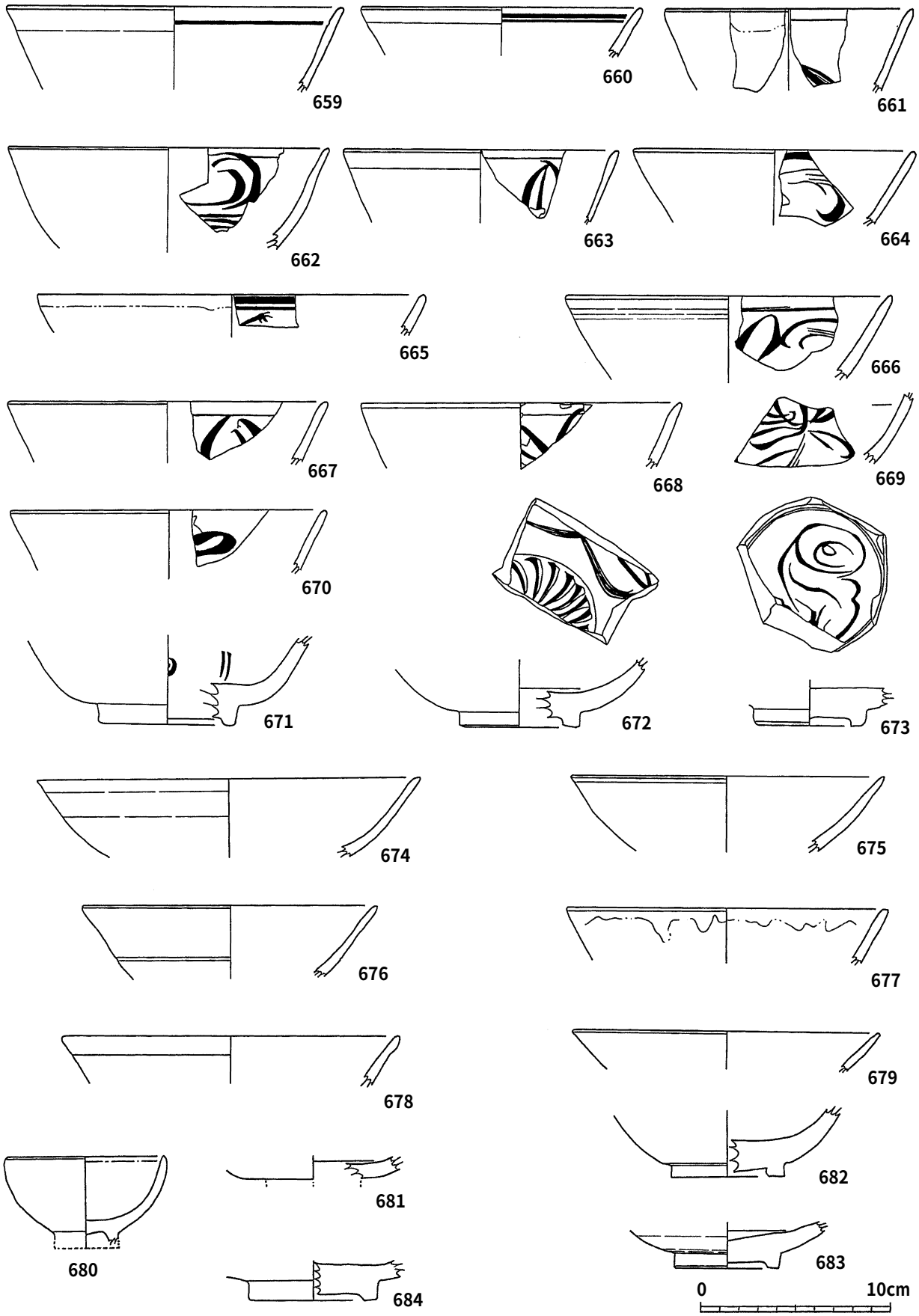
659・660 は口縁部に横位の沈線，661～673 は沈線と草花文を見込みに施している。施釉は見込みが全面施釉で，底部が露胎である。

674～684 は無文で，施釉は見込みが全面施釉で，底部が露胎である。なお，この中の 680 は小碗である。

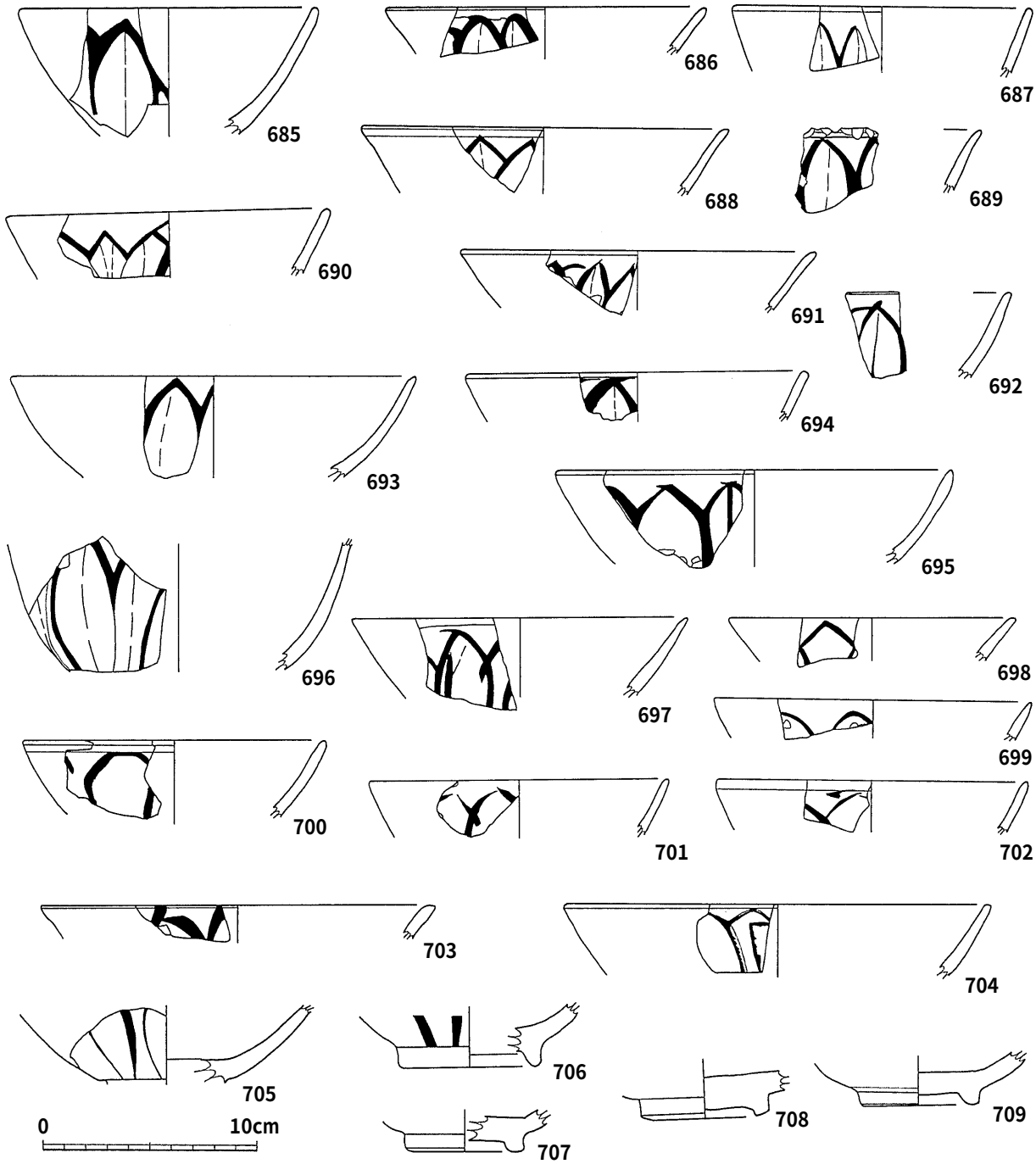
②　青磁（２）（第 115 図 685～709）

この類は龍泉Ⅱに比定している。器形は張らない底部から彎曲状に立ち上がり，口縁部は内湾ないし，直線状にあがる碗である。そして，高台は低い。

施釉は見込みが全面で，底部の高台内が露胎である。文様は体部から口縁部に稜がはっきりしている広い鎬蓮弁文がみられるものと幅広の蓮弁文を構成するが，稜がはっきりしないものがある。その鎬蓮弁文は崩れているのが多い。


659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
0
10cm

第114図　青磁（1）



第115図　青磁（2）

稜のある施文は685・686・693の鎬蓮弁文が頂点でしっかり重なっているが，691・692・694・695・697は片方が上に乗るようにはみ出して描いている。

稜のない施文は698～704であるが，全体として鎬蓮弁文は雑に描かれており，700・703・704の様に大きく崩れているのが特徴である。

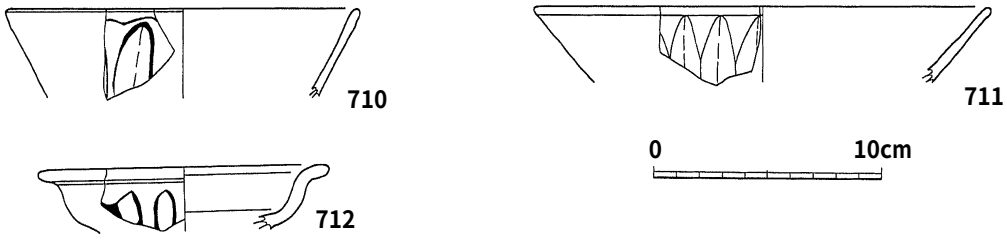
なお，696は口縁部がないが整った鎬蓮弁文である。また，705・706は底部近くの鎬蓮弁文でしっかり高台の基部まで描かれている。

高台の畳付は外側が切られ，内側で接している。

③　青磁（３）（第 116 図 710・711・712）

この類は龍泉Ⅲに比定する。

710 は器形としては体部から口縁部まで直線状に外向している碗である。外面の鎬蓮弁文はやや細く，口縁部に二重の鎬蓮弁文を施し，若干稜がみられる。711 は器形としては体部から口縁部まで直線状に大きく外向している碗である。外面の鎬蓮弁文はやや細く，若干稜がみられる。712 は口縁部で大きく曲がり開いた皿である。外面は鎬蓮弁文が雑に描かれている。この鎬蓮弁文は龍泉Ⅱに類似しているため前の類でも差し支えはない。



第 116 図　青磁（3）

④　青磁（４）（第 117 図 713～723）

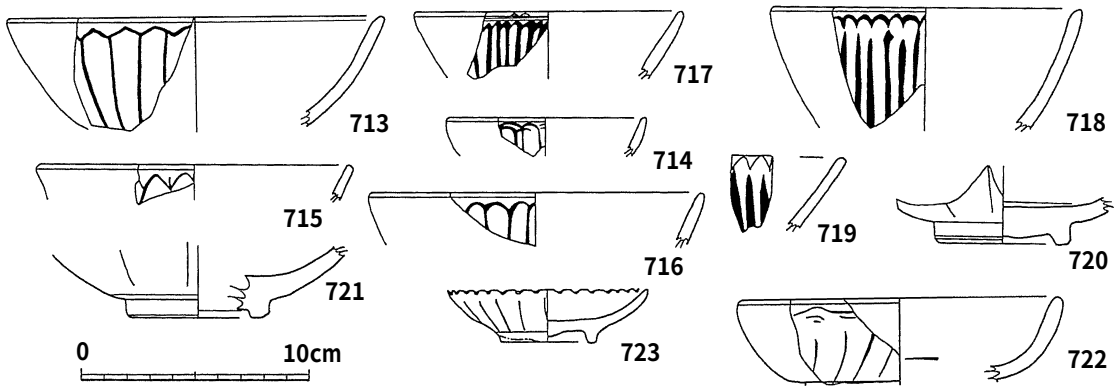
この類は龍線Ｂに比定している。器形は体部から口縁部にかけて若干内湾し，全体的に開く碗と皿がある。底部は幅広く低い高台をもっている。文様は鎬蓮弁文が簡略化されたものを体部外面に施している。

碗は 713～721 である。この碗は文様が大きく 713～716，717～719，720・721 の３種にわけられる。713～716 は蓮弁文上部が口縁部で鋸歯状になり，蓮弁が簡略化され縦線は直線に変化している。この中では，713・716 等の鎬蓮弁文が広い。

717～719 は全体的に鎬蓮弁文の幅が狭く，蓮弁上部と縦線が離れて別々に施されている。その縦線は太くみられる。

720・721 は底部近くである体部に細い線で鎬蓮弁文の縦線を施している。これらは，このように蓮弁の縦線を簡略化により細い線で表している。

722 は体部で丸味を持つ皿で 723 は稜花皿の類である。２つとも鎬蓮弁文を縦線で表すタイプである。722 は蓮弁上部の文様と斜位の縦線で組み合わしている。



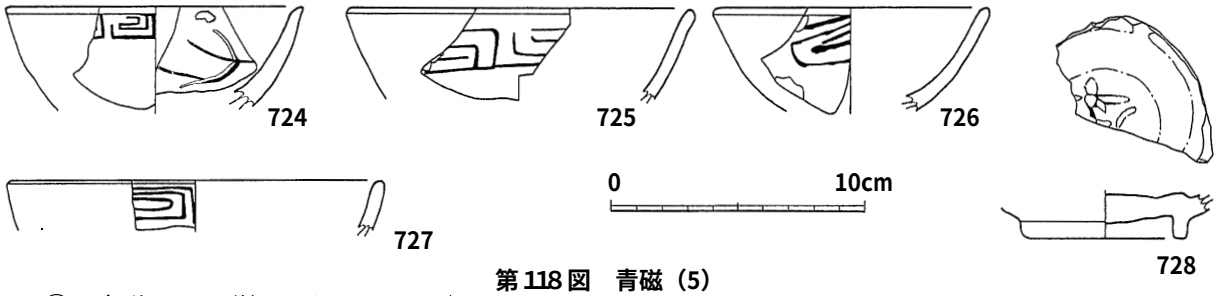
第 117 図　青磁（4）

また，722 は皿の口縁部を稜花状に作ったことは，鎬蓮弁文の上部を口唇部に表し，縦筋が蓮弁の縦線を意味していることも考えられる。

⑤　青磁（５）（第 118 図 724～728）

この類は龍泉Ｃに比定している。器形は体部が若干内湾している碗である。底部の高台はやや高めである。文様は外面口縁部に方形を重ねた雷文を廻らし，見込みには草花のスタンプがみられる。

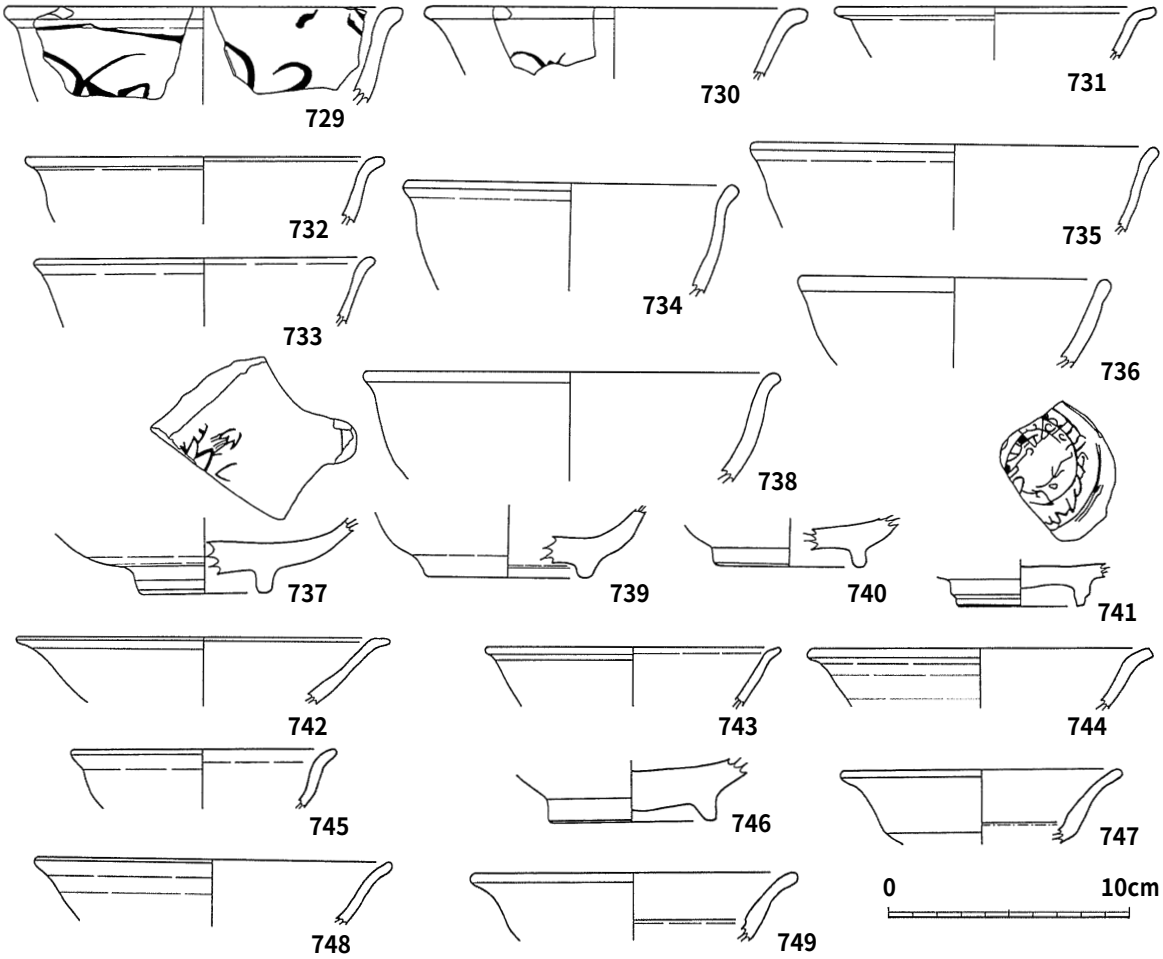
724・727 の雷文はしっかりした長方形で，725・726 の雷文は崩れている。また，728 の見込みは草花文のスタンプの周囲を丸く釉掻きして露胎がのぞいている蛇の目見込みになっている。



第 118 図　青磁（5）

⑥　青磁（６）（第 119 図 729～749）

この類は龍泉Ｄに比定している。器形は体部が直状に立ち上がり，厚みのある口縁部を外側に曲げ広げたものが基本で碗と皿がある。碗は 729～741，皿が 742～749 である。文様は草花文を内外面に施す 729 と外面だけに施す 730 がある。その他見込みに草花文のスタンプがあるものが 737・741 である。また，無文もみられる。



第 119 図　青磁（6）

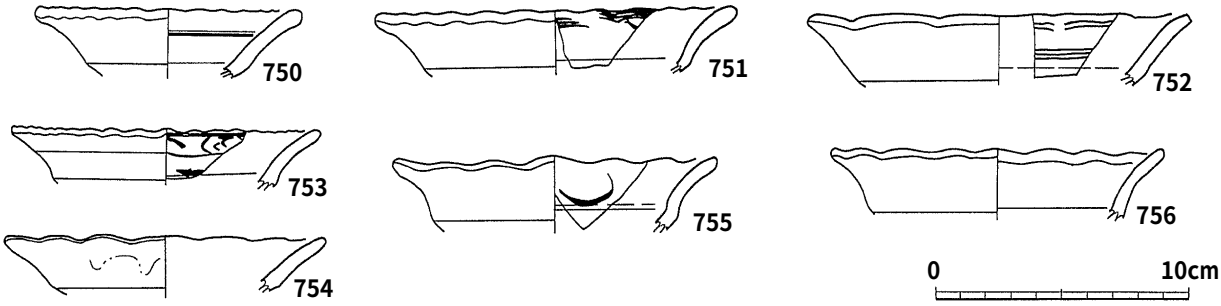
碗の底部は厚みがあり，体部で張り，高台が高い。また，714 は高台の外面を削り，畳付を細くしている。

皿は口縁部が「く」字状に折れて外反する 742～745 と，若干折れて外反する 747～749 がある。また，746 は厚みのある底部で盤の可能性がある。

⑦　青磁（７）（第 120 図 750～756）

ここにまとめた稜花皿は各類のものである。750 は外反する見込みに横位の直線，751・752 は波状線，753・755 は草花文を施している。なお，754・756 は無文である。

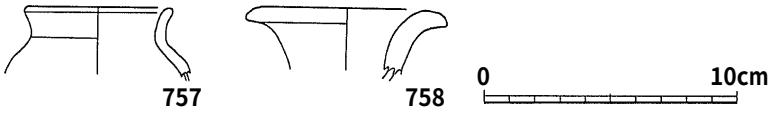
器形は，口唇部が波状で，体部で「く」の字じょうに折れるものである。



第 120 図　青磁（7）

⑧　青磁（８）（第 121 図 757・758）

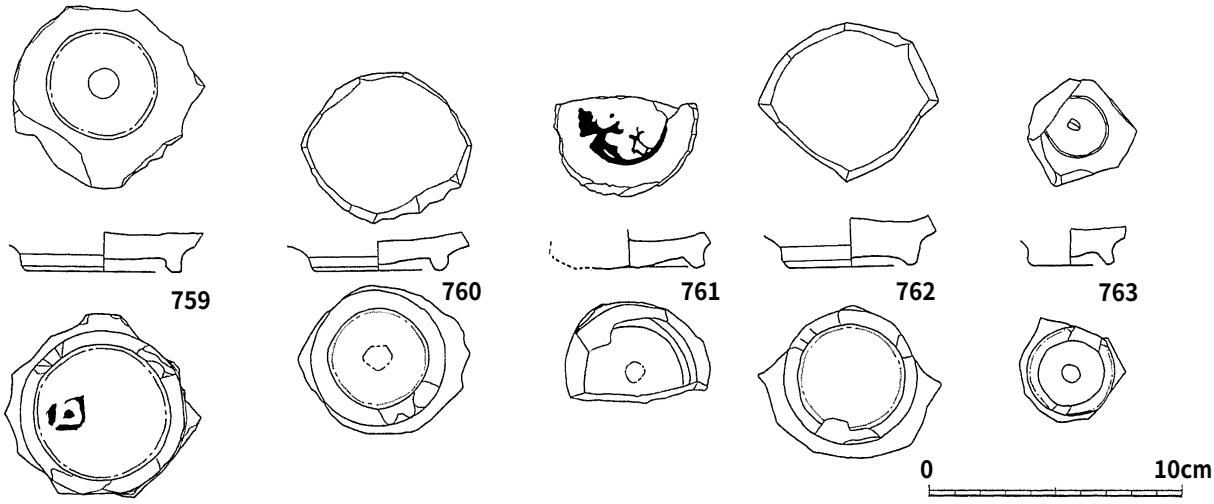
この類は壺である。757 は小壺で頸部から口縁部までの長さが短い。頸部の径は広めで，胴部が丸く張る肩部である。758 は口縁部が長く大きく外反するもので，頸部の径が狭いものである。



第 121 図　青磁（8）

⑨　青磁（９）（第 122 図）

ここは底部の高台や体部を打ち欠いた二次製品「メンコ」である



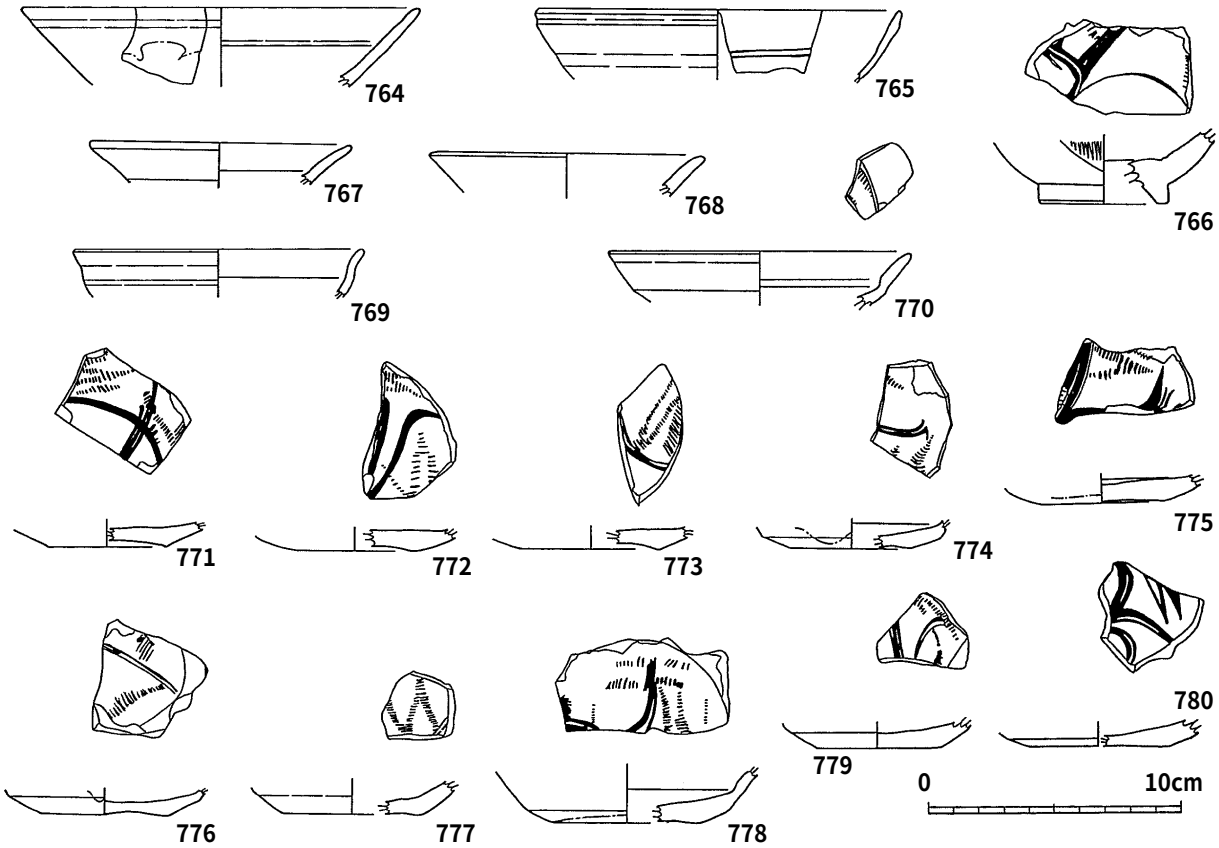
第 122 図　青磁（9）

⑩　**青磁（10）**（第 123 図 764～780）

この類は同安窯系の青磁である。器形は碗と皿がある。

764 は体部から口縁部にかけて直線状に外向する碗である。施釉は見込みが全面で，外面は体部までである。色調は同安窯系独特の暗黄茶褐色である。765 は口縁部で若干厚みがあり，器形は少し内湾する碗である。文様は見込みに２条の線がみられる。766 はやや高い高台と丸味をもつ体部が付く厚手の底部である。見込みには草花文と猫描文がある。外面体部にも猫描文がみられる。767・768 は外反する口縁部で，器形は皿である。文様はない。769 は胴部が張り，頸部で締まり口縁部は外反する皿である。釉色が同安窯系の暗黄茶褐色である。770 は 769 と器形は類似しているが内側は段がみられる皿である。見込みには猫描文がみられる。

771～780 は皿の底部である。この中で，778 が体部まである。底部の作りは上げ底で畳付けは体部の削りのため稜になっている 771～778 と平底の 779・780 がある。見込みの文様は猫描文と曲線を組み合わした草花文である。なお，780 には猫描文はみられない草花文である。

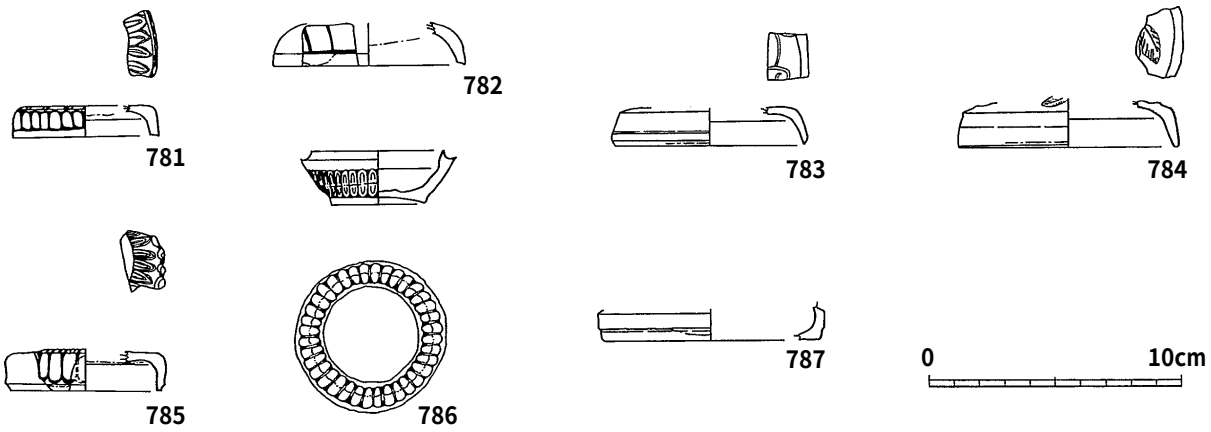


第 123 図　青磁（10）

⑪　**青磁（11）**（第 124 図 781～787）

この類は青白磁の合子である。

781 は合子の蓋で角張っている器形である。上面は二重の稜を幅広の蓮弁状に廻らし，横面は隅丸円を廻らしている。施釉は上面だけで内面はない。782 は合子の蓋で丸味のある器形である。上面は蓮弁が線状に簡略化されたものを施している。施釉は上面だけで内面はない。783 は合子の蓋で角張っている器形である。上面は稜を草花文状に施し，横面は無文である。施釉は上面だけで内



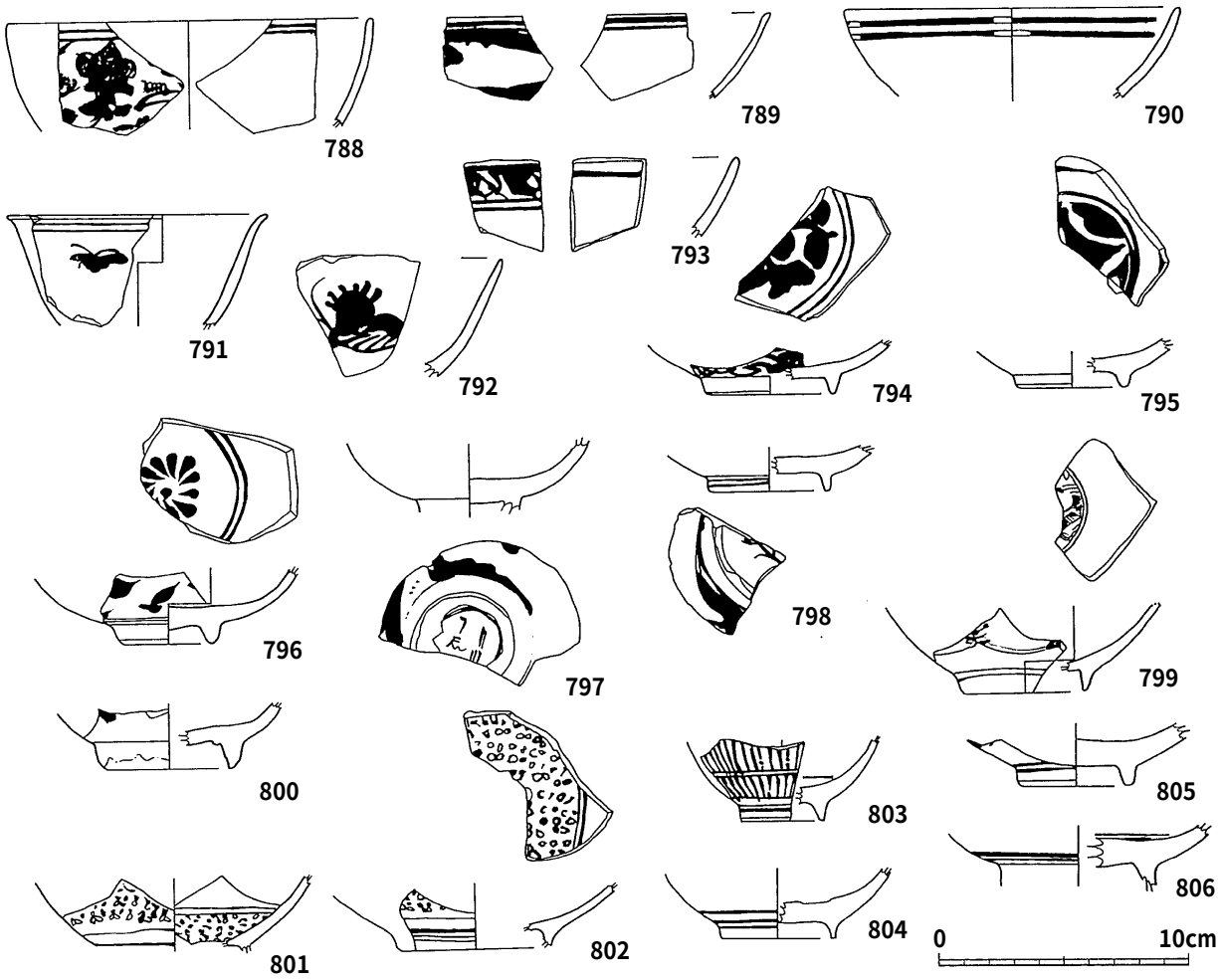
第124図　青磁（11）

面はない。784 は合子の蓋で角張っている器形である。上面は草葉文を施しているが横面は無文である。施釉は上面だけで内面はない。785 は合子の蓋で角張っている器形である。上面は二重の稜を幅広の蓮弁状に廻らし，横面は隅丸円を廻らしている。施釉は上面だけで内面はない。786 は合子の受け身である。受け口は窪んだ段になり合わせるように作られている。底部は上げ底になり，釉は施されていない。横面は隅丸円を廻らし施釉されている。なお，見込みは施釉されていない。787 は合子の受け身である。受け口は狭い段に作られている。施釉は横面の途中までで他は露胎である。

ウ　染付

①　碗（第 125 図 788～806）

788 は口縁部が直行するものである。内面は横位の２本線を口縁部に廻らせ，外面には横位の２本線と牡丹を描いている。789 は口縁部が直行するものである。内面は横位の２本線を口縁部に廻らせ，外面には横位の２本線と岩・雲を描いている。790 は口縁部が直行するものである。内・外面は横位の２本線を口縁部に廻らせている。791 は口縁部が外反するものである。内面は無文で，外面には横位の２本線と蝶を描いている。792 は口縁部が直行するものである。内面は無文で，外面には池と岩苔を描いている。793 は口縁部が直行するものである。内面は横位の１本線を口縁部に廻らせ，外面には横位の２本線と唐草を描いている。794 は底部から体部である。高台は畳付けが尖り，高い。見込みの文様は牡丹で外面は不詳不明である。795 は底部から体部である。高台はやや低く，畳付けは広い。見込みの文様は不詳不明である。796 は底部から丸味のある体部である。高台は畳付けが尖り，高い。見込みの文様は菊で外面は葉文である。797 は底部から体部である。高台は欠損している。外面は池の岩で，裏銘は「大明年製」である。798 は底部から体部である。高台は畳付けが尖り，高い。見込みの文様はなく，外面は池と草である。799 は底部から張りのない体部である。高台は畳付けが尖り，高い。見込みの文様は葉文で外面は梅花である。800 は底部から体部である。高台は畳付けが尖り，高い。外面文様は不詳不明である。801 は底部から体部である。見込み・外面文様は唐草崩文と考えられる。802 は底部から体部である。高台は畳付けが欠損しているが尖っている。見込み・外面文様は唐草崩文と思われる。803 は底部から体部である。高台は畳付けが尖り，高い。見込みの文様は横線で外面は暦文である。804 は底部から体部である。高台は畳付けが尖り，高い。外面の文様は２本の横線である。805 は底部から体部である。高台

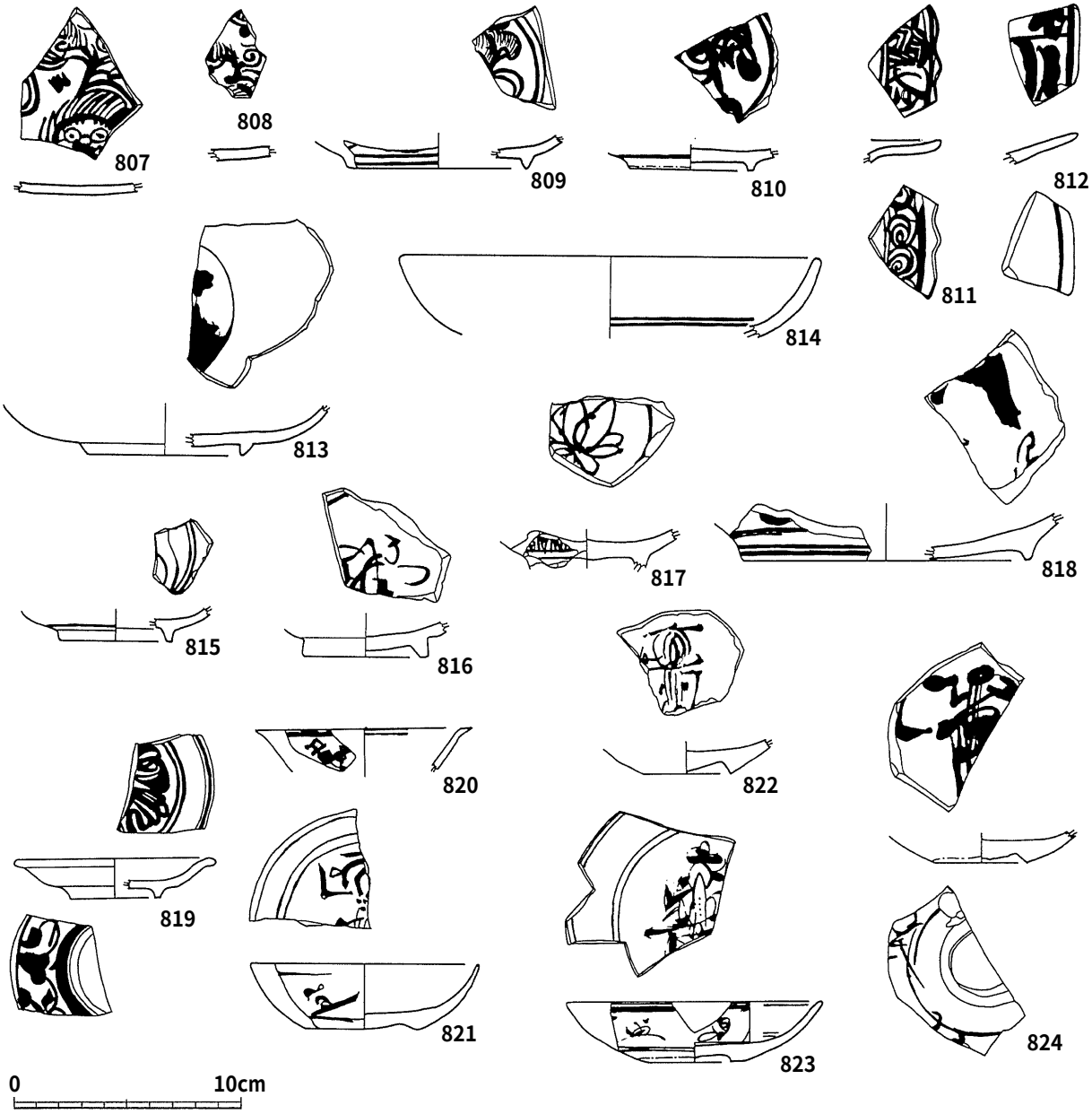


第125図　染付碗

畳付けが尖り，高い。外面の文様は２本の横線である。806 は底部から体部である。高台は畳付けが欠損している。外面の文様は２本の横線である。

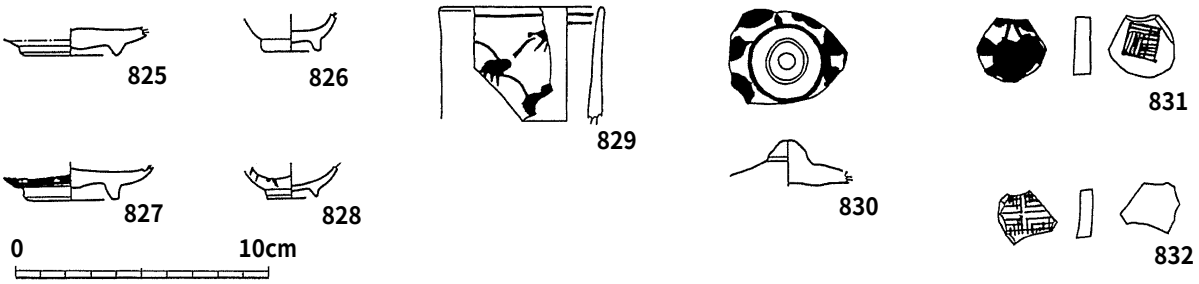
② 皿（第126図807～824）

807は皿の見込み中央部で文様は獅子文の頭部である。808は皿の見込み中央部で文様は獅子文の足部である。809は皿の見込み周縁部で文様は獅子文の後部と２本の線である。器形は低い高台で，畳付けが尖っている。810 は器形が低い高台の底部で，畳付けが尖っている。見込みの文様は草文である。811 は稜花皿である。器形は頸部で大きく曲線状に外反するものである。口縁部の文様は唐草文である。812 は稜花皿である。器形は頸部で大きく直線状に外反するタイプである。口縁部の文様は花文である。813 は器形が低い高台の底部で，畳付けが尖っている。見込みの文様は草花文である。814は器形が体部で丸く立ち上がるもので，見込みに２本の横線がみられる。815は器形が低い高台の底部で，畳付けが平である。見込みの文様は草文と２本の線である。816 は器形が低い高台の底部で，畳付けが平である。見込みの文様は寿文と１本の線である。817 は器形が低い高台の底部である。見込みの文様は菊花文で，体部外面は草文である。818 は高台の低い盤の底部である。見込みの文様は風景画の一部と思われる。外面は３本の横線である。819 は口縁部が大きく外反し，低い高台の底部をもち，畳付けが平である。見込みの文様は菊文と３本の線である。820 は口縁部が端反りになる皿である。外面の文様は横線と梅花である。なお，見込みにも横線がみら



第126図　染付皿

れる。821・822・823・824は碁笥底をもつ皿である。見込みの文様は横線３本と寿文である。



第127図　染付小碗・蓋・メンコ

外面体部は821が草文，823が横線３本と草花文，824が唐草文である。これらの器形は丸味のある体部である。

③　**染付小碗・蓋・二次加工品**（第127図825～832）

小碗は825から829である。この中で底部が825～828で，体部が829である。825・828は畳付けが尖り，826・827は平である。文様は827・828にあるが詳細不明である。829は体部が円筒状に立ち上がる器形のものである。文様は残雪と竹である。なお，口縁部内面に２本の横線，外面に１本の横線がある。

830は蓋である。摘部は円錐に尖る。文様は葉文を廻らしている。

831・832は御弾状に二次加工したものである。831は底部の中央部で，見込みの草花文と裏銘の福がみられる。832は体部で二重四角を描いた文がみられる。

エ　陶器

①　**貿易陶器**（第128図833～862）

この類は中国陶器である。全体で４種に分けられた。

第１種は833～836の緑釉陶器である。833は壺の口縁部で釉の色調は青黒色である。釉は両面にかけている。834は壺の肩部で，外面にかけた釉の色調は濃緑色である。沈線もみられる。835は壺の肩部で，外面にかけた釉の色調は緑色である。沈線もみられる。836は「T」字形の口縁部で，外面にかけた釉の色調は青緑色である。器形は小鉢である。

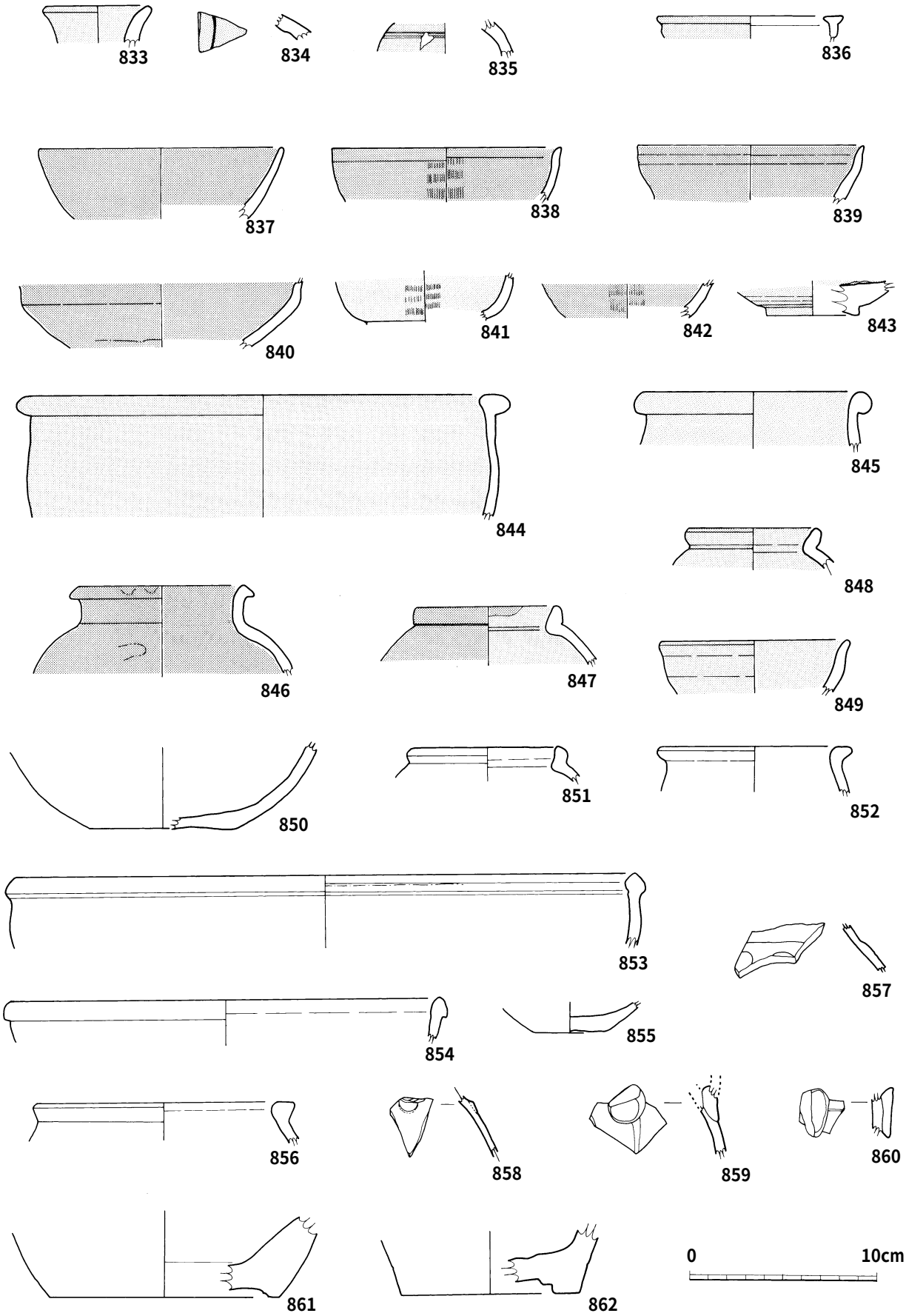
第２種は837～843の天目碗である。837は口縁部が内湾するもので黒茶褐色の釉が両面にかかっている。838は口縁部が直行するもので黒茶褐色の釉が両面にかかっている。天目特有の黄茶色の縦筋がみられる。839は口縁部が体部で直行するもので，黒茶褐色の釉が両面にかかっている。840は口縁部が体部で直行するもので，黒茶褐色の釉が両面にかかっている。841は底部から体部にかけての立ち上がりが丸味をもつ碗である。842は底部から体部にかけての立ち上がりが直線をもつ碗である。843は低い高台をもつ底部で，畳付けは平である。見込み，外面とも黒茶褐色の釉がかかっている。

第３種は844～849で，茶褐色をした褐釉のかかった陶器である。

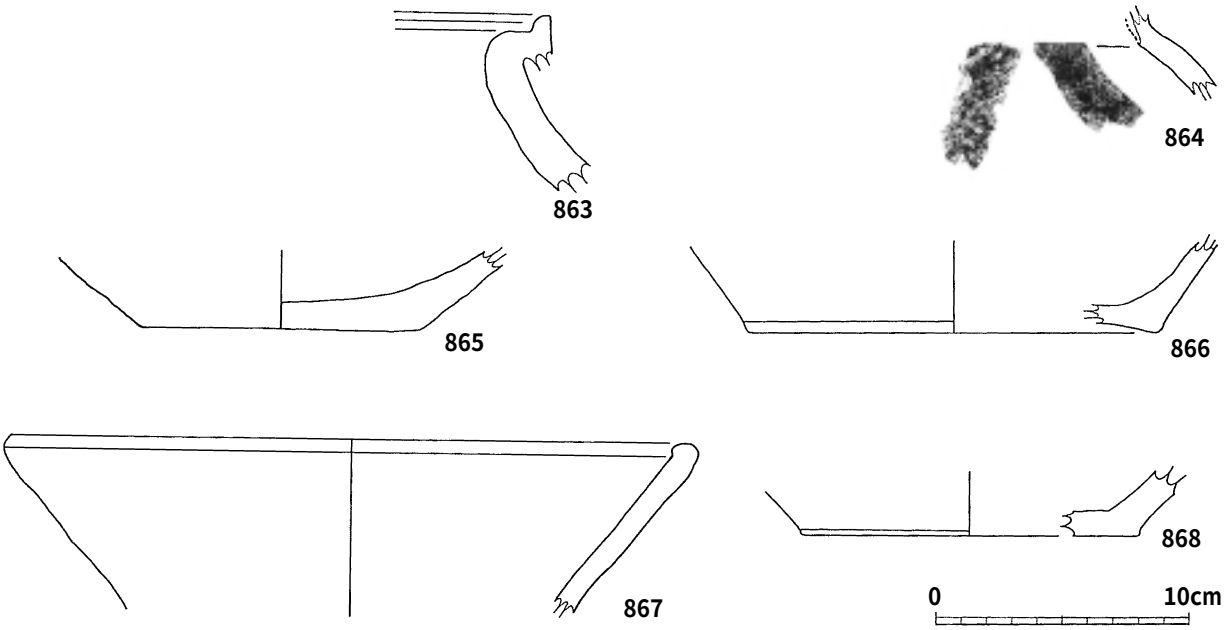
844は口縁部が玉縁に作られ，体部が直行する器形の大鉢である。釉は両面に褐釉がかけてある。845は口縁部が玉縁に作られ，頸部が直行する器形の壺である。釉は両面に褐釉がかけてある。846は口縁部が断面三角に作られ，頸部が直行する器形の壺である。肩部は球状になっている。釉は両面に褐釉がかけてある。847は口唇部が尖状に作られ，頸部が直行する器形の壺である。肩部は撫で肩の丸味をもつ。釉は両面に褐釉がかけてある。848は口唇部が平に作られ，頸部が外向する器形の壺である。肩部は球状を呈する。釉は両面に褐釉がかけてある。849は碗である。口縁部は２段の曲線である。釉は両面にみられる。

第４種は850～862の灰釉のかかったものである。850は鉢で直行する体部と平底をもつ底部である。851は口縁部の立ち上がりが短く直行する壺の器形である。852は平坦口唇部を持つ内向する壺の口縁部である。853は玉縁状の口縁部を持ち，直行する体部を持つ大鉢である。854は玉縁状の口縁部を持ち，外向する体部を持つ鉢である。855は坏の底部である。

856～861は四耳壺の部位である。856は平坦口唇部をもつ内向する口縁部である。857～860は


833
834
835
836
837
838
839
840
841
842
843
844
845
846
847
848
849
850
851
852
853
854
855
856
857
858
859
860
861
862
0
10cm

第128図　貿易陶器



第129図　常滑

四耳壺の取っ手部である。橋状取っ手の付け根で円盤状を呈する。861 は低い高台の底部で立ち上がりは丸味をもつ。862 は高い高台の底部で直行の立ち上がりをもつ。

②　常滑（第 129 図 863～868）

863 は甕の口縁部である。断面は鍔状の形態で「L」字状に曲がっている。器形は肩部に向かって拡がっている。色調は灰茶褐色で灰釉がみられる。864 は壺の肩部と思われる。色調は灰茶褐色で灰釉がみられる。865 は甕の底部で平底である。色調は灰茶褐色で灰釉がみられる。866 は甕の底部で上げ底である。色調は灰茶褐色で灰釉がみられる。867 は捏鉢である。体部は大きく外向し，口縁部は丸味を持ちながら立っている。色調は灰茶褐色で灰釉がみられる。868 は擂鉢の底部で平底である。内面に櫛歯状沈線がみられる。色調は灰茶褐色で灰釉がみられる。

オ　中世須恵器（第 130・131 図 869～905）

この類は，樺万丈系と東播磨系と下り山系が出土している。

樺万丈系は 869～888 である。これらは全体的に焼成がやや悪く，器面に剥がれた部分がみられる。色調は灰茶色である。器種は甕と捏鉢と摺鉢がみられる。

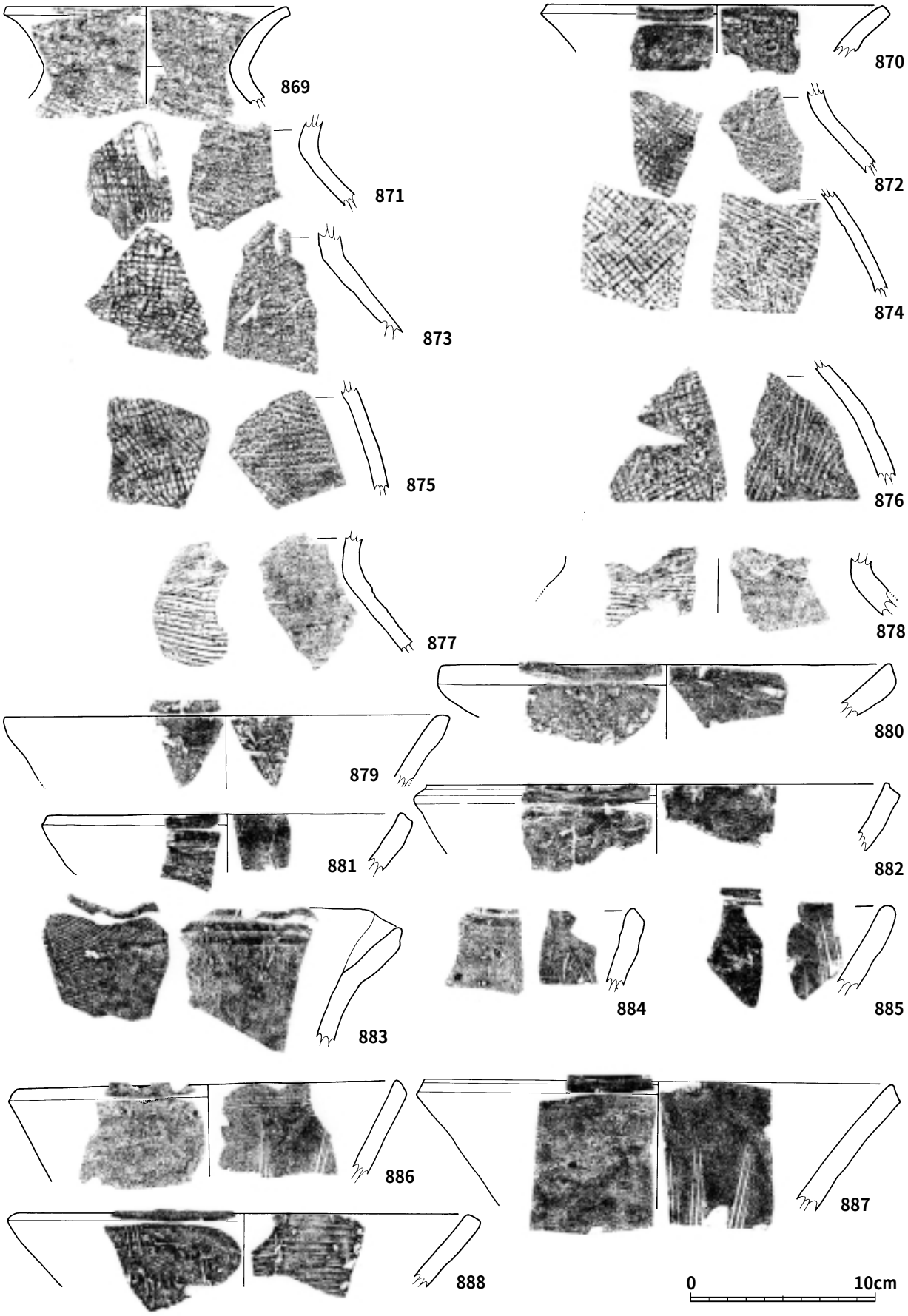
869～878 が叩き目のある甕である。869・870 は大きく開く口縁部である。871～873・877・878 は締まる頸部である。この中の後の２つは焼成が良い。874～876 は胴部である。

879～883 が捏鉢である。器形は体部が大きく外向し，883 でみられるように注ぎ口がある。口唇部は平坦が 883 で他は尖りの断面である。

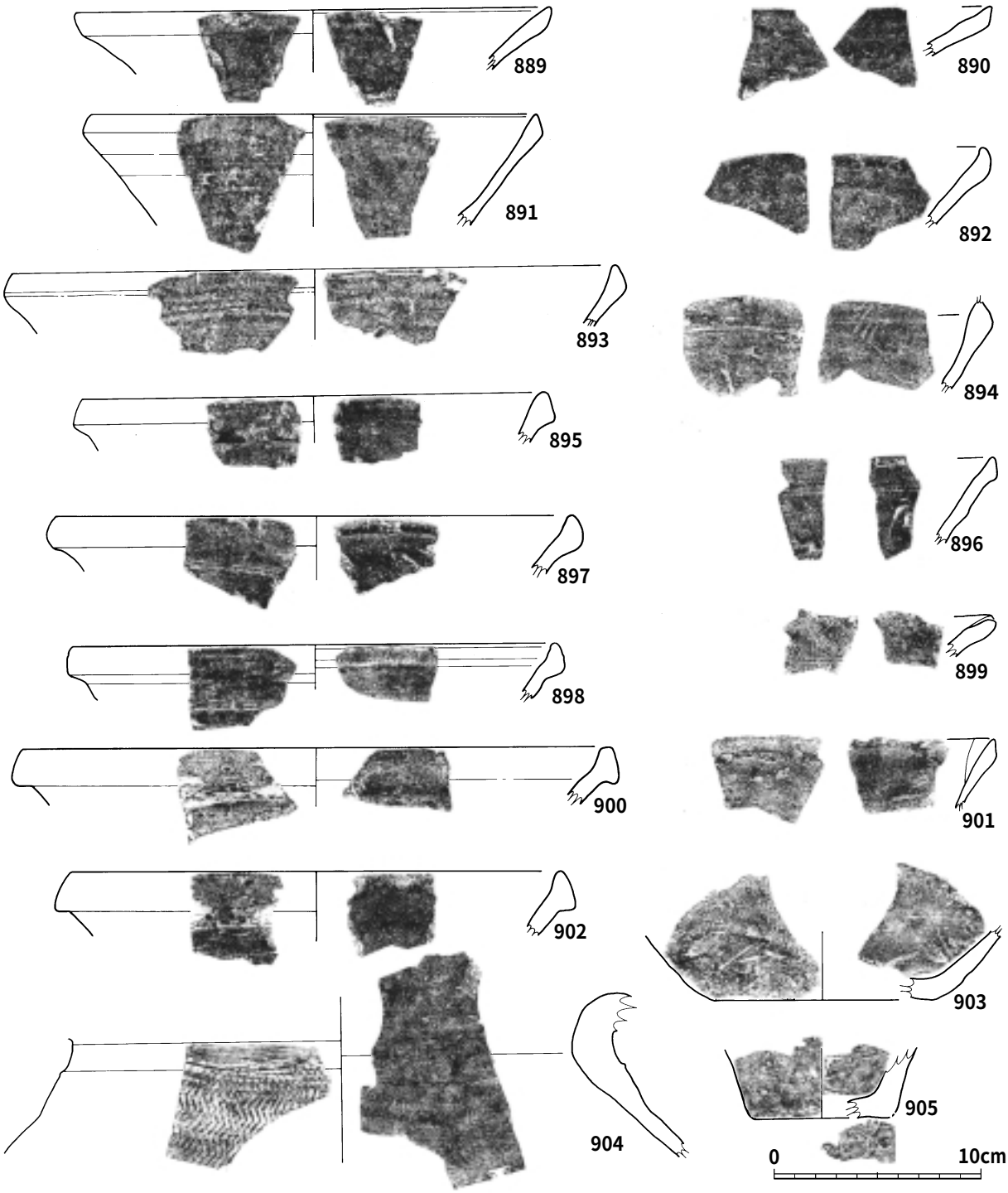
884 から 888 が擂鉢である。器形は体部が大きく外向し，内面に櫛歯状沈線がみられる。

889～903 は東播磨系の捏鉢である。全体的に色調は青灰色で灰釉がみられる。器形は大きく外向し，口縁部は薄手で断面が三角形になるもの（889・894 等）と垂れ下がるもの（900）が出土している。899・901 は注ぎ口である。903 は平底の底部である。

904・905 は下り山系と思われる。青灰色が強く，焼きが良い。904 は甕の口・頸部である。器形は頸部が締まり口縁部は大きく開く。外面に叩きがみられる。905 は壺の底部で，平底である。



第130図　中世須恵器（1）

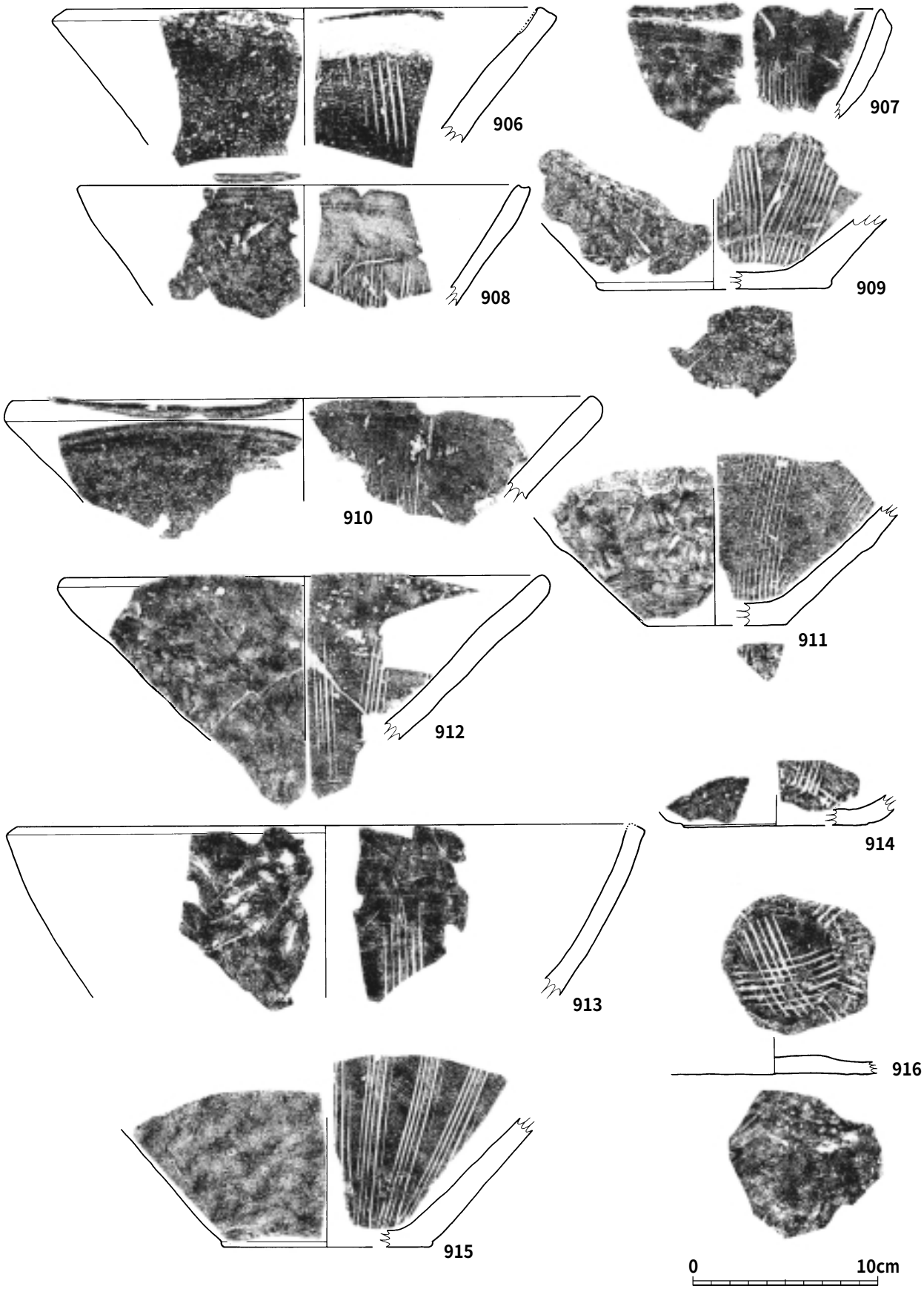


第 131 図　中世須恵器（2）

カ　瓦器質土器（第 132・133・134 図 906～931）

この類は瓦器質の土器で，擂鉢・捏鉢・火舎・羽釜・碗が出土している。

擂鉢は 906～919 である。器形は外向した胴部である。口縁部は中世須恵器と類似しているが厚みのある口縁部はない。906・907・913 は口唇部を斜めに切り口縁部は角張っている。櫛歯状沈線は間隔をあけて施している。908 は口唇部を平坦に切り口縁部は角張っている。櫛歯状沈線は間隔を詰めて施している。910・912・917・918 は口唇部を斜めに切り口縁部は丸まっている。櫛

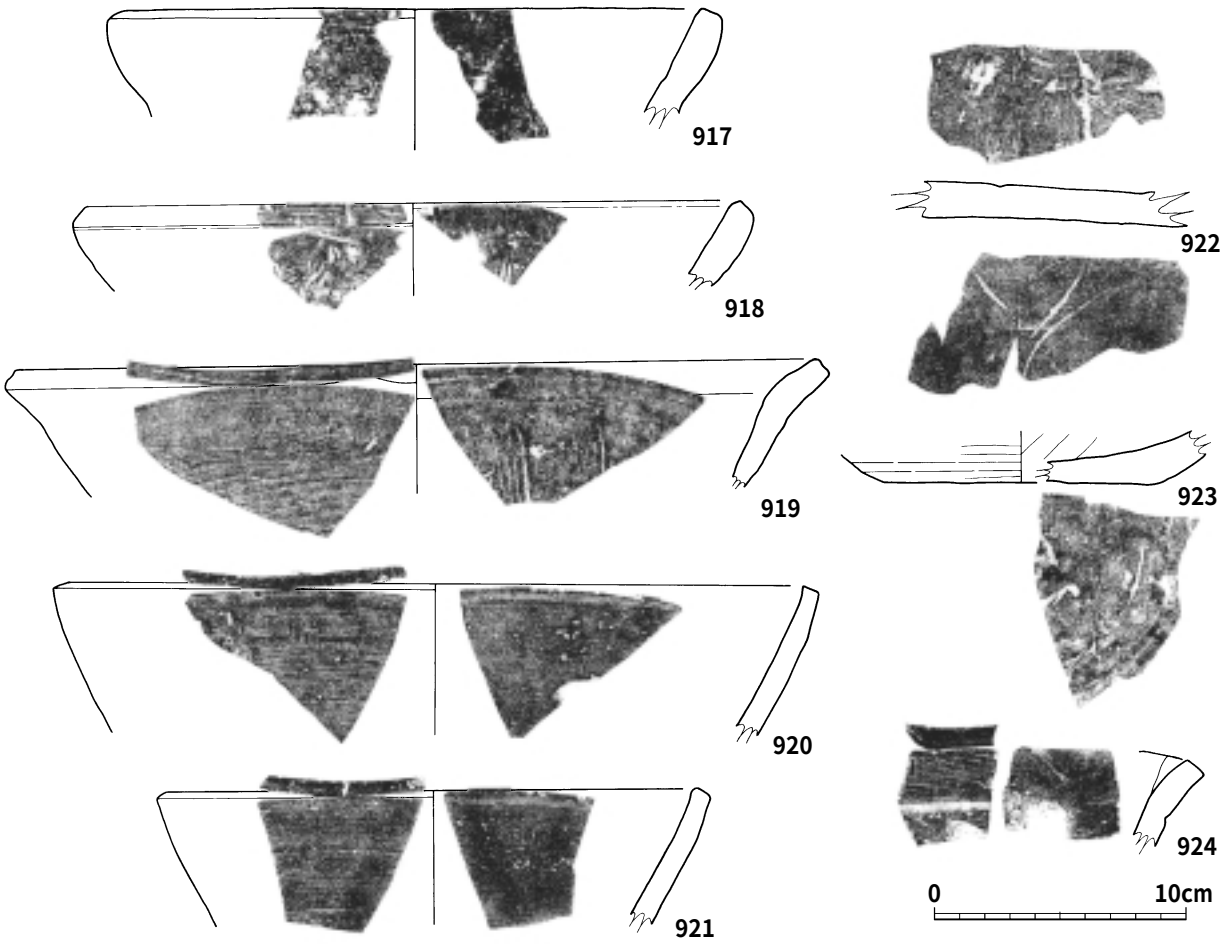


第132図　瓦器質土器（1）

歯状沈線は間隔をあけて施している。909・911・914・915・916 は平底であるが 914 だけが角が丸味をもち他は角張っている。916 は底部の見込みで，櫛歯状沈線を十字に施している。これらの櫛歯状沈線は５本（912・915），７本（906・914・916），10 本（907・909・911）がある。なお，919 は他のものと器形が異なり，口縁部で外反する。胎土は灰茶褐色で焼成もやや硬く中世須恵器に類しているが，ここでは瓦器質が強いのでこの類に入れている。

捏鉢は 920～924 である。920・921 は口唇部を斜めに切り，口縁部は角張っている。胴部の立ち上がりは若干丸味をもち外向している。調整は内面を横位に丁寧なヘラナデである。922・923 は底部で平底である。底部の外面はヘラ切り離しの跡が残っている。内面調整は良い。924 は片口の注口である。内面調整は良い。

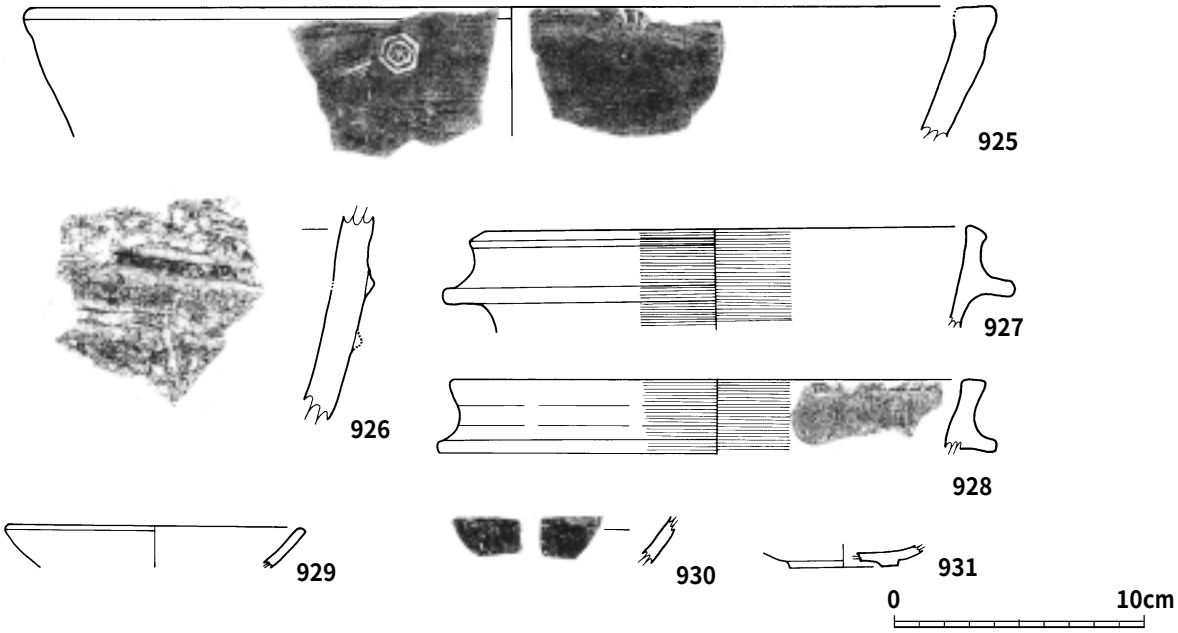
火舎は 925・926 である。925 は平坦な広い口唇部を作りやや外向する口縁部をもつ瓦器質土器である。色調は明茶褐色である。器面は丁寧なヨコナデで，外面の上部には２重６角形の中に米印の刻印を施している。焼成は良い。926 は器形が若干外開きで，円筒状である。外面には２本の突帯を施している。器面は火使用跡のため剥げて凹凸がある。焼成は良くない。色調は二次使用のため黒色斑点がみられる。よって，ここでは火舎の中に入れた。



第 133 図　瓦器質土器（2）

927・928 は瓦器質土器の羽釜である。927 は口唇部が外側に切られ，口縁部が直線でやや外向する器形である。外面には水平に近い鍔が巻く。器面調整はロクロ調整痕が横位にみられる。928 は口唇部が水平に切られ，口縁部が直線で外向する器形である。外面には下がり気味の鍔が巻く。器面調整はロクロ調整痕が横位にみられる。

929～931 は瓦器質土器の碗である。929 は体部から口縁部の立ち上がりは直線で大きく開く器形である。器の厚さは薄手で，色調は青灰色である。なお，器面調整はロクロ調整痕が残らない。
930 は体部である。口唇部は欠損しているが 929 と同じ器形と調整である。931 は瓦器質土器の底部である。低い高台をもち畳付けは平坦に作っている。体部の立ち上がりは外に張り，丸味がある。器の厚さは薄手で，色調は青灰色である。なお，見込みはロクロ調整痕が残らないが丁寧な仕上げである。



第 134 図　瓦器質土器（3）

キ　土師器

①　土師器埦（第 135 図 932～962）

この類は内赤が 932・933・936・959・961・962 で他は無色の土師器埦である。932～936 は半球状の埦で，体部から口縁部である。934～936 が口縁部で外反する。

937～962 は底部である。937～951 は高台が長く高い。952・954～956・958～962 は高台が短く低い。

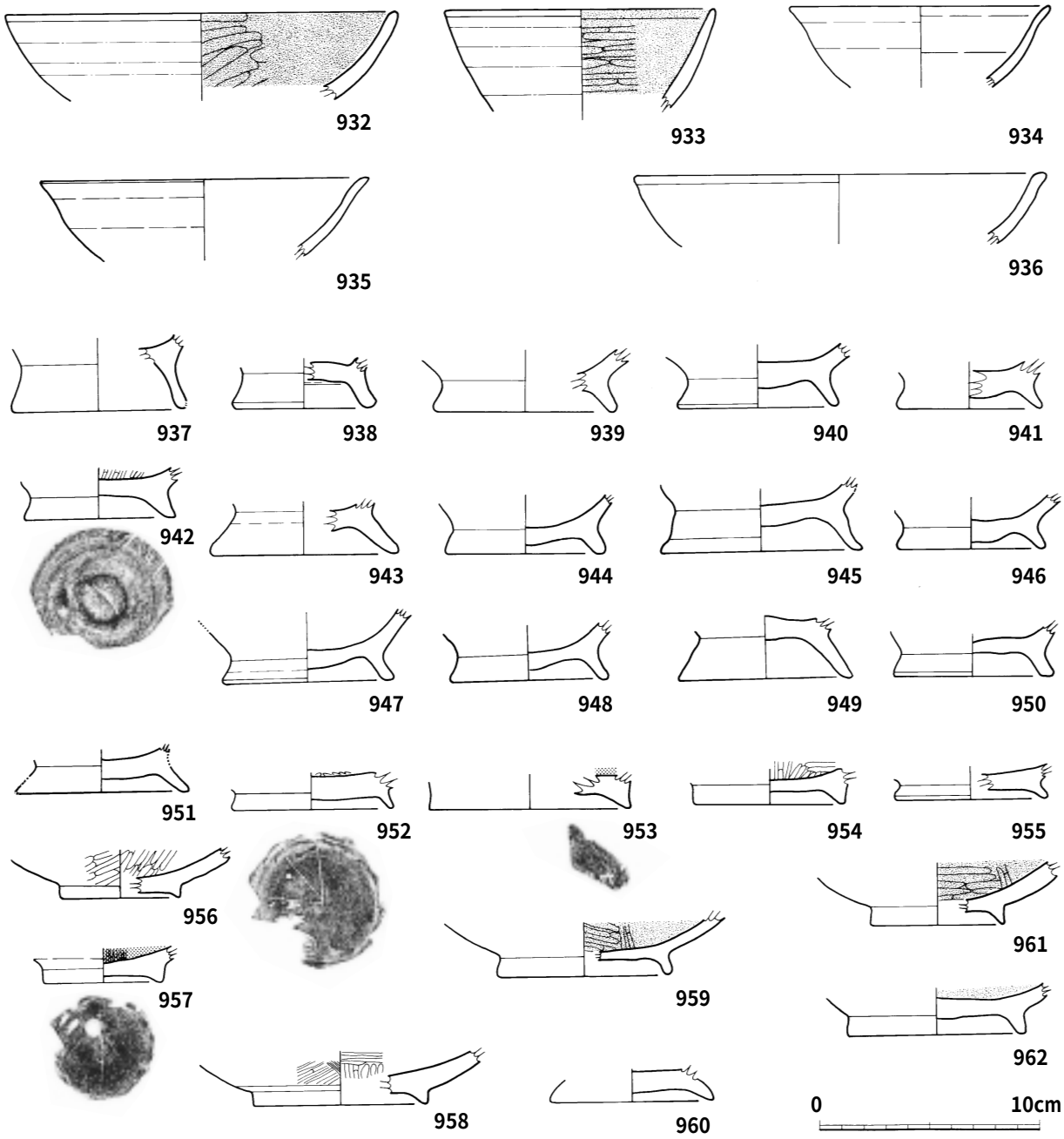
内面の研磨調整があるのは 932・933・942・952・953・954・956・967・959・961 である。この研磨調整は 952 が広めのヘラで，他は細めのヘラである。調整方法は見込みの中央を縦位と横位に組み合わして，体部は横位に施している。

底部の裏には二次線刻があるものもある。942 は中央部「一」があり，952 は直角の中に 30°位に斜線を入れている。957 は葉脈状に線がみられる。

②　黒色土器Ａ埦（第 135～138 図 953・957・963～1068）

この類は内側を黒色研磨している埦で，内黒土師とも言われる。963～990 は口縁・体部である。

これらの器形は 969 でみるように基本的に半球状である。この中で，直線的なものは 963・964 で，口縁部が外反するのは 982・984・985～987 である。また，浅手は 989・990 である。



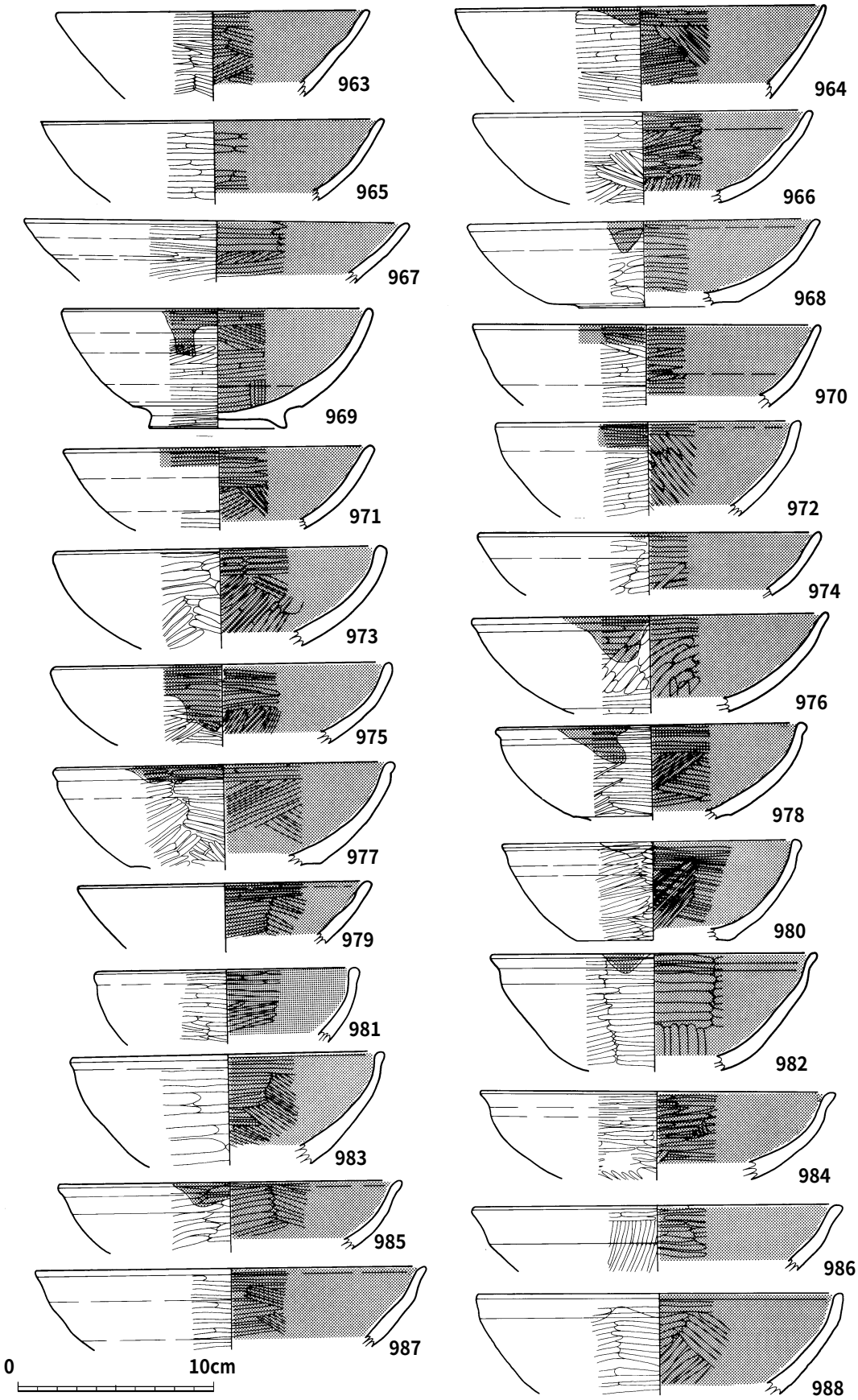
第135図　土師器椀

口径は 16 cm位が多く，大きなものは 20 cmを越える 967・987 がある。黒色は内側が主であるが 968・975・976・985・989 でみるように外面にも及んでいるものもある。

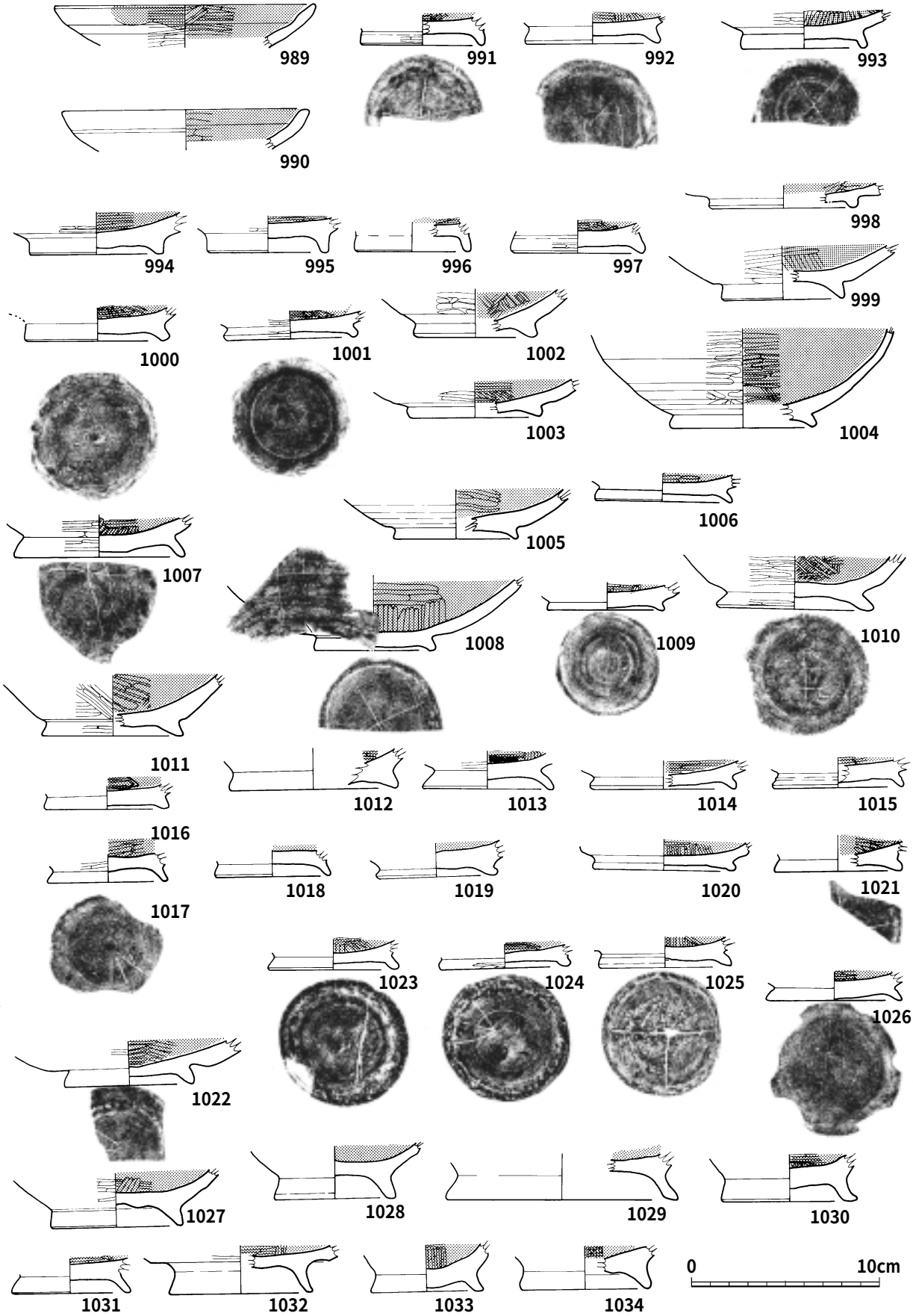
器面調整は内外面丁寧な研磨が施されている。研磨の方法は，見込みが縦横の研磨で体部外面が斜位で，口縁部は横位である。これは，水漏れ防止のために施したと思われる。

991～1068 は体部・底部である。器形は半球状の中央部に高台は付いている状態である。高台は低くて立っているもの（991～996），低くて開いているもの（997～1026），高いもの（1027～1053），高台が極端に細く尖り低いもの（1054～1068）がある。

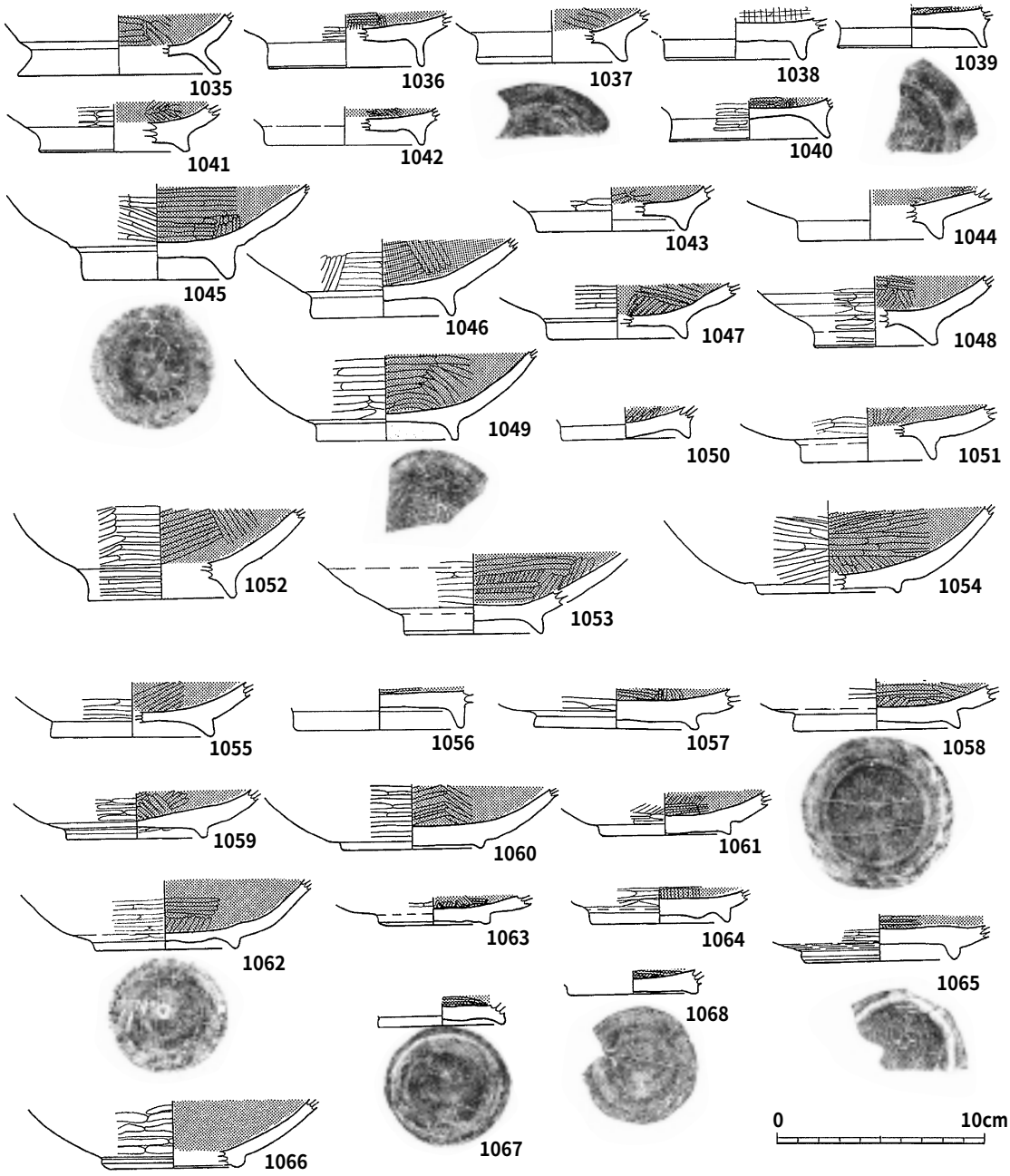
研磨調整は，見込み中央が縦位と横位を組み合わせ，退部内面は横位で丁寧に研磨している。これは，水漏れ防止に施したと思われる。



第136図　黒色土器A埦（1）



第137図　黒色土器A埦（2）



第138図　黒色土器A椀（3）

底部裏面に二次線刻があるものが多数あり，次のようにみられる。

第40表　二次線刻土器

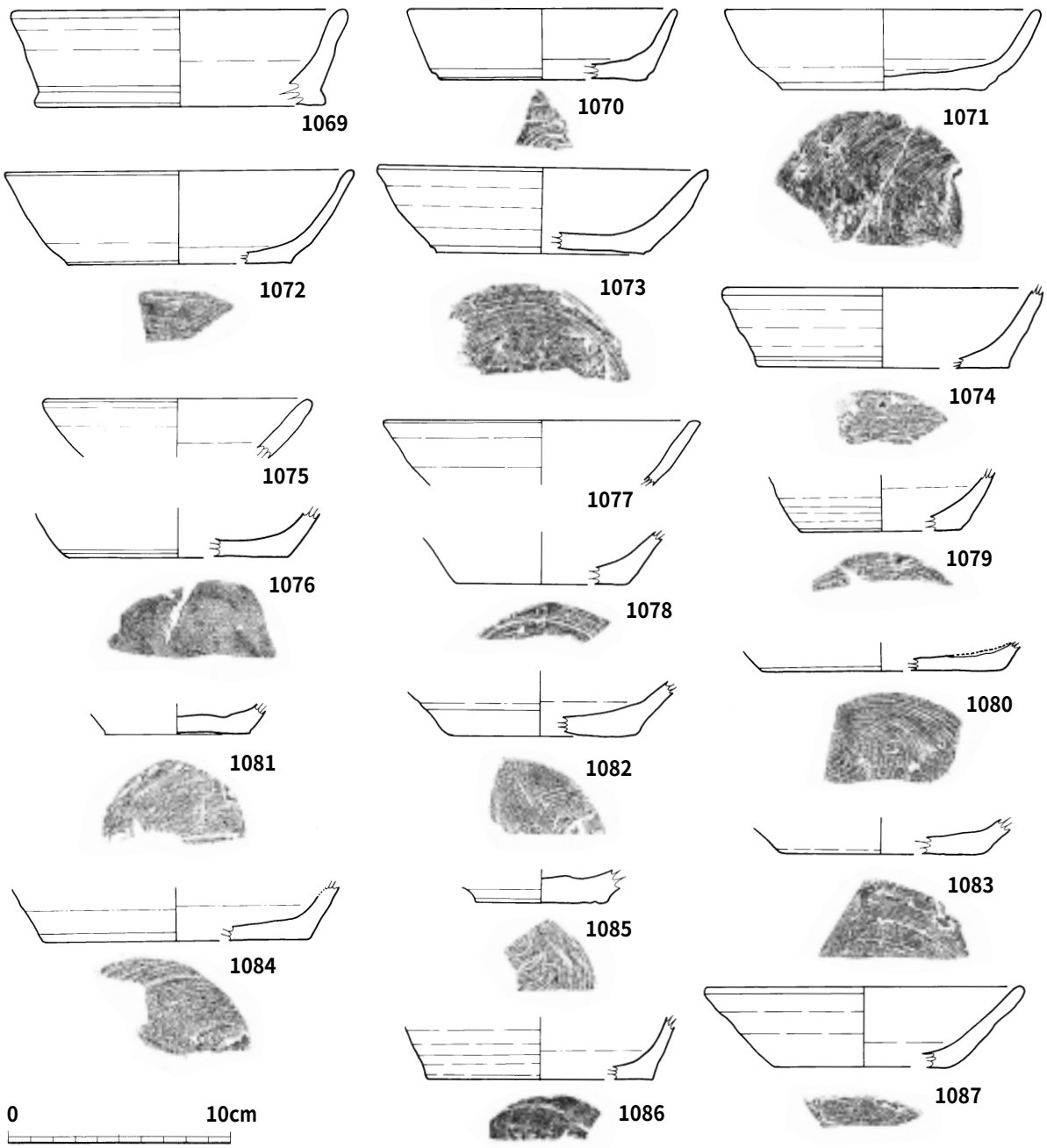
No.	二次線刻	No.	二次線刻	No.	二次線刻
991	「く」の字線と縦線の組み合わせ	1017	三角形の一角に斜線	1039	曲線と直線の組み合わせ
992	×に二の組み合わせ	1021	十か	1045	「わか」に読める線
993	×に斜線の組み合わせ	1022	三角形の一角に斜線	1049	２本の曲線
1001	○に一の組み合わせ	1023	１本の直線	1058	斜線と横線
1007	二と一の組み合わせ	1024	三角形の一角に斜線	1062	縦位と横位の網目
1008	二と一の組み合わせ	1025	１本の直線と縦線の組み合わせ	1065	三角形の一角
1009	十	1026	１本の直線	1067	直角に斜線
1010	二と一の組み合わせ	1037	文字らしき曲線	1068	×に一の組み合わせ

③　坏（第 139～142 図 1069～1137）

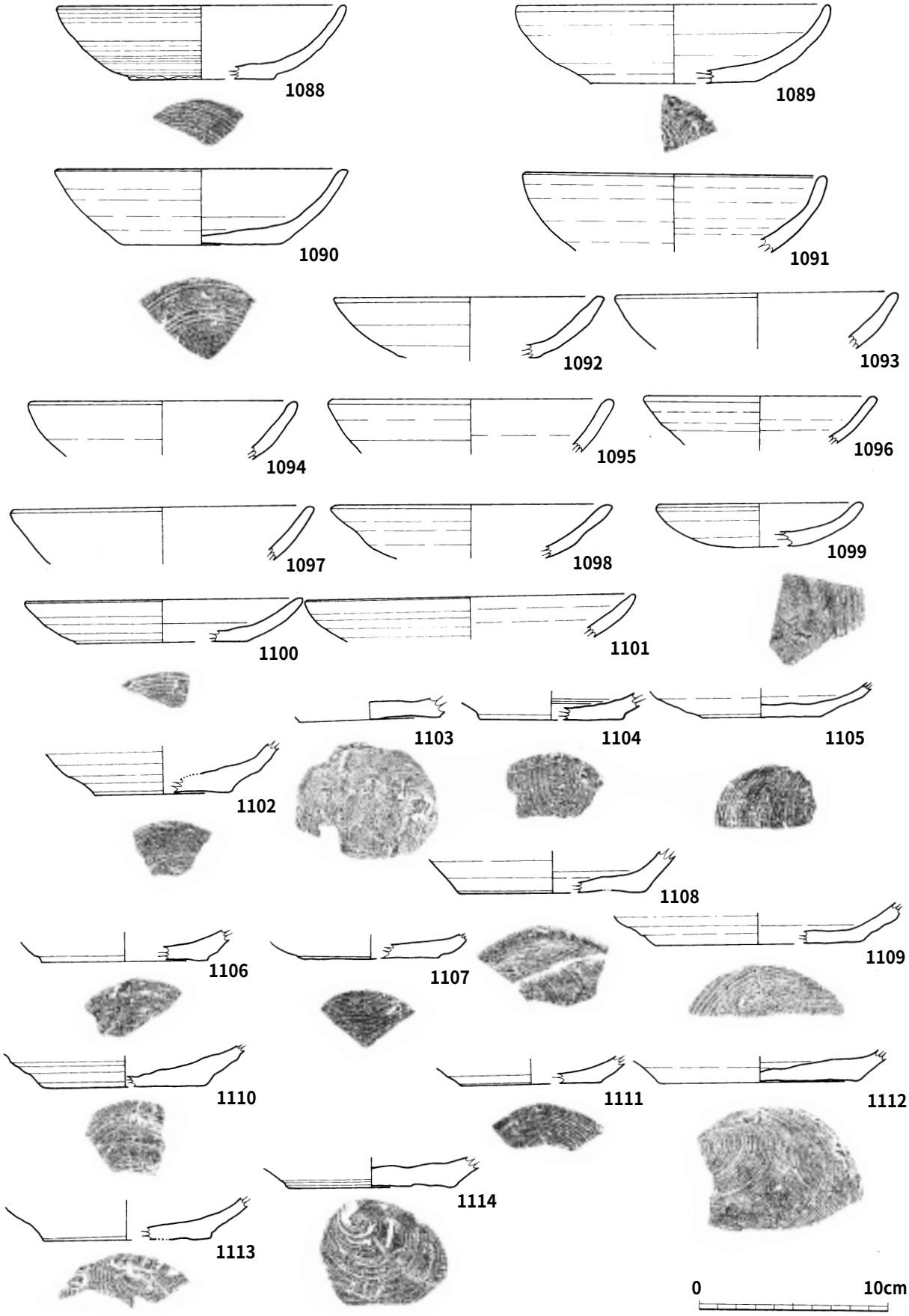
坏は大きく３つに分けられる。それは 1069～1087 と 1088～1114 と 1115～1137 である。

1069～1087 は体部・口縁部が直線的で底部が厚いグループである。底部は平底で糸切り離しの跡が残っている。このグループで特徴的は 1069・1072・1074・1084 でみられるように底部の端がはみ出し，底部から直ぐか短い間隔で立ち上がる器形である。器面は水挽きがみられる。

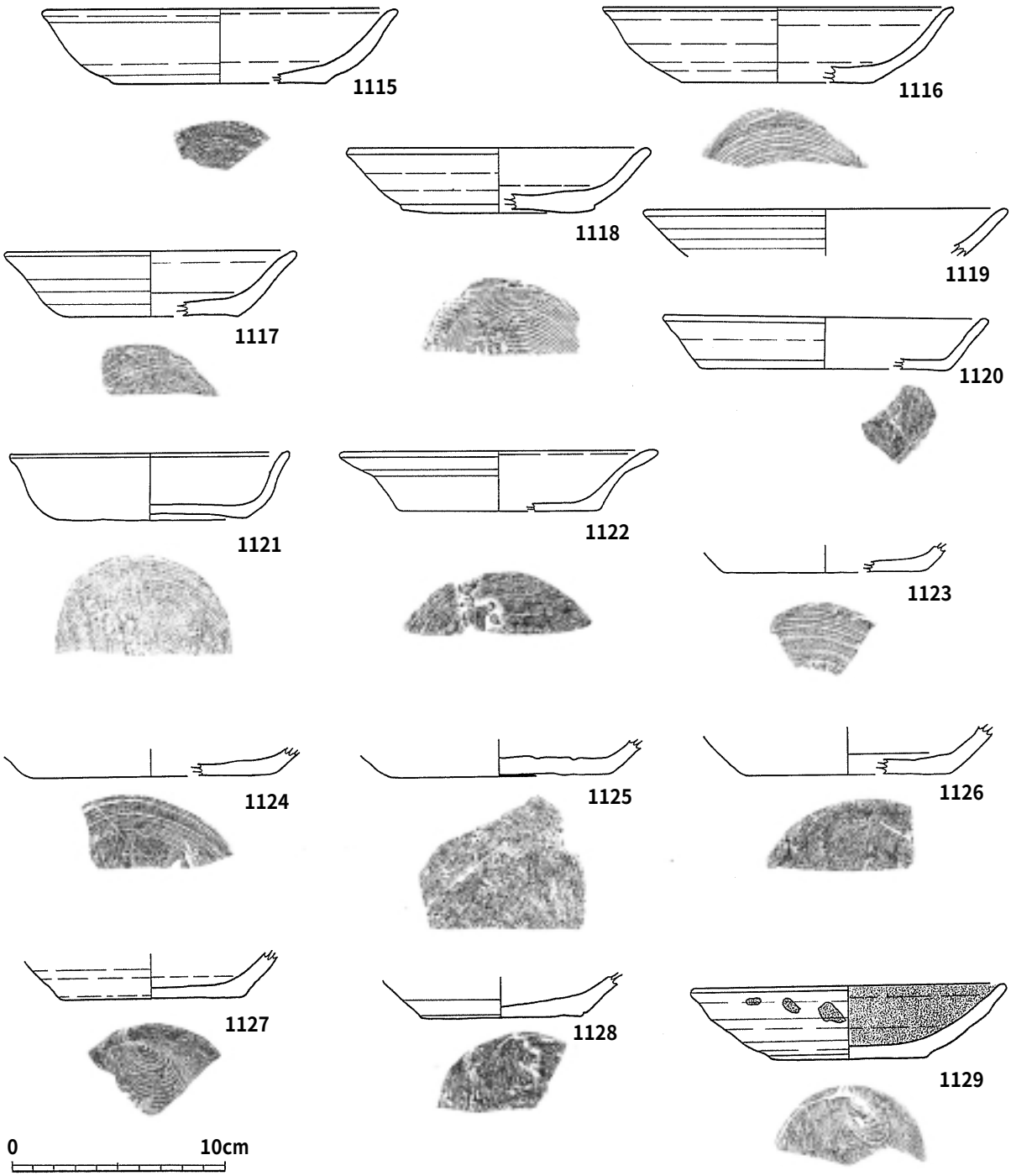
1088～1114 は前のグループの底部と類似し，厚手の底部である。体部・口縁部は半球状になり，底部からの立ち上がりは丸味をもつ器形である。底部の切り離し方法は糸切り離しである。器面は



第 139 図　土師器坏（1）


1088
1089
1090
1091
1092
1093
1094
1095
1096
1097
1098
1099
1100
1101
1102
1103
1104
1105
1106
1107
1108
1109
1110
1111
1112
1113
1114
0
10cm

第140図　土師器坏（2）

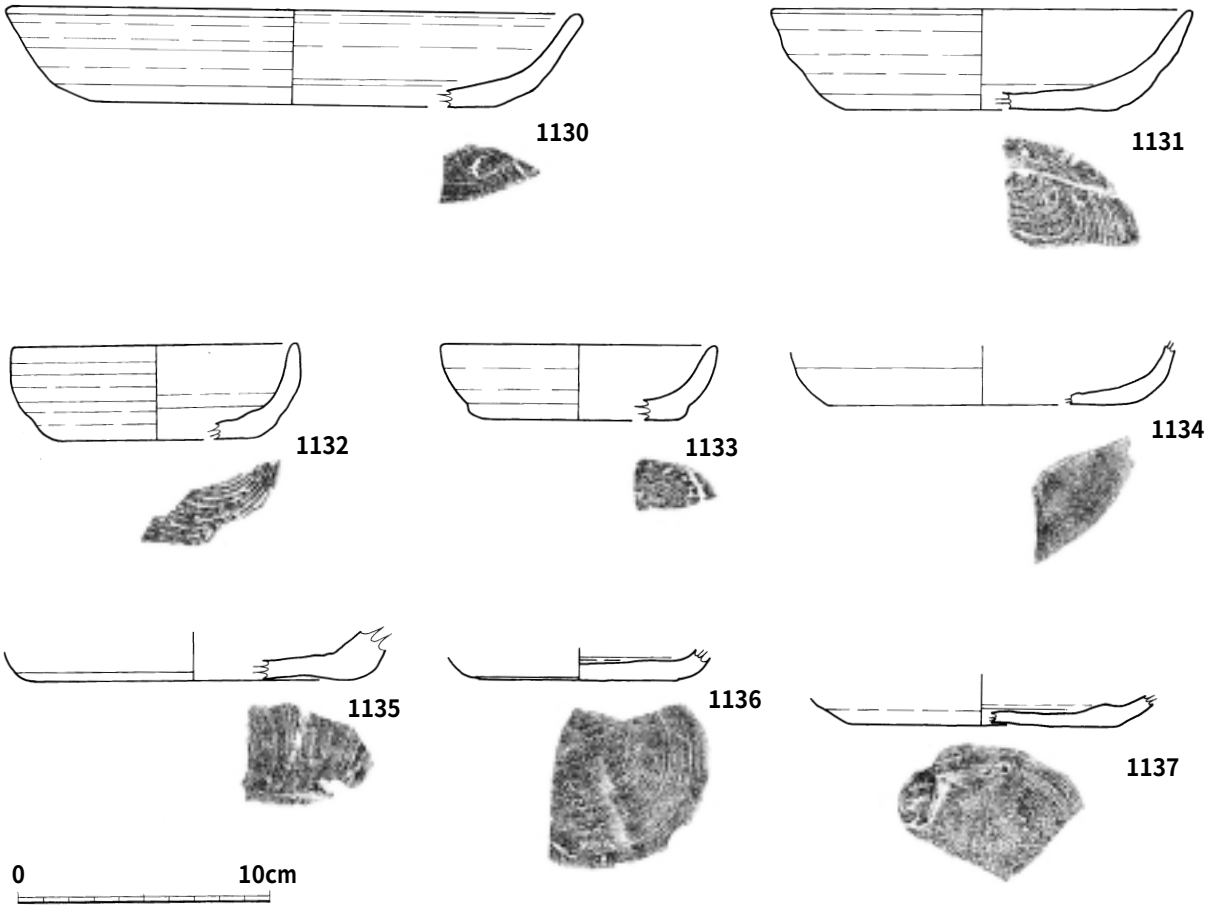


第141図　土師器坏（3）

水挽きがみられる。

1115～1137は底部に厚みがないグループである。体部・口縁部は球状になるもの（1115・1116・1129）と外反するもの（1117～1122）がみられる。この中の1122でみられるように大きく外反するものがある。これらは糸切り離しで，器面には水挽きがみられる。

1129は朱塗りの坏である。朱は見込みには全て塗られているが，外面にも所々あり全面の可能性がある。そのため特殊なものと考えられる。



第 142 図　土師器坏（4）

④　**小皿**（第 143～144 図 1138～1218）

この類は 1138～1218 である。

土師器小皿

このグループは 1138～1179 と 1180～1218 に分けられる。

1138～1179 は底部が厚いもの（1153～1170 等）と体部・口縁部の立ち上がりが直に立つもの（1138～1145・1148 等）である。この中で口縁部が寝ているものは底部の厚いものの中にいれている。口径は８～9 ㎝で高さは２～1.5 ㎝である。底部の切り離しは糸切り離しで，体部・口縁部は水挽きがみられる。

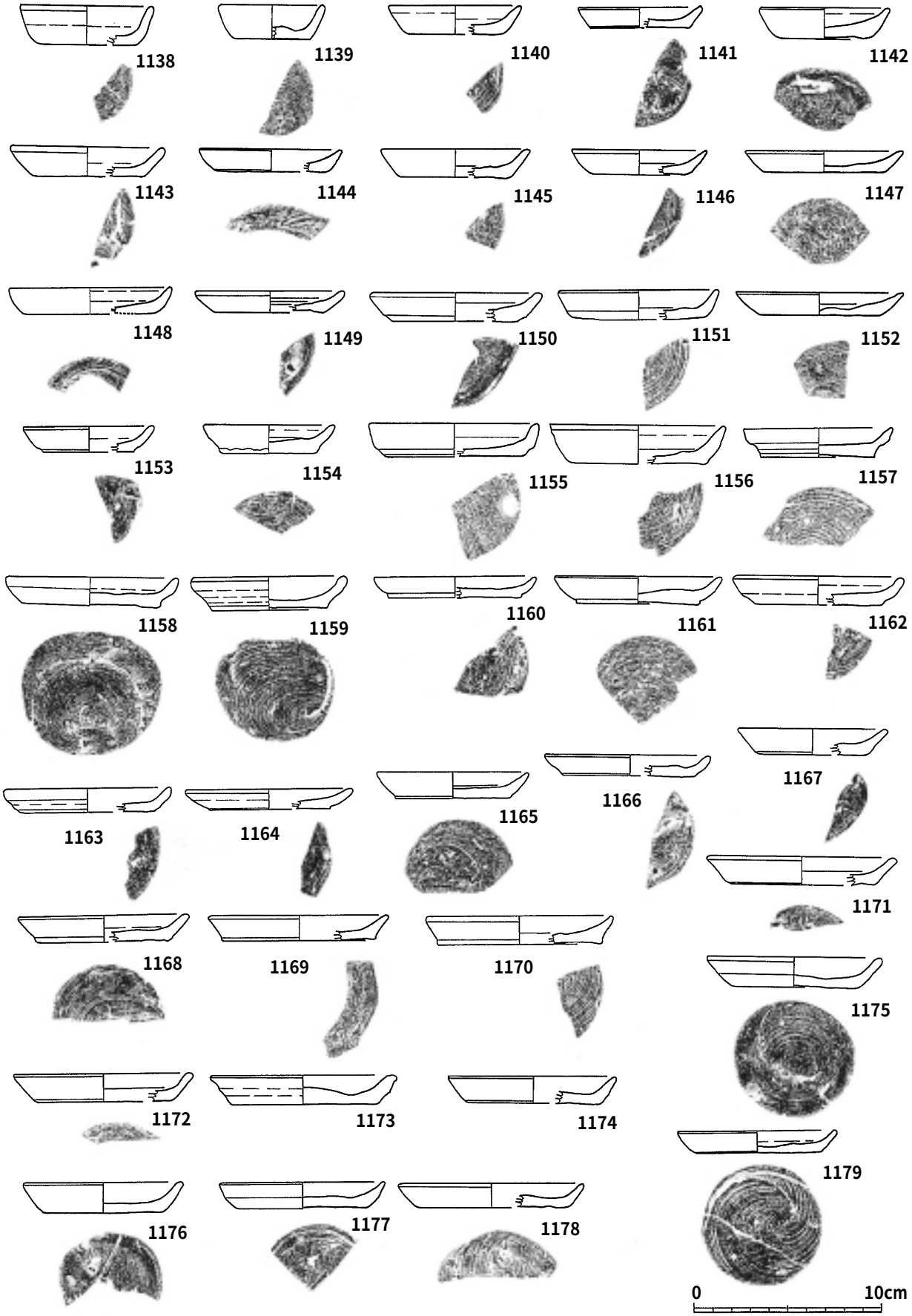
1180～1218 は底部が薄く，体部・口縁部への立ち上がりは丸味を持って立ち上がる器形である。基本的に体部・口縁部は寝ている。口径は８～9 ㎝で高さは２～1.5 ㎝のものが多いが 11 ㎝のものもあり全体的に大きい。底部の切り離しは糸切り離しで，体部・口縁部は水挽きがみられる。

⑤　**黒色土器Ｂ**（第 145 図 1219～1239）

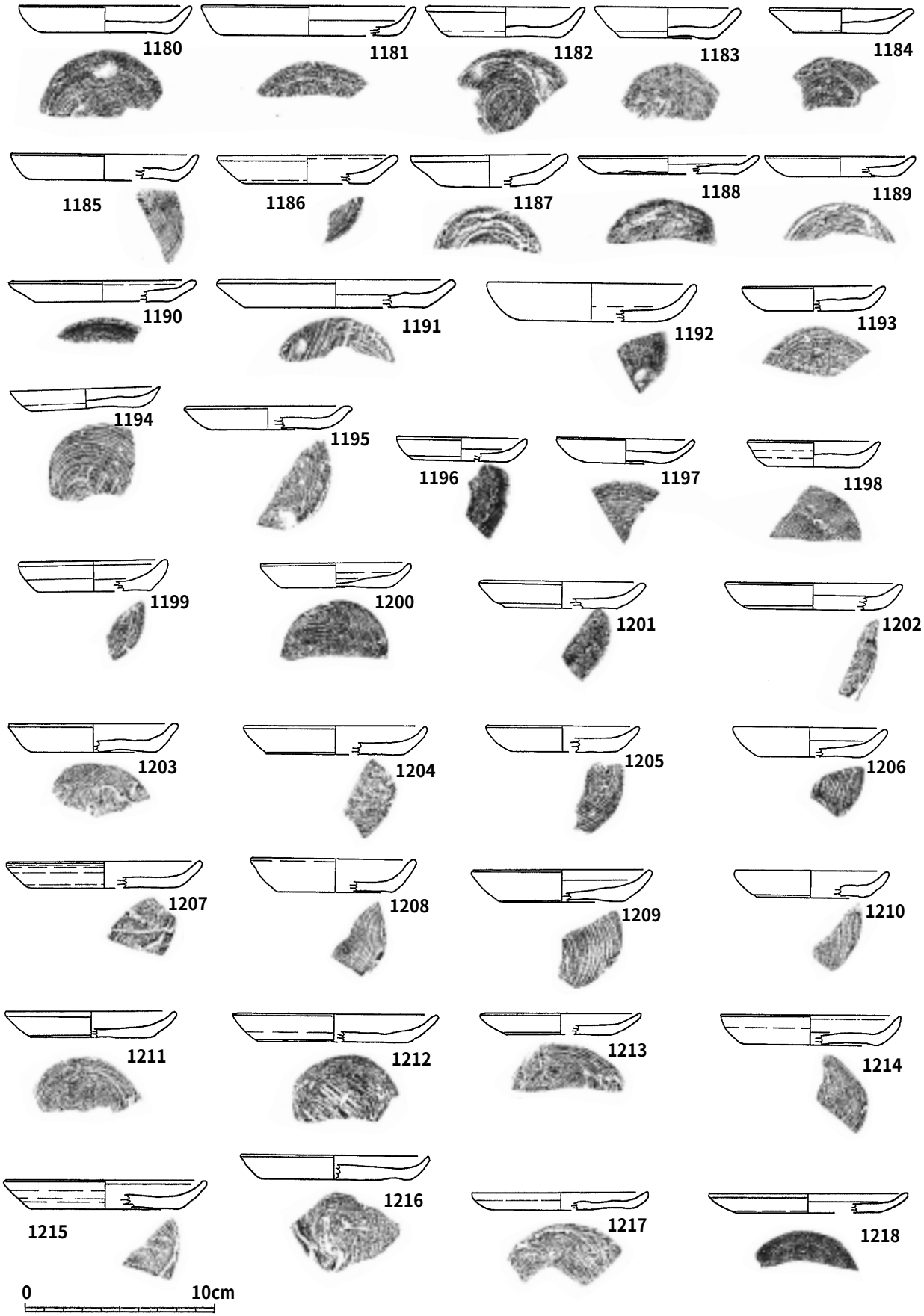
1219～1239 の黒色土師器Ｂは両面黒色である。

1219～1221 は口径 17～19 ㎝の坏である。両面とも黒色研磨がされている。1222～1227 は口径９～10 ㎝の小皿である。1225・1226 は底部から直に立ち上がるタイプである。底部の切り離しは糸切り離しであるが上から研磨している。両面とも黒色研磨がされている。

1228 は底部が厚手の土器である。両面とも黒色研磨がされている。

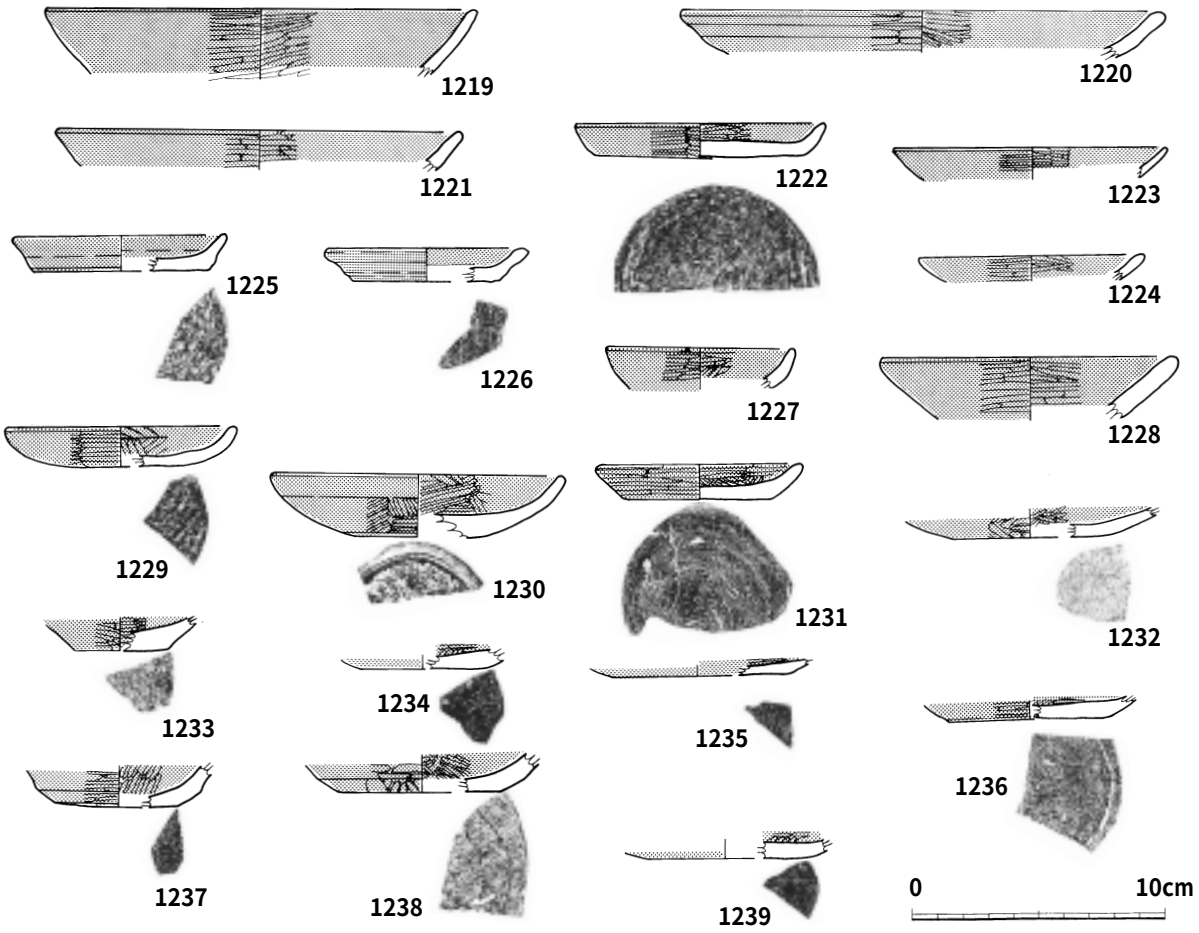


第143図　土師器小皿（1）



第144図　土師器　小皿（2）

1229・1230 は丸底に近い底部をもつ小皿である。底部の切り離しは糸切り離しである。両面とも黒色研磨をしている。1231 は小皿であるが丸味をもって立ち上がる器形である。底部の切り離しは糸切り離しである。両面とも黒色研磨をしている。1232 は丸味を持って立ち上がる器形である。底部の切り離しは糸切り離しである。両面とも黒色研磨をしている。1233 は厚く狭い底部である。底部の切り離しは糸切り離しである。両面とも黒色研磨をしている。1234～1236 は薄い底部である。底部の切り離しは糸切り離しである。両面とも黒色研磨をしている。1237・1238 は底部の角を切っている。底部の切り離しは糸切り離しである。両面とも黒色研磨をしている。1239 は立ち上がりが丸味をもっている。底部の切り離しは糸切り離しである。両面とも黒色研磨をしている。



第 145 図　黒色土器B・坏・小皿

⑥　**土師特殊品**（第 146 図 1240～1251）

1240・1241 は円筒状のふいごの羽口である。炉との付け口は鉄分が熔けた状態で付着している。

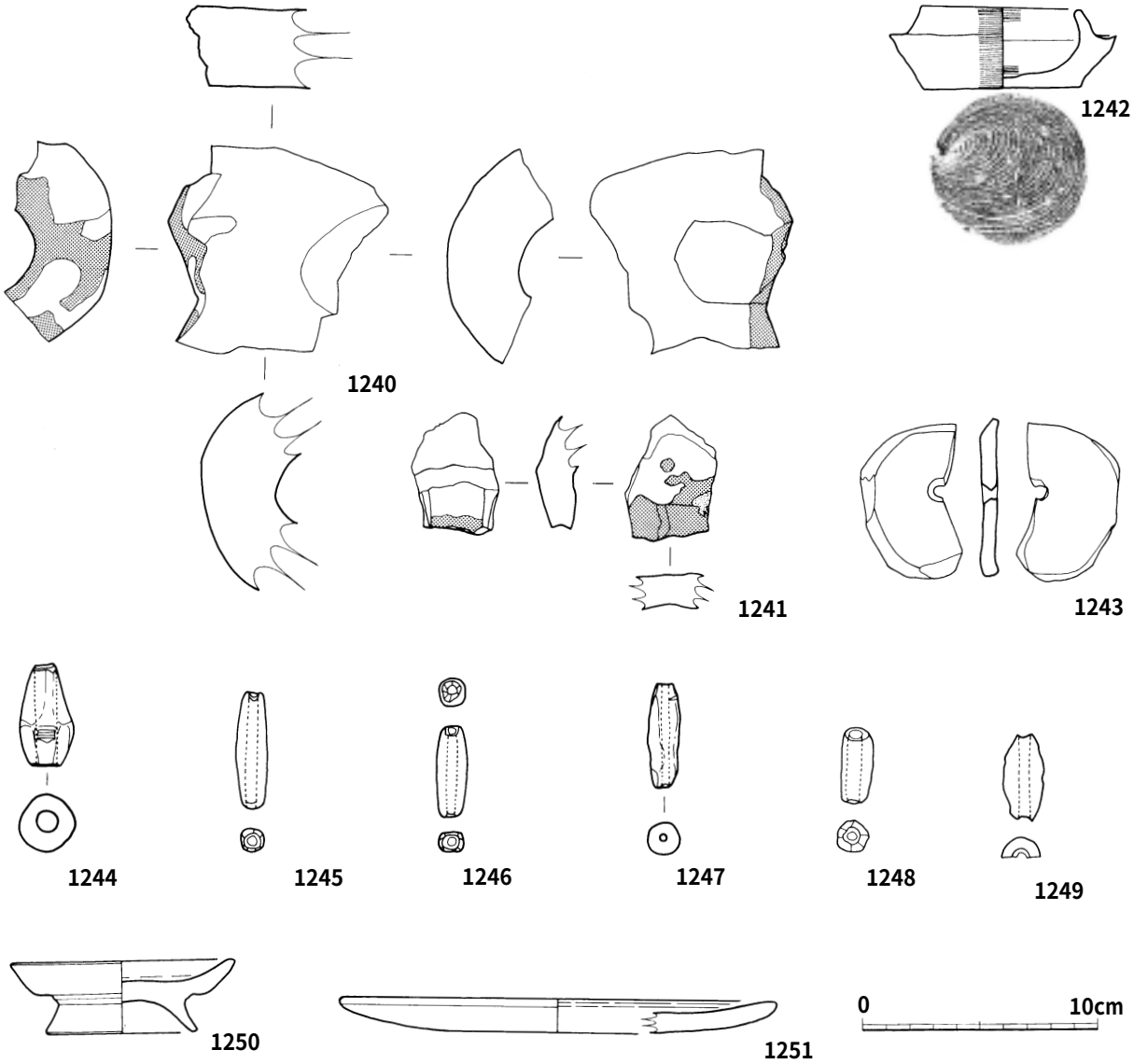
1242 は合子の土師製品である。合子の受け身の方で底部は糸切り離しである。青白磁の合子のまねをして製作したと考えられる。

1243 は土師器の底部を再利用した紡錘車と思われる。穴は少しずれてあけている。

1244～1249 土錘である。

1250 は高坏状のものである。高台付き皿とも言えよう。

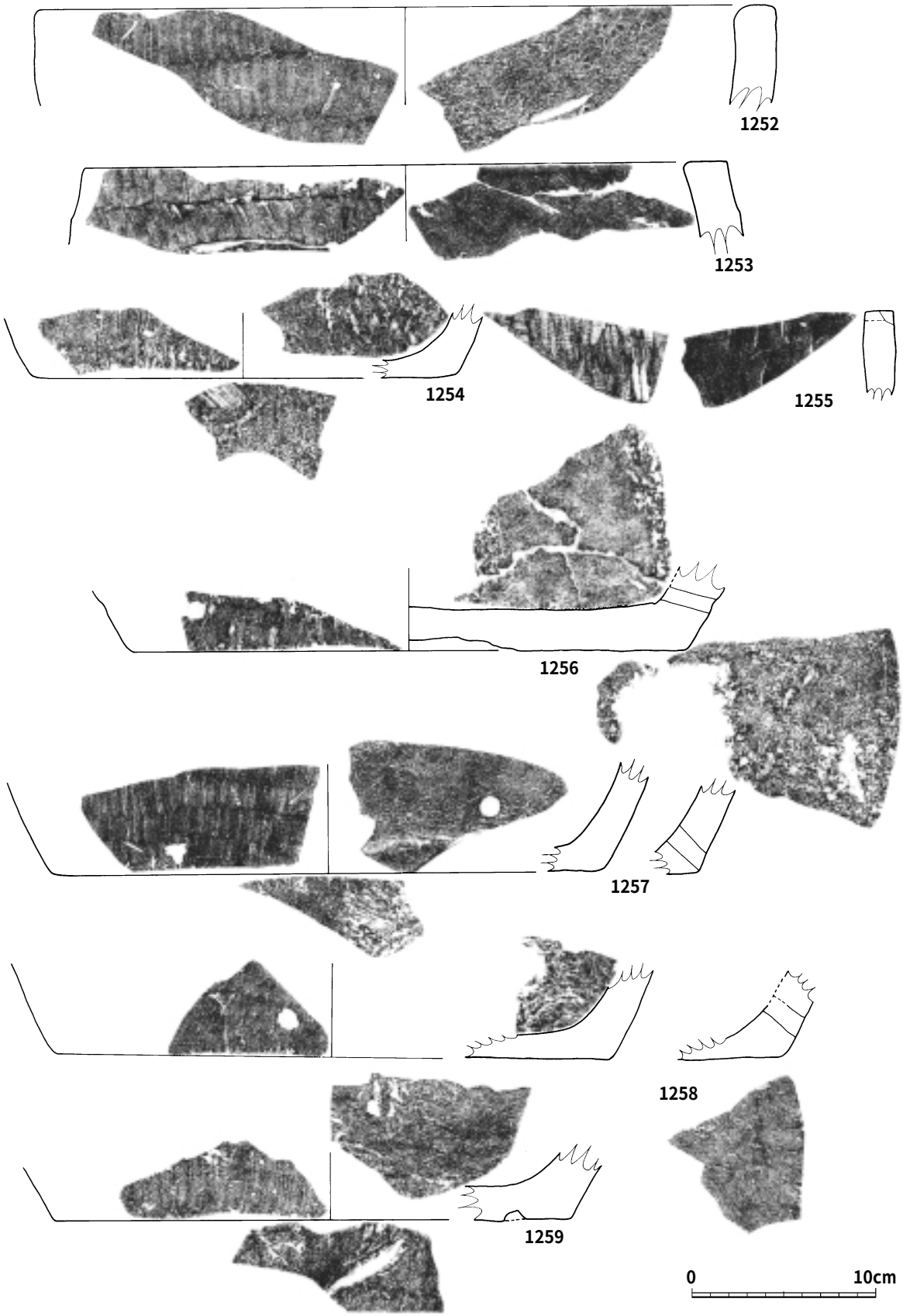
1251 は底部が丸い皿である。糸切り底ではなく特殊品と考えられる。



第 146 図　土師特殊品

ク　石鍋（第 147 図 1252～1259）

1252 は滑石製石鍋の口縁部である。断面はやや厚みのあるもので，口縁部の形は直行である。外面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。1253 は滑石製石鍋の口縁部である。断面はやや厚みのあるもので，口縁部の形は内湾ぎみである。外面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。1254 は滑石製石鍋の底部である。断面は薄手で，胴部への立ち上がりは外反である。外面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。1255 は滑石製石鍋の口縁部である。断面はやや薄手で，口縁部の形は直行である。外面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。1256 は滑石製石鍋の底部である。断面はやや厚みのあるもので，胴部への立ち上がりは外張りである。外面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。底面は削り跡を研磨している。また，円孔が施され，鍋的要素が薄れる感がある。1257 は滑石製石鍋の底部である。断面はやや薄手である。

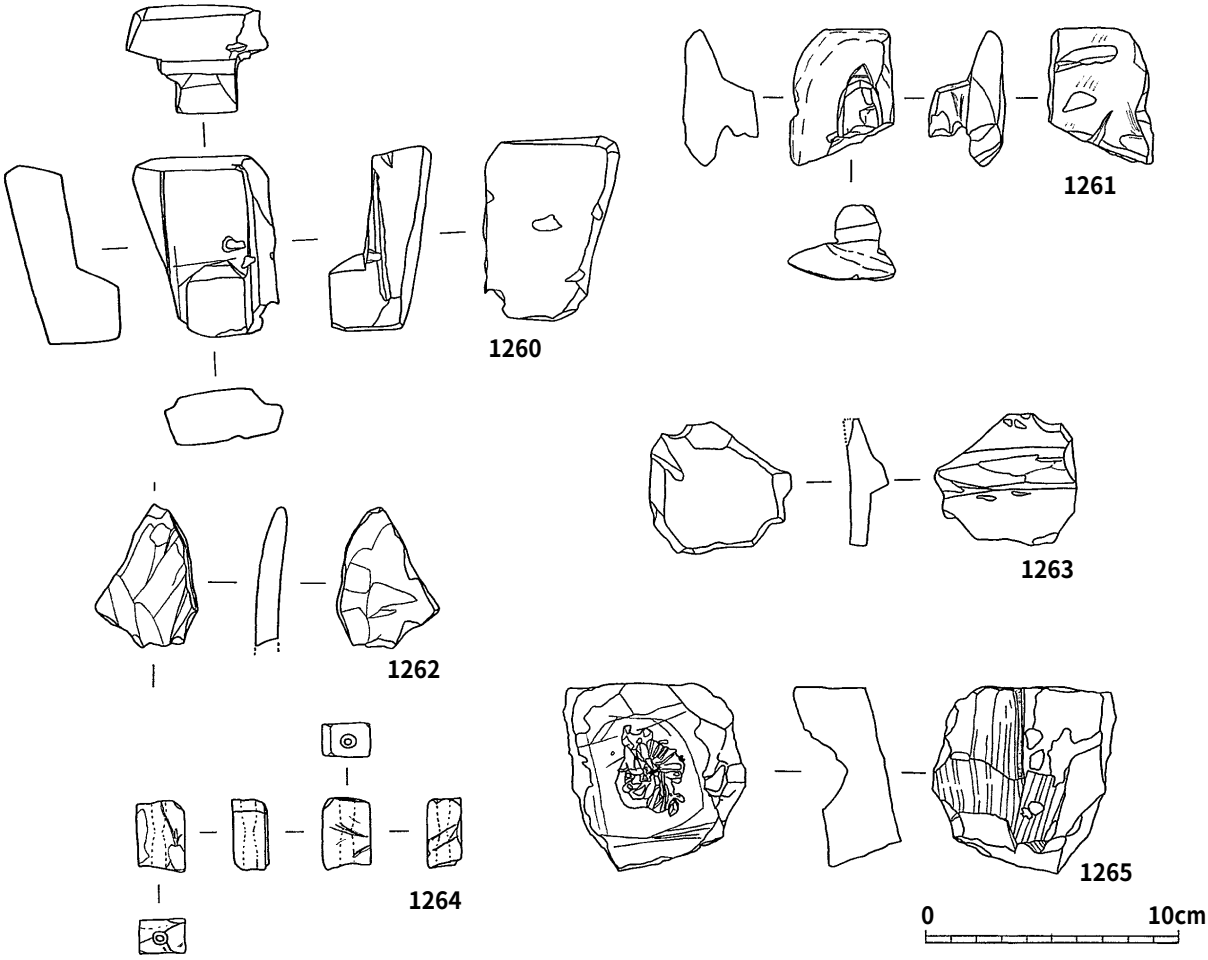


第147図　石鍋

胴部への立ち上がりは外張りである。外面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。底面は削り跡を研磨している。また，円孔もある。1258 は滑石製石鍋の底部である。断面はやや厚みのあるもので，胴部への立ち上がりは外張りである。外面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。底面は削り跡を研磨している。また，円孔が施され，鍋的要素が薄れる感がある。1259 は滑石製石鍋の底部である。断面はやや厚みのあるもので，胴部への立ち上がりは外張りである。外面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。底面は削り跡を研磨している。

ケ　滑石製品（第 148 図 1260～1265）

1260 は方形に面をとり方形の突起を作っている製品である。これは目的不明である。1261 は丸味のある面と細穴がある紐状突起を作っている。用途ははっきりしないが，滑石製鏡模造品も考えられる。1262 は薄手の製品で，丸味をもつもので用途不明である。1263 は石鍋の一部をメンコにしたものと考えられる。1264 は角柱に円孔がみられるものである。目的不明の製品である。1265 は石鍋をメンコ状に割り，中央を抉っているものである。用途不明。



第 148 図　滑石製品

コ　砥石（第 149 図 1266～1276）

砥石の石材は軟質白色頁岩と硬質頁岩の２種類である。

1266 は，軟質白色頁岩で天草砥石と言われる石材である。主に片面が使用され，上位の使用残部

第149図　砥石

盛り上がりがみられる。裏面は若干丸味をおびている。1267 は硬質頁岩の石材である。砥石に使用した主な面は１面で，大半が剥がれており一部研面が残っている。側面の研面は若干残っている。1268 は軟質白色頁岩で天草砥石と言われる石材である。４面が使用され中央部が細くなっている。1269 は硬質頁岩の石材である。砥石に使用した主な面は１面で，摂理部で大半が剥がれており，使用面は一部研ぎ面が残っている。1270 は小形の扁平な硬質頁岩で中央部に凹面の研ぎ跡がみられる。1272 は硬質頁岩を使用し，形はで扁平で小形である。使用面は中央部である。1271 は軟質白色頁岩で４面を使用している。中央部は細くなり，折れている。そして，これは焼けたため砂粒が落ちてくる。1273 は硬質頁岩で扁平である。使用面は２面であるが，使用された痕跡は少ない。1274 は軟質白色頁岩で天草砥石と言われる石材である。小形で折れ４面が使用され中央部が細くなっている。なお，半分に欠損している。1275 は軟質白色頁岩で主に片面が使用されている。裏面は深い溝があり，若干丸味をおびている。なお，半分に欠損している。1276 は主に片面が使用されている。形は三角形で，裏面は凸凹があり使用されていない。

サ　石製品（第 150 図 1277～1283）

1277 は扁平状の滑石製品である。形は短冊状で加工は四角を丸くしたものである。使用目的は不明である。1278 は扁平状の滑石製品である。形は台形で加工は四角を丸くしたものである。片面は段差のある面を作り，片面は三角断面の縦筋を中央に入れている。使用目的は不明である。

1279 は石を縦剥ぎにしたものである。剥いだ面は４面みられ，自然面も残っている。断面は蒲鉾形である。使用目的は不明である。

1280 は石球である。表面は潰した状態になっている。1281 は小形の石球である。これは自然面だけである。1282 は軽石加工品である。丸い軽石を片方から何回も削り込んだものである。使用目的は不明である。1283 は軽石製品である。形は亀の甲羅状に作っている。各面はすり切り調整で丁寧に作っている。

シ　金属製品（第 151～153 図 1284～1345）

1284～1299 は全て角釘である。頭部を曲げているものは 1284・1286・1291・1292・1294・1299 があり，他は見あたらない。前者は完全に近く，後者は頭部が欠損していると思われる。

1300 は半円球の傘に釘が組み込まれた傘釘と思われる。1301 は傘釘の傘部と思われる。

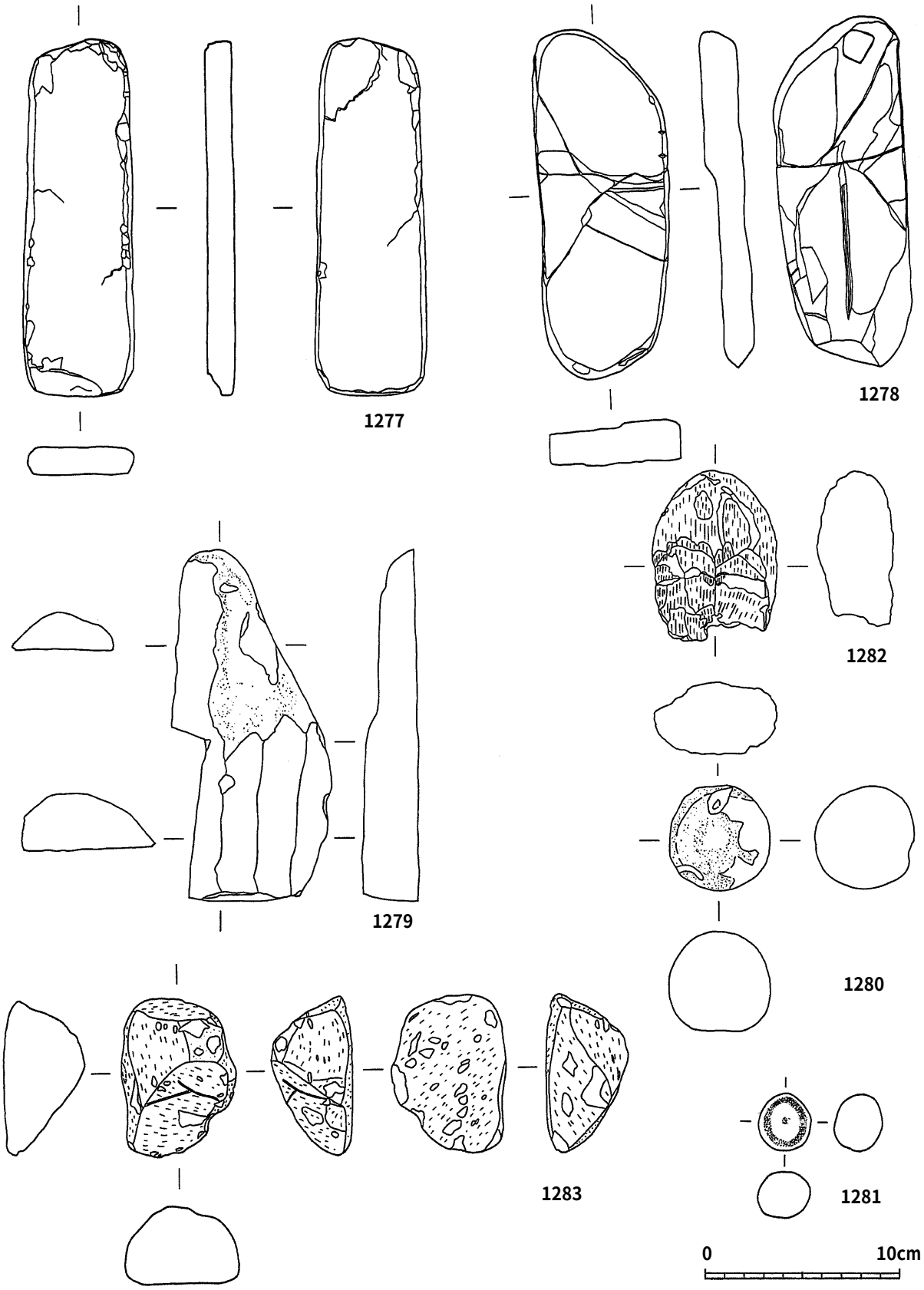
1302～1307 は板状にした板金の製品である。1303・1306 は板鉄を「コ」の字にした曲物状にし，1304 は板鉄が２枚重なり，1305 は「D」字状に折り曲げ，1307 は「９」字状に曲げている。これらは，道具等の柄に差し込んだ部分を絞める金具と考えられる。

1308 は板金を加工したもので，用途不明である。

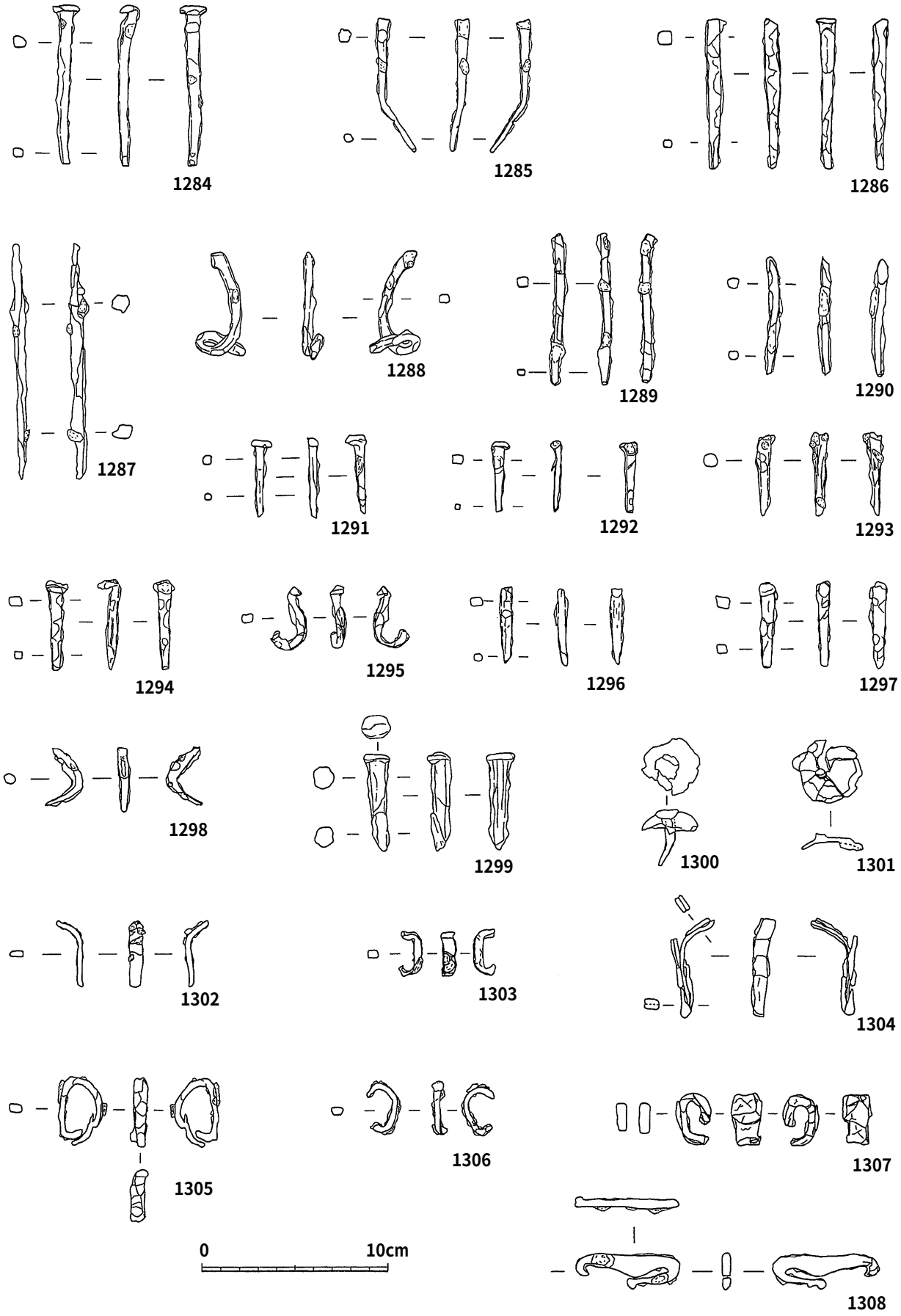
1309～1311 は刀子である。1309・1311 は刀子の刃部で，1310 は柄の差し込み部である。

1312～1318 は幅広板金製品の類である。1312・1313・1317 は厚手で三角形と長方形をなしている。用途としては楔が考えられる。1314・1316・1318 は用途不明。1315 は穴がみられるが用途不明である。

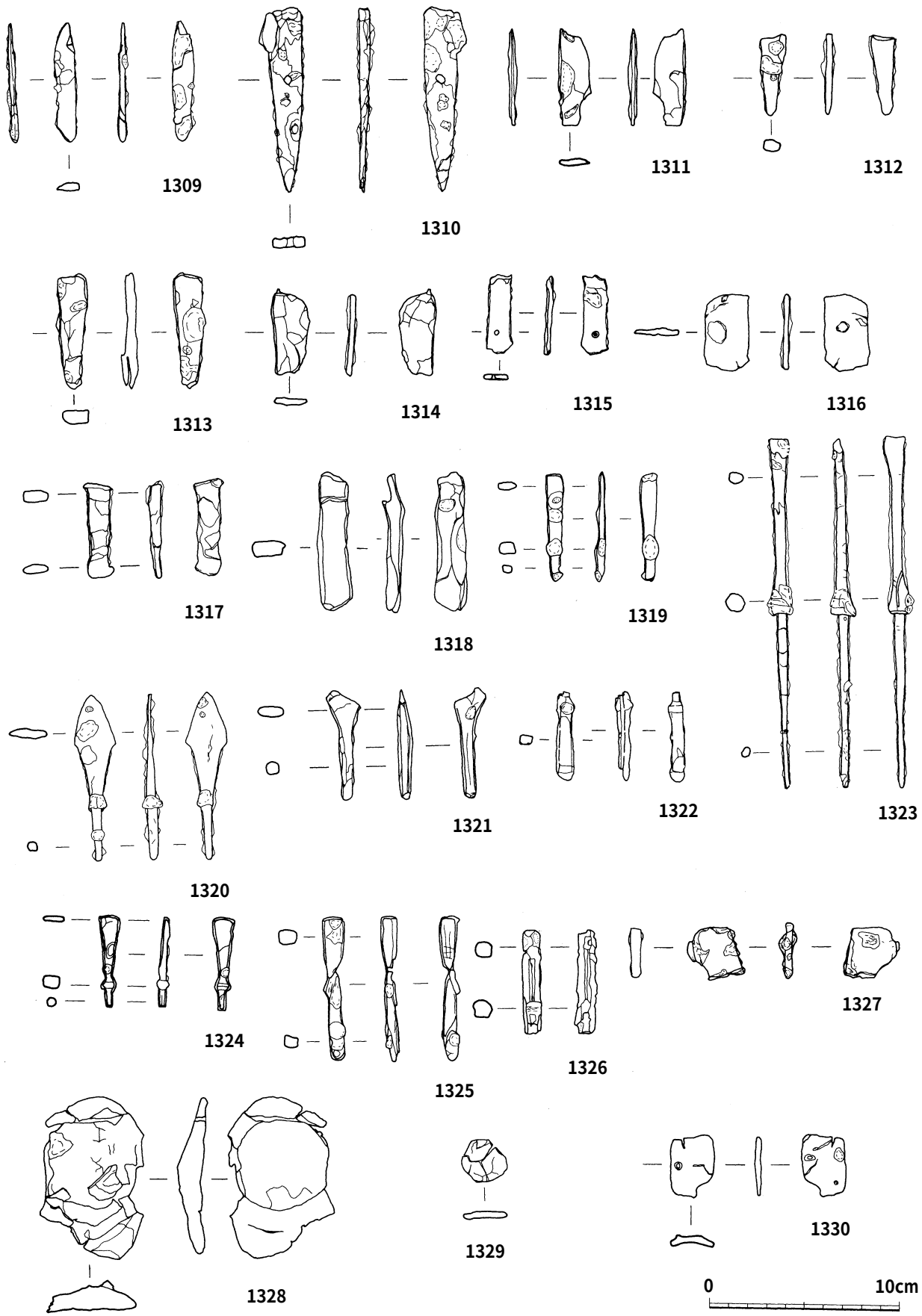
1319～1326 は鉄鏃の類である。1320・1322 は幅広鉄鏃である。これは鏃の刃部が菱形をなしているものである。1319・1323・1324 は鏃の刃部が逆台形をなしているものである。この中では 1323



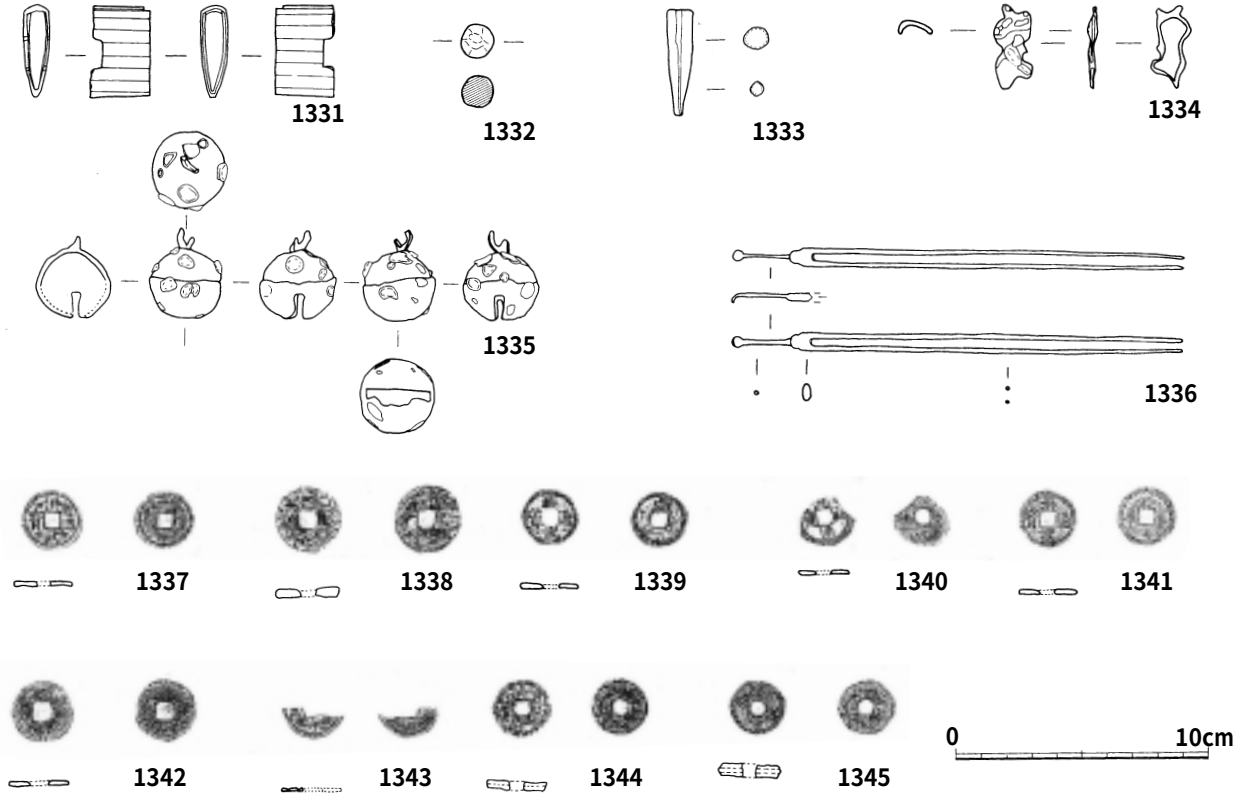
第150図　石製品


1284
1285
1286
1287
1288
1289
1290
1291
1292
1293
1294
1295
1296
1297
1298
1299
1300
1301
1302
1303
1304
1305
1306
1307
0
10cm
1308

第151図　鉄製品（1）


1309
1310
1311
1312
1313
1314
1315
1316
1317
1318
1319
1320
1321
1322
1323
1324
1325
1326
1327
1328
1329
1330
0
10cm

第152図　鉄製品（2）



第153図　鉄製品（3）と銅・鉛製品

が完形品である。これは逆台形の幅広辺が先端部になり，長めの刃部である。柄部は長く差し込み端は尖っている。中間は装着部が表に出るところで，植物表皮で巻いた部分である。1319・1324はその小型である。なお，1322・1326はこのタイプの一部と考えられる。

1327は鉄板状の製品で形不明である。1329・1330は丸味のある鉄板で使用不明の製品である。

1331は青銅製品である。形は三角柱に中は空洞である。外面は狭い面切りがあり，内面は細工がない。用途は刀の鍔止め金具が考えられる。1332は鉛製の鉄砲玉である。1333は青銅製のキセルの吸口である。1334は青銅製の飾り金具と考えられる。1335は，鉄製の鈴である。製法は上半分と下半分の半球を接合して，穴の開いた吊り部を接合している。1336は青銅製品で，簪である。耳掻き部が付いている。

1337～1345は古銭である。この中には表層出土もあり中世・近世がみられる。1337・1339・1341が洪武通寶である。1339は元祐通寶である。1343は近世の寛永通寶の可能性がある。1334は２枚，1335は３枚重なって剥がれない状態である。なお，1338・1344は鉄銭で他は青銅銭である。

６　近世

（１）　遺構

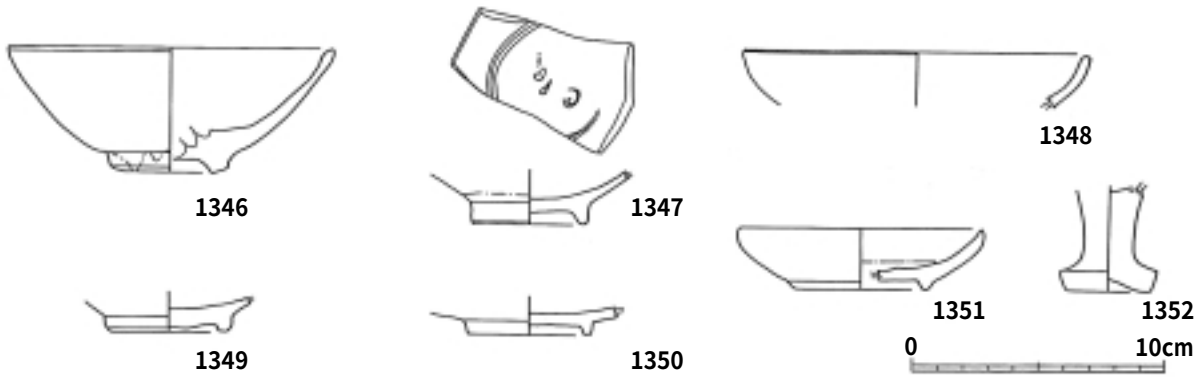
遺構は確実に確認されなかったが建物跡の柱穴が数多く検出しているので，これらの中にあると考えられる。また，掘立柱建物跡26・31・32が３重にあるので，掘立柱建物跡27はその後建てられた可能性がつよい。この建物は２間×２間で西側の梁間柱が外側に張り出している。

他の土坑は性格不明である。

（２） 遺物（第 154・155 図 1346～1376）

ア　磁器（第 154 図 1346～1352）

1346 は白磁の碗である。中世にない器形や白色であるため近世とした。1347 も白磁の碗である。見込みに線がみられる。1348～1351 は皿である。1348 は口縁部で彎曲している。1349・1350 は高台である。1351 は口縁部が内湾し，見込みに少し稜がみえるものである。高台は低い。



第 154 図　近世白磁

1352 は上げ底で筒部が絞られた白磁である。底面には釉薬が施されていないロクロの水挽き痕がみられる。用途不明である。

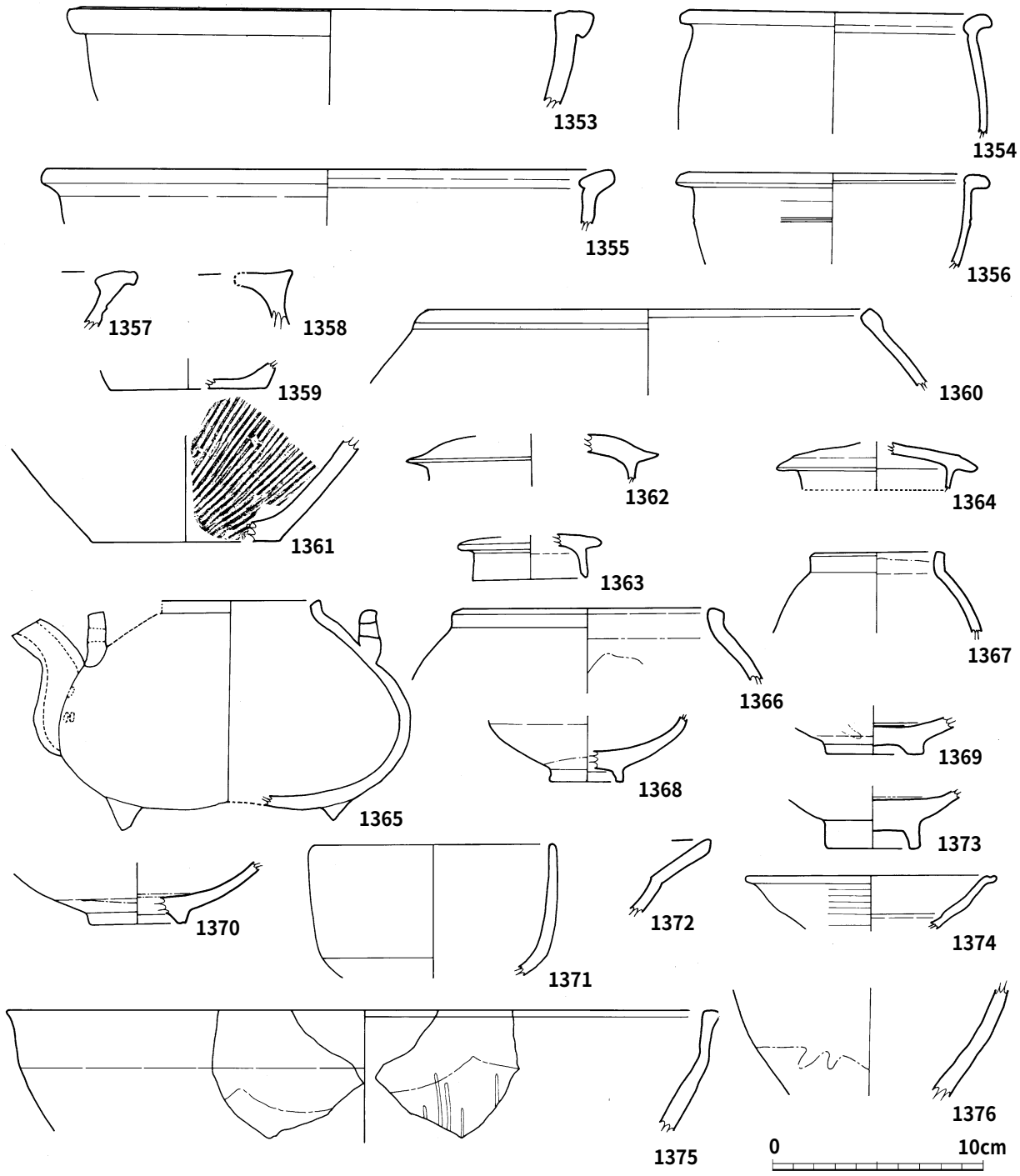
イ　陶器（第 155 図 1353～1376）

1353～1368・1372 はさつま焼の類である。

1353 は「L」字口縁部をもついわゆる半胴甕である。釉は鉄釉の薄いものである。器面はロクロの水挽き痕が残る。1354 は小形の甕である。口縁部は厚く「く」の字に折れ，内面に段がみられる。1355 は半胴甕である。口縁部は厚く「く」の字に折れ，内面に舌状の段がみられる。1356 は小形の甕である。口縁部は厚く「L」の字に折れ，内面に段がみられる。1357 は擂鉢の口縁部である。口縁部は広い平坦面があり，内面は舌状になっている。1358 は半胴甕の口縁部である。内側に広い舌状の口唇部をもつ。1359 は甕の底部である。1360 は口縁部が内向した甕である。口縁部は厚みがある。1361 は擂鉢である。底部は平底で胴部は外側に立ち上がる。内面は櫛歯状筋をほどこしている。1362 は茶家の蓋である。これは厚みのある大形のものである。薄い褐釉がかかっている。1363 は茶家の蓋である。これは薄手で小形のものである。厚い鉄釉がかかっている。1364 は茶家の蓋である。これは薄い中形のものである。薄い褐釉がかかっている。1365 は茶家である。脚は３本あり若干上げ底で，丸味をもった胴部である。胴から注ぎ口へは円孔が３つ作られている。口縁部直に立っている。釉は薄い褐釉である。1366 は茶家の大形の口縁部である。1367 は小型の茶家の口縁部である。これらは苗代川焼の範疇に入る。

1368・1371・1373 は碗である。３つともそば釉である。系統としては白薩摩の類に入る。

1369～1376 は他の産地である。1369 は白色釉を使った志野焼に類している。1370・1371 は京焼の碗である。1372・1374 は大皿と小皿である。産地は不明である。1375 は擂鉢である。産地は不明である。1376 は琉球焼の壺である。


1353
1354
1355
1356
1357
1358
1359
1360
1361
1362
1363
1364
1365
1366
1367
1368
1369
1370
1371
1372
1373
1374
1375
1376
0
10cm

第155図　近世陶器

第41表　石器一覧

番号	遺物番号	出土区	層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材
1	8	E-3	Ⅷ	剥片尖頭器	9.7	2.9	1.7	48.46	頁岩
2	14	F-4	Ⅷ	ナイフ形石器	4.7	2.6	1.1	10.95	玉髄(灰)
3	17	F-3	Ⅷ	フレイク	8.6	3.6	2.2	70.11	黒曜石
4	13	F-3	Ⅷ	スクレイパー	5.5	5.2	1.4	39.16	黒曜石
5	10	E-3	Ⅷ	グレイバー	2.4	2.1	0.8	3.72	黒曜石
6	798	C-12	Ⅷ	フレイク	3.9	2.4	1.0	9.50	黒曜石
7	800	D-10	Ⅷ	フレイク	1.9	1.4	0.4	1.22	黒曜石
8	27	F-3	Ⅷ	フレイク	2.1	2.2	0.7	3.24	黒曜石
9	18	F-3	Ⅷ	フレイク	4.8	3.8	1.7	22.36	黒曜石
10	802	D-10		ドリル	1.7	0.9	0.7	0.55	黒曜石
11		E-7	Ⅰb	フレイク	2.0	4.0	0.7	7.01	黒曜石
12			表	スクレイパー	3.4	3.1	1.2	12.32	玉髄(灰)
13		E-8	Ⅰc	ナイフ形石器	3.7	1.8	0.5	3.05	黒曜石
14			表	スクレイパー	8.2	3.8	0.9	28.34	頁岩
15		C-8	Ⅱ	スクレイパー	5.4	2.3	1.6	22.25	玉髄(灰)
16		E-3	Ⅰb	スクレイパー	3.3	2.2	1.0	7.20	玉髄(白)
17		D-5	Ⅰb	スクレイパー	2.6	2.4	0.8	5.71	玉髄(赤)
18		E-10	Ⅰb	UF	4.4	2.4	1.3	11.30	玉髄(灰)
40		溝2		石鏃	3.3	2.5	0.4	2.12	黒曜石
41	28	C・D-9		石鏃	2.6	1.4	0.4	1.01	黒曜石
42		E-9	Ⅴ	石鏃	3.0	1.8	0.4	1.69	黒曜石
43		D-10溝3	Ⅰ	石鏃	2.6	1.8	0.3	0.86	黒曜石
44				石鏃	2.3	1.4	0.5	0.93	黒曜石
45	4	4T	Ⅲb	石鏃	2.6	1.6	0.4	0.98	黒曜石
46		D-10	Ⅲ	石鏃	2.4	1.7	0.3	0.67	頁岩
47		C-4・5方形竪穴1		石鏃	2.6	1.8	0.6	1.38	黒曜石
48		D-5	Ⅲ	石鏃	1.9	1.3	0.3	0.38	黒曜石
49	32	F-16	Ⅱ	石鏃	1.8	1.3	0.3	0.46	頁岩
50	117	G-17	Ⅲ	石鏃	1.9	1.4	0.4	0.59	玉髄(灰)
51		D-8	Ⅱ	石鏃	2.3	1.9	0.3	1.26	黒曜石
52		F-4	Ⅲa	石鏃	2.2	2.0	0.4	1.04	頁岩
53	258	F-18	Ⅱ	石鏃	2.3	1.3	0.3	1.14	頁岩
54		溝3	Ⅰ	石鏃	2.2	2.0	0.3	1.01	玉髄(白)
55		E-6		石鏃	2.4	1.9	0.5	1.99	頁岩
56	796	C-11	Ⅴ	石鏃	1.8	1.2	0.5	0.89	玉髄(白)
57		F-7	Ⅰa	石鏃	1.5	1.6	0.3	0.44	頁岩
58	372	G-16	Ⅱ	石鏃	1.5	1.4	0.4	0.45	黒曜石
59		C-9	Ⅱ	石鏃	1.5	1.4	0.2	0.31	黒曜石
60		5T	Ⅱb	石鏃	1.4	1.8	0.4	0.56	頁岩
61		E-7	Ⅰb	石鏃	1.2	1.1	0.3	0.38	黒曜石
62		F-4	Ⅴ	石鏃	1.1	1.5	0.3	0.42	黒曜石
63		D-3	Ⅰb	石鏃	1.9	1.5	0.4	1.34	黒曜石
64		E-8	Ⅰb	石鏃	1.7	0.9	0.3	0.38	黒曜石
65		C-7	Ⅰb	スクレイパー	4.9	7.0	1.4	37.29	頁岩
66		E-8	Ⅴ	スクレイパー	3.2	2.5	1.1	8.77	黒曜石
67	29	F-9	Ⅶ	スクレイパー	5.7	2.9	0.9	13.43	頁岩
68	719	D-6	Ⅱ	磨製石斧	11.1	5.8	2.6	282.18	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ(花崗岩質)
69		山部6T	表	磨製石斧	5.8	5.7	2.5	82.71	頁岩
70	280	山部6T		打製石斧	12.6	5.2	2.8	247.84	頁岩
71		B-6	Ⅱ	打製石斧	14.8	8.5	3.8	550	安山岩
72		D-7		凹石、敲石	15.9	10.5	4.8	1090	安山岩
73		C-7焼土		凹石、敲石	10.9	8.3	5.2	725	安山岩
74	818	B-4	Ⅲa	凹石、敲石	10.1	8.9	4.9	872	砂岩
75				磨石	9.0	8.0	6.1	617	安山岩
76				石皿	12.3	9.8	4.3	716	安山岩
77		C-7		石皿	13.8	10.3	5.8	1450	頁岩
78		D-6	Ⅱ	石皿	18.0	16.3	5.0	2059	頁岩
260		C-8掘立柱26		砥石	9.5	3.5	2.5	161.49	砂岩
1266		D-5	Ⅰa	天草砥石	11.5	7.4	4.4	422	軟質白色頁岩
1267	746	C-7	Ⅱ	砥石	8.5	2.2	1.9	76.69	頁岩
1268	749	C-7	Ⅱ	天草砥石	9.9	6.4	5.8	590	軟質白色頁岩
1269				砥石	7.1	3.5	1.3	54.70	頁岩
1270		F-5	Ⅱ	砥石	6.4	3.3	0.7	28.40	頁岩
1271		D-7	Ⅱ	天草砥石	10.7	5.6	5.4	325	軟質白色頁岩
1272		B-4	Ⅰ	砥石	4.9	2.1	0.8	9.73	頁岩
1273		E-5	Ⅱ	砥石	4.9	3.2	0.6	14.95	頁岩
1274		E-4	Ⅰb	天草砥石	5.2	4.0	1.9	57.78	軟質白色頁岩
1275		C-10溝3	Ⅰ	天草砥石	7.7	5.6	4.0	220	軟質白色頁岩
1276		C-4・5		天草砥石	11.7	6.7	5.7	340	軟質白色頁岩
1277	769	C-7	Ⅱ	滑石製品	18.5	5.7	1.4	317	滑石
1278		F-5		滑石製品	18.3	6.6	2.0	430	滑石
1279		B-10	Ⅱ	石製品	18.2	7.5	2.9	489	頁岩
1280		C-6		石球	5.3	5.2	5.2	148	安山岩
1281		C-4・5方形竪穴1		石球	3.0	2.7	2.4	29.25	安山岩
1282		D-7		軽石	8.5	6.4	3.9	49.72	軽石
1283		C-6	Ⅱ	軽石	8.4	5.9	4.2	47.77	軽石

第 42 表　縄文時代出土遺物一覧

番号	遺物番号	時期	器種	器部	出土区	層	色調		調整痕		胎土						焼成	文様等
							外面	内面	外面	内面	色調	石英	長石	角閃	雲母	その他		
19		早期	深鉢	口縁部	D10		灰黄褐色	にぶい黄橙色	貝殻条痕	ﾍﾗ掻き	黒褐色	○	○	○	○		良	貝殻刺突文
20		早期	深鉢	胴部	山部6T	表	明黄褐色	明黄褐色	貝殻条痕		明黄褐色	○	○	○			良	
21	629	早期	深鉢	胴部	G17	Ⅱ	明赤褐色	明褐色	ﾍﾗ掻き上げ		明褐色	○	○	○			普	
22	264	早期	深鉢	胴部	山部6T		橙色	にぶい褐色	ﾍﾗ掻き上げ		にぶい褐色	○	○	○			良	
23	217	早期	深鉢	底部	G18	Ⅱ	黄褐色	にぶい黄褐色	貝殻条痕		にぶい黄褐色	○	○	○			普	
24	222	早期	深鉢	胴部	G18	Ⅲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色			黒褐色	○	○	○			粗	山形押型文
25	55	早期	深鉢	胴部	F17	Ⅲ	明赤褐色	にぶい黄褐色			黒褐色	○	○	○			粗	山形押型文
26		早期	深鉢	胴部	山部6T	表	明赤褐色	にぶい黄褐色			にぶい褐色	○	○	○			粗	山形押型文
27	13	早期	深鉢	胴部	山部6T		にぶい黄褐色	明黄褐色			黄褐色	○	○	○			粗	山形押型文
28	248	早期	深鉢	胴部	G18	Ⅲ	明赤褐色	にぶい褐色	貝殻条痕		にぶい褐色	○	○	○			粗	
29		中期	深鉢	口縁部	E6	Ⅱ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色			褐灰色	○	○	○		滑石	良	口唇部に刻み
30	794	中期	深鉢	胴部	C8	Ⅲ	橙色	にぶい黄橙色		ﾍﾗ掻き､ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色	○	○	○	○	滑石	良	凹線文
31	794	中期	深鉢	胴部	C8	Ⅲ	にぶい橙色	にぶい黄橙色		ﾍﾗ掻き､ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色	○	○	○	○	滑石	良	凹線文
32	794	中期	深鉢	胴部	C8		橙色	にぶい橙色		ﾍﾗ掻き､ﾅﾃﾞ	にぶい橙色	○	○	○	○	滑石	良	凹線文
33	994	中期	深鉢	胴部	C8	Ⅲ	にぶい褐色	にぶい黄褐色		ﾍﾗ掻き､ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐色	○	○	○	○	滑石	良	凹線文
34		中期	深鉢	口縁部	F7	Ⅰc	褐色	にぶい黄褐色			にぶい黄褐色	○	○	○			良	凹線文､竹管刺突(口唇部)
35		中期	深鉢	胴部	B5	Ⅱ	灰黄褐色	にぶい黄褐色			にぶい黄褐色	○	○	○		滑石	良	突帯､貝殻刺突文
36		晩期	深鉢	底部	D7	Ⅱ	橙色	にぶい黄褐色			黒褐色	○	○	○			良	
37	838	晩期	浅鉢	口縁部	B4	Ⅳ	暗灰黄色	暗灰黄色	研磨	研磨	暗灰黄色	○	○	○			良	
38		晩期	浅鉢	口縁部	D5方形竪穴4		暗灰黄色	暗灰黄色	研磨	研磨	黒褐色	○	○	○			良	玉縁
39	218	晩期	浅鉢	底部	G18	Ⅲ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	研磨	研磨	にぶい黄橙色	○	○	○			粗	

第43表　古墳・古代出土遺物一覧

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様･その他
79	成川式土器	甕	口縁部	口径 25.0	B-4	Ⅲa	黄灰色	灰黄色	ﾅﾅﾒﾊｹ目	ﾖｺﾅﾃﾞ		角閃石、赤色粒	
80	成川式土器	甕	口縁部	口径 21.2	B-3		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ﾅﾅﾒﾊｹ目	ﾊｹ目	にぶい黄橙色	石英、長石、黒曜石	
81	成川式土器	甕	口縁部	口径 18.4	B-3	Ⅱ	にぶい黄橙色	にぶい黄色	手ﾅﾃﾞ	ﾊｹ目	暗灰黄色	石英、長石、赤色粒	
82	成川式土器	甕	口縁～胴部	口径 28.0			にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ﾊｹ目	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色	石英、雲母、赤色粒	
83	成川式土器	甕	口縁部	口径 19.0	D-9	Ⅲ	橙色	にぶい黄橙色	ﾀﾃﾊｹ目	ﾖｺﾊｹ目	にぶい褐色	石英、角閃石、長石	
84	成川式土器	甕	口縁部	口径 29.4	C-12	Ⅲa	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	ﾀﾃﾖｺﾊｹ目	工具ﾅﾃﾞ		石英、角閃石、赤色粒	
85	成川式土器	甕	口縁部		F-5	Ⅱ	橙色	浅黄橙色	ﾖｺﾊｹ目	ﾖｺﾊｹ目	浅黄橙色	石英、長石、赤色粒	
86	成川式土器	甕	口縁部	口径 26.8	B-3	Ⅲa	橙色	橙色	ﾀﾃﾖｺﾊｹ目	ﾅﾅﾒﾊｹ目	橙色	石英、角閃石、長石	
87	成川式土器	甕	口縁部	口径 19.4	B-3	Ⅱ～Ⅲ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ﾀﾃﾊｹ目	ﾅﾅﾒﾊｹ目	にぶい黄橙色	角閃石、長石	
88	成川式土器	甕	頸～胴部	頸径 22.0	E-3	Ⅲa	明黄褐色	にぶい黄色	ﾅﾅﾒﾊｹ目、ﾅﾃﾞ	ﾀﾃﾖｺﾊｹ目	灰黄色	石英、長石、赤色粒、砂粒	
89	成川式土器	甕	口縁～頸部	口径 23.4	B-3	Ⅱ～Ⅲ	明褐色	橙色	ﾀﾃﾖｺﾊｹ目	ﾀﾃﾖｺﾊｹ目	橙色	石英、角閃石、長石、赤色粒	
90	成川式土器	甕	口縁部	口径 12.0	B-3	Ⅲa	橙色	にぶい黄橙色	ﾀﾃﾊｹ目	ﾖｺﾅﾅﾒﾊｹ目	にぶい黄橙色	石英、角閃石、長石	
91	成川式土器	甕	頸～胴部	頸径 26.4	B-3		明赤褐色	にぶい黄橙色	ﾊｹ目、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾅﾒﾊｹ目	にぶい黄褐色	石英、角閃石	
92	成川式土器	甕	口縁部	口径 24.2	E-3	Ⅲa	灰黄褐色	黒色	ﾀﾃﾖｺﾊｹ目	ﾖｺﾊｹ目	にぶい橙色	長石、雲母	
93	成川式土器	甕	頸～胴部	頸径 18.0	F-5	Ⅱ	橙色	明黄褐色	ﾊｹ目	ｶｷﾅﾃﾞ	明黄褐色	石英、雲母	
94	成川式土器	甕	底部		B-3	Ⅲa	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ﾊｹ目	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色	石英、赤色粒	
95	成川式土器	甕	底部		D-8	Ⅱ	橙色	黒褐色	ﾖｺﾊｹ目	ﾖｺﾊｹ目	橙色	石英、長石、赤色粒、小礫	
96	成川式土器	甕	底部		D-3	Ⅰc	にぶい橙色	橙色	ﾊｹ目	ﾅﾃﾞ	明赤褐色	角閃石、長石、雲母	
97	成川式土器	甕	底部		B-3	Ⅱ	橙色	黒色	ﾖｺﾊｹ目	ﾊｹ目	黄橙色	石英、長石、雲母、赤色粒	
98	成川式土器	甕	底部		D-6	Ⅱ	橙色	黒褐色	ﾊｹ目	ﾊｹ目	浅黄橙色	石英、角閃石、赤色粒	
99	成川式土器	甕	底部	底径 11.0	B-4	Ⅲa	浅黄橙色	黄橙色	ﾊｹ目	ﾊｹ目	にぶい黄褐色	石英、角閃石、長石、砂粒	
100	成川式土器	甕	底部	底径 9.0	B-3	Ⅲa	橙色	橙色	ﾊｹ目	ﾖｺﾊｹ目	橙色	石英、角閃石、赤色粒	
101	成川式土器	甕	底部	底径 9.0	B-5	Ⅲa	明黄褐色	橙色	ﾊｹ目	ﾖｺﾅﾃﾞ	橙色	角閃石、赤色粒	
102	成川式土器	甕	底部	脚径 11.6			明黄褐色	にぶい黄橙色	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色	石英、角閃石、長石、赤色粒	
103	成川式土器	甕	脚部	脚径 9.5	D-6	Ⅱ	淡橙色	橙色	ﾊｹ目	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	浅黄橙色	石英、長石、赤色粒	
104	成川式土器	甕	底部	底径 9.6	F-4	Ⅲ	にぶい黄褐色	明黄褐色	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｹ目	暗灰黄色	石英、角閃石、長石	
105	成川式土器	壺	口縁部	口径 22.6	B-3	Ⅱ	明赤褐色	にぶい橙色	ﾊｹ目	ﾅﾃﾞ、ﾊｹ目	にぶい橙色	石英、長石、砂粒	
106	成川式土器	壺	頸部	頸径 11.4	B-3	Ⅱ～Ⅲ	橙色	にぶい黄橙色	ﾀﾃﾊｹ目	工具ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色	石英、雲母	
107	成川式土器	壺	胴部	胴径 30.0	C-6	Ⅲ	橙色	橙色	ﾊｹ目		にぶい黄褐色	石英、雲母、赤色粒	刻み目突帯
108	免田式土器	壺	肩部		C-10	Ⅱ	黄褐色	明黄褐色	丁寧なﾅﾃﾞ	丁寧なﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色	長石、雲母	鋸歯状
109	成川式土器	壺	胴部	胴径 32.0	D-11	Ⅱ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色	石英、長石、赤色粒	刻み目突帯
110	成川式土器	壺	胴部		E-5	Ⅱ	灰黄褐色	褐灰色	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	明黄褐色	石英、角閃石、赤色粒	刻み目突帯
111	成川式土器	壺	胴部	胴径 20.0	B-3		浅黄色		ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ﾊｹ目	ﾍﾗﾅﾃﾞ	灰褐色	石英、角閃石	刻み目突帯
112	成川式土器	壺	胴部	胴径 27.0	B-4	Ⅲa	にぶい黄橙色	にぶい橙色	工具ﾅﾃﾞ、ﾊｹ目	ﾅﾃﾞ、ﾊｹ目	褐灰色	石英、長石、雲母	刻み目突帯
113	成川式土器	壺	胴部	胴径 28.8	D-5	Ⅱ	にぶい黄橙色	褐灰色	ﾀﾃﾖｺﾊｹ目	ﾖｺﾊｹ目	浅黄色	石英、角閃石、長石	刻み目突帯
114	成川式土器	壺	胴部	胴径 33.8	C-13	Ⅲa	黒褐色	灰黄褐色	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	灰黄褐色	石英、角閃石	幅広刻み目突帯
115	成川式土器	甕	胴部		B-4	Ⅲa	橙色	にぶい黄橙色	ﾀﾃﾊｹ目	ﾊｹ目	灰黄褐色	石英、角閃石、長石	
116	成川式土器	壺	胴部		B-3		浅黄橙色	にぶい黄橙色	ﾊｹ目	ﾊｹ目	灰褐色	石英、角閃石	
117	成川式土器	壺	底部		C-12	Ⅲa	橙色	橙色	手ﾅﾃﾞ	手ﾅﾃﾞ	淡橙色	石英、角閃石、長石	
118	成川式土器	壺	底部		E-3	Ⅲa	明赤褐色	にぶい褐色	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾊｹ目	明赤褐色	石英、角閃石、赤色粒	
119	成川式土器	壺	底部		E-4	Ⅱ	明赤褐色	にぶい橙色	ﾊｹ目	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄橙色	石英、角閃石、赤色粒	
120	成川式土器	壺	底部		B-3	Ⅱ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	灰黄褐色	石英、角閃石、長石、赤色粒	

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様･その他
121	成川式土器	壺	底部		B-5	Ⅱ	浅黄色	にぶい橙色	ﾅﾃﾞ、ﾊｹ目	ﾅﾃﾞ	にぶい橙色	石英、角閃石、長石、赤色粒	
122	成川式土器	壺	底部	底径 3.0	B-3	Ⅲa	褐灰色	浅黄橙色	ﾊｹ目	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	灰黒色	石英、角閃石、長石	
123	成川式土器	壺	底部	底径 3.4	C-12	Ⅲ	黄灰色	橙色	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾊｹ目	橙色	石英、赤色粒	
124	成川式土器	壺	底部	底径 7.0		Ⅱ	橙色	橙色	ﾍﾗｹｽﾞﾘ、ﾊｹ目	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	暗灰黄色	石英、角閃石	
125	成川式土器	壺	底部	底径 9.4	C-11	Ⅱ	にぶい橙色	にぶい橙色	工具ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	褐灰色	長石、雲母	
126	成川式土器	壺	底部	底径 4.0	溝3	Ⅱ	橙色	灰褐色	研磨	研磨	灰褐色	石英、角閃石、長石	
127	成川式土器	壺	胴～底部	底径 8.0	C-6	Ⅰc	橙色	明黄褐色	ﾅﾃﾞ	ﾊｹ目	褐灰色	石英、雲母、赤色粒	
128	成川式土器	壺	底部	底径 7.0	F-5	Ⅲa	にぶい黄褐色	灰黄褐色	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾊｹ目	にぶい黄橙色	石英、角閃石、長石、赤色粒	
129	成川式土器	壺	口縁部	口径 15.4			橙色	橙色	ﾊｹ目	手ﾅﾃﾞ	浅黄橙色	石英、角閃石、長石	
130	成川式土器	壺	口縁～胴部	口径 18.0	F-5	Ⅲa	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾊｹ目、指つかみ	灰黄褐色	石英、角閃石、長石	
131	成川式土器	坩	底部	底径 5.4	E-3	Ⅲa	褐灰色	にぶい黄橙色	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色	石英、角閃石	
132	成川式土器	坩	底部	底径 4.0	C-6	Ⅲ	にぶい橙色	橙色	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙色	石英、角閃石、赤色粒	
133	成川式土器	坩	底部		C-6	Ⅲ	にぶい橙色	浅黄橙色	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい橙色	石英、角閃石、長石	
134	成川式土器	高坏	口縁部	口径 23.0	D-7	Ⅱ	にぶい黄橙色	暗褐色	ﾊｹ目、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾊｹ目	にぶい黄褐色	石英、長石	
135	成川式土器	高坏	坏部		B-4	Ⅱ	にぶい黄橙色	明灰黄色	ﾊｹ目	ﾖｺﾅﾃﾞ	褐灰色	角閃石、雲母	
136	成川式土器	高坏	脚部		B-4	Ⅱ	橙色	橙色	ﾅﾅﾒﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙色	石英、長石、赤色粒	
137	成川式土器	高坏	筒部		D-3	Ⅲa	にぶい橙色	にぶい橙色	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	工具痕	灰白色	角閃石、長石、赤色粒	
138	成川式土器	高坏	筒部		D-7	Ⅱ	橙色	橙色	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	指ﾅﾃﾞ	褐灰色	角閃石、長石、赤色粒	
139	成川式土器	高坏	脚部	脚径 14.0	B-4	Ⅲa	橙色	橙色	ﾊｹ目、研磨	ﾊｹ目	明黄褐色	石英、角閃石、長石、雲母	
140	成川式土器	高坏	脚部	脚径 9.0	C-12	Ⅱ	橙色	にぶい黄橙色	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙色	石英、雲母、赤色粒	
141	成川式土器	高坏	脚部		C-6		にぶい黄褐色	橙色	ﾊｹ目	ﾊｹ目	橙色	細粒	
142	成川式土器	高坏	脚部	脚径 12.0	E-6		明黄褐色	橙色	ﾅﾃﾞ	ﾊｹ目	にぶい黄色	細粒	
143	成川式土器	手づくね匙	取っ手		D-5	Ⅰc	黄橙色	橙色	手ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	淡橙色	石英、角閃石、長石	
144	成川式土器	手づくね匙	取っ手		B-6	Ⅱ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	手ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	細粒	
145	土師器	甕	口縁部	口径 36.6	D-11	Ⅱ	にぶい褐色	にぶい橙色	ﾊｹ目	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい橙色	石英、角閃石、赤粒石	
146	土師器	甕	口縁部		D-11	Ⅱ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ﾊｹ目	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	黒色	石英、角閃石、砂粒	
147	土師器	甕	口縁部		B-4	Ⅱ	にぶい橙色	にぶい褐色	ﾊｹ目	ﾊｹ目	にぶい黄橙色	石英、角閃石	
148	土師器	甕	口縁部	口径 29.6	F-8	Ⅳa	橙色	にぶい黄橙色	ﾊｹ目	ﾅﾃﾞ	にぶい橙色	石英、角閃石、長石	
149	土師器	甕	口縁部	口径 24.0	D-11	Ⅱ	暗赤褐色	橙色	ﾊｹ目	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	暗赤褐色	石英、角閃石	
150	土師器	甕	口縁部	口径 19.6	B-4	Ⅱ	明赤褐色	にぶい黄橙色	ﾊｹ目	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	黒色	石英、角閃石	
151	土師器	甕	口縁部	口径 33.8	B-5	Ⅱ	にぶい褐色	にぶい橙色	ﾊｹ目	ﾊｹ目	にぶい黄橙色	石英、角閃石、雲母	
152	土師器	甕	口縁部	口径 33.6	B-5	Ⅱ	褐色	にぶい黄橙色	ﾊｹ目	ﾊｹ目	灰褐色	石英、角閃石、長石	
153	土師器	甕	口縁部	口径 30.8	C-12	Ⅱ	にぶい橙色	にぶい橙色	ﾖｺﾊｹ目	ﾖｺﾊｹ目	褐灰色	石英、角閃石	
154	土師器	甕	口縁～頸部	口径 28.2	D-11	Ⅰ	褐色	にぶい橙色	ﾊｹ目	ﾊｹ目、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	褐灰色		
155	土師器	甕	口縁部			Ⅱ	黒褐色	赤褐色	ﾊｹ目	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	明褐色	石英、角閃石、砂粒	
156	土師器	甕	口縁部		C-12	Ⅱ	灰黄褐色	暗灰褐色	ﾊｹ目	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	灰黄褐色	石英、角閃石	
157	土師器	甕	口縁部	口径 24.4	C-12	Ⅱ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ﾊｹ目	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	灰黄褐色	石英、角閃石、赤色粒	
158	土師器	甕	口縁～胴部	口径 23.0	D-3	Ⅱ	褐灰色	にぶい黄橙色	ﾖｺﾊｹ目	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄橙色	石英、長石	
159	土師器	甕	口縁～頸部	口径 24.0	E-4	Ⅰb	にぶい橙色	にぶい褐色	ﾊｹ目	ﾊｹ目	にぶい黄褐色		
160	土師器	甕	口縁～頸部	口径 19.2	F-7	Ⅰa	にぶい赤褐色	にぶい褐色	ﾊｹ目	ﾊｹ目	暗赤褐色		
161	土師器	甕	口縁～頸部	口径 28.0	D-11	Ⅰ	明褐色	にぶい橙色	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい黄褐色		
162	土師器	坏	体～底部	底径 8.0	B-5	Ⅱ	黄橙色	黄橙色	水挽き	水挽き	にぶい黄橙色	細砂	

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様･その他
163	土師器	坏	底部	底径 6.2	C-12	Ⅱ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	水挽き、ﾍﾗ切り、ﾍﾗ削り	水挽き	にぶい黄橙色	細粒	充実高台
164	土師器	坏	底部	底径 6.0	B-5	Ⅱ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、ﾍﾗ切り	水挽き	浅黄橙色	細粒	充実高台
165	土師器	坏	体～底部	底径 6.4	B-3	Ⅰc	淡黄色	淡黄色	ﾍﾗﾅﾃﾞ	水挽き	浅黄色	細粒	充実高台
166	土師器	坏	底部	底径 5.2	E-6	Ⅱ	淡黄色	淡黄色	水挽き、ﾍﾗ切り	水挽き	淡黄色	細粒	充実高台
167	土師器	坏	底部	底径 7.0	B-5	Ⅱ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ﾍﾗ仕上げ	水挽き	にぶい黄橙色	細粒	充実高台
168	土師器	坏	底部	底径 6.6	D-11	Ⅰb	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色	細粒	充実高台
169	土師器	坏	体～底部	底径 5.2	B-3	Ⅱ	浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き、ﾍﾗ切り	水挽き	にぶい橙色	細粒	充実高台
170	土師器	坏	底部	底径 6.0	B-4	Ⅲ	灰黄色	浅黄色	ﾍﾗ切り	水挽き	浅黄色	細粒	充実高台
171	土師器	坏	底部	底径 6.0	D-12	Ⅲa	浅黄橙色	淡黄色	ﾍﾗﾅﾃﾞ		淡黄色	細粒	充実高台
172	土師器	坏	底部	底径 7.5	F-7	Ⅰb	浅黄色	浅黄色	水挽き、ﾍﾗ切り	水挽き	灰黄色	細粒	
173	土師器	埦	口縁～高台	口径 13.0	C-12		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き	水挽き	にぶい黄橙色	細粒	
174	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 12.2	C-12		明黄褐色	黒色	研磨	水挽き	明黄褐色	細粒	
175	須恵器	捏鉢	口縁～胴部		E-8	Ⅰb	暗ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	ﾍﾗｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ	灰ｵﾘｰﾌﾞ色		
176	須恵器	壺	口縁～肩部	口径 14.2	D-10	Ⅰa	暗褐色	暗灰黄色	水挽き	水挽き	浅黄色	細粒	
177	須恵器	甕	頸部	頸径 12.4	E-6	Ⅰc	ｵﾘｰﾌﾞ褐色	暗ｵﾘｰﾌﾞ褐色	灰釉、水挽き		浅黄色	荒粒	
178	須恵器	甕	頸部	頸径 15.4	B-4	Ⅱ	灰色	灰色	灰釉、ﾍﾗﾅﾃﾞ		灰色	荒粒	
179	須恵器	甕	頸部	頸径 21.4	C-4	Ⅰc	ｵﾘｰﾌﾞ黄色	灰色	灰釉		灰ｵﾘｰﾌﾞ色	荒粒	
180	須恵器	甕	頸～肩部		D-5	Ⅰc	灰色	灰色	格子目ﾀﾀｷ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	灰色	細粒	
181	須恵器	甕	頸～肩部	頸径 20.5	D-10	Ⅰb	黄灰色	にぶい黄色	ﾛｸﾛ調整、格子目ﾀﾀｷ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄色		
182	須恵器	甕	胴部		D-9	Ⅱ	黄灰色	黄灰色	格子目ﾀﾀｷ	ﾀﾀｷ	黄灰色	細粒	
183	須恵器	甕	胴部		C-11	Ⅱ	灰色	灰色	格子目ﾀﾀｷ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい橙色	細粒	
184	須恵器	甕	胴部		D-3	Ⅰc	灰色	灰色	格子目ﾀﾀｷ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	灰色	細粒	
185	須恵器	甕	胴部		D-7	Ⅰc	にぶい黄褐色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	格子目ﾀﾀｷ	ﾀﾀｷ	灰黄色	細粒	
186	須恵器	甕	胴部		B-4	Ⅲa	にぶい褐色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	格子目ﾀﾀｷ	同心円文ﾀﾀｷ	灰色		
187	須恵器	甕	胴部		C-6	Ⅰc	ｵﾘｰﾌﾞ褐色	黄灰色	ﾀﾀｷ	ﾀﾀｷ	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	細粒	
188	須恵器	甕	胴部		C-10	Ⅱ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	ﾀﾀｷ	青海波ﾀﾀｷ	にぶい黄橙色	細粒	
189	須恵器	壺	底部	底径 11.2	C-2	Ⅰb	暗ｵﾘｰﾌﾞ褐色	ｵﾘｰﾌﾞ褐色	灰釉	灰釉	灰黄色	細粒	
190	須恵器	壺	底部	底径 10.6	E-6	Ⅰc	灰色	灰色	ﾊｹ目	ﾍﾗﾅﾃﾞ	灰色	荒粒	
191	須恵器	壺	底部	底径 8.0	C-11	Ⅰc	灰色	灰色	ﾊｹ目、ﾍﾗﾅﾃﾞ	水挽き	灰色	細粒	
192	須恵器	壺	頸部	頸径 7.0	D-10	Ⅰb	灰色	灰色	水挽き	水挽き	灰白色		
193	須恵器	盤	底部	底径 25.0	D-10	Ⅰb	灰色	灰色	格子ﾀﾀｷ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	灰色		
194	須恵器	坏	口縁～体部	口径 11.0	B-3	Ⅱ	黄灰色	灰黄色	水挽き	水挽き	灰黄色		
195	須恵器	埦	底部	底径 6.8	C-10	Ⅱ	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	水挽き	水挽き	灰色	荒粒	
196	須恵器	壺	胴部		B-5	Ⅱ	灰色	灰黄色	水挽き	ﾊｹ目	灰黄色	荒粒	突帯

第44表　中世・近世出土遺物一覧

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様･その他
197	白磁	皿	体～底部	底径 3.4	掘立柱1	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	細粒	
198	土師器	埦	口縁～体部	口径 15.0	掘立柱1		ｵﾘｰﾌﾞ褐色	にぶい黄橙色	水挽き、ﾅﾃﾞ	研磨	にぶい黄橙色	細粒	
199	土師器	埦	口縁～体部	口径 15.0	掘立柱1		黄橙色	暗褐色	研磨	研磨	浅黄色	細粒	
200	土師器	埦	体部～高台	底径 7.0	掘立柱1		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	にぶい黄色	細粒	
201	土師器	埦	口縁～体部	口径 12.0	掘立柱1		にぶい褐色	にぶい橙色	水挽き、ﾊｹ目	水挽き	にぶい褐色	細粒	
202	土師器	坏	口縁～底部	口径 14.2	掘立柱1		黄褐色	黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	黄褐色	細粒	
203	土師器	坏	口縁～底部	口径 17.8	掘立柱1		橙色	にぶい黄褐色	水挽き、ﾊｹ目、糸切り	水挽き、ﾊｹ目	にぶい橙色	細粒	
204	黒色土器A	埦	体～底部	底径 7.4	掘立柱1		褐色	黒色	研磨	研磨	褐色	細粒	
205	赤色土器	埦	口縁～高台	口径 16.8	掘立柱1		にぶい黄褐色	明黄褐色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
206	黒色土器A	埦	底部	底径 7.0	掘立柱1		褐色	黒色		研磨	にぶい黄褐色	細粒	
207	土師器	埦	口縁～高台	口径 17.0	掘立柱1		黄褐色	明黄褐色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
208	土師器	坏	口縁～底部	口径 16.0	掘立柱1		明黄褐色	明黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	明黄褐色	細粒	
209	土師器	坏	口縁～体部	口径 12.8	掘立柱1		にぶい橙色	にぶい黄褐色	水挽き	水挽き、ﾊｹ目	にぶい橙色	細粒	
210	土師器	坏	口縁～底部	口径 16.0	掘立柱1		明黄褐色	明黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾊｹ目	明黄褐色	細粒	
211	黒色土器A	坏	口縁～体部	口径 16.0	掘立柱1		にぶい黄橙色	ｵﾘｰﾌﾞ黒色	研磨	研磨	明黄褐色	細粒	
212	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.4	掘立柱1		浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色		
213	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.4	掘立柱1		浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	灰黄色	細粒	
214	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.4	掘立柱1		黄橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	明黄褐色	細粒	
215	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	掘立柱1		橙色	明黄褐色	水挽き	水挽き	にぶい黄橙色	細粒	
216	土師器	小皿	底部	底径 5.0	掘立柱1		明黄褐色	明黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾊｹ目	明黄褐色	細粒	
217	黒色土器A	埦	体部		掘立柱6		明黄褐色	黒色	研磨	研磨	灰色	細粒	
218	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 12.6	掘立柱8		暗褐色	黒色	研磨	研磨	灰色	細粒	
219	土師器	坏	口縁～体部	口径 14.4	掘立柱10		にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	水挽き	水挽き	にぶい橙色	細粒	
220	土師器	坏	口縁～体部	口径 12.0	掘立柱10		黄褐色	明黄褐色	水挽き	ﾊｹ目	黄褐色	細粒	
221	土師器	坏	底部	底径 9.0	掘立柱10		にぶい黄褐色	暗褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄褐色	細粒	
222	青磁	碗	口縁～体部	口径 15.6	掘立柱11		灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、垂釉	施釉	灰色	細粒	
223	土師器	坏	口縁～体部	口径 10.0	掘立柱11		淡黄色	淡黄色	水挽き	水挽き	淡黄色	細粒	
224	青磁	碗	口縁～体部	口径 12.0	掘立柱13		灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰色	細粒	
226	白磁Ⅳ類	碗	口縁部	口径 15.6	掘立柱16		灰白色	灰白色	施釉、貫入	施釉、貫入	浅黄色	細粒	玉縁
227	白磁	碗	口縁～体部	口径 15.0	掘立柱16		灰色	灰色	施釉、露胎	施釉、釉剥げ	灰白色		沈線(内)
228	土師器	坏	口縁～体部	口径 17.0	掘立柱16		橙色	明赤褐色	水挽き	水挽き	橙色		
229	黒色土器A	埦	口縁部	口径 19.6	掘立柱16		黄灰色	黒色	研磨	研磨	灰色	細粒	
230	黒色土器A	埦	口縁部	口径 17.0	掘立柱16		にぶい黄橙色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	
231	黒色土器A	埦	口縁部	口径 13.0	掘立柱16		黒色	にぶい黄橙色	研磨	研磨	にぶい黄橙色		
232	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 6.4	掘立柱16		にぶい黄橙色	黒色	研磨、糸切り	研磨	にぶい黄橙色	細粒	
233	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.5	掘立柱16		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾊｹ目	浅黄橙色		
234	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	掘立柱16		灰白色	灰黄色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾊｹ目	灰色		
235	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.2	掘立柱16		橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾊｹ目	橙色		
236	土師器	小皿	口縁～底部	口径 6.8	掘立柱16		橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾊｹ目	浅黄橙色		
237	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	掘立柱16		浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色		
238	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.0	掘立柱16		橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色		
239	黒色土器B	小皿	口縁～体部	口径 7.2	掘立柱16		黒褐色	黒色	研磨、糸切り	研磨	黒色		
241	土師器	坏	体部		掘立柱17		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き	水挽き、ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい橙色		
242	土師器	小皿	底部	底径 6.6	掘立柱17		橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色		
243	土師器	坏	体～底部	底径 7.0	掘立柱18		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色		
244	黒色土器A	埦	口縁部	口径 15.8	掘立柱19		黒色、灰黄色	黒色	研磨	研磨	黒色		
245	土師器	坏	底部	底径 10.0	掘立柱19		浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色		
247	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 16.6	掘立柱21		黒褐色	黒褐色	研磨	研磨	暗褐色	細粒	

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
248	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 18.0	掘立柱21		にぶい黄橙色	黒色	研磨	研磨	褐色	細粒	
249	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 7.4	掘立柱21		にぶい黄色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄色		
250	土師器	坏	体～底部	底径 8.0	掘立柱21		浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	ハケ目	浅黄橙色		
251	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.4	掘立柱21		黄褐色	黄褐色	水挽き	水挽き	黄褐色	細粒	
252	白磁	碗	口縁部	口径 18.2	掘立柱22		灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		端反り
253	土師器	坏	体～底部	底径 10.0	掘立柱22		褐色	にぶい橙色	水挽き	水挽き	にぶい橙色	細粒	
254	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.0	掘立柱22		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい黄橙色	細粒	
255	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 16.6	掘立柱22		浅黄色	黒色	研磨、ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	灰色	細粒	
256	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 16.0	掘立柱22		にぶい黄橙色	黒色	研磨	研磨	灰黄褐色		
257	土師器	坏	体～底部	底径 9.0	掘立柱24		橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色		
258	白磁	皿	口縁～底部	口径 11.0	掘立柱25		灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		
259	土師器	埦	口縁～体部	口径 16.0	掘立柱25		橙色	明黄褐色	水挽き	水挽き	橙色		
261	白磁	碗	体部		掘立柱30		灰白色	灰白色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色		
262	土師器	坏	口縁～底部	口径 13.0	掘立柱31		橙色	橙色	水挽き、ﾅﾃﾞ	水挽き、ﾅﾃﾞ	にぶい橙色		
263	白磁	碗	口縁～体部	口径 17.4	方形竪穴1		明ｵﾘｰﾌﾞ色	明ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
264	白磁	碗	口縁～体部	口径 16.4	方形竪穴1		灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		端反り
265	青磁	碗	口縁部	口径 18.4	方形竪穴1		ｵﾘｰﾌﾞ黄色	ｵﾘｰﾌﾞ黄色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色		
266	土師器	坏	口縁～体部	口径 14.0	方形竪穴1		にぶい黄色	にぶい黄橙色	水挽き	水挽き	褐灰色		
267	土師器	埦	口縁～体部	口径 17.0	方形竪穴1		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	研磨	研磨	浅黄橙色	細粒	
268	土師器	埦	口縁～体部	口径 15.0	方形竪穴1		にぶい黄褐色	黄褐色	研磨	研磨	にぶい黄橙色	細粒	
269	黒色土器A	埦	口縁部	口径 14.0	方形竪穴1		黒褐色	黒色	研磨	研磨	灰黄褐色		
270	黒色土器A	埦	口縁部	口径 18.8	方形竪穴1		灰黄褐色	黒色	研磨	研磨	褐灰色		
271	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 6.6	方形竪穴1		にぶい黄橙色	黒色	研磨	研磨	黄灰色		
272	土師器	坏	底部	底径 8.6	方形竪穴1		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色		
273	土師器	坏	底部	底径 10.0	方形竪穴1		にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色		
274	土師器	坏	体～底部	底径 10.2	方形竪穴1		灰黄褐色	にぶい橙色	水挽き、糸切り、敷跡	水挽き	褐灰色		
275	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.4	方形竪穴1		灰黄褐色	灰黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色		
276	土師器	小皿	口縁～底部	口径 11.0	方形竪穴1		橙色	にぶい橙色	水挽き	水挽き			
277	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	方形竪穴1		橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色		
278	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	方形竪穴1		橙色	にぶい橙色	水挽き	水挽き	灰褐色		
279	土師器	小皿	底部	底径 6.8	方形竪穴1		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色		
280	土師器	小皿	底部	底径 6.6	方形竪穴1		橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色		
281	白磁	碗	口縁～体部	口径 15.8	方形竪穴2		灰色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰色		玉縁
282	白磁	碗	口縁～体部	口径 16.2	方形竪穴2		灰色	灰色	施釉	施釉	灰色		端反り
283	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 15.0	方形竪穴2		浅黄橙色、黒色	黒色	研磨	研磨	黒色		
284	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 17.0	方形竪穴2		浅黄橙色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄橙色	細粒	
285	黒色土器A	埦	口縁部	口径 16.0	方形竪穴2		浅黄橙色、黒色	黒色	研磨	研磨	黒色		
286	黒色土器A	埦	底部	底径 6.8	方形竪穴2		浅黄橙色	黒色	水挽き、研磨	研磨	黒色		
287	黒色土器A	埦	底部	底径 7.4	方形竪穴2		浅黄色	黒色	水挽き、ハケ目	研磨	灰黄褐色	細粒	
288	土師器	坏	体～底部	底径 6.0	方形竪穴2		にぶい黄橙色	灰黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい黄橙色		
289	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.6	方形竪穴2		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい橙色		
290	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.6	方形竪穴2		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい橙色		
291	土師器	小皿	底部	底径 4.4	方形竪穴2		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色		
292		石鍋	胴部		方形竪穴2		黒色	黒色	ﾀﾃｹｽﾞﾘ	研磨	褐灰色	滑石	
293	青白磁	合子	蓋	下部 6.0	方形竪穴3		灰白色	灰白色	施釉	施釉、露胎	明緑色		
294	黒色土器A	埦	底部	底径 6.2	方形竪穴3		にぶい黄橙色	黒色	水挽き、糸切り	研磨	にぶい黄橙色	細粒	
295	黒色土器A	埦	底部	底径 7.4	方形竪穴3		にぶい黄橙色	黒色		研磨	黒褐色		
296	土師器	坏	口縁～底部	口径 12.6	方形竪穴3		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい橙色		

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
297	土師器	坏	口縁～体部	口径 13.4	方形竪穴3		浅黄色	浅黄色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色	細粒	
298	土師器	坏	口縁～体部	口径 11.6	方形竪穴3		灰黄色	灰黄色	水挽き、糸切り	水挽き	灰黄色	細粒	
299	土師器	坏	底部	底径 4.6	方形竪穴3		灰黄褐色	灰黄褐色	水挽き	ﾊｹ目	灰黄褐色	細粒	
300	土師器	小皿	口縁～底部	口径 6.8	方形竪穴3		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色	細粒	
301	黒色土器A	埦	口縁部	口径 12.0	方形竪穴3		黒褐色	黒色	研磨	研磨	ｵﾘｰﾌﾞ褐色	細粒	
302	白磁	碗	口縁～体部	口径 16.0	方形竪穴4		灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	明ｵﾘｰﾌﾞ灰色		玉縁
303	白磁	碗	口縁～体部	口径 17.2	方形竪穴4		灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰色		玉縁
304	白磁	碗	口縁～体部	口径 15.0	方形竪穴4		灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		端反り
305	白磁	碗	口縁～体部	口径 18.0	方形竪穴4		明緑灰色	明緑灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	淡黄色		端反り
306	青磁	碗	口縁～体部	口径 14.0	方形竪穴4		灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰白色		
307	白磁	碗	体部～高台	底径 6.0	方形竪穴4		灰黄色	灰黄色	露胎	施釉	灰黄色		
308	白磁		蓋	径 3.4	方形竪穴4		灰白色	灰白色	施釉、露胎	露胎	灰白色		
309	赤色土器	埦	口縁部	口径 12.0	方形竪穴4		橙色	赤色	研磨	研磨	浅黄橙色		
310	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 14.2	方形竪穴4		にぶい黄橙色	黒色	研磨	研磨	黄灰色		
311	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 17.4	方形竪穴4		にぶい橙色	黒色	研磨	研磨	褐灰色		
312	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 6.4	方形竪穴4		にぶい黄橙色	黒色	水挽き、ﾊｹ目	研磨	にぶい黄橙色		
313	土師器	小皿	体～底部	底径 4.5	方形竪穴4		明赤褐色	明赤褐色	水挽き	水挽き	にぶい赤褐色		
314	土師器	小皿	底部		方形竪穴4		灰ｵﾘｰﾌﾞ色	浅黄色	ﾊｹ目	水挽き	浅黄色		
315	土師器	坏	口縁～底部	口径 13.4	方形竪穴4		橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色		
316	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.4	方形竪穴4		橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色		
317	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.4	方形竪穴4		浅黄橙色	にぶい黄色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾊｹ目	にぶい黄色	細粒	
318	土師器	小皿	底部	底径 6.0	方形竪穴4		にぶい黄橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾊｹ目	にぶい黄橙色	細粒	
319	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.8	方形竪穴4		浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色		
320	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.1	方形竪穴4		にぶい橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾊｹ目	浅黄橙色		
321	土師器	小皿	口縁～底部	口径 11.4	方形竪穴4		橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色		
322	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.2	方形竪穴4		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色		
323	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	方形竪穴4		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色		
324	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.6	方形竪穴4		橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾊｹ目	橙色		
325	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.4	方形竪穴4		橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色		
326	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.4	方形竪穴4		橙色	明黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	細粒	
327	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	方形竪穴4		黄橙色	黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾊｹ目	黄橙色		
328	白磁	碗	口縁部	口径 16.0	方形竪穴5		ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉	施釉、露胎	灰色		口剥げ
329	青磁	碗	口縁～体部	口径 17.0	方形竪穴5		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	施釉、貫入	施釉、貫入	にぶい橙色		鎬蓮弁文
330	青白磁	合子	蓋	径 4.0	方形竪穴5		明緑灰色	明緑灰色	施釉	露胎	灰白色		
331	土師器	坏	口縁～体部	口径 14.0	方形竪穴5		にぶい褐色	明褐色	水挽き、ﾊｹ目	水挽き、ﾊｹ目	にぶい褐色		
332	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 17.6	方形竪穴5		黒色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	黄褐色		
333	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 15.0	方形竪穴5		灰黄褐色	黒色	研磨	研磨	灰黄褐色		
334	黒色土器A	埦	底部	底径 7.0	方形竪穴5		にぶい黄橙色	黒色	水挽き、研磨	研磨	褐灰色		線刻
335	黒色土器A	埦	底部	底径 7.4	方形竪穴5		にぶい黄橙色	黒色	水挽き	研磨	褐灰色		
336	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 6.0	方形竪穴5		にぶい黄橙色	黒色	水挽き、研磨	研磨	浅黄橙色		
337	土師器	坏	口縁～体部	口径 15.6	方形竪穴5		にぶい黄橙色	浅黄橙色	水挽き	水挽き	浅黄橙色		
338	土師器	坏	底部	底径 11.4	方形竪穴5		黄褐色	黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾊｹ目	黄褐色		
339	土師器	坏	底部	底径 9.4	方形竪穴5		橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色		
340	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	方形竪穴5		橙色	明黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾊｹ目	明黄褐色		
341	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.3	方形竪穴5		灰黄色	にぶい黄色	水挽き	水挽き	灰黄色		
342	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.8	方形竪穴5		にぶい黄色	にぶい黄色	水挽き	水挽き	にぶい黄色		
343	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.6	方形竪穴5		橙色	橙色	水挽き、ﾊｹ目、糸切り	水挽き	にぶい橙色		
344	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.0	方形竪穴5		浅黄色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾊｹ目	にぶい黄橙色		

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
345	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	方形竪穴5		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色		
348	白磁	碗	口縁部	口径 18.6	C-6		灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		玉縁
349	白磁	碗	口縁～体部	口径 18.6	C-6		灰白色	灰白色	施釉、垂釉、露胎	施釉	灰白色		端反り
350	土師器	坏	完形	口径 15.9	C-6		橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	橙色	細粒	
351	土師器	坏	口縁～体部	口径 13.8	C-6		橙色	にぶい黄橙色	水挽き	水挽き	橙色		
352	土師器	小皿	完形	口径 9.2	C-6		橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色	細粒	
353	土師器	小皿	完形	口径 9.1	C-6		橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色	細粒	
354	土師器	小皿	完形	口径 9.2	C-6		にぶい黄橙色	浅黄色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	浅黄色	細粒	
355	土師器	小皿	完形	口径 8.8	C-6		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙色	細粒	
356	土師器	小皿	完形	口径 7.2	C-6		浅黄色	浅黄色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい黄橙色	細粒	
357	土師器	小皿	完形	口径 8.5	C-6		橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	橙色	細粒	
358	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.0	C-6		橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	橙色		
359	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.6	C-6		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色		
360	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.4	C-6		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	明褐灰色		
361	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.6	C-6		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色		
362	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	C-6		橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	橙色		
363	黒色土器B	小皿	底部	底径 7.0	C-6		黒色	黒色	水挽き、研磨、糸切り	水挽き、研磨	黒色		
365	白磁	碗	完形	口径 17.0	C-5		灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		
366	白磁	碗	完形	口径 16.0	C-9		灰白色、浅黄色	浅黄色	施釉、垂釉、露胎	施釉、垂釉	灰黄色		
367	白磁	碗	完形	口径 17.2	C-7		灰白色	灰白色	施釉、垂釉、露胎	施釉、垂釉	灰白色		
368	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 16.0	C-11	Ⅱ	浅黄色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	浅黄色		
369	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 17.0	C-11	Ⅱ	黒色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、ハケ目、研磨	にぶい黄橙色		
370	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 11.0	C-11	Ⅱ	にぶい褐色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	灰黄色		
371	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 14.0	C-11	Ⅱ	にぶい黄橙色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	黒褐色		
372	土師器	坏	口縁～体部	口径 13.8	C-11		橙色	橙色	水挽き	水挽き	橙色		
373	土師器	坏	底部	底径 5.7	C-11		にぶい黄橙色		水挽き		灰黄色		
374	青磁	碗	口縁～体部	口径 14.4	E-4		灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰色	細粒	
375	土師器	小皿	口縁～体部	口径 8.6	E-4		明黄褐色	明黄褐色	水挽き	水挽き、ハケ目	にぶい黄橙色	細粒	
376	黒色土器B	埦	口縁部	口径 9.2	C-12		黒色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	黒褐色		
377	土師器	坏	底部	底径 6.4	D-5		灰黄褐色	にぶい黄橙色	水挽き、ﾍﾗ切り	水挽き	にぶい黄橙色		
378	土師器	坏	口縁部		C-7		灰褐色	灰褐色	水挽き	水挽き	にぶい褐色		
379	成川式土器	甕	胴部		C-7		黒褐色	赤褐色	ﾍﾗ切り	ﾀﾃﾖｺﾊｹ目	褐色		
380	土師器	坏	口縁～底部	口径 14.4	C-12		橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色	細粒	
381	黒色土器B	坏	底部	底径 7.6	C-12		黒褐色	黒褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい褐色	細粒	
382	黒色土器A	坏	口縁～底部	口径 18.6	C-12		淡黄色	黒色	研磨	研磨	灰黄色	細粒	
383	土師器	坏	口縁～体部	口径 15.6	C-12		灰黄褐色	灰黄褐色	水挽き	水挽き	橙色		
384	土師器	坏	口縁～体部	口径 13.2	C-12		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き	水挽き	にぶい褐色		
385	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	C-12		にぶい橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	橙色		
386	土師器	小皿	底部	底径 7.0	C-12		にぶい橙色	橙色	糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい黄橙色		
395	白磁Ｖ類	碗	体部～高台	底径 7.5	C-4・5		淡黄色	淡黄色	水挽き、施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	淡黄色		
396	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 14.7	C-4・5		にぶい黄褐色	黒褐色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	灰褐色		
397	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 14.3	C-4・5		黒褐色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	灰黄褐色		
398	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 15.2	C-4・5		にぶい黄橙色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	黒褐色		
399	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 13.4	C-4・5		にぶい黄橙色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	黒褐色		
400	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 6.6	C-4・5		灰黄褐色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	にぶい橙色		
401	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 7.2	C-4・5		浅黄色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	暗灰黄色		
402	土師器	坏	口縁～体部	口径 16.0	C-4・5		橙色	橙色	水挽き	水挽き	橙色		
403	土師器	坏	口縁～体部	口径 12.0	C-4・5		灰黄色	灰黄色	水挽き	ハケ目	灰黄色		

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
404	土師器	坏	体～底部	底径 8.0	F-5	Ⅱ	明黄褐色	明黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	明黄褐色		
405	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.4	C-4・5		にぶい橙色	橙色	水挽き、ハケ目、糸切り	水挽き、ハケ目	浅黄橙色		
406	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	C-4・5		橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい橙色		
407	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	C-4・5		浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色		
408	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.6	C-4・5		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色		
409	白磁Ⅴ類	碗	口縁～体部	口径 16.0	D-7		ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉	施釉、垂釉	灰白色		玉縁
410	黒色土器A	埦	口縁部	口径 12.0	D-6		浅黄色	黒色	研磨	研磨	淡黄色		
411	土師器	坏	口縁～体部	口径 12.0	D-6		浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き	水挽き	浅黄橙色		
412	土師器	坏	口縁部	口径 15.0	D-7	Ⅱ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	研磨	研磨	にぶい黄橙色		
413	土師器	坏	口縁～体部	口径 14.0	D-6		明黄褐色	明黄褐色	水挽き	水挽き	明黄褐色		
414	土師器	坏	底部	底径 4.0	D-6		明黄褐色	明黄褐色	水挽き、ハケ目、糸切り	水挽き、ハケ目	浅黄橙色		
415	土師器	坏	体～底部	底径 6.0	D-6		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色		
416	黒色土器A	埦	口縁部	口径 19.0	D-7	Ⅱ	灰黄褐色	黒色	研磨	研磨	灰黄褐色		
417	黒色土器B	埦	口縁部	口径 17.0	D-7	Ⅱ	黒色	黒色	研磨	研磨	灰黄褐色		
418	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 6.4	D-7	Ⅱ	灰黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	灰褐色		
419	土師器	坏	底部	底径 7.0	D-7	Ⅱ	橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい橙色		
420	土師器	坏	底部	底径 7.0	D-7	Ⅱ	黄橙色	黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	明黄褐色		
421	土師器	坏	底部	底径 8.6	D-7	Ⅱ	にぶい褐色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色		
422	土師器	小皿	口縁～底部	口径 11.0	D-7	Ⅱ	橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色		
423	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	D-7	Ⅱ	橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色		
424	白磁	皿	口縁～体部	口径 11.0	D-8		灰色	灰色	施釉	施釉	灰白色		端反り
425	土師器	甕	口縁部		D-9	Ⅰb	にぶい褐色	にぶい褐色	ハケ目	ハケ目	にぶい黄橙色		
426	土師器	埦	体部～高台	底径 7.2	D-8		明赤褐色	明赤褐色	水挽き、研磨	研磨	にぶい橙色		
427	黒色土器A	埦	底部	底径 7.7	D-8		にぶい黄橙色	黒色	水挽き	水挽き、研磨	にぶい黄橙色		
428	黒色土器A	埦	底部	底径 5.4	C・D-9		にぶい黄色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	暗灰黄色		
429	土師器	坏	底部	底径 7.0	D-8		橙色	明黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	明黄褐色		
430	土師器	小皿	口縁～底部	口径 6.8	D-8		橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色		
431	白磁	碗	口縁部	口径 12.0	C-13、溝1	Ⅰ	明ｵﾘｰﾌﾞ灰色	明ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉	施釉、露胎	灰白色		端反り、口剥げ
432	青磁Ⅰ類	碗	口縁～体部	口径 18.0	D-12、溝1	Ⅱ	緑灰色	明緑灰色	施釉	施釉	灰白色		花文
433	土師器	埦	体～底部	底径 5.0	C-13、溝1	Ⅰ	浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き	水挽き	黒褐色		充実高台
434	黒色土器A	埦	底部	底径 7.3	C-13、溝1	Ⅰ	浅黄色	黒色	水挽き	水挽き、研磨	灰黄色		
435	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 6.3	D-12、溝1	Ⅱ	にぶい黄色	黒色	水挽き	水挽き、研磨	灰黄色		
436	黒色土器A	埦	底部	底径 7.4	C-13、溝1	Ⅰ	にぶい黄橙色	黒色	水挽き	水挽き、研磨	にぶい黄橙色		
437	土師器	坏	体～底部	底径 10.0	C-13、溝1		浅黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色		
438	土師器	小皿	底部	底径 7.2	D-12、溝1		浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色		
439	黒色土器B	小皿	口縁部	口径 9.0	C-13、溝1		黒色	黒色	研磨	研磨	褐色		
440	青磁	碗	体部		溝2		灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰ｵﾘｰﾌﾞ色		鎬蓮弁文
441	須恵器	甕	胴部		溝2		灰色	黄褐色	ハケ目	ﾅﾃﾞ	灰色		
442	土師器	坏	口縁～体部	口径 16.0	溝2		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き	水挽き	にぶい黄橙色		
443	黒色土器A	埦	底部	底径 6.6	D-11、溝2		にぶい黄橙色	黒色	水挽き	研磨	にぶい黄橙色		
444	土師器	小皿	底部	底径 5.6	D-11、溝2	Ⅱ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	糸切り	水挽き、ハケ目	灰黄褐色		
445	白磁	碗	口縁～体部	口径 15.0	溝3	Ⅱ	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉	施釉	灰白色		
446	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.2	溝3	Ⅱ	橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい黄橙色		
447	青磁	碗	体部		溝4		灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰白色		鎬蓮弁文
448	中国陶器	壺	胴～底部	底径 8.6	溝4		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	鉄釉、露胎	施釉	褐灰色		
449	土師器	坏	口縁～体部	口径 14.0	溝4		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き	水挽き	にぶい黄褐色		
450	土師器	坏	体～底部	底径 8.0	D-6、溝4	Ⅱ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色		
451	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.0	C-6、溝4		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色		

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
452	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 10.8	溝4		黒色	黒色	研磨、糸切り	研磨	黒色		
453	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	D-6、溝4		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色		
454	土師器	小皿	口縁～底部	口径 6.8	D-6、溝4		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい橙色		
455	土師器	小皿	底部	底径 6.0	溝4		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色		
456	白磁	碗	体部～高台	底径 7.6	C・D-7・8、溝5		灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		
457	青磁	碗	口縁～体部	口径 14.0	B-3、溝6	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉	施釉	灰色		
458	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 16.0	C・D-7・8、溝5		黒色	黒色	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	暗灰黄色		
459	土師器	皿	口縁部	口径 18.0	B-4、溝6	Ⅰb	浅黄色	浅黄色	水挽き	水挽き	にぶい黄橙色		
460	土師器	坏	底部	底径 6.0	B-3・4、溝6		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色		
461	白磁Ⅳ類	碗	口縁～高台	口径 15.2	C-12		灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
462	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 15.8	C-12		灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉縁
463	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 15.0	C-12		灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉縁
464	土師器	埦	口縁～体部	口径 16.2	C-12		にぶい黄橙色	明黄褐色	水挽き、研磨	研磨	淡黄色		
465	黒色土器A	埦	口縁～高台	口径 16.8	C-12		黒褐色	黒色	研磨	研磨	黒褐色		線刻
466	土師器	坏	底部	底径 8.8	C-12		にぶい黄橙色	灰白色	研磨	研磨	灰白色		
467	土師器	坏	底部	底径 9.6	C-12		橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	橙色		
468	土師器	小皿	完形	口径 8.4	C-12		橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	橙色		
469	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.6	C-12		橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色		
470	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 8.4	C-12		黒褐色	黒褐色	水挽き	水挽き、ハケ目	灰黄褐色		
471	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.0	C-6		灰白色	灰白色	施釉、貫入	施釉、貫入	浅黄色		玉縁
472	白磁Ⅳ類	碗	口縁部	口径 15.4	D-7		灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉、垂釉	灰ｵﾘｰﾌﾞ色		玉縁
473	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 5.8	C-12		灰白色	灰黄色	露胎	施釉	灰白色		
474	白磁Ⅳ類	碗	口縁部	口径 17.0	C-7		灰白色	灰白色	施釉	施釉	浅黄色	細粒	玉縁
475	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 14.2	F-5		灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	灰白色	細粒	玉縁
476	白磁Ⅳ類	碗	底部	底径 8.8	E-4		灰白色	淡黄色	水挽き、施釉	施釉、貫入	灰白色		
477	青磁	碗	口縁部	口径 18.0	C-4・5		灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色		
478	青磁	盤	底部	底径 10.4	D-4		灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰色	細粒	
479	白磁Ⅷ類	碗	体部～高台	底径 6.4	C-4		灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、釉剥ぎ	灰白色	細粒	
480	白磁	碗	底部	底径 6.8	C-12		灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		
481	中国陶器	四耳壺	胴部		C-8		黒褐色	暗褐色	水挽き、褐釉	水挽き、褐釉	灰黄褐色		
482	土師器	埦	口縁～体部	口径 16.0	C-12		にぶい橙色	にぶい褐色	研磨	研磨	黄灰色		
483	土師器	埦	口縁～体部	口径 16.0	C-12		橙色	にぶい黄橙色	水挽き、研磨	ﾅﾃﾞ、研磨	橙色		
484	土師器	埦	体部～高台	底径 6.4	E・F-6		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄橙色	細粒	
485	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 16.0	D-6		暗灰黄色	黒色	研磨	研磨	にぶい黄色	細粒	
486	黒色土器A	埦	口縁～高台	口径 16.6	D-6・7		にぶい黄色	黒色	研磨	研磨	灰色		線刻
487	黒色土器A	埦	底部	底径 7.6	D-4		にぶい黄橙色	黒色	水挽き、研磨	研磨	浅黄橙色		墨書
488	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 16.0	E-7		灰黄褐色	黒色	研磨	研磨	灰黄色	細粒	
489	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 17.0	C-3		にぶい黄橙色	黒色	研磨、ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	灰色	細粒	
490	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 6.6	E・F-6		にぶい褐色	黒色	研磨	研磨	にぶい褐色		
491	黒色土器A	埦	口縁～高台	口径 16.0	C-6		にぶい黄橙色	黒色	研磨	研磨	淡黄色	細粒	
492	黒色土器A	埦	底部	底径 7.0	C-6		にぶい黄橙色	黒色	水挽き	研磨	浅黄橙色		線刻
493	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 6.8	C-8		にぶい黄橙色	黒色	研磨	研磨	灰黄褐色		
494	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 6.0	D-7		明黄褐色	黒色	研磨	研磨	にぶい橙色、黒色	細粒	
495	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 7.2	C-7		にぶい黄橙色	黒色	水挽き、研磨	研磨	褐色	細粒	
496	黒色土器A	埦	底部	底径 7.4	E-4		明黄褐色	黒色	水挽き	研磨	にぶい黄橙色	細粒	
497	黒色土器A	埦	底部	底径 6.6	F-5		浅黄橙色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	にぶい黄橙色		
498	黒色土器A	埦	底部	底径 7.2	D-7		にぶい黄橙色	黒色	水挽き	研磨	にぶい黄橙色		
499	黒色土器A	埦	底部	底径 6.4	C-11		浅黄色	黒色	水挽き	研磨	灰色		

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
500	土師器	坏	口縁～底部	口径 14.0	C-5		暗灰黄色	暗灰黄色	水挽き、ﾍﾗ切り	水挽き、ﾊｹ目	灰黄色	細粒	
501	土師器	坏	口縁～底部	口径 14.4	D-7		浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色	細粒	
502	土師器	坏	口縁～体部	口径 17.4	C-4		橙色	橙色、黒色	水挽き	水挽き、ﾊｹ目	黄橙色	細粒	
503	土師器	坏	底部	底径 8.4	C-4		にぶい橙色	暗褐色	水挽き	水挽き、ﾊｹ目	にぶい黄褐色	細粒	
504	土師器	坏	底部	底径 10.0	D-6		にぶい褐色	灰黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾊｹ目	橙色		
505	土師器	坏	底部	底径 10.0	C-4・5		にぶい黄色	にぶい黄色	水挽き	水挽き	にぶい黄色	細粒	
506	土師器	坏	底部	底径 10.0	E-3		黄褐色	黄褐色	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	黄褐色	細粒	
507	土師器	坏	底部	底径 8.2	F-6		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾊｹ目	明褐色	細粒(赤色粒有り)	
508	土師器	坏	体～底部	底径 7.8	D-6・7		黄褐色	にぶい黄色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色		
509	土師器	小皿	口縁～底部	口径 12.8	E-3		浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き	水挽き	浅黄橙色	細粒	
510	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.6	D-6		にぶい黄橙色	にぶい橙色	水挽き、ﾍﾗﾅﾃﾞ	水挽き、ﾊｹ目	にぶい黄橙色	細粒	
511	土師器	小皿	完形	口径 9.0	F-4		橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾊｹ目	橙色	細粒	
512	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	C-8		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色		
513	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.6	C-6		にぶい黄色	暗灰黄色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄色	細粒	
514	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	C-6		にぶい橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	細粒	
515	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.5	C-6		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	細粒	
516	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.2	C-12		橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色		
517	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.6	C-5		橙色	明黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	細粒	
518	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.4	C-5		明黄褐色	明黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾊｹ目	にぶい橙色	細粒	
519	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	E・F-6		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	細粒	
520	土師器	小皿	底部	底径 6.0	C-6		明黄褐色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾊｹ目	にぶい橙色		
521	黒色土器A	皿	口縁部	口径 13.4	F-5		黒色	黒色	研磨	研磨	暗褐色	細粒	
522	須恵器	捏鉢	口縁部	口径 24.6	C-5		灰白色	灰白色	水挽き	水挽き、ﾊｹ目	灰白色		東播磨系
525		平瓦			F-6		にぶい橙色	橙色	縄目	布目	橙色		
526	白磁Ⅲ類	碗	口縁～体部	口径 12.4	D-10	Ⅰb	淡黄色	淡黄色	施釉(一部剥離)	施釉(一部剥離)	黄橙色		玉縁
527	白磁Ⅲ類	皿	口縁	口径 17.6	D-5	Ⅰb	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉縁
528	白磁Ⅲ類	皿	口縁部	口径 16.0	D-5	Ⅰb	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉縁
529	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 15.6	C-6	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、垂釉	灰白色		玉縁
530	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 13.8	F-5	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		玉縁
531	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 19.0	C-8	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、垂釉	灰白色		玉縁
532	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.4	B-5	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉、垂釉	灰白色		玉縁
533	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 17.6	D-7	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉縁
534	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 19.6	B-5	Ⅲ	灰白色	灰白色	施釉、露胎、垂釉	施釉	灰白色		玉縁
535	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 17.0	D-10	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉縁
536	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 14.4	F-4	Ⅱ	淡黄色	淡黄色	施釉、露胎	施釉	淡黄色		玉縁
537	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 18.0	C-11	Ⅱ	灰白色	灰白色	ﾛｸﾛ調整、施釉	施釉	灰白色		玉縁
538	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 17.0	E-4	Ⅱ	灰黄色	灰黄色	厚施釉、露胎、垂釉	施釉	灰黄色		玉縁
539	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 17.0	C-6	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉縁
540	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.0	C-7	Ⅰc	灰白色	灰白色	施釉、露胎、垂釉	施釉	灰白色		玉縁
541	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 18.0	C-7	Ⅰc	灰色	灰色	施釉	施釉	灰色		玉縁
542	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.0	D-7	Ⅱ	浅黄色	浅黄色	厚施釉	施釉	浅黄色		玉縁
543	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.0	C-7	Ⅱ	淡黄色	淡黄色	施釉、垂釉	施釉、垂釉	淡黄色		玉縁
544	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 19.0	E-5	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色		玉縁
545	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.0	F-5	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		玉縁
546	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.0	F-4	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
547	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 14.2	C-6	Ⅱ	灰白色	灰白色	ﾛｸﾛ調整、施釉、垂釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
548	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 17.6	D-6	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、貫入	灰色		玉縁
549	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 15.0	C-8	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉縁

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
550	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 17.2	E-7	Ⅱ	灰色	灰色	施釉、垂釉、露胎	施釉	灰色		玉縁
551	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 14.4	C-8	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉縁
552	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 13.0	C-8	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、垂釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
553	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.0	E-6	Ⅰc	灰白色	灰白色	施釉、垂釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
554	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 14.0	D-6	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
555	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 20.8	D-4	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、垂釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
556	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 17.2	E-7	Ⅰc	灰白色	灰白色	施釉、垂釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
557	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 22.0	C-9	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉縁
558	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.8	C-6	Ⅰc	灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		玉縁
559	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.0	C-5	Ⅰc	灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		玉縁
560	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 18.2	D-6	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉縁
561	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.8	F-6	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、垂釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
562	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 17.6			灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉縁
563	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 19.4	C-11	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
564	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 17.0	E-7	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		玉縁
565	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 18.0	F-7	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		玉縁
566	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.2	E-8	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
567	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 14.6	F-5	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉	施釉、露胎	灰白色		玉縁
568	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 15.8	C-6	Ⅰc	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉縁
569	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 15.0	C-8	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
570	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.2	B-3	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
571	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 15.0	D-7	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、垂釉	灰白色		玉縁
572	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 15.0	B-4	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、垂釉	灰白色		玉縁
573	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 6.8	D-11	Ⅰ	灰白色	灰白色	露胎、ハケ目跡	施釉、見込みに段差有	灰白色		
574	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 6.8	E-4	Ⅰb	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、見込みに段差有	灰白色		
575	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 6.6	D-7	Ⅱ	灰白色	灰白色	箆削り高台、露胎	施釉	灰白色		
576	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 6.0	D-8	Ⅱ	浅黄色	浅黄色	箆削り高台、施釉	露胎	浅黄色		
577	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 7.8	E-4	Ⅰc	灰白色	灰白色	箆削り高台、施釉、露胎	施釉	灰白色		
578	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 7.2	E-4	Ⅱ	灰オリーブ色	灰オリーブ色	箆削り高台、施釉	施釉	灰オリーブ色		
579	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 6.2	D-8	Ⅱ	灰白色	灰白色	箆削り高台、露胎	施釉	灰白色		
580	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 8.2	C-6	Ⅱ	灰白色	灰白色	箆削り高台、露胎	施釉	灰白色		
581	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 8.0	D-6	Ⅱ	灰白色	明オリーブ色	箆削り高台、露胎	施釉	灰白色		
582	白磁Ⅳ類	碗	底部	底径 6.0	D-3	Ⅰc	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉、露胎	施釉	灰オリーブ色		
583	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 6.8	C-5	Ⅰb	灰白色	灰白色	露胎	施釉、見込みに段差有	灰色		
584	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 7.6	D-11	Ⅰb	灰色	灰色	施釉、露胎	施釉、見込みに段差有	灰白色		
585	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 7.8	C-10	Ⅱ	灰オリーブ色	灰オリーブ色	箆削り高台、施釉、露胎	施釉	灰オリーブ色		
586	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 7.0	C-7	Ⅱ	浅黄色	浅黄色	箆削り高台、露胎	施釉	浅黄色		
587	白磁Ⅳ類	小皿	口縁～底部	口径 10.0	C-6	Ⅰc	浅黄色	浅黄色	施釉、垂釉、糸切り	施釉	浅黄色		
588	白磁Ⅳ類	皿	口縁～体部	口径 14.0			灰オリーブ色	灰オリーブ色	ロクロ調整、施釉	施釉	灰オリーブ色		
589	白磁Ⅳ類	小皿	体部～底部	底径 3.8	B-5	Ⅰb	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	ロクロ調整、施釉、露胎	施釉	灰白色		
590	白磁Ⅴ類	碗	口縁～体部	口径 18.4	D-4	Ⅰc	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		端反り、櫛書文
591	白磁Ⅴ類	碗	口縁～体部	口径 17.0	D-6	Ⅱ	灰白色	灰白色	ロクロ調整、露胎	施釉	灰白色		端反り
592	白磁Ⅴ類	碗	口縁～体部	口径 19.0	D-5	Ⅰc	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		端反り
593	白磁Ⅴ類	碗	口縁～体部	口径 16.0	E-7	Ⅰa	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉	施釉	灰色		端反り
594	白磁Ⅴ類	碗	口縁～体部	口径 11.6	E-7	Ⅰc	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		端反り
595	白磁Ⅴ類	碗	口縁部	口径 19.0	D-6	Ⅰa	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		端反り
596	白磁Ⅴ類	碗	底部	底径 6.6	D-4	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		端反り、櫛書文
597	白磁Ⅴ類	碗	底部	底径 6.2	B-3	Ⅱ	淡黄色	淡黄色	施釉、露胎	施釉	淡黄色		端反り

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
598	白磁Ⅴ類	碗	底部	底径 5.8	C-8	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		端反り
599	白磁Ⅴ類	碗	底部	底径 6.0	B-4	Ⅱ	灰白色	灰色	ﾛｸﾛ調整、露胎	施釉	灰色		端反り
600	白磁Ⅴ類	皿	口縁～体部	口径 15.0	B-5	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		端反り
601	白磁Ⅴ類	皿	口縁～体部	口径 7.0	F-7	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉	施釉	灰色		端反り
602	白磁Ⅴ類	皿	口縁～底部	口径 14.8	D-7	Ⅱ	灰色	灰色	施釉、露胎	施釉、見込みに段差有	灰色		端反り、花文
603	白磁Ⅶ類	碗	体～底部	底径 7.8	B-3	Ⅱ	灰色	灰白色	施釉	施釉	灰色		櫛書文
604	白磁Ⅶ類	小皿	底部	底径 5.4	D-2	Ⅰc	灰色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰色		
605	白磁Ⅶ類	小皿	底部	底径 3.8	E-7	Ⅰc	黄灰色	灰色	施釉、露胎	施釉	灰白色		
606	白磁Ⅶ類	小皿	底部	底径 3.8	D-3	Ⅰc	浅黄色	灰色	露胎	施釉	灰色		
607	白磁Ⅷ類	碗	体部～高台	底径 6.6	C-4	Ⅰb	灰白色	浅黄色	施釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰黄色		
608	白磁Ⅷ類	碗	体部～高台	底径 6.6	F-4	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰白色		
609	白磁Ⅷ類	碗	体部～高台	底径 6.6			灰白色	灰白色	ﾛｸﾛ調整、施釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰白色		
610	白磁Ⅷ類	碗	体部～高台	底径 6.4	D-2	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰白色		
611	白磁Ⅷ類	碗	体～底部	底径 4.8		表	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰色		蛇目剥釉
612	白磁Ⅷ類	皿	口縁～高台	口径 10.8	D-6	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰白色		重ね焼跡有り
613	白磁Ⅷ類	皿	口縁～体部	口径 11.0	C-4	Ⅰc	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、垂釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰白色		
614	白磁Ⅷ類	皿	口縁～高台	口径 10.0	D-6	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰白色		
615	白磁Ⅷ類	皿	口縁～高台	口径 9.8	B-8	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰白色		
616	白磁Ⅷ類	皿	口縁～高台	口径 10.8	C-4	Ⅲ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰白色		
617	白磁Ⅷ類	皿	口縁～体部	口径 9.5	D-7	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰白色		
618	白磁Ⅷ類	皿	口縁～体部	口径 13.4	D-6	Ⅱ	ｵﾘｰﾌﾞ色	ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、露胎	施釉	灰色		
619	白磁Ⅷ類	皿	口縁～体部	口径 12.6	F-5	Ⅱ	浅黄色	浅黄色	施釉	施釉	灰色		
620	白磁Ⅷ類	皿	口縁～体部	口径 14.6	B-10	Ⅰb	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰色		
621	白磁Ⅸ類	皿	口縁～体部	口径 16.4	D-11	Ⅰb	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		口剥げ
622	白磁Ⅸ類	皿	口縁～体部	口径 14.0	F-4	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉	施釉	灰色		口剥げ
623	白磁Ⅸ類	皿	口縁～体部	口径 10.6	C-11	Ⅱ	灰白色	灰白色	ﾛｸﾛ調整、施釉	施釉	灰白色		口剥げ
624	白磁Ⅸ類	皿	口縁～体部	口径 14.0	B-3	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、露胎	灰白色		口剥げ
625	白磁Ⅸ類	皿	口縁～体部	口径 18.0	C-12	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		口剥げ
626	白磁Ⅸ類	皿	口縁～体部	口径 11.2	C-5	Ⅰb	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		口剥げ
627	白磁Ⅸ類	皿	口縁～体部	口径 12.2	F-7	Ⅰa	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		口剥げ
628	白磁Ⅸ類	皿	口縁～体部	口径 12.8	C-7	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		口剥げ
629	白磁Ⅸ類	皿	口縁～体部	口径 11.0	D-5	Ⅰb	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	ｵﾘｰﾌﾞ黄色	施釉	施釉	灰色		口剥げ
630	白磁Ⅸ類	皿	底部	底径 6.4	C-9	Ⅰb	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		
631	白磁Ⅸ類	皿	底部	底径 6.0	B-5	Ⅰb	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		
632	白磁Ⅸ類	皿	底部	底径 5.8	E-7	Ⅰb	灰色	灰色	施釉	施釉	灰色		
633	白磁Ⅸ類	皿	底部	底径 5.6	D-8	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉	施釉	淡黄色		
634	白磁Ⅸ類	皿	底部	底径 4.2	D-10	Ⅰ	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		
635	白磁Ⅸ類	皿	底部	底径 6.0	3T	表	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		
636	白磁Ⅸ類	皿	底部	底径 6.6	C-10	Ⅱ	灰白色	灰白色	厚施釉、釉掻き有り	施釉	灰白色		
637	白磁Ⅸ類	皿	底部	底径 6.2	E-5	Ⅰb	灰白色	浅黄色	施釉	施釉	淡黄色		
638	白磁Ⅸ類	皿	底部	底径 6.0	C-11	Ⅱ	灰白色	灰白色	厚施釉	施釉	灰色		
639	白磁Ⅸ類	皿	底部	底径 4.6	D-5	Ⅰb	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		
640	白磁B類	碗	体部～高台	底径 6.4	D-7	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ﾛｸﾛ調整、露胎	施釉	灰色		草花文
641	白磁C類	碗	口縁～体部	口径 18.0	C-5	Ⅰc	灰色	灰色	施釉	施釉	浅黄色		
642	白磁D類	八角小碗	口縁～高台	口径 7.4	C-9	Ⅰc	黄白色	黄白色	施釉、露胎	施釉	黄白色		
643	白磁D類	八角小碗	口縁～体部	口径 9.3			灰白色	灰白色	施釉	施釉	淡黄色		
644	白磁D類	八角小碗	体部～高台	底径 4.0	D-2	Ⅱ	灰白色	灰白色	ﾛｸﾛ調整、施釉、露胎	施釉、目跡	淡黄色		
645	白磁D類	小皿	口縁～高台	口径 9.0	D-7 .0	Ⅰb	灰白色	灰白色	施釉、貫入、露胎	施釉、目跡	淡黄色		

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
646	白磁D類	小皿	体部～高台	底径 5.0	E-4	Ⅰb	灰白色	淡黄色	施釉、露胎	施釉、目跡	淡黄色		
647	白磁D類	小皿	体部～高台	底径 4.0	F-5	Ⅰb	灰白色	灰白色	ﾛｸﾛ調整、施釉、露胎	施釉	淡黄色		
648	白磁D類	小碗	体部～高台	底径 3.0	C-5	Ⅰb	灰白色	灰白色	施釉、貫入	施釉	灰白色		
649	白磁D類	小皿	底部		C-6	Ⅰb	灰白色	灰白色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰白色		碁笥底
650	白磁E類	皿	口縁～高台	口径 10.0	D-3	Ⅰa	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		
651	白磁E類	皿	口縁～体部	口径 12.0	F-4	Ⅰb	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰色		
652	白磁E類	皿	口縁～体部	口径 15.0	C-3	Ⅰb	灰白色	灰白色	ﾛｸﾛ調整、施釉	施釉	灰白色		
653	白磁E類	皿	体部～高台	底径 7.4	C-2	Ⅰb	灰白色	灰白色	施釉、砂目(高台)	施釉	灰白色		
654	白磁E類	皿	体部～高台	底径 6.0	C-3	Ⅰb	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		
655	白磁E類	小皿	口縁～体部	口径 10.0	D-7	Ⅰb	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		
656	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 7.2	E-8	Ⅱ	淡黄色	浅黄色	露胎、蛇目高台	施釉	灰黄色		白墨書
657	白磁D類	小碗	底部	底径 3.2	D-8	Ⅰb	淡黄色	灰白色	露胎	施釉、貫入	淡黄色		白墨書
658	白磁Ⅳ類	皿	体部～高台	底径 5.2	D-7	Ⅱ	淡黄色	淡黄色	施釉、露胎	施釉	淡黄色		白墨書、抉りの底部
659	青磁龍泉Ⅰ類	碗	口縁～体部	口径 17.8	D-6	Ⅱ	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色		沈線
660	青磁龍泉Ⅰ類	碗	口縁部	口径 15.0	F-5	Ⅰb	灰色	灰色	施釉	施釉	灰色	細粒	沈線
661	青磁龍泉Ⅰ類	碗	口縁～体部	口径 13.2	D-7	Ⅰa	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	草花文
662	青磁龍泉Ⅰ類	碗	口縁～体部	口径 17.0	F-4	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色	細粒	草花文
663	青磁龍泉Ⅰ類	碗	口縁～体部	口径 14.6	E-7	Ⅰb	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、貫入	施釉	灰黄色	細粒	草花文
664	青磁龍泉Ⅰ類	碗	口縁～体部	口径 15.0			ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	草花文
665	青磁龍泉Ⅰ類	碗	口縁～体部	口径 20.6	B-5	Ⅰc	灰色	灰色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		草花文
666	青磁龍泉Ⅰ類	碗	口縁～体部	口径 17.2	B-3	Ⅱ	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰色		草花文
667	青磁龍泉Ⅰ類	碗	口縁～体部	口径 17.0	F-5	Ⅰb	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰白色	細粒	草花文
668	青磁龍泉Ⅰ類	碗	口縁～体部	口径 17.0	D-4	Ⅰb	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰白色	細粒	草花文
669	青磁龍泉Ⅰ類	碗	体部		B-3	Ⅱ	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰色		草花文
670	青磁龍泉Ⅰ類	碗	口縁～体部	口径 17.0	F-7	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉、貫入	施釉	灰白色	細粒	草花文
671	青磁龍泉Ⅰ類	碗	体部～高台	底径 7.2	F-5	Ⅰb	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、露胎	施釉	灰白色	細粒	草花文
672	青磁龍泉Ⅰ類	碗	体部～高台	底径 6.4	D-7	Ⅱ	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色		草花文
673	青磁龍泉Ⅰ類	碗	体部～高台	底径 6.0	B-3	Ⅰb～c	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、露胎	施釉	灰色		草花文
674	青磁龍泉Ⅰ類	碗	口縁～体部	口径 20.4	E-4	Ⅰc	ｵﾘｰﾌﾞ色	ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰ｵﾘｰﾌﾞ色		
675	青磁龍泉Ⅰ類	碗	口縁～体部	口径 16.6	C-7	Ⅱ	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色		
676	青磁龍泉Ⅰ類	碗	口縁～体部	口径 15.6	C-7	Ⅱ	ｵﾘｰﾌﾞ黄色	ｵﾘｰﾌﾞ黄色	施釉	施釉	灰色		沈線
677	青磁龍泉Ⅰ類	碗	口縁～体部	口径 17.0	C-7	Ⅱ	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	厚施釉、貫入	厚施釉、貫入	灰色		
678	青磁龍泉Ⅰ類	碗	口縁～体部	口径 18.0	E-7	Ⅰa	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰ｵﾘｰﾌﾞ色		
679	青磁龍泉Ⅰ類	碗	口縁～体部	口径 17.2	C-4	Ⅰc	ｵﾘｰﾌﾞ黄色	ｵﾘｰﾌﾞ黄色	施釉	施釉	灰色		
680	青磁龍泉Ⅰ類	小碗	口縁～底部	口径 8.6	E-7	Ⅱ	ｵﾘｰﾌﾞ色	ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉、口剥げ	灰ｵﾘｰﾌﾞ色		
681	青磁龍泉Ⅰ類	碗	底部		D-7	Ⅰb	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰色		
682	青磁龍泉Ⅰ類	碗	体部～高台	底径 6.0	溝3		灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰白色	細粒	
683	青磁龍泉Ⅰ類	碗	体部～高台	底径 5.6	B-3	Ⅱ	暗ｵﾘｰﾌﾞ色	暗ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰黄色		
684	青磁龍泉Ⅰ類	碗	体部～高台	底径 6.8			灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、露胎	施釉、貫入	灰色		
685	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁～体部	口径 14.0	E-4	Ⅰc	緑灰色	緑灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色		鎬蓮弁文
686	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁部	口径 15.0	E-3	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ色	ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色	細粒	鎬蓮弁文
687	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁～体部	口径 14.0	D-6	Ⅰc	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色		鎬蓮弁文
688	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁～体部	口径 17.2	E-9	Ⅰb	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰黄色	細粒	鎬蓮弁文
689	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁部		C-11	Ⅰb	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰白色	細粒	鎬蓮弁文
690	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁～体部	口径 15.2	E-5	Ⅰc	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色		鎬蓮弁文
691	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁～体部	口径 16.6	D-5	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉	施釉	灰黄色	細粒	鎬蓮弁文
692	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁～体部		C-7	Ⅱ	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色		鎬蓮弁文
693	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁～体部	口径 19.2	D-6	Ⅰc	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰色		鎬蓮弁文

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
694	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁部	口径 16.0			明緑灰色	明緑灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色	細粒	鎬蓮弁文
695	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁～体部	口径 18.6	D-5	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ黄色	ｵﾘｰﾌﾞ黄色	施釉	施釉	灰白色	細粒	鎬蓮弁文
696	青磁龍泉Ⅱ類	碗	体部				緑灰色	緑灰色	施釉	施釉	灰白色		鎬蓮弁文
697	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁～体部	口径 15.5	E-4	Ⅰc	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰色		鎬蓮弁文
698	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁～体部	口径 13.4	D-7	Ⅱ	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰色		鎬蓮弁文
699	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁～体部	口径 14.8	E-5	Ⅰb	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰色	細粒	鎬蓮弁文
700	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁～体部	口径 14.2	F-5	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	鎬蓮弁文
701	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁～体部	口径 14.0	D-8	Ⅰb	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰色	細粒	鎬蓮弁文
702	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁部	口径 14.6	C-7	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	鎬蓮弁文
703	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁	口径 18.4	B-8	Ⅱ	緑灰色	緑灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色		鎬蓮弁文
704	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁～体部	口径 20.0	D-7		灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰ｵﾘｰﾌﾞ色		鎬蓮弁文
705	青磁龍泉Ⅱ類	碗	体部～底部		C-8	Ⅱ	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰色		鎬蓮弁文
706	青磁龍泉Ⅰ類	碗	体部～高台	底径 6.8	C-3	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉、露胎	施釉、貫入	灰白色	細粒	鎬蓮弁文
707	青磁龍泉Ⅱ類	碗	底部	底径 5.4	D-10	Ⅰb	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、露胎	施釉	灰白色	細粒	鎬蓮弁文
708	青磁龍泉Ⅱ類	碗	底部	底径 6.0	B-8	Ⅰb	暗ｵﾘｰﾌﾞ色	暗ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰白色	細粒	
709	青磁龍泉Ⅱ類	碗	体部～高台	底径 5.4	C-5	Ⅰa	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉、露胎	施釉、貫入	灰白色	細粒	鎬蓮弁文
710	青磁龍泉Ⅲ類	碗	口縁～体部	口径 15.6	E-5	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	鎬蓮弁文
711	青磁龍泉Ⅲ類	碗	口縁～体部	口径 20.0	F-8	Ⅰa	黄褐色	黄褐色	施釉、貫入	施釉、貫入	にぶい黄褐色		鎬蓮弁文
712	青磁龍泉Ⅲ類	皿	口縁～体部	口径 12.8	D-5	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色		鎬蓮弁文
713	青磁龍泉B類	碗	口縁～体部	口径 16.6	B-3	Ⅰc	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉、貫入	施釉、貫入、垂釉	灰白色		鎬蓮弁文
714	青磁龍泉B類	小碗	口縁部	口径 8.8	D-9	Ⅰb	明緑灰色	明緑灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	鎬蓮弁文
715	青磁龍泉B類	碗	口縁部	口径 14.0	E-5	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色	細粒	鎬蓮弁文
716	青磁龍泉B類	碗	口縁部	口径 14.8	C-3	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色	細粒	鎬蓮弁文
717	青磁龍泉B類	碗	口縁～体部	口径 12.0	D-5	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	鎬蓮弁文
718	青磁龍泉B類	碗	口縁～体部	口径 13.8	C-5	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	鎬蓮弁文
719	青磁龍泉B類	碗	口縁～体部		C-7	Ⅱ	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色		鎬蓮弁文
720	青磁龍泉B類	碗	体部～高台	底径 6.0	B-4	Ⅱ	灰黄色	灰黄色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰褐色		鎬蓮弁文
721	青磁龍泉B類	碗	体部～高台	底径 6.4	E-7	Ⅰb	黄褐色	黄褐色	施釉、貫入	施釉、貫入	にぶい黄橙色	細粒	鎬蓮弁文
722	青磁龍泉B類	皿	口縁～体部	口径 14.4	D-4	Ⅰb	明緑灰色	明緑灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	鎬蓮弁文
723	青磁龍泉B類	稜花皿	口縁～高台	口径 8.8	B-3	Ⅰb	明ｵﾘｰﾌﾞ灰色	明ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰白色	細粒	鎬蓮弁文
724	青磁龍泉C類	碗	口縁～体部	口径 9.4	C-6	Ⅰb	明緑灰色	明緑灰色	施釉	施釉	灰白色		雷文(外)、草花文(内)
725	青磁龍泉C類	碗	口縁～体部	口径 13.8	D-9	Ⅰa	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	雷文
726	青磁龍泉C類	碗	口縁～体部	口径 11.0	溝2	Ⅰ	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	雷文
727	青磁龍泉C類	碗	口縁～体部	口径 14.8	C-6	Ⅰc	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色		雷文
728	青磁龍泉C類	碗	底部	底径 6.6	D-7	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入、露胎	にぶい赤褐色	細粒	草花文
729	青磁龍泉D類	碗	口縁～体部	口径 16.6	C-4	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	草花文
730	青磁龍泉D類	碗	口縁～体部	口径 16.0	B-2	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	草花文
731	青磁龍泉D類	碗	口縁～体部	口径 13.4	E-4	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉	施釉	白灰色		
732	青磁龍泉D類	碗	口縁～体部	口径 15.0	C-4	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色		
733	青磁龍泉D類	碗	口縁～体部	口径 14.2	D-9	Ⅰb	明ｵﾘｰﾌﾞ灰色	明ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色		
734	青磁龍泉D類	碗	口縁～体部	口径 14.0	D-8	Ⅰc	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	施釉	施釉	灰色		
735	青磁龍泉D類	碗	口縁～体部	口径 17.0	B-4	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	白灰色		
736	青磁龍泉D類	碗	口縁～体部	口径 13.0	C-7	Ⅰb	明ｵﾘｰﾌﾞ灰色	明ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉	施釉	灰白色		
737	青磁龍泉D類	碗	体部～高台	底径 6.8	B-6	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉、露胎	施釉	灰黄色		草花文
738	青磁龍泉D類	碗	口縁～体部	口径 17.4	D-1	Ⅰ	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉、貫入	施釉	灰白色		
739	青磁龍泉D類	碗	体部～高台	底径 7.0	D-6	Ⅰc	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰白色		
740	青磁龍泉D類	碗	体部～高台	底径 6.2	D-7	Ⅰc	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	白色		
741	青磁龍泉D類	碗	底部	底径 6.0	D-10	Ⅰ	緑灰色	緑灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	草花文

番号	種類	器種	部位	法量(cm)		出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
742	青磁龍泉D類	皿	口縁～体部	口径	15.6	B-4	Ⅱ	明緑灰色	明緑灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色		
743	青磁龍泉D類	皿	口縁～体部	口径	12.2	D-9	Ⅰc	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉、貫入	施釉	灰色		
744	青磁龍泉D類	皿	口縁～体部	口径	14.4	E-4	Ⅰc	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉	施釉	灰オリーブ色		
745	青磁龍泉D類	皿	口縁～体部	口径	11.2	D-4	Ⅰb	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉	施釉	灰白色		
746	青磁龍泉D類	盤	底部	底径	7.0	B-5	Ⅰc	明緑灰色	明緑灰色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰色		
747	青磁龍泉D類	皿	口縁～体部	口径	11.8	D-7	Ⅰc	オリーブ色	オリーブ色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰オリーブ色		
748	青磁龍泉D類	皿	口縁～体部	口径	15.0	E-7	Ⅰb	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉	施釉	灰白色		
749	青磁龍泉D類	皿	口縁～体部	口径	13.6	D-8	Ⅰb	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	黄灰色		
750	青磁	稜花皿	口縁～体部	口径	10.6	D-7	Ⅰa	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色	細粒	
751	青磁	稜花皿	口縁～体部	口径	14.4	B-4	Ⅰb	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰黄色	細粒	
752	青磁	稜花皿	口縁～体部	口径	15.2	C-3	Ⅰb	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	黄灰色	細粒	
753	青磁	稜花皿	口縁～体部	口径	12.2	D-9	Ⅰa	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰黄色	細粒	草花文
754	青磁	稜花皿	口縁～体部	口径	12.8	E-7	Ⅱ	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、貫入、垂釉	施釉、貫入	にぶい黄橙色		
755	青磁	稜花皿	口縁～体部	口径	13.0	B-4	Ⅰb	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色	細粒	草花文
756	青磁	稜花皿	口縁～体部	口径	13.2	D-10	Ⅰb	明緑灰色	明緑灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	黄灰色		
757	青磁	小壺	口縁～体部	頸径	5.8	C-5	Ⅰc	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉	施釉	白色		
758	青磁	壺	口縁～体部	口径	8.0	D-4	Ⅰb	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉	施釉	灰白色		
759	青磁	メンコ	底部	底径	6.2	D-6	Ⅰb	明黄褐色	にぶい黄橙色	施釉	釉剥げ	浅黄橙色		
760	青磁	メンコ	底部	底径	5.3	D-3	Ⅰb	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	浅黄色		
761	青磁	メンコ	底部	底径	6.0	C-13	Ⅰa	オリーブ灰色	黄褐色	水挽き		にぶい褐色		
762	青磁	メンコ	底部	底径	5.3	D-4	Ⅰb	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰色		
763	青磁	メンコ	底部	底径	3.5	D-7	Ⅰb	オリーブ灰色	にぶい橙色	施釉、露胎	露胎	灰白色		
764	青磁同安	碗	口縁～体部	口径	15.8	E-7	Ⅱ	灰色	灰オリーブ色	施釉、露胎	施釉	灰色		
765	青磁同安	碗	口縁部	口径	14.6	B-6	Ⅰb	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉	施釉	灰白色	細粒	
766	青磁同安	碗	体～高台	底径	5.2	C-4	Ⅰb	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉、露胎	施釉	灰色	細粒	猫描文、草花文
767	青磁同安	皿	口縁～体部	口径	10.4	E-4	Ⅰc	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉	施釉	灰色		
768	青磁同安	皿	口縁部	口径	11.0	C-3	Ⅰb	灰白色	浅黄色	施釉	施釉	灰白色	細粒	
769	青磁同安	皿	口縁～体部	口径	11.6	E-8	Ⅰb	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色	細粒	
770	青磁同安	皿	口縁～体部	口径	12.0	D-7	Ⅱ	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色		猫描文
771	青磁同安	皿	体～底部	底径	5.0	C-11	Ⅰb	灰白色	灰オリーブ色	露胎	施釉	灰白色	細粒	猫描文、草花文
772	青磁同安	皿	底部	底径	4.8	D-6	Ⅰc	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉、露胎	施釉	灰色		猫描文、草花文
773	青磁同安	皿	底部	底径	5.6	E-4	Ⅰc	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰色		猫描文、草花文
774	青磁同安	皿	体～底部	底径	4.8	E-10	Ⅰa	灰黄色	灰色	施釉、露胎	施釉	灰白色	細粒	猫描文、草花文
775	青磁同安	皿	体～底部	底径	5.0	D-7	Ⅰb	灰色	オリーブ灰色	施釉、露胎	施釉	灰色	細粒	猫描文、草花文
776	青磁同安	皿	底部	底径	5.0	C-11	Ⅱ	灰色	灰オリーブ色	施釉、露胎	施釉	灰色		猫描文、草花文
777	青磁同安	皿	底部	底径	5.6	C-7	Ⅰc	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉、露胎	施釉	灰色		猫描文、草花文
778	青磁同安	皿	体～底部	底径	8.0	F-4	Ⅰb	にぶい橙色	浅黄色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰白色	細粒	猫描文、草花文
779	青磁同安	皿	底部	底径	4.8	D-9	Ⅰc	浅黄色	浅黄色	施釉、露胎	施釉	浅黄色		猫描文、草花文
780	青磁同安	皿	底部	底径	5.4	C-10	Ⅱ	浅黄色	浅黄色	施釉、露胎	施釉	浅黄色		草花文
781	青白磁	合子	蓋	口径	5.4	D-10	Ⅰb	明オリーブ灰色	淡黄色	施釉	施釉、露胎	淡黄色		鎬蓮弁文、隅丸円
782	青白磁	合子	蓋	口径	7.6	F-4	Ⅰb	明青灰色	明青灰色	施釉、露胎	施釉	灰白色		鎬蓮弁文
783	青白磁	合子	蓋	口径	8.0		Ⅰc	灰白色	灰白色	施釉、貫入	露胎	灰白色		草花文
784	青白磁	合子	蓋	口径	8.8	B-6	Ⅱ	オリーブ色	黄白色	施釉、露胎	露胎	黄白色		草葉文
785	青白磁	合子	蓋	口径	6.2	C-7	Ⅰc	灰白色	明オリーブ灰色	施釉	施釉、露胎	淡黄色		鎬蓮弁文、隅丸円
786	青白磁	合子	受け身	口径	6.0	D-9	Ⅱ	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、露胎	施釉、糸切り	灰色		隅丸円
787	青白磁	合子	受け身	底径	9.0	B-7	Ⅰ	灰白色	灰白色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰白色		
788	染付け	碗	口縁部	口径	14.6	C・D-4	Ⅰb	牡丹、2本線	2本線					
789	染付け	碗	口縁部			B-3	Ⅰb	岩、雲、2本線	2本線					

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
790	染付け	碗	口縁～体部	口径 13.4	F-5	Ⅰb	2本線	2本線					
791	染付け	碗	口縁～体部	口径 10.4	D-9	Ⅰa	蝶、2本線						
792	染付け	碗	口縁～体部		B-5	Ⅰa	池、岩苔						
793	染付け	碗	口縁～体部		F-7	Ⅰa	唐草、2本線	1本線					
794	染付け	碗	体部～高台	底径 5.2	B-2	Ⅰb		牡丹					
795	染付け	碗	底部	底径 4.6	B-7	Ⅰb							
796	染付け	碗	体部～高台	底径 3.6	C-2	Ⅰb	葉文	菊					
797	染付け	碗	体部～底部	底径 4.2	B-5	Ⅰc	池の岩						
798	染付け	碗	底部	底径 5.0	E-7	Ⅰa	池、草						
799	染付け	碗	体部～高台	底径 5.0	C-4	Ⅰb	梅花	葉文					
800	染付け	碗	底部	底径 5.2	C-3	Ⅰb							
801	染付け	碗	体部～底部	底径 6.2	D-5	Ⅰc	唐草崩文	唐草崩文					
802	染付け	碗	底部	底径 6.2	D-4	Ⅰb	唐草崩文	唐草崩文					
803	染付け	碗	体部～高台	底径 3.4	F-3	Ⅰb	暦文	1本線					
804	染付け	碗	体部～高台	底径 4.5	D-7	Ⅰa	2本線						
805	染付け	碗	底部	底径 4.4	B-4	Ⅰa	2本線						
806	染付け	碗	底部		D-3	Ⅰa	2本線	2本線					
807	染付け	皿	底部		B-6	Ⅱ		獅子文					
808	染付け	皿	底部		C-5	Ⅰc		獅子文					
809	染付け	皿	底部	底径 7.8	D-4	Ⅰb		獅子文、2本線					
810	染付け	皿	底部	底径 5.4	D-10	Ⅰb		草文					
811	染付け	稜花皿	口縁～体部		E-9	Ⅰa	唐草文	唐草文					
812	染付け	稜花皿	口縁部		D-6	Ⅰb		花文					
813	染付け	皿	体部～高台	底径 7.0	B-3	Ⅰc		草花文					
814	染付け	皿	口縁～体部	口径 18.8	B-2・3	Ⅰc		2本線					
815	染付け	皿	体部～高台	底径 5.0	B-4	Ⅰc	1本線	草文、2本線					
816	染付け	皿	底部	底径 5.6	C-4	Ⅰb	1本線	寿文、1本線					
817	染付け	皿	底部		E-5	Ⅰb	草文	菊花文					
818	染付け	盤	底部	底径 12.6	C-3	Ⅰa	3本線	風景画					
819	染付け	皿	口縁～高台	口径 9.4		Ⅰc	草花文	菊文、3本線					
820	染付け	皿	口縁～体部	口径 9.4	B-5	Ⅰc	梅花、1本線	2本線					端反り
821	染付け	皿	口縁～底部	口径 10.1	E-9	Ⅰa	草文、2本線	寿文、3本線					碁笥底
822	染付け	皿	底部	底径 3.8	B-5	Ⅰb		寿文					碁笥底
823	染付け	皿	口縁～底部	口径 11.4	D・E-4	Ⅰb	草花文、3本線	寿文、3本線					碁笥底
824	染付け	皿	底部	底径 4.0	B-5	Ⅰb	唐草文、1本線	寿文					碁笥底
825	染付け	小碗	底部	底径 3.8	D-9	Ⅰa							
826	染付け	小碗	底部	底径 2.2	B-7	Ⅰa							
827	染付け	小碗	底部	底径 3.8	B-2	Ⅰb							
828	染付け	小碗	底部	底径 2.2	B-2	Ⅰa							
829	染付け	小碗	口縁～体部		C-7	Ⅰc	残雪、竹、1本線	2本線					
830	染付け	蓋			E-5	Ⅰb	葉文						
831	染付け	二次加工品	底部	径 2.6	F-8	Ⅰa	福	草花文					メンコ
832	染付け	二次加工品	体部	径 2.2	C-7	Ⅰc	二重四角						メンコ
833	中国陶器	壺	口縁部	口径 5.9	C-7	Ⅰc	青黒色	青黒色	緑釉	緑釉	明紫灰色	細粒	
834	中国陶器	壺	肩部		C-5	Ⅰb	濃緑色	明黄褐色	緑釉	黄釉	にぶい橙色		沈線
835	中国陶器	壺	肩部		C-10	Ⅰb	緑色	浅黄色	緑釉	露胎	灰白色	細粒	沈線
836	中国陶器	小鉢	口縁部	口径 10.0	F-3	Ⅰb	青緑色	浅黄色	緑釉	露胎	浅黄色		
837	中国陶器	天目碗	口縁～体部	口径 13.2	C-4	Ⅰa	黒色	黒色	黒釉	黒釉	浅黄色		

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
838	中国陶器	天目碗	口縁～体部	口径 12.4	C-10	Ⅱ	褐色	暗褐色	黒釉	黒釉	灰黄褐色	細粒	
839	中国陶器	天目碗	口縁～体部	口径 12.2	E-3	Ⅰb	黒褐色	黒褐色	黒釉	黒釉	灰白色		
840	中国陶器	天目碗	体部		E-3	Ⅰb	黒褐色	黒褐色	黒釉、露胎	黒釉	浅黄橙色		
841	中国陶器	天目碗	底部		E-3	Ⅰa	黒色	黒色	黒釉	黒釉	灰黄色		
842	中国陶器	天目碗	体部		D-11	Ⅱ	黒色	黒褐色	黒釉	黒釉	灰黄色	細粒	
843	中国陶器	天目碗	体～底部	底径 5.0	B-3	Ⅲa	にぶい黄橙色	黒色	黒釉、露胎	黒釉	黄灰色	細粒	
844	中国陶器	鉢	口縁～胴部	口径 25.0	3T	Ⅱ	黒褐色	黒褐色	褐釉	褐釉	明灰黄色	細粒	
845	中国陶器	鉢	口縁～胴部	口径 12.8	D-2	Ⅰc	黒色	暗褐色	褐釉	褐釉	明褐色	やや荒い	
846	中国陶器	壺	口縁～胴部	口径 9.0	5T	Ⅱa～Ⅱb	黒褐色	ｵﾘｰﾌﾞ黒色	褐釉	褐釉	灰色	細粒	
847	中国陶器	壺	口縁～胴部	口径 7.8	C-8	Ⅰc	黒褐色	黒褐色	褐釉	褐釉	灰黄褐色	細粒	
848	中国陶器	壺	口縁～肩部	口径 6.8	C-9	Ⅰb	黒褐色	黒褐色	褐釉	褐釉	にぶい橙色	細粒	
849	中国陶器	碗	口縁～体部	口径 10.0	D-3	Ⅰa	黒褐色	黒褐色	褐釉	褐釉	灰白色		
850	中国陶器	鉢	底部	底径 8.0	E-8	Ⅰc	褐灰色	にぶい黄色	灰釉	灰釉	褐灰色	細粒	
851	中国陶器	壺	口縁～胴部	口径 8.6	D-5	Ⅰb	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰釉	灰釉	灰色	細粒	
852	中国陶器	壺	口縁～胴部	口径 10.4	B-3	Ⅰc	にぶい黄色	にぶい黄色	灰釉	灰釉	灰黄色	細粒	
853	中国陶器	鉢	口縁～胴部	口径 33.6	D-4	Ⅰb	にぶい橙色	ｵﾘｰﾌﾞ黄色	灰釉	灰釉	灰白色	荒粒	
854	中国陶器	鉢	口縁部	口径 23.0	C-5	Ⅰb	浅黄色	ｵﾘｰﾌﾞ黄色	灰釉	灰釉	灰色	細粒	
855	中国陶器	坏	底部	底径 3.9	D-7	Ⅱ	浅黄色	にぶい黄橙色	灰釉	灰釉	にぶい橙色		
856	中国陶器	四耳壺	口縁部	口径 14.0	E-4	Ⅱ	灰白色	灰白色	灰釉	灰釉	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	細粒	
857	中国陶器	四耳壺	取っ手部		D-3	Ⅰc	にぶい黄色	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰釉	灰釉	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	細粒	
858	中国陶器	四耳壺	取っ手部		E-3	Ⅰa	黄灰色	浅黄色	灰釉	灰釉	赤灰色	荒粒	
859	中国陶器	四耳壺	取っ手部		D-7	Ⅰc	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	暗緑灰色	灰釉	灰釉	にぶい黄褐色		
860	中国陶器	四耳壺	取っ手部		D-4	Ⅱ	にぶい黄色	明黄褐色	灰釉	灰釉	明褐色		
861	中国陶器	四耳壺	底部	底径 12.4	E-10		灰黄色	浅黄色	灰釉	灰釉	黄灰色	細粒	
862	中国陶器	壺	底部	底径 9.6	B-4	Ⅱ	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	灰白色	灰釉	灰釉	灰白色		
863	陶器	甕	口縁～肩部		C-10	Ⅰb	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	灰釉	灰釉	灰黄色	細粒	常滑焼
864	陶器	壺	肩部		D-7	Ⅰa	黒褐色	灰色	灰釉	灰釉	灰色	細粒	常滑焼
865	陶器	甕	底部	底径 11.0	C-13	Ⅰc	黄橙色	にぶい黄色	灰釉	灰釉	にぶい黄色	荒粒	常滑焼
866	陶器	甕	胴～底部	底径 16.6	B-3	Ⅰb	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	暗褐色	灰釉	灰釉	灰色	細粒	常滑焼
867	陶器	捏鉢	口縁部	口径 27.0	E-10	Ⅰb	灰褐色	黄褐色	灰釉	灰釉	黄灰色	細粒	常滑焼
868	陶器	擂鉢	底部	底径 13.4	E-6	Ⅰc	にぶい赤褐色	灰色	灰釉	灰釉	にぶい橙色		常滑焼、櫛歯状沈線
869	須恵器	甕	口縁～肩部	口径 15.6	C-8	Ⅰc	灰白色	灰白色	格子目ﾀﾀｷ	ﾊｹ目	にぶい黄橙色	細粒	樺万丈系
870	須恵器	甕	口縁部	口径 20.6	D-7	Ⅱ	淡黄色	淡黄色	格子目ﾀﾀｷ	ﾊｹ目	灰白色	荒粒	樺万丈系
871	須恵器	甕	頸～肩部		D-9	Ⅱ	灰白色	灰白色	格子目ﾀﾀｷ	ﾊｹ目	灰黄色	荒粒	樺万丈系
872	須恵器	甕	頸～肩部		D-7	Ⅰc	淡黄色	淡黄色	格子目ﾀﾀｷ	ﾊｹ目	浅黄色	細粒	樺万丈系
873	須恵器	甕	頸～肩部		C-8	Ⅰc	灰白色	浅黄色	格子目ﾀﾀｷ	ﾊｹ目	浅黄色	細粒	樺万丈系
874	須恵器	甕	胴部		D-8	Ⅱ	淡黄色	淡黄色	格子目ﾀﾀｷ	ﾊｹ目	灰黄色	細粒	樺万丈系
875	須恵器	甕	胴部		C-7	Ⅱ	淡黄色	淡黄色	格子目ﾀﾀｷ	ﾊｹ目	灰黄色	細粒	樺万丈系
876	須恵器	甕	胴部		E-3	Ⅱ	淡黄色	灰白色	格子目ﾀﾀｷ	ﾊｹ目	灰黄色	細粒	樺万丈系
877	須恵器	甕	頸～肩部				灰色	灰色	格子目ﾀﾀｷ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	灰黄褐色	細粒	樺万丈系
878	須恵器	甕	頸～肩部	頸径 16.6	C-5	Ⅰb	灰色	灰色	ﾛｸﾛ調整、格子ﾀﾀｷ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	浅黄色		樺万丈系
879	須恵器	捏鉢	口縁部	口径 24.0	B-2・3	Ⅰc	淡黄色	淡黄色	水挽き	ﾍﾗﾅﾃﾞ	淡黄色	荒粒	樺万丈系
880	須恵器	捏鉢	口縁部	口径 24.2	B-10	Ⅱ	灰黄色	灰黄色	ﾊｹ目	ﾊｹ目	にぶい橙色	細粒	樺万丈系
881	須恵器	捏鉢	口縁部	口径 20.0	C-9	Ⅱ	淡黄色	淡黄色	ﾊｹ目	ﾊｹ目	淡黄色	細粒	樺万丈系
882	須恵器	捏鉢	口縁部	口径 26.0	D-4	Ⅰb	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい黄色	荒粒(石英有り)	樺万丈系
883	須恵器	捏鉢	注ぎ口		C-10		灰色	灰色	ﾍﾗﾅﾃﾞ、ﾀﾀｷ	ﾊｹ目	灰色	荒粒	樺万丈系
884	須恵器	擂鉢	注ぎ口		C-6	Ⅰb	浅黄色	浅黄色	ﾛｸﾛ調整	ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄灰色		樺万丈系、櫛歯状沈線
885	須恵器	擂鉢	口縁～胴部		C-6	Ⅰb	灰色	灰色	ﾊｹ目	ﾊｹ目	灰色		樺万丈系、櫛歯状沈線

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
886	須恵器	擂鉢	口縁部	口径 20.6	B-2	Ⅰc	灰色	灰色	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｹ目	灰色	細粒	櫛万丈系、櫛歯状沈線
887	須恵器	擂鉢	口縁～胴部	口径 26.0	C-10	Ⅰa	灰色	灰色	ﾅﾃﾞ	ﾊｹ目	灰色	荒粒	櫛万丈系、櫛歯状沈線
888	須恵器	擂鉢	口縁～胴部	口径 25.4	D-11	Ⅰ	灰白色	灰白色	ﾊｹ目	ﾊｹ目	浅黄色		櫛万丈系、櫛歯状沈線
889	須恵器	捏鉢	口縁部	口径 23.0	D-5	Ⅰc	灰白色	灰白色	灰釉、水挽き	水挽き	にぶい黄色	細粒	東播磨系
890	須恵器	捏鉢	口縁部		F-7	Ⅱ	暗青灰色	暗青灰色	灰釉、水挽き	水挽き	明黄褐色	荒粒	東播磨系
891	須恵器	捏鉢	口縁～胴部	口径 22.0	C-10	Ⅱ	灰色	灰色	灰釉、ﾊｹ目	ﾊｹﾅﾃﾞ	灰色		東播磨系
892	須恵器	捏鉢	口縁～胴部		D-10	Ⅲ	灰色	灰褐色	灰釉、ﾊｹ目	ﾊｹ目	灰褐色		東播磨系
893	須恵器	捏鉢	口縁部	口径 29.0	C-12	Ⅰb	灰色	灰色	灰釉、ﾊｹ目	ﾊｹ目	灰白色		東播磨系
894	須恵器	捏鉢	口縁～胴部		E-7	Ⅰb	青灰色	青灰色	灰釉、ﾊｹ目	ﾊｹ目	暗灰黄色		東播磨系
895	須恵器	捏鉢	口縁部	口径 22.0	2T	Ⅱ	灰色	灰色	灰釉、ﾊｹ目	ﾊｹ目	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	細粒	東播磨系
896	須恵器	捏鉢	口縁～胴部		E-4	Ⅰa	灰色	灰色	灰釉、ﾊｹ目	ﾊｹ目	灰色		東播磨系
897	須恵器	捏鉢	口縁部	口径 24.0	E-5･6	Ⅰa～Ⅰc	灰色	灰色	灰釉、ﾊｹ目	ﾊｹ目	黄灰色	細粒	東播磨系
898	須恵器	捏鉢	口縁部	口径 22.4	C-6	Ⅰb	にぶい黄色	明黄褐色	灰釉、水挽き	水挽き	にぶい黄色	細粒	東播磨系
899	須恵器	捏鉢	注ぎ口		C-9	Ⅱ	灰色	灰色	灰釉、ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	黄灰色	細粒	東播磨系
900	須恵器	捏鉢	口縁部	口径 29.4	C-11	Ⅱ	暗青灰色	灰色	灰釉、水挽き	水挽き	灰色	細粒	東播磨系
901	須恵器	捏鉢	注ぎ口		E-5	Ⅰb	灰白色	灰色	灰釉、ﾊｹ目	ﾊｹ目	灰白色		東播磨系
902	須恵器	捏鉢	口縁部	口径 25.0	B-8	Ⅰb	灰色	灰色	灰釉、ﾊｹ目	ﾊｹ目	灰色	細粒	東播磨系
903	須恵器	捏鉢	底部	底径 11.0	F-7	Ⅱ	黄灰色	灰褐色	灰釉、ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄灰色	荒粒	東播磨系
904	須恵器	甕	口縁～肩部	頸径 26.0	C-7	Ⅰc	暗青灰色	暗青灰色	ﾍﾗﾅﾃﾞ、ﾀﾀｷ	ﾊｹ目	灰色	荒粒	下り山系
905	須恵器	壺	底部	底径 6.6	E-10	Ⅱ	暗青灰色	暗青灰色	ﾊｹ目	ﾊｹ目	灰色	荒粒	下り山系
906	瓦器質土器	擂鉢	口縁～胴部	口径 27.0	C-8	Ⅰc	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｹ目	灰色	荒粒	櫛歯状沈線
907	瓦器質土器	擂鉢	口縁～胴部		B-7	Ⅰa	黄橙色	黄橙色	ﾊｹ目	ﾊｹ目、擂溝	黄橙色	荒粒	櫛歯状沈線
908	瓦器質土器	擂鉢	口縁～胴部	口径 24.2	B-5	Ⅰb	淡黄橙色	黄橙色	ﾊｹ目	ﾊｹ目、擂溝	灰色		櫛歯状沈線
909	瓦器質土器	擂鉢	胴～底部	底径 12.4	B-3	Ⅰb	灰色	灰色	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｹ目	灰色	細粒	櫛歯状沈線
910	瓦器質土器	擂鉢	口縁部	口径 31.8	B-3	Ⅱ	灰白色	灰白色	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｹ目	灰白色	荒粒	櫛歯状沈線
911	瓦器質土器	擂鉢	胴～底部	底径 7.6	B-4	Ⅱ	浅黄色	浅黄色	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｹ目、擂溝	浅黄色	細粒	櫛歯状沈線
912	瓦器質土器	擂鉢	口縁～胴部	口径 26.4	E-10		黄灰色	黄灰色	ﾍﾗﾅﾃﾞ	丁寧なﾅﾃﾞ、擂溝	灰白色		櫛歯状沈線
913	瓦器質土器	擂鉢	口縁～胴部	口径 34.2	C-2	Ⅰb	にぶい黄橙色	黄橙色	ﾊｹ目	ﾊｹ目、擂溝	黄灰色		櫛歯状沈線
914	瓦器質土器	擂鉢	底部	底径 10.0	E-8	Ⅰb	浅黄橙色	浅黄橙色	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ、擂溝	にぶい黄橙色	荒粒(石英有り)	櫛歯状沈線
915	瓦器質土器	擂鉢	胴～底部	底径 11.0	E-9	Ⅱ	灰黄色	灰黄色	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｹ目	浅黄色	荒粒	櫛歯状沈線
916	瓦器質土器	擂鉢	底部		B-4	Ⅱ	黒色	灰色	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｹ目	灰白色	細粒	櫛歯状沈線
917	瓦器質土器	擂鉢	口縁～胴部	口径 22.4	B-6	Ⅰc	黄灰色	灰色	ﾊｹ目	ﾊｹ目	にぶい黄橙色	細粒	
918	瓦器質土器	擂鉢	口縁～胴部	口径 26.0	D-8	Ⅰb	黄灰色	黄灰色	ﾛｸﾛ調整、ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい黄色	荒粒	
919	瓦器質土器	擂鉢	口縁～胴部	口径 31.6		Ⅱ	明黄褐色	橙色	ﾊｹ目	ﾊｹ目	明褐色	荒粒(石英有り)	
920	瓦器質土器	捏鉢	口縁～胴部	口径 30.2	C-10	Ⅱ	灰色	灰黄色	ﾊｹ目	ﾊｹ目、ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄灰色	荒粒	
921	瓦器質土器	捏鉢	口縁～胴部	口径 22.0	D-7	Ⅱ	褐灰色	灰白色	ﾊｹ目	ﾊｹ目、ﾍﾗﾅﾃﾞ	褐灰色	荒粒	
922	瓦器質土器	捏鉢	底部		B-5	Ⅰc	にぶい黄褐色	にぶい橙色	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｹ目	黒褐色	細粒	
923	瓦器質土器	捏鉢	底部	底径 11.0	D-7	Ⅰb	灰白色	灰白色	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	灰白色	荒粒(石英有り)	
924	瓦器質土器	捏鉢	注ぎ口		C-9	Ⅰc	明黄褐色	明黄褐色	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色	細粒	
925	瓦器質土器	火舎	口縁～胴部	口径 37.6	D-3	Ⅰa	にぶい橙色	浅黄橙色	ﾛｸﾛ調整、ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	橙色	荒粒	
926	瓦器質土器	火舎	胴部		B-2	Ⅰb	にぶい橙色	にぶい橙色	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色		
927	瓦器質土器	羽釜	口縁部	口径 21.4	C-7	Ⅰc	黒色	黒色	ﾊｹ目	ﾊｹ目	灰色	荒粒	
928	瓦器質土器	羽釜	口縁部	口径 22.6			浅黄色	黒色	ﾊｹ目	ﾊｹ目	黒色	荒粒	
929	瓦器質土器	碗	口縁部	口径 8.8	B-6	Ⅱ	灰色	灰色	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	灰白色		
930	瓦器質土器	碗	体部		C-6	Ⅱ	灰白色	灰白色	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	淡黄色	細粒	
931	瓦器質土器	碗	底部	底径 4.4	B-5	Ⅱ	灰色	灰色	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	灰白色		
932	赤色土器	埦	口縁～体部	口径 18.0	D-9	Ⅱ	明褐色	明褐色	一部研磨	研磨	にぶい赤褐色	細粒	
933	赤色土器	埦	口縁～体部	口径 12.4	E-9	Ⅱ	明黄褐色	黄橙色	丁寧仕上げ	研磨	明黄褐色	細粒	

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様･その他
934	土師器	埦	口縁～体部	口径 12.0	B-3	Ⅱ	黄橙色	浅黄橙色	水挽き	水挽き	浅黄橙色	細粒(石英有り)	
935	土師器	埦	口縁～体部	口径 15.0	B-3	Ⅱ	明黄褐色	にぶい黄橙色	水挽き	水挽き	にぶい橙色	細粒	
936	赤色土器	埦	口縁部	口径 18.8	C-11	Ⅰb	にぶい橙色	にぶい褐色	研磨	研磨	橙色	細粒	
937	土師器	埦	底部	底径 7.2	F-7	Ⅰc	浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き	水挽き	黄褐色	細粒(石英有り)	
938	土師器	埦	底部	底径 6.6	F-8	Ⅲa	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き	水挽き､ﾅﾃﾞ	浅黄橙色	細粒	
939	土師器	埦	底部	底径 9.0	D-12	Ⅲ	橙色	橙色	水挽き	水挽き	黒褐色	細粒	
940	土師器	埦	底部	底径 7.4	B-3	Ⅱ	浅黄色	浅黄色	水挽き	水挽き	にぶい黄色	荒粒	
941	土師器	埦	底部	底径 6.6	E-6	Ⅱ	明赤褐色	浅黄橙色	水挽き	水挽き	黒褐色	細粒(石英有り)	
942	土師器	埦	底部	底径 7.0	D-4	Ⅱ	黄橙色	浅黄橙色	水挽き､ﾅﾃﾞ	研磨	浅黄橙色	細粒	線刻
943	土師器	埦	底部	底径 8.6	C-4	Ⅱ	浅黄色	浅黄色	水挽き	水挽き	浅黄色	細粒(石英有り)	
944	土師器	埦	底部	底径 7.4	D-5	Ⅱ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き､ﾅﾃﾞ	水挽き､ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色	細粒	
945	土師器	埦	底部	底径 9.1	C-6	Ⅱ	黄橙色	黄橙色	水挽き	水挽き	浅黄橙色	細粒	
946	土師器	埦	底部	底径 6.6	B-4	Ⅱ	浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き､ﾅﾃﾞ	水挽き､ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色	細粒	
947	土師器	埦	底部	底径 7.8	D-11	Ⅱ	黄橙色	黄橙色	水挽き	水挽き	明黄褐色	細粒	
948	土師器	埦	底部	底径 7.2	B-3	Ⅱ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き	水挽き	にぶい黄褐色	細粒	
949	土師器	埦	底部	底径 8.0	D-7	Ⅱ	にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き	水挽き､ﾅﾃﾞ	にぶい褐色	細粒	
950	土師器	埦	底部	底径 7.4	C-10	Ⅱ	にぶい橙色､黒色	にぶい橙色	水挽き	水挽き	にぶい橙色	細粒	
951	土師器	埦	底部	底径 7.0	B-3	Ⅱ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き	水挽き	にぶい黄橙色	細粒	
952	土師器	埦	底部	底径 7.4	D-8	Ⅱ	浅黄橙色	明赤褐色	水挽き	研磨	橙色	細粒	線刻
953	黒色土器A	埦	底部	底径 9.2	F-8	Ⅱ	にぶい黄橙色	黒色	水挽き	研磨	黒褐色	細粒	線刻
954	土師器	埦	底部	底径 7.0	B-6	Ⅱ	橙色	にぶい橙色	水挽き	研磨	にぶい褐色	細粒	
955	土師器	埦	底部	底径 7.0	B-3	Ⅱ	にぶい黄橙色	浅黄橙色	水挽き	水挽き	浅黄橙色	細粒(石英有り)	
956	土師器	埦	底部	底径 5.6	F-5	Ⅱ	明黄褐色	明黄褐色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
957	黒色土器A	埦	底部	底径 5.6	E-5	Ⅱ	浅黄橙色	黒色	水挽き	研磨	浅黄橙色	細粒	線刻
958	土師器	埦	底部	底径 8.0	D-6	Ⅱ	にぶい橙色	にぶい橙色	研磨	研磨	浅黄橙色	細粒	
959	赤色土器	埦	底部	底径 8.0	E-8	Ⅱ	灰白色	浅黄橙色	水挽き	研磨	灰白色	細粒	
960	土師器	埦	底部	底径 7.4	C-7	Ⅰc	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き	研磨	にぶい黄橙色	細粒	
961	赤色土器	埦	体部～高台	底径 6.0	D-8	Ⅱ	にぶい橙色	橙色	ﾅﾃﾞ	研磨	明褐色	細粒	
962	赤色土器	埦	底部	底径 8.0	E-6	Ⅰc	黄橙色	黄橙色	水挽き	水挽き	にぶい褐色	細粒	
963	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 16.0	D-6	Ⅱ	浅黄橙色	黒色	研磨	研磨	暗灰褐色	細粒	
964	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 19.0			浅黄色	黒褐色	研磨､ﾍﾗ	研磨	浅黄色	細粒	
965	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 17.5	D-7	Ⅱ	にぶい黄橙色	暗褐色	研磨	研磨	明黄褐色	細粒	
966	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 17.4	F-5		にぶい黄褐色	褐灰色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
967	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 20.0	C-7	Ⅱ	明褐色	黒色	研磨	研磨	明褐色	細粒	
968	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 18.0	B-4	Ⅱ	にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	暗褐色	細粒	
969	黒色土器A	埦	口縁～高台	口径 15.9			にぶい黄橙色	黒色	研磨	研磨	淡黄色	細粒	線刻
970	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 18.0	C-11	Ⅱ	黄橙色	黒色	研磨	研磨	暗褐色	細粒	
971	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 16.0	B-6	Ⅱ	にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
972	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 15.6	D-6	Ⅱ	にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
973	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 17.0	E-6	Ⅱ	浅黄色	灰黄色	研磨	研磨	灰黄色	細粒	
974	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 17.6	D-6	Ⅱ	にぶい黄橙色	黒色	研磨	研磨	褐色	細粒	
975	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 17.6	D-6	Ⅱ	黒色､橙色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	
976	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 18.6	C-8	Ⅰc	にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	褐灰色	細粒	
977	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 17.6	E-7	Ⅱ	褐灰色	黒色	研磨､ﾍﾗﾅﾃﾞ	研磨	黄灰色	細粒	
978	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 16.0	D-7	Ⅱ	灰黄色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	
979	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 15.0	E-6	Ⅰc	明黄褐色	黒色	丁寧な仕上げ	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
980	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 15.4	D-6	Ⅱ	浅黄色	黒色	研磨	研磨	にぶい黄橙色	細粒	
981	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 13.6	D-7	Ⅱ	にぶい橙色	黒色	研磨	研磨	灰黄褐色	細粒	

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
982	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 17.0	D-7	Ⅱ	にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	
983	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 16.0	D-6	Ⅰb	にぶい黄橙色	黒色	水挽き	研磨	にぶい黄褐色	荒粒	
984	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 18.2	D-6	Ⅱ	にぶい赤褐色	黒色	研磨	研磨	にぶい橙色	細粒	
985	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 17.6	D-6	Ⅱ	明黄褐色	黒色	研磨	研磨	黄褐色	細粒	
986	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 19.0	D-6	Ⅱ	にぶい橙色	黒褐色	研磨	研磨	灰赤色	細粒	
987	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 20.0	F-5	Ⅱ	にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
988	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 18.8	D-6	Ⅱ	明黄褐色	黒色	研磨	研磨	浅黄橙色	細粒	
989	黒色土器A	埦	口縁～体部	口径 14.0	C-11	Ⅱ	にぶい黄色	黒色	研磨	研磨	灰黄褐色	細粒	
990	黒色土器A	埦	口縁部	口径 13.2	E-6	Ⅱ	にぶい黄橙色	黄灰色	水挽き、丁寧なﾍﾗﾅﾃﾞ	水挽き、丁寧なﾍﾗﾅﾃﾞ	浅黄橙色	細粒	
991	黒色土器A	埦	底部	底径 6.6	D-6	Ⅱ	浅黄色	黒色	水挽き、研磨	研磨	灰色	細粒	線刻
992	黒色土器A	埦	底部	底径 7.3	D-7	Ⅱ	褐灰色	黒色	水挽き	研磨	褐灰色	細粒	線刻
993	黒色土器A	埦	底部	底径 6.4	D-7	Ⅱ	にぶい黄色	黒色	水挽き	研磨	にぶい橙色	細粒	線刻
994	黒色土器A	埦	底部	底径 7.2	D-6	Ⅱ	浅黄色	黒色	研磨	研磨	浅黄色	細粒	
995	黒色土器A	埦	底部	底径 6.4	D-6	Ⅱ	暗灰黄色	黒色	丁寧仕上げ、研磨	研磨	褐色	細粒	
996	黒色土器A	埦	底部	底径 6.2		Ⅱ	灰白色	黄灰色	丁寧仕上げ	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
997	黒色土器A	埦	底部	底径 7.2	D-6	Ⅱ	浅黄橙色	黒色	水挽き、研磨	研磨	灰白色	細粒	
998	黒色土器A	埦	底部	底径 8.0	D-11	Ⅱ	橙色	黒色	丁寧仕上げ	研磨	橙色	細粒	
999	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 6.4	D-7	Ⅱ	浅黄色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄橙色	細粒	線刻
1000	黒色土器A	埦	底部	底径 7.4	B-4	Ⅱ	にぶい黄橙色	黒色	水挽き	研磨	にぶい黄橙色	細粒	
1001	黒色土器A	埦	底部	底径 7.2	D-6	Ⅱ	にぶい黄橙色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい橙色	細粒	線刻
1002	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 6.6	D-6	Ⅱ	にぶい黄橙色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄橙色	細粒	
1003	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 7.0	C-7	Ⅰc	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
1004	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 7.6	E-7	Ⅱ	にぶい黄橙色	黒色	研磨、ﾍﾗﾅﾃﾞ	研磨	浅黄橙色	細粒	
1005	黒色土器A	埦	体～底部	底径 6.0	C-8	Ⅱ	灰赤色	灰褐色	研磨	研磨	にぶい橙色	細粒	
1006	黒色土器A	埦	底部	底径 7.2	D-7	Ⅱ	浅黄橙色	にぶい橙色、黒色	水挽き	研磨	にぶい橙色	細粒(赤色粒有り)	
1007	黒色土器A	埦	底部	底径 9.0	B-4	Ⅱ	にぶい黄色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄色	細粒	線刻
1008	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 6.2	C-6	Ⅱ	明黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄橙色	細粒	線刻
1009	黒色土器A	埦	底部	底径 6.2	F-5	Ⅱ	にぶい黄褐色	黒色	ﾅﾃﾞ	研磨	浅黄橙色	細粒	線刻
1010	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 8.4	B-10	Ⅱ	にぶい黄橙色	黒色	水挽き、研磨	研磨	黒色	細粒	線刻
1011	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 7.6	D-6	Ⅱ	にぶい黄橙色	黒色	水挽き、研磨	研磨	灰黄褐色	細粒	
1012	黒色土器A	埦	底部	底径 9.0	D-6	Ⅱ	にぶい橙色	褐灰色	水挽き、研磨	研磨	黄灰色	細粒	
1013	黒色土器A	埦	底部	底径 7.0	E-5	Ⅱ	灰黄色	黒色	ﾅﾃﾞ	研磨	にぶい黄褐色	細粒	布目痕(内)
1014	黒色土器A	埦	底部	底径 7.6	C-10	Ⅱ	橙色	黒色	水挽き	研磨	にぶい橙色	細粒	
1015	黒色土器A	埦	底部	底径 7.0	C-7	Ⅲ	灰黄色	黒色	水挽き	研磨	灰黄褐色	細粒	
1016	黒色土器A	埦	底部	底径 6.7	B-5	Ⅱ	にぶい黄橙色	黒色	水挽き	研磨	にぶい黄橙色	細粒	
1017	黒色土器A	埦	底部	底径 6.4	C-8	Ⅱ	にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	線刻
1018	黒色土器A	埦	底部	底径 6.2	E-6	Ⅰc	にぶい黄橙色	黒色	水挽き	研磨	浅黄橙色	細粒	
1019	黒色土器A	埦	底部	底径 6.4	C-11	Ⅱ	黄灰色	灰黄色	水挽き	丁寧仕上げ	黄灰色	細粒	
1020	黒色土器A	埦	底部	底径 7.6	E-5	Ⅱ	にぶい橙色、黒色	黒色	丁寧仕上げ	研磨	浅黄橙色	細粒	
1021	黒色土器A	埦	底部	底径 6.8	D-8	Ⅰc	暗灰黄色	黒色	水挽き、ﾍﾗﾅﾃﾞ	研磨	浅黄色	細粒	線刻
1022	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 7.0	F-7	Ⅱ	黄橙色	黒色	水挽き、研磨	研磨	浅黄橙色	細粒	線刻
1023	黒色土器A	埦	底部	底径 7.0	C-5	Ⅰc	にぶい黄橙色	黒色	水挽き	研磨	にぶい橙色	細粒	線刻
1024	黒色土器A	埦	底部	底径 6.8	D-6	Ⅱ	にぶい黄橙色	黒色	水挽き	研磨	浅黄橙色	細粒	線刻
1025	黒色土器A	埦	底部	底径 7.0	D-4	Ⅰb	にぶい黄色	黒色	水挽き	研磨	灰黄褐色	細粒	線刻
1026	黒色土器A	埦	底部	底径 7.2	D-7		にぶい黄橙色	ｵﾘｰﾌﾞ黒色	水挽き、糸切り	水挽き、研磨	にぶい黄褐色	細粒(石英有り)	線刻
1027	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 7.0	D-3	Ⅰc	浅黄色	黒色	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	研磨	明黄褐色	細粒	
1028	黒色土器A	埦	底部	底径 6.0	D-12	Ⅰ	橙色	褐色	水挽き	丁寧な仕上げ	浅黄橙色	細粒	
1029	黒色土器A	埦	底部	底径 12.4	E-9	Ⅰb	にぶい黄褐色	ｵﾘｰﾌﾞ褐色	水挽き、ﾍﾗ切り	丁寧な仕上げ	にぶい黄褐色	細粒	

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
1030	黒色土器A	埦	底部	底径 7.2	B-2	Ⅱ	淡黄色	黒色	水挽き	研磨	淡黄色	細粒	
1031	黒色土器A	埦	底部	底径 6.4	C-7	Ⅱ	にぶい黄色	黒色	水挽き、丁寧仕上げ	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
1032	黒色土器A	埦	底部	底径 7.6	C-8	Ⅱ	灰黄色	黒色	水挽き、研磨	研磨	浅黄色	細粒	
1033	黒色土器A	埦	底部	底径 6.0	D-12	Ⅰ	にぶい黄褐色	黒色	水挽き	研磨	灰黄褐色	細粒	
1034	黒色土器A	埦	底部	底径 7.0	D-11	Ⅰb	にぶい黄褐色	黒色	水挽き	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
1035	黒色土器A	埦	底部	底径 8.6	B-5	Ⅲa	にぶい黄橙色	黒色	水挽き	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
1036	黒色土器A	埦	底部	底径 7.6	B-5	Ⅱ	明黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
1037	黒色土器A	埦	底部	底径 7.4	B-5	Ⅲa	浅黄色	黒色	研磨	研磨	浅黄色	細粒	線刻
1038	黒色土器A	埦	底部	底径 7.0	C-5	Ⅰc	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	明黄褐色	細粒	
1039	黒色土器A	埦	底部	底径 7.4	D-4	Ⅰc	灰黄褐色	黒色	研磨	研磨	灰黄褐色	細粒	線刻
1040	黒色土器A	埦	底部	底径 7.8	D-6	Ⅱ	浅黄橙色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄橙色	細粒	
1041	黒色土器A	埦	底部	底径 7.4	D-8	Ⅰ	にぶい黄橙色	黒色	水挽き、ﾍﾗﾅﾃﾞ	研磨	にぶい黄橙色	細粒	線刻
1042	黒色土器A	埦	底部	底径 7.6	B-6	Ⅱ	浅黄色	にぶい黄橙色	水挽き	研磨	灰白色	細粒	
1043	黒色土器A	埦	底部	底径 7.4	B-4	Ⅲa	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	褐色	細粒	
1044	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 7.0	E-10	Ⅱ	にぶい黄橙色	黒色	丁寧仕上げ	研磨	黒色	細粒	
1045	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 7.4	E-5	Ⅱ	浅黄橙色	黒色	水挽き、ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	灰白色	細粒	線刻
1046	黒色土器A	埦	体～底部	底径 6.6	B-5	Ⅱ	にぶい黄色	黄灰色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄橙色	細粒	
1047	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 7.0	B-4	Ⅱ	明黄褐色	明黄褐色、黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄橙色	細粒	
1048	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 6.0	D-3		灰黄褐色	黒色	研磨	研磨	暗灰色	細粒	
1049	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 6.8	B-6	Ⅱ	にぶい黄橙色	黒色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	線刻
1050	黒色土器A	埦	底部	底径 6.2	D-6	Ⅱ	橙色	褐灰色	ﾅﾃﾞ	研磨	黒褐色	細粒	
1051	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 6.6	B-7	Ⅰc	にぶい黄橙色	黒色	水挽き、研磨	研磨	浅黄橙色	細粒	
1052	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 7.2	B-4	Ⅱ	浅黄色	黒色	水挽き、研磨	研磨	黄灰色	細粒	
1053	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 7.0	D-2	Ⅰc	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	黄褐色	細粒	
1054	黒色土器A	埦	体部～底部	底径 6.8	C-8	Ⅱ	灰黄色	黒色	ﾍﾗ切り、研磨	研磨	にぶい黄橙色	細粒	
1055	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 8.0	B-4	Ⅱ	暗灰黄色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい橙色	細粒	
1056	黒色土器A	埦	底部	底径 8.4	C-6	Ⅰb	にぶい黄褐色	黒色	水挽き	研磨	灰黄褐色	細粒	
1057	黒色土器A	埦	底部	底径 8.0	E-8	Ⅱ	灰黄色	黒色	水挽き、研磨	研磨	灰黄褐色	細粒	中央研磨弱い
1058	黒色土器A	埦	底部	底径 8.0	D-7	Ⅱ	灰黄色	黒色	水挽き、研磨	研磨	褐灰色	細粒	線刻
1059	黒色土器A	埦	体～底部	底径 6.8	E-5	Ⅱ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	研磨	研磨	灰黄色	細粒	
1060	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 7.0	D-8	Ⅱ	浅黄橙色	黒色	水挽き、研磨	研磨	灰白色	細粒	中央研磨弱い
1061	黒色土器A	埦	底部	底径 6.0	E-6	Ⅱ	にぶい黄色	黒色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
1062	黒色土器A	埦	体部～高台	底径 6.8	C-6	Ⅱ	明黄褐色	黒色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	線刻
1063	黒色土器A	埦	底部	底径 5.6	E-6	Ⅱ	にぶい黄橙色	黒色	水挽き、研磨	研磨	黄褐色	細粒	
1064	黒色土器A	埦	底部	底径 7.0	B-4	Ⅱ	明黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
1065	黒色土器A	埦	底部	底径 7.4	D-8	Ⅰ	にぶい黄橙色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄橙色	細粒	線刻
1066	黒色土器A	埦	体～底部	底径 6.6	F-6	Ⅱ	灰黄色	黄灰色	研磨	研磨	灰黄色	細粒	
1067	黒色土器A	埦	底部	底径 6.0	D-7	Ⅱ	にぶい黄橙色	黒色	水挽き	研磨	褐灰色	細粒	線刻
1068	黒色土器A	埦	底部	底径 6.2	E-6		にぶい黄褐色	黒色	水挽き	研磨	褐色	細粒	線刻
1069	土師器	坏	口縁～底部	口径 15.0	C-9	Ⅱ	橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色	細粒	
1070	土師器	坏	口縁～底部	口径 12.2	B-5	Ⅰc	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色	荒粒(石英有り)	
1071	土師器	坏	口縁～底部	口径 14.2	C-11	Ⅱ	灰黄色	灰黄色	水挽き、糸切り	水挽き	灰黄色	荒粒	
1072	黒色土器A	坏	口縁～底部	口径 15.8	D-7	Ⅱ	褐色	暗褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい褐色	細粒	丁寧な調整
1073	土師器	坏	口縁～底部	口径 15.0	C-12	Ⅱ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色	細粒(石英有り)	
1074	土師器	坏	口縁～底部	口径 14.6	C-12	Ⅱ	褐灰色	黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色	荒粒(石英有り)	
1075	土師器	坏	口縁部	口径 12.2	C-5	Ⅰc	にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き	水挽き	にぶい橙色	荒粒(石英有り)	
1076	土師器	坏	底部	底径 10.0	C-3	Ⅰb	灰褐色	灰白色	水挽き、ﾍﾗ切り	水挽き、ﾅﾃﾞ	にぶい橙色	細粒	
1077	土師器	坏	口縁部	口径 14.4	C-7	Ⅱ	にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き	水挽き	にぶい橙色	荒粒(石英有り)	

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様･その他
1078	土師器	坏	体部～底部	底径 8.0	D-8	Ⅱ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾅﾃﾞ	にぶい褐色	荒粒	
1079	土師器	坏	体部～底部	底径 7.2	E-4	Ⅰc	にぶい褐色	にぶい赤橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	荒粒(石英有り)	
1080	土師器	坏	底部	底径 11.0	E-7	Ⅱ	褐色	褐色	水挽き、糸切り	水挽き	灰褐色	荒粒	
1081	土師器	坏	底部	底径 6.6	D-4	Ⅰb	にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	細粒	
1082	土師器	坏	底部	底径 8.8	B-5	Ⅱ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色	荒粒(石英有り)	
1083	土師器	坏	体部～底部	底径 9.0	D-7		黄褐色	褐色	水挽き、糸切り	水挽き、見込みに二重円	にぶい黄褐色	荒粒	
1084	土師器	坏	底部	底径 12.0	D-7	Ⅱ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	荒粒	
1085	土師器	坏	底部	底径 6.0	F-5	Ⅲ	赤褐色	赤褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾅﾃﾞ	赤褐色	荒粒	
1086	土師器	坏	体～底部	底径 10.2	C-11	Ⅱ	にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	細粒	充実高台
1087	土師器	坏	口縁～底部	口径 14.4	C-5	Ⅰc	橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色	細粒(石英有り)	
1088	土師器	坏	口縁～底部	口径 15.6	D-6	Ⅱ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色	細粒	
1089	土師器	坏	口縁～底部	口径 16.6	C-5	Ⅰc	橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色	細粒(石英有り)	
1090	土師器	坏	体部～底部	口径 15.6	D-7	Ⅱ	橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色	細粒	
1091	土師器	坏	口縁～体部	口径 16.2	C-5	Ⅰc	にぶい橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色	細粒(石英有り)	
1092	土師器	坏	口縁～胴部	口径 14.4	溝3	Ⅰ	ｵﾘｰﾌﾞ褐色	にぶい黄褐色	水挽き	水挽き	にぶい黄橙色	細粒	
1093	土師器	坏	口縁部	口径 15.0	E-6	Ⅱ	にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き	水挽き	にぶい黄橙色	荒粒(石英、赤色粒有り)	
1094	土師器	坏	口縁部	口径 14.4	E-6	Ⅱ	褐色	浅黄色	水挽き	水挽き	にぶい黄橙色	荒粒(石英有り)	
1095	土師器	坏	口縁部	口径 15.2	C-7	Ⅱ	にぶい黄橙色	にぶい橙色	水挽き	水挽き	にぶい黄橙色	荒粒(石英有り)	
1096	土師器	坏	口縁部	口径 12.4	D-2	Ⅰc	褐灰色	にぶい黄橙色	水挽き	水挽き	にぶい黄橙色	荒粒(石英有り)	
1097	土師器	坏	口縁部	口径 16.2	D-7	Ⅱ	灰黄色	灰黄色	水挽き	水挽き	黄灰色	荒粒(石英有り)	
1098	土師器	坏	口縁～体部	口径 15.0	E-7	Ⅱ	にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き	水挽き	橙色	細粒	
1099	土師器	坏	口縁～底部	口径 11.2	C-5	Ⅰc	橙色	浅黄橙色	水挽き	水挽き	浅黄橙色	荒粒(石英有り)	
1100	土師器	坏	口縁～底部	口径 15.0	E-9	Ⅱ	淡黄色	淡黄色	水挽き、糸切り	ﾅﾃﾞ	淡黄色	荒粒	
1101	土師器	坏	口縁部	口径 17.6	D-6	Ⅰc	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き	水挽き	浅黄色	荒粒(石英有り)	
1102	土師器	坏	体部～底部	底径 7.4	F-5	Ⅱ	褐色	褐色	水挽き、糸切り	水挽き	灰黄褐色	荒粒	
1103	土師器	坏	底部	底径 7.4	B-6	Ⅰc	橙色	黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色	細粒	
1104	土師器	坏	底部	底径 7.8	D-6	Ⅱ	にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	細粒	
1105	土師器	坏	体部～底部	底径 6.4	B-6	Ⅱ	にぶい黄橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色	荒粒(石英有り)	
1106	土師器	坏	底部	底径 8.6	E-6		灰褐色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	灰褐色	荒粒(石英有り)	
1107	土師器	坏	底部	底径 7.4	溝3	Ⅰ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色	荒粒	
1108	土師器	坏	体部～底部	底径 10.0	D-6	Ⅲ	橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	細粒	
1109	土師器	坏	体部～底部	底径 10.8	C-11	Ⅱ	黄褐色	黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	黄褐色		
1110	土師器	坏	底部	底径 8.4	E-7	Ⅱ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい赤褐色	荒粒	
1111	土師器	坏	底部	底径 7.4	C-5	Ⅰb	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き、手ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色	荒粒(石英有り)	
1112	土師器	坏	底部	底径 11.6	E-6	Ⅰc	黒褐色	にぶい褐色	水挽き、糸切り	水挽き	灰黄色	荒粒(石英有り)	
1113	土師器	坏	底部	底径 9.0	E-5	Ⅱ	浅黄色	淡黄色	水挽き、糸切り	水挽き	淡黄色	荒粒	
1114	土師器	皿	底部	底径 9.2	D-10	Ⅰc	橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色	細粒(石英有り)	
1115	土師器	坏	口縁～底部	口径 16.8	D-7	Ⅱ	黄色	黄色	水挽き、糸切り	水挽き	淡黄色	細粒	
1116	土師器	坏	口縁～底部	口径 16.6	D-6	Ⅱ	黄橙色	黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾍﾗﾅﾃﾞ	淡黄橙色	細粒	
1117	土師器	坏	口縁～底部	口径 13.8	C-8	Ⅱ	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色	荒粒(石英有り)	
1118	土師器	坏	口縁～底部	口径 14.4	C-12	Ⅰb	橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい褐色	細粒	
1119	土師器	坏	口縁～胴部	口径 17.2	E-6		浅黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き	水挽き	浅黄橙色	細粒	
1120	土師器	坏	口縁～底部	口径 15.6	F-7	Ⅰb	黄橙色	黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色	細粒	
1121	土師器	坏	口縁～底部	口径 13.2	E-4	Ⅱ	黄褐色	黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄褐色	荒粒	
1122	土師器	坏	口縁～底部	口径 15.0	C-7	Ⅱ	にぶい黄褐色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色	細粒	
1123	土師器	坏	体部～底部	底径 9.4	C-12	Ⅱ	明黄褐色	明黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐色	荒粒	
1124	土師器	坏	底部	底径 11.2	C-7	Ⅱ	灰褐色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色	細粒	
1125	土師器	坏	体部～底部	底径 9.6	B-6	Ⅱ	褐色	明褐色	水挽き、糸切り	水挽き、見込みに二重円	黄褐色		

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
1126	土師器	坏	体部～底部	底径 9.6	B-6	Ⅱ	にぶい褐色	灰黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄褐色	荒粒	
1127	土師器	坏	体部～底部	底径 8.6	C-11	Ⅱ	褐色	明褐色	水挽き、糸切り	水挽き	明褐色	細粒	
1128	土師器	坏	底部	底径 7.6	E-8	Ⅱ	橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色	荒粒	
1129	土師器	坏	口縁～底部	口径 15.0	C-11	Ⅲa	赤褐色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄褐色	荒粒、丹塗り	
1130	土師器	盤	口縁～底部	口径 23.0	C-8	Ⅰc	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色	細粒(石英有り)	
1131	土師器	坏	口縁～底部	口径 16.6	C-7	Ⅱ	黄褐色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	ﾅﾃﾞ	にぶい橙色	細粒	
1132	土師器	坏	口縁～底部	口径 11.4	C-5	Ⅰc	にぶい橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	赤橙色	荒粒(石英有り)	
1133	土師器	坏	口縁～底部	口径 11.0	D-11	Ⅰb	にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、ﾍﾗ切り	水挽き	橙色	細粒	
1134	土師器	浅鍋	胴～底部	底径 12.4	C-3	Ⅰa	にぶい黄褐色	明黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色	細粒	
1135	土師器	坏	底部	底径 13.0	B-5	Ⅰb	にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾅﾃﾞ	にぶい褐色	荒粒	
1136	土師器	坏	底部	底径 8.0	C-5	Ⅰc	浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色	細粒(石英有り)	
1137	土師器	坏	底部	底径 10.6	C-8	Ⅰc	灰黄褐色	灰黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色	細粒(石英有り)	
1138	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.0	D-7	Ⅰb	橙色	橙色	水挽き痕、糸切り	水挽き痕	橙色	細粒	灯明皿
1139	土師器	小皿	口縁～底部	口径 5.6	D-7	Ⅱ	黄橙色	黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色	細粒(石英、赤色粒有り)	灯明皿
1140	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.0	C-6	Ⅱ	明黄褐色	明黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	明黄褐色	細粒	
1141	土師器	小皿	口縁～底部	口径 6.8	E-4	Ⅱ	浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	黄褐色	細粒	
1142	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.0	D-6	Ⅱ	浅黄橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	荒粒(石英有り)	
1143	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.4	C-8	Ⅱ	橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾅﾃﾞ	橙色	細粒	
1144	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.7	D-6	Ⅱ	にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き	水挽き	にぶい橙色	細粒(石英有り)	
1145	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	D-7	Ⅱ	橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	細粒	
1146	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.2	D-6	Ⅱ	明赤褐色	明赤褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾅﾃﾞ	明赤褐色	荒粒	
1147	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.6	D-4	Ⅱ	明黄橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	明黄橙色	細粒	
1148	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.8	E-5	Ⅱ	黄褐色	黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、櫛目	黄褐色	荒粒	
1149	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	D-7	Ⅱ	黄橙色	黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	黄橙色	細粒	
1150	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.2	D-6	Ⅱ	橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色	荒粒(石英有り)	指跡
1151	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.6	C-8	Ⅱ	灰黄色	灰黄色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾅﾃﾞ	灰黄色		
1152	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	D-7	Ⅱ	橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	荒粒(石英有り)	
1153	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.0	C-7	Ⅱ	橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色	細粒	
1154	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.0	F-5	Ⅱ	浅黄橙色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色	細粒	
1155	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	D-7	Ⅱ	橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾅﾃﾞ	橙色	細粒	
1156	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.4	F-4	Ⅰc	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄褐色	細粒	
1157	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	C-6	Ⅱ	浅黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色	細粒	
1158	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.4		表	黄橙色	黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	黄橙色	細粒	
1159	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.5	D-6	Ⅱ	灰白色	灰白色	水挽き、糸切り	水挽き	灰白色	荒粒(石英有り)	
1160	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.6	E-6	Ⅱ	にぶい黄色	にぶい黄色	水挽き、糸切り	水挽き	灰黄色	細粒	
1161	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	C-8	Ⅱ	淡黄色	淡黄色	水挽き、糸切り	水挽き	淡黄色	細粒	
1162	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.4	C-6	Ⅰc	浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色	細粒(石英有り)	
1163	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	D-6	Ⅰc	浅黄橙色	黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色	細粒	
1164	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	E-6	Ⅰc	浅黄色	浅黄色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄褐色		
1165	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.2	E-3	Ⅱ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色	細粒	
1166	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	D-6	Ⅱ	にぶい黄色	にぶい黄色	水挽き、糸切り	水挽き	灰黄褐色	細粒	
1167	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	E-8	Ⅰc	にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	細粒	
1168	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.2	C-8	Ⅱ	にぶい黄色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾅﾃﾞ	橙色	細粒	
1169	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.6	D-8	Ⅱ	橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	細粒	
1170	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.0	E-4	Ⅱ	にぶい黄橙色	明黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色	細粒	
1171	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.2	F-5	Ⅰb	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色	細粒	
1172	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.6	C-7	Ⅰb	褐灰色	褐灰色	水挽き、糸切り	ﾅﾃﾞ	褐灰色	細粒	
1173	土師器	小皿	完形	口径 10.0	D-7	Ⅱ	黄橙色	黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色	荒粒(石英有り)	

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
1174	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.6	D-6	Ⅱ	黄褐色	黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	暗灰黄色	細粒(石英、赤色粒有り)	
1175	土師器	小皿	完形	口径 9.2	C-6	Ⅱ	黄褐色	黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾅﾃﾞ	浅黄色	細粒	
1176	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.4	C-7	Ⅱ	にぶい橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	ﾅﾃﾞ	浅黄橙色	細粒	
1177	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.8	C-8	Ⅱ	浅黄色	浅黄色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾅﾃﾞ	浅黄色	細粒	
1178	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.0	D-4	Ⅱ	黄橙色	黄橙色	水挽き、糸切り	ﾅﾃﾞ	明褐色	細粒	
1179	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.6	B-4	Ⅲa	浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	明褐色	細粒	
1180	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.2	C-6	Ⅰc	にぶい黄橙色	にぶい褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい橙色	細粒	
1181	土師器	小皿	口縁～底部	口径 11.4	D-7	Ⅱ	にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、ﾍﾗ切り	水挽き	にぶい橙色	荒粒(石英有り)	
1182	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.4	C-6	Ⅱ	橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色	細粒	
1183	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.6	C-5	Ⅰb	灰黄褐色	灰黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色	細粒	
1184	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.6	C-8		浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色	細粒	
1185	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.2	E-4	Ⅱ	にぶい黄褐色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色	細粒	
1186	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.6	D-6	Ⅱ	浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色	細粒	
1187	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.4	C-5	Ⅰc	黄橙色	黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	黄橙色	細粒	
1188	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.6	D-6	Ⅱ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り、ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色	細粒	
1189	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	D-8	Ⅰc	にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色	細粒	
1190	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.0	C-13	Ⅲ	黄橙色	黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾅﾃﾞ	黄橙色	細粒	
1191	土師器	小皿	口縁～底部	口径 12.6	C-6	Ⅱ	橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色	細粒	
1192	土師器	小皿	口縁～底部	口径 11.2	C-5	Ⅰc	浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色	細粒	
1193	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.6	D-6	Ⅱ	橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色	荒粒(石英有り)	
1194	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	F-5	Ⅱ	橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色	細粒	
1195	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	C-5	Ⅰc	にぶい黄橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色	荒粒(石英有り)	
1196	土師器	小皿	口縁～底部	口径 6.8	D-6	Ⅱ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄褐色	細粒	
1197	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.4	B-4	Ⅱ	浅黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色	荒粒(石英有り)	
1198	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.1	D-6	Ⅱ	にぶい黄色	暗灰黄色	水挽き、糸切り	水挽き	灰黄色	荒粒(石英有り)	
1199	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	D-3	Ⅲ	橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	細粒	
1200	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	D-6	Ⅱ	橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	荒粒(石英有り)	
1201	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	D-2	Ⅰc	浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色	細粒	
1202	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.6	D-6	Ⅱ	橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色	細粒	
1203	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	D-6	Ⅱ	明赤褐色	明赤褐色	水挽き、糸切り	水挽き	明赤褐色	細粒	
1204	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.8	D-2	Ⅰc	にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾅﾃﾞ	浅黄橙色	細粒	
1205	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.2	D-6	Ⅱ	にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	細粒	
1206	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.2	D-7	Ⅱ	にぶい橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙色	荒粒(石英有り)	
1207	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.4	D-6	Ⅱ	にぶい橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	荒粒(石英有り)	
1208	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.6	D-6	Ⅱ	灰黄色	灰黄色	水挽き、糸切り	ﾅﾃﾞ	浅黄橙色	荒粒(赤色粒有り)	
1209	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.6	D-7	Ⅱ	浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	ﾍﾗﾅﾃﾞ	浅黄橙色		
1210	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.2	D-6	Ⅱ	にぶい黄橙色	明黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	明黄褐色	細粒	
1211	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.2	D-7	Ⅱ	にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	荒粒(石英有り)	
1212	土師器	小皿	口縁～底部	口径 11.0	D-6	Ⅱ	浅黄橙色	浅黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色	荒粒(石英、赤色粒有り)	糸切り後置跡
1213	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.6	B-4	Ⅱ	黄橙色	黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾍﾗ	橙色	荒粒	
1214	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.6	B-4	Ⅱ	浅黄色	浅黄色	水挽き、糸切り	ﾍﾗﾅﾃﾞ	浅黄色	細粒	
1215	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.8	D-7	Ⅱ	橙色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい橙色	荒粒(石英有り)	
1216	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.0	B-6	Ⅱ	明黄褐色	明黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄橙色	荒粒(赤色粒有り)	
1217	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.4	E-6	Ⅱ	浅黄橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙色	細粒	
1218	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.6	D-6・7		にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き	黄橙色	細粒(石英有り)	
1219	黒色土器B	坏	口縁～体部	口径 17.2	D-6	Ⅱ	黒色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	
1220	黒色土器B	坏	口縁	口径 19.4	E-5	Ⅱ	黒色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	
1221	黒色土器B	坏	口縁	口径 16.2	D-6	Ⅱ	黒色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
1222	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 10.0	D-6	Ⅱ	黒色	黒色	研磨、糸切り	研磨	黒色	細粒	
1223	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 11.0	D-6	Ⅱ	黒色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	
1224	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 9.0	D-6	Ⅱ	黒色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	
1225	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 8.6	D-6	Ⅱ	黒色	黒色	研磨、糸切り	研磨	黒色	細粒	
1226	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 8.2	D-7	Ⅱ	黒色	黒色	研磨、糸切り	研磨	黒色	細粒	
1227	黒色土器B	小皿	口縁～体部	口径 7.6	D-6	Ⅱ	黒色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	
1228	黒色土器B	小皿	口縁～体部	口径 11.9	D-6	Ⅱ	黒色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	
1229	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 9.4	D-6	Ⅱ	黒色	黒色	研磨、糸切り	研磨	黒色	細粒	
1230	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 11.8	D-6	Ⅱ	黒色	黒色	研磨	研磨	灰黄褐色	細粒	
1231	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 8.4	F-4	Ⅰb	黒色	黒色	研磨、糸切り	研磨	黒色	細粒	
1232	黒色土器B	小皿	底部	底径 6.0	E-5	Ⅱ	黒色	黒色	研磨、糸切り	研磨	黒色	細粒	
1233	黒色土器B	小皿	底部	底径 3.8	C-11	Ⅱ	黒色	黒色	研磨、糸切り	研磨	黒色	細粒	
1234	黒色土器B	小皿	底部	底径 5.0	C-9	Ⅱ	黒色	黒色	研磨、糸切り	研磨	黒色	細粒	
1235	黒色土器B	小皿	底部	底径 6.5	D-6	Ⅱ	黒色	黒色	研磨、糸切り	研磨	黒色	細粒	
1236	黒色土器B	小皿	底部	底径 6.0	E-5	Ⅱ	黒色	黒色	研磨、糸切り	研磨	黒色	細粒	
1237	黒色土器B	小皿	底部	底径 5.0	D-6	Ⅱ	黒色	黒色	研磨、糸切り	研磨	黒色	細粒	
1238	黒色土器B	小皿	体～底部	底径 6.2	E-6	Ⅱ	黒色	黒色	研磨、糸切り	研磨	黒色	細粒	
1239	黒色土器B	小皿	底部	底径 6.0	C-12	Ⅱ	黒色	黒色	研磨、糸切り	研磨	黒色	細粒	
1240		ふいご	羽口		B-4	Ⅱ			ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ		細粒	
1241		ふいご	羽口		C-7	Ⅰc	にぶい黄褐色、黒色	にぶい黄橙色		ﾍﾗ切り、布当て		荒粒	鉄付着
1242	土師器	合子	受け身	口径 6.8	D-6	Ⅱ	黒褐色	橙色	水挽き	水挽き	橙色	細粒	
1243	土師器	紡錘車			C-6	Ⅱ	黄橙色	にぶい黄褐色	糸切り	ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐色	細粒	
1244		土錘			F-5	Ⅱ	にぶい橙色		4.2×2.3×0.9				
1245		土錘			B-8	Ⅰb	灰白色		5.0×1.35×2.5				
1246		土錘			B-2	Ⅰb	黒褐色		3.9×1.3×0.7				
1247		土錘					灰黄色		4.2×1.4×0.2				
1248		土錘			C-9	Ⅰb	にぶい黄色		3.2×1.4×0.4				
1249		土錘			D-7	Ⅰb	にぶい黄橙色		3.7×1.6×0.4				
1250	土師器	高台付皿	口縁部～高台	口径 9.6	D-7	Ⅱ	橙色	橙色	水挽き	水挽き		荒粒(石英、赤色粒有り)	
1251	土師器	杯	口縁～体部	口径 18.6	D-4	Ⅰc	浅黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	橙色	細粒(石英有り)	
1252		石鍋	口縁部	口径 40.0	C-8	Ⅱ	黒褐色	灰白色			灰白色	滑石	
1253		石鍋	口縁部	口径 34.6	B-11		褐灰色	褐灰色			暗赤灰色	滑石	
1254		石鍋	底部	底径 23.0	D-9		黒色	灰色			灰色	滑石	
1255		石鍋	口縁部		C-4		灰白色	灰白色			灰白色	滑石	
1256		石鍋	底部	底径 30.0	D-7	Ⅱ	黒色	黒色			褐灰色	滑石	
1257		石鍋	底部	底径 30.0	C・D-7		褐灰色	黄灰色			灰色	滑石	
1258		石鍋	底部	底径 30.0	C-7	Ⅱ	ｵﾘｰﾌﾞ黒色	灰色			ｵﾘｰﾌﾞ黒色	滑石	
1259		石鍋	底部	底径 28.0	D-7		黒褐色	灰白色			灰白色	滑石	
1260	滑石製品				C-6		褐灰色	褐灰色			褐灰色		
1261	滑石製品				C-7		ｵﾘｰﾌﾞ黒色	灰色			ｵﾘｰﾌﾞ褐色		
1262	滑石製品				E-4	Ⅱ	黒色	灰白色			灰色		
1263	滑石製品				D-2	Ⅱ	黒色	灰白色			灰白色		
1264	滑石製品				B-3	Ⅰc	暗灰黄色	暗灰黄色			灰ｵﾘｰﾌﾞ色		
1265	滑石製品				D-7	Ⅰc	褐灰色	褐灰色			褐灰色		
1346	白磁	碗	口縁～高台	口径 13.0	C-10	Ⅰa	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		
1347	白磁	碗	体部～高台	底径 4.6	E-5	Ⅰb	灰白色	灰白色	施釉、露胎	ﾛｸﾛ調整、施釉	白色		
1348	白磁	皿	口縁～体部	口径 13.8	C-9	Ⅰb	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		
1349	白磁	皿	体部～高台	底径 5.0	C-3	Ⅰb	灰白色	灰白色	ﾛｸﾛ調整、施釉、露胎	施釉	灰白色		

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
1350	白磁	皿	体部～高台	底径 5.0	C-5	Ⅰb	灰白色	灰白色	ﾛｸﾛ調整、施釉	施釉	灰白色		
1351	白磁	皿	口縁～高台	口径 9.8	B-3	Ⅰb	灰白色	灰白色	ﾛｸﾛ調整、施釉、露胎	施釉、露胎	灰色		
1352	白磁						淡黄色	淡黄色	水挽き	水挽き	淡黄色		
1353	陶器	半胴甕	口縁～体部	口径 25.4	F-7	Ⅰa	灰黄褐色	黒褐色	鉄釉	鉄釉	褐色		黒薩摩、苗代川焼
1354	陶器	小甕	口縁～体部	口径 15.0	3T	Ⅰ・表	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	ｵﾘｰﾌﾞ黒色	鉄釉	鉄釉	ｵﾘｰﾌﾞ黒色		黒薩摩、苗代川焼
1355	陶器	半胴甕	口縁部	口径 27.0	D-3	Ⅰa	ｵﾘｰﾌﾞ黒色	黒褐色	鉄釉	鉄釉	にぶい赤褐色		黒薩摩、苗代川焼
1356	陶器	小甕	口縁～体部	口径 15.0	B-6	Ⅰa	黒褐色	黒褐色	鉄釉	鉄釉	灰色		黒薩摩、苗代川焼
1357	陶器	擂鉢	口縁部		B-4	Ⅰa	黄褐色	にぶい赤褐色	鉄釉	鉄釉	灰赤色		黒薩摩、苗代川焼
1358	陶器	半胴甕	口縁部		B-5	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ黒色	黒褐色	鉄釉	鉄釉	黒褐色		黒薩摩、苗代川焼
1359	陶器	甕	底部	底径 7.4	C-3	Ⅰa	黒褐色	黄灰色	鉄釉	水挽き	灰ｵﾘｰﾌﾞ色		黒薩摩、苗代川焼
1360	陶器	甕	口縁部	口径 21.4	C-13	Ⅰa	ｵﾘｰﾌﾞ黒色	灰褐色	鉄釉	鉄釉	にぶい黄橙色		黒薩摩、苗代川焼
1361	陶器	擂鉢	体～底部	口径 9.0	B-4	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ黒色	暗赤褐色	鉄釉	鉄釉	赤褐色		黒薩摩、苗代川焼
1362	陶器	茶家	蓋	径 12.0	B-3	Ⅰc	ｵﾘｰﾌﾞ黒色	にぶい赤褐色	鉄釉	水挽き	にぶい橙色		黒薩摩、苗代川焼
1363	陶器	茶家	蓋	径 6.8	E-10	Ⅰa	極暗赤褐色	灰褐色	鉄釉	鉄釉	黒色		黒薩摩、苗代川焼
1364	陶器	茶家	蓋	径 9.6	C-4	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ黒色	灰褐色	鉄釉	水挽き	灰褐色		黒薩摩、苗代川焼
1365	陶器	茶家	口縁～底部	最大径 17.4	G-15	Ⅰ	黒褐色	暗ｵﾘｰﾌﾞ褐色	鉄釉	鉄釉	にぶい黄褐色	細粒	黒薩摩、苗代川焼
1366	陶器	茶家	口縁～体部	口径 11.6	B-6	Ⅰb	暗褐色	ｵﾘｰﾌﾞ褐色	鉄釉	鉄釉	にぶい赤褐色		黒薩摩、苗代川焼
1367	陶器	茶家	口縁～体部	口径 5.6	C-10	Ⅰ	暗褐色	黒色	鉄釉	鉄釉	黒褐色		黒薩摩、苗代川焼
1368	陶器	碗	体部～高台	口径 3.6	C-2	Ⅰb	にぶい黄色	にぶい黄色	そば釉、貫入	そば釉、貫入	灰黄色		白薩摩
1369	陶器	碗	底部	底径 4.6	C-10	Ⅰb	にぶい赤褐色	灰黄褐色	白釉、垂釉	白釉、露胎	にぶい赤褐色	細粒	志野焼
1370	陶器	碗	体部～高台	底径 4.6	D-7	Ⅰa	灰白色	緑色	白釉	緑釉、釉剥ぎ	灰白色		京焼
1371	陶器	碗	口縁～体部	口径 11.4	D-9	Ⅰa	淡黄色	淡黄色	そば釉、貫入	そば釉、貫入	灰白色	細粒	白薩摩
1372	陶器	大皿	口縁～体部		B-2・3	Ⅰb	灰黄褐色	浅黄色	透明釉	透明釉	灰黄色		龍門寺焼
1373	陶器	碗	底部	底径 4.8	B-3	Ⅰb	ｵﾘｰﾌﾞ色	ｵﾘｰﾌﾞ色	そば釉	そば釉、貫入	灰白色		白薩摩
1374	陶器	小皿	口縁～体部	口径 12.0	C-10	Ⅰa		灰白色	透明釉	透明釉	浅黄褐色		
1375	陶器	擂鉢	口縁～体部	口径 34.0	C-3	Ⅰb	黒褐色	黒褐色	鉄釉、露胎	鉄釉、露胎	浅黄橙色		
1376	陶器	壺	体部		C-3	Ⅰb	黒褐色	褐灰色	鉄釉、露胎	水挽き	黄灰色	細粒	琉球焼

第45表　金属器出土遺物一覧

番号	種類	器種	部位	出土区	層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
225	鉄製品	金具		掘立柱13		3.4	1.1	0.5	16.07
240	鉄製品	釘		掘立柱16		10.3	1.1	0.9	22.50
246	青銅製品	鈴		掘立柱20		2.8	2.3	2.2	16.10
346	鉄製品			方形竪穴5		4.1	2.2	1.3	35.03
347	鉄製品	鉄鏃		方形竪穴5		6.5	2.5	0.7	17.48
364	鉄製品	鉄鏃	柄部	C-6		5.5	1.2	1.1	8.72
387	古銭(青銅)	洪武通寶		D-12	Ⅱ	2.5	2.6	0.2	2.49
388	古銭(青銅)	洪武通寶		D-12	Ⅱ	2.3	2.3	0.2	1.65
389	古銭(青銅)	永楽通寶		D-12	Ⅱ	2.5	2.5	0.15	3.29
390	古銭(青銅)	洪武通寶		D-12	Ⅱ	2.3	2.4	0.2	1.87
391	古銭(青銅)	宣徳通寶		D-12	Ⅱ	2.5	2.5	0.1	2.31
392	古銭(青銅)	洪武通寶		D-12	Ⅱ	2.4	2.4	0.15	2.42
393	古銭(青銅)	洪武通寶		D-12	Ⅱ	2.3	2.3	0.15	3.06
394	古銭(青銅)	洪武通寶		D-12	Ⅱ	2.4	2.4	0.5	9.91
523	鉄製品	小刀	柄部	D-7		5.5	1.3	0.8	7.60
524	古銭(青銅)	開元通寶		D-6		2.5	2.5	0.15	2.65
1284	鉄製品	釘		E-3	Ⅰb	8.6	0.7	0.6	15.54
1285	鉄製品	釘		D-6	Ⅱ	7.2	0.7	0.7	6.35
1286	鉄製品	釘		E-4	Ⅰb	8.2	0.8	0.7	14.76
1287	鉄製品	釘		C-5	Ⅲa	12.7	1.1	1.0	15.35
1288	鉄製品	釘		D-7	Ⅰc	5.2	0.6	0.4	9.79
1289	鉄製品	釘		溝3	Ⅰ	8.2	0.8	0.6	8.44
1290	鉄製品	釘		F-7	Ⅰa	6.3	0.6	0.4	6.45
1291	鉄製品	釘		D-7	Ⅰa	4.3	1.1	0.6	2.89
1292	鉄製品	釘		D-4	Ⅰc	3.9	1.0	0.6	2.87
1293	鉄製品	釘		D-8	Ⅰb	4.4	0.7	0.7	4.05
1294	鉄製品	釘		E-7	Ⅰc	5.8	0.7	0.4	6.55
1295	鉄製品	釘		C-7	Ⅰb	3.3	0.6	0.4	3.15
1296	鉄製品	釘		D-8	Ⅰc	4.2	0.6	0.4	3.92
1297	鉄製品	釘		B-9	Ⅱ	4.6	0.8	0.6	6.03
1298	鉄製品	釘		C-9	Ⅰa	3.6	0.6	0.6	3.28
1299	鉄製品	釘		D-7	Ⅰb	5.4	1.5	1.2	6.65
1300	鉄製品	傘釘		D-4	Ⅰb	2.9	3.0	0.4	10.95
1301	鉄製品	傘釘		E-3	Ⅰa	3.5	3.3	0.6	8.60
1302	鉄製品	板金製品		E-6	Ⅱ	3.65	0.7	0.2	2.76
1303	鉄製品	板金製品				2.4	0.8	0.4	3.50
1304	鉄製品	板金製品		B-4	Ⅰa	5.3	0.9	0.6	5.43
1305	鉄製品	板金製品		C-11	Ⅱ	3.8	0.8	0.4	8.41
1306	鉄製品	板金製品		F-4	Ⅱ	2.9	1.8	0.4	2.82
1307	鉄製品	板金製品		F-4	Ⅱ	2.9	1.8	0.6	13.15
1308	鉄製品	板金製品		D-9	Ⅰa	5.7	1.8	0.7	9.05
1309	鉄製品	刀子	刃部	E-5	Ⅱ	6.3	1.2	0.5	7.50
1310	鉄製品	刀子	差し込み部	F-5		9.7	2.3	0.8	28.63
1311	鉄製品	刀子	刃部	D-4	Ⅰb	5.1	1.7	0.4	6.31
1312	鉄製品	板金製品		E-4	Ⅰb	4.1	1.3	0.6	5.07
1313	鉄製品	板金製品		D-6	Ⅰb	6.0	0.9	0.9	13.03
1314	鉄製品	板金製品		E-4	Ⅰb	4.5	2.0	0.5	7.00
1315	鉄製品	板金製品		D-9	Ⅰa	4.1	1.4	0.2	5.60
1316	鉄製品	板金製品		D-9	Ⅰa	4.1	2.3	0.4	7.20
1317	鉄製品	板金製品				5.1	1.3	0.6	13.28
1318	鉄製品	板金製品		D-7	Ⅰa	7.2	1.6	0.8	31.00
1319	鉄製品	鉄鏃		F-7	Ⅱ	5.6	0.9	0.6	6.36
1320	鉄製品	鉄鏃		D-6	Ⅱ	8.8	2.2	1.1	16.36
1321	鉄製品	鉄鏃		D-7	Ⅰa	5.8	1.5	0.7	9.08
1322	鉄製品	鉄鏃		D-8	Ⅰb	4.6	0.7	0.5	5.34
1323	鉄製品	鉄鏃		D-8	Ⅰc	18.5	1.3	1.3	31.13
1324	鉄製品	鉄鏃		D-8	Ⅱ	5.8	1.1	0.6	15.27
1325	鉄製品	鉄鏃		D-5	Ⅰb	7.5	1.2	0.8	11.34
1326	鉄製品	鉄鏃		B-4	Ⅰb	5.45	1.1	0.9	9.05
1327	鉄製品			C-9	Ⅰa	2.6	2.4	0.4	11.49
1328	鉄製品			B-3	Ⅰb	8.6	5.3	1.2	111.15
1329	鉄製品			E-7	Ⅰa	2.3	2.4	0.3	2.56
1330	鉄製品			E-9	Ⅰa	3.2	2.3	0.4	4.44
1331	青銅製品	鍔止め		C-9	Ⅰa	3.65	2.4	0.1	13.86
1332	鉛製品	鉄砲玉		C-9	Ⅰa	1.4	1.4	1.3	8.22
1333	青銅製品	パイプ		C-3	Ⅰa	4.3	1.0	0.9	2.65
1334	青銅製品	飾り金具		D-7	Ⅰa	3.4	1.5	0.2	3.02
1335	鉄製品	鈴		C-6		3.6	3.0	3.0	14.29
1336	青銅製品	コウガイ		F-17	Ⅰ	17.9	0.6	0.3	7.67
1337	古銭(青銅)	洪武通寶		D-7		2.4	2.4	0.15	3.11
1338	古銭(鉄)			F-3		2.5	2.5	0.4	2.82
1339	古銭(青銅)	洪武通寶		3T		2.4	2.4	0.15	1.74
1340	古銭(青銅)			C-10	Ⅰa	2.5	2.5	0.15	1.55
1341	古銭(青銅)	洪武通寶		C-3		2.4	2.4	0.15	2.39
1342	古銭(青銅)			C-3		2.4	2.4	0.15	2.89
1343	古銭(青銅)	○永○寶		C-3	Ⅰb	1.3	2.5	0.1	0.95
1344	古銭(鉄)			C-2	Ⅰa	2.5	2.5	0.4	5.72
1345	古銭(青銅)			D-12	Ⅱ	2.5	2.5	0.5	7.66

第Ⅳ章　科学分析等の結果

第１節　川内市上野城跡出土のウマ遺体

西中川　駿・＊久 林 朋 憲
（鹿児島大学名誉教授・＊鹿児島大学獣医学科）

はじめに

古代の遺跡から出土するウマの遺体は、わが国のウマの起源、系統ならびに渡来の時期を知る上に貴重な資料となっている。ウマがいつ頃、わが国に渡来してきたかは明らかでないが、林田によると小型馬は縄文時代に南から、中型馬は弥生時代に北部九州に渡来したことを論じている。しかし、これまで報告された縄文時代の出土例は、近藤らの科学的な分析により悉く時代が新しくなり、現在のところ福江市の大浜遺跡出土の弥生中期が最も古いとされている。

最近、全国各地の遺跡からウマ遺体の出土報告があるが、いずれも古墳時代以降のもので、特に中世のものが多い。鹿児島県内のウマ遺体の出土例は、橋牟礼川遺跡、上能野貝塚（古墳）、麦之浦貝塚（平安），出水貝塚（中世）、中島ノ下遺跡および平松原遺跡（江戸）などにみられ、また、広田遺跡や宇宿貝塚などからの出土例は弥生時代と報告されているが、後世のものと思われる。

今回調査を依頼された上野城遺跡は、川内市百次上野にあり、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴い鹿児島県教育委員会が平成 12 年 5 月から 13 年 3 月まで発掘調査を行ったもので、ウマ遺体（臼歯）は、中世（12～13 世紀）の土坑から出土したものである。検索方法は肉眼的に精査した後、ノギスを用いて計測し、林田らや筆者らの方法で、年齢や体高の推定を試みたので、その概要を報告する。

出土状況と出土量

調査時の写真や図面からみると、土坑の大きさはウマ１体分が入る大きさであり、頭部が土坑の端に位置し、吻側を下に向けて埋葬されており、上顎を上に下顎を下にして噛み合った状態の左右の上、下顎臼歯が検出されている。他の骨は全く検出されていないが、全身が埋葬されていたと思われる。

出土した臼歯は、左右、上下の第二、三、四前臼歯、第一、二、三後臼歯である。右の臼歯には歯槽の部分の下顎骨体が付着している。総重量は 703.9ｇである。

出土歯の概要

出土した臼歯の各計測値は表１に示した。

左側の上顎臼歯の歯根は破損しているが、第二前臼歯から第二後臼歯はほぼ完全な形を残している（図版１の１）。下顎も同様で第三後臼歯のみが不完全である（図版１の２）。右側は上下ともに完全な形で残っており、下顎の臼歯は下顎体が付着しているため中心高を測定出来なかった（図版１の３，４）。臼歯の交合面にみられるエナメルヒダの形態は、現生の御崎ウマに類似しており、その大きさも近似している。

表１．上野城出土の臼歯の計測値

歯の種類			P2	P3	P4	M1	M2	M3
上顎	歯冠長	L	35.09	25.85	25.07	23.55	23.99	
		R	34.94	26.11	25.3	23.42	23.62	23.61
	歯冠幅	L	22.47	24.64	25.44	23.65	23.89	
		R	22.85	25.13	25.07	23.52	23.68	19.6
	中心高	L	39.4	48.14	45.98	44.76	50.63	
		R	36.72	46.84	44.74	44.58	50.57	46.71
下顎	歯冠長	L	34.43	27.11	26.37	24.36	24.23	
		R	33.67	27.41	26.33	25.1	24.7	
	歯冠幅	L	12.8	814.9	15.81	14.04	13.33	
		R	13.98	14.19	15.61	14.93	13.12	
	中心高	L	32.64	47.5	54.75	48.89	51.92	
		R	34.47	46.09	52.22	51.58		

L：左側、R:右側、P2～P4：第二～第四前臼歯、M1～M3：第一～三後臼歯

表１の計測値から、筆者らの方法で臼歯列長および頭蓋最大長、下額全長を求め、林田らの方法で体高を求めると、125.88±2.49cm となる。これは現生の御崎ウマ（130cm）より少し小さい中型馬に属する。また、臼歯の中心高より筆者らの方法で年齢を推定すると、7.91±0.96 歳となる。なお、雌雄の判別は、犬歯の有無や寛骨の恥骨櫛の形状から可能であるが、犬歯や寛骨が検出されていないことから、雌雄の判別が出来なかった。

考　察

九州のウマの出土例は、熊本県の塚原古墳や上の原遺跡など数多くの遺跡(113 箇所)から報告されている。鹿児島県下では前述したように,橋牟礼川遺跡や麦之浦貝塚など平安時代の出土例が最も古いが、しかし、未報告ではあるが橋牟礼川遺跡からは古墳時代のウマの下顎骨が出土している。長谷部は、轟貝塚や出水貝塚などから馬歯を発掘し、石器時代にウマありと報告し、林田も出水貝塚でウマの歯と骨を検出し、縄文後期にウマの存在を論じた。しかし最近、近藤らは出水や大崎貝塚出土のウマの骨をフッ素による年代測定を行い、13 世紀頃のものであると報告している。わが国のウマの渡来時期として、前述の福江市の大浜遺跡出土の臼歯が、炭素年代測定により AD40±90 年が報告されていることから、弥生中期以降と考えてよいであろう。また、わが国へ渡来経路として、野沢らは蒙古系統のウマが、朝鮮半島を経由して北部九州に入り、北上、南下して全国に広まったと考えており、筆者らもこれに賛同するものである。

本遺跡出土のウマは、年齢 7～8 歳で、体高 125cm 前後であり、これは現生のトカラウマより大きく、御崎ウマより少し小さいウマで、中型馬であり、全国各地から出土する中世のウマの大きさの範疇にあることがわかった。このウマの用途についてはわからないが、乗馬、騎馬や運搬などに

使役されていたことが考えられる。

まとめ

川内市上野城遺跡（12～13 世紀）から出土したウマの臼歯について検索した。

１．ウマの臼歯、左右、上下の第二前臼歯から第三後臼歯が噛み合って出土しており、その出土量は、703.9ｇである。

２．臼歯の形状は御崎ウマなど在来馬のものと類似しており、また、各計測値もよく似ている。各臼歯の歯冠長からから体高を推定すると、125cm 位であり、また、臼歯の中心高より年齢を推定すると、7～８歳である。

３．このウマの用途についてはわからないが、上野城を遺した人々によって、乗馬、騎馬や運搬などのために飼養されていたのであろう。

参考文献

１．長谷部言人：石器時代の馬に関して、人類史、40（4）、31－135(1925)

２．林田　重幸：日本在来馬の系統に関する研究、pp.1－180、日本中央競馬会、東京（1978）

３．指宿市教育委員会：中島ノ下遺跡、指宿市埋蔵文化財調査報告書、7. 119－123（1990）

４．鹿児島県教育委員会：平松遺跡、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書、58. 76－80（1991）

５．近藤　恵ら：野田市大崎貝塚縄文後期貝塚出土ウマ遺残のフッ素年代判定ー縄文時代にウマはいたかー、人類学雑誌、99、93－99(1991)

６．直良　信夫：日本馬の考古学的研究、pp. １－201、校倉書房、東京（1984）

７．西中川駿ら：古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路７に関する研究、平成 2 年度文部省科学研究費補助金（一般研究 B）研究成果報告書、pp.1－197（1991）

８．野澤　　謙：東亜と日本在来馬の起源と系統、日本ウマ学会誌、3（1）、1－18（1992）

９．芝田　清吾：日本古代家畜史の研究、pp.100－189（1969）

10．吉倉　　真：塚原古墳群出土の馬歯、熊本県文化財調査報告書、16. 323－337（1975）

図版１の説明

ウマの臼歯

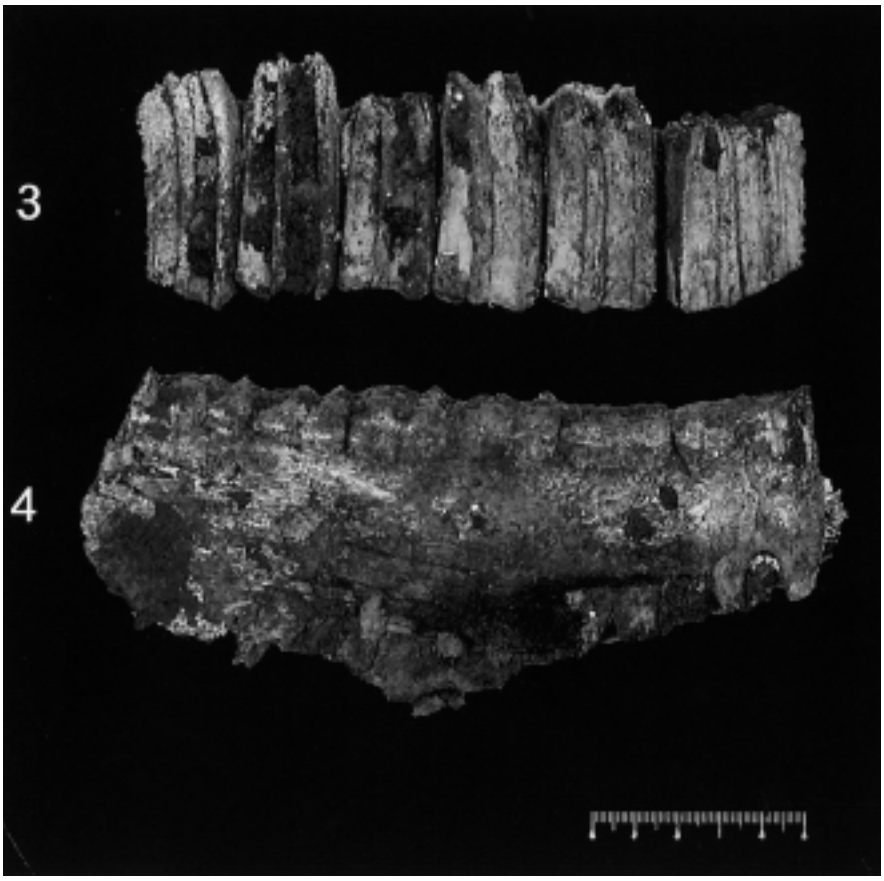
１．左側上顎：左から第二前臼歯～第三後臼歯

２．左側下顎：左から第二前臼歯～第三後臼歯

３．右側上顎：右から第二前臼歯～第三後臼歯

４．右側下顎：右から第二前臼歯～第三後臼歯

1
2


3
4

第２節　上野城跡出土種実の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査は、鹿児島県川内市に所在する上野城跡の中世（13～15世紀）の遺構と、京田遺跡の弥生時代中期の遺構について、覆土を水洗選別することによって得られた種実遺体の種類を明らかにし、当時の植物利用に関する資料を得る。

１．上野城跡出土種実の同定

（１）試料

試料は、E3区 P206、E4区 P105の土坑覆土の水洗選別によって得られた試料17点と、C8区 P1544の柱穴の底に集中する種実遺体１点の計18点である。同一遺構で篩目径別に複数試料が存在し、１試料に複数の種類が数点～数十点含まれている。各試料の詳細は、同定結果とともに表１に記す。

（２）分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察・分類し、その形態的特徴を現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川，1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか，2000）等と比較し、種類を同定・計数した。細片を含み個体数推定が困難である種類は、表中に＋（プラス）表示し、重量を求めた。C8区 P1544は細片を多量に含むため1㎜の篩を通し、残渣を同定し、篩を通った試料を残渣とした。分析後の植物遺体は、乾燥剤とともに種類毎にビンおよび袋に入れ、保存する。

（３）結果

結果を表１に示す。植物遺体は全て完全に炭化した状態であった。木本種実ではアカガシ亜属イチイガシを含むコナラ属が、草本種実では栽培植物のイネ、オオムギ、コムギ、マメ類が同定された。その他に、炭化材、不明炭化物（木材組織が認められない、種類・部位ともに不明の炭化物を示す）などが検出された。以下に、同定された種実遺体の形態的特徴等を、木本、草本の順に記す。

＜木本＞

・イチイガシ（*Quercus gilva* Blume）　　ブナ科コナラ属アカガシ亜属

炭化した子葉が同定された。炭化子葉は黒色、完形個体が多く、楕円体で頂部は尖らない。長さ10～15㎜、径5㎜程度。２枚の子葉が極端に不揃いである個体が多く、子葉の合わせ目は球体表面を蛇行して一周する。幼根は頂端からずれた位置にある。表面には１本の深い溝が基部から頂部に向かい2/3程度まで発達している。

岡本（1979）は、日本産ブナ科植物の子葉について、イチイガシには子葉の離れにくさ、著しい異形性、頂端が尖らず幼根の位置がずれていること、そして中軸の圧痕が確認できることなどの特異性があることから、イチイガシのみが種まで同定できる場合があることを述べている。試料には、このようなイチイガシの特異的特徴を典型的に示している個体が認められたため、イチイガシに同定することができた。なお、自然落下の場合、殻斗や幼果が成熟果実の落下数を上回るのが普通であるが、今回の試料からは、殻斗や幼果は確認されなかった。

・アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*）　　ブナ科コナラ属

炭化した果実破片が同定された。黒色、完形ならば卵形か。表面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。果実頂部の輪状紋が円柱状または円錐台状に突出する。おそらく上述のイチイガシであろうと思われるが、柱頭の遺存状態が悪いことから、アカガシ亜属にとどめた。

表１　上野城跡出土種実遺体同定結果

			木本				草本					炭化材	不明炭化物	分析残渣
			コナラ属				イネ	オオムギ	コムギ	ムギ類	マメ類			
					アカガシ亜属	イチイガシ								
		部位	胚乳	果実	果実	胚乳	胚乳	胚乳	胚乳	胚乳	種子			
試料記載事項	篩目径(mm)	状態	炭化	炭化	炭化	炭化	炭化	炭化	炭化	炭化	炭化			
E3区 P206	2	個体数	+	−	−	−	21	11	3	22	−	18	2	−
		重量(g)	11.5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	0.425	個体数	−	−	−	−	6	5	−	3	−	6	10	−
E4区 P105	2	個体数	−	−	−	−	32	10	1	20	6	10	11	−
	0.425	個体数	−	−	−	−	3	−	−	−	−	6	2	−
C8区 P1544		個体数	+	+	3	12	−	−	−	−	−	9	−	+
		重量(g)	112.47	0.54	−	−	−	−	−	−	−	−	−	24.93

注）「+」は細片を含み個体数推定が困難であるため、重量を求めた。

・コナラ属（*Quercus*）

炭化した子葉破片と果実破片が同定された。種まで同定できない破片をコナラ属にとどめた。子葉の合わせ目に沿って半分に割れている個体が多い。頂部は尖らず、上述のイチイガシの形態に類似する。イチイガシには異形性を表現しない場合もある（岡本，1979）ことから、コナラ属とした破片の大半はイチイガシであろうと思われる。

＜草本＞

・イネ（*Oryza sativa* L.）　　イネ科イネ属

炭化した胚乳が同定された。黒色、胚乳は長楕円形でやや偏平。長さ4～5mm、幅2.5mm、厚さ1.5mm程度。基部には胚が脱落した凹部がある。表面はやや平滑で、２～３本の縦溝がある。焼け膨れて表面の遺存状態が悪いものや、胴切れの個体もみられる。

・オオムギ（*Hordeum valgale* L.）　　イネ科オオムギ属

炭化した胚乳が同定された。黒色、紡錘状長楕円体で両端はやや尖る。長さ5～7mm、径3～4mm程度。腹面は１本のやや太く深い縦溝があり、背面基部には胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑で、穎が付着する個体がみられた。

・コムギ（*Triticum aestivum* L.）　イネ科コムギ属

炭化した胚乳が同定された。黒色、楕円体で全体的に丸みを帯びている。長さ4～5㎜、径3～3.5㎜程度。腹面には１本のやや太く深い縦溝がある。背面基部には胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑。

なお、遺存状態が悪く、オオムギとの判別が難しいものはムギ類とした。

・マメ類（Leguminosae）　マメ科

炭化した種子が同定された。黒色、長楕円体。長さ3～5㎜、幅2～3㎜程度。焼け膨れて表面が崩れている等遺存状態は悪いが、腹面中央の子葉の合わせ目上に長楕円形状で隆起する臍がある、ササゲ属（*Vigna*）と思われる個体もみられる。子葉の合わせ目に沿って半分に割れた個体がみられる。子葉の合わせ目は平滑で、中心部がやや凹む。表面はやや平滑で光沢があるが、焼け膨れのため種皮が裂けている。ササゲ属にはササゲ、アズキ、リョクトウなどが含まれるが、野生種との雑種も多いため、形態のみから現在の特定の種類に比定することは難しく、一括して示している。

（４）考察

上野城跡から出土した種実の種類には、有用植物が認められる。有用植物には、大陸などから持ち込まれた栽培植物と、自生していたと考えられる種類がある。渡来した栽培植物は、イネ、オオムギ、コムギ、マメ類である。これらの穀類は、全て完全に炭化した状態であったため、火熱を受けたものと思われる。これらの栽培植物が、各遺構から出土した状況を考慮すると、上野城跡の近辺で栽培もしくは持ち込まれ利用されていたものが、生活残渣として破棄されたことが推定される。

イチイガシは、湿潤、肥沃で深い土壌をもつ内陸平坦地と後傾斜に極相林として発達する種で、現在は、紀伊半島、四国、九州の山麓地に広く分布する。また、コナラ属の中でイチイガシのみが生食可能であることから、複数の種類が混在して貯蔵されていたとは考えにくい。おそらく、周辺の森林からイチイガシの成熟果実を選択的に採取し、貯蔵したことが推定される。そして、何らかの理由により火熱を受け子葉が残存したものと思われる。このように、イチイガシは利用価値が高いことから遺跡出土例も多い（岡本，1979など）。よって、上野城跡でも、イネ、オオムギ、コムギ、マメ類などの穀類とともに、イチイガシが重要な植物質食糧であったことが推定される。

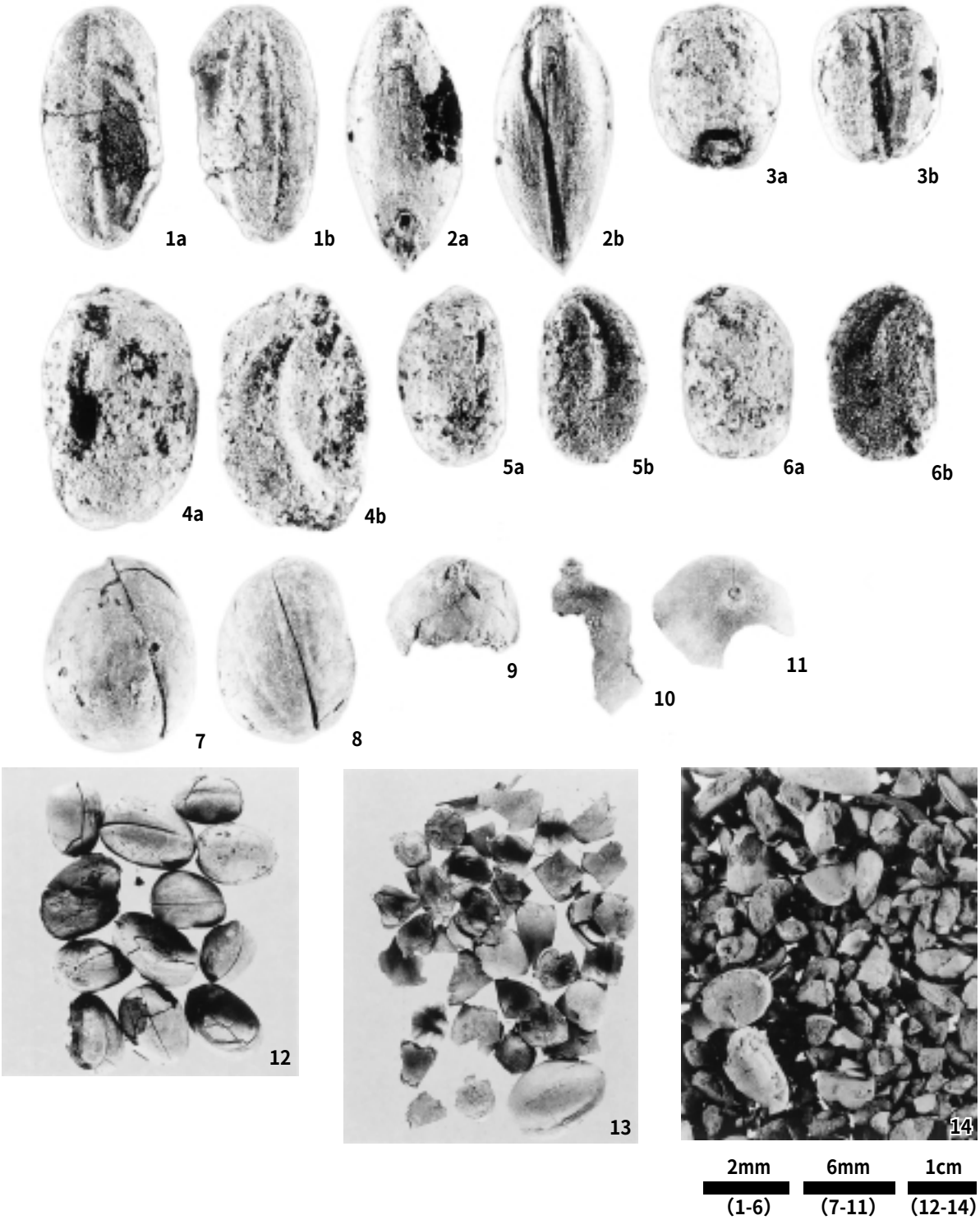
（５）引用文献

石川茂雄（1994）原色日本植物種子写真図鑑，328p.，石川茂雄図鑑刊行委員会.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志（2000）日本植物種子図鑑，642p.，東北大学出版会.

岡本素治（1979）遺跡から出土するイチイガシ．大阪市立自然史博物館業績，第230号，p.31-39.

図版1　上野城跡出土炭化種実



1. イネ 胚乳（E4区 P105層）
2. オオムギ 胚乳（E3区 P206層）
3. コムギ 胚乳（E3区 P206層）
4. マメ類 種子（E4区 P105層）
5. マメ類 種子（E4区 P105層）
6. マメ類 種子（E4区 P105層）
7. イチイガシ 子葉（C8区 P1544層）
8. イチイガシ 子葉（C8区 P1544層）
9. コナラ属アカガシ亜属 果実（C8区 P1544層）
10. コナラ属アカガシ亜属 果実（C8区 P1544層）
11. コナラ属アカガシ亜属 果実（C8区 P1544層）
12. イチイガシ 子葉（C8区 P1544層）
13. コナラ属 果実（C8区 P1544層）
14. コナラ属 子葉（C8区 P1544層）

第３節　上野城跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

１．上野城跡遺跡における放射性炭素年代測定

⑴　試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
№.１	南北方向畝跡，５	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
№.２	南北方向畝跡，６	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
№.３	東西方向畝跡，４	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
№.４	東西方向畝跡，１	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法

⑵　測定結果

試料名	^{14}C年代（年BP）	δ^{13}C（‰）	補正^{14}C年代（年BP）	暦年代（西暦）	測定№.（Beta-）
№.１	※炭素量不足のため測定不能				153018
№.２	※炭素量不足のため測定不能				153019
№.３	750±40	-26.4	730±40	交点：cal AD 1280 １σ：cal AD 1270～1290 ２σ：cal AD 1240～1300	153020
№.４	※炭素量不足のため測定不能				153021

１）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は国際慣例に従って5568年を用いた。

２）δ13C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

３）補正14C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

４）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代。較正には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベース（"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)）により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68%確率）および２σ（95%確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・２σ値が表記される場合もある。

２．上野城跡遺跡における植物珪酸体分析

(1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。上野城跡遺跡の発掘調査では、13世紀頃とされる畠遺構が検出された。ここでは、同遺構におけるイネ科栽培植物の検討を主目的として分析を行った。

(2) 試料

分析試料は、基本土層断面、C・D-9区の南北方向畝跡、東西方向畝跡から採取された計14点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

(3) 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
２）試料約１gに直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
５）沈底法による20μm以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

⑷ 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、イネ（穎の表皮細胞由来）、ヒエ属型、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）、シバ属

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属？）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、その他

⑸ 考察

（１）稲作跡の検討

稲作跡（水田跡・畑跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料１gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

ア）基本土層断面

Ⅰb層（試料１）からⅢb層（試料11）までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、Ⅰc層（試料７）では密度が14,700個/gとかなり高い値であり、Ⅰb層（試料１～３）、Ⅱ層（試料７）でも7,400～9,900個/gと高い値である。また、Ⅲa層（試料９）でも、3,700個/gと比較的高い値である。したがって、これらの各層では、稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

Ⅲb層（試料11）では、密度が700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

イ）南北方向畝跡

試料１～３の３点について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。密度は5,100～7,300個/gと高い値である。したがって、同遺構では稲作が行われていた可能性が高いと

考えられる。

ウ）東西方向畝跡

試料４～６の４点について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、試料５’では密度が10,600個/gとかなり高い値であり、その他の試料でも2,800～4,300個/gと比較的高い値である。したがって、同遺構では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

（２）イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはヒエ属型が検出された。

ヒエ属型は、基本土層断面のⅠc層（試料５）から検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを識別することは困難である（杉山ほか，1988）。また、密度も700個/gと低い値であることから、ここでヒエが栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草である可能性も否定できない。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畠作物は分析の対象外となっている。

（３）植物珪酸体分析から推定される植生と環境

ア）植物珪酸体の検出状況

基本土層断面のⅢb層では、クスノキ科が多量に検出され、イネ、ススキ属型、ウシクサ族A、クマザサ属型、ミヤコザサ節型、およびブナ科（シイ属）、マンサク科（イスノキ属）なども検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。Ⅲa層では、イネやクスノキ科が増加しており、ススキ属型やウシクサ族Aも増加傾向を示している。Ⅱ層では、イネ、ススキ属型、ウシクサ族Aが増加しており、クスノキ科は減少している。Ⅰc層では、イネやススキ属型がさらに増加しており、マダケ属型も出現している。Ⅰb層でもおおむね同様の結果であるが、同層上部ではススキ属型やウシクサ族Aが減少している。おもな分類群の推定生産量によると、Ⅲa層より上位ではイネが優勢であり、Ⅱ層より上位ではススキ属型も比較的多くなっていることが分かる。南北方向畝跡および東西方向畝跡における分析結果は、基本土層断面のⅠc層～Ⅱ層とおおむね同様である。

イ）植生と環境の推定

Ⅲb層の堆積当時は、クスノキ科を主体としてシイ属やイスノキ属なども見られる照葉樹林が分布

していたと考えられ、その林床植生などとしてササ類が生育していたと推定される。Ⅲa層の時期には稲作が開始されていたと考えられ、遺跡周辺にはⅢb層と同様の照葉樹林が分布していたと推定される。Ⅱ層の時期には稲作が本格化したと考えられ、遺跡周辺ではススキ属やチガヤ属などが生育する草原的なところが増加し、照葉樹林は減少したと推定される。Ⅰc層からⅠb層にかけては、継続的に稲作が行われていたと考えられる。タケ亜科植物のうちマダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く、建築材や生活用具、食用などとしての利用価値が高いが、これらの植物が現れるのはⅠc層の堆積以降のことと考えられる。

６．まとめ

植物珪酸体分析の結果、13世紀頃とされる畠遺構からはイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。Ⅲa層からⅠb層にかけては、継続的に稲作が行われていたと推定される。

畠遺構の周辺は、ススキ属やチガヤ属などが生育する草原的な環境であったと考えられ、遺跡周辺にはクスノキ科を主体としてシイ属やイスノキ属なども見られる照葉樹林が分布していたと推定される。

文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p. 70-83.
杉山真二(1999)植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史.第四紀研究.38(2),p. 109-123.
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p. 189-213.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p. 15-29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p. 73-85.

表1　鹿児島県、上野城跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	基本土層断面 1	2	3	5	7	9	11	南北方向畝跡 1	2	3	東西方向畝跡 4	5	5'	6
イネ科	Gramineae (Grasses)														
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	99	95	74	147	81	37	7	51	73	65	43	41	106	28
イネ籾殻(穎の表皮細胞)	Rice husk Phytolith				7					7					
ヒエ属型	*Echinochloa* type				7										
キビ族型	Paniceae type	7	7	7	7	7		7		7		7			7
ススキ属型	*Miscanthus* type	35	125	60	162	73	30	7	59	87	58	100	81	35	92
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	28	81	82	66	95	66	22	147	94	86	121	81	113	120
シバ属	*Zoisia*														7
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)														
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*	7	7		7	7			15	29	14	7		7	
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*	14		7			15		44		22	21		7	
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)				7		15	15		7				14	7
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*	28	37	15	7		59	37	29	51	50	28	61	49	106
マダケ属型	*Phyllostachys*	7	7	15	7				7	7	7		14		
未分類等	Others	21		15	7	37	155	96	88	51	108	64	102	212	99
その他のイネ科	Others														
表皮毛起源	Husk hair origin		51	15	29	15		7	59	36	14		41	21	
棒状珪酸体	Rod-shaped	127	161	194	280	403	354	243	323	276	273	256	366	451	268
茎部起源	Stem origin	14													
未分類等	Others	261	447	454	472	528	546	472	616	516	561	476	562	599	523
樹木起源	Arboreal														
ブナ科(シイ属)	*Castanopsis*	35	22	7	15	29	22	44	22	29	22	43	7	63	14
ブナ科(アカガシ亜属?)	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*?			15		7	15				7			7	
クスノキ科	Lauraceae	56	37	97	44	103	244	170	139	51	93	64	102	134	191
マンサク科(イスノキ属)	*Distylium*	28	37	60	37	22	30	15	66	36	115	14	34	71	85
その他	Others	35	29	15	22	44	111	52	66	58	65	71	34	7	71
(海綿骨針)	Sponge		7												
植物珪酸体総数	Total	803	1143	1132	1334	1453	1697	1194	1731	1416	1560	1315	1523	1897	1617

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	2.90	2.80	2.19	4.33	2.37	1.08	0.22	1.51	2.14	1.90	1.25	1.19	3.11	0.83
ヒエ属型	*Echinochloa* type				0.62										
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.44	1.54	0.74	2.01	0.91	0.37	0.09	0.73	1.08	0.71	1.23	1.01	0.44	1.14
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*	0.08	0.09		0.09	0.09			0.17	0.34	0.17	0.08		0.08	
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*	0.07		0.04			0.07		0.21		0.10	0.10		0.03	
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)				0.06		0.11	0.11		0.05				0.11	0.05
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*	0.08	0.11	0.04	0.02		0.18	0.11	0.09	0.15	0.15	0.09	0.18	0.15	0.32

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*	35	44		52	100			36	62	40	31		22	
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*	29		44			20		45		25	38		9	
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)				34		31	50		10				29	14
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*	36	56	56	14		49	50	19	28	36	32	100	40	86

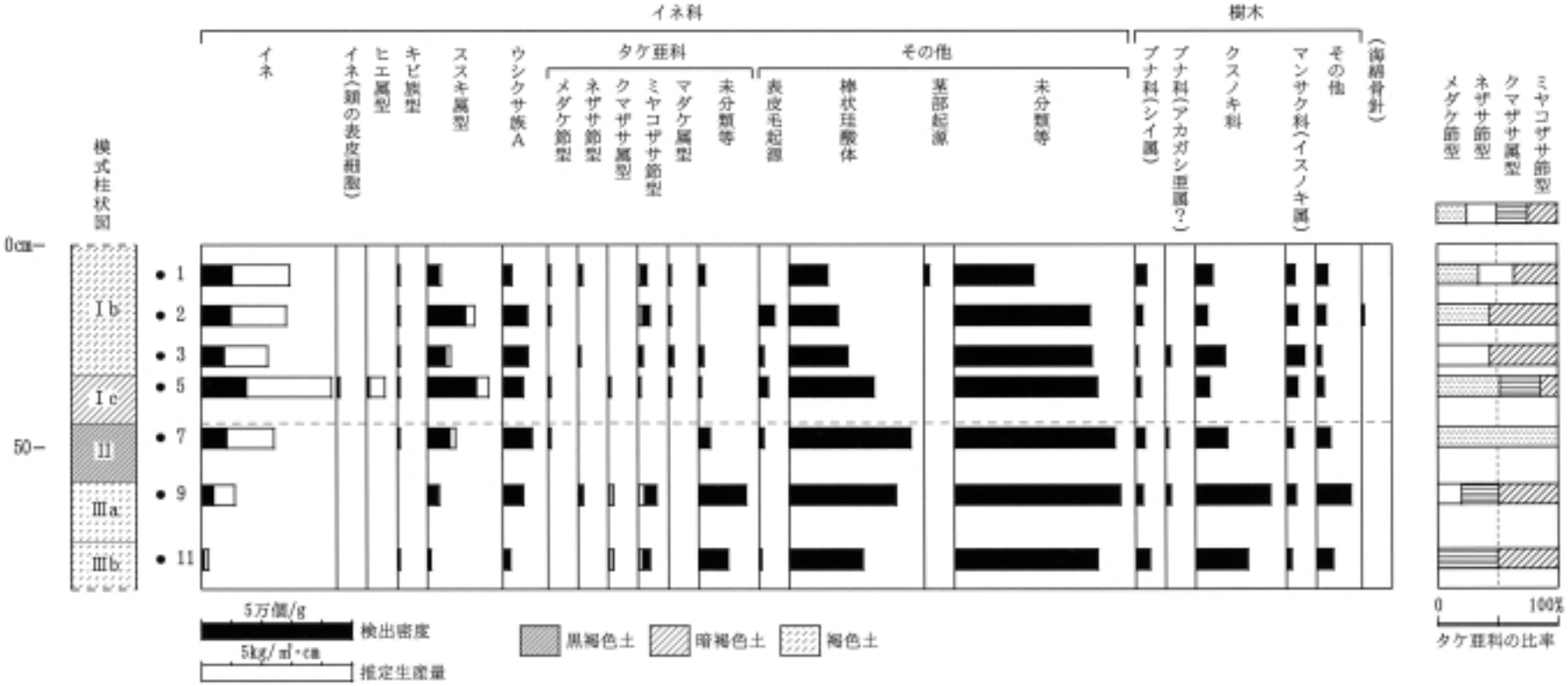


図１　上野城跡遺跡、基本土層断面における植物珪酸体分析結果

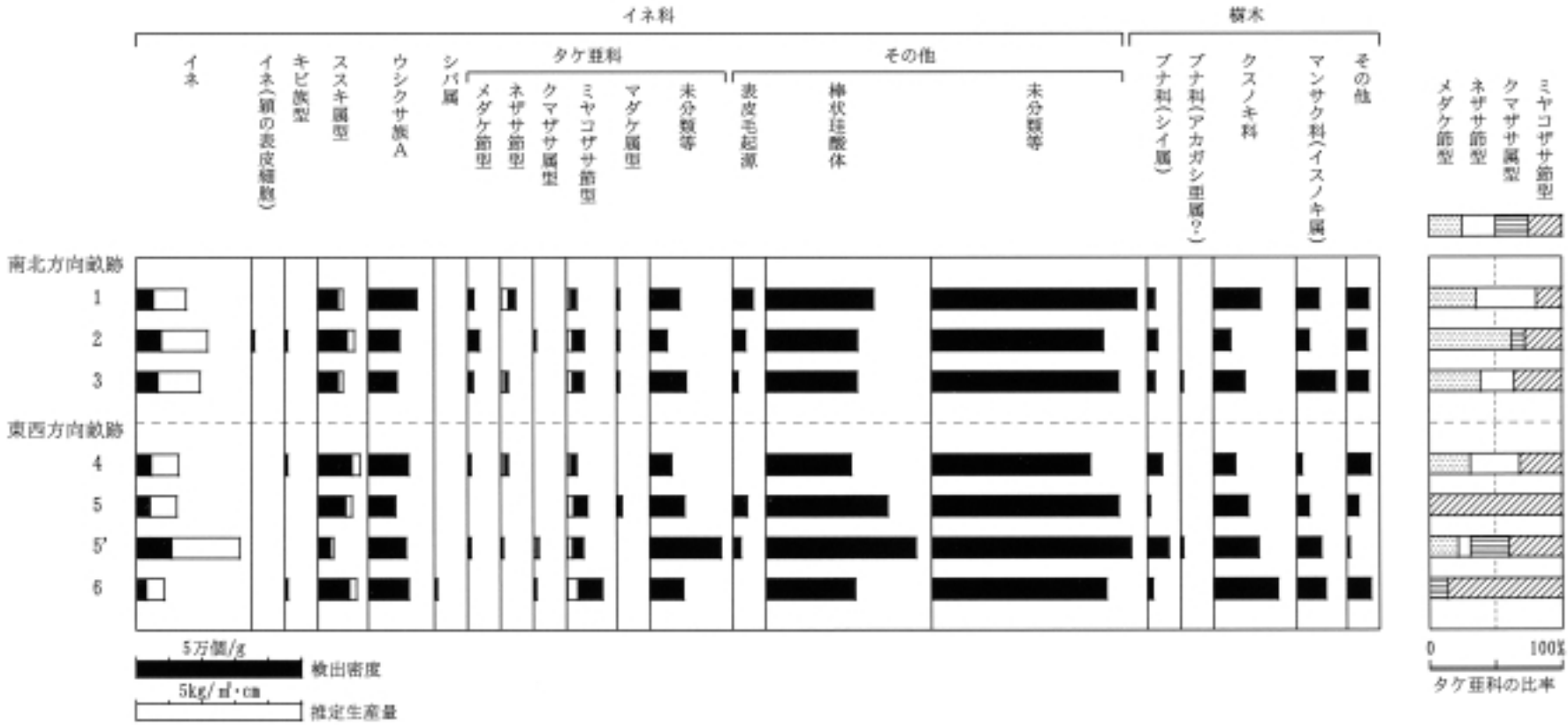
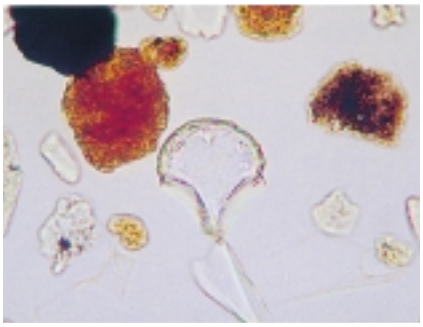
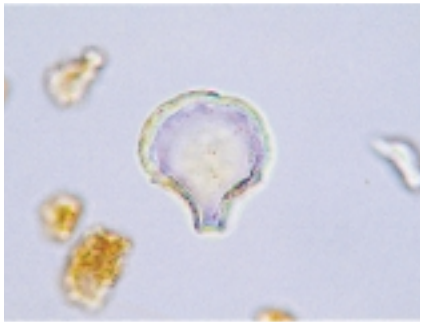


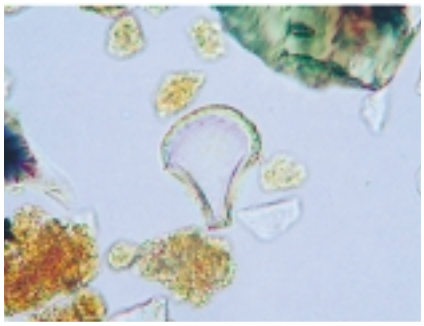
図２　上野城跡遺跡、畠畝埋土における植物珪酸体分析結果



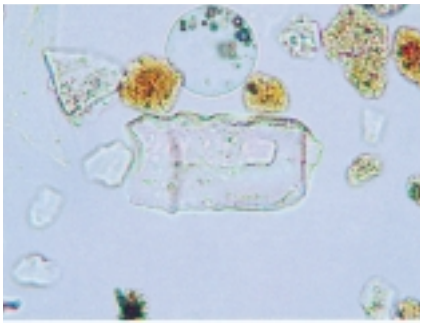
イネ
試料2



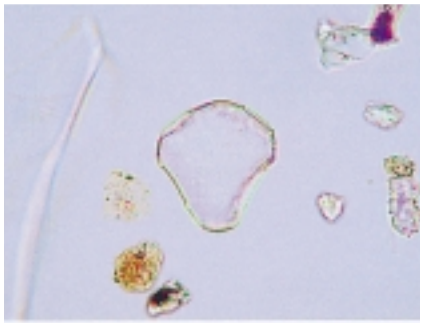
イネ
試料3



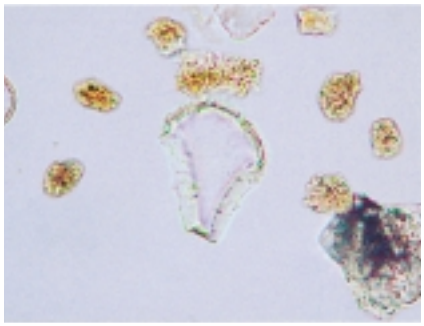
イネ
試料5



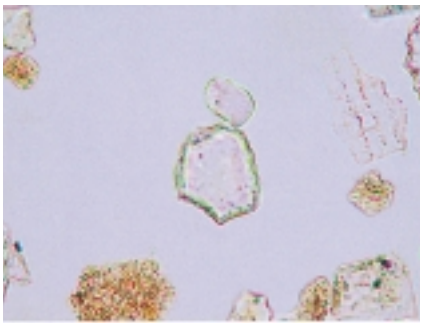
ヒエ属型
試料5



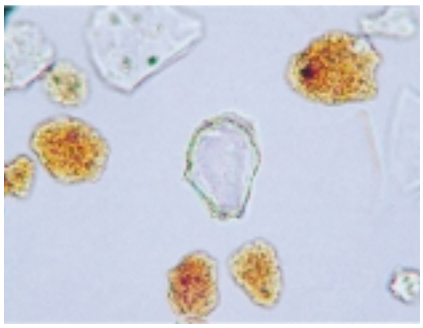
ススキ属型
試料3



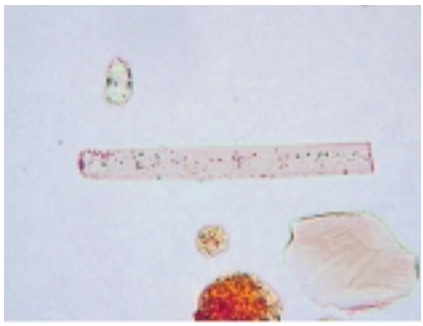
メダケ節型
試料5



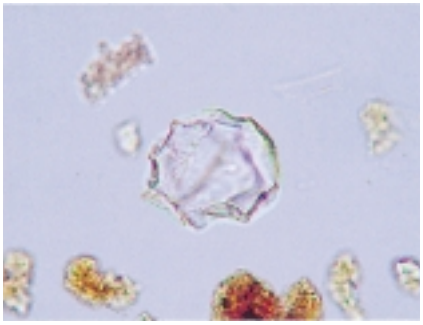
ミヤコザサ節型
試料5



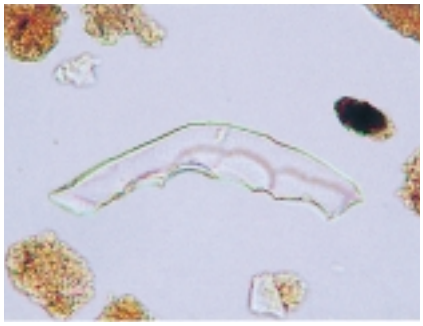
マダケ属型
試料3



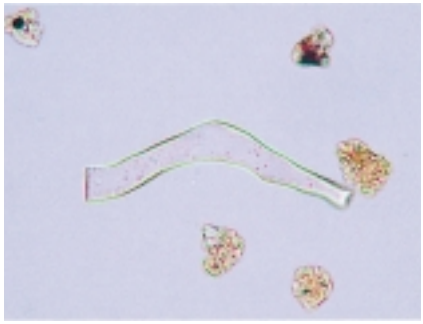
棒状珪酸体
試料2



シイ属
試料9



クスノキ科
試料9



マンサク科（イスノキ属）
試料11

植物珪酸体の顕微鏡写真　――――― 50 μm

３．上野城跡における花粉分析

１．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存していない場合もある。

２．試料

分析試料は、基本土層断面、C・D-9区の南北方向畝跡、東西方向畝跡から採取された計８点である。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

３．方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）５％水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
２）水洗処理の後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
３）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
４）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す
５）再び氷酢酸を加えて水洗処理
６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
７）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

４．結果

（１）分類群

出現した分類群は、樹木花粉6、草本花粉5、シダ植物胞子2形態の計13である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、花粉数が100個以上計数された試料について、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、クリ、シイ属?マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属

〔草本花粉〕

イネ科、アカザ科－ヒユ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（２）花粉群集の特徴

１）南北方向畝跡（試料１～３）

ヨモギ属、タンポポ亜科、イネ科などが検出されたが、いずれも少量である。

２）東西方向畝跡（試料４～６）

草本花粉のヨモギ属の占める割合が高く、イネ科、タンポポ亜科、キク亜科、アカザ科－ヒユ科が伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属などが検出されたが、いずれも少量である。

３）基本土層（Ｉc層、試料６）

草本花粉のヨモギ属の占める割合が高く、タンポポ亜科、イネ科が伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が少量検出された。

５．花粉分析から推定される植生と環境

花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、13世紀頃とされる畠遺構の周辺は、ヨモギ属を主にイネ科やタンポポ亜科などが生育する陽当たりの良い比較的乾燥した環境であったと推定される。これらの植物は、人里植物ないし耕地雑草の性格をもっているが、明らかな栽培植物を含む分類群は検出されなかった。また、遺跡周辺にはコナラ属アカガシ亜属（カシ類）などの照葉樹林が分布していたと推定される。なお、花粉分析では植物珪酸体分析で多産したクスノキ科が認められないが、クスノキ科は花粉壁が完全には保存されないことから、花粉分析では把握されないという問題がある。

花粉があまり検出されない原因としては、乾燥的な堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

文献

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p. 82-110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p. 248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

表1　上野城跡における花粉分析結果

分類群		C・D-9区							
		南北方向畝跡			東西方向畝跡				基本土層
学名	和名	1	2	3	4	5	5'	6	6
Arboreal pollen	樹木花粉								
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属							1	
Cryptomeria japonica	スギ	1		1			1		
Castanea crenata	クリ	1							
Castanopsis-Pasania	シイ属-マテバシイ属			3					
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属					1		1	
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属					2	3		1
Nonarboreal pollen	草本花粉								
Gramineae	イネ科	1			2	9	5	2	1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科					1	1		
Lactucoideae	タンポポ亜科	1	1			9	6	1	4
Asteroideae	キク亜科					1			
Artemisia	ヨモギ属	21	12	9	15	102	97	121	110
Fern spore	シダ植物胞子								
Monolate type spore	単条溝胞子	9	2	5	13	48	72	10	4
Trilate type spore	三条溝胞子		2		1	7	3	3	1
Arboreal pollen	樹木花粉	2	0	4	0	3	4	2	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	23	13	9	17	122	109	124	115
Total pollen	花粉総数	25	13	13	17	125	113	126	116
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	1	5	1	3	2
Fern spore	シダ植物胞子	9	4	5	14	55	75	13	5
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

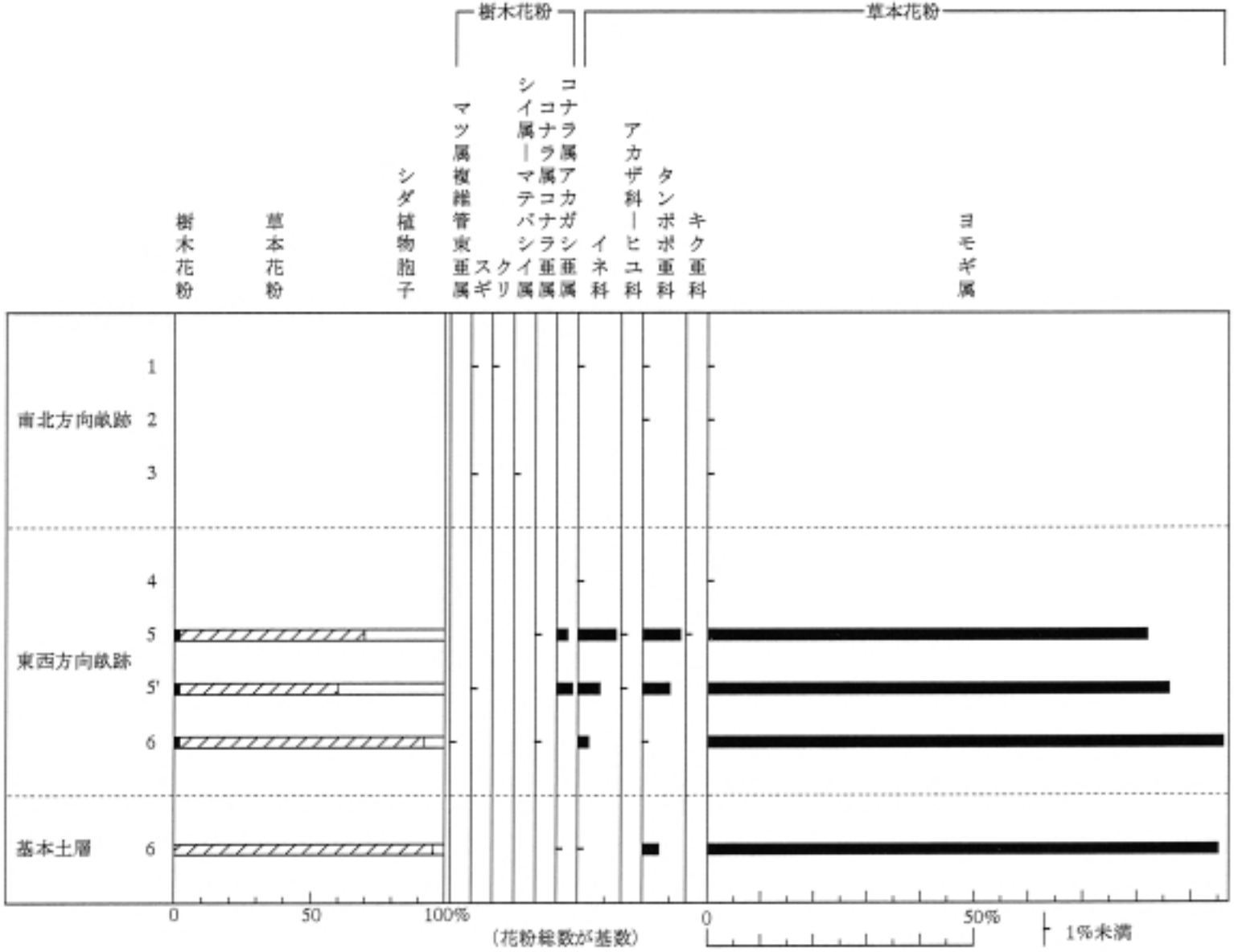
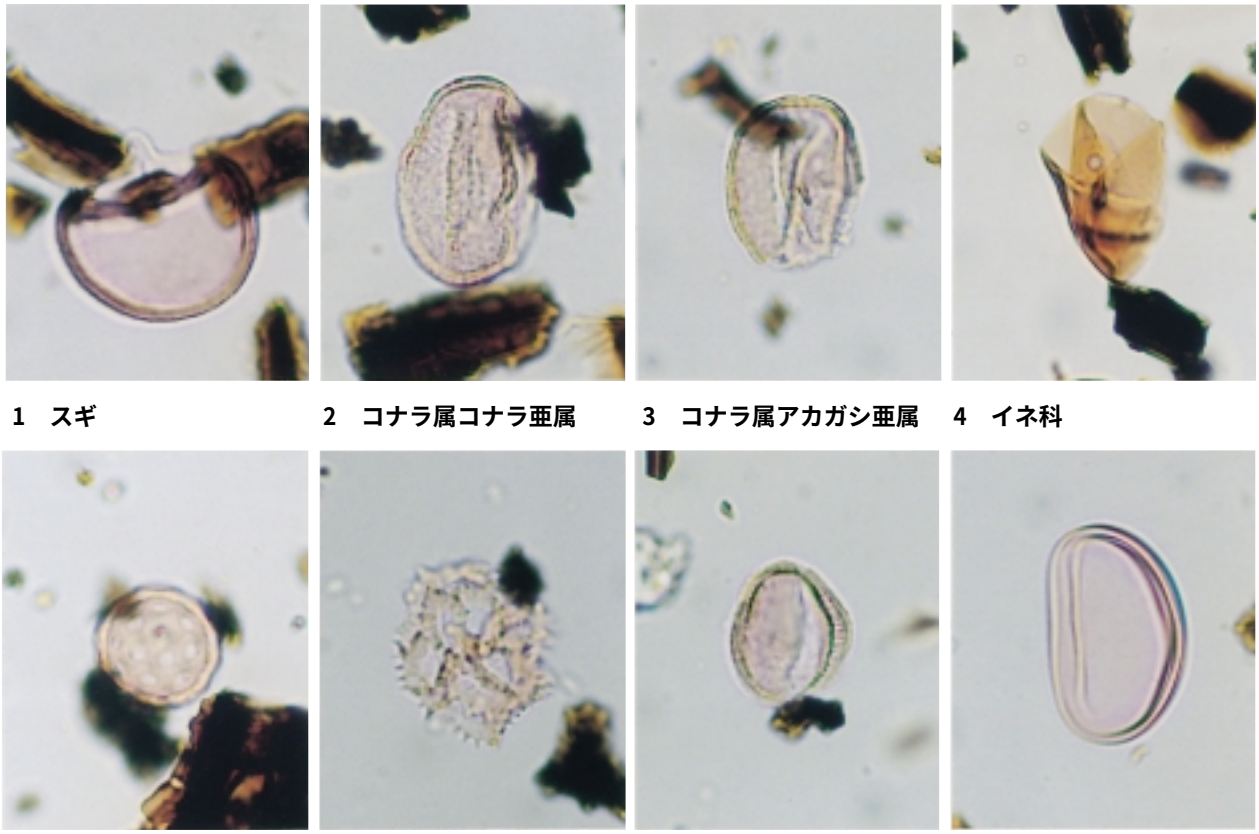


図1　上野城跡、C・D-9区における花粉ダイアグラム

上野城跡の花粉・胞子



1　スギ　2　コナラ属コナラ亜属　3　コナラ属アカガシ亜属　4　イネ科

5　アカザ科―ヒユ科　6　タンポポ亜科　7　ヨモギ属　8　シダ植物単条溝胞子

―― 10μm

４．上野城跡における種実同定

１．はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

２．試料

試料は、C・D-9区の東西方向畝跡から出土した種実とみられる炭化物（試料５）である。

３．方法

肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

４．結果

本試料は、長径約４㎜、短径約２㎜程度の炭化物である。表面は摩滅し、本来の形状と表面模様は不明である。木材細胞の構造はもたず種実の可能性があるが、摩滅により形態的特徴が不明であることから、同定には至らなかった。

文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.
笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第2巻生業，雄山閣　出版，p.131-139.
南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276-283.
吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナルNo.355，ニューサイエンス社，p.2-14.

５．上野城跡におけるリン・カルシウム分析

１．はじめに

上野城跡の発掘調査では、土坑墓とみられる土坑が複数検出された。ここでは、同遺構内の土壌について分析を行い、人骨などの生物遺体の有無について検討を試みた。

２．試料

分析試料は、土坑SK-14、SK-19、SK-37、P875の４地点から採取された７点、および比較試料としてP875の遺構外から採取された１点の計８点である。

３．分析方法

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析システム（日本電子㈱製，JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。試料の処理法は次のとおりである。

１）試料を絶乾（105℃・24時間）
２）メノウ製乳鉢を用いて試料を粉砕
３）試料を塩化ビニール製リング枠に入れ、圧力15t/▪でプレスして錠剤試料を作成
４）測定時間300秒、照射径20㎜、電圧30keV、試料室内真空の条件で測定

なお、Ｘ線発生部の管球はロジウム（Rh）ターゲット、ベリリウム（Be）窓、Ｘ線検出器はSi（Li）半導体検出器である。

４．分析結果

各元素の定量分析結果（wt％）を表１に示し、リン酸（P_2O_5）とカルシウム（CaO）の含量を図１に示す。

５．考察

土壌中に含まれるリン酸やカルシウムの起源としては、土壌の母材、動物遺体、植物遺体などがあり、未耕地の土壌中におけるリン酸含量は通常0.1～0.5％程度、耕地土壌でリン酸肥料が投入された場合は1.0％程度である。農耕地では施肥による影響が大きく、目的とする試料の分析結果のみから遺構内における生物遺体の存在を確認するのは困難である。このため、比較試料（遺構外の試料）との対比を行う必要がある。

土坑の埋土におけるリン酸含量は、SK-14で0.85％、SK-19で0.70％、SK-37で0.73～1.02％（平均0.91％）、P875で0.72～0.76％（平均0.74％）と比較的高い値であり、比較試料（遺構外の試料）の0.47％よりも明らかに高い値である。

カルシウム含量については、目的とする試料と比較試料との間にとくに明瞭な差異は認められなかった。リンは土壌中の鉄やアルミニウムと強く結合して水に難溶性の化合物となるため、水の作用により流出することは考えにくいが、カルシウムは一般に溶解性が大きいことから（竹追、1993）、

土壌中でカルシウムが拡散・移動した可能性が考えられる。

以上のことから、各土坑の内部には、リン酸を多く含む何らかの生物遺体が存在していた可能性が考えられる。ただし、遺構埋土の上位層について分析が行われていないことから、後代の農耕に伴う施肥などの影響も否定できない。今後は、遺構の上位層についても分析を行い、今回の結果と比較検討する必要があろう。

文献

竹追紘（1993）リン分析法．日本第四紀学会編．四紀試料分析法２，研究対象別分析法．東京大学出版会，p.38-45.

表１　鹿児島県、上野城跡遺跡における蛍光X線分析結果

単位：wt(%)

原子No.	地点・試料 化学式	ＳＫ-14	ＳＫ-19	ＳＫ-37			Ｐ875		比較試料
				1	2	3	埋土	底	遺溝外
11	Na_2O	0.80	0.72	0.95	0.88	0.80	0.76	0.81	0.75
12	MgO	0.85	0.83	1.03	0.73	0.73	1.06	0.99	0.90
13	Al_2O_3	28.42	27.09	29.09	31.08	29.07	28.39	29.49	33.07
14	SiO_2	57.28	59.50	55.01	55.63	56.11	55.74	55.43	50.88
15	P_2O_5	0.85	0.70	1.02	0.73	0.97	0.76	0.72	0.47
16	SO_3	0.22	0.15	0.42	0.33	0.37	0.27	0.12	0.31
19	K_2O	1.32	1.54	1.50	1.66	1.56	1.42	1.58	1.34
20	CaO	0.91	0.81	1.10	1.05	1.05	1.26	1.13	1.10
22	TiO_2	1.03	0.91	1.02	0.84	0.98	1.06	1.01	1.28
23	V_2O_5	0.02	0.01	0.04	0.02	0.03	0.02	0.04	0.01
25	MnO	0.33	0.29	0.36	0.22	0.34	0.39	0.19	0.35
26	Fe_2O_3	7.91	7.40	8.42	6.80	7.94	8.83	8.43	9.47
30	ZnO	0.05	0.05	0.04	0.04	0.05	0.04	0.05	0.05

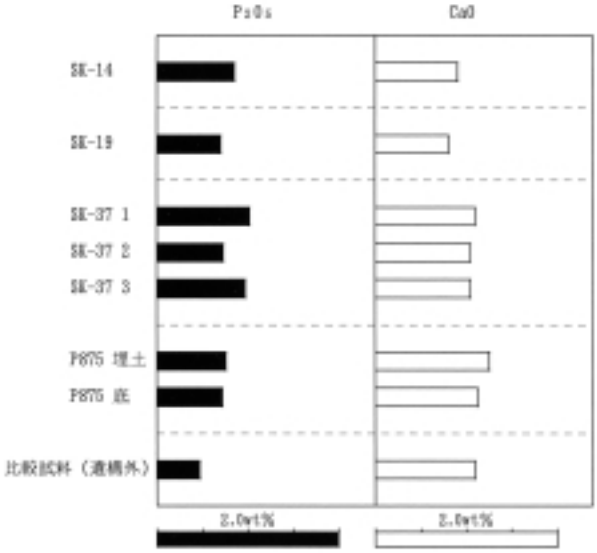


図１　上野城跡遺跡におけるリン・カルシウムの含量

第Ⅴ章　まとめ

１　旧石器時代

この時代の主な出土地点と出土層は，Ｅ・Ｆ－３・４区で第Ⅷ層であった。この地点ではフレーク等が 20 点まとまって出土している。他の旧石器の遺物は散在状態であった。この 20 点は少ないがブロックの形態ととらえてよいだろう。この中には，ナイフ形石器１点，剥片尖頭器が１点出土している。これらの遺物は二次シラスの中から出土しているので後期旧石器と考えられる。このブロックの性格はフレークも出土しているので小規模の石器製作跡が考えられる。

また，土坑が第Ⅶ層に検出している。楕円形の土坑で用途は不明である。

２　縄文時代

この時代の遺構は埋土の状態から「落とし穴」と判断した。その遺構は１基が検出され，逆茂木ピットが２か所みられる。

この時代の遺物は早期と中期と晩期が出土している。

縄文早期は貝殻条痕と貝殻刺突組み合わせの特徴を持つ石坂式土器系，短い貝殻条痕を鋸歯状に施す桑の丸タイプと山形押型文土器が出土している。これらは，主に山部にみられる。山部の地層堆積は岩盤のため風化層が薄く上下が不明確であった。よって，これらは同時期か前後するか判断はできなかった。

中期は阿高式土器が中心である。出土状態は散在地程度で遺跡として取扱いにならない状況である。この阿高式土器は凹線文を顕著に表し，胎土には滑石も含んでいるものも多い。時期は阿高式土器の最盛期ととらえてよい。

晩期は，黒色研磨土器で黒川式土器の後半期と考えられる。これも散在程度が低く遺跡として取扱いにはならない状況である。

石器は，山部の表土中に磨製石斧・打製石斧が出土している。

平坦部での石器は，スクレイパーと石鏃が出土している。この中で石鏃は 24 本出土している。

石鏃の形状は正三角形や二等辺三角形が基本であり，抉りは深いものと浅いものがある。また，柳葉形類似のものも１点出土している。

３　古墳時代

この時代の遺構は土坑が 25 基検出している。これらは検出状況から古代との区別がつかない。

形状は，長方形，楕円形，円形が基本になっている。これらの性格は不明である。

この時代の遺物は，成川式土器であり，甕形土器・壺形土器・坩・高坏・匙の手づくね製品が出土している。甕の口縁部開き，壺の幅広突帯などから判断して，甕は東原期に近く，壺は笹貫期に近いちょうどこの中間期と考えられる。

４　古代

遺構は古墳時代と区別がつかない。

遺物は上記の様に甕形土器・坏・埦・須恵器が出土している。

甕形土器の口縁部は「L」・「く」・「C」の形がありまとまりがない。坏は体部・口縁部が外反し，切り離しはヘラで行っている。埦は黒色土器Ａである。須恵器は甕形土器である。これらは器形か

らみると 10 世紀頃と考えられる。

５　中世

（１）遺構

ア　掘立柱建物跡（ＳＢ）

本遺構は 32 棟の建物跡が確認された。建物跡は平原側にＣ列に大型建物跡が検出し，山裾側のＤ・Ｅ列に小型の建物跡が検出している。

大型建物跡はＣ・Ｄ－３・４区に３棟，Ｃ・Ｄ－４・５区に２棟，Ｃ・Ｄ－６・７区に５棟，Ｃ・Ｄ－８区に３棟がみられる。これらは，各棟が重なったり隣接したりして建てられた跡である。

Ｃ・Ｄ－３・４区はＳＢ12・13・14 が重なり，２間×３間の上屋にＳＢ12・14 が北側と西側に半間の下屋を造っている。この中のＳＢ12 は下屋の角が狭められている。ＳＢ13 は下屋が北側・東側・南側にみられる。

Ｃ・Ｄ－４・５区の２棟は２間×３間の上屋に北側と西側に半間の下屋を造っている。

Ｃ・Ｄ－６・７区ではＳＢ19 が２間×３間の上屋に東側と南側に半間の下屋を造っている。その他のＳＢ21・24・28 は隣接して南北に検出されている。これらが一連の建物と考えられる。また，ＳＢ22 は東西に建てられている。これは１間の間隔が長く，これらの建物とは性格が異なると考えられる。

Ｃ・Ｄ－８区はＳＢ26・31・32 が重なっている。ＳＢ31 は２間×３間の上屋に南側と西側に半間の下屋を造っている。ＳＢ32 は２間×３間の上屋に東側と南側に半間の下屋を造っている。ＳＢ26 は２間×３間の上屋に四方に半間の下屋を造っている。これは，角が狭められた建物跡である。

小型建物跡はＤ～Ｆ－３～７区にみられる。これらは規模の大小があるものの形態は類似している。類似した建物跡はＳＢ２・４・６，ＳＢ３・25・30，ＳＢ８・10・11，ＳＢ17・18・29 等がある。

その他，小型に入る総柱の建物はＳＢ５・15・23 がある。この中のＳＢ５の周りには列をなして円形の浅い土坑が検出されている。

イ　方形竪穴遺構

方形竪穴遺構はＣ－4・5 区に２基，Ｄ－５・６区に３基検出している。

この遺構は遺構内に柱穴があり屋根があった建物と考えられる。また，昇降口の段もあるものもある。なお，床面には焼土や硬化面もある。この状況から作業内容としては，温度があまり変化しない竪穴内の作業，冬場の寒冷期でもできる作業が考えられる。

遺構は５基検出されている。それを規模で分類すると，大規模なものは方形竪穴遺構４で，小規模なものは方形竪穴遺構１・２・３・５である。作業量を考えると，大規模に対し小規模の２基が対応できる。よって，他の遺構との重なり合いや隣接で判断して，小規模の２基は，方形竪穴遺構１と方形竪穴遺構２が同時期で，方形竪穴遺構３と方形竪穴遺構５が同時期と考えられる。すなわち，これらは三時期が考えられる。

ウ　土坑

土坑は形態で大きく土坑Ⅰと土坑Ⅱに分類される。土坑Ⅰ類は基本的に円形で浅く，土坑Ⅱ類は楕円形と長方形で深い。さらに，土坑Ⅱ類はＡ・Ｂ・Ｃに分けられた。

土坑Ⅰ類

この類は円形で浅い形態をしているもので，145 基がこれにあたる。

この遺構は，埋土の中に種子や木の実の炭化したものが混入して検出したものである。混入物は渡来した栽培植物のイネ，オオムギ，コムギ，マメ類が全て炭化した状態であったため，火熱を受けた状態であったことが分析で判明した。それは，生活残渣遺構としての推定をもらった。

遺構の検出状況は山手側に沿ってみられるのが特徴である。それらの土坑は４グループにわけられる。第Ⅰ区はD～F－３～５区，第Ⅱ区はD～F－６～８区，第Ⅲ区はC～F－８・９区，第Ⅳ区はC～E－10～14 区である。

第Ⅰ区は 64 基検出している。ここは列をなしている特徴がある。その中には５基連続や３基連続に重なって検出している遺構もある。また，建物跡に沿って検出しているものもある。

第Ⅱ区は 40 基検出している。ここの特徴は遺構が散在して検出されている。また，溝４とも重なっている。土坑の重なりは１か所で２重である。他は単独に検出している。

第Ⅲ区は 20 基検出している。ここの特徴は散在して検出している。場所は溝５より南側に位置する。土坑の重なりは２重が１か所で他は単独に検出している。

第Ⅳ区は 21 基検出している。ここの特徴は散在して検出している。場所は溝３より南側に位置し，溝２・３の東西にある。土坑の重なりは２重が３か所で他は単独で間隔が広い。

これらの変化は，時期的なものが考えられる。

土坑Ⅱ類

これはA・B・Cの３種類に分けられた。

Aは５基検出し，特徴は焼土がみられるものである。これは，炉的な使われ方が考えられる。

Bは４基検出し，特徴は白磁や土師器や鉄器が床面にある。これは，埋葬関係が考えられる土壙墓と思われる。

Cは８基検出し，土坑の中に柱穴跡がみられる特徴がある。この中で，土坑Ⅱ17 は馬の歯が出土しているので家畜の埋葬に使用された施設と考えられる。これらの遺構の中にはピットがあり，今後の検討課題として残したい。

エ　焼土

これは 21 基検出した。

これは検出状況から建物外での施設と考えられる。形態としては，土坑を伴うもの，柱穴を伴うもの，分散して検出されたものがある。今回の調査では性格を判断できなかった。今後の検討課題として残したい。

オ　畠跡

畠跡は，２面検出した。

畠Ⅰは，中世遺構面と同じ面のC・D－９・10 区検出した。その畠跡は，畝間が南北の上に東西が重なって検出した。また，南北の畝間は溝２・３の堆積埋土の上にみられ，溝２・３より新しいことが確認できた。一つ一つの畝間の長さは４m，３m，2.8m等があり。当時の耕作状況の一部が判断できた。なお，畝間の植物珪酸体分析結果，イネが多量に検出され稲作が行われていた可能性が高いと判断された。これは，陸稲栽培が行われたことが考えられる。

また，イネ以外はオオムギ族，キビ族等が検出されており，土坑Ｉの生活残渣遺構との関連を強く判断できる。

畠Ⅱは中世面より若干下層に検出している。層で判断すると古代の可能性が高い。

カ　溝

溝は７本検出した。溝１～５は本調査区の中心遺構と同じ面に検出した。溝６・７は一段高い面に小規模で検出した。

溝１はC・D－11～14 区に山裾と同じ方向で検出した。検出状況は直線状で大きな石から始まっている。規模は，溝４・５に比べ大きくて深い。

溝２・３はB～D－９～11 区に重なって検出した。検出状況は溝３の上に溝２が重なっている。規模は，溝４・５に比べ大きくて深い。

溝４はC～E－６・７区に直線で検出した。溝２・３と比べ細くて浅い。これは，方形竪穴遺構５との切り合いと掘立柱建物跡２との隣接関係がある。

溝５はC～E－７・８区に直線で検出した。溝２・３と比べ細くて浅い。途中で切れている。これは，掘立柱建物跡 26 との隣接関係がある。

溝６は，Ｂ－３・４区も間が途切れて検出した。規模は細く短く浅い。この遺構は古道の内側にあり，上の段の排水坑と考えられる。

溝７は，Ｂ―３区に検出した。溝６の東側で調査範囲外に延びている。性格は溝６と同じで上の段の排水溝と考えられる。

他の遺構との切り合いでみると，溝１～５は溝４と溝３が同時期で，溝５と溝２が同時期で，溝１は山裾に沿って造られた単独時期が考えられる。

（２）遺物

ア　白磁

白磁は太宰府跡分類の白磁Ⅲ類，白磁Ⅳ類，白磁Ⅴ類，白磁Ⅵ類，白磁Ⅷ類，白磁Ⅸ類，白磁Ｂ類，白磁Ｃ類，白磁Ｄ類，白磁Ｅ類が出土している。

この中で，出土の最も多い類は白磁Ⅳ類である。また，土坑Ⅱに検出した完形品は白磁Ⅴ類に比定している。これらは 12 世紀前半が中心と思われる。また，13・14 世紀のものや，近世のものも出土している。

イ　青磁

青磁は龍泉窯系と同安窯系が出土している。

龍泉窯系は太宰府跡分類の龍泉Ⅰ，龍泉Ⅱ，龍泉Ⅲ，龍泉Ｂ，龍泉Ｃ，龍泉Ｄの他，稜花皿，壺が出土している。また，同安窯系の皿等も出土している。

この中で，最も多いものは龍泉Ⅰで，ついで龍泉Ⅱである。これらは 12 世紀後半と思われる。

ウ　青白磁

青白磁は合子が出土している。この時期は 12 世紀前半と思われる。

エ　染付

染め付けは大半が貿易磁器の範疇である。時期的には 14 世紀後半から 15 世紀と思われる。

オ　中世陶器

この中には貿易陶器と国内陶器が出土している。

貿易陶器は，中世緑釉陶器，褐釉の鉢，四耳壺，黒釉の天目が出土している。時期的には 13 世紀から 14 世紀と思われる。

国内陶器は常滑の甕と近世の薩摩焼の甕，茶家が出土している。

カ　中世須恵器

中世須恵器は樺万丈窯の甕や擂鉢，捏鉢が出土している。また，東播磨系窯では擂鉢，捏鉢が出土している。下り山窯では，甕と壺が出土している。

キ　瓦器質土器

瓦器質土器は擂鉢，捏鉢，坏，火舎が出土している。瓦器質土器の擂鉢，捏鉢が多く出土するのも珍しいが，瓦器質の坏の出土は南九州では珍しい。

ク　土師器

坏

土師器の中では出土量が少ない。皿と坏との区別がつかなかったので小皿の大型のものも範疇にいれた。製造は，回転ロクロからの糸切り離しである。器面調整は簡単で，細い調整のある研磨等はしていない。時期的なものは判断できなかった。

埦

この中には，内側に赤色顔料を付した内赤土師器（仮に赤色土器と呼ぶことにする）も含まれる。内外器面には丁寧な研磨が施されている。この研磨は水漏れがないようにされたと考えられる。器形は黒色土器Aの埦と同じで，口縁部が外反するものと，外反しない半球状のものがある。

小皿

土師器の中では出土量が多いもので，簡単に造っている。器形では，大きなもので坏の範疇に入る。糸切り離しの底部から体部・口縁部への立ち上がりは，大方，外向している。それは浅いものが中心で，深くて直行しているものもある。また，底面には糸切り離しの中に製造中に板状の所においた跡もみられ，大量生産されたことが考えられる。これらの器形の変化は層位的や遺構での時期的判断はできなかった。

黒色土器A埦

いわゆる内黒土師器の碗である。この土器も小皿と同様出土量が多い部類にはいる。内側を黒色にし，さらに研磨をして焼かれている土師器である。黒色は外面にも施されているものもある。器面は丁寧な研磨仕上げで，見込み中央は縦位と横位，口縁部近くは横位の研磨で水挽き面を潰している。また，外面の水挽き面を研磨している。器形は口縁部が外反するタイプ，半球状になるタイプがある。また，黒色土器A碗も高台が高いもの低いものがある。この土師器の目的は，器面の目詰めが考えられるため液体を入れる容器と考えられる。

これらの層位的や遺構での時期的判断はできなかった。しかし，白磁Ⅳ類は高台が低く，口縁部は玉縁であるが内湾気味で半球状である。白磁Ⅴ・Ⅵ類は口縁部が外反し，高台が高くなる。この白磁の流れでみると，高台が低く口縁部から底部が球状のものから口縁部が外反し高台が高くなる傾向が考えられる。

これらの製作方法をみると，土師器の坏や皿は簡単に作れるが碗は丁寧な器面調整をする手間が必要である。よって，埦の使用方法から考えると，この地域では大量に手に入りにくい貿易磁器の埦の代わりに作られた可能性が高い。

黒色土器Ｂ小皿

いわゆる黒色土器と言われる土師器の皿で出土量は少ない。小皿の内外面を黒色にし，さらに丁寧な研磨を施している。用途としては出土量が少ないため，簡単に作った小皿とは違う使い方が考えられる。例えば祭祀関係などが考えられる。

これらの器形の変化は層位的や遺構での時期的判断はできなかった。

コ　石器

砥石

砥石は２種類出土している。軟質白色頁岩と硬質頁岩である。軟質白色頁岩は黄褐色や茶褐色で堆積層の筋目が見えるもので，通称天草石と言われるものである。粒子が細かく仕上げ砥石に最適である。

硬質は軟質に比べ小型である。使用方法は軟質が面研ぎであるが硬質は筋研ぎである。

滑石製品

石鍋，短冊形石製品，鏡の模造品等が出土している。この中の石鍋は円孔が底部にあり解釈が不明である。また，短冊形石製品は砥石の可能性がある。そして，鏡の模造品は紐に円孔があり，鏡面は凸面になっている。他の製品は用途や目的が不明である。

軽石製品

２点出土している。傷があるが用途不明である。

サ　金属製品

鉄製品，銅製品，鉛等が出土している。

鉄製品は釘，刀子，短刀，鏃，古銭，鈴，柄頭の固定金具等が出土している。この中の釘は横断面が四角で，頭部は少し叩き曲げている。短刀は土坑Ⅱに副葬品として出土した。また，鉄銭が出土して珍しい。鈴は飾り突起がついている。

青銅製品

刀の鍔止め，鈴，キセルの吸口部，古銭，簪が出土している。

鉛製品

火縄銃の弾と思われるものが１点出土している。

（３）考察

以上で遺跡の性格をみると，本遺跡の旧石器時代，縄文時代，古墳・古代は長期的に住んだ形跡はなく，中心は中世であることが判明した。

この項では，遺跡の中心である中世の考察を取り上げることにした。

（１）では遺構（２）では遺物をまとめてきた。この項ではこの２つの項を組み合わして，上野城跡の時間的な面で考察し，性格をまとめてみた。

まず，時期的なものは（２）の遺物でみると，白磁の遺物で古いものは，白磁Ⅲ類からとⅣ類で，この２つの中では，最も多いものは玉縁口縁部をもつ白磁Ⅳ類である。その後，数は少ないが，端

第156図　中世遺構第A期想定配置

第157図　中世遺構第B期想定配置

第158図　中世遺構第C期想定配置

反りの櫛描文がみられる白磁Ⅴ・Ⅵ類が続いている。そして，見込みに釉掻きがみられる白磁Ⅷ類と口唇部に釉剥ぎがみられるいわゆる口剥げである白磁Ⅸ類が出土している。これは 13 世紀前半に当てられている。よって，白磁からみると 12 世紀前半から 13 世紀前半が考えられる。

青磁は，龍泉窯系の龍泉Ⅰ，龍泉Ⅱ，龍泉Ⅲ，龍泉Ｂ，龍泉Ｃ，龍泉Ｄの他，稜花皿，壺と同安窯系の皿が出土している。この中で，最も多いものは龍泉Ⅰで，ついで龍泉Ⅱで，そして，同安窯系である。よつて，青磁からみると 12 世紀後半が中心で，13 世紀前半までと考えられる。

貿易陶器でみると，13 世紀の褐釉・黒釉陶器が出土している。

染付も出土している。これらは 14 後半～15 世紀のものと考えられる。

また，16 世紀の近世白磁や近世陶器である薩摩焼も出土している。

遺構である柱穴，方形竪穴遺構，土坑，土壙墓，溝の出土遺物をみると，白磁Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類と青磁と貿易陶器が出土している。染付や近世白磁・陶器はみられない。

これらの条件で判断すると本遺跡の中心は，12 世紀から 13 世紀前半が想定される。

次に，遺構の重なり合いをみると，大型建物跡である掘立柱建物跡の 12・13・14，掘立柱建物跡の 20・16，掘立柱建物跡の 26・31・32 は，同規模の２棟及び３棟の重なり合いである。

掘立柱建物跡の 12・13・14 は，下屋の付きが，12 は北と西，13 は北と東と南である。掘立柱建物跡の 16･20 は，下屋の付きが北と西である。これと同規模の建物跡は掘立柱建物跡 19 がある。19 の下屋の付きは東と南である。掘立柱建物跡の 26・31・32 は，26 の下屋が東西南北の四方に付き，31 は西と南に付き，32 は東と南に付いている。

小型の建物跡は，規模の大小がみられるが，遺構の項で述べたように南側や東側の棟柱がはみ出した建物跡，桁行柱の１本が大きくはみ出したもの，総柱のもの，大型でもみられたが角柱が内側に入っているものがある。

溝も重なり合いや隣接関係が時間差の重要遺構になっている。溝は１～５が関わり合いになってくる。

溝４は方形竪穴遺構５と重なっている。この関係は溝の上に方形竪穴遺構を作っているので溝が古い。また，掘立柱建物跡の 21・24 は隣接しているので，溝４との時間差があることになる。
土坑Ⅱ区の土坑と切り合いがあるので，これらのものと時間差があると考えられる。

溝５は掘立柱建物跡の 26・27 と隣接しているので，本遺構と時間差が認められる。

溝２・３は溝３の上から溝２を掘り直しているので，溝２と溝３は時間差が認められる。溝２・３の上に畠跡Ⅰがあり，溝２・３と畠跡Ⅰの時間差が認められる。

溝１は切り合いがないが，掘立柱建物跡の１との平行施設が考えられる。
方形竪穴遺構は５基検出されている。この中で方形竪穴遺構１・２が掘立柱建物跡の 16・20 と重複・隣接している。また，方形竪穴遺構３と４，方形竪穴遺構４と５はこの遺構に上屋が付いた場合は，屋根の端が重なる可能性がつよいので，方形竪穴遺構４と方形竪穴遺構３・５は時間差があることになる。

土坑はⅠ区が建物に沿って作られたものが特徴で，Ⅱ区は溝４と重なりがみられ，Ⅲ区は溝５の南側に位置し，Ⅳ区は大半が畠Ⅰと溝１の間にみられる。これらにも時間差が想定される。

焼土は建物と隣接ないし重複との関係で時間差を分析できなかった。

畠Ⅰは溝２・３と重なっているため，畠としては最終期のものと考えて良い。

以上を総合して考察すると３期が考えられる。ここではⅠ期，Ⅱ期，Ⅲ期とせずに，A期，B期，C期とした。この理由は，中世の 12～13 世紀前半以外にも古代の畠跡と 10 世紀位の出土遺物，14・15 世紀や近世の 16 世紀の遺物が出土し，判断できなかった遺構が多くあるためであった。ここでは上野城跡全体の流れにせずに，12 世紀から 13 世紀前半に絞ったためである。よって，下記の案を設定した。

A期（第 156 図）

掘立柱建物跡は北から 14・20・10・９・６・５・29・28・31 である。

方形竪穴遺構は方形竪穴遺構４である。

溝は溝４と溝３である。

土坑Ⅰ類は第１区及び第２区である。

これは，主館が掘立柱建物跡 14・20・31 で，従者等の住居と考えられる棟が掘立柱建物跡９・10・６・29・28 を想定できる。なお，掘立柱建物跡５は総柱のため倉庫と考えられる。

方形竪穴遺構は掘立柱建物跡の中心部にあり，１基で大きい。共同の作業所にあたるとおもわれる。

土坑Ⅰ類は生活残渣捨て場と考えれば，倉庫の周辺に設けたと思われる。

溝は溝４で中間仕切をし，そして，溝３は堀の役目をした南側防衛施設と考えられる。

B期（第 157 図）

掘立柱建物跡は北から掘立柱建物跡 13・11・15・18・３・２・25・24・19・32 である。

方形竪穴遺構は方形竪穴遺構１・２である。

溝は溝５と溝２である。

土坑Ⅰ類は第１区及び第２区である。

これは，主館が掘立柱建物跡 13・19・32 で，従者等の住居と考えられる棟が掘立柱建物跡 11・15・18・３・２・24・25 を想定できる。なお，掘立柱建物跡 15 は総柱のため倉庫と考えられる。

方形竪穴遺構は掘立柱建物跡の中心部にあり，２基で方形竪穴遺構１・２である。小規模共同作業所を２基造ったと思われる。

土坑Ⅰは生活残渣捨て場と考えれば，まばらになり第１区から第２区まで拡がったと考えられる。

溝は溝５で中間仕切をし，また，溝２は山部を含めた堀の役目をした南側防衛施設と考えられる。

C期（第 158 図）

掘立柱建物跡は北から掘立柱建物跡 12・８・16・17・４・30・21・22・23・26・７・１である。

方形竪穴遺構は方形竪穴遺構３・５である。

溝は溝１である。

土坑Ⅰ類は第１区・第２区・第３区・第４区である。

これは，主館が掘立柱建物跡 12・16・26 で，従者等の住居と考えられる棟が掘立柱建物跡８・17・４・30・21・22・７を想定できる。なお，掘立柱建物跡 23 は倉庫と考えられる。

方形竪穴遺構は掘立柱建物跡の中心部にあり，２基で方形竪穴遺構３と５である。小規模共同作業所を２基造ったとおもわれる。

土坑Ｉは生活残査捨て場と考えれば，第１区から第４区まで拡がったと思われる。

畠跡は溝２・３が埋まった後と考えられるが，Ａ・Ｂ期もこの位置にあったと考えて良い。畠跡の南側が溝２・３の上に検出されたことはＣ期に拡張された可能性が高い。

溝は溝５での中間仕切がなくなり，そして，溝２・３も埋まったため，山部との境に溝１を造ったと考えられる。溝１は堀の役目をした山部側防衛施設と考えられる。

以上３期の想定を述べた。よって，結論は，これらの遺構が配置された中世館跡である。その時間的想定図はＡ期が 156 図，Ｂ期が 157 図，Ｃ期が 158 図に示した。なお，土坑に付いては第 73 図の土坑配置図を参照すること。

中世遺構の配置の確認は最小限であり，まだ，掘立柱建物跡 27 等多くの柱穴や土坑が検出している。また，それらは近世遺構の可能性があることも考えられる。

上野城跡は中世から近世にかけて使われ，近世の百次城とも言われている。中世末期から近世に至るまでの遺物も出土していることから，隣接平坦面との関係が出てくることを考えなければならない。

遺構を形成している平坦面は中世末から近世にかけて曲輪とよばれる造成面に変わったと思われる。よって，中世館跡で使用された本調査地域は平坦面として扱い，中世山城の表現である曲輪の名称は使用しなかった。

参考文献

山本信夫　「太宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－」　太宰府の文化財　第 49 集　2000　太宰府市教育委員会

大橋康二　「肥前陶磁器」　考古学ライブラリー55　1989　ニュー・サイエンス社

彌榮久志他　「苦辛城跡」　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（27）1983　鹿児島県教育委員会

諏訪昭千代・彌榮久志　「鹿児島城二之丸跡（遺構編）」　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（55）1983　鹿児島県教育委員会

彌榮久志他　「鹿児島城二之丸跡（遺物編）」　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（60）1983　鹿児島県教育委員会

亀井明徳・山口譲治・加藤良彦　「博多遺跡」　福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第 396 集 1995　福岡市教育委員会

八木澤一郎　「山ノ脇・石坂・西原遺跡」　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（58）2003

図　版

地層断面（斜から）

地層断面（正面６Ｓ）

図版２

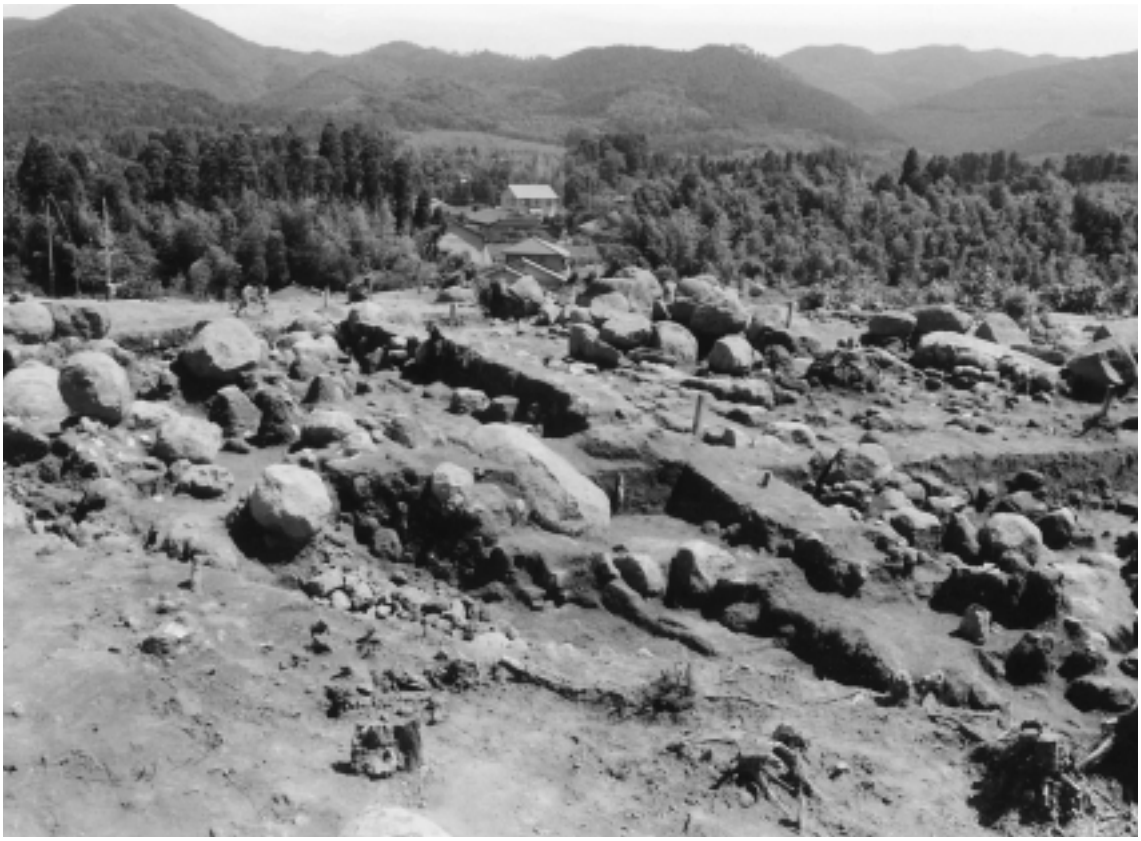
地層断面（斜から）

旧石器時代の出土状況

縄文時代の落とし穴

縄文時代の落とし穴断面

図版４



山部調査状況

山部出土状況

縄文土器出土状況

縄文土器出土状況

山部のトレンチ

山部のトレンチ

山部のトレンチ

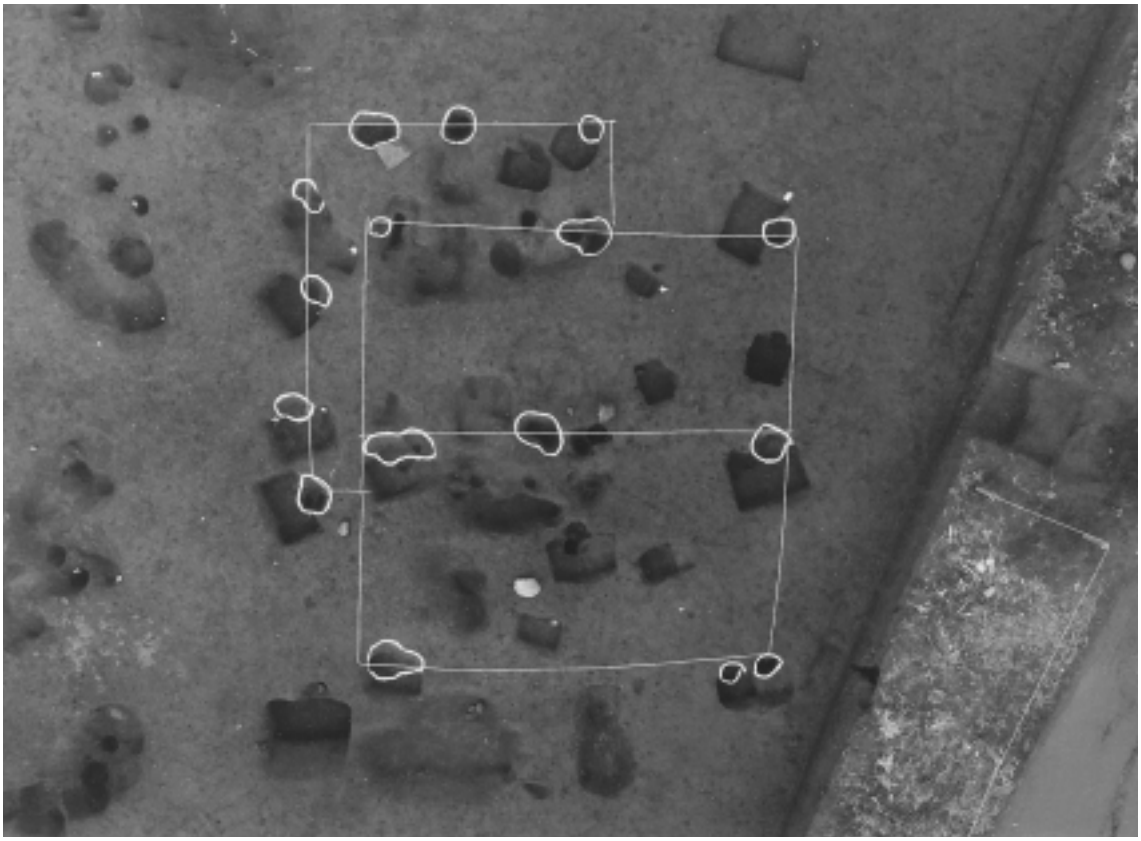
山部のトレンチ

山部のトレンチ

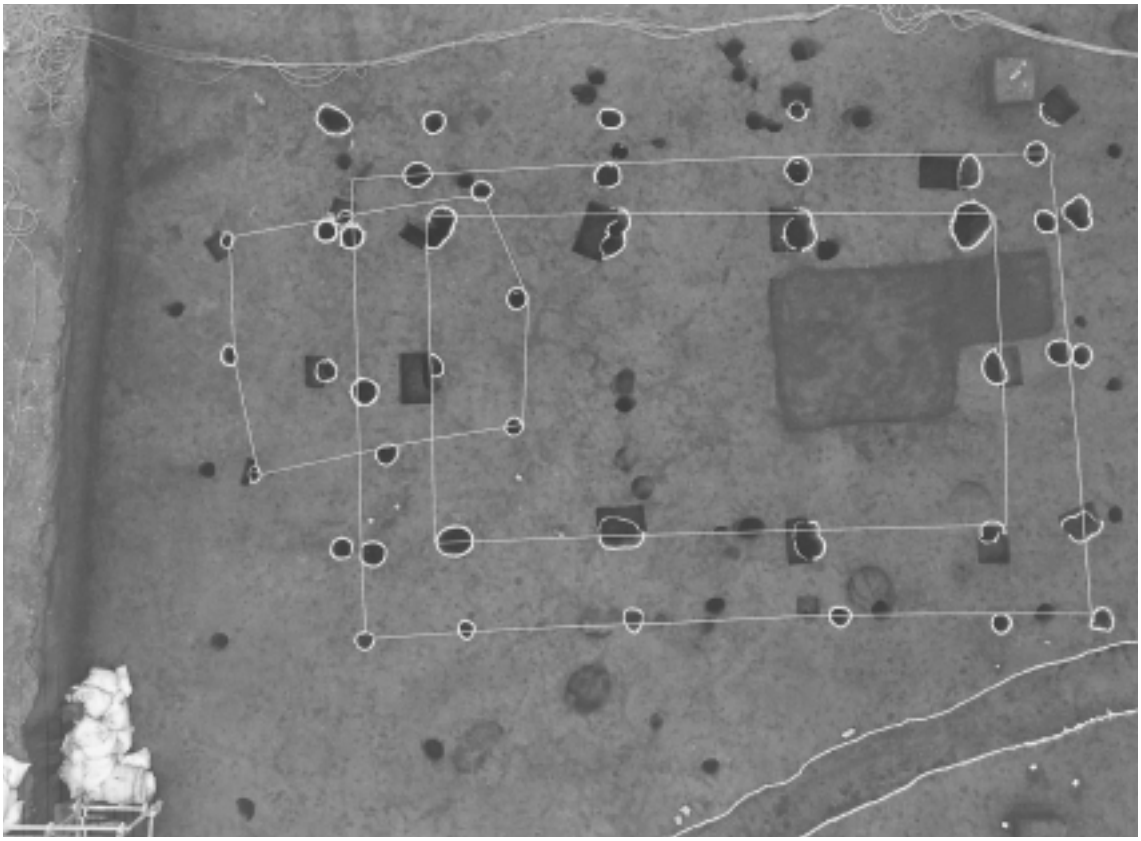
山部のトレンチ

南部の遺構

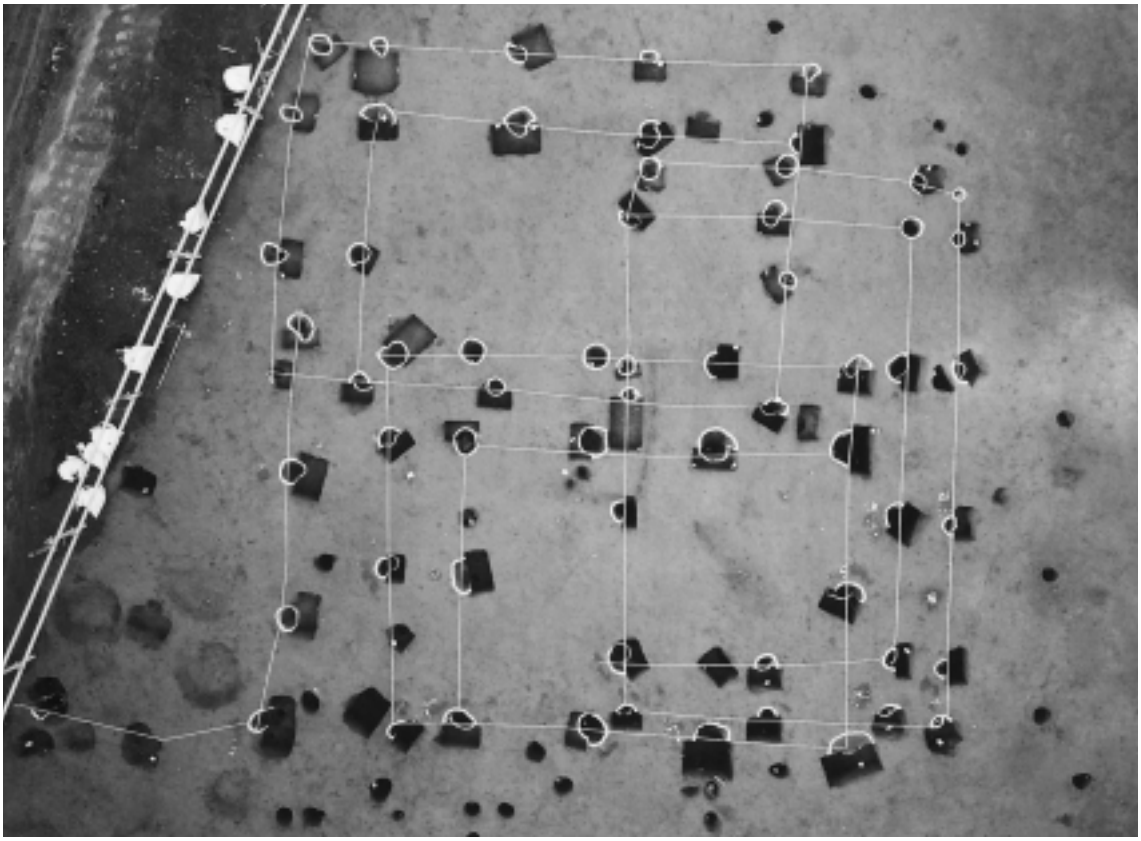
北部の遺構



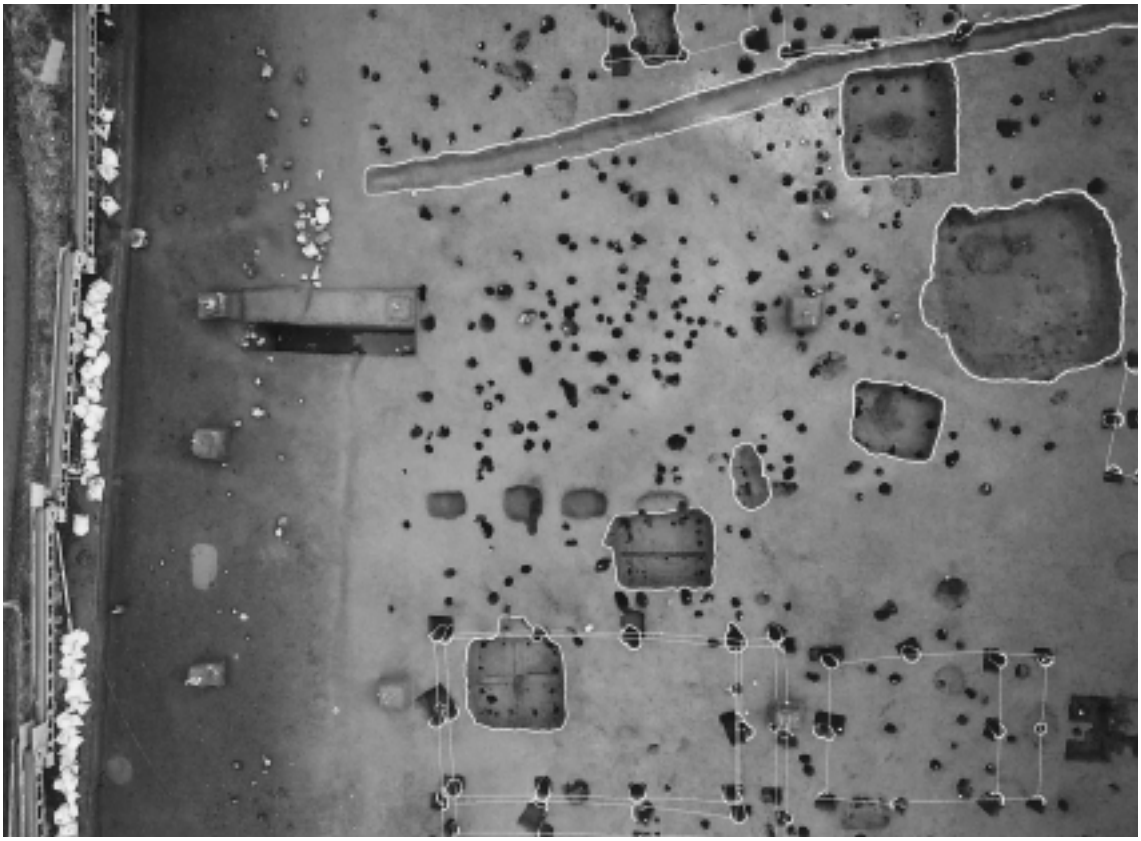
掘立柱建物跡1



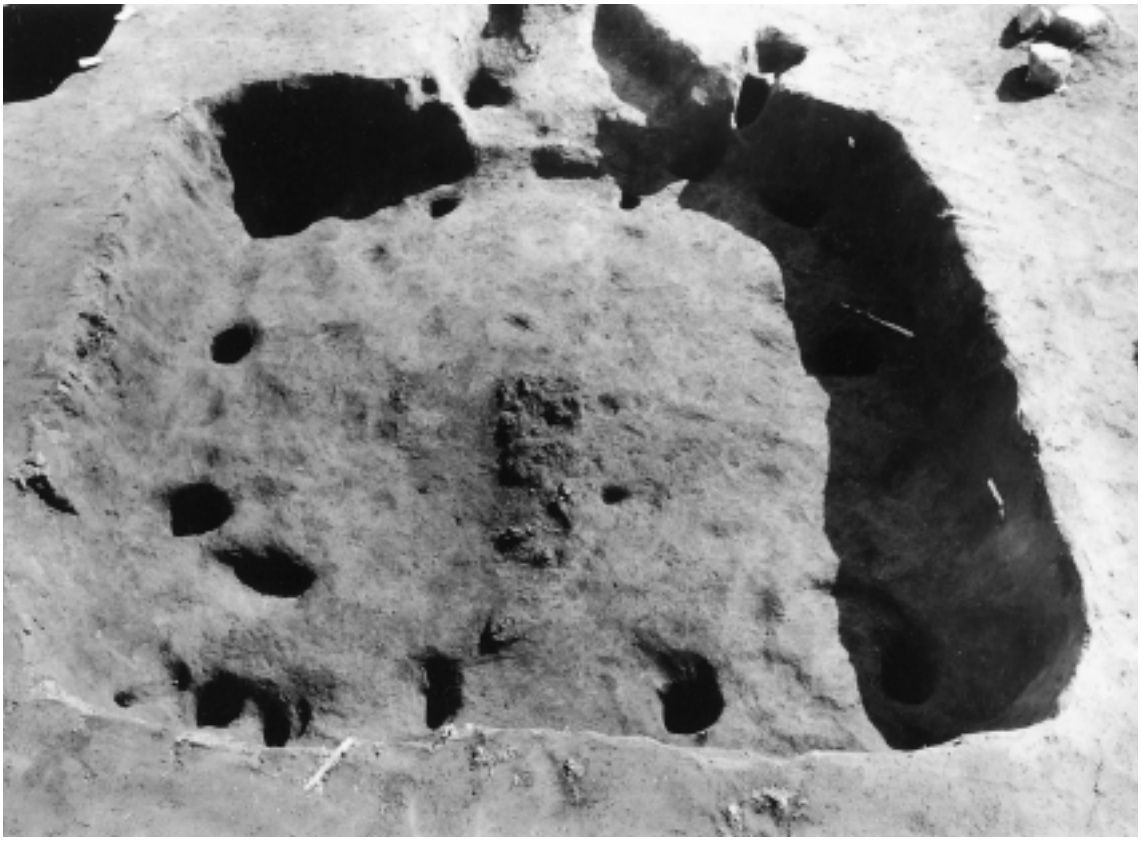
掘立柱建物跡26・27



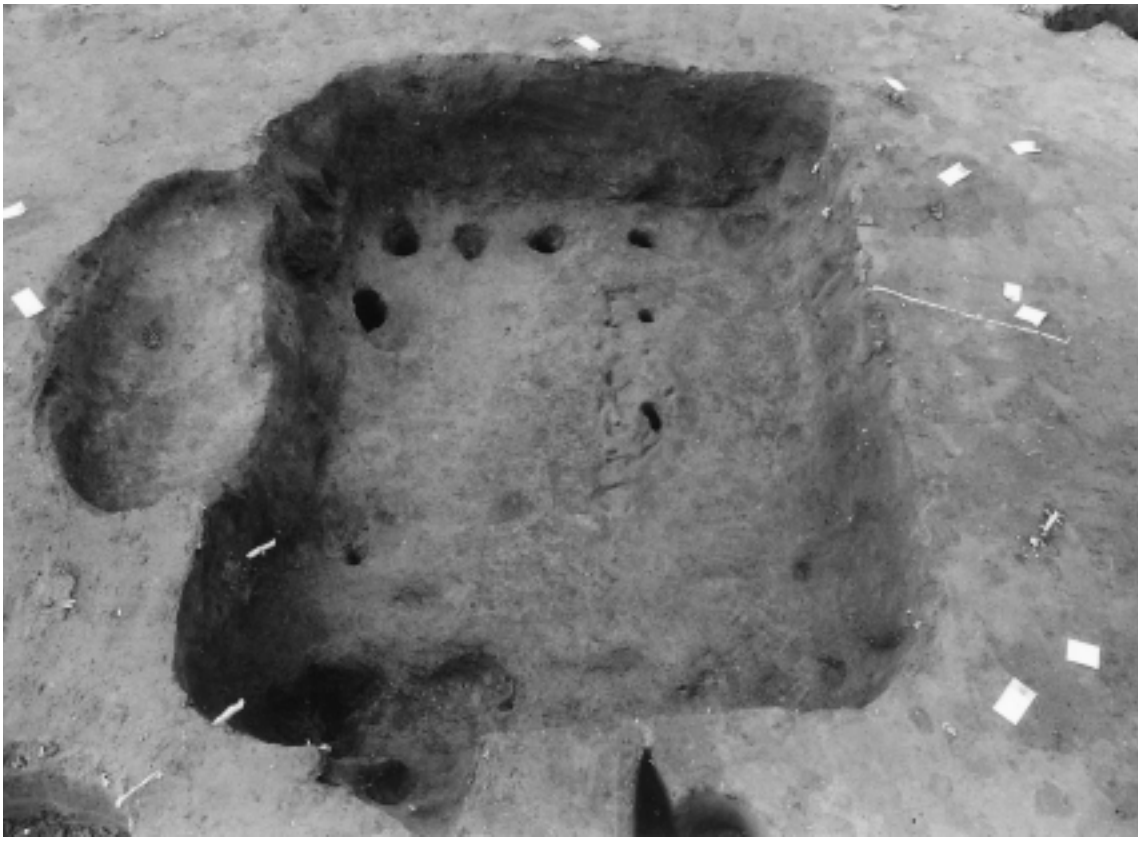
掘立柱建物跡12・13・14



方形竪穴遺構

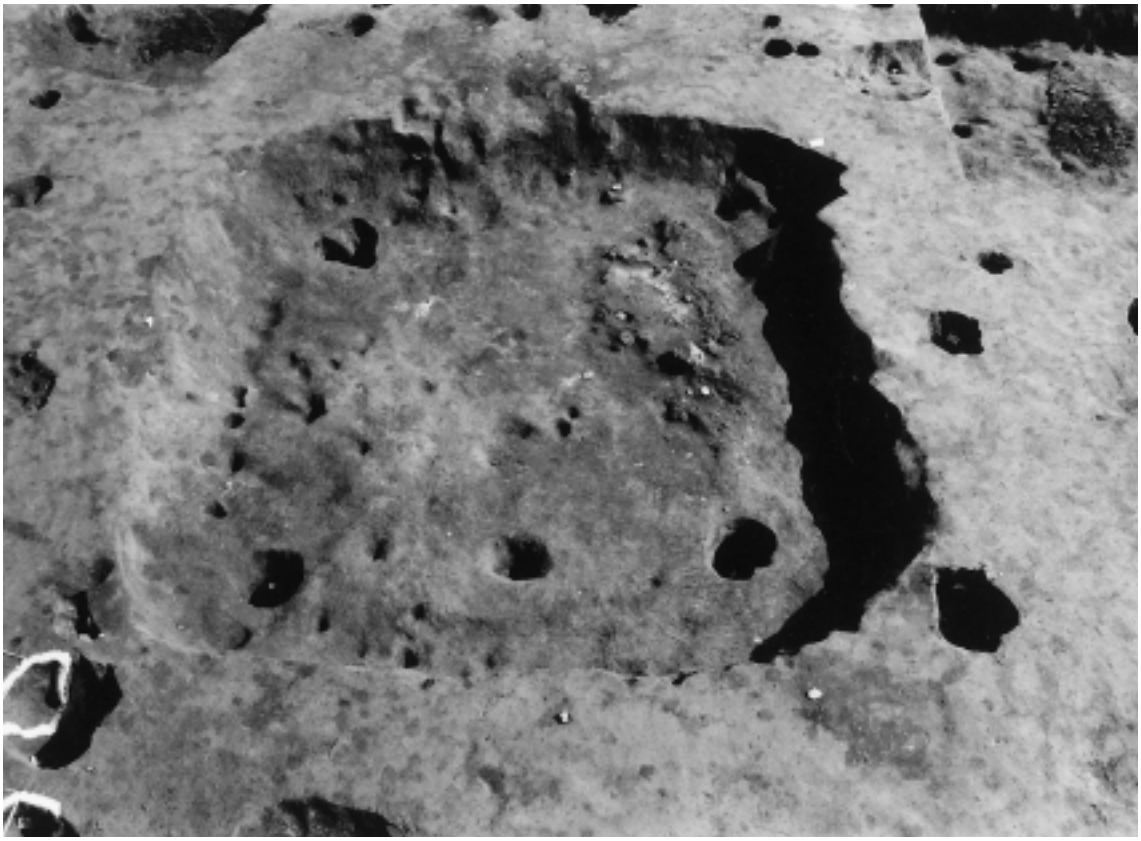


方形竪穴遺構1

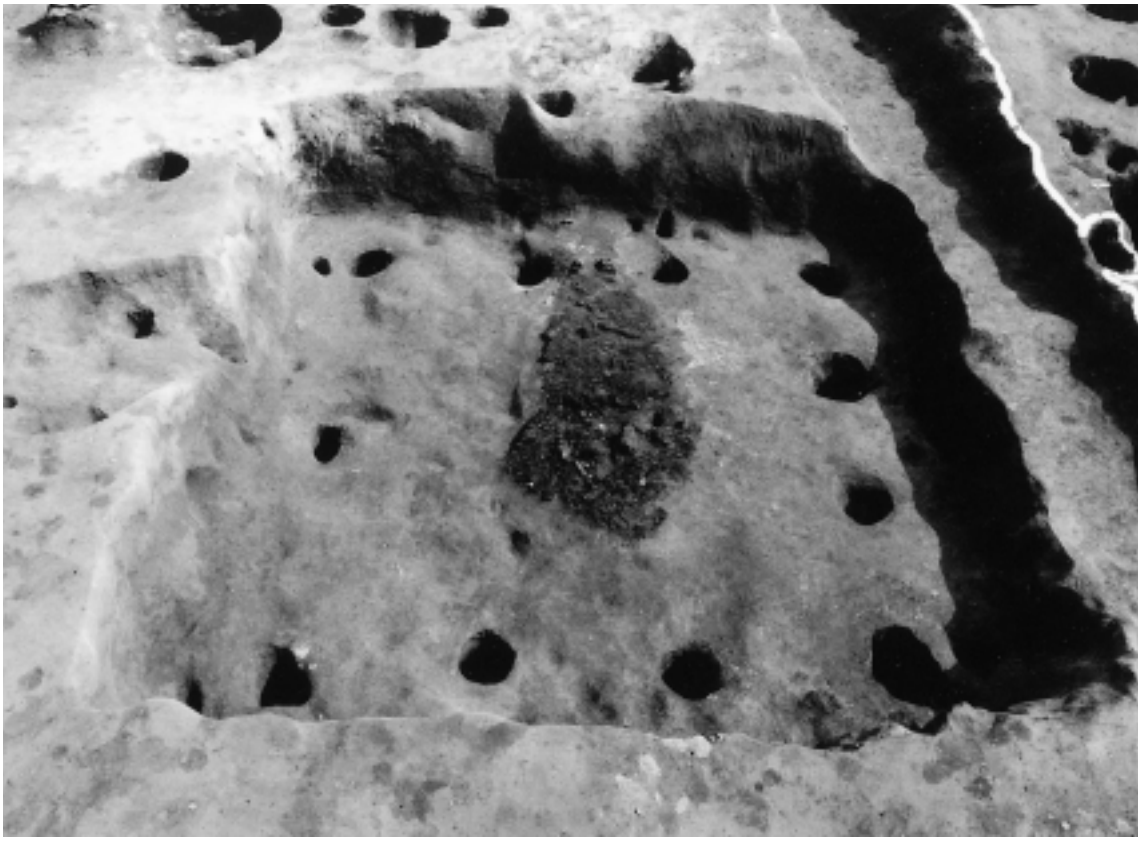


方形竪穴遺構2

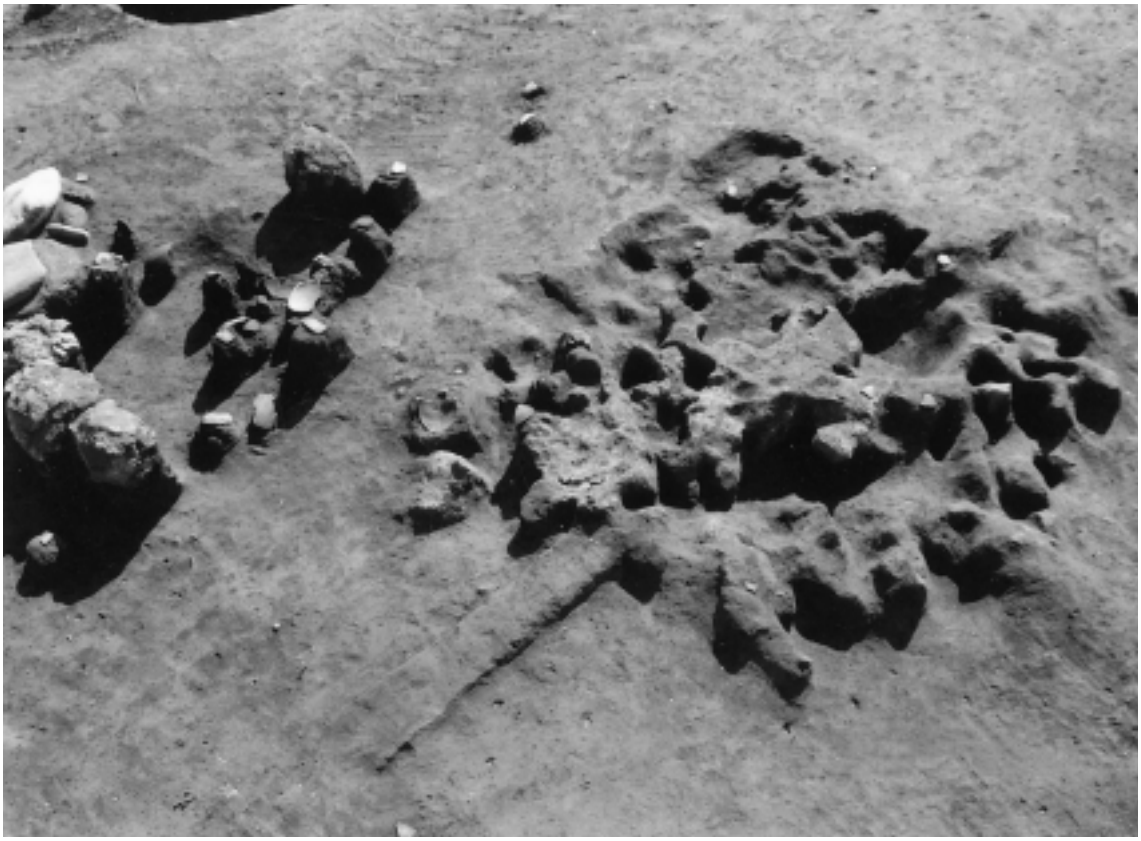
方形竪穴遺構3



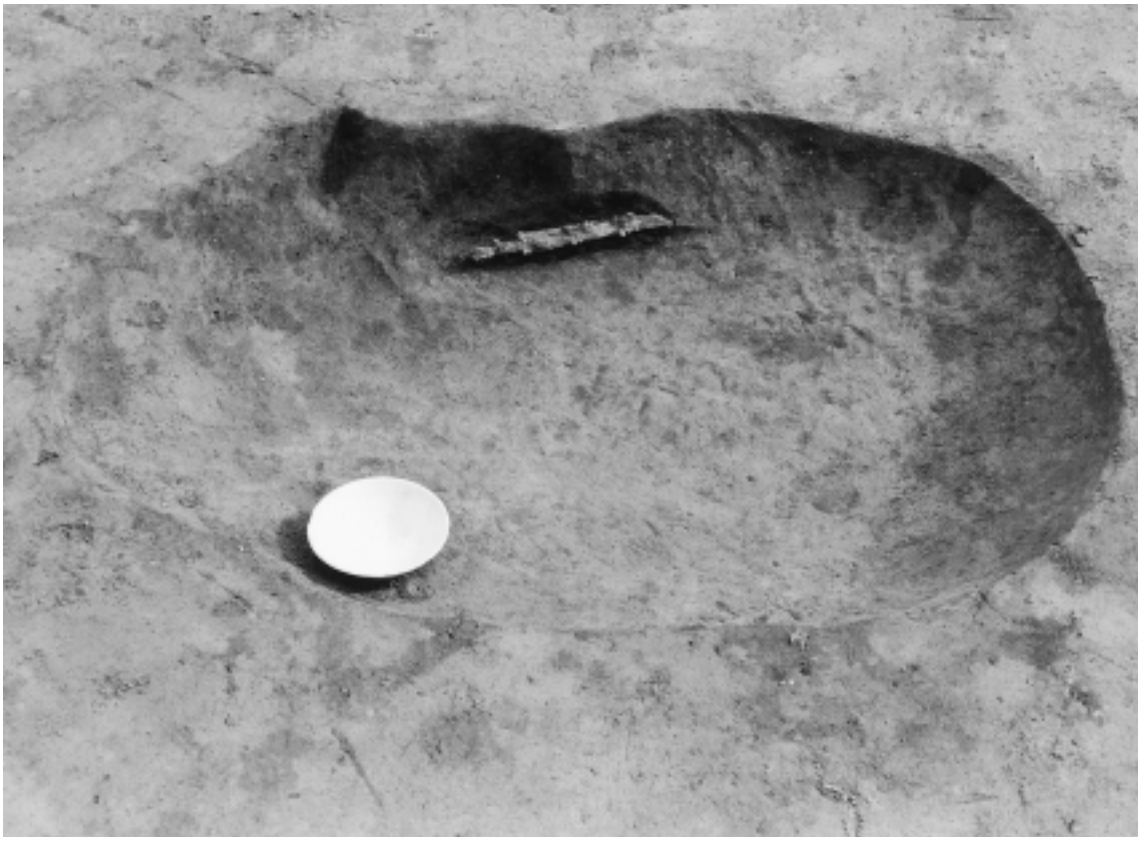
方形竪穴遺構4



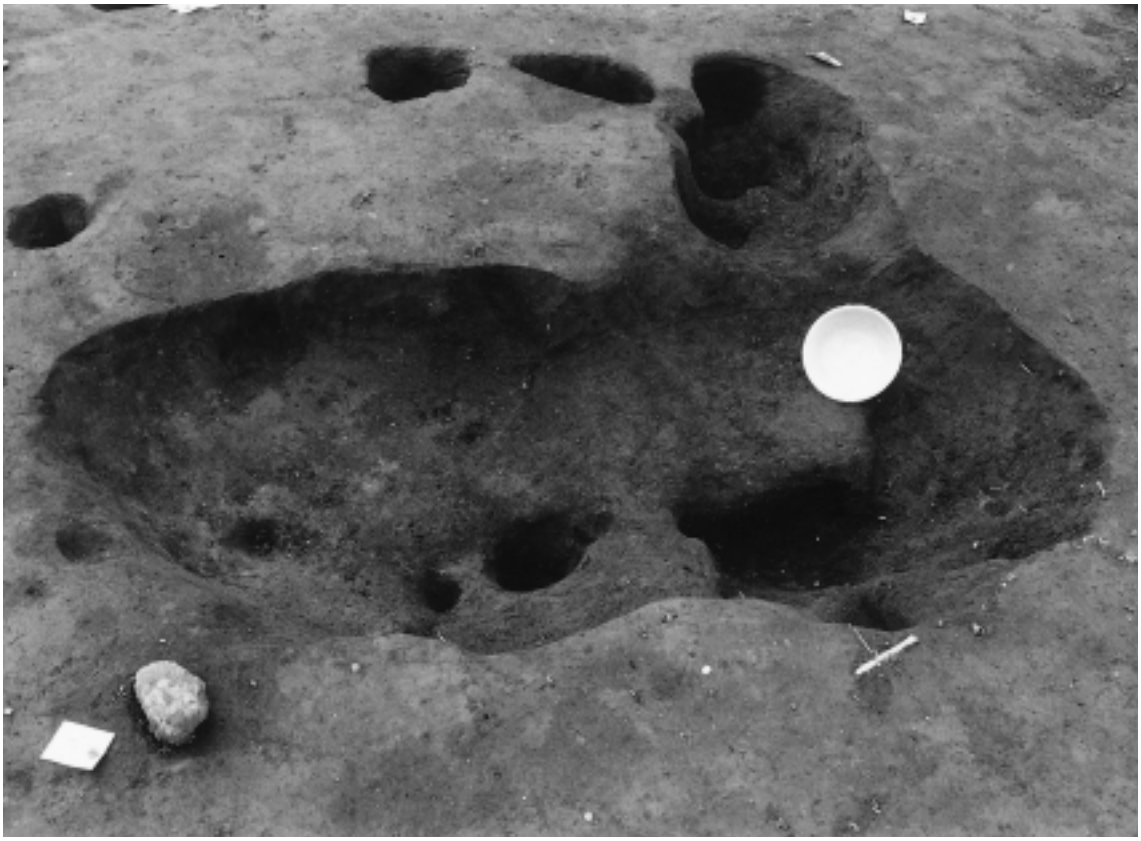
方形竪穴遺構5



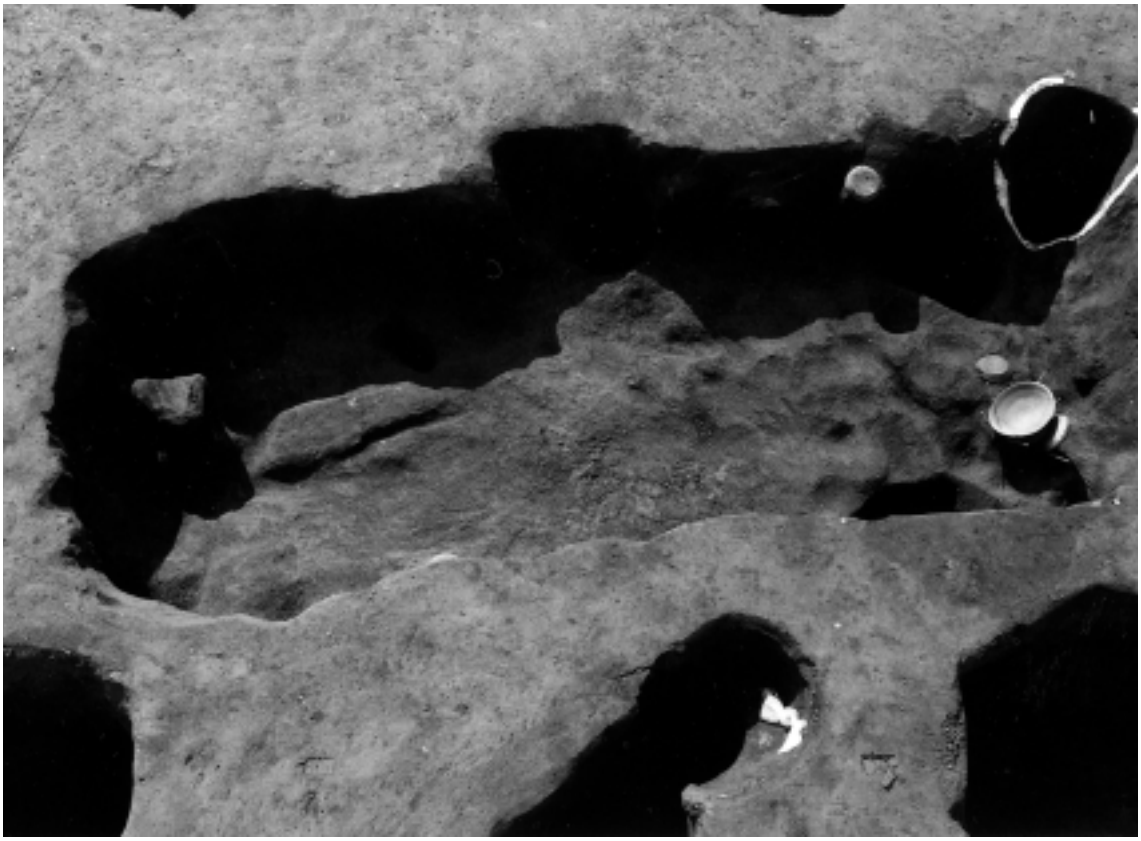
土坑Ⅱ



土坑Ⅱ－7

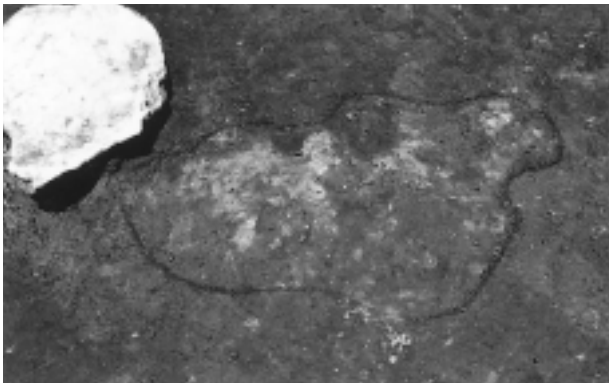


土坑Ⅱ－6

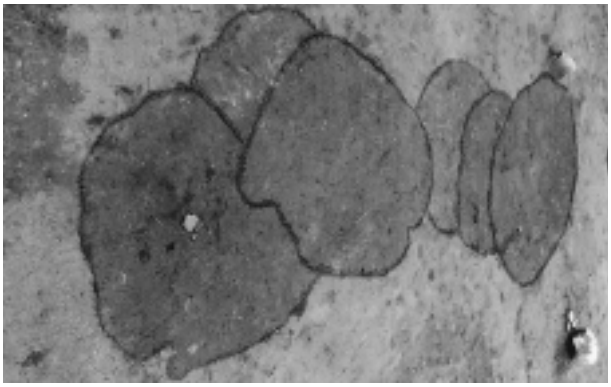


土坑Ⅱ－8

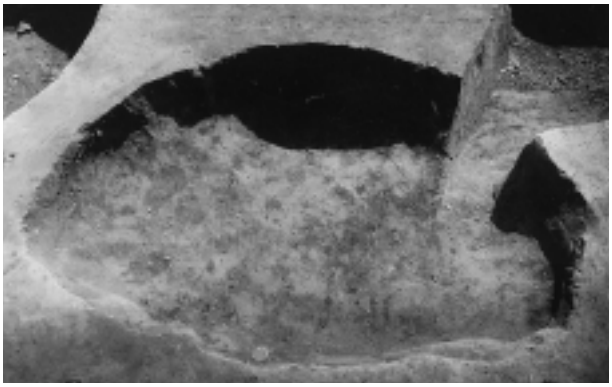
土坑Ⅱ－17



土坑検出状況

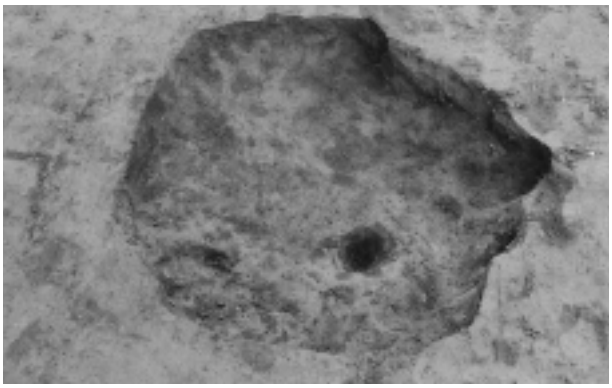


土坑検出状況

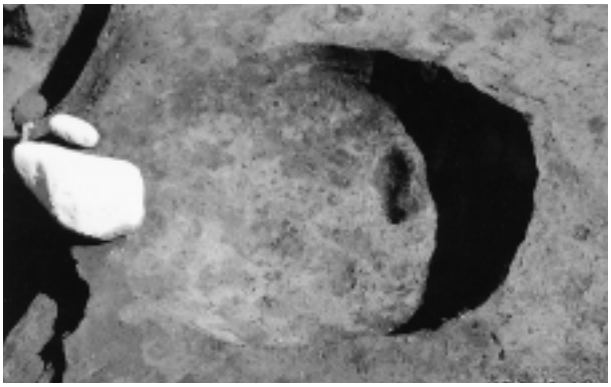


土坑Ⅰ

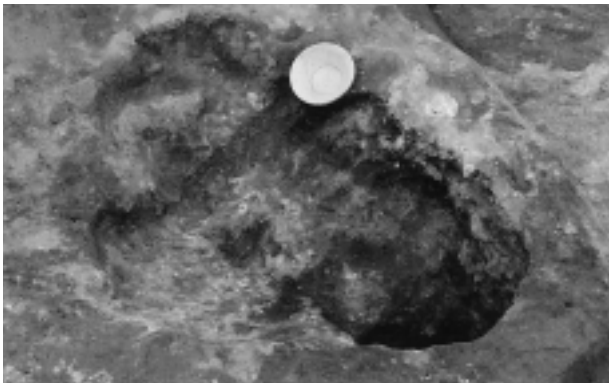
土坑Ⅰ



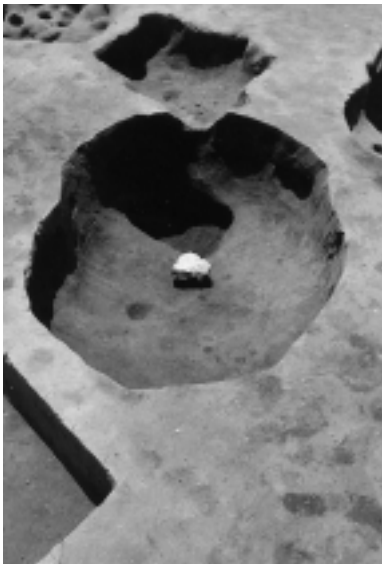
土坑Ⅰ



土坑Ⅰ



土坑Ⅱ



土坑Ⅰ

溝1

溝1

溝4

溝2

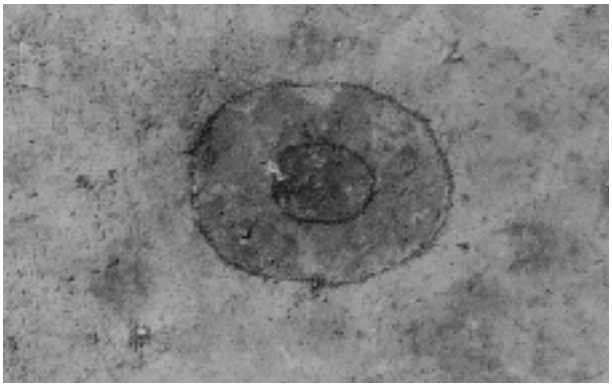
溝2

古道

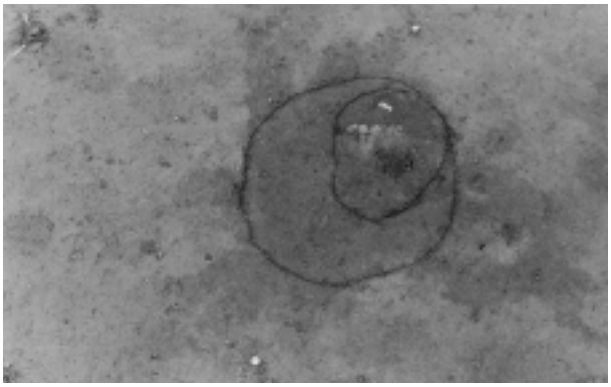
溝2断面

畠跡Ⅰ

畠跡Ⅱ



柱穴検出状況



柱穴検出状況

柱穴

柱穴

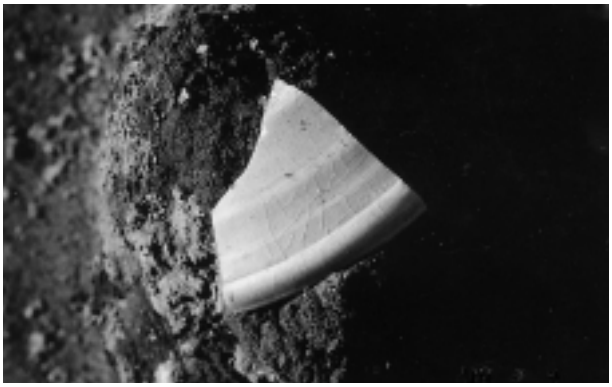
柱穴

柱穴

遺跡出土状況

古墳時代の土器

図版 18



白磁検出状況

白磁検出状況

土師器検出状況

土師器検出状況

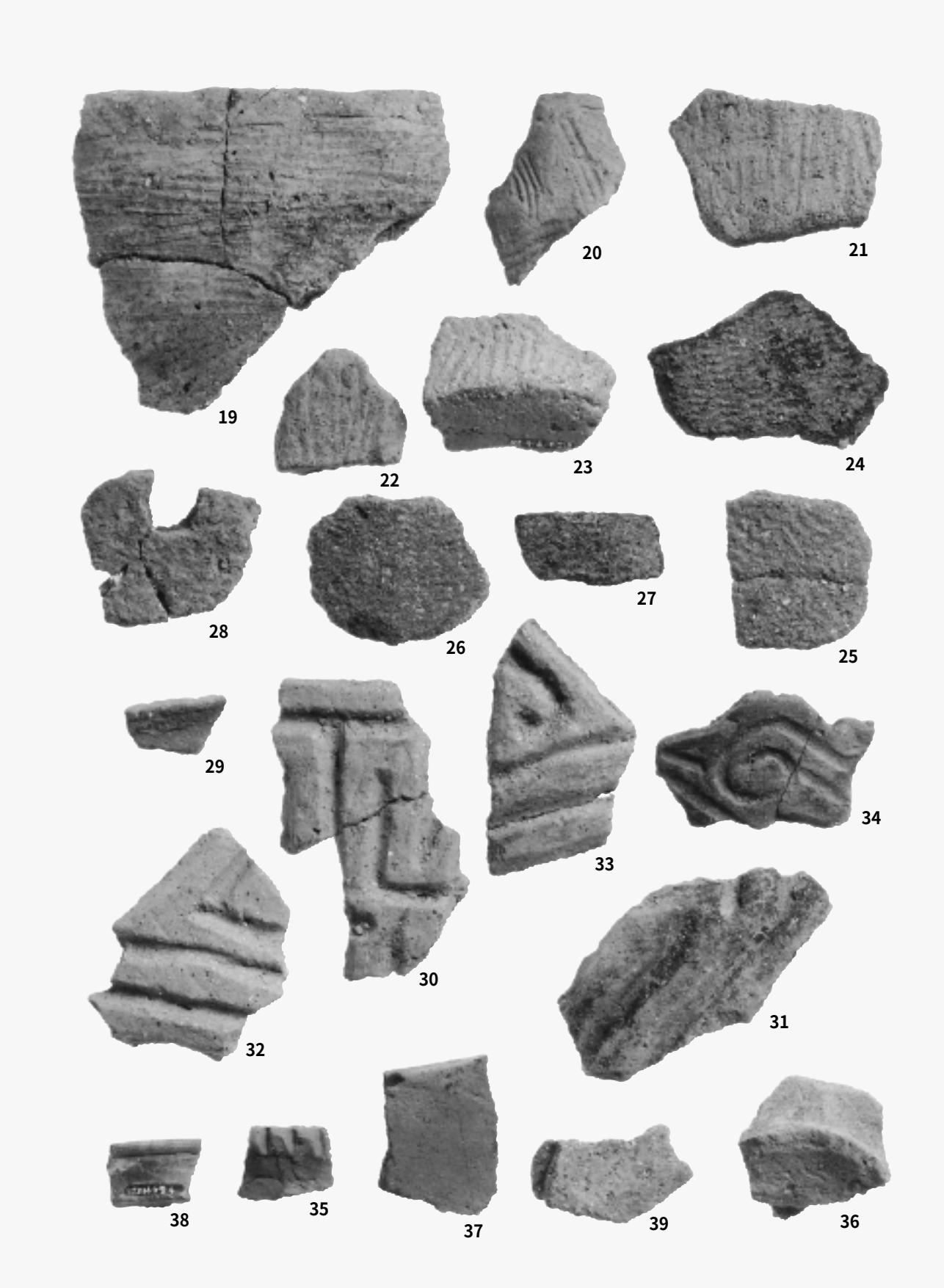
土師器検出状況

土師器検出状況

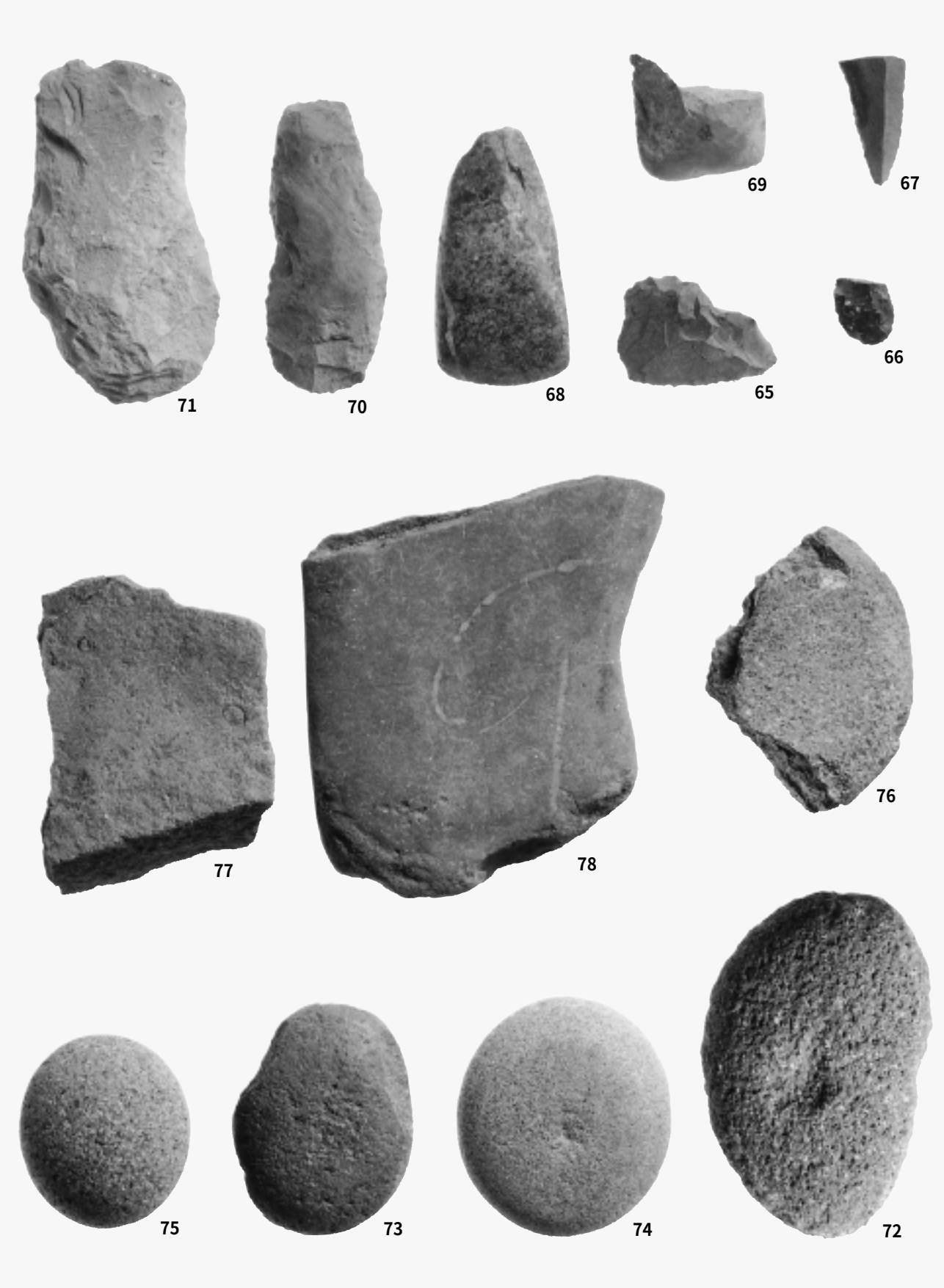
石製品検出状況

鉄製品検出状況

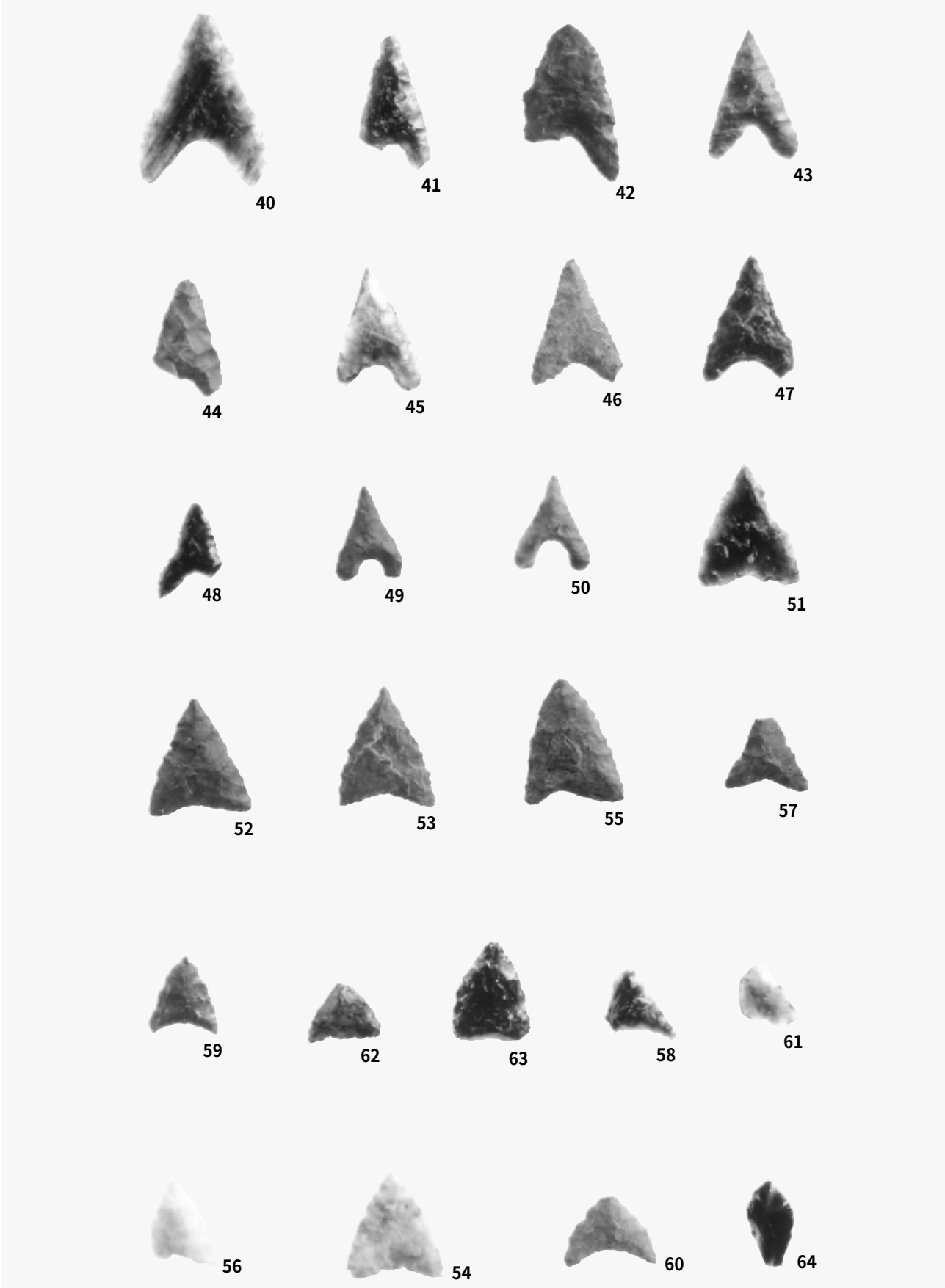
旧石器時代の出土遺物



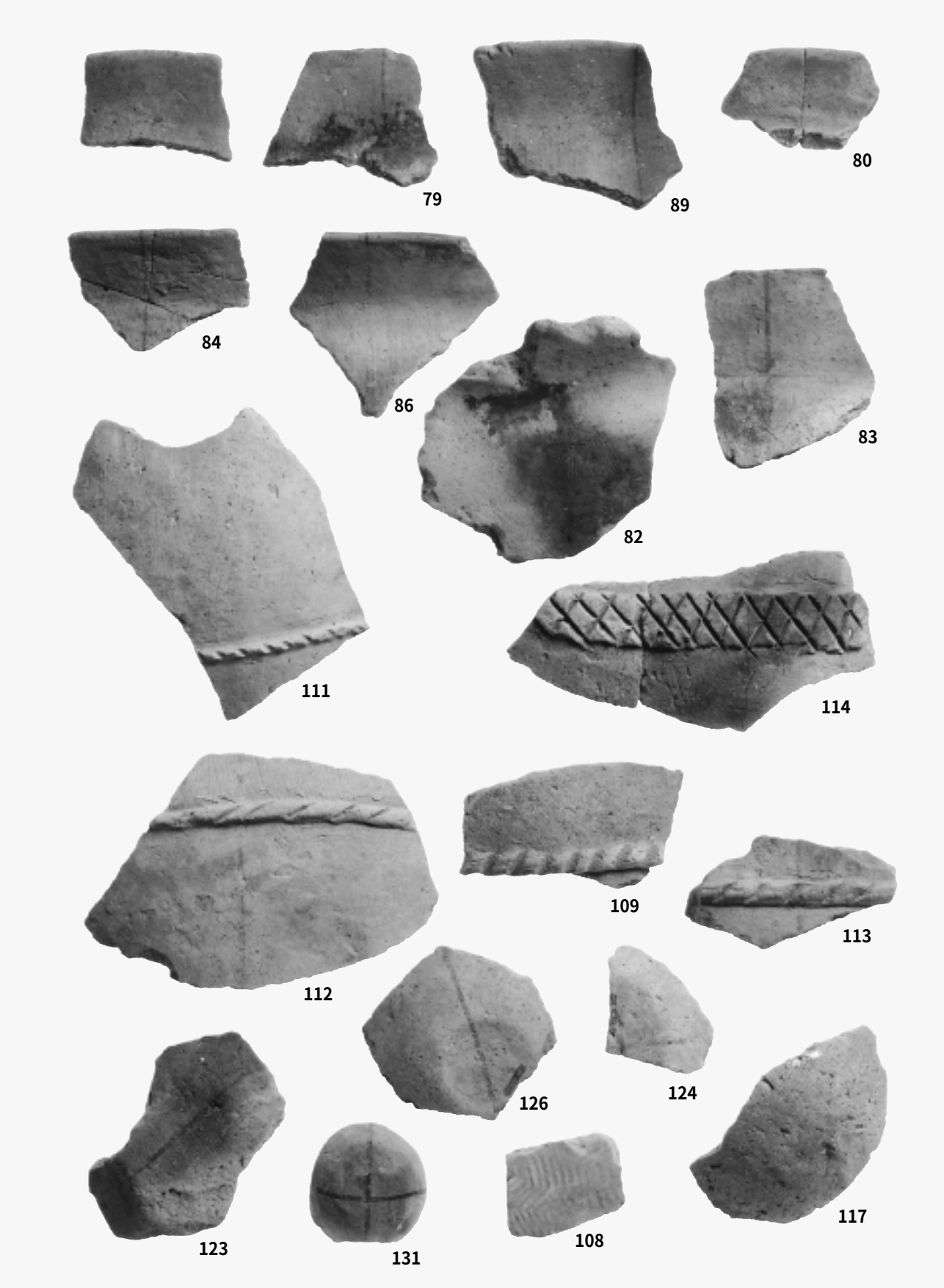
縄文時代の出土遺物（土器）



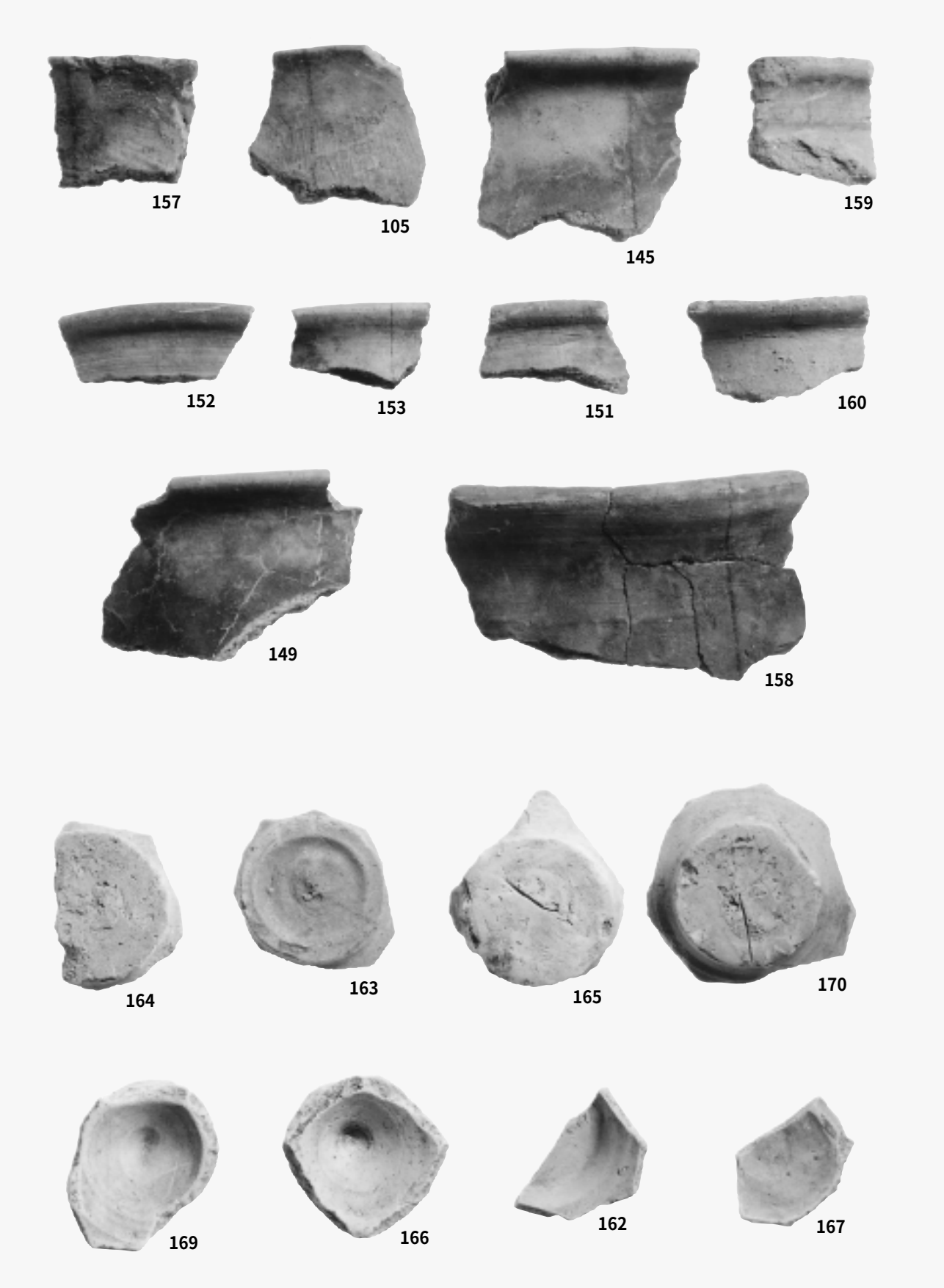
縄文時代の出土遺物（石器１）



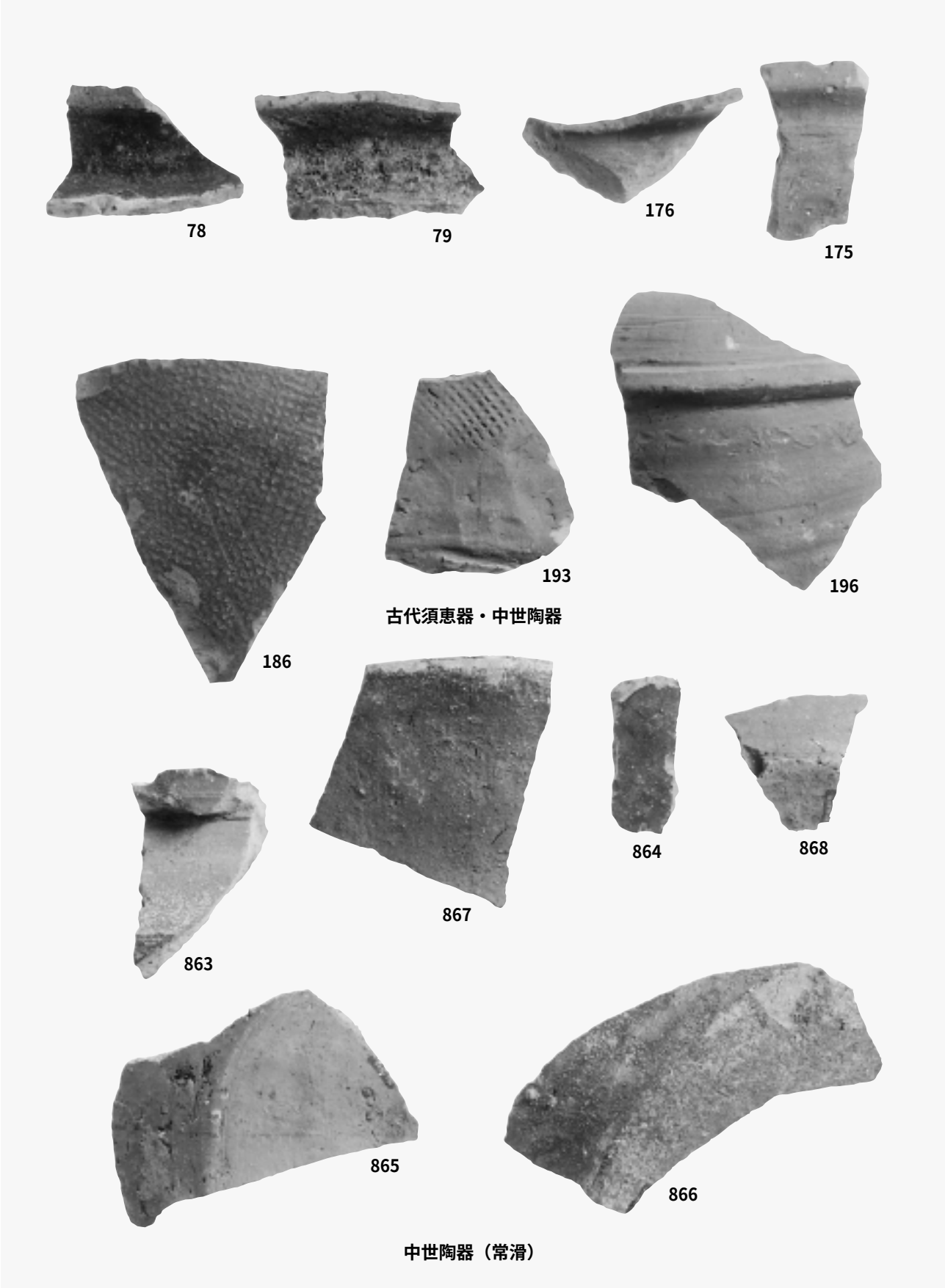
縄文時代の出土遺物（石器２）



古墳時代の出土遺物

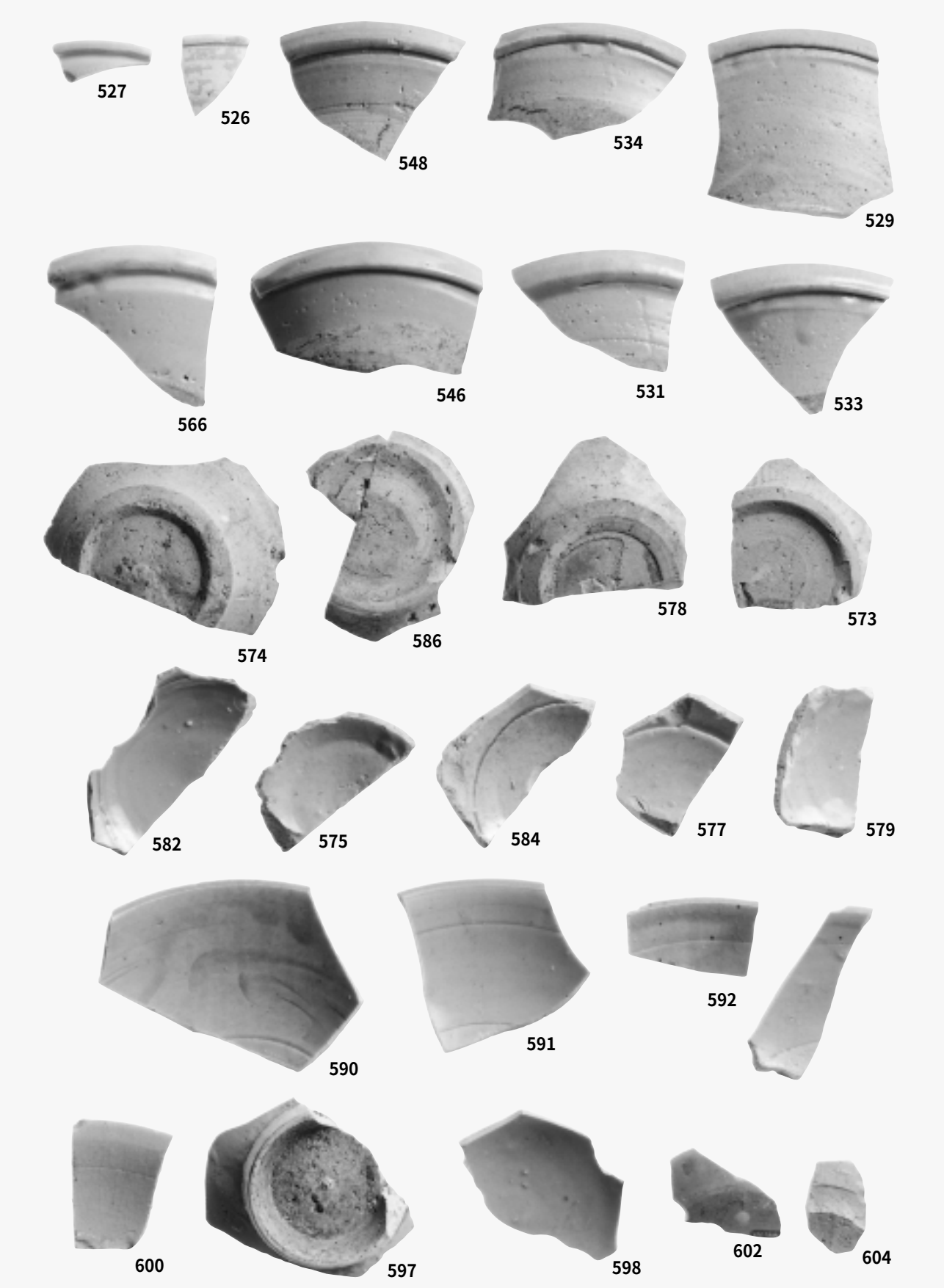

157
105
145
159
152
153
151
160
149
158
164
163
165
170
169
166
162
167

古代の出土遺物

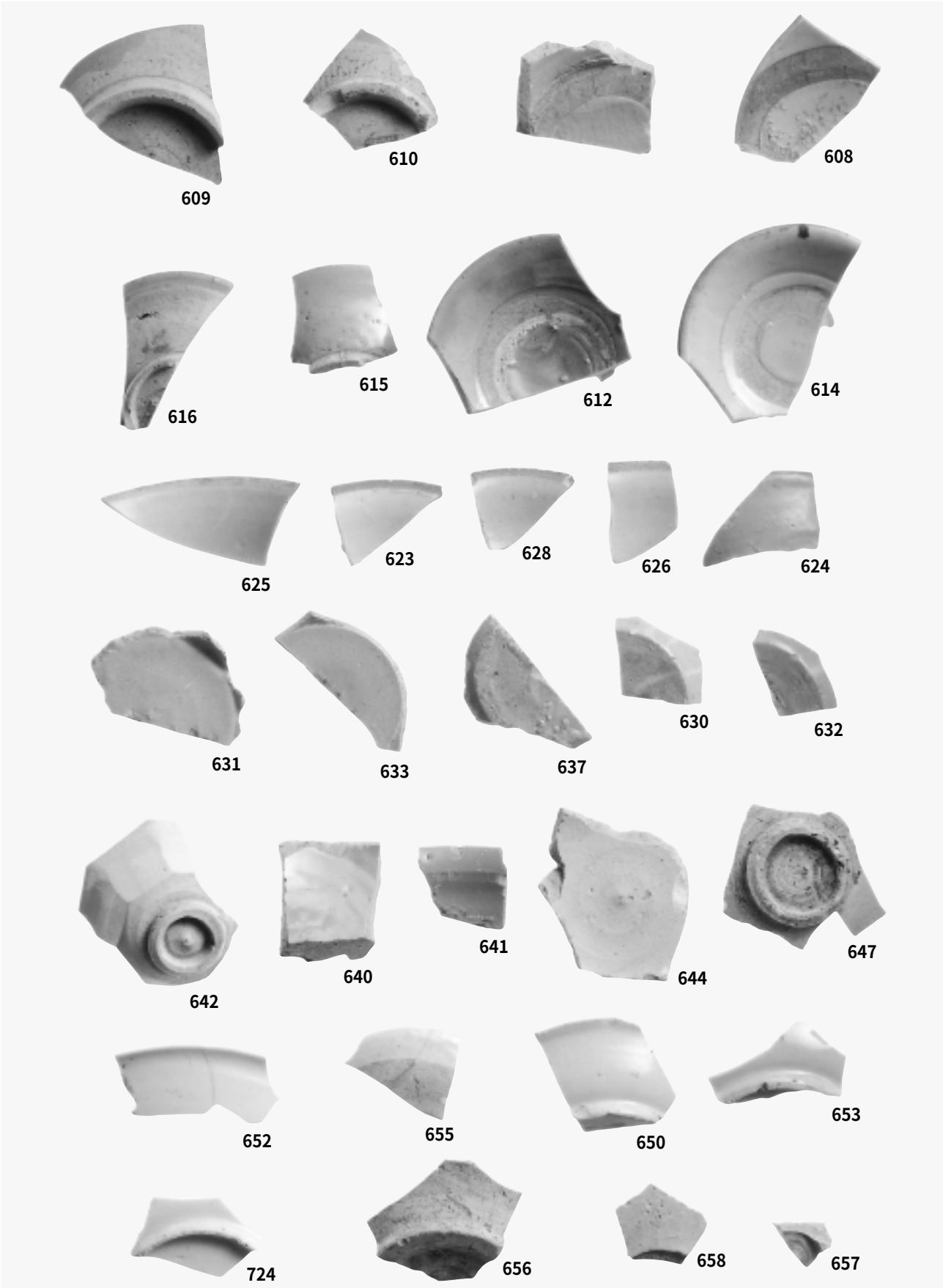

78
79
176
175
186
193
196
古代須恵器・中世陶器
863
867
864
868
865
866
中世陶器（常滑）

古代の須恵器・中世陶器

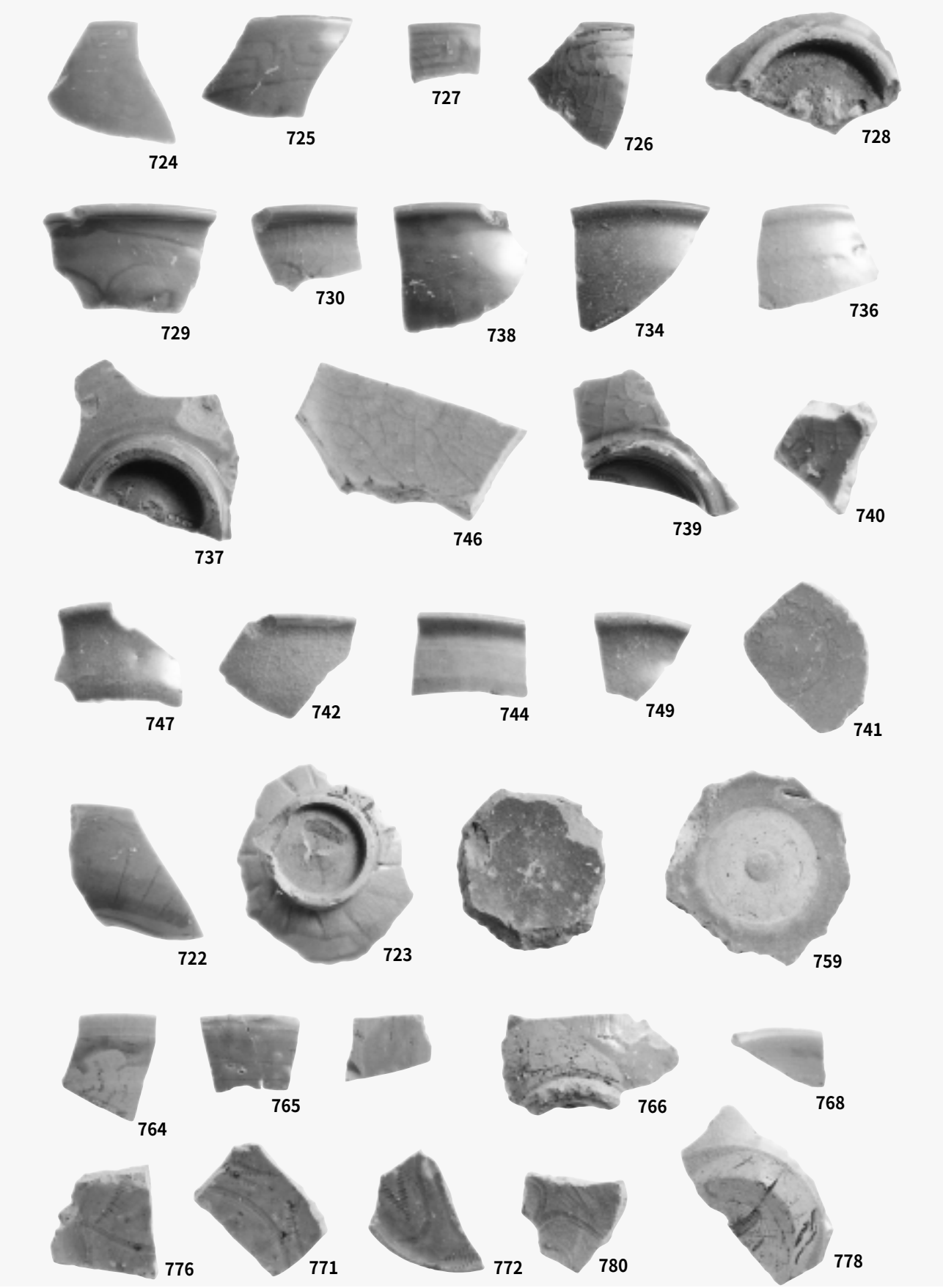
白磁・土師器（合子）


527
526
548
534
529
566
546
531
533
574
586
578
573
582
575
584
577
579
590
591
592
600
597
598
602
604

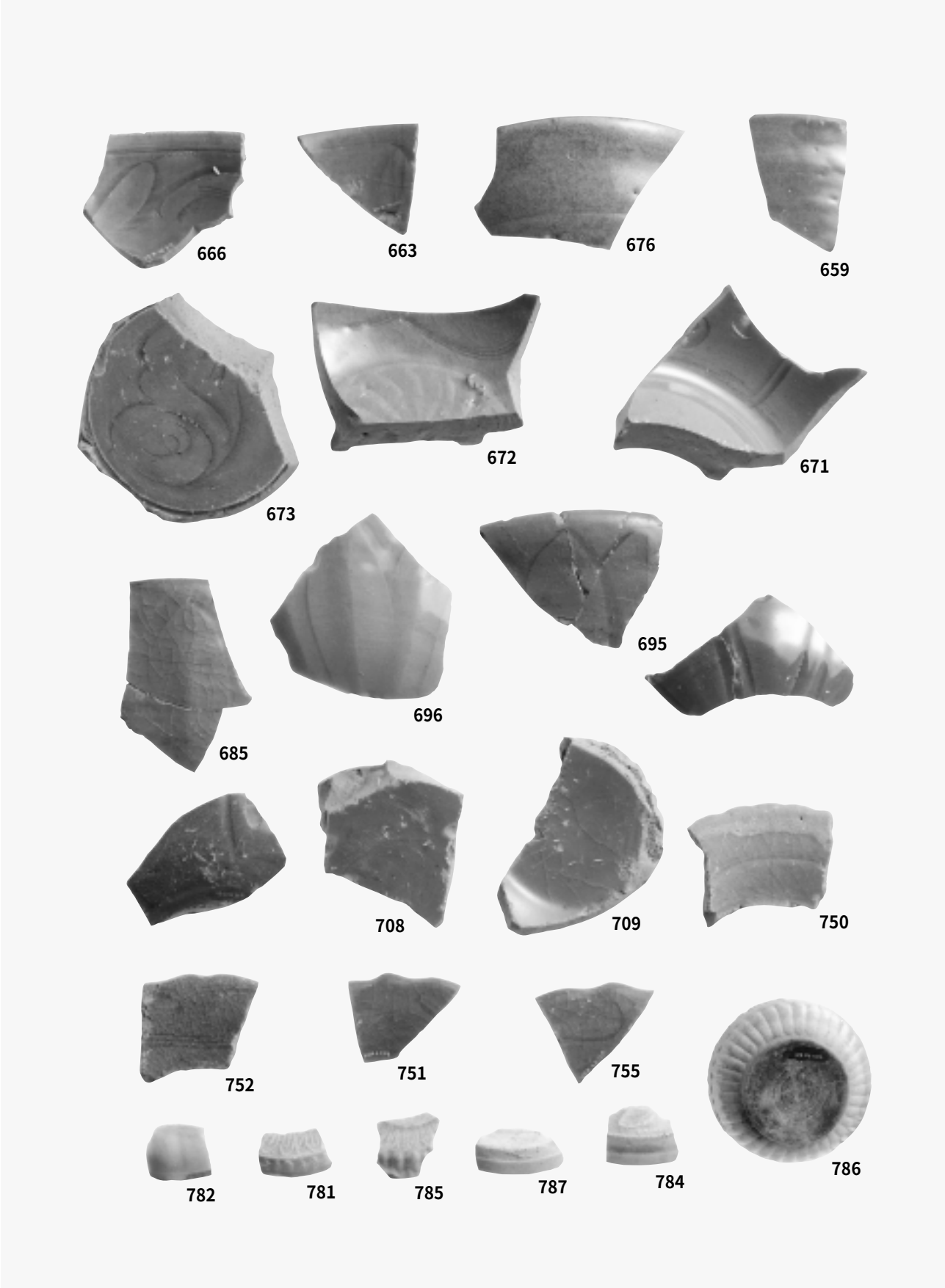
白磁（1）


609
610
608
616
615
612
614
625
623
628
626
624
631
633
637
630
632
642
640
641
644
647
652
655
650
653
724
656
658
657

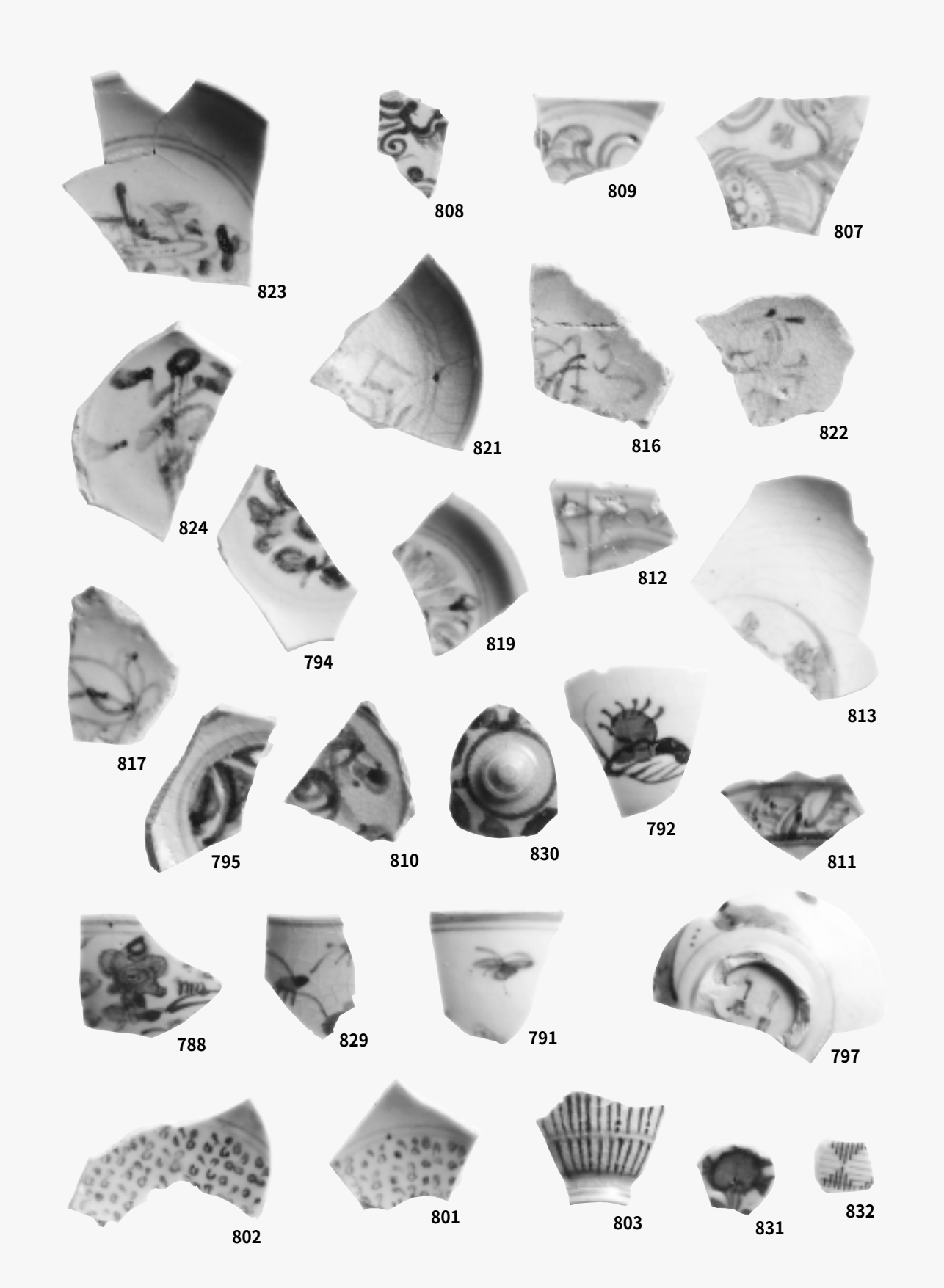
白磁（2）


724
725
727
726
728
729
730
738
734
736
737
746
739
740
747
742
744
749
741
722
723
759
764
765
766
768
776
771
772
780
778

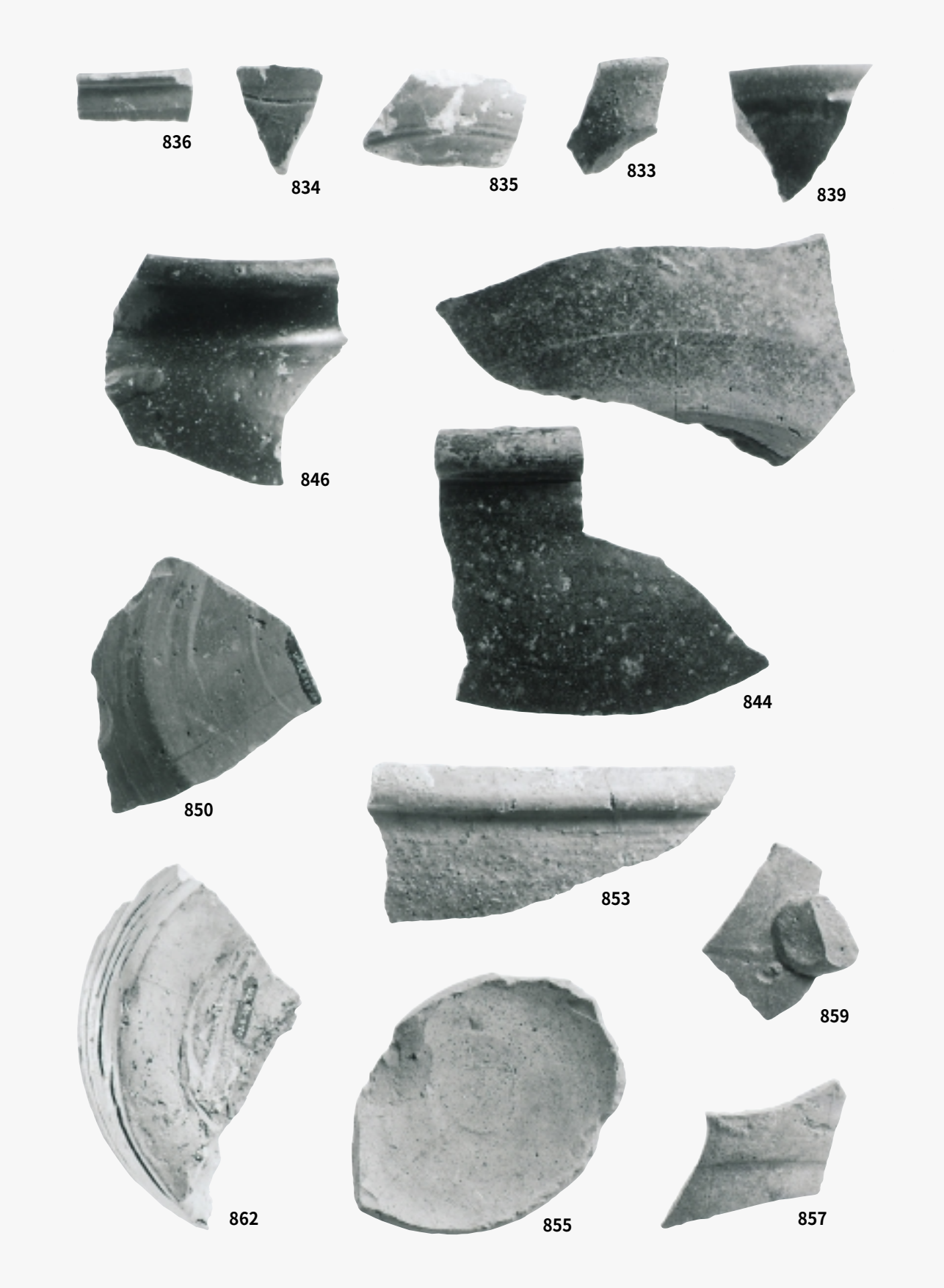
青磁（1）


666
663
676
659
673
672
671
685
696
695
708
709
750
752
751
755
782
781
785
787
784
786

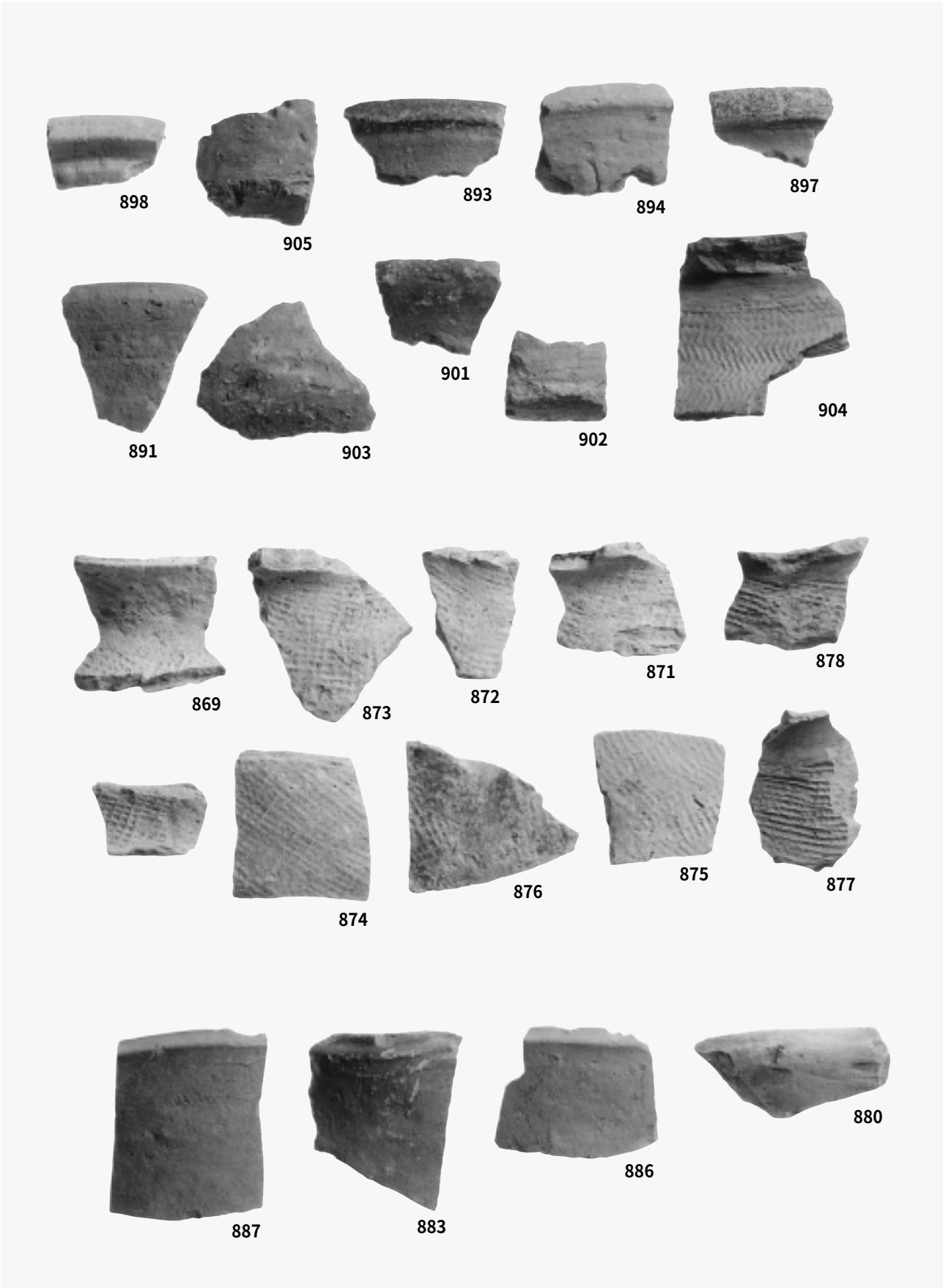
青磁（2）


823
808
809
807
821
816
822
824
794
819
812
813
817
795
810
830
792
811
788
829
791
797
802
801
803
831
832

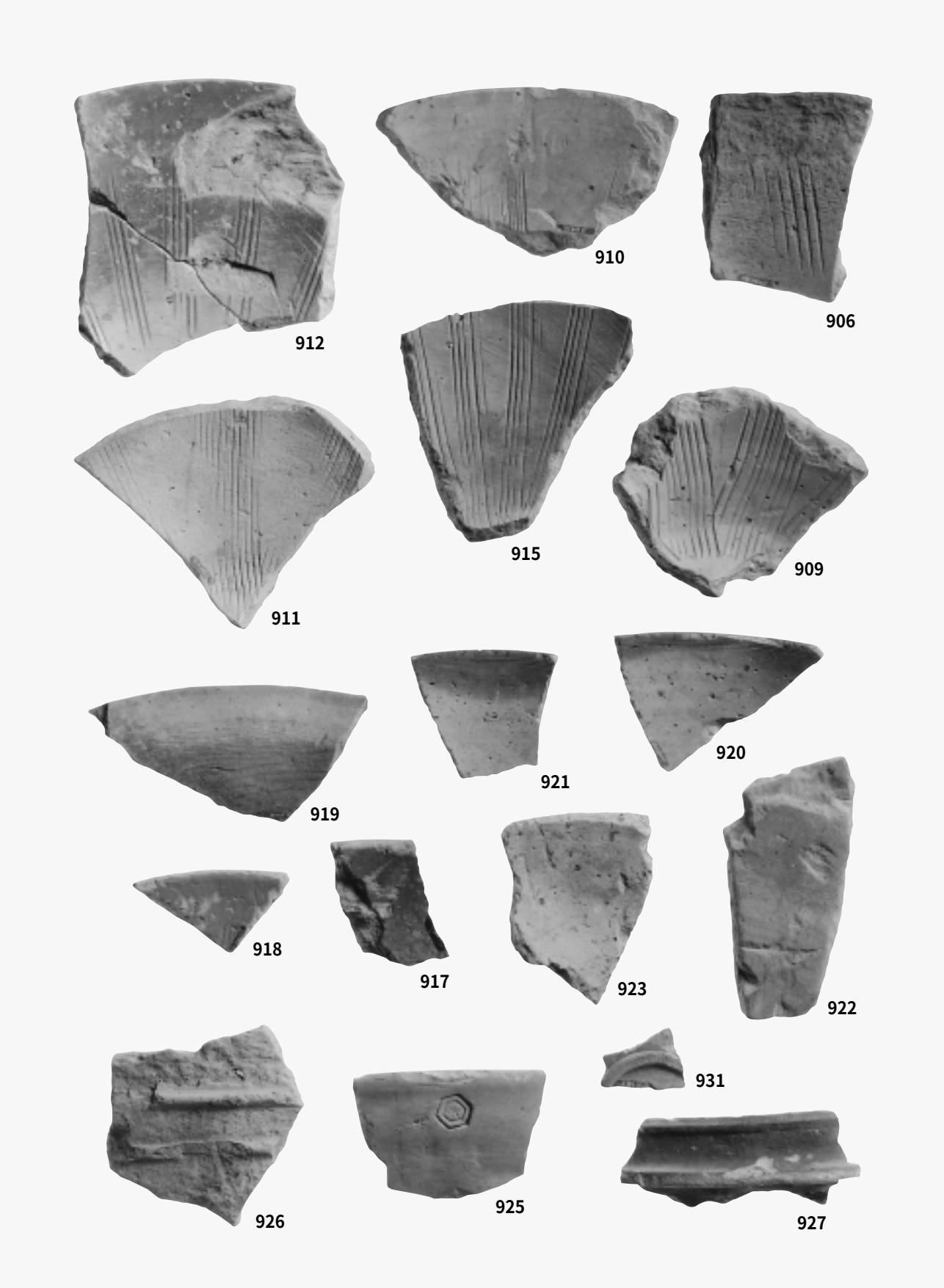
染付



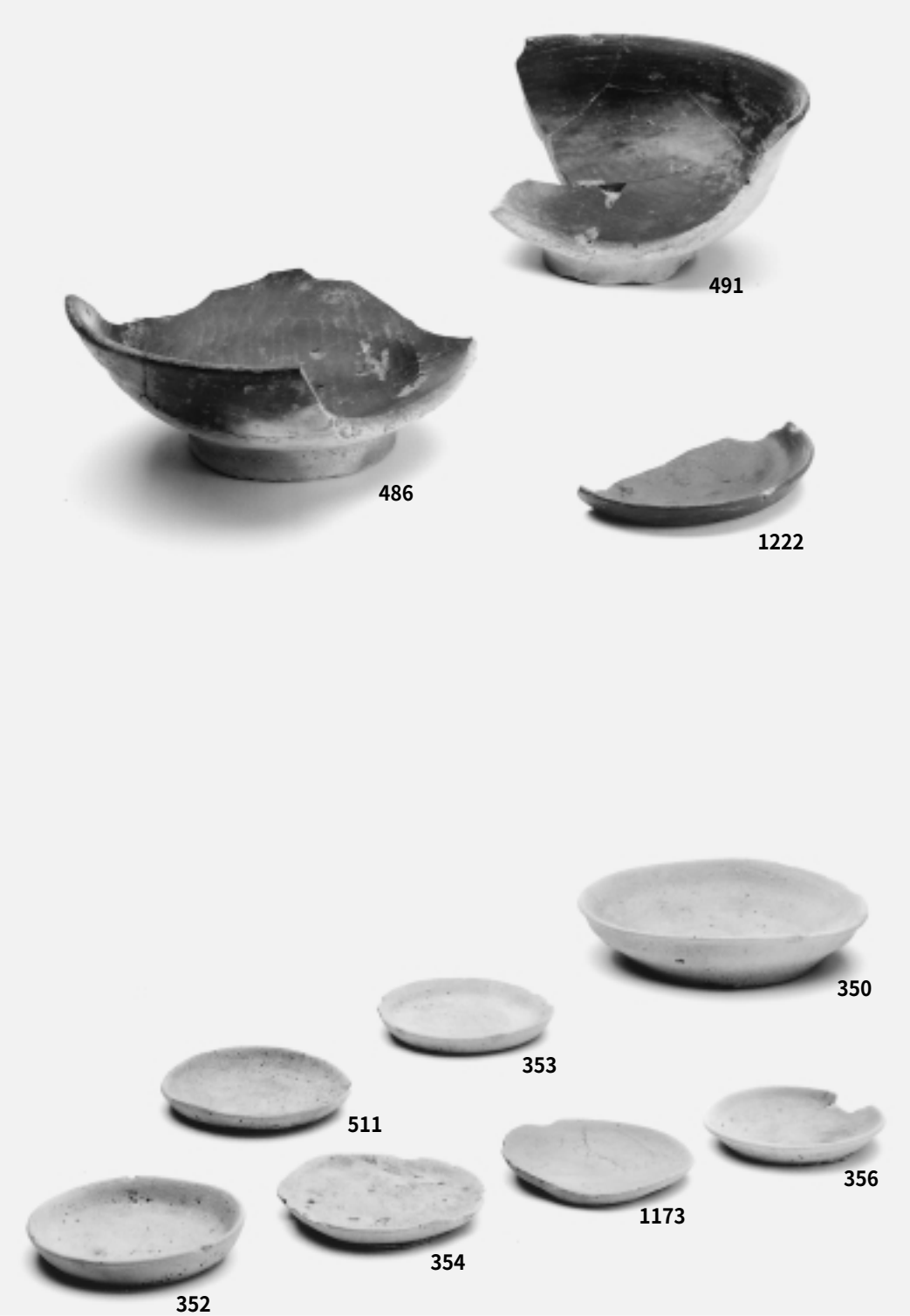
貿易陶器


898
905
893
894
897
891
903
901
902
904
869
873
872
871
878
874
876
875
877
887
883
886
880

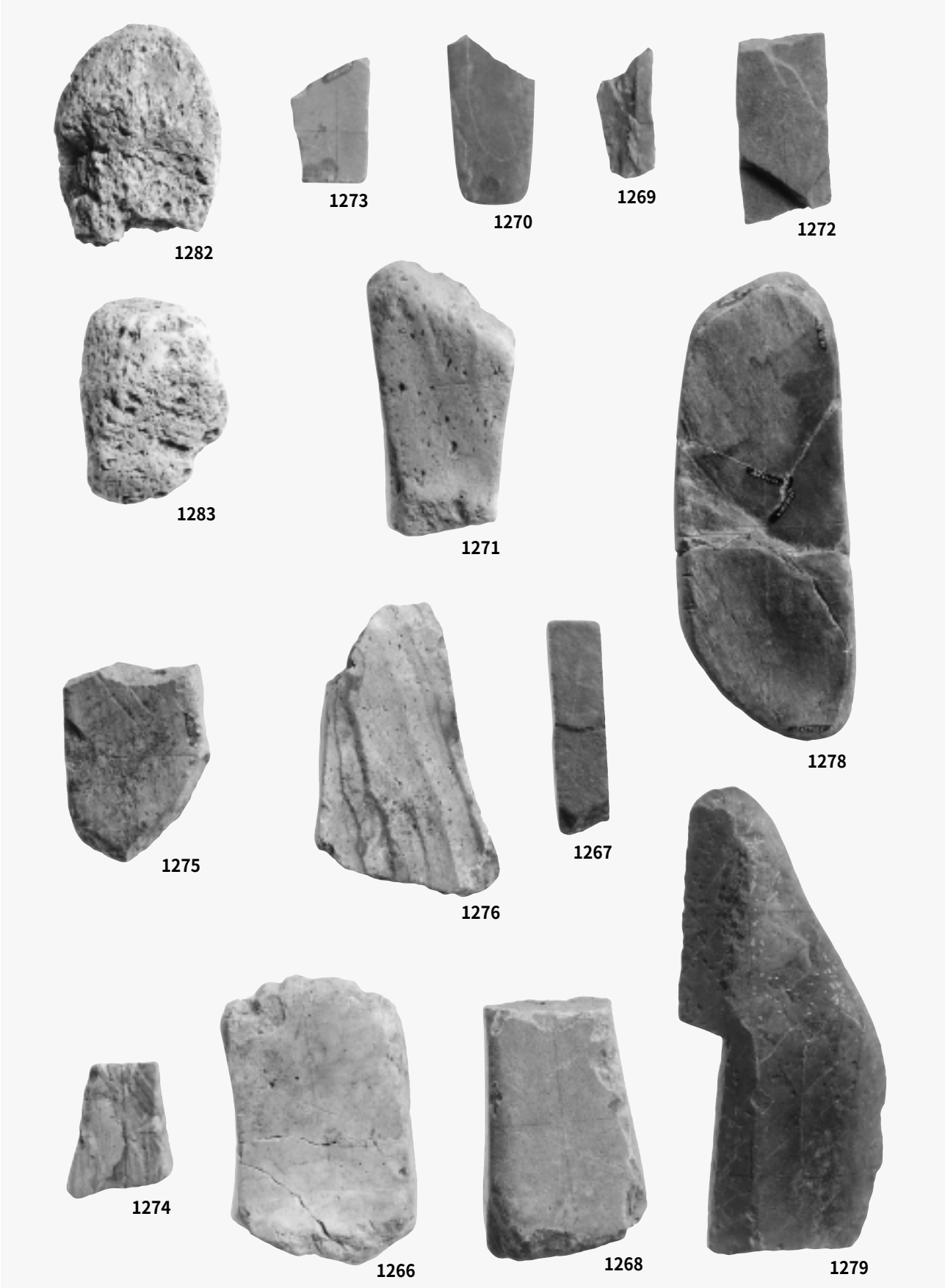
中世須恵器


912
910
906
915
911
909
919
921
920
918
917
923
922
931
926
925
927

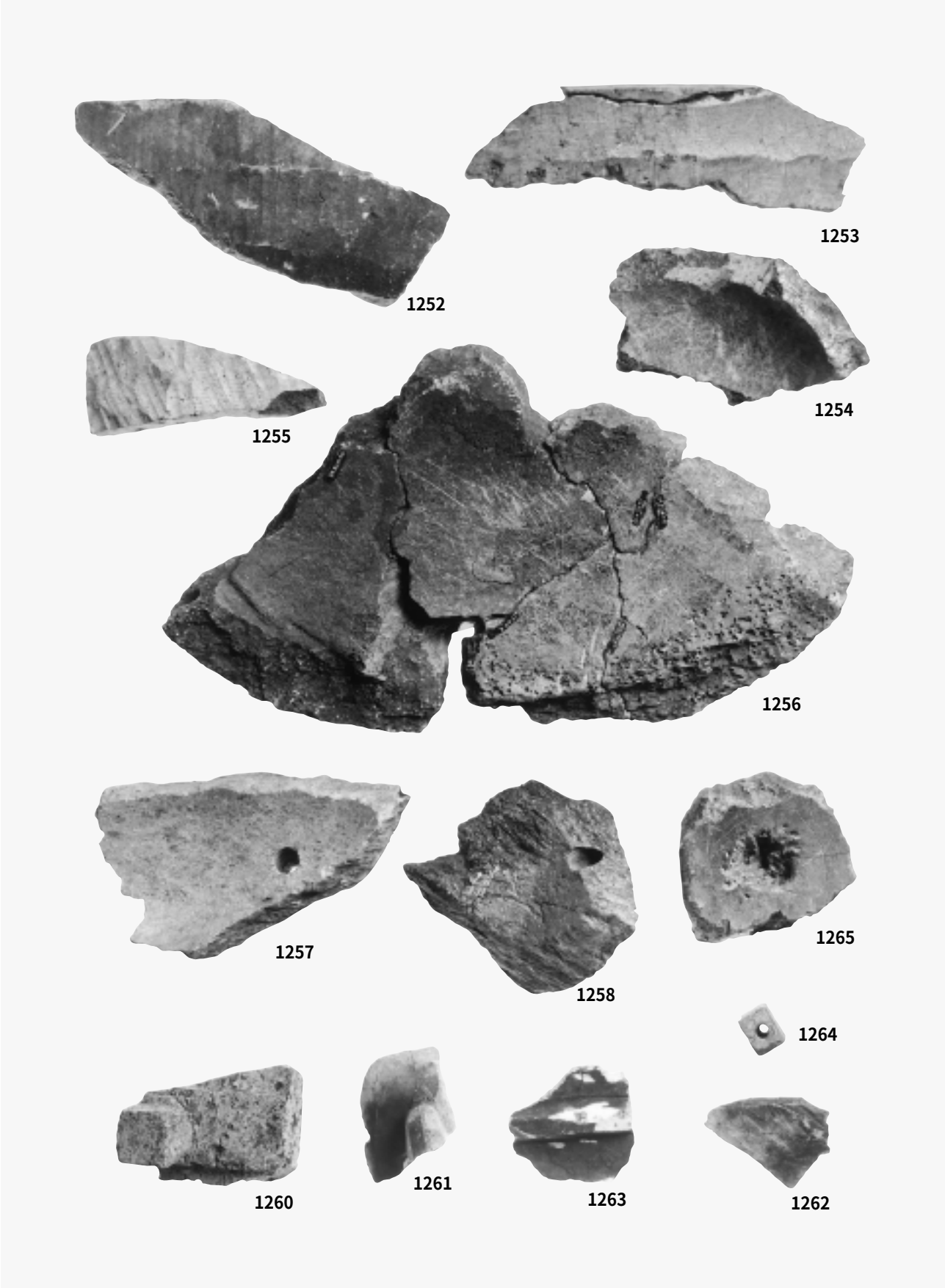
瓦器質土器



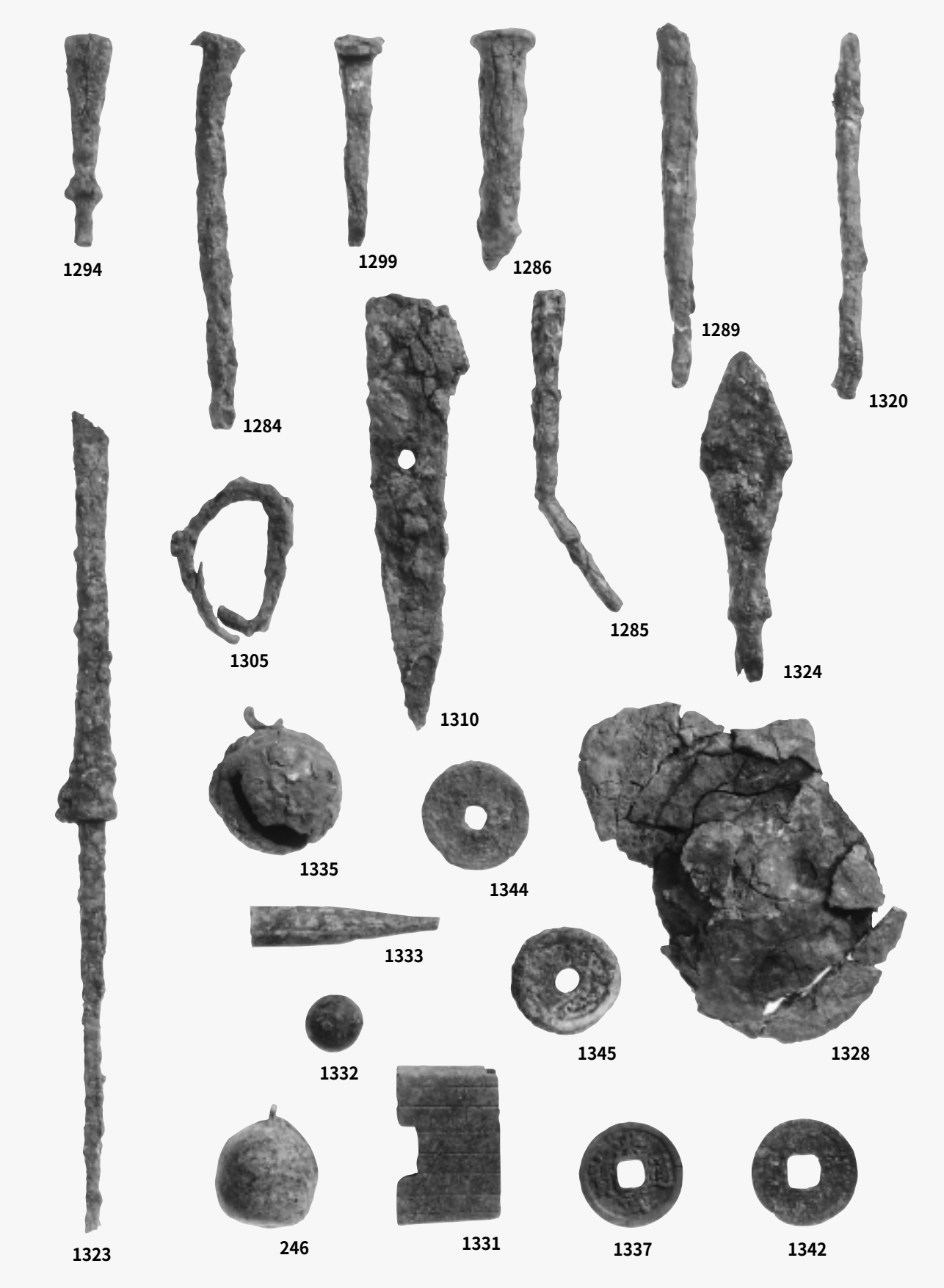
土師器　椀・皿


1282
1273
1270
1269
1272
1283
1271
1278
1275
1276
1267
1274
1266
1268
1279

軽石製品・石製品


1252
1253
1254
1255
1256
1257
1258
1265
1264
1260
1261
1263
1262

石鍋・滑石製品


1294
1299
1286
1289
1320
1284
1305
1310
1285
1324
1335
1344
1328
1333
1345
1332
1323
246
1331
1337
1342

金属製品

あ と が き

平成３年に九州新幹線鹿児島ルートの建設が始まった。当時は県知事が「米つきバッタ」で永田町にお願いし，九州は，北陸・東北新幹線の後の三男坊ということで知事は県民に申し訳ないと言うインタビュー放送があったことを思い出す。ただ，その時に最初の工事は博多からではなく，鹿児島と八代間ということで何とか面目を保った顔を思い出す。

それが本年暫定開業という形で３月 13 日に開始した。それは 13 年という長い期間でのことである。最初は線路幅が今まで使われている狭軌道を通すスーパー特急方式であった。それは時速 180 ㎞で走る列車であった。その工事計画はトンネルや橋梁・高架橋はフル規格で造ることで国と合意していたため，県民の悲願であった時速 260 ㎞で走るフル規格新幹線誘致が可能になった。

埋蔵文化財の発掘調査は平成５年５月に西鹿児島駅整備事業の関係で最初に始まった武遺跡であつた。偶然，この調査をいただいたことが平成 12 年度の最終年度までの発掘調査，平成 15 年度の報告書作成終了年度まで担当することになった。

平成５年度の武遺跡終了の後，次年度の計画を鉄道公団と調整していたが，年度末に予算が付かないと言う連絡が入り，発掘調査が数年延びることになった。それは何年延びるか分からないとのことであり，愕然とした。原因は北陸新幹線の長野までの長野オリンピックに合わせての開通であった。やはり，三男坊と言う訳かと思った。次に，東北新幹線の八戸までの延長は着々と進み，平成 14 年の博覧会に合わせて 12 月に開通と言う報道が流れた。九州新幹線の発掘調査の話はない。ようやく，平成 10 年に本格的な調査依頼が来た。この間，スーパー特急の狭軌道から本来の新幹線であるフル規格への運動が実を結び，上野城跡を調査する平成 11 年の頃にはフル規格ということで発掘調査を実施していた。

新幹線建設に関係する遺跡の発掘調査は全部で 22 遺跡であった。平成８・９・10 年度は東下原遺跡等の小規模遺跡の調査をし，平成 11・12 年度は大坪遺跡や大島遺跡，京田遺跡，上ノ平遺跡そして上野城跡等大規模遺跡の調査を実施した。平成 16 年開通に合わすため，担当 14 人の職員は各遺跡を必死に調査した。その戦い方は，未買収地のある中で，少しでも調査了解地があればそこを調査し広げていった。また，各調査班は，伊集院町と鹿児島市を掛け持ちしながら調査をし，川内市内の調査班は川内川の北部から川を渡って調査した。もちろん発掘作業員も一緒に行動した。作業員の安全確保を図りながらこのように大変な移動の中で発掘作業を実施し，事故が起こらなかったことは調査員のかねてからの指導によるものであった。

報告書作成は新幹線開通までの３年間の作業に限定され実施した。22 遺跡の内１年目は 10 遺跡を発刊した。２年目は６遺跡を発刊し，３年目は６遺跡の報告書作成を実施した。２年目，３年目は大規模遺跡の報告書作成のため苦労があった。特に３年目は超大物で 500～600 ページのものであった。よって，印刷だけを次年度に回すことになった。これも職員の努力で何とかできそうである。

最後に，本年度で新幹線発掘調査班は解体するが，これらが達成できることはこの調査班の職員が有能でありチームワークもあったためこの大事業を終えることができたと思う。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（68）
九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ

上　野　城　跡

発行日　平成16年３月３１日
発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4461　鹿児島県国分市上之段1175番地1
TEL（0995）48－5811
印刷所　日本高速印刷株式会社
〒892-0834　鹿児島市南林寺町25－10
TEL（099）226－0128